

大矢遺跡

2007年

熊本県天草市教育委員会

序

平成18年3月27日に誕生した天草市は、これまでの天草島内15自治体の中で、本渡市、牛深市、有明町、御所浦町、倉岳町、栖本町、新和町、五和町、天草町、河浦町の10自治体が合併したもので、市域670万平方k mを有する熊本県下で最大の自治体です。また、天草市に引き継がれた国・県・市・指定文化財は191件で、現在、その確認作業や指定基準作成に取り組むと共に、文化財調査事業も継続しています。

本書は、本渡市の市史編纂事業のなかで平成元年に小規模な確認調査が実施され、平成4年に範囲確認調査が実施された「大矢遺跡」の調査報告書です。小規模の調査ながら約10,000点の遺物が出土し、特に土偶、獣形土製品、岩偶、スタンプ形土製品、擦切り具、石銚、石製結合釣針の軸部などの遺物は、本遺跡がシベリア・朝鮮半島や東日本などの文化が複雑に影響を与えていることを示しています。遺跡の範囲は約1万平方mで、縄文時代前期から晩期にかけての包含層・遺構を有し、我が国の縄文時代の研究に欠かすことのできない貴重な遺跡として、平成7年3月15日付で熊本県指定文化財に指定されました。さらに平成17年には、土器整理作業において、国内でも最も古い段階となる縄文時代中期後半の阿高式土器、後期初頭の南福寺式土器から粃(玄米)の圧痕が発見されました。これは、縄文農耕論を考える上で貴重な発見であり、中国や朝鮮半島からの日本への稲作流入という、その起源と交流を裏付けるものです。

天草市では、日本的にも注目されている大矢遺跡の重要性を認識し、今後も遺跡保存に向けて取り組む所存です。最後になりましたが、本渡市出身という縁により、ご多忙のなか本遺跡の調査から報告書作成まで担当いただきました山崎純男先生(福岡市教育委員会文化財部長)に衷心より御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました地権者や調査に参加いただきました皆様、関係者、関係機関の方々に深く感謝申し上げます。この報告書が、市民の文化財保護によせる意識高揚に資するところがあれば幸甚に存じます。

平成19年3月

熊本県天草市教育委員会
教育長 岡 部 紀 夫

例 言

- 1、本書は熊本県天草市（旧・本渡市）教育委員会が主体となり1989・1992年の2次にわたって実施した熊本県天草市本渡町広瀬・大矢に所在する大矢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、本書の執筆は山崎純男がおこなった。
- 3、本書に使用した遺跡の図の作成には、山崎純男、川端正夫、白木英敏、山下志保、泰 憲二、笠由美子、金 貞姫、吉田佳代、久賀登世子、奈良崎和典、田中惣一、水上綾子、木次谷尚子、渡辺典子、池谷勝典があたった。
- 4、本書に使用した遺物の図の作成は主に山崎純男があたり、土器の拓本については久賀登世子の助力を得、石器の実測については一部、池田明生の助力を得た。
- 5、第9章の復元画については、考古復元画イラストレーター・早川和子氏の手を煩わせた。無断掲載を禁じる。
- 6、本書に使用した図面の製図は、山崎純男がこれにあたった。
- 7、本書に使用した写真は、山崎純男の撮影によるものである。
- 8、本書に掲載した遺物について、石器については調査回数と遺物番号で表示した。例えば1-15の場合は1次調査の石器の遺物番号15の資料である。土器については一括で取り上げた資料が多いので、図面の中で通し番号を与えた。
- 9、本遺跡から出土した縄文時代の自然遺物、古代の自然遺物、古代の人工遺物について、今回は報告することはできなかった。整理が終わり次第に別稿において報告する予定である。
- 10、本書の編集は山崎純男がこれにあたった。
- 11、本書に収録した大矢遺跡の出土遺物は、熊本県天草市教育委員会において保管する予定である。
- 12、土器圧痕に関しては抽出した圧痕土器の全てのSEM観察が終了していないので、別稿において詳述する。

本文目次

第1章	はじめに	1
1、	調査に至る経過	1
2、	調査体制	2
第2章	遺跡の位置と地形	4
1、	遺跡の位置	4
2、	遺跡の立地と周辺地形	6
第3章	周辺の歴史的環境	9
1、	天草諸島の縄文時代遺跡	9
2、	大矢遺跡周辺の縄文時代遺跡	13
3、	大矢遺跡の表面採集遺物	16
第4章	発掘調査の概要	23
第5章	調査区の設定と層序	25
1、	調査区の設定	25
2、	各トレンチと層序	28
(1)	Aトレンチの層序	28
(2)	B-2区、C-2区、D-2区北側土層断面	28
(3)	B~D・H-3区北側土層断面	29
(4)	B-3区西側土層断面	30
(5)	H-3区東側土層断面	32
(6)	H-3区南側土層断面	32
(7)	B・A-1区、E-(1)・(2)・1~6区南側土層断面	32
(8)	G-1~5区、F-6区南側土層断面	34
(9)	F・G-1区東側土層断面	36
(10)	G-5区・F-6区西側土層断面	36
(11)	南トレンチ東側土層断面	36
第6章	遺構と出土遺物	38
1、	黒曜石原石集積遺構	38
(1)	遺構	38
(2)	遺物	38
2、	埋葬遺構	45
(1)	埋葬遺構の分布	45
(2)	埋葬遺構	45
①	第1号集石土坑墓	45
②	第2・3号集石土坑墓	45
③	第4号集石土坑墓	46
④	第5号集石土坑墓	46
⑤	第6号集石土坑墓	46
⑥	第1号甕棺(埋甕)墓	49
(3)	出土遺物	49

第7章 包含層出土の遺物	51
1、第2層出土の遺物	51
(1) 土器	51
(2) 石器	69
2、第3層出土の遺物	114
(1) 土器	114
(2) 石器	122
3、第4c層出土の遺物	147
(1) 土器	147
(2) 石器	155
4、第4層出土の遺物	172
(1) 土器	172
(2) 石器	175
5、第4下層～第5層出土の遺物	183
(1) 土器	183
(2) 第4下層の石器	190
(3) 第5層の石器	191
6、第7～9層出土の遺物	196
(1) 土器	196
(2) 第7層の石器	211
(3) 第8層の石器	217
(4) 第9層の石器	222
7、土製品・石製品	226
8、その他の石器	230
第8章 調査のまとめ	237
1、縄文土器の編年	237
2、磨製石斧製作址の確認	238
(1) はじめに	238
(2) 磨製石斧製作址の抽出	238
(3) 大矢遺跡における磨製石斧の製作工程	246
(4) 磨製石斧と磨製石斧未製品の関係	247
(5) 磨製石斧製作の意義と磨製石斧の用途	249
第9章 大矢遺跡物語	251

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	5
第2図	遺跡の立地と周辺地形	7
第3図	天草の縄文時代遺跡分布図	11
第4図	大矢遺跡表面採集資料Ⅰ	18
第5図	大矢遺跡表面採集資料Ⅱ	19
第6図	大矢遺跡表面採集資料Ⅲ	21
第7図	大矢遺跡の地形とトレンチ配置図	26
第8図	大矢遺跡主要トレンチの位置	27
第9図	Aトレンチ東壁土層断面図	29
第10図	B～Hトレンチ土層断面図	31
第11図	A・B・Eトレンチ南壁土層断面図	33
第12図	Gトレンチ南壁土層断面図	35
第13図	南トレンチ東壁土層断面図	37
第14図	黒曜石原石の出土状況	38
第15図	黒曜石原石実測図Ⅰ	40
第16図	黒曜石原石実測図Ⅱ	41
第17図	黒曜石原石実測図Ⅲ	42
第18図	黒曜石原石実測図Ⅳ	43
第19図	黒曜石原石実測図Ⅴ	44
第20図	集石墓・甕棺墓分布図	46
第21図	第1～4号集石墓実測図	47
第22図	第4・5号集石墓・第1号甕棺墓実測図	48
第23図	集石墓群出土遺物実測図	49
第24図	2層出土土器実測図Ⅰ	52
第25図	2層出土土器実測図Ⅱ	53
第26図	2層出土土器実測図Ⅲ	55
第27図	2層出土土器実測図Ⅳ	56
第28図	2層出土土器実測図Ⅴ	57
第29図	2層出土土器実測図Ⅵ	59
第30図	2層出土土器実測図Ⅶ	60
第31図	2層出土土器実測図Ⅷ	61
第32図	2層出土土器実測図Ⅸ	63
第33図	2層出土土器実測図Ⅹ	65
第34図	2層出土土器実測図Ⅺ	66
第35図	2層出土土器実測図Ⅻ	67
第36図	2層出土石器実測図Ⅰ	70
第37図	2層出土石器実測図Ⅱ	71
第38図	2層出土石器実測図Ⅲ	73
第39図	2層出土石器実測図Ⅳ	74

第40图	2層出土石器実測图V	75
第41图	2層出土石器実測图VI	77
第42图	2層出土石器実測图VII	78
第43图	2層出土石器実測图VIII	79
第44图	2層出土石器実測图IX	81
第45图	2層出土石器実測图X	82
第46图	2層出土石器実測图XI	83
第47图	2層出土石器実測图XII	85
第48图	2層出土石器実測图XIII	86
第49图	2層出土石器実測图XIV	87
第50图	2層出土石器実測图XV	89
第51图	2層出土石器実測图XVI	90
第52图	2層出土石器実測图XVII	91
第53图	2層出土石器実測图XVIII	93
第54图	2層出土石器実測图XIX	94
第55图	2層出土石器実測图XX	95
第56图	2層出土石器実測图XXI	97
第57图	2層出土石器実測图XXII	98
第58图	2層出土石器実測图XXIII	99
第59图	2層出土石器実測图XXIV	103
第60图	2層出土石器実測图XXV	104
第61图	2層出土石器実測图XXVI	105
第62图	2層出土石器実測图XXVII	107
第63图	2層出土石器実測图XXVIII	108
第64图	2層出土石器実測图XXIX	109
第65图	2層出土石器実測图XXX	111
第66图	3層出土土器実測图I	115
第67图	3層出土土器実測图II	116
第68图	3層出土土器実測图III	118
第69图	3層出土土器実測图IV	119
第70图	3層出土土器実測图V	120
第71图	3層出土土器実測图VI	122
第72图	3層出土石器実測图I	125
第73图	3層出土石器実測图II	126
第74图	3層出土石器実測图III	128
第75图	3層出土石器実測图IV	129
第76图	3層出土石器実測图V	130
第77图	3層出土石器実測图VI	132
第78图	3層出土石器実測图VII	133
第79图	3層出土石器実測图VIII	134
第80图	3層出土石器実測图IX	136

第81図	3層出土石器実測図X	137
第82図	3層出土石器実測図XI	140
第83図	3層出土石器実測図XII	142
第84図	3層出土石器実測図XIII	143
第85図	3層出土石器実測図XIV	144
第86図	3層出土石器実測図XV	145
第87図	4c層出土石器実測図I	148
第88図	4c層出土石器実測図II	149
第89図	4c層出土石器実測図III	151
第90図	4c・4層出土石器実測図IV	153
第91図	4c層出土石器実測図I	156
第92図	4c層出土石器実測図II	157
第93図	4c層出土石器実測図III	159
第94図	4c層出土石器実測図IV	160
第95図	4c層出土石器実測図V	161
第96図	4c層出土石器実測図VI	163
第97図	4c層出土石器実測図VII	164
第98図	4c層出土石器実測図VIII	165
第99図	4c層出土石器実測図IX	167
第100図	4c層出土石器実測図X	168
第101図	4c層出土石器実測図XI	169
第102図	4層出土石器実測図I	173
第103図	4層出土石器実測図II	174
第104図	4層出土石器実測図I	176
第105図	4層出土石器実測図II	177
第106図	4層出土石器実測図III	179
第107図	4層出土石器実測図IV	180
第108図	4層出土石器実測図V	181
第109図	4下層～5層出土石器実測図I	184
第110図	4下層～5層出土石器実測図II	187
第111図	4下層～5層出土石器実測図III	188
第112図	4下層～5層出土石器実測図IV	189
第113図	4下層出土石器実測図I	192
第114図	4下層出土石器実測図II	193
第115図	5層出土石器実測図	194
第116図	7～9層出土石器実測図I	197
第117図	7～9層出土石器実測図II	198
第118図	7～9層出土石器実測図III	200
第119図	7～9層出土石器実測図IV	202
第120図	7～9層出土石器実測図V	204
第121図	7～9層出土石器実測図VI	207

第122図	7～9層出土土器実測図Ⅶ	208
第123図	7～9層出土土器実測図Ⅷ	209
第124図	7層出土石器実測図Ⅰ	212
第125図	7層出土石器実測図Ⅱ	214
第126図	7層出土石器実測図Ⅲ	215
第127図	7層出土石器実測図Ⅳ	216
第128図	8層出土石器実測図Ⅰ	218
第129図	8層出土石器実測図Ⅱ	219
第130図	8層出土石器実測図Ⅲ	221
第131図	9層出土石器実測図Ⅰ	223
第132図	9層出土石器実測図Ⅱ	224
第133図	9層出土石器実測図Ⅲ	225
第134図	土偶、土製品、岩偶、蛇の装飾ある土器	227
第135図	土製円盤実測図	228
第136図	採集遺物実測図Ⅰ	230
第137図	採集遺物実測図Ⅱ	232
第138図	採集遺物実測図Ⅲ	233
第139図	採集遺物実測図Ⅳ	234
第140図	大矢遺跡における中期・後期の磨製石斧製作関連石器分布図	239
第141図	大矢遺跡における叩石・石皿分布図	239
第142図	大矢遺跡出土磨製石斧集成	241
第143図	大矢遺跡出土磨製石斧未製品集成Ⅰ	242
第144図	大矢遺跡出土磨製石斧未製品集成Ⅱ	243
第145図	大矢遺跡出土磨製石斧未製品集成Ⅲ	244
第146図	磨製石斧製作工具集成	245
第147図	大矢遺跡における磨製石斧未製品の長幅比の分布	248
第148図	縄文時代の大矢遺跡遠望	251
第149図	焼畑想像図	252
第150図	磨製石斧製作状況（想像図）	253
第151図	縄文時代の漁（想像図）	254

図版目次

図版 1	①遺跡遠景（十万山より東を望む）	1
	②遺跡遠景（十万山より北東を望む）	
	③遺跡遠景（十万山より北東を望む）	
	④遺跡遠景（海側より遺跡を望む）	
図版 2	①遺跡近景（北側より、中央畑地が遺跡）	2
	②遺跡近景（北側より、中央畑地が遺跡）	
	③遺跡近景（南側より）	
	④遺跡近景（東側より、右側が後背湿地）	
図版 3	①遺跡調査風景（第1次調査）	3
	②遺跡調査風景（第1次調査）	
	③遺跡調査風景（第2次調査）	
図版 4	①遺跡土層断面（A-1区南壁）	4
	②遺跡土層断面（B-1区南壁）	
	③遺跡土層断面（B-1区南壁近景）	
図版 5	①遺跡土層断面（G-4～5区南壁）	5
	②遺跡土層断面（G-3～4区南壁）	
	③遺跡土層断面（G-1～2区南壁）	
図版 6	①遺跡土層断面（D-3～H-3区北壁）	6
	②遺跡土層断面（D-3区北壁）	
	③遺跡土層断面（A-1～2区東壁）	
図版 7	①西トレンチ全景（南西より）	7
	②南トレンチ全景（北より）	
	③馬場トレンチ全景（南より）	
図版 8	①Aトレンチ表土下礫層露出状況	8
	②B、Cトレンチ表土下礫層露出状況	
	③Bトレンチ表土下礫層露出状況近景	
図版 9	①第2・3号集石墓集石	9
	②第2号集石墓下土壌	
	③第3号集石墓下土壌	
図版10	①第1号集石墓	10
	②第1号集石墓下土壌	
	③第4号集石墓	
	④第4号集石墓下土壌	
図版11	①第1号甕棺墓	11
	②第1号甕棺墓墓壇	
図版12	①第5・6号集石墓	12
	②第6号集石墓下土壌	
	③第5号集石墓下土壌と人骨出土状況	
図版13	①西トレンチ古代貝層露出状況（西から）	13

	②西トレンチ古代貝層露出状況（南から）	
	③西トレンチ拡張トレンチの古代貝層露出状況（西から）	
図版14	①B・C・D-3区第3層遺物出土状況	14
	②B-3区第3層遺物出土状況	
	③C-3区第3層遺物出土状況	
図版15	①B-3区第3層遺物出土状況	15
	②C-3区第3層遺物出土状況	
	③B-3区第3層遺物出土状況	
図版16	①B-3区第3層遺物出土状況	16
	②B-3区第3層遺物出土状況	
	③C-3区第3層遺物出土状況	
図版17	①A-1区第2層遺物出土状況	17
	②B-3区第3層遺物出土状況	
	③B-3区第3層遺物出土状況	
図版18	①C-3区第2層遺物出土状況	18
	②C-3区第2層遺物出土状況	
	③C-3区第2層遺物出土状況	
図版19	①C-3区第2層遺物出土状況	19
	②C-3区第2層遺物出土状況	
	③C-3区第2層遺物出土状況	
図版20	①D-3区第2層遺物（結合釣針石製軸部）出土状況	20
	②E-5区第4c層遺物（銚頭）出土状況	
	③C-2区第2層遺物（銚頭）出土状況	
図版21	①D-2区第3層遺物（土器）出土状況	21
	②D-2区第3層遺物（土器）出土状況	
	③D-2区第3層遺物（土器）出土状況	
図版22	①E-1区第4層遺物（石器）出土状況	22
	②E-6区第4層遺物（石器）出土状況	
	③D-3区第7層遺物（獣骨）出土状況	
図版23	①B-1区第2層遺物（石器）出土状況	23
	②B-1区第2層遺物（石斧）出土状況	
	③A-1区第2層遺物（土器・石器）出土状況	
図版24	①D-2区第3層遺物（土偶）出土状況	24
	②D-2区第3層遺物（土偶）出土状況	
	③B-1区第4層遺物（獣形土偶）出土状況	
図版25	①D-2区第3層遺物（土器・獣形土偶）出土状況	25
	②D-2区第3層遺物（獣形土偶）出土状況	
	③D-2区第3層遺物（獣形土偶）出土状況	
図版26	①A-2区第4層遺物（土器）出土状況	26
	②A-2区第4層遺物（土器）出土状況	
	③A-1区第4層遺物（土器）出土状況	

图版27	①B-1区第2层遗物(岩偶)出土状况	27
	②B-1区第2层遗物(岩偶)出土状况	
	③B-1区第2层出土遗物(岩偶)	
图版28	①B-1区第5层遗物(土器)出土状况	28
	②B-1区第5层遗物(土器)出土状况	
	③B-1区第5层遗物(土器)出土状况	
图版29	①F-4区第5层遗物(土器)出土状况	29
	②F-4区第5层遗物(土器)出土状况	
	③B-1区第4层遗物(土器)出土状况	
图版30	①E-2区第7层遗物(土器)出土状况	30
	②E-2区第7层遗物(土器)出土状况	
	③E-2区第7层遗物(土器)出土状况	
图版31	①第3层出土土器	31
	②第4层出土土器	
	③第3层出土土器	
	④第3层出土土器	
	⑤第2层出土土器	32
图版32	①第2层出土土器	
	②第2层出土土器	
	③第2层出土土器	
	④第2层出土土器	
图版33	①第5层出土土器	33
	②第4层出土土器	
	③第2层出土土器	
	④第3层出土土器	
	⑤第2层出土土器	
	⑥第3层出土土器	
	⑦第3层出土土器	
	⑧第3层出土土器	
	⑨第4层出土土器	
	⑩第3层出土土器	
图版34	①第5层出土土器	34
	②第5层出土土器	
	③第4层出土土器	
图版35	①第7层出土土器	35
	②第7层出土土器	
	③第7层出土土器	
	④第7层出土土器	
图版36	①第5·7层出土土器	36
	②第7层出土土器	
	③第7层出土土器	

	④第7層出土土器	
	⑤第7層出土土器	
図版37	①第4・8層出土石器（石鏃）	37
	②第2・4c層出土石器（銛頭）	
	③第4c・5層出土石器（石匙）	
図版38	①第2・3層・集石墓出土石器（蛇紋岩製磨製石斧）	38
	②第4c・5層出土石器（磨製石斧）	
	③各層出土石器（石錘）	
図版39	①土偶・岩偶（表面）	39
	②土偶・岩偶（裏面）	
	③獸形土偶2	
	④獸形土偶1	
図版40	①各層出土石器（双角状礫石器）	40
	②各層出土石器（磨石）	
	③第4c層出土石器（双角状礫石器）	
	④第3層出土石器（ハンマー）	
図版41	①頁岩製結合式釣針軸部	41
	②獸形土偶1	
	③後背湿地出土ドングリ類	
	④後背湿地出土編カゴ類	
図版42	①B-3区第4層出土土器	42
	②C-3区第3層出土土器	
	③発掘調査参加者（第2次調査）	

第1章 はじめに

1、調査に至る経過

大矢遺跡は、中九州の西側、有明海と八代海（不知火海）に囲まれた天草諸島の一つ、天草下島の北部、有明海に面した東海岸、熊本県天草市本渡町広瀬・大矢に所在する縄文時代の遺跡である。遺跡は丘陵下にひろがる砂丘上から後背湿地にかけて形成されている。昭和38年4月5日、筆者の現地踏査によって遺跡の存在が明らかになった。数回の現地踏査によって、縄文土器（前期・中期）をはじめ、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、石錐、石錘、礫石器、篋状磨製石器、石鋸等の石器類、縄文土器片利用の有孔円盤、土師器、須恵器、青磁器等が採集できた。天草における有力な縄文遺跡であることが判明するとともに、時期の異なる遺物の存在から、複合遺跡であることも判明した。筆者は表面採集遺物の一部を公表し、遺跡の存在を明らかにすると共に、天草の縄文文化について若干の考察を加えた。（註1）

その後は、遺跡に変化はなかったが、近年になり、本渡市街地の拡大により、遺跡周辺の水田や畑地には住宅が迫ってきた。幸いに遺跡が周辺道路より低いために、埋土による造成が行なわれたために遺跡の直接の破壊はまぬがれたが、開地として残る遺跡の範囲は極端に狭まられる結果となった。

1986年、本渡市史の通史編の編纂事業がたちあがり、筆者も原始・古代の執筆委員として参加することとなった。これまで、本渡市内では現地踏査によって、かなりの数の縄文時代遺跡が判明していた。しかし、いずれの遺跡も表面採集による遺物があるのみで、その実体は不明であった。よって、市史の執筆にあたり、一部の遺跡の実体を知る必要があった。そこで、市内遺跡で最も有望と考えた大矢遺跡の発掘調査を実施するため、市史編纂委員会、事務局とはかり、1989（平成元）年、小規模な発掘調査を実施した。

第一次調査は、1989年10月24日～11月14日までの22日間にわたって実施した。目的を遺跡の内容把握を第一において、包含層の状態観察に務めた。表土（耕作土）下、すぐに人頭大から拳大の礫を含んだ黒褐色混砂礫層が拡がり、遺跡全体がこの礫層にバックされた状態であった。この礫層中にも後期初頭の南福寺式土器が含まれ、以下、南福寺式土器を中心とした後期初期の包含層が続き、さらに中期の包含層が存在する。中期の包含層の下に、拳大よりやや小さい礫を含んだ灰色混粗砂礫層が厚さ10～15cmで全体を覆う。この層には人工遺物は含まれず、間層となっている。この層の下には、前期土器が包含された粗砂層が存在する。さらに下部の砂利層からは遺物が出土せず基盤層と考えた。いずれにしても、前期から後期初頭にかけての遺物が層位的に出土したことは大きな成果であった。また、岩偶、土偶、動物形土製品等、九州では最も古い土製品が出土した。

本渡市教育委員会では、これらの成果を受けて、同遺跡内に説明板を設置し、遺跡の周知化をはかることとなった。その後、より遺跡を完全に保存するために、教育委員会事務局と協議し、範囲確認調査を実施することとなった。

第二次調査は、1992年2月15日～3月13日までの27日間にわたって実施した。調査目的を遺跡の範囲確認においたため、第一次調査区を中心に、遺跡の立地する砂丘全面にトレンチを設定した。その結果、縄文時代遺跡の範囲は砂丘中央部から後背湿地にかけての約1万㎡であることが判明した。また、第一次調査区に隣接して設定したトレンチからは、前期の集石を伴う埋葬遺構を確認した。さらに一次調査で基盤層と考えた砂利層に遺物が包含されることが判明し、掘り下げたが湧水が激しく、途中で発掘を断念した。さらに古い時期の包含層の存在が予想できるようになった。注目される遺物に頁岩製のオサンニ型結合式釣針軸部、組合せ石銛の銛頭、動物形土製がある。なお、二次調査では、

古代の包含層が部分的に残っており、遺物の分布は砂丘全面に広がっている。

二次調査終了後、砂丘後背湿地東側において、共同住宅の建設が計画された。宅地造成そのものは埋土によるもので、直接、遺跡に影響はなかった。擁壁工事部分が溝状に深く掘削され、遺跡の一部を破壊することになった。工事に気づいた本渡市教育委員会の平田豊弘氏は遺物の採集に努め、筆者に連絡された。筆者は本務の都合で現地に行くことができなかったため、土層のブロック・サンプルの採集をお願いした。ブロック・サンプルの水洗選別の結果、ドングリ等の堅果類を含んだ特殊泥炭層が確認でき、また、一部にマガキを主とした貝層も確認した。近辺に貝塚が形成されていることが推測され、後背湿地には特殊泥炭層が存在し、ドングリ・ピット等の遺構の存在を予測させるものであった。正式な発掘調査が実施できなかったのがくやまれる。

とはいえ、本渡市教育委員会では遺跡の保存のため、土地の公有化を進められていることは評価されよう。1995（平成7）年、出土遺物の一部が県の文化財として指定された。

註1、山崎純男「天草地方始原文化の一側面—本渡市大矢遺跡出土の石器類を中心に—」
『熊本史学』第40号 1972年

2、調査体制

調査地区 熊本県天草市本渡町広瀬、大矢

調査面積 第一次調査 90m²

第二次調査 144m²

調査期間 第一次調査 1989（平成元）年、10月24日～11月14日、延22日間

第二次調査 1992（平成4）年、2月15日～3月13日、延27日間

調査主体 熊本県本渡市教育委員会

教育長 吉野隆三（前任）小田原満（前任）岡部紀夫（現）

文化課長 松本 守（前任）山本忠雄（前任）山下洋右（前任）楠本千秋（前任）

長山一幸（現）

文化財係長 山下洋右（前任）森山滝夫（前任）楠本千秋（前任）有馬和也（前任）

平田豊弘（現）

係員 原田一郎（前任）平田豊弘（前任）本多康二（前任）淵上佳菜（前任）

川邊翔平（現）

市史編纂委員会

井上重利（委員長）木山惟彦（副委員長）平方嘉寛、鶴田倉造、北野典夫、鶴田八洲成、

岡部信行、横尾泰宏、原田義雄

調査指導 横山浩一（九州大学名誉教授・故人）

三嶋 格（肥後考古学会会長・故人）

調査主任 山崎純男（福岡市教育委員会、文化財部鴻臚館跡調査担当主査、現・文化財部長）

調査参加者 一次調査 甲元真之（熊本大学文学部教授）

島津義昭（熊本県教育庁文化課課長補佐）

新東晃一（鹿児島県教育庁文化課文化財係長）

吉武 学（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）

東 和幸（鹿児島県埋蔵文化財センター）

大久保浩二（鹿児島県埋蔵文化財センター）

川端正夫（甘木市教育委員会）

白木秀敏（宗像市教育委員会）

山下志保・秦 憲二・笠由美子（熊本大学）金 貞姫（筑波大学）吉田佳代
（沖縄国際大学）奈良崎和典、松舟博満、久賀登世子、森園弘子

二次調査 甲元真之（現・熊本大学文学部教授）

島津義昭（現・熊本県立美術館副館長）

新東晃一（現・鹿児島県埋蔵文化財センター調査課長）

東 和幸（現・鹿児島県埋蔵文化財センター）

秦 憲二・田中総一・水上綾子（熊本大学）木次谷尚子・渡辺典子・池谷勝
典（奈良大学）、久賀登世子、山下一七、田口ツヤ子、原田三代子、駿河都代、
嶋崎 修、荒木禎爾、北川 篤

地元協力者 鶴田倉造、松田公平、米田 穰、金子康美、佐々木郁夫

整理員 久賀登世子、藤 愛子、矢川みどり、小松原澄江

整理協力者 甲元真之（熊本大学文学部教授）

木下尚子（熊本大学文学部教授）

小畑弘己（熊本大学文学部助教授）

杉井 健（熊本大学文学部助教授）

大坪志子（熊本大学文学部助手）

島津義昭（熊本県立美術館副館長）

高木正文（熊本県教育委員会文化課課長補佐）

宮崎敬士（熊本県教育委員会文化課）

池田朋生（熊本県装飾古墳館）

山口讓治（福岡県教育委員会埋蔵文化財第1課長）

力武卓治（福岡県教育委員会埋蔵文化財第2課長）

比佐陽一郎・田上勇一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）

米倉秀紀・吉留秀敏・蔵富士寛（福岡市教育委員会文化財部）

第2章 遺跡の位置と地形

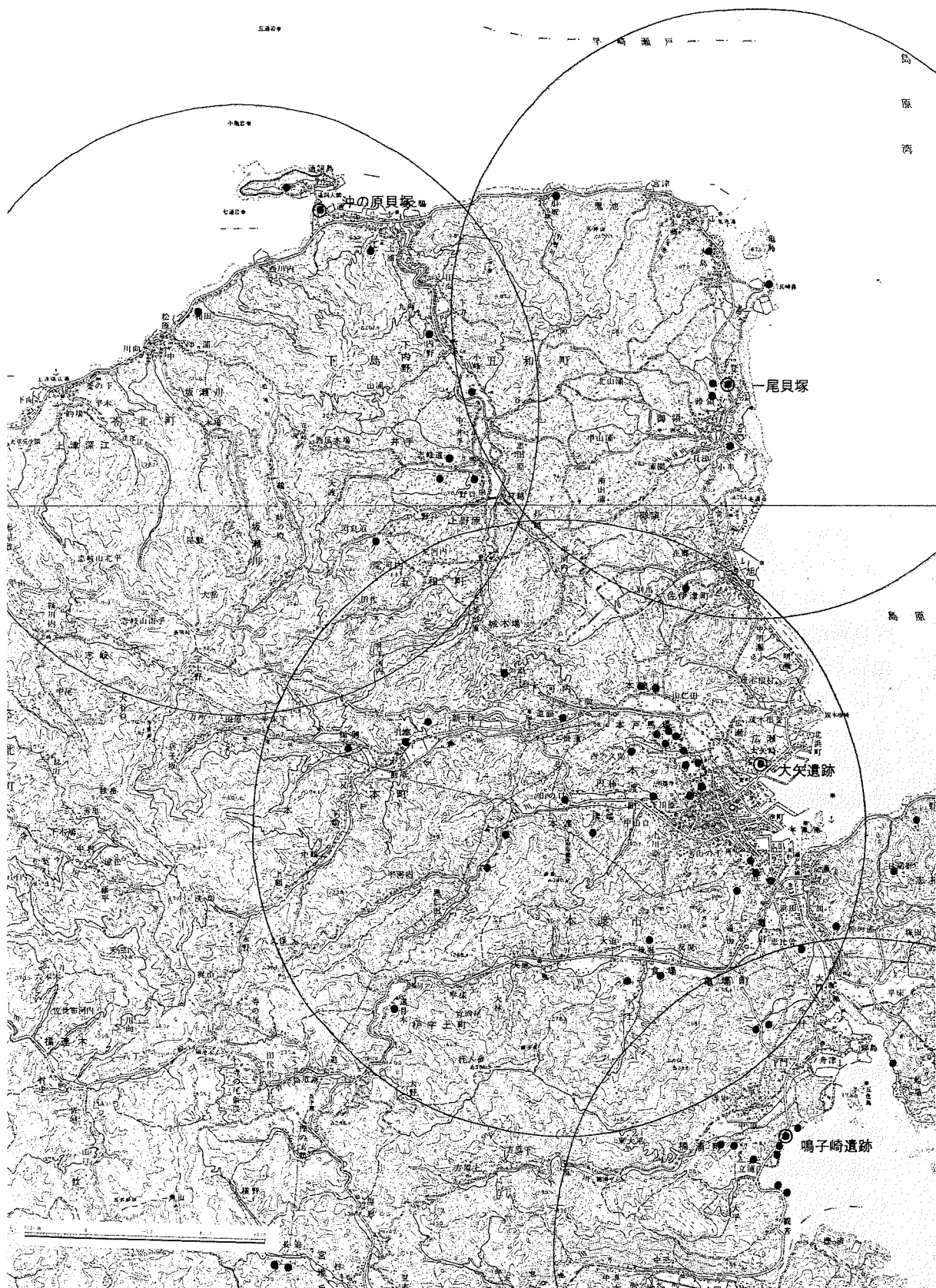
1、遺跡の位置

大矢遺跡は、天草諸島の中で最大の島、天草下島の北部の東海岸、熊本県天草市本渡町・広瀬に所在する縄文時代～古代にかけての複合遺跡である。

九州島の中央部には1000m級の山地からなる九州山脈が南北に連なり、九州を東西に分断するように横たわっていて、九州山脈を境界として、東側に大分県、宮崎県が位置し、西側には福岡県南部、熊本県が位置している。西側の福岡県南部、熊本県側には、九州山脈に源を発する大規模な河川が西流している。北から、筑後川、菊池川、白川、緑川、球磨川等で、いずれも九州有数の河川である。また、これらの河川の流域には平野が発達している。同様に北から、筑後平野、玉名平野、熊本平野（白川、緑川）、八代平野である、それぞれの河川に対応し、これまた九州有数の平野部を形成している。これらの河川は有明海、八代海（不知火海）に流れ込み、河口には広大な干潟が形成されていて共通した環境を保持している。これに対して、熊本平野の南端部、八代平野の北端部を基部として西に向って突出する宇土半島、さらに宇土半島に連なるように西に向って分布する天草諸島は、平野部は極端に少なく、干潟の発達もみられない環境を示している。

宇土半島、天草上島、下島、大矢野島を中心に大小120余の島々は、有明海と八代海（不知火海）を分断する位置関係にあり、両海の環境形成に重要な要素となっている。宇土半島、天草諸島の存在は両海を波静かな豊かな内湾に変化させているのである。すなわち、有明海は東を熊本県の北部西岸の熊本平野・玉名平野、福岡県の南部西岸の筑後平野、北を佐賀県南部南岸の佐賀平野、西を長崎県の東岸の諫早平野、島原半島東岸、南を天草下島・上島・大矢野島の北岸、宇土半島北岸によって囲まれ、外海の東支那海とは早崎瀬戸によって結ばれている。八代海（不知火海）は東を熊本県の南部西岸の八代平野、葦北西岸、鹿児島県北部の西岸、北を宇土半島南岸、天草上島南岸、西を天草下島南部の東岸部、南を獅子島、長島によって囲まれ、外海の東支那海とは長島海峡・黒瀬戸でつながっている。有明海と八代海（不知火海）は宇土半島と戸馳島、維和島の間のもたれの瀬戸・蔵々瀬戸と天草上島・下島の間の本渡瀬戸でつながっている。このように両海共に陸地や島によって囲まれ、波静かな内湾的環境を示している。有明海、八代海（不知火海）は共に、広大な干潟が存在する。

特に、有明海では東側の筑後平野・玉名平野・熊本平野・北側の佐賀平野、西側北部の諫早平野の海岸には河川から流れ込んだ土砂が厚く堆積し、日本でも有数の干潟が形成されている。この干潟は魚介類の格好の棲息地となっていて、豊かな漁場となっている。このような状況は縄文時代前期以降、大きな変化はなかったと考えられる。縄文時代は、このような自然環境を背景として、多くの貝塚が形成されている。両海域縁辺は九州で最も貝塚が集中する地域であることは周知のことである。代表的な貝塚を列挙すると、筑後平野には古く調査された二川・荒田比の両貝塚がある。玉名平野では、縄文時代前期の尾田貝塚をはじめ、中期では籾粒が出土し話題をよんだ古閑原貝塚、竹崎式土器の標式遺跡である竹崎貝塚、玉名市街地の繁根木神社境内には後期の繁根木貝塚、平野の最奥部に存在する若園貝塚は、現在の海岸線から約15kmも離れている。玉名平野の北側、荒尾市境崎貝塚は構成貝種がほぼ単一種で形成され、シオフキが98%を占めている。晩期の大規模貝塚である。熊本平野の北部では都市化が早く進んだため、貝塚の発見は少ないが、それでも市街地内に高橋貝塚、沼山津貝塚、渡鹿貝塚等が知られている。熊本平野の南部から宇土半島基部にかけては貝塚の密集地である。土器型式の標式遺跡として著名な貝塚が多い。御領貝塚・阿高貝塚・曾畑貝塚・轟貝塚はその代表例である。平野の最奥部にある甲佐町辺田見貝塚は、現在の海岸線から約20kmはいり込んだ所に所在してい



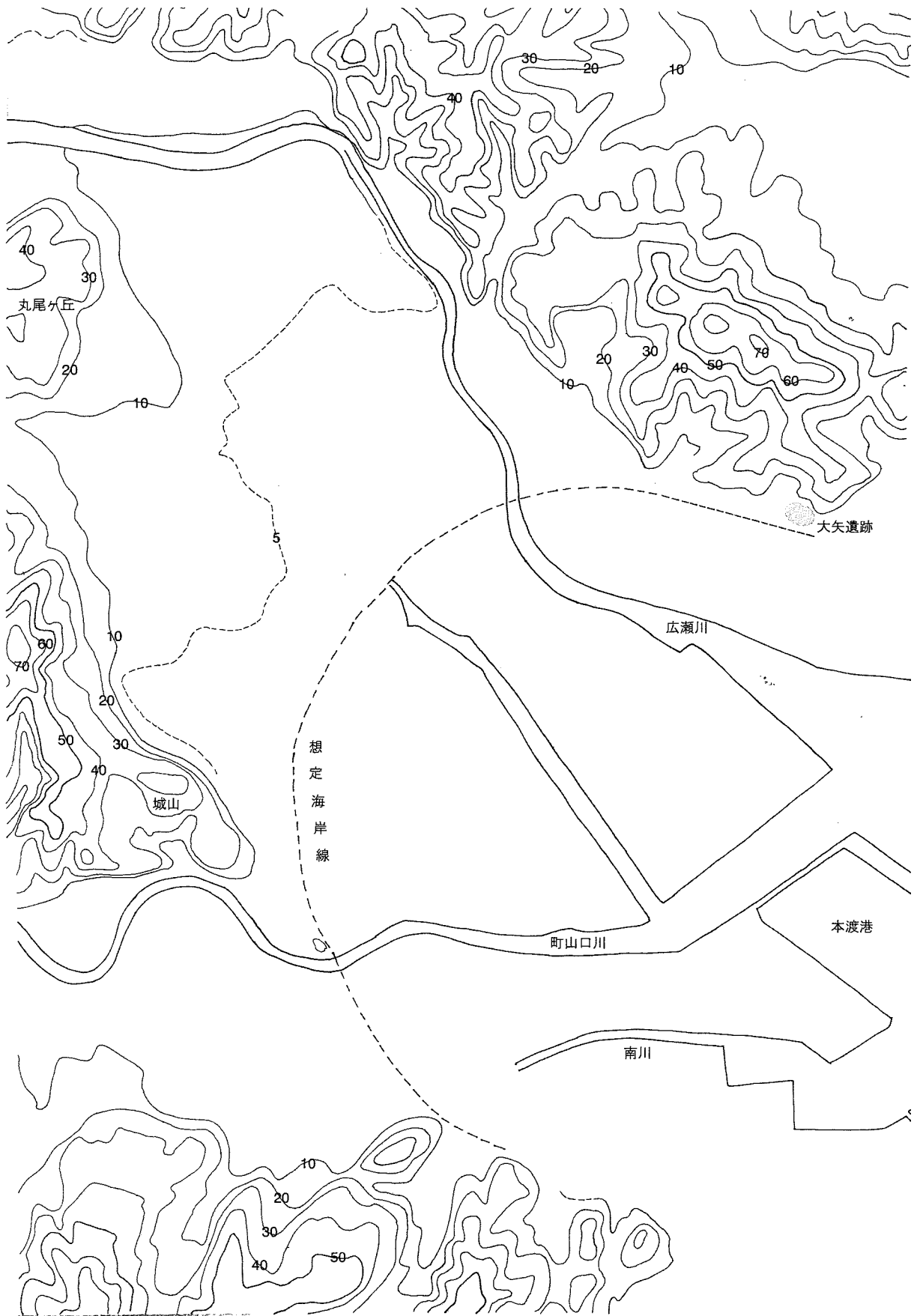
第1図 遺跡の位置

る。最近調査された城南町黒橋貝塚からは貝層下面において多数のドングリ・ピットが検出され、出土遺物も多く、縄文時代の解明に多大な成果を得ている。同時に存在する隣接の阿高貝塚との関係が注目される。また、有明海の北側、佐賀平野も同様に干潟の形成は顕著であるにもかかわらず、これまで縄文時代の貝塚の発見は皆無であった。が、最近、現地表下深く埋没した遺跡が発見されつつある。佐賀市の東名貝塚はその代表例である。早期に遡る貝塚であり、九州では最も古い段階の貝塚である。規模も大きく、周囲には多数のドングリ・ピットが検出されている。この地域には今後、同様の遺跡が発見される可能性は大きい。

八代海（不知火海）沿岸も、有明海沿岸程ではないが、貝塚が集中する地域である。八代海に面した宇土半島基部から八代にかけての山麓部に多くの貝塚が分布する。古くから存在が知られていた貝塚も多く、大野貝塚は大森貝塚の発掘の翌年、エドワード・モースが調査したことで有名である。西平式土器の標式遺跡である西平貝塚は丘陵頂部に形成された大規模な貝塚であり、それとは逆に沖積地に塚状に形成された貝塚に有佐貝塚がある。八代平野より南部は山地が海岸近くまで迫り、平野に乏しいが、南福寺式土器の標式遺跡である南福寺貝塚等、点々と分布している。有明海、八代海（不知火海）東海岸部は縄文人にとっては格好の環境であったことは疑いなかろう。

有明海と八代海（不知火海）を分断するように横たう、宇土半島、天草諸島も干潟の発達こそ顕著でないが、縄文時代には恵まれた環境であったことは、発見されている遺跡から納得いくところである。貝塚は、数が少なく、規模もあまり大きくないが、海に向かって開口する小平野部の段丘面や砂丘上に点々と立地している。貝塚の貝種は有明海、八代海、東岸部の貝塚が内湾砂泥性の貝種が主体を占めるのに対し、内湾砂泥性の貝種に加え、岩礁性、外海性の貝種が増加し、場所によっては、岩礁性貝類が主体を占める場合もあり、良く環境を反映している。大部分の遺跡は表面採集遺物によって確認されたものであり、内容が不明な遺跡が多いが、後述するように発掘された遺跡は、内容が豊富で出土遺物も多い。特に、貝塚においては、骨角器、貝器の出土量は、九州の他の地域と比較し極めて多い。西北九州型結合式釣針、単式釣針、オサンニ型結合式釣針、T字形釣針、離頭銚、ヤス、貝錘等の漁撈具が目立ち、次いで、筭、滑車形耳飾、サメ背推骨製の耳飾や玉類、各種貝類の玉類、貝製腕輪等の装身具が多く、貝輪の中には未製品も含まれ、遺跡内で製作されたこともわかる。遺構も発見されるつつあり、牛深市椎ノ木崎遺跡や本報告の大矢遺跡にはドングリ・ピットの存在が推測され、後・晩期の埋甕や埋葬施設が河浦町仕山遺跡、本渡町浜崎遺跡、五和町沖ノ原貝塚で確認され、大矢遺跡でも検出されている。このように遺物・遺構の内容が明らかになってきたことによって、天草諸島の縄文時代の様相もある程度明らかになってきた。このような状況下において、大矢遺跡の調査成果は天草の縄文時代の解明だけでなく、九州の縄文文化を解明するための重要な成果を提供している。

(旧)本渡市内における遺跡の分布は、これまで現地踏査によってかなり明らかとなっていることは後章にのべるとおりである。比較的まとまりのある分布を示していて、時間的にも一定の地域で連続性を把握することができ、縄文時代の領域範囲を把握する一つの目安となろう。大矢遺跡を同時期で規模の大きい、拠点的な遺跡を周辺に求めると、天草下島北部には沖ノ原貝塚、一尾貝塚、鳴子崎遺跡が存在する。これら四遺跡間は直線距離にして、沖ノ原貝塚と一尾貝塚間が7.3km、一尾貝塚と大矢遺跡間は6.3km、大矢遺跡と鳴子崎遺跡間は6km離れて存在し、ほぼ等間隔に天草下島北部の海岸部に並列して位置している。このような分布と、先に指摘した遺跡のまとまりは、天草縄文人のテリトリーを考える上で示唆的である。



第2図 遺跡の立地と周辺地形

2、遺跡の立地と周辺地形

遺跡の所在する天草市本渡町広瀬・大矢は天草市の中心を占める本渡町の市街地をやゝはずれた北東部に位置するが、中心部からは1 km離れているにすぎない。

本渡町は天草の中心で、本渡町は天草第一の都市であり、市街地を中心に天草で最も広い平野部を有している。とはいえ、平野の一部は近代の干拓によるもので、現在の港町、東浜町、今釜新町等はいずれも干拓後に埋め立てられたものである。しかし、それらの地域を除いても、天草諸島の中で最も広い平野部を有していることには変わりない。

本渡町を中心とした周辺の地形を概観してみよう。同地域は天草下島と上島に囲まれ、間口2 km、奥行き約2 kmの範囲が内湾状をなし、海岸部にはかなりの広さの干潟が形成されている。平野部の周囲は低丘陵に囲まれている。北側には広瀬を基部として、標高60mを頂部とした低丘陵が南東方向に岬状にのび、大矢崎とよばれている。大矢崎の先端部北側で丘陵はさらに東にのび、茂木根崎と呼ばれている。茂木根崎は海に面する三面（東・南・北）は波浪による侵蝕によって崩落し、高い崖面となっているが、一つの景観をつくり出している。海岸部は崩落した岩が重なり合い岩礁となっている。茂木根崎の北側は小さな入江となり海岸部は小規模な砂丘となり夏は海水浴場としてにぎわっている。大矢崎丘陵の西側には、広瀬川が南流している。広瀬川は苓北町、天草町、(旧)本渡市の境界の山地に源を發し、数本の支流と合流しながら東流し、広瀬で方向を変え2 km程度南流し、川口に至る。延長約15kmの小河川である。流域には、かなりの広さの沖積地が広がっている。河口近くでは沖積平地の東側に広瀬川が、西側に小松原川が平行して南流している。小松原川は現在は極めて小さいが、かつては広瀬川が流路を西側にとり、広瀬川の河口となっていたと考えられる。小松原川の右岸、本渡北小学校より北側には、かなりの広さの段丘面が広がり、段丘の北端部に丸尾ヶ丘のゆるやかな丘陵が存在する。この段丘面から丸尾ヶ丘にかけて、点々と縄文～古墳時代の遺跡が分布している。丸尾ヶ丘より上流の広瀬川の左岸にはかなり上流まで河岸段丘が形成され、(旧)本渡市における縄文遺跡は広瀬川を中心に展開している。広瀬川の南側には100～50mの丘陵が存在し、その南に町山口川が東流している。町山口川は(旧)本渡市と天草町との境界付近に水源があり、そこより北東に流れ、中流域で屈曲し、東流する。延長約8 km、中流域より下流に沖積平地が開けているが、広瀬川流域より一まわり小規模である。下流域は市街地を東流する。町山口川の南側には染岳（標高380m）や十万山（標高239m）の比較的高い山地が連なり、東側は天草上島との境界である本渡の瀬戸に向かって大きく張り出している。現市街地部分は広瀬川、町山口川の沖積作用によって形成されたものであるが、前述したように、大部分は干拓およびその後の埋め立てによるものである。では、縄文時代の地形はどのようなになっていたのであろうか。

大矢遺跡の立地する砂丘は西側を現在の広瀬川の流路によって切断されているが、かつては弓状に延びていて、丸尾ヶ丘から延びる段丘先端部にあたる浜崎、本渡北小学校付近で段丘に接し、さらに西から南にのびていたとみられる。すなわち、浜崎から城下、舟之尾、祇園付近、諏訪神社を通り、南町で丘陵に接続していたと推測される。沖積地中央部は広瀬川、町山口川の度重なる流路の変更によって砂丘は消失し、他の地区には残丘的に砂丘の一部が残ったと考えられる。この砂丘の形式は後述するように縄文時代の海進海退による海面変動に関係していると考えられる。他の地区では明瞭な残丘は認められないが部分的に地形の高まりとして読み取ることができる。

大矢遺跡はこのような砂丘の残丘に立地している。砂丘は大矢崎丘陵の南麓部に形成されている。基盤層は砂利層で、その上に砂が厚く堆積している。現存する砂丘は長さ250m、幅50～80m、標高3 m、砂丘の後背部には山麓との間に湿地が形成される。後背湿地は幅30～50m、砂丘との比高差は約1 mを測る。遺跡は基部に近い中央部から後背地約1万㎡に広がり、砂丘全面に大きく広がらない。砂丘の基盤は砂利であり、砂利が厚く堆積している。

第3章 周辺の歴史的環境

1、天草諸島の縄文時代遺跡

最近の天草諸島における縄文時代遺跡の発掘調査とその成果は、大きな注目を集めている。その内容は後述するとして、天草諸島における縄文時代研究の学史と遺跡についてその概要をみていこう。

これまでは天草諸島は熊本県内の中で最も考古学研究の遅れた地域の一つであった。昭和30年までは御所浦の飛竜山から石刃、河浦の一町田から石鏃が発見されているにすぎなかった。天草に数多く分布する古墳に比較し、わずか2カ所の遺跡はあまりに少なすぎるといわざるをえない。しかし、昭和31年、坂本経堯氏を中心とした天草古文化研究会による松島町大戸鼻古墳群、樋合島古墳群、永浦島古墳群の調査、続いて昭和33年に実施された坂本経堯、乙益重隆、田辺哲夫氏を中心とした大矢野・維和島の古墳群の調査は、低調であった天草の考古学に大きな刺激を与えた。昭和33年5月、柳原高太郎氏によって五和町二江・沖ノ原において貝塚が発見された。沖ノ原の砂嘴から対岸の通詞島へ通じる海底簡易水道埋設工事に伴う発見であった。翌年の昭和34年8月1日～10日にかけて坂本経堯氏を中心に熊本県下の考古学者の大部分が参加した発掘調査が実施された。この調査では縄文時代前期から古墳時代にいたる多量の遺物、特に前期から後期にかけての縄文土器、石器、骨角器等、これまで県下で出土例の少なかった遺物が出土し、島内の人々はもちろん、県下の多くの人々の注目を集めた。この調査成果は天草諸島における縄文遺跡の探査に拍車をかけ、天草各地で遺跡探査の活動が開始された。探査の中心は天草各地の教職員とその生徒達である。本渡市周辺では鶴田倉造氏を中心とした本渡中学校郷土部の生徒達。河浦町周辺は隈昭志氏を中心とした河浦高校の生徒達。倉岳町では平岡勝昭氏、大矢野町、松島町周辺では阿部堅二、徳永公路氏を中心とした大矢野高校生徒達によって多くの縄文時代遺跡が明らかにされた。昭和47年段階で83ヶ所の遺跡が確認されるにいたった。

以後は、列島改造により全国的に開発の波が押し寄せ遺跡の発見、緊急調査が急増することになった。天草諸島でも例外でなく、多くの遺跡が発見され、開発に伴う緊急調査も実施されている。熊本県教育委員会によって発掘調査が実施された栖本町古江遺跡はその典型例である。この間、現地踏査も続けられ、本渡市在住の黒木雄二氏の天草諸島全域におよぶ精力的な踏査によって明らかにされた遺跡も多い。平成3年にいって169ヶ所の遺跡が確認されている。20年前の昭和47年段階の実に2倍に増加している。

また、最近では天草諸島の各市町村史の編纂事業が進められ、市町村ごとに遺跡の分布調査が実施されていて、さらに遺跡の発見が続いている。現在は200ヶ所に達しようとする勢いである。第3図に天草諸島の縄文時代遺跡の分布図を示した。地域によって遺跡の分布が散発であったり、空白部が存在する。これは遺跡がないのではなく、未踏査地区であり、今後の踏査によって遺跡が発見されることは疑いなかろう。

天草諸島の遺跡分布は、粗密の差はあるものの、ほぼ全島域に認められる。遺跡の密集地域は先にあげた教職員を中心とした地域と一致していることは、現地踏査の必要性を示すと共に、今後、現地踏査を進めれば、さらに遺跡数は増加することを示している。しかし、遺跡のあり方の傾向は現在の遺跡分布でも充分把握することができる。遺跡の規模、立地等から、天草諸島の遺跡は次の二つのパターンに分類できる。一つは、遺跡が低地あるいは海岸部から海底にかけて低い所に立地する遺跡群で、一部は完全に海底遺跡となっている。概して遺跡の規模は大きく、採集遺物も多い。他の一つは、小河川に沿った段丘面や丘陵斜面に立地する山間部遺跡である。発掘された遺跡が皆無に近いため、内容不明な点が多いが、遺跡の規模は小さく、表面採集では、磨製石斧、石鏃、石匙、黒曜石、安山

岩の石片が採集され、土器はほとんどないため、時期比定は困難である。天草の遺跡の大部分は後者に属する遺跡である。前者の例では、先に示した五和町沖ノ原貝塚、一尾貝塚、本渡町浜崎貝塚、大矢遺跡等がある。砂丘上に立地する例が多く一部では貝塚を形成している。海底遺跡は何らかの理由で砂丘が消滅したものであろうか。これらの遺跡が地域の拠点集落となっている。後者は後に考察するように、焼畑農耕における出作り小屋あるいは狩猟時におけるキャンプ遺跡とみることができよう。

これまで天草諸島で発掘調査され、内容の一端が明かな縄文時代遺跡には次の遺跡がある。上天草市大矢野町小波戸遺跡（前～後期）、松島町カルワ島遺跡（早期）、松島町前島遺跡（早期）、天草市栖本町古江遺跡（前期～後期）、本渡町大矢遺跡（前期～晩期）、本渡町箱ノ水遺跡（早期～後期）、五和町一尾貝塚（中期～後期）、五和町沖ノ原貝塚（前期～晩期）、河浦町仕山遺跡（晩期）、牛深町椎ノ木崎遺跡（中期～晩期）などがある。このうち、小波戸、古江、大矢、一尾、沖ノ原、椎ノ木崎遺跡は前者に属する遺跡である。以下、代表的な遺跡についてその概要をみていこう。

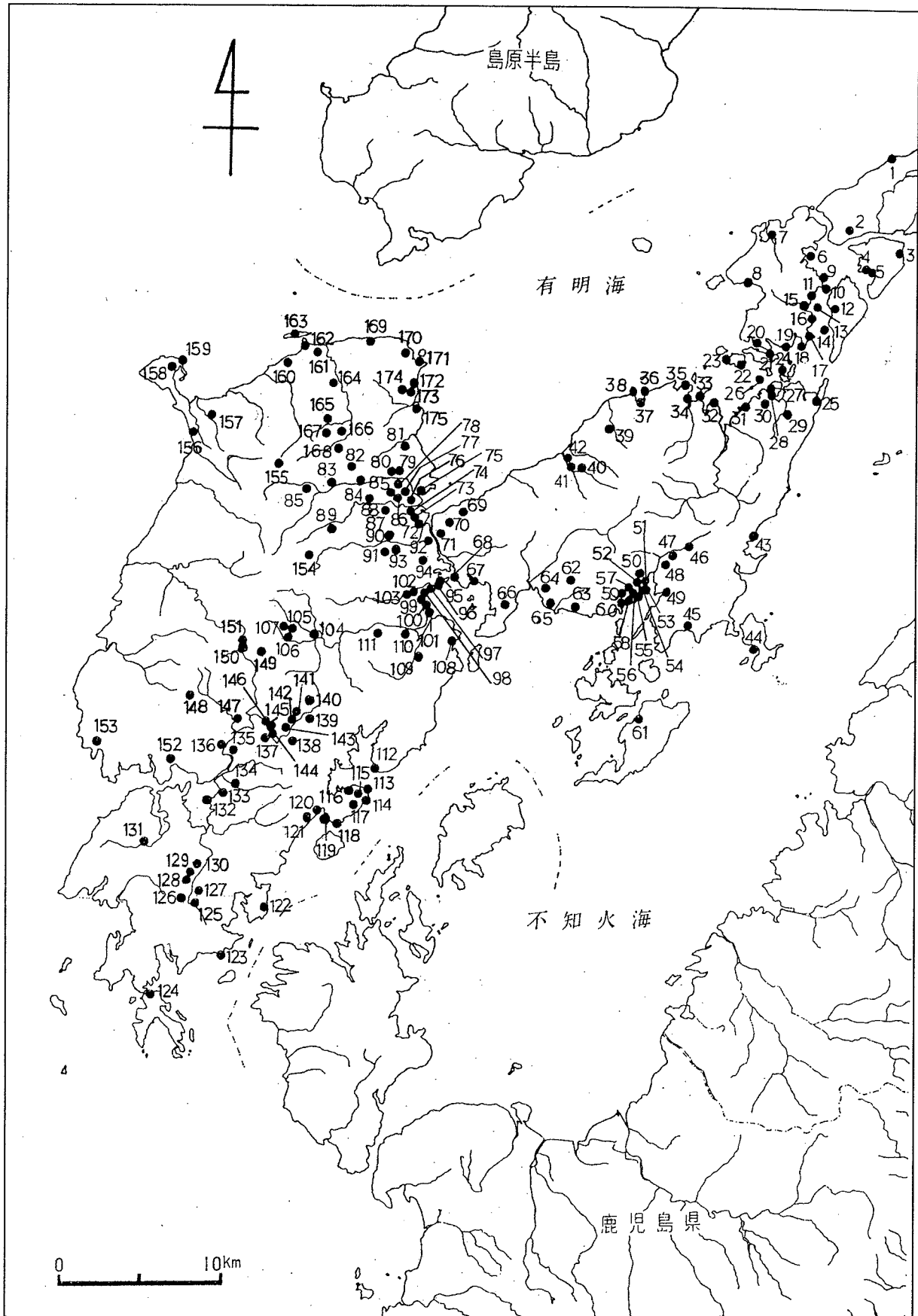
沖ノ原貝塚（天草市五和町二江・通詞沖ノ原）

沖ノ原貝塚の発掘調査は過去4次にわたって実施されている。第1次調査、1959年8月1日～10日、坂本経堯氏を中心とする調査、第2次調査は1964年3月25日～30日、岡山大学、近藤義郎氏を中心とする調査、第3次調査は1969年4月25日～5月1日、特別養護老人ホーム（紫明寮）の建設に伴う熊本県教育委員会の緊急調査、第4次調査は1973年7月4日～8月8日、通詞架橋の取付道路建設に伴う五和町の緊急調査である。これら4次の発掘調査では天草先史文化解明には欠くことのできない大きな成果が得られた。縄文時代に限定して概要をみてみよう。遺構は遺跡が砂丘上に立地しているために検出が困難ではっきりしないが、それでも前期から弥生時代前期におよぶ埋葬遺構33基が検出されている。大部分は土坑墓ではあるが、後期の一部は甕棺墓である。遺跡の東北部には貝塚が形成されている。貝塚は後期前半で、30m×10mの楕円形プランを最大として、その周囲には径2～4mの小規模貝塚が点在している。遺跡の西南部は古墳時代が主体を占めるが、古墳時代包含層の下位に縄文時代の遺物包含層が広がっているが、主体は後期後半である。明確な貝塚は検出されていないが、包含層に貝が混じり、場所によって径数10cmのブロック貝層がみられる。

出土遺物は豊富で注目すべき資料が多い。土器は前期から晩期にかけ連続して各型式が確認できる。石器は磨製石斧、石匙、石鏃等、縄文時代の遺跡に普遍的に存在する石器をはじめ、これまであまり例のなかった組合せ石銚の銚頭と石鋸、そして、礫の一辺あるいは二辺に加工を加えた、いわゆる尖頭状、双角状礫石器は、沖ノ原貝塚ではじめて注目された石器である。骨角器も豊富で、西北九州型結合式釣針、単式釣針、回転式離頭銚、ヤス、ヘアー・ピン、各種の貝でつくられた貝輪、月の輪熊の牙を利用した牙玉等がある。組合せ石銚、西北九州型結合式釣針、回転式離頭銚は環玄界灘漁撈文化圏を特徴づける漁具である。この他、イタボガキ製の貝面や石製の玉がある。天草諸島の縄文時代遺跡の内容が非常に豊かであることを示した重要な遺跡である。

一尾貝塚（天草市五和町御領字浜田）

有明海に面した中期～後期中葉の貝塚である。1996年9月15日～18日、宅地の擁壁工事に伴ない緊急調査が実施された。貝塚は以外に残存状態が良好であり、大きくは間層をはさんで上下2層の純貝層があり、貝層の厚さは1mを越える。最下層の砂層からは中期の並木式、阿高式土器が出土し、下の貝層からは後期初頭の南福寺式土器が出土している。上層貝層からは出水式、市来式、鐘ヶ崎式、北久根山式土器等、後期の土器が出土している。石器、骨角器の出土量も多い。石器は石鏃、石銚、石鋸、尖頭状石器、スクレパー、磨製石斧、擦切具、双角状礫石器、石錘、磨石、叩石等がある。骨角・貝器には、結合式釣針、単式釣針、回転式離頭銚、ヤス、骨ベラ、筭、耳飾り、貝刃、貝製装飾品、貝製玉、歯牙製玉、貝輪等がある。石銚、石鋸、結合式釣針、回転式離頭銚等は環玄界灘



第3図 天草の縄文時代遺跡分布図

漁撈文化圏の特徴的な遺物である。特に結合式釣針には西北九州型結合式釣針とテングニシの軸部で作られたオサンニ型結合式釣針軸部が出土していて、大矢遺跡の頁岩製軸部と合せて注目される。また、オオツタノハ製貝輪は南島との関係が考えられる。

椎ノ木崎遺跡（天草市深海町字椎ノ木崎）

東側が長島海峡に面し、三方が丘陵に囲まれた小さな入江の南斜面から中央平坦面に立地している。1987年、遺跡範囲確認のための発掘調査が実施されている。調査の結果、遺跡は約3000㎡を越える広さを有し、植物遺体を含む泥炭層（ドングリ・ピットか?）も確認され、大きな成果をあげている。時期的には縄文時代中期後半から晩期、一部、弥生時代におよんでいる。包含層のⅢ、Ⅳ層の一部、Ⅴ層は現在の満潮線の下位にある。いわゆる海底遺跡である。

出土遺物には土器、石器、編カゴ類、ドングリ類をはじめとする植物遺体、魚骨等がある。遺物量は莫大である。出土土器は中期後半の阿高式土器を最古として、後期初頭の南福寺式土器、鐘ヶ崎式土器、辛川Ⅰ式土器、辛川Ⅱ式土器、西平式土器、太郎迫式土器、鳥井原式土器、御領式土器と続き、晩期の黒色磨製石器もみられ、中期から晩期まで継続した遺跡である。沖ノ原、一尾、大矢遺跡同様に天草における拠点集落の一つとみることができる。石器も多量出土している。石器には各種の磨製石斧、石鏃、組合せ石銚の銚頭と石鋸、磨石、凹石、円盤形石器、打製石斧、双角状礫石器、礫石器、叩石、石錘、石皿等がある。磨石、凹石、叩石、打欠き石錘が多いのは天草の縄文遺跡に共通している。組合せ石銚（銚頭、石銚）は環玄界灘漁撈文化を特徴づける石器で、比較的まとまって出土していることは注目される。

小波戸遺跡（上天草市大矢野町大字波戸）

天草諸島最北の大矢野町の南西部に位置している。南面した南北に延びる谷部に立地し、標高6m前後を測る。北・東・西の3方は海拔30～50mの低丘陵に囲まれている。遺跡の全面は現在埋め立てが行われ、陸化しているが、昭和40年代までは遺跡は直接海に面し、海岸部にも多量の遺物の散布がみられた。

民家の井戸掘りによって発見され、その時、大矢野高校教諭であった阿部堅二氏によって小規模な調査がおこなわれている。本格的な発掘調査は熊本大学文学部教授の甲元真之氏を中心に2003年4月26日～5月1日にかけて実施されている。調査は大矢野町史編纂に伴うもので、遺跡の内容解明を目的としたものである。

層序は第1～8層は造成に伴う客土層、9～13層が遺跡発見時の水田耕作土、床土である。14、15層は黒褐色砂礫～礫層、古墳時代～古代の遺物包含層、16層、黒褐色砂層、縄文時代後期、17層、灰オリーブ粘質砂層、中期末から後期前半、18層、暗オリーブ褐色砂層、前期の遺物包含層である。18層は70cm程続くが、湧水のため発掘を中断している。第17、18層には植物質の自然遺物を多量に含んでいる。

明確な遺構は検出されていないが、17層上部に2本の打ち込まれた杭と木片の散乱がみられた。また、18層では一部にドングリが集中出土する部分がある。それぞれ水場遺構とドングリ・ピットの可能性が考えられる。

遺物は調査区が狭いため量的には多くないが土器、石器、木器、自然遺物がある。土器は前期の曾畑式、轟C式、尾田式、中期の船元式系、並木式、阿高式、後期の南福寺式、鐘ヶ崎式、市来式土器等、前期から後期にかけての時期が主体を占める。石器には石鏃、打欠き石錘、有溝石錘、磨製石斧、スクレイパー、敲石、石皿、礫器、二次加工剥片等がある。木器は棒状製品がある。長66.5cm、径3cmで両端部を加工して尖らせている。掘棒的用途が考えられる。自然遺物には植物遺体がある。ドングリ類を主に小型の種子もある。

2、大矢遺跡周辺の縄文時代遺跡

現在、(旧)本渡市内には44ヶ所の縄文時代遺跡が知られている。いずれも、現地踏査による表面採集資料によって遺跡の存在が確認されていて、発掘調査によって内容が判明している遺跡は極めて少ない。そのため、正確な時期は把握しがたい。大矢遺跡に関連すると考えられる広瀬川、町山、川口、亀川流域の遺跡について、その概略をみていく。遺跡は前記の河川の流域によって大別できる。

広瀬川流域の遺跡群

大矢遺跡と最も関係が深いのが広瀬川流域に分布する遺跡であり、遺跡数も多く、現在18ヶ所の遺跡が確認されている。遺跡は河口に位置する大矢遺跡を除いて、河口に近い下流域から中流域に集中し、上流域には散在的である。しかし、この分布はあくまで表面採集資料によっているため、見かけ上の分布であり、実際には遺跡数はさらに増加することは疑いない。以下、遺跡の概要をみていく。

丸尾ヶ丘遺跡（(旧)本渡市本渡町本戸馬場・丸尾ヶ丘）

広瀬川下流域右岸、河岸段丘の最も北側に位置する独立丘陵、通称丸尾ヶ丘に立地する遺跡群である。丘陵はゆるやかな傾斜をもち、現在は宅地、畑地となっている。標高約30m、丘陵全面に遺物が散布するが、場所によって遺物の集中度や遺物の種類が異なるので、小規模遺跡が点々と存在し、結果として大規模遺跡となったと考えられる。遺物の集中区域から、5ヶ所の遺跡をあげることができる。第3図の遺跡分布図78の遺跡は丸尾ヶ丘の頂部、果樹試験場の開場に伴う造成工事によって確認された遺跡である。器壁の厚い押型文土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、黒曜石、サヌカイトの石片が採集されている。押型文には格子目、山形文が認められる。広瀬川流域では最も遡る縄文時代の遺跡である。丸尾ヶ丘の西側斜面の県道に近い部分に位置する遺跡では、砂岩の扁平礫の一边に研磨を加え刃部を作り出した磨製石斧、頁岩製の礫石器、打製石斧、黒曜石製の石鏃等が採集されている。丸尾ヶ丘の東側の南斜面に位置する遺跡では、崖面に焼土が露出している部分がある。黒曜石、古銅輝石安山岩製石鏃や石片が採集されている。丸尾ヶ丘の西側の南斜面の遺跡では広範囲に石鏃や石片が散布している。天草農業高等学校敷地内で、黒曜石や土器の細片が散布している。以上、5ヶ所の遺跡をあげることができるが、それぞれの境界は明瞭でなく、黒曜石片等は丘陵全域約7haに散布している。

浜崎貝塚（(旧)本渡市浜崎町）

広瀬川右岸の河口近くの低位段丘先端に位置する。段丘の東側には広瀬川の旧河口の名ごりを示す小松原川が南流している。貝塚は本渡北小学校の南西部にあたり、現在は住宅が建て込み貝塚の範囲は不明であるが、周辺のかなりの広さにわたって遺物が採集されている。発見時の観察では、貝塚の厚さ約30cm、シオフキ、アサリ等の内湾砂泥性貝類が主体を占め、大型の魚骨も認められる。出土土器は後期中頃の北久根山式土器である。他に表採資料として磨製石斧、同未製品、凹石、スクレイパー等がある。大矢遺跡に後続する遺跡として注目される。

浜崎遺跡・牛ノ首遺跡（(旧)本渡市本戸馬場町浜崎・牛ノ首）

浜崎貝塚と同じ低位段丘上に位置する。低位段丘は沖積地との比高差は2～3m、段丘面は幅約200m、長さ約1km、北側は丸尾ヶ丘の独立丘陵に連なっている。浜崎貝塚は二つの段丘の南端に位置し、浜崎遺跡は浜崎貝塚の北約300mに位置している。浜崎遺跡からは畑の耕作中に縄文時代晩期前半の小児用甕棺1基が出土している。甕棺は深鉢形土器に浅鉢形土器を合せ口にしたものである。また、圃場整備に伴う調査では中世遺物に混入して晩期土器が出土しており、周辺に晩期遺跡の存在が予想される。浜崎遺跡の北、約200mには牛ノ首遺跡が存在する。これまで、磨製石斧、石皿、スクレイパー、石鏃、縄文土器が採集されているが、土器片は小さく、無文であるため時期の特定はできない。また浜崎遺跡から牛ノ首遺跡にかけての段丘面には、まとまりがないが、磨製石斧、スクレイパー、石鏃

などが散布している。

箱の水遺跡（（旧）本渡市本渡町本戸馬場・箱ノ水）

小松原川の上流、右岸の丘陵斜面に位置する。表面採集で石鏃、黒曜石、古銅輝石安山岩の剥片やチップが採集されている。また、道路建設に伴い、本渡市教育委員会が発掘調査を実施し、縄文時代の遺物が出土しているが、その大部分は石鏃である。

本泉A、B遺跡（（旧）本渡市本渡町本泉）

広瀬川の下流域、左岸の舌状丘陵上に位置している。丘陵頂部は比較的平坦で、ゆるやかな傾斜をもっている。A、B遺跡間は小さな谷を挟んで約300m離れている。立地条件はほぼ同じである。A遺跡が東側にあり、遺物の散布範囲は比較的広い。表採遺物として磨製石斧、石鏃、黒曜石、古銅輝石安山岩の剥片、チップがある。B遺跡は西側に位置し、石鏃、黒曜石、チャートの剥片、チップがあるが、量はきわめて少ない。

一ノ瀬遺跡（（旧）本渡市本町下河内・一ノ瀬）

広瀬川中流域、広瀬川が下河内に向う支流が分岐する付近の左岸の南面した舌状丘陵上に位置している。本泉B遺跡の上流1500mの地点である。丘陵部上面は平坦で、現在は畑地となっている。遺物の散布範囲は約1000㎡、表面採集遺物に磨製石斧、石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがある。比較的量は多い。

柎ノ原遺跡（（旧）本渡市本町下河内・柎ノ原）

広瀬川の支流（下河内川）の最上流部右岸の丘陵斜面に位置している。遺物の散布範囲は比較的狭い。表面採集遺物には石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがある。

新休遺跡（（旧）本渡市本町新休・横久保）

広瀬川の中流域、左岸の南面した丘陵斜面、一ノ瀬遺跡の西約4kmに位置している。遺物の散布範囲は狭くない。表面採集遺物には石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップ等があるが、量は少ない。

引地遺跡（（旧）本渡市本町引地）

本町小学校のすぐ東側に位置する小さな舌状台地の狭い範囲に黒曜石、安山岩の剥片、チップが散布している。確実な石器は存在しない。また、石片の量も極めて少ない。

福岡遺跡（（旧）本渡市本町本・福岡）

広瀬川の上流域、川が分岐する地点の支流と本流の間に形成された河岸段丘上に位置している。道路工事中に硬質砂岩製磨製石斧1本が出土している。共伴遺物はなく、周辺においても遺物は採集できない。

以上が広瀬川流域の遺跡である。下流域の一部の遺跡を除いて、大部分は磨製石斧、石鏃が少量存在する小規模遺跡のみである。中流域から上流域にかけては踏査が不十分であり、今後、丘陵斜面や段丘面において遺跡が発見される可能性は強い。

町山口川流域の遺跡群

町山口川流域の遺跡群は現在7ヶ所が知られている。遺跡のあり方、規模は広瀬川流域の遺跡と大差ない。

城山遺跡（（旧）本渡市本戸馬場・城山）

町山口川の下流域、左岸の本戸城地が存在する丘陵東斜面に位置している。現在は畑地となり、表面採集によって石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがあるが、量は少ない。遺物の散布範囲も極めて狭い。

天草高校第二グラウンド遺跡（（旧）本渡市本渡町中山口）

町山口川中流域左岸の山麓部に立地する。本渡市教育委員会の調査によって、石鏃、黒曜石、安山

岩の剥片、チップが出土しているが、遺跡としてのまとまりはない。

中山口丸尾遺跡（(旧)本渡市本渡町本渡中山口・丸尾)

町山口川中流域右岸側に分岐した支流の左岸の丘陵斜面に立地している。現在は畑地となっており、表面採集によって石鏃、黒曜石・安山岩の剥片、チップがある。遺物の散布範囲は狭い。

山ノ口遺跡（(旧)本渡市本渡町本渡・山ノ口)

町山口川の中流域、沖積地の最も奥まった左岸の舌状にのびた台地上に位置している。現在は畑地になっており、約500㎡の範囲に遺物が散布している。採集遺物には土器、打製石斧、スクレイパー、石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがある。

トクサロ遺跡（(旧)本渡市本渡町本渡・トクサロ)

町山口川の上流域、右岸の北面した山腹斜面に位置する。斜面は比較的ゆるやかであるが、平坦面はほとんどない。遺物の散布範囲は狭く、遺物量も少ない。表面採集遺物には石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがある。なお、本遺跡より約300m上流の急斜面から石鏃が1点採集されているが、剥片等は伴わず、遺跡とはみられない。狩猟で放たれた矢が未回収のままであったものが偶然採集できたものであろうか。

浄南A・B遺跡（(旧)本渡市浄南町)

町山口川河口右岸にあたるが、縄文時代は直接海に面していたと思われる。本渡中学校の南・北の丘陵斜面に立地する。北がA遺跡、南がB遺跡である。A遺跡は斜面がゆるやかで、B遺跡の斜面はやゝ急である。両遺跡は共に遺物の散布範囲は狭い。採集遺物には石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがあるが量は少ない。

亀川流域の遺跡群

亀川流域は現地踏査が進んでおらず、遺跡が判明しているのは5ヶ所にすぎない。今後、現地踏査を進めれば、遺跡数が増加することは疑いない。

妻の鼻遺跡（(旧)本渡市亀場町亀川妻の鼻)

亀川河口左岸の岬状にのびた丘陵上に位置している。丘陵は直接海に面し、丘陵上は平坦でかなりの広さを有する。古墳時代の地下式板石積石室墓36基が構築されている。縄文時代遺物としては、双角状礫石器、石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがあるのみで、量はきわめて少ない。

後掘遺跡（(旧)本渡市亀場町後掘)

亀川中流域左岸の丘陵斜面に位置する。斜面は傾斜が急である。石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップが散布しているが、その範囲は狭い。

食場遺跡（(旧)本渡市亀場町食場)

亀川中流域右岸の段丘面に位置している。段丘と沖積地の比高差は約1mの低位段丘である。段丘面は現在畑地となっている。遺物の散布範囲は狭く、石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがある。対岸には後掘遺跡がある。

宇土春登遺跡（(旧)本渡市亀場町宇土・春登)

亀川中流域、後掘で分岐する支流は右岸の丘陵部は開析し、小口な谷を形成するが本遺跡はその支流の左岸に位置する丘陵斜面に立地している。斜は東面し、比較的ゆるやかである。遺物の散布範囲は狭く、石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがある。

道目木遺跡（(旧)本渡市亀場町道目木)

亀川上流域右岸の山腹斜面に位置している。遺物の散布範囲は狭く、遺物には石鏃、黒曜石、安山岩の剥片、チップがあるが、量的には少ない。

以上が、広瀬川、町山口川、亀川流域に分布する遺跡であるが、これらの川の流域外にも遺跡は分

布している。天草上島と下島を限る本渡の瀬戸に面した富士ノ瀬遺跡や楠浦新田遺跡などはその代表的な遺跡である。共に100本を越える石鏃や、磨製石斧、環状石斧、石匙等が採集され、遺跡の規模も大きく河川の流域の小遺跡とは性格を異にしていると考えられる。

3、大矢遺跡の表面採集遺物

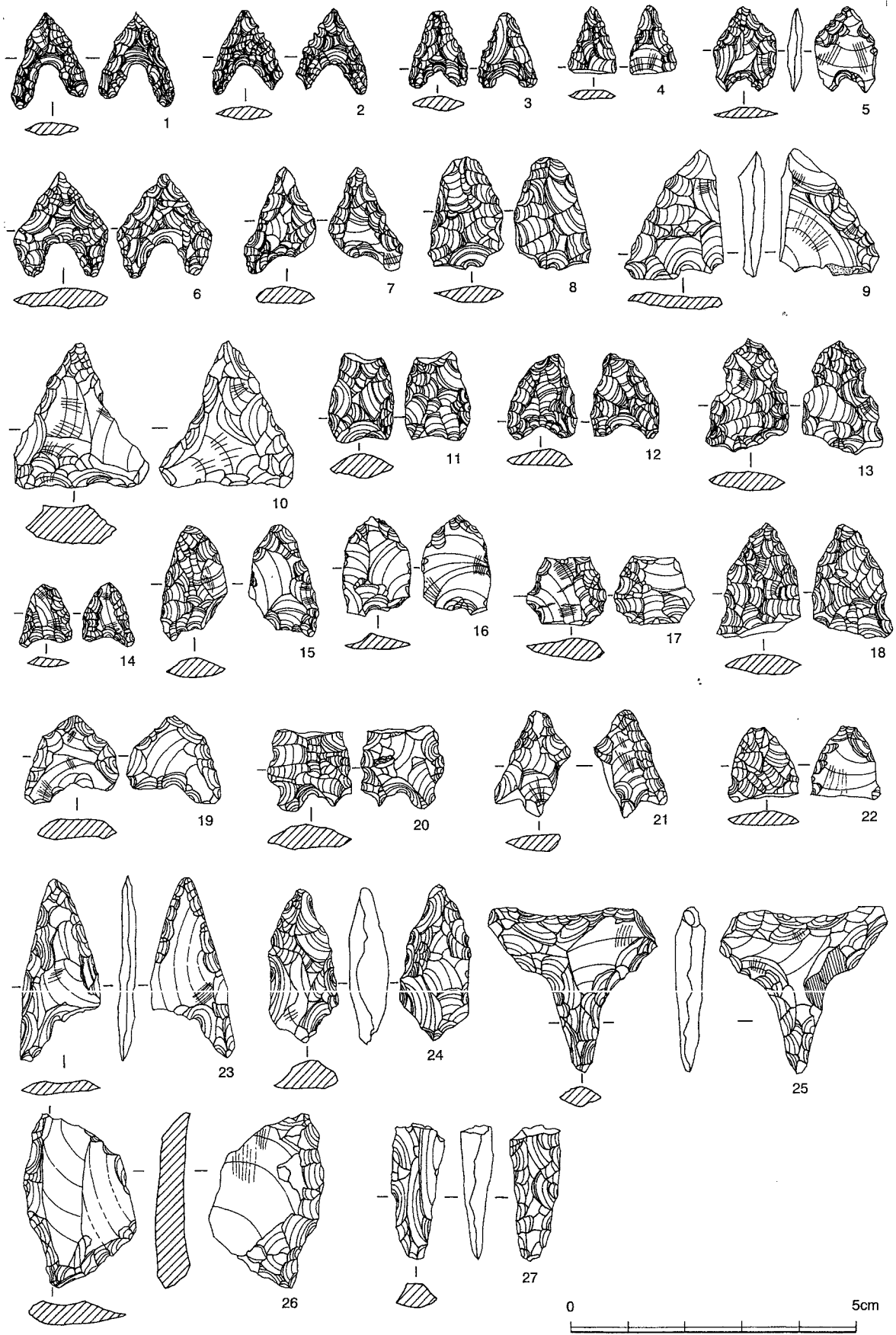
大矢遺跡の発見以来、たびたび現地踏査を実施し、多量の遺物を採集した。市内で最も有望な縄文時代遺跡と考えられ、深耕された畑の溝の観察から、耕作土下に黒褐色の遺物包含層と考えられる土層が拵がっていることがわかった。その土層には少なからず土器が包含されていた。また、畑の一部には貝殻が散布している部分があり、貝塚の存在をも予想される状態であった。

表面採集遺物には、縄文土器（前期土器の小破片、中期・阿高式土器）をはじめ、石鏃、石匙、磨製石斧、双角状礫石器、石錘等の石器類、須恵器、土師器、白磁器、滑石製石鍋等がある。量的に多いのが縄文時代遺物である。以下、縄文時代の石器類について紹介する。

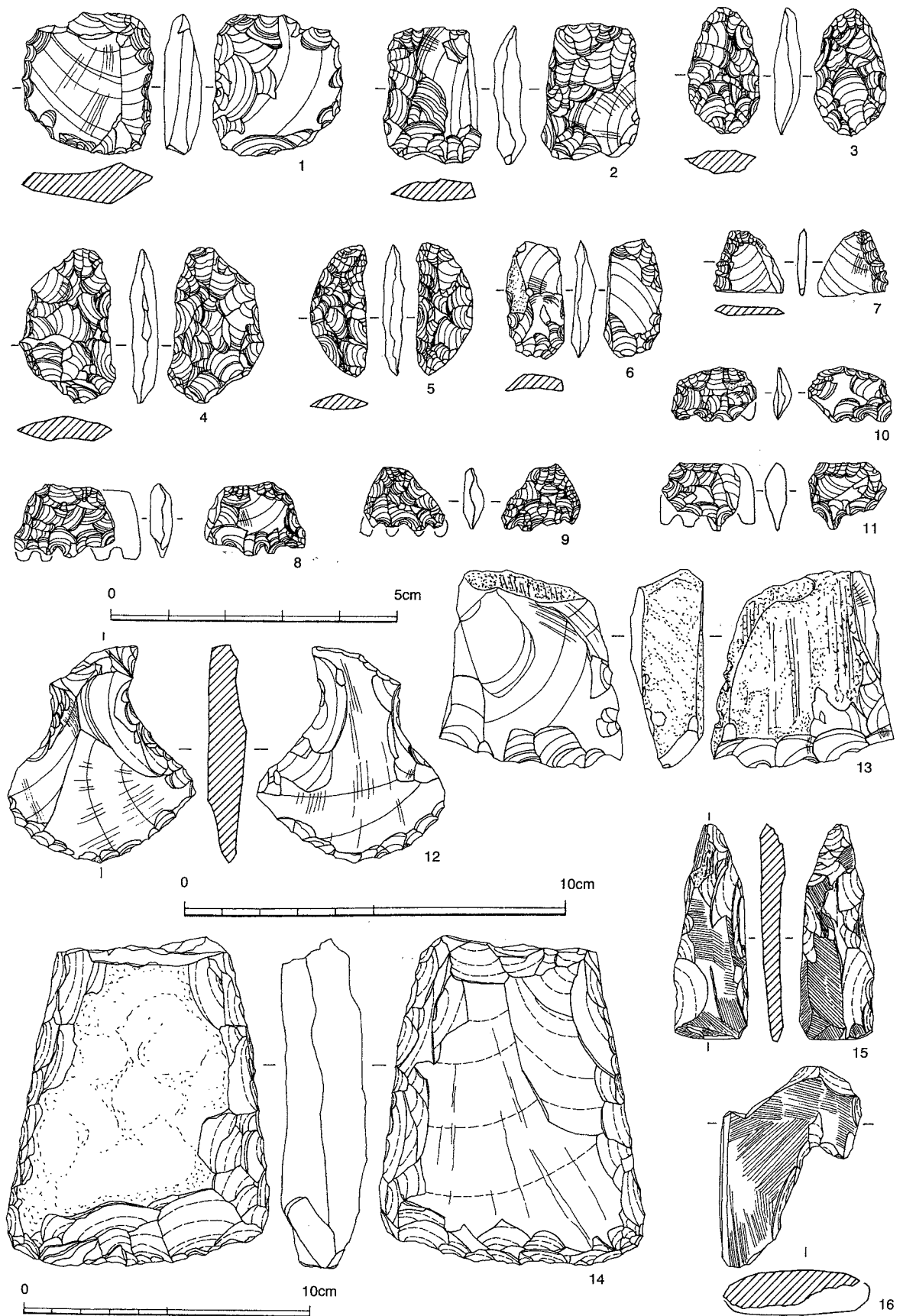
遺物の実測図は第4～6図に示した。第4図1～24は石鏃、あるいは同未製品である。1、2は共に黒曜石製、基部の抉りが深く、長脚である。1は先端部に肩をつくり出し、2は一側に小さな鋸歯列がつくり出される。3は小型鏃、抉りは浅く、一側に小さな鋸歯列がつくり出される。先端を欠失する。4は脚部を欠失する。両面には丁寧な押圧剥離を加えるが、片面に主要剥離面を大きく残している。5は五角形をなす特徴的な石鏃である。片面に主要剥離面を大きく残し、広義の剥片鏃である。基部には両面から細かい剥離を加え浅い抉りをつくり出している。先端部にも細かい剥離を加え尖らせている。側辺部は剥離のままである。6も平面形は五角形をなす特徴的な石鏃である。両面から丁寧な押圧剥離を加えて整形している。基部の抉りは深い。7は片方の脚を欠失する。全体形は三角形をなす。周辺に押圧剥離を加え整形するが、剥離はやゝ粗である。8は先端部と脚部を欠失している。両面から粗い剥離が加えられ整形している。未製品（失敗品）か。9は三角形をした剥片に両面から押圧剥離を加えているが、一辺は切断したままの状態である。二次加工があるので石鏃未製品と考えられる。10も石鏃未製品と考えられる。粗い剥離で全体を三角形に整形しているが、厚く、これから押圧剥離を加えて仕上げるものと考えられる。11は先端部を欠失している。全体形は二等辺三角形をなし、基部は平坦で抉りはない。幅に比較し、断面は厚い。12は先端部が一方に片寄っている。基部の抉りは浅い。13は脚部を欠失し、側辺も部分的に欠損している。両面からやや粗い押圧剥離を加えて整形している。14は小型の石鏃である。先端は尖らず丸味をもつ。基部の抉りは浅く、脚は左右不ぞろいである。二次加工は周辺部のみで中央部にはおよんでいなく、剥離面を大きく残している。15は長身の石鏃である。脚の片方を欠失している。基部の抉りは浅く、先端は丸味をもち、片方に片寄っている。全体に押圧剥離で整形しているが、片面に剥離面を大きく残している。16は広義の剥片鏃である。二次加工は基部と先端の一部のみに加えられる。脚部を欠失する。基部の抉りは浅いと考えられる。先端部は鈍角をなし、全形は略五角形をなす。両面共に剥離面を大きく残している。基部が剥片の打点部にあたる。17は先端部を欠失している。両面共に剥離面を大きく残している。側辺の一辺は剥離のエッジのままで、基部と他の一辺に押圧剥離を加え、整形している。18は基部の一部を欠失しているが、基部の抉りはなく、平坦である。両面に押圧剥離を加え、整形している。剥離面はやゝ粗である。19も両面に大きく剥離面を残している。周辺部に小さな剥離を加え整形している。全形は略五角形をなす。基部の抉りは浅く、最初から片脚である。20は先端部を欠失している。基部の抉りは浅く小さい。片方の脚も欠失する。両面には粗い押圧剥離を加え整形している。21は身の一部から脚部にかけて欠失している。先端部は尖らず丸味をもつ。両面にはやや丁寧な押圧剥離を加え、整形している。22は身の下半部以下を欠失している。片面には主要剥離面を大きく残し、周縁部に小さ

な二次加工が加えられている。打点側を先端部としている。他の面には押圧剥離が全面にわたって施されている。23はやや大型の石鏃である。両面に剥離面が大きく残り、主要剥離面から横剥ぎの剥片を素材としていることがわかる。周縁部に細かい二次加工を加え整形している。基部の抉りは深い、片脚を欠失する。長身の鏃である。24は柳葉形をした石鏃である。両面は押圧剥離を加え整形しているが、剥離はやや粗い。両面には後世のガジリがみられ変形している。3～8、11～13、15～18、20～22は黒曜石、9、10、14、19、23は古銅輝石安山岩を素材としている。なお、黒曜石には灰色が強く、透明度が悪い石と黒色で透明度の強い二者がある。1は長1.7cm、幅1.3cm、厚0.2cm、重量0.41g、2は長1.5cm、幅1.3cm+ α 、厚0.25cm、重量0.40g、3は長1.3cm、幅1.05cm、厚0.25cm、重量0.36g、4は長1.2cm+ α 、幅0.9cm+ α 、厚0.15cm、重量0.15g、5は長1.5cm、幅1.15cm、厚0.2cm、重量0.37g、6は長1.8cm、幅1.7cm、厚0.4cm、重量0.83g、7は長1.9cm、幅1.3cm+ α 、厚0.3cm、重量0.61g、8は長1.9cm+ α 、幅1.3cm+ α 、厚0.3cm、重量1.03g、9は長2.3cm、幅1.8cm、厚0.5cm、重量1.54g、10は長2.6cm、幅2.4cm、厚0.7cm、重量3.63g、11は長1.6cm、幅1.1cm、厚0.4cm、重量0.82g、12は長1.5cm、幅1.25cm、厚0.3cm、重量0.64g、13は長2.0cm+ α 、幅1.4cm、厚0.4cm、重量1.00g、14は長1.1cm、幅0.9cm、厚0.15cm、重量0.26g、15は長2.0cm、幅1.2cm+ α 、厚0.35cm、重量0.85g、16は長1.8cm+ α 、幅1.2cm、厚0.3cm、重量0.66g、17は長1.2cm+ α 、幅1.4cm、厚0.4cm、重量0.74g、18は長2.0cm、幅1.5cm+ α 、厚0.35cm、重量1.10g、19は長1.6cm、幅1.7cm、厚0.35cm、重量0.82g、20は長2.4cm+ α 、幅1.5cm、厚0.4cm、重量1.04g、21は長1.9cm+ α 、幅1.3cm+ α 、厚0.3cm、重量0.77g、22は長1.2cm+ α 、幅1.2cm+ α 、厚0.25cm、重量0.45g、23は長3.2cm、幅1.4cm+ α 、厚0.2cm、重量1.14g、24は長2.7cm、幅1.2cm、厚0.5cm、重量2.07gである。25は古銅輝石安山岩製の石錐である。全体に周縁部に細かい剥離を加え整形している。特に錐体の部分は二次加工が丁寧であるが両面共に剥離面を大きく残している。上部の一端を欠失している。長2.9cm、幅3.0cm+ α 、錐部の断面形は菱形をなし、厚0.35cm、重量3.12g。26は刃器である。古銅輝石安山岩の剥片を素材としている。略三角形をした剥片のエッジ部分を刃部とし、他の二辺に両面から刃潰し状の二次加工が加えられ、一見して旧石器のナイフを思わせる。長3.1cm、幅1.8cm、厚0.4cm、重量3.41g。刃部には使用による小さな剥離が認められる。27は古銅輝石安山岩製の石錐であるが上半部を欠失する。片面はやや粗い剥離で加工するが、他の面と先端部には細かい剥離を加えて整形している。長3.2cm+ α 、幅0.9cm+ α 、厚0.4cm、重量1.06gを測る。

第5図1～7はサイド・ブレード、8～11は石鋸、12は石匙、13はスクレイパー、14は磨製石斧未製品、15、16は磨製石斧である。1～11はいずれも黒曜石製である。1は略方形をなす。両面には剥片時の剥離を大きく残している。周縁部には両面から細かい剥離を加え整形している。長2.4cm、幅2.3cm、厚0.4～0.7cm、重量3.84g、2は長方形をなす。一辺は切断面で未調整、三辺は両面から押圧剥離を加え整形している。両面の一部に剥片時の剥離面が少なからず残っている。長2.3cm、幅1.7cm、厚0.4cm、重量2.47g。3は扁桃形をなす。両端部が丸く仕上げられ、明らかに石鏃とは異なる。両面から押圧剥離を加えて整形している。長2.2cm、幅1.3cm、厚0.5cm、重量1.41g。4は両面から押圧剥離を加え、半月形に整形している。周縁にはすべて刃部が形成されるが、一部、後世のガジリにより欠損している。長2.7cm、幅1.6cm、厚0.45cm、重量2.25g。5は両面から丁寧な押圧剥離を加え三日月形に整形し、薄く仕上げている。断面形は菱形をなし、周縁部には刃部が形成されている。長2.4cm、幅1.0cm、厚0.3cm、重量0.72g。6は長方形に整形される。両面には剥片時の剥離面を大きく残しており、片面には一部、黒曜石原石の表皮も残っている。上下辺に押圧剥離を加え刃部を形成している。長2.01cm、幅1.01cm、厚0.28cm、重量0.88g。7は半折している。現存形は略三角形をなす。長辺の一辺に両面から押圧剥離を加え刃部を形成している。刃部は一部鋸歯状をなす。両面共に剥片時の剥離面を大きく残している。長1.11cm+ α 、幅1.21cm、厚0.15cm、重量0.25g。



第4圖 大矢遺跡表面採集資料 I



第5図 大矢遺跡表面採集資料Ⅱ

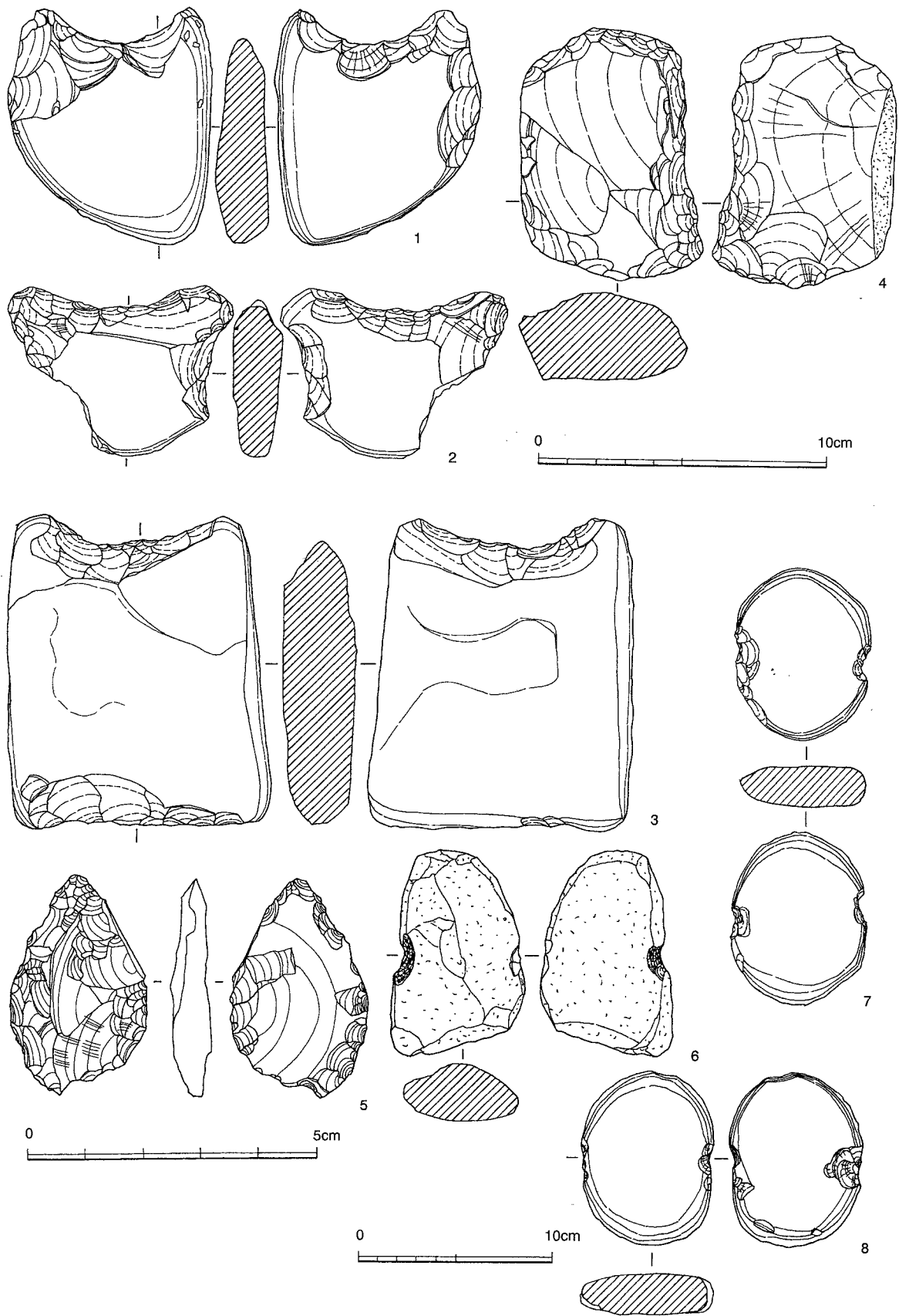
8～11は石鋸である。銚頭の下位に組合せ、組合せ石銚を形成する。8は一辺と鋸歯列の大部分を欠失するが、ほぼ全形を知ることができる。全形は台形状をなす。長軸の下辺に鋸歯列をつくり出す。2ヶ所を除き欠失するが、残存部から考えると少なくとも5個の鋸歯部がつくり出されていたと考えられる。両面共に全体に押圧剥離を施し整形しているが、特に鋸歯列の部分は丁寧である。片面に主要剥離面の一部が残存している。上辺の長さ $1.12\text{cm} + \alpha$ 、鋸歯列の長さ $1.70\text{cm} + \alpha$ 、幅 1.24cm 、厚さ 0.36cm 、重量 $0.98\text{g} + \alpha$ 。9は上辺の長さが極端に短い台形状をなす。鋸歯列は4個であるが、いずれも先端部を欠失している。全体に丁寧な押圧剥離を加え整形している。上辺の長さ 0.44cm 、鋸歯列の長さ $1.37\text{cm} + \alpha$ 、幅 $1.08\text{cm} + \alpha$ 、厚さ 0.36cm 、重量 $0.49\text{g} + \alpha$ 。10は長方形をなす。鋸歯列は4個がつくり出されるが、端の1個を欠失している。片面に主要剥離面を大きく残している。全体に押圧剥離を加え整形しているが粗雑である。長 1.43cm 、幅 1.19cm 、厚 0.33cm 、重量 $0.43\text{g} + \alpha$ 。11は一辺と鋸歯列の大部分を欠失している。鋸歯列は少なくとも4個以上がつくり出されたと考えられるが、1個を残すのみである。全体は押圧剥離により整形され、台形状をなすと考えられる。上辺長 $0.93\text{cm} + \alpha$ 、下辺長 $1.36\text{cm} + \alpha$ 、幅 1.17cm 、厚 0.38cm 、重量 $0.55\text{g} + \alpha$ 。

12は古銅輝石安山岩製の石匙である。全体形はいちょうの葉形をしている。両面共に剥離時の剥離面を大きく残し、剥片を最大限利用している。二次加工はつまみのくびれ部と刃部の形成に集中している。刃部は両面から小さな押圧剥離を加えて丁寧につくりだされる。つまみのくびれ部は刃潰し状の剥離が加えられているが、つまみは完全につくり出されていない。長 5.52cm 、刃部幅 4.80cm 、くびれ部幅 1.98cm 、つまみ部幅 2.24cm 、厚 1.02cm をはかる。13は古銅輝石安山岩を素材としたスクレイパーである。素材の剥片は石核から最初に剥離したもので、打点と片面には原石の表皮を残している。他の面は主要剥離面を大きく残す。刃部は両面からやや大きい剥離を加え形成している。全体形は方形をなす。長 5.16cm 、幅 4.70cm 、厚 1.97cm 、重量 59g をはかる。

14～15は蛇紋岩製の磨製石斧および同未製品である。14は大型の磨製石斧未製品である。揆形をしている頭部を欠失している。片面には原石の表皮を大きく残しており、素材を原石から剥ぎ取ったことがわかる。周囲に剥離を加え丁寧に整形していて、一見、打製石斧のように見えるが、刃部に使用痕はみられない。石材等を考慮すれば磨製石斧の未製品と考えられる。頭部の欠損によって研磨を断念したものであろう。長 $11.6\text{cm} + \alpha$ 、幅 $6.2\sim 9.3\text{cm}$ 、厚 2.9cm 、比較的薄手の石斧である。15は小型の磨製石斧である。細長い長方形に整形するが、頭部は尖り気味におさめている。剥離の上には全体に研磨が加えられるが、頭部にはあまりおよんでいない。刃部は片側から大きく研磨され、一見、片刃石斧とみられるが、刃部は平坦に研磨され、刃部の形成はなされていない。未製品と考えられる。整形の状況や研磨痕に新旧が認められるので、研磨石斧の破損品を再利用したものと考えられる。長 7.6cm 、幅 $1.2\sim 2.6\text{cm}$ 、厚 $0.4\sim 0.8\text{cm}$ 。16は磨製石斧の胴部破片である。全体に良く研磨されている。中型の石斧と考えられる。長 $7.0\text{cm} + \alpha$ 、幅 $5.0\text{cm} + \alpha$ 、厚 $1.2\text{cm} + \alpha$ 、重量 $37\text{g} + \alpha$ を測る。

第6図 1～4は双角状礫石器、5はスクレイパー、6～8は石錘である。

1は扁平な安山岩の円礫を素材としている。二辺に剥離を加え2ヶ所の尖頭部をつくり出した石器であるが、尖頭部の使用痕は明瞭でない。尖頭部間の一辺は敲打状の使用痕が認められ大きく抉られ、抉りは尖頭部を結んだ線より 1.2cm を測る。他の剥離部分は鈍い刃部がつけられる。抉り部分の敲打痕からすればかなりの使用が考えられるが、使用用途等については不明な点が多い。西北九州沿岸部の遺跡に顕著で、出土量も大きく注目される石器である。長 8.2cm 、幅 7.0cm 、厚 1.7cm 、重量 166g である。2も安山岩の円礫を素材としている。一部を欠失している。全体形は長方形に近い。三辺に剥離を加え整形し、2ヶ所に角状の尖頭部をつくり出している。加工された各辺には抉りがつけられるが、欠損部については抉りの状態は不明。他の抉りは尖頭部を結んだ線、あるいは尖頭部と加工の始まる



第6図 大矢遺跡表面採集資料Ⅲ

点を結んだ線よりそれぞれ、0.7cm、0.5cmの抉りが存在する。抉り部分は敲打痕が顕著である。長7.8cm、幅5.9cm、厚1.8cmをはかる。3は砂岩製の扁平礫を素材としている。扁平礫の角は磨滅によって丸くなっている。平面形は長方形をなし、短辺の上下辺に剥離が加えられている。特に上辺では剥離後、敲打も加えられ、2ヶ所の尖頭部をつくり出している。抉りは尖頭部を結んだ線より1.0cm凹んでいる。下辺の加工は一面のみで両面におよんでいない。使用途中で使用を中断したためか否かは明らかにできない。長10.7cm、幅9.1cm、厚2.5cmをはかる。4は安山岩を素材とした礫器である。他の礫器と異なり剥片を利用している。打点部分には原石の表皮を残している。打点を除いた三辺に加工を加え整形している。全体形はやや丸味をもった長方形をなす。加工は打点の反対側の一边が特に丁寧で、一部敲打も加えられている。抉りはほとんどなく、1ヶ所に尖頭部がつくり出されているが、他と比較し、大きく突出していない。使用目的の違いがあるのであろうか。長8.8cm、幅6.1cm、厚3.0cmをはかる。

5はスクレイパーあるいは尖頭器と考えられる石器である。黒曜石の横剥ぎの剥片を素材とし、片面に主要剥離面が大きく残っている。耕作によるガジリがみられ、状態は良くない。片面は押圧剥離を加え整形する。尖頭部にも新しいガジリの剥離がみられる。主要剥離面側にも周辺に小さな剥離を加えている。長3.9cm、幅2.4cm、厚0.6cm、重量5.86gをはかる。

6～8は共に安山岩の円礫を利用した打欠きの石錘である。6は長軸の二辺に打欠きによって抉りを入れる。長10.4cm、幅6.8cm、厚3.0cm、重量243gをはかる。7、8も同様に長軸の二辺に打欠きによって抉りを入れる。7は長8.9cm、幅7.2cm、厚2.2cm、重量186g、8は長9.0cm、幅6.8cm、厚2.1cm、重量176gをはかる。

第4章 発掘調査の概要

本遺跡は1963年4月5日の発見以来、数十回の現地踏査を実施した。その結果、前・中期に属する縄文土器をはじめ、蛇紋岩製の磨製石斧類、黒曜石の石鏃、石鋸、安山岩製の石匙、安山岩、砂岩製の礫石器、石錘等の遺物が表面採集でき、本渡市内における縄文時代の有望な遺跡の一つであることが判明した。

発掘調査は市史編纂事業に伴ない、市内における数少ない縄文時代遺跡の内容把握を目的として、1989年10月24日から11月14日までの23日間にわたって第1次調査を実施した。この調査は試掘調査にちかいものであったが、縄文時代の包含層が数層にわたって重なりあう重要な遺跡であることを確認した。その後、遺跡の重要性から保存対策を構じるべく、遺跡の範囲確認を目的として、1992年2月15日から3月13日までの27日間にわたって第2次調査を実施した。その結果、住宅が建ち発掘できなかった地域を含め遺跡の範囲は約1万㎡におよぶことが推測できた。以下、1、2次調査の概要をみていく。

第1次調査（調査期間 1989年10月24日～11月14日 発掘面積84㎡）

遺跡は現状で畑地として利用されているために調査できる範囲は限定され、思うようにトレンチを設定することができなかった。よって調査可能な範囲において、地形が最も良く反映するように、砂丘頂部から後背地にかけて砂丘に直交するAトレンチ（2m×16m）を設定し、包含層の状態を観察した後に、更に、B-1・2、C-2、D-2トレンチを設定し、Aトレンチに直交する土層観察に努めた。また、遺跡の拡がりを確認するために、Aトレンチの西側に約40m離れてAトレンチ同様に頂部から後背地にかけての西側トレンチ（2m×20m）を設定し、それぞれのトレンチの発掘を進めた。

土層は地点によって若干異なるが、砂丘頂部付近ではほぼ水平に堆積し、8層に別けられる。上から、第1層、現耕作土の黒灰色砂質土層、厚さ20cm前後。第2層、人頭大～拳大の礫を多量に混じえた黒褐色混砂礫層、厚さ20cm前後。この礫層は砂丘全面を覆っており、その成因が問題となろう。第3層、径5cm前後の小石を多量に含んだ黒褐色砂質土層、厚さ10～20cm。2、3層は後期初頭の遺物包含層である。両層の下面において柱穴が確認され、生活面になっていることが判る。第4層は径5cm前後の小石をわずかに含んだ黄褐色砂層、厚さ20～25cm。中期・阿高式土器の包含層である。第5層、灰色粗砂層、厚さ10～20cm。上位に並木式土器、下位に船元式土器を包含している。第6層、灰色粗砂の中に径5～10cmの円礫を多量に含む砂礫層、厚さ10～15cm。この礫層の成因は大きな問題を含んでいると考えられる。後述する考察する砂丘形成の項で詳述する。第6層の下位は前期層となる。第7層、黒灰色砂層、厚さ10～25cm。第8層、黒灰色砂層中に径数cmの砂利を多量に含んだ砂利層である。以上が第1次調査における基本層序である。前期～後期初頭にかけての土器型式が六層にわたって層位的に整然と把握できた事は大きな成果であり、九州の土器編年に大きく貢献すると考えられる。

次に、遺構についてみてみよう。遺跡が砂丘に立地するため、その検出は極めて困難である。遺構には古代の貝塚、柱穴、黒曜石原石の集積があるにすぎない。古代の貝塚は西側トレンチの北端に検出したもので、第1層と第2層の間に古代の包含層が残存し、その一部が貝塚となる。貝塚は厚さ20cm、平面形は7m×2mの楕円形をなすと考えられる。中より11世代の白磁器が出土する。貝種はマガキを主体とし、アカニシやウミニナ等がある。柱穴とみられるピットは径20～30cm、深さ20～40cm。第2、3層から掘り込まれたピットが多いが、他の層から切り込まれたピットもある。比較的まとまりがある部分もあるが、炉址や堅穴の掘り込みを確認できないので、住居址とは判断できないが、周

辺に住居址の存在を考えると良いと考えている。黒曜石の集石はA-2区、第4層に確認した遺構である。長崎県針尾島産黒曜石原石42個を集積したもので、この周辺で石器製作が行われたことがわかる。

一次調査で出土した注目される遺物として、当時、九州最古となる土偶、動物形土製品、岩偶各1点が出土している。また、中期層から出土した組合せ石銚の銚頭は時期が特定できる点、貴重である。多量の土器、石器の組み合わせは、本遺跡の生業活動を考察する上には欠かせないものである。

第2次調査（調査期間、1992年2月15日～3月13日、発掘面積144㎡）

第2次調査は第1次調査の成果をもとに、先ずAトレンチの西側の状態を知るために、AトレンチのA-1区を基点にして直交するEトレンチ（2m×16m）を設定した。さらに同地区の状況をより知るために、Eトレンチの南に平行してFトレンチ（2m～12m）、Gトレンチ（2m×10m）を拡張したが、Gトレンチには古代末の大規模な攪乱があり、前期に属する下層を除いて極めて残存状態は不良であった。また、遺跡の全体の状況を把握するために、Gトレンチのさらに南側に約20m離れて砂丘に直交するように南トレンチ（2m×10m）を設定した。この部分は砂丘の前面側、すなわち海側にあたる所である。発掘所見では、約30mの耕作土下に南に向って傾斜する砂礫が重層的に重なり、遺物包含層を確認することはできなかった。このことから、遺跡は砂丘前面までは広がらず、砂丘頂部から、後背地を中心に展開していることが判明した。また、東側の限界を知るために南トレンチの東側約110mの所に東トレンチ（2m×12m）を砂丘に直交する形で設定した。このトレンチでも明確な包含層を確認することはできなかったが、表土下にある礫層から磨製石斧やスクレイパー類が少量ながら出土し、遺物はこのトレンチ周辺にも散布することがわかった。よって、南、東トレンチの中間地点での状況を知るために、現在、馬場になっている部分の片隅に小規模なトレンチ（2m×4m）を設定したが、攪乱があり、良好な包含層は確認できなかったが、土器、石器等の遺物は少なからず出土するので、遺跡の中心部はこの付近まで拡がるものと考えられた。以上、第1次調査、第2次調査の各トレンチの所から、遺跡の中心部は東が馬場トレンチ、西は西側トレンチ、南は砂丘頂部付近、北側は家屋が建っているため不明な部分があるが、後背地を含み、丘陵下まで延びる約1万㎡と考えることができる。なお、第1次調査の成果を再確認するため、B、C、D、H-3区を拡張して発掘した。

基本的な層位については第1次調査と同様であるが、西側に向って各層が傾斜し、各層間に新しい土層が形成され、やゝ複雑になる。砂丘形成あるいは縄文の海進、海退との関係が考えられるが、詳細は後述する。

埋甕を除いた集石墓は遺構としてE～Gトレンチに埋葬遺構と考えられる土抗を伴う集石墓群6基、埋甕1基を検出した。いずれも前期に属し、埋甕は晩期に属する。

注目される遺物として、石製の結合式釣針軸部1点が出土した。西北九州型結合式釣針の形成過程を知る上で貴重であり、朝鮮半島の鰲山里型結合式釣針との関連が考えられる。また、後期層から組合せ石銚が出土し、1次調査の成果を加味し、その変遷過程が判明した。

調査後、側溝工事が行なわれ、後背地から縄文時代のドングリ類、編みカゴが採集され、貝層の一部が確認されている。遺跡の重要性は増々高くなったといえる。

第5章 調査区の設定と層序

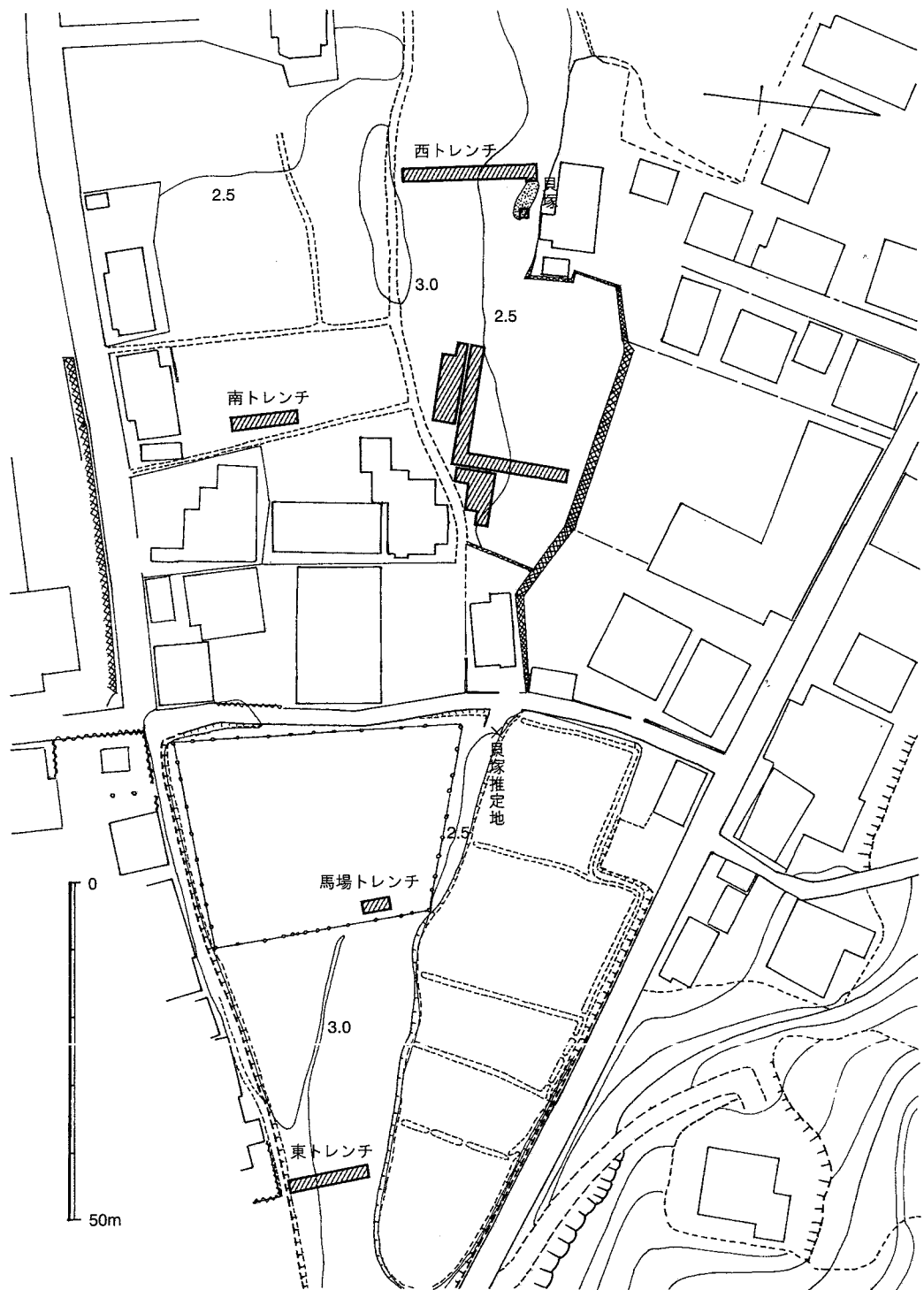
1、調査区の設定

遺跡の発見時は数軒の住宅を除いて、建物はほとんどなかった。砂丘部分は畑地、砂丘の後背湿地は水田となっていたが、調査時には道路に沿った水田は埋め立てられ、住宅や幼稚園が建設され、砂丘部分の畑地がかろうじて残っている状態であった。

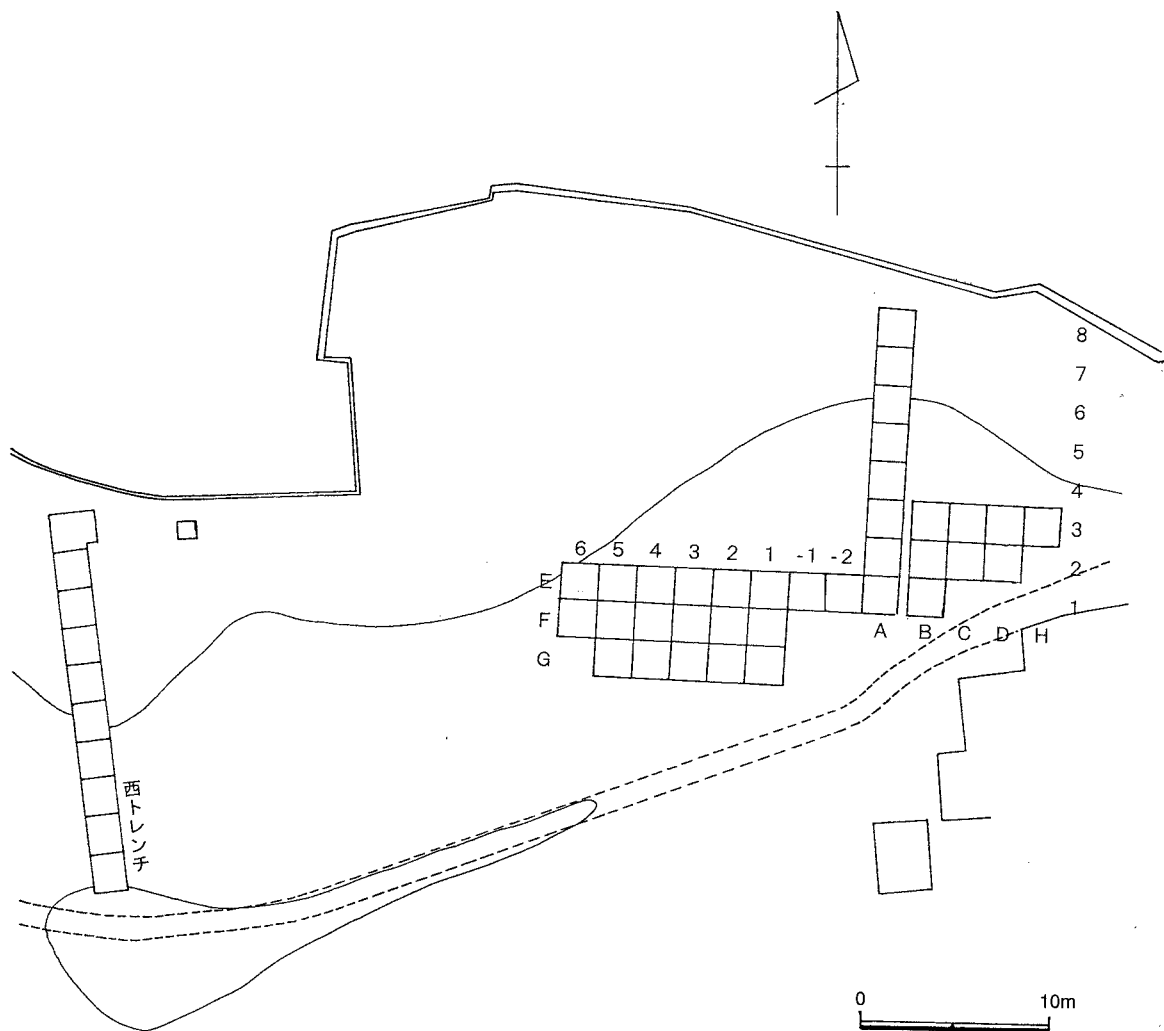
第1次調査では調査の受諾を得ていた畑を対象として、遺跡の地形と包含層の状況を知るために、ほぼ南北にAトレンチ（2m×16m）を設定し、南北方向を2mごとに細分し、1区画を2m×2mのグリットとし、南よりA-1、A-2……A-8と呼称した。場所的には砂丘の最高所を走る農道のすぐ北側から砂丘後背地にかけての位置にあたる。まずはAトレンチを完掘し、先にあげた遺物包含層と地形との関連性の把握に務めた。詳細は後述するが、発掘調査の結果、遺物包含層は後背湿地にむかって若干傾斜するが、頂部近くでは水平層となり、極めて良好な状態で堆積していることが判った。よって、その範囲を把握すべく、西側にAトレンチに直交するようにBトレンチ、Cトレンチ、Dトレンチを設定した。AトレンチとBトレンチの間には50cmのベルトを残した。Bトレンチは2m×4m。Aトレンチ同様に1区画を2mに細分し、B-1、B-2区とした。Cトレンチは2m×2m、C-2区、Dトレンチは2m×2m、D-2区とした。

また、遺跡の西側の状況を知るためにAトレンチの西側に約20m離れて、地形に合わせてほぼ南北に2m×10mの西トレンチを設定したが、この地区ではほとんど包含層はみられず、表土（耕作土）下すぐに砂礫層（礫は直径5cm前後）が存在したため発掘を断念した。ただし、トレンチの北端部において表土下に貝層の存在を確認したので、北端から2mの範囲で幅約50cmを拡張した。その結果、一面に貝層が広がっていることを確認した。貝層の時期は貝層中から白磁器が出土することから古代末に比定できることも判った。この地域の畑には表面採集時にも若干の貝殻が散布していたので、貝塚の存在を期待していたが、残念ながら縄文時代の貝塚ではないことを確認した。この貝塚の規模を確認するため、西トレンチの東側5mの所に1m×1mのトレンチを設定した。このトレンチにも貝層が分布し、その規模をほぼ推測することができた。古代末（11世紀）の貝塚の規模は東西約6m、南北約2m、厚20cmの小規模なものである。

2次調査では1次調査の成果を受けて、調査の主眼を遺跡の範囲確認においた。また、遺跡の内容把握においても、1次調査の欠を補うものとした。まずは、第1次調査で明らかにできなかったAトレンチ西側の状況を把握するためにAトレンチに直交するEトレンチをA-1区の延長4mの所から2m×12mで設定した。Eトレンチでは東からE-1、E-2……E-6区と細分し、それぞれ2m四方のグリットを設定した。調査の結果、遺物包含層は西側に広がることを確認したが、層位的にAトレンチと大きく異なることがわかり、両者の関連性を把握するために、最終的にはEトレンチをさらに東に4m拡張し、E-(-1)、E-(-2)として、Aトレンチと接するように設定し、包含層の関連性の把握に努めた。また、Eトレンチにおいて遺構の存在が予想されたので南側に接してFトレンチを設定したが、Fトレンチは表土（耕作土）下には耕地改善のため大きな攪乱がみられ、層位的把握ができなかったため、さらに南にGトレンチを設定した。Fトレンチは2m×12m、Eトレンチ同様に2mごとに区分し、東よりF-1、F-2……F-6区とした。Gトレンチは2m×10m、他のトレンチ同様に2mごとに区分し、東よりG-1、G-2……G-5区とした。なお、EトレンチとFトレンチの間には幅50cmの壁を残した。同理由からFトレンチの実際の発掘区は1.5m×12mとなった。



第7図 大矢遺跡の地形とトレンチ配置図



第8図 大矢遺跡主要トレンチの位置

砂丘頂部の南側についての状況は全く不明であったので、Gトレンチの南側約20mの所に幅2m、長さ10mの南トレンチを設定した。耕作土を除去した段階で拳大の礫層が現れ、礫層が無物層であることを確認したので急遽、発掘を幅1mに変更し、深堀りをしてその状況を確認した。砂丘頂部より南側は表面採集においても散布する遺物は少なく、南トレンチの結果と総合し、包含層の拡がりも砂丘頂部を越えて大きく南に拡がらず、Gトレンチと南トレンチの中間に求められると推測された。連続したトレンチで状況を把握していないので詳細は不明。今後、包含層と連続した状況で砂丘前面の状況を把握する必要がある。

砂丘の東側の状況を知るために、Aトレンチの東約65mの地点、現在馬場となっている場所の東端部と、さらに東側約35mの畑地に、砂丘に直交する姿で南北トレンチを設定した。馬場に設定したトレンチを馬場トレンチ、さらに東に設定したトレンチを東トレンチと呼称した。馬場トレンチは2m×4m、東トレンチは2m×12mである。共に表土層（耕作土）直下に礫層が存在する。礫に混在してスクレイパーや磨製石斧が出土するが量的には少ない。明確な包含層は存在していないが、遺跡形成時には少ないながら使用された時期があると考えられる。

後背湿地の水田地帯にもトレンチを設定し状況把握に努めたかったが、地主の許可がもらえず、試掘に至らなかった。しかし、その後、水田を埋めて宅地造成がなされた。造成に伴う側溝工事が行なわれ、本渡市教育委員会の立会調査では、堅果類を含んだ泥炭層が確認され、縄文土器をはじめ磨製石斧、ハンマー、叩石、双角状礫石器、スクレイパー、磨石等が出土している。網カゴの一部やドングリ類等、低湿地特有の遺物も出土している。状況からは堅果類の貯蔵穴や水さらし場の遺構の存在が予想される。また、側溝の一部にはマガキを主体とした貝層も確認されており、縄文時代の貝塚が存在すると考えられる。現在、後背湿地は埋め立てられ、空地となっているが、下には手つかずで遺跡が残っているので、今後の家屋の建替え時には注意する必要がある。

以上の試掘トレンチ調査の結果、縄文時代遺跡の主要な範囲は、砂丘頂部を含んだ南側から砂丘北側、それに続く後背湿地の範囲、すなわちAトレンチを中心とした東西約100m、南北約70mの約7000㎡となり、散布地はさらに拡大し、東西約200m、南北は40～80mの約15000㎡になると考えられる。なお、上層に存在する古代遺跡は、場所によって遺存状態が異なるが砂丘全面に広がっている。

平面的な拡がりも概略が把握できたが、包含層の層位の再確認と、どの時期まで遡るかの確認のため、第1次調査区に隣接し、B、C、D、H-3区に相当する部分に2m×8mのトレンチを設定した。層位的には第1次調査成果を再確認し、さらに下位を掘り下げたが、湧水が激しく発掘を中断せざるを得なかった。しかし、出土した土器には前期前半の曾畑式土器が数片含まれており、当該期の遺物包含層が下位に存在することが推測できた。今後の問題点としておきたい。

2、各トレンチと層序

(1) Aトレンチの層序 (第9図)

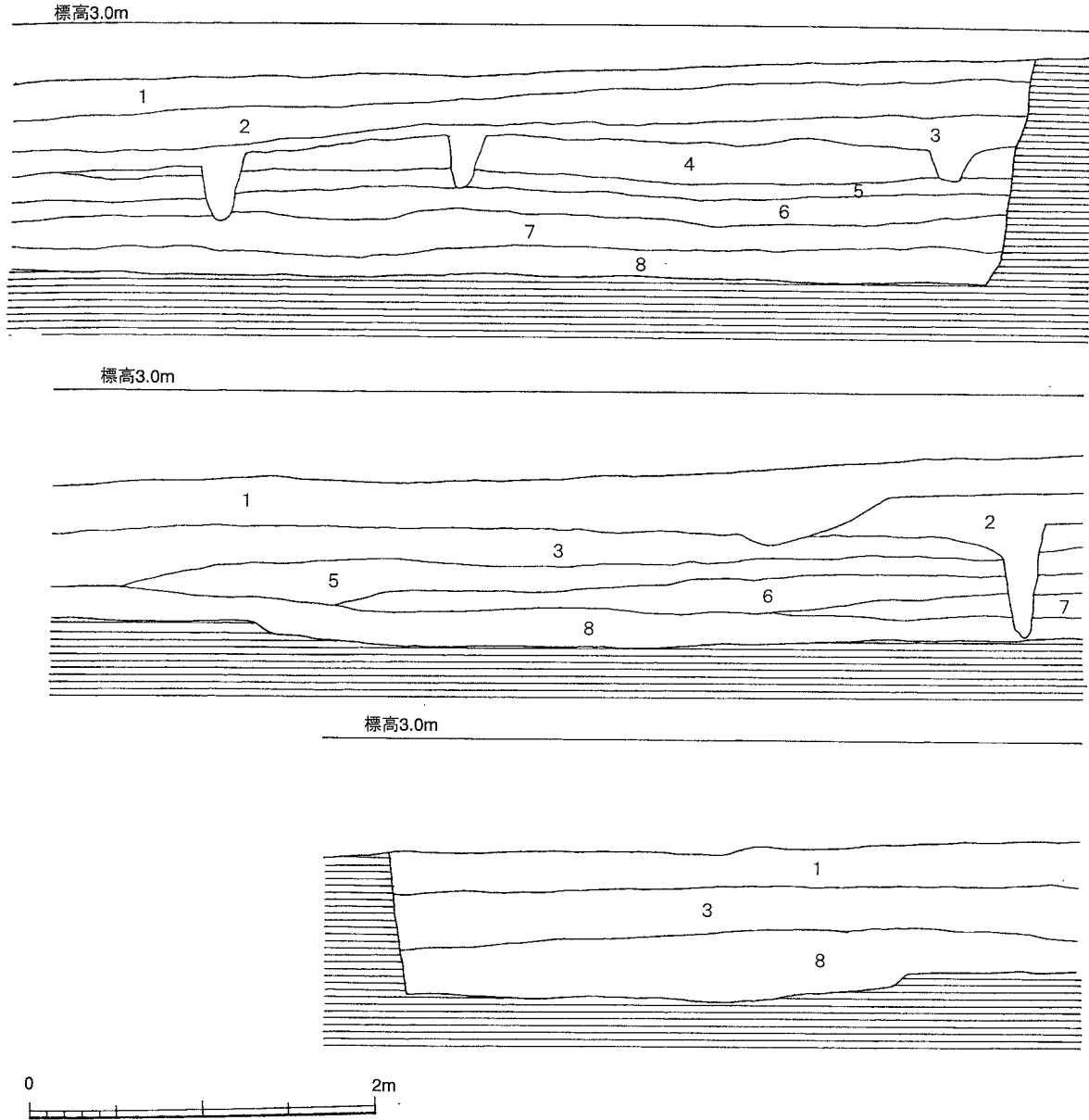
第9図に示した土層断面実測図はAトレンチの東側断面である。遺跡の立地する砂丘の中央部から後背地にかけて横断する断面図である。

第1層、表土層、厚さ約10～40cmの黒灰色砂質土層。畑の耕作土である。南から北に向かって層が厚くなる。これは標高が南側が高く北側に傾斜しているためである。第2層、この層以下が遺物包含層となっている。厚さ15～20cm、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。A-4トレンチの北端でなくなる。A-4トレンチ南端にはこの層の下面から掘り込まれた柱穴がある。柱穴は径約20cm、深さ66cmを測る。第3層、厚さ10～30cm、径5cm前後の小石を多量に含む黒褐色砂質土層である。トレンチ全てに広がっている。A-1区側(砂丘中央部)が薄く、A-8区側(砂丘後背地側)では徐々に厚くなり30cm前後となる。A-1～3区にはそれぞれ、この層の下面から掘り込まれた柱穴がある。柱穴はA-1区が径26cm、深さ18cm、A-2区が径20cm、深さ30cm、A-3区が径26cm、深さ40cmを測る。第4層、黄褐色砂層、径5cm前後の小石を若干含んでいる。厚さ10～20cm。A-1、2区が厚く、A-3区で薄くなり、A-3区北端で消える。この層は上下に分離できる。下層には小石が殆ど含まれず、より黄色の強い黄褐色砂層である。第5層、灰色粗砂層、厚さ10～20cm、砂丘中央部では厚さ10cm前後であるが、北側に向かって徐々に厚くなり、この層の終わるA-6区で最も厚くなる。第6層、径5～10cmの小石からなる礫層である。基本的にはこの層には遺物は包含されていない。厚さ10～15cmを測る。A-6区南端でこの層は終わる。第7層、黒灰色粗砂層、厚さ15～20cm、砂丘中央部が厚く、北側に向かって薄くなりA-4区北端で消える。第8層、径1～数cmの砂利を多量に含んだ黒灰色の砂利層である。全面に広がっている。

(2) B-2区、C-2区、D-2区北側土層断面 (第10図1)

第10図1は砂丘中央部のB・C・D-2区北側断面実測図で、砂丘の縦断面にあたる。

第1層、表土層、厚さ約10～20cmの黒灰色砂質土層。畑の耕作土である。西から東に向かって層が



第9図 Aトレンチ東壁土層断面図

薄くなる。標高がほとんど同じであり、層の厚さの違いは現耕作土と休耕の耕作土の差によるものであろう。第2層、この層以下が遺物包含層となっている。厚さ20~30cm、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大~拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。B-2区で20cm、D-2区で30cmと東に厚くなっている。第3層、厚さ5~20cm、径5cm前後の小石を多量に含む黒褐色砂質土層である。トレンチ全域に広がっている。東に向かって層が薄くなる。第4層、黄褐色砂層、径5cm前後の小石を若干含んでいる。暑さ10~15cm。この層はAトレンチでは上下に分離できるが、ここではやや不明瞭である。ただし、出土土器にはAトレンチ同様に違いが認められる。第5層、灰色粗砂層、厚さ5~10cm。第6層、径5~10cmの小石からなる礫層である。基本的にはこの層には遺物は包含されていない。厚さ8~10cmを測る。第7層、黒灰色粗砂層、厚さ10~15cmを測る。この地区の土層は全ての層が水平に堆積していて、極めて安定している。この現象はAトレンチのA-1~3区と共通している。

(3) B~D・H-3区北側土層断面 (第10図2)

第10図2は砂丘中央部に近いB・C・D・H-2区北側断面実測図で、(2)の断面の2m北側の断

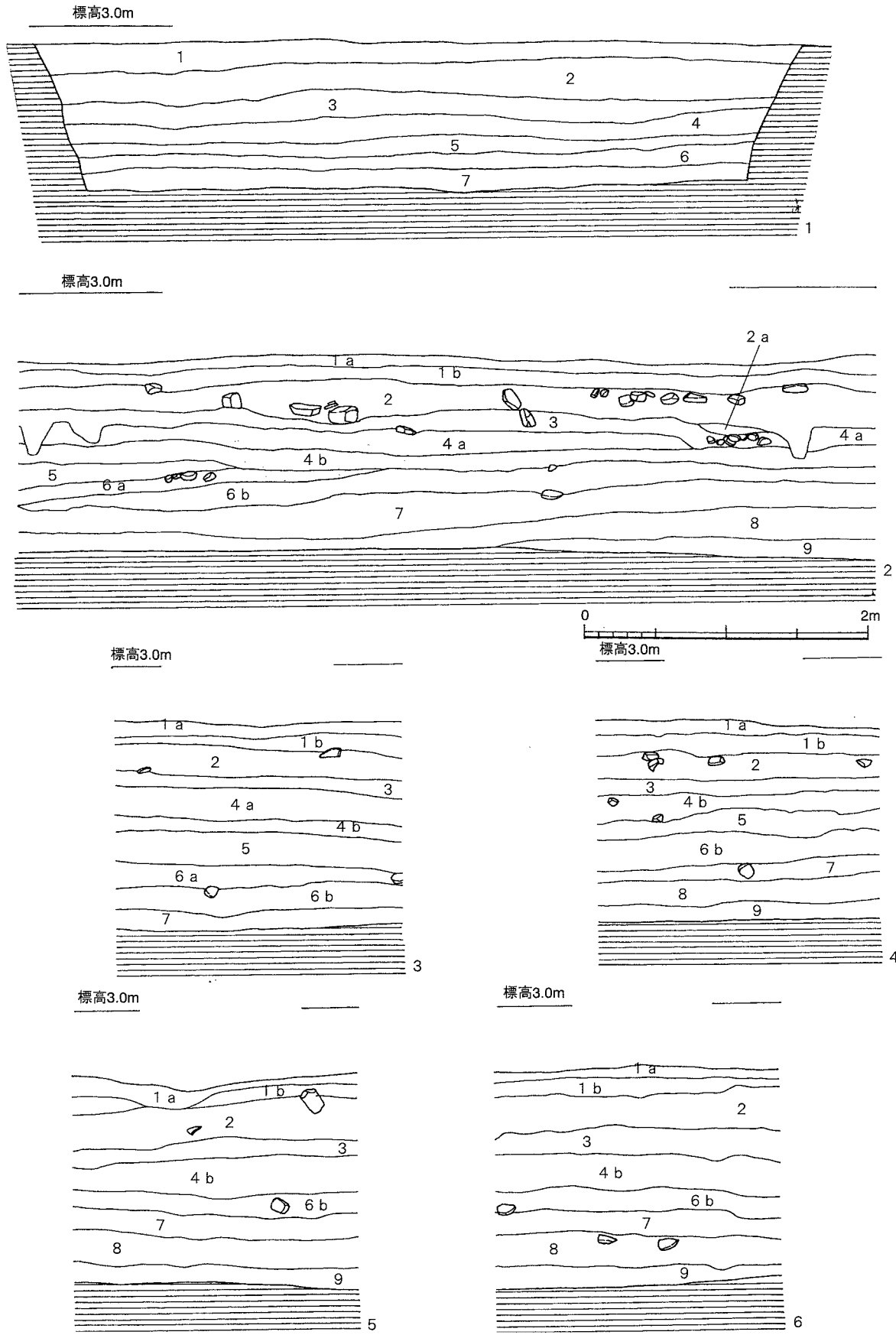
面である。砂丘中央部よりやや後背地に近い砂丘の縦断面にあたる。

第1 a層、表土層、厚さ約8～15cmの暗褐色砂質土層。耕作土である。ほとんど均一の厚さをもっている。標高がほとんど同じである。第1 b層、褐色砂質土層である。厚さ8～15cmを測る。径3mm程度の炭や赤色、黄土色の粒や砂粒を多く含み、硬くしまっている。表土層が2層に分離するのは、この地域が数10年前まで水田が作られていたためと考えられる。第2層、この層以下が遺物包含層となっている。厚さ20～30cm、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。小石、炭、赤色の粒子を含んでいる。粘性が強く、乾燥すると硬化する。層は西側から東側に徐々に厚さを増している。H-3区には下面から掘り込まれた柱穴がある。柱穴は径25cm、深さ20cmを測る。第2 a層、第2層と第3層の間にあるブロック層である。長さ50cm、厚さ10cm、レンズ状に堆積した砂質の褐色土層である。第3層、厚さ10～15cm、径5cm前後の小石を多量に含む黄褐色砂質土層である。部分的に炭も含まれている。2層に比較すると粘性は比較的弱い。トレンチ全域に広がっているが、東に向かって層がやや薄くなる。C-3区西端には下面から掘り込まれた柱穴がある。柱穴は西側が径22cm、深さ20cm、東側が径24cm、深さ12cmである。第4 a層、黄褐色砂層、径5cm前後の小石を若干含んでいる。厚さ10～20cm。この層はAトレンチでは上下に分離できるが、やや不明瞭であった。ここでは極めて明瞭に分離することができる。よって、この層はAトレンチの上層に当たる。西から東にかけて厚さを徐々に減じ、H-3区中央部で消える。第4 b層は黄色砂質土層、厚さ10～30cm、層は西から東に層の厚さを徐々に増す。第5層、褐色粗砂層、厚さ10～20cm。西側から東側に徐々に厚さを減じ、C-3区東端で層は消える。第6 a層、径5～10cmの小石からなる礫層である。基本的にはこの層には遺物は包含されていない。厚さ10～20cmを測る。第6 b層、褐色砂礫層、径5cm前後の小石を多量に含む。厚さ10～20cm。C-3区西端から始まる層である。第7層、青灰色砂質土層、厚さ15～30cm、第8層、やや明るい青灰色粗砂層、厚さ15～20cmを測る。粗砂がやや粗くなり、径20cmの礫を含む。第9層、青灰色混砂礫層、砂粒は粗く、径20cmの礫を多く含んでいる。厚さ20cm以上である。D-3区の一部からH-3区にのみ見られる層位であるが、他の調査区でも深堀をすれば存在すると考えられる。この地区の土層も水平堆積に近く、極めて安定しているが、東側から新たに始まる土層堆積が見られ、この砂丘堆積が東側を基盤に西側にのびていったことがわかる。

(4) B-3区西側土層断面 (第10図3)

第10図3はB-3区西側の土層断面実測図である。ここの土層断面は基本的には(3)の土層断面と同様である。

第1 a層、表土層、厚さ約8～15cmの暗褐色砂質土層。耕作土である。第1 b層、褐色砂質土層である。厚さ8～15cmを測る。径3mm程度の炭、や赤色、黄土色の粒や砂粒を多く含み、硬くしまっている。表土層が2層に分離するのは、前述したとおりである。第2層、厚さ20cm前後、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。小石、炭、赤色の粒子を含んでいる。粘性が強く、乾燥すると硬化する。層は南側から北側に傾斜している。第3層、厚さ10～15cm、径5cm前後の小石を多量に含む黄褐色砂質土層である。部分的に炭も含まれている。第4 a層、黄褐色砂層、径5cm前後の小石を若干含んでいる。厚さ20cm前後。この層はAトレンチでは上下に分離できるが、やや不明瞭であった。ここでは極めて明瞭に分離することができる。よって、この層はAトレンチ上層に当たる。南から北に傾斜している。第4 b層は黄色砂質土層、厚さ10～15cm、層は南から北に傾斜している。第5層、褐色粗砂層、厚さ22cm前後。他の層と同様に南から北に傾斜している。第6 a層、径5～10cmの小石からなる礫層である。基本的にはこの層には遺物は包含されていない。厚さ10～20cmを測る。第6 b層はこの区には存在しない。第7層、青灰色砂質土層、厚さ15～20cm。



第10図 B~Hトレンチ土層断面図

第8層、やや明るい青灰色粗砂層、厚さ15～20cmを測る。粗砂がやや粗くなり、径20cmの礫を含む。

(5) H-3区東側土層断面 (第10図4)

第10図4に示したのはH-3区東側の土層断面実測図である。基本的な層位は第10図2に示したH-3区北側断面と同じである。

第1 a層、表土層、厚さ約5～15cmの暗褐色砂質土層。耕作土である。第1 b層、褐色砂質土層である。厚さ8～13cmを測る。径3mm程度の炭や赤色、黄土色の粒や砂粒を多く含み、硬くしまっている。表土層が2層に分離するのは、前述したとおりである。第2層、厚さ20～30cm、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。小石、炭、赤色の粒子を含んでいる。粘性が強く、乾燥すると硬化する。層はほぼ水平に堆積している。第3層、厚さ10～14cm、径5cm前後の小石を多量に含む黄褐色砂質土層である。部分的に炭も含まれている。2層に比較すると粘性は比較的弱い。トレンチ全域に広がっているが、南から北に向かって傾斜している。第4 a層は存在しない。第4 b層は黄色砂質土層、厚さ15～30cm、層は北から南に層の厚さを徐々に増す。第6 a層はこの区には存在しない。第6 b層、褐色砂礫層、径5cm前後の小石を多量に含む。厚さ10～20cm。C-3区西端から始まる層である。層は北から南にわずかに傾斜し、徐々に厚さを増している。第7層、青灰色砂質土層、厚さ16～18cm、層は上層同様に北から南に傾斜している。第8層、やや明るい青灰色粗砂層、厚さ20～25cmを測る。粗砂がやや粗くなり、径20cmの礫を含む。第9層、青灰色混砂礫層、砂粒は粗く、径20cmの礫を多く含んでいる。厚さ20cm以上である。この層も北から南に傾斜している。

(6) H-3区南側土層断面 (第10図5)

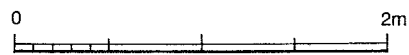
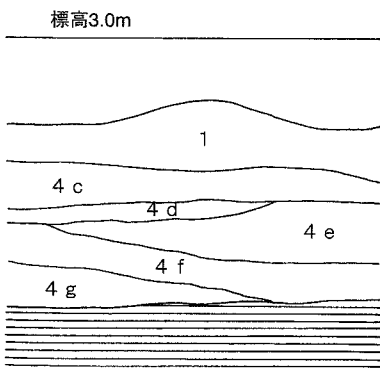
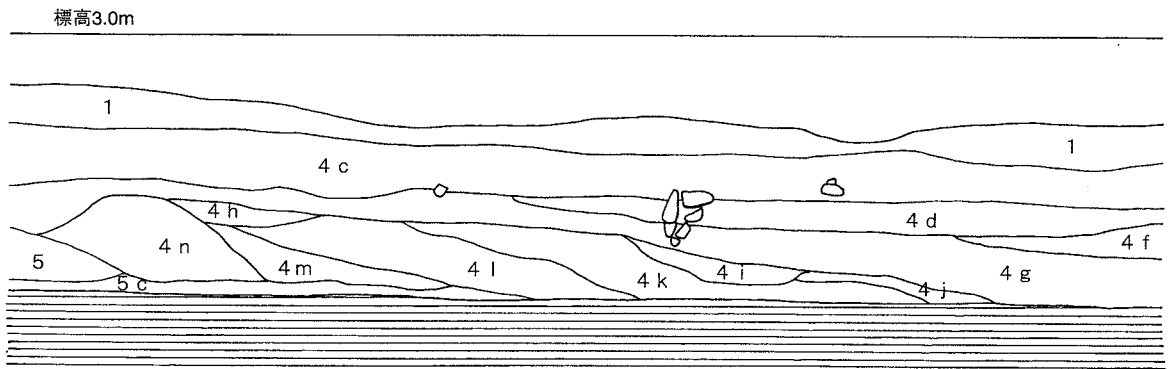
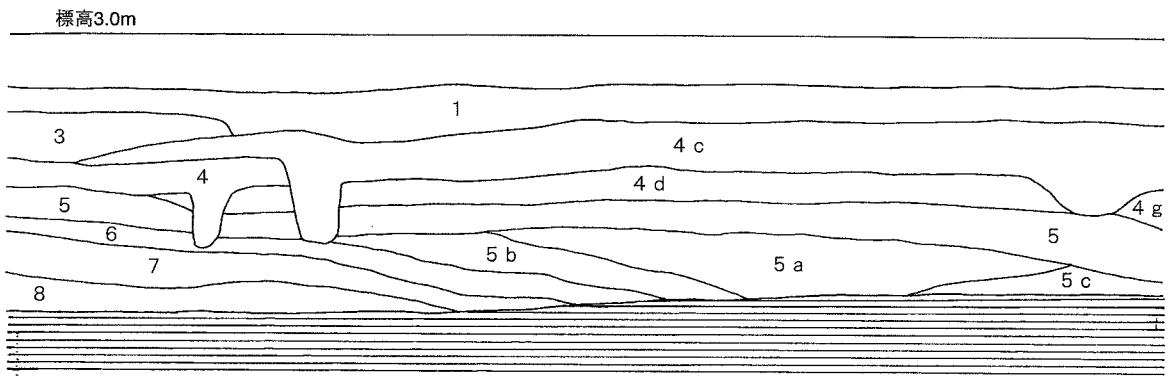
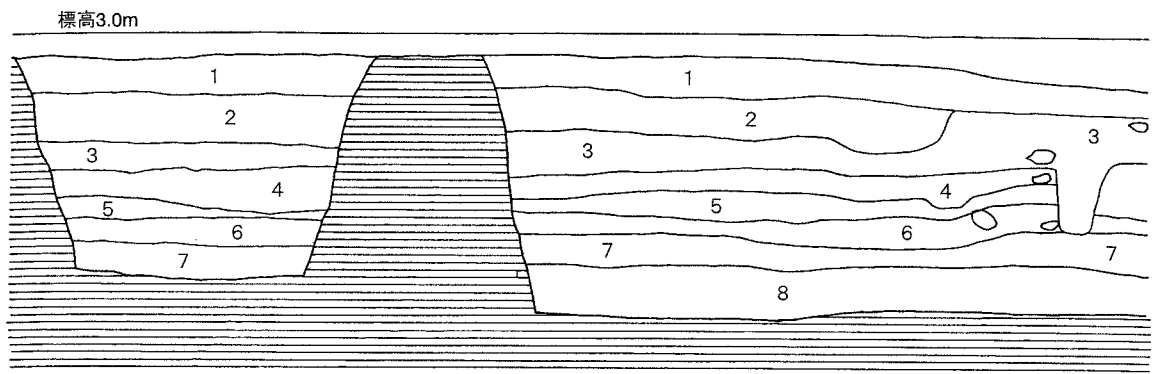
第10図5に示したのはH-3区東側の土層断面実測図である。基本的な層位は第10図4に示したH-3区東側断面と同じである。

第1 a層、表土層、厚さ約4～10cmの暗褐色砂質土層。耕作土である。第1 b層、褐色砂質土層である。厚さ8～10cmを測る。径3mm程度の炭や赤色、黄土色の粒や砂粒を多く含み、硬くしまっている。表土層が2層に分離するのは、前述したとおりである。第2層、厚さ20～32cm、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。小石、炭、赤色の粒子を含んでいる。粘性が強く、乾燥すると硬化する。層はほぼ水平に堆積している。第3層、厚さ12～24cm、径5cm前後の小石を多量に含む黄褐色砂質土層である。部分的に炭も含まれている。2層に比較すると粘性は比較的弱い。トレンチ全域に広がっているが、ほぼ水平に堆積している。第4 a層は存在しない。第4 b層は黄色砂質土層、厚さ24～30cm、層はほぼ一定の厚さで水平に堆積している。第6 a層はこの区には存在しない。第6 b層、褐色砂礫層、径5cm前後の小石を多量に含む。厚さ14～18cm。ほぼ水平に堆積している。第7層、青灰色砂質土層、厚さ14～18cm、層はほぼ水平に堆積している。第8層、やや明るい青灰色粗砂層、厚さ20～25cmを測る。粗砂がやや粗くなり、径20cmの礫を含む。第9層、青灰色混砂礫層、砂粒は粗く、径20cmの礫を多く含んでいる。厚さ20cm以上である。この層も北から南に傾斜している。

(7) B・A-1区、E-(1)・(2)・1～6区南側土層断面 (第11図)

第11図に示した土層断面実測図はB-1区、A-1区、E-(1)・(2)区、E-1～6区の南側断面である。遺跡の立地する砂丘の中央部を縦断する断面図である。

第1層、表土層、厚さ約5～40cmの黒灰色砂質土層。畑の耕作土である。第2層、厚さ15～30cm、黒褐色の砂質土層であるが、人頭大～拳大の円礫を多量に含んだ礫層となっている。E-(2)区の東から50cmのところまで終わっている。第3層、厚さ10～30cm、径5cm前後の小石を多量に含む黒褐色砂質土層である。この層も第2層同様に西側には大きく延びて行かず、E-(1)区の東から80

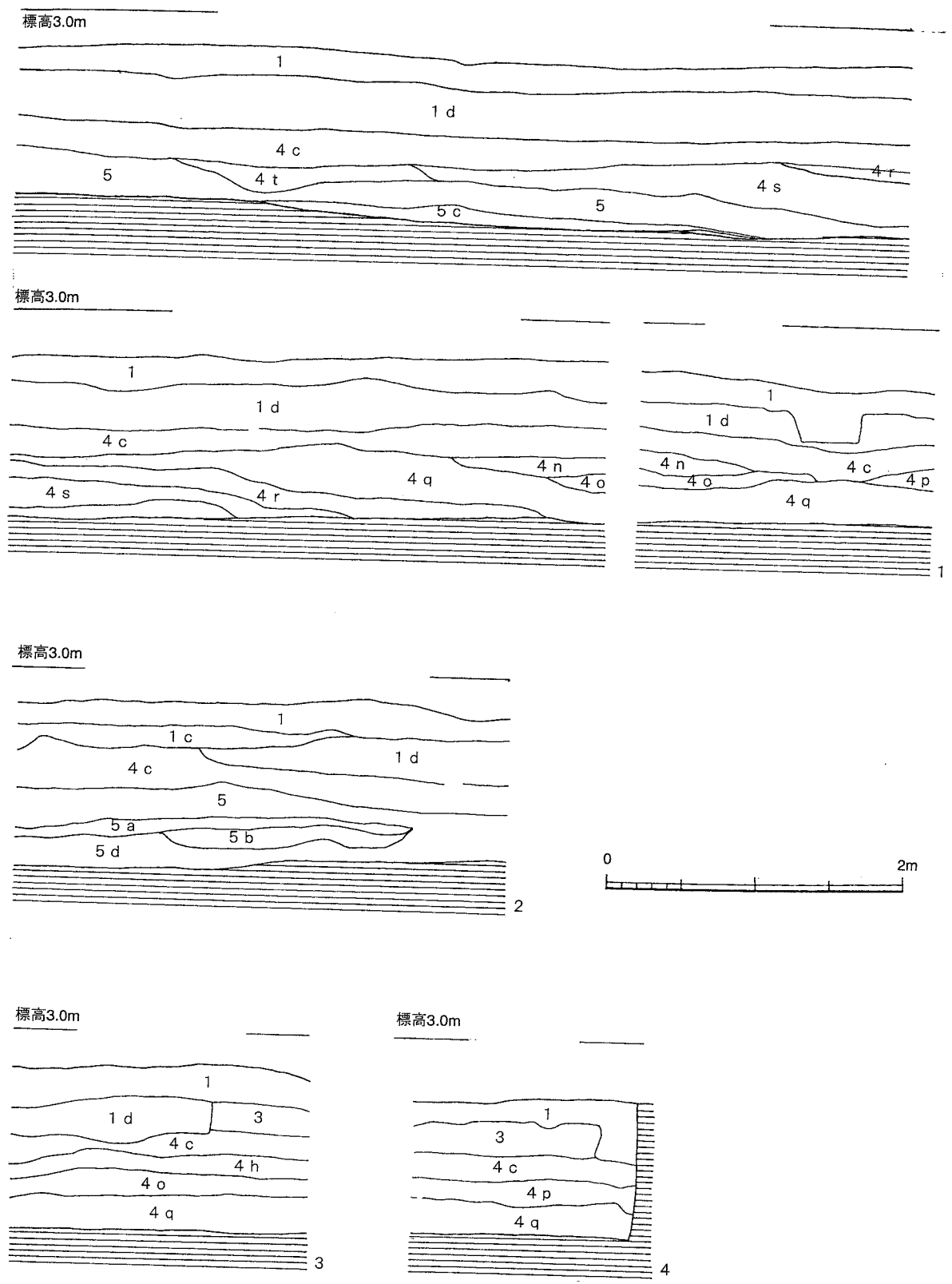


第11図 A・B・Eトレンチ南壁土層断面図

cmのところまで終わっている。E-(-2)区ではこの層の下面から掘り込まれた柱穴がある。柱穴は径30cm、深さ35cm。第4層、黄褐色砂層、径5cm前後の小石を若干含んでいる。厚さ10~20cm。B-1区が厚く、A-1区で薄くなり、E-(-2)・(-1)区は約15cmの厚さで広がるが、E-(-1)区の中央部で層が消える。この層は上下に分離できる。上層を4a層、下層を4b層とするが、この土層断面では分離できない。下層には小石が殆ど含まれず、より黄色の強い黄褐色砂層である。この地区では第3層と第4層の間に新たな層が加わり、出土土器を加味して4c層として説明を加える。第4c層はE-(-1)区東端より始まり、西側の全域に広がっている。厚さ10~30cm。この層の下面から掘り込まれたピットがE-(-1)区とE-2区にある。大きさはそれぞれ径30cm、深さ40cmと径60cm、深さ20cmである。第5層、灰色粗砂層、厚さ10~34cm、西側に向かって徐々に厚くなる。E-3区東より40cmのところまで消える。第4層と第5層の間に新たに5枚の層が加わる。第4d層はE-4区からE-6区にわたって堆積する層である。厚さ10~16cm、径3~5cmの小石を含んだ暗褐色粘質土層。第4e層はE-6区の東端20cmから始まり、西側に堆積する。厚さ30cm前後、小礫を多量に含んだ茶褐色粘質砂層である。第4f層はE-5区東より90cmから始まり、西側に傾斜をもって堆積している。径5~10cmの小礫を多量に含んだ黄褐色砂層である。第4g層はE-(-1)区の東より30cmから始まり、E-3区まではほぼ水平に堆積するが、E-4区から西に傾斜をもって堆積している。径5~10cmの小礫を含んだ暗茶褐色粘質砂層、厚さ18~30cm。第4h層はE-3区にブロック状に堆積する層である。長さ80cm、厚さ12cm。径5~10cmの小礫が集中した暗茶褐色粘質砂層である。第4i層もE-4区にブロック状に堆積した層である。長さ100cm、厚さ12cm。径3~5cmの小礫を含み、鉄分が集中した黄褐色砂層である。第4j層はE-5区東端から始まる層で、4i層の西端第に接している。西に傾斜した層でE-5区中央部で、トレンチの床面に潜り込む。厚さ8cm前後、砂利を多く含んだ黄褐色砂層である。第4k層はE-3区西端に始まり、E-5区東端より80cmのところまでトレンチの床に潜り込む。厚さ10~30cm、礫をほとんど含んでいない暗茶褐色粘質砂層である。第4l層はE-3区中央部から始まり、E-4区中央部で床面に潜り込む。西側に傾斜したようで、厚さ20~30cm。径5cm前後の小礫を含んでいる。暗茶褐色粘質砂層である。第4m層はE-3区東より80cmのところから始まり、E-4区東より20cmのところまで終わっている。厚さ10~18cm、径15cmの礫を含んだ暗茶褐色粘質砂層である。第4n層はE-2区西端より始まりE-3区中央より20cmのところまで終わるレンズ状の堆積である。厚さ45cm。粘質が強く、礫の少ない茶褐色粘質砂層である。第6層、径5~10cmの小石からなる礫層である。基本的にはこの層には遺物は包含されていない。厚さ10~15cmを測る。A-6区南端でこの層は終わる。第5層と第6層の間にも新たな層が加わっている。第5a層はE-1区東より20cmから始まり、E-2区中央部より西に30cmのところまで終わっている。レンズ状堆積の土層である。厚さ10~30cm以上。拳大の礫、砂利を多く含んだ淡黄褐色混土礫層。第5b層はE-(-1区)中央部より西側に約30cmから始まりE-1区東より150cmで床面に潜り込む。厚さ12~20cm、小礫を多数混入した黄褐色粗砂層で、部分的に粘土のブロックがある。第5c層はE-1区東より140cmから始まり、E-4区東より60cmで床面に潜り込む。第7層、黒灰色粗砂層、厚さ15~20cm、砂丘中央部が厚く、西側に向かって薄くなりE-1区東より約70cmでトレンチの床面に潜り込む。砂丘中央部ではほぼ水平に堆積しているが、E-(-1)区から西に向かって傾斜している。第8層、径1~数cmの砂利を多量に含んだ黒灰色の砂利層である。全面に広がっていると考えられるが、E-1区東端で西に傾斜しながら床に潜り込む。

(8) G-1~5区、F-6区南側土層断面 (第12図1)

第12図1に示した土層断面実測図はG-1区からG-5区およびF-6区の南側断面である。砂丘の中央部の東西の断面図である。ここでは他のトレンチで遺存していなかった中世の包含層が残って



第12図 Gトレンチ南壁土層断面図

いる。

第1層、表土層、厚さ約16~26cmの黒灰色砂質土層。畑の耕作土である。表土下に新たに中世の土層が存在する。第1d層、厚さ34~40cm、中世に掘り込まれた攪乱あるいは遺構と考えられる穴の埋土である。径2~5mmの粗砂を多量に含んだ暗茶褐色粗砂層。である。この層はG-5区西壁で立ち上がりが見られる。G-6区西壁の一部、F-6区南壁には第3層が残っている。第4c層、西側の全域に広がっている。厚さ20~25cm。径10~15cmの礫を多量に含んだ黒褐色粘質砂層である。第4n層はG-5区の中央部からF-6区の東から80cmのところまでレンズ状に堆積する層である。径2~5cmの小石を含んだ明褐色シルト質土層である。厚さ15cm前後。第4o層はG-5区東より160cmのところから始まりF-6区の東より120cmのところ出までレンズ状に堆積する層である。厚さ18cm前後、礫をほとんど含まない黄褐色砂質土である。第4p層はF-6区東より150cmのところから始まり、厚さ15cm。第4o層と同じであり同一層と考えられる。第4q層はG-3区西端部から始まり、西側全域に広がっている。厚さ10~35cm、径1~2cmの小石を多く含んだ黄色砂質土である。第4r層はG-3区中央部から始まり、G-5区東より160cmのところまで床に潜り込む。径3~5cmの小石を少量含んだ明黄褐色混礫砂層である。第4s層はG-2区の東より60cmのところより始まり、G-5区東より30cmのところまで床に潜り込む。厚さ10~30cm、黄灰色砂質土層。第4t層はG-1区中央部より始まり、G-2区東より80cmのところまで終わるレンズ状堆積の層である。厚さ10~15cm、径3cmの小石を含んだ暗黄灰色砂質土層である。第5層、暗黄灰色粗砂層、径2~15cmの様々な大きさの礫を多量に混入している。厚さ10~25cm、西側に向かって傾斜している。G-4区東より150cmのところまで床に潜り込む。第5d層はG-1区東より170cmのところから始まりG-3区東より100cmのところまで終わる層である。厚さ10cm、暗黄褐色粘質粗砂層である。

(9) F・G-1区東側土層断面 (第12図2)

第12図2に示した土層断面実測図はF-1区、G-1区の東壁の断面である。砂丘中央部の横断面である。基本的な土層は上に示した土層と大きな違いはない。新たに加わる層のみを説明する。

第1c層、中世の包含層で、Hトレンチの南端から始まり、G-1区の北より95cmのところまで終わっている。レンズ状に堆積し、厚さは14cm前後、茶褐色砂質土層である。第5a層、G-1区北より140cmのところまで終わっている。厚さ10cm、小礫を多数混入した淡黄褐色混土礫層である。第5d層はF-1区南より30cmのところから始まり、G-1区北より135cmのところまで終わり、レンズ状の堆積をしている。厚さ10cm前後、黄褐色砂層である。第6層、径5~10cmの小石を多量に含んだ暗黄褐色混砂礫層である。

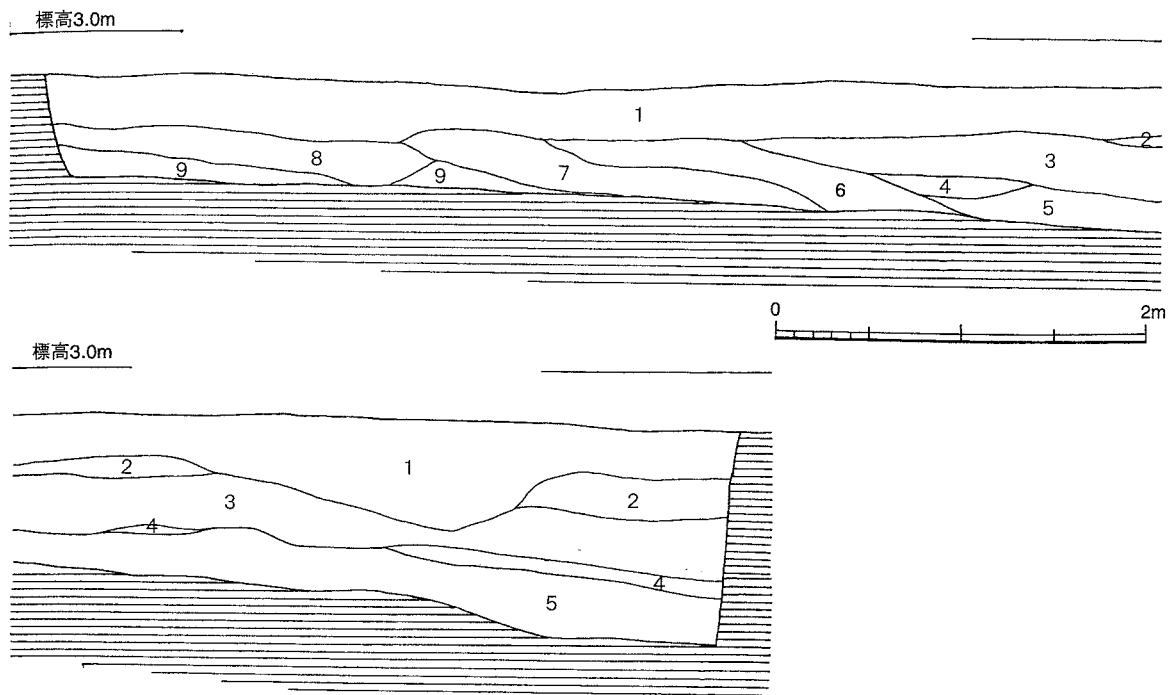
(10) G-5区・F-6区西側土層断面 (第12図3、4)

第12図3に示した土層断面実測図はG-5区西壁の断面である。基本的にはF-6区の東側の土層断面と同一であるので説明は省略する。

(11) 南トレンチ東側土層断面 (第13図)

砂丘の前面の状態を見るために設定したトレンチの東側の土層断面実測図を第13図に示した。土層はこれまでのトレンチの土層とは対比していない。

第1層、表土層、畑の耕作土である。厚さ20~60cm、トレンチ南側にやや深い掘り込みがある。粘性のない褐色土層である。第2層はトレンチ北端から5.7mから始まり、7.1mで終わるレンズ状に堆積した土層である。また、北端から8.7mの地点から始まり、トレンチ外に延びて行く。元来は連続した層が攪乱によって分断されたものであろう。厚さ10~20cm、南側に順次厚くなっている。礫を含んだ暗褐色土層。硬くしまっている。第3層、暗褐色の砂礫層、砂がやや多い。トレンチ北端から3.7mから始まり、南側に延びて行く。厚さは15~30cm、南側に傾斜し、順次厚さを増す。第4層、明るい褐



第13図 南トレンチ東壁土層断面図

色砂層。第5層の上に部分的にレンズ状に堆積している。最初のレンズ状堆積は北端から4.4mから始まり、長さ90cm厚さ10cm。2番目は北端から6.5mから始まり、長さ50cm、厚さ5cm。3番目は北端から8.0mから始まり、南側に延びて行く。長さ1.8m以上、厚さ10cm前後である。第5層、やや大きめの礫を含んだ黒色砂礫層。北端から4.7mのところから始まり南側にのびている。南側に傾斜し、順次厚さを増す。厚さ5~30cm。第6層、小礫をやや多量に混入した暗褐色砂層。北端から3.7mのところから始まり、5mのところまで床に潜り込んでいる。厚さ20cm。層は南に傾斜している。第7層、小礫を混入した軟らかい褐色土層。北端から1.9mのところから始まり、4.2mで床に潜り込む。第8層、北端から始まり、2.1mで終わる土層、ほぼ水平に堆積している。小礫をわずかに混入した暗褐色土層、厚さ10~20cm。第9層、やや明るい褐色土層。北端から延びてきて2.8mのところまで床に潜り込む。

以上のように、砂丘前面の層位は砂層、砂礫層からなり、全体に南に傾斜していて、砂丘形成のあり方を示している。遺物は出土していない。

第6章 遺構と出土遺物

確認した遺構は1次、2次調査を通して極めて少ない。1次調査では柱穴と考えられるピット数箇所と黒曜石の原石を集積している遺構が確認されたに過ぎず、2次調査では柱穴と考えられるピット数箇所と埋葬遺構と考えられる集石を伴う土坑と甕棺墓の計6基が確認されている。

1、黒曜石原石集積遺構

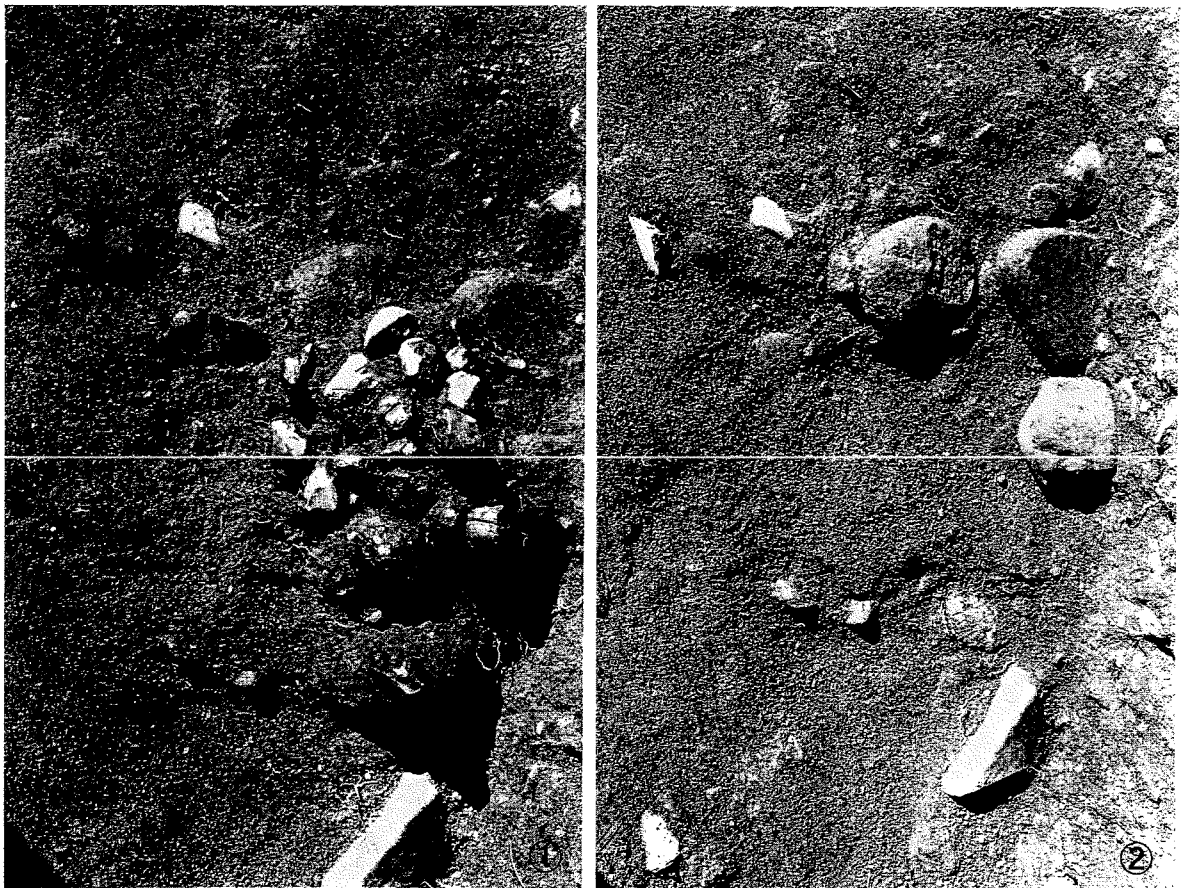
(1) 遺構 (第14図)

遺構として確認したものは極めて少ないが、黒曜石の原石を集積している遺構が第1次調査のA-2区で発見されている。径約50cmの浅い皿状の土坑の中に黒曜石の原石40個と剥片2個を積み上げている。土坑の北側の縁には径10cmの円礫を沿えている。実測図が行方不明のため詳細は明らかでないが、拳大の大き目の原石を下に、上に行くに従い径数cmの小さい原石が積まれている。また、原石から剥ぎ取られた剥片も2片一緒に積まれている。

(2) 遺物 (第15～19図)

土坑内に集積された黒曜石は大小さまざまな原石と石核に利用されているものと剥片を含んでいる。図にはさらに、周辺から出土した剥片も含めている。原石の法量等については第1表に示しているので、主要なものについて簡単に説明を加えておく。

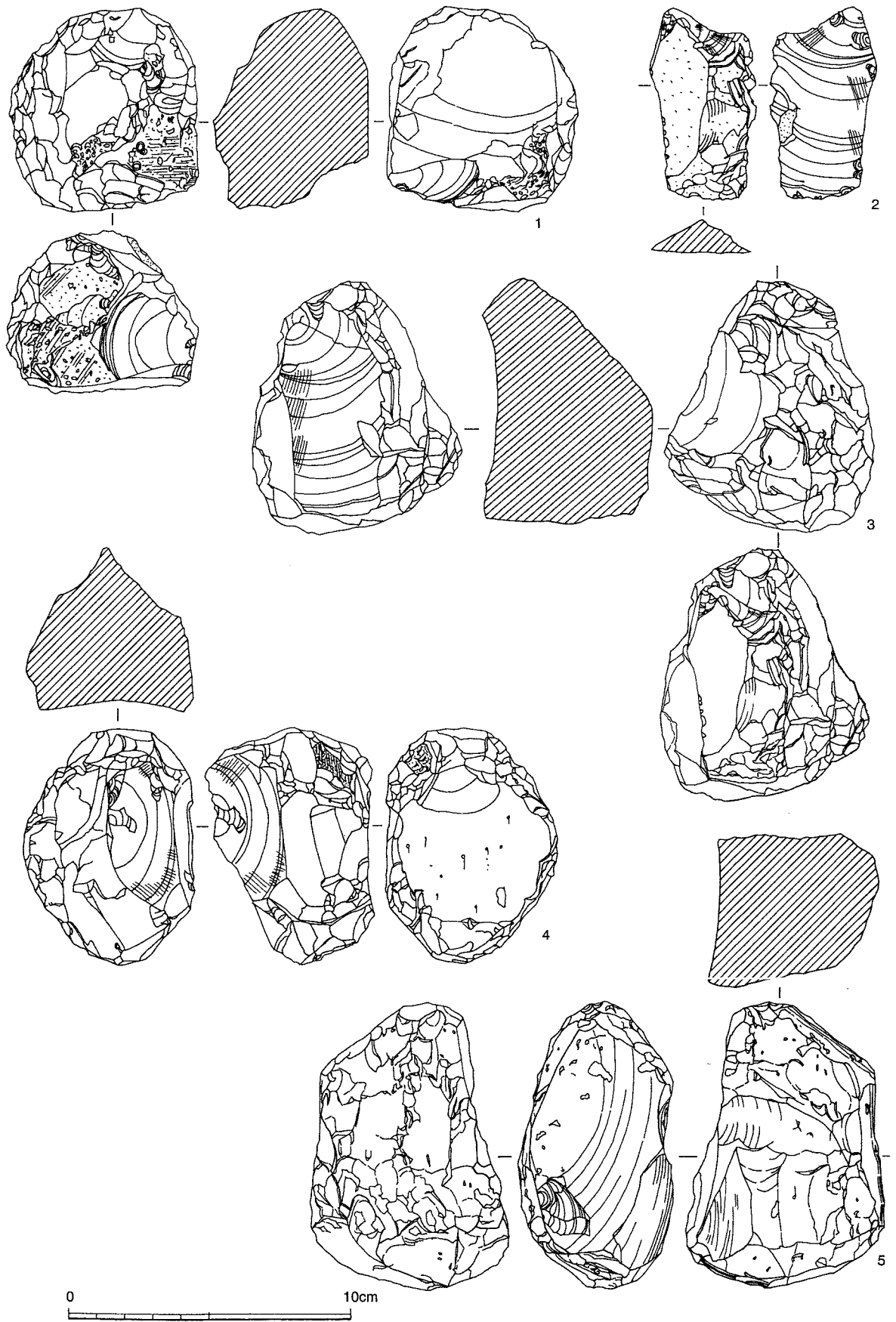
第15図1、3～8は拳大の黒曜石原石である。いずれにも品質を確認するための剥離が加えられて



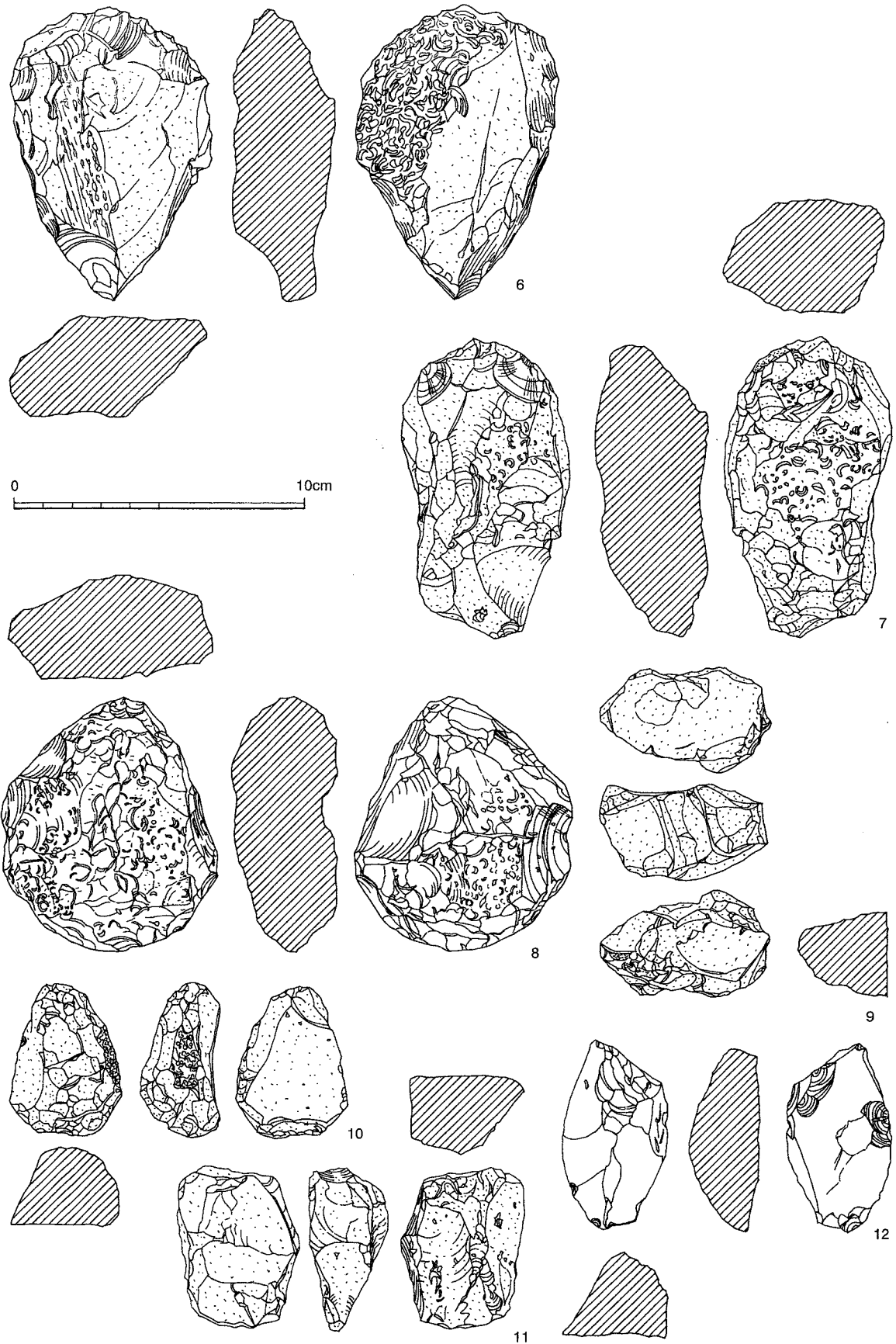
第14図 黒曜石原石の出土状況 ①原石集積状況 ②原石除去後

第1表 黒曜石集石遺構・黒曜石計測表

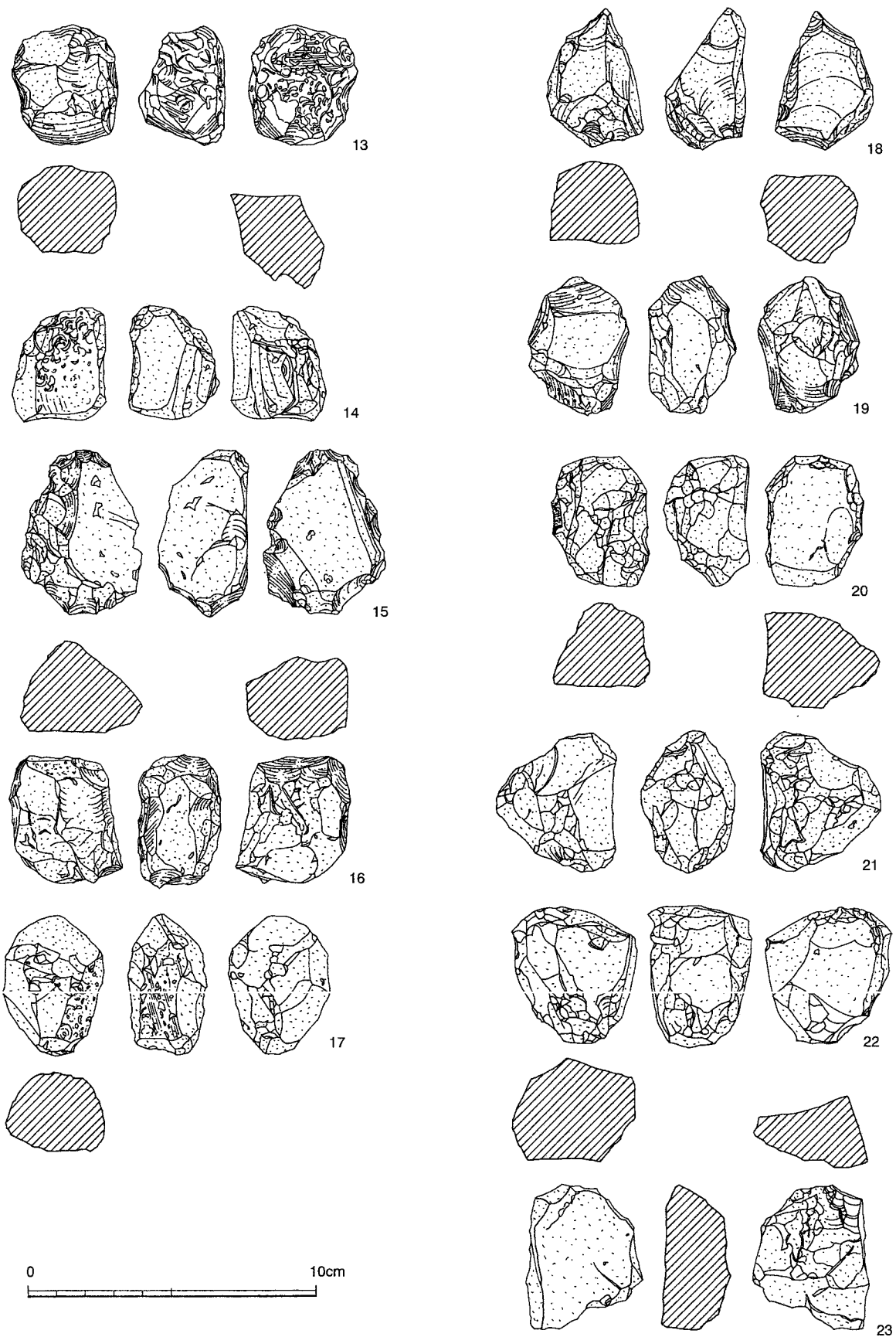
No.	石種	剥離面	重量(g)	備考
1	原石(黒曜石)	(大)1	380.0	品質確認の剥離
2	剥片(黒曜石)		26.0	3の石核と接合
3	原石(黒曜石)	(大)1	382.0	2の剥片と接合、品質確認の剥離
4	原石(黒曜石)	(大)1	290.0	品質確認の剥離
5	原石(黒曜石)	(小)1、(中)1	410.0	品質確認の剥離
6	原石(黒曜石)	(小)1、(大)1	242.0	品質確認の剥離
7	原石(黒曜石)	(小)3、(中)1	247.0	品質確認の剥離
8	原石(黒曜石)	(中)1	245.0	品質確認の剥離
9	原石(黒曜石)	(小)2	70.0	
10	原石(黒曜石)	(小)4	54.0	
11	原石(黒曜石)		64.0	
12	原石(黒曜石)	(小)6	59.0	
13	原石(黒曜石)	(小)2、(中)2	53.0	
14	原石(黒曜石)		63.5	
15	原石(黒曜石)		86.0	
16	原石(黒曜石)		50.0	
17	原石(黒曜石)	(小)1、(中)1	63.0	
18	原石(黒曜石)		61.0	
19	原石(黒曜石)	(小)2	52.0	
20	原石(黒曜石)	(小)1	71.0	
21	原石(黒曜石)	(小)2	52.0	
22	原石(黒曜石)	(小)1	46.0	
23	原石(黒曜石)	(小)2	44.0	
24	原石(黒曜石)		59.0	
25	原石(黒曜石)		49.0	
26	原石(黒曜石)		43.5	
27	原石(黒曜石・石核)	(小)1	34.9	
28	原石(黒曜石)	(小)3	53.5	
29	原石(黒曜石)	(小)2	49.0	
30	原石(黒曜石)	(小)2	37.0	
31	原石(黒曜石)	(小)4、(中)4	39.5	
32	原石(黒曜石)	(小)1	52.0	
33	原石(黒曜石)	(小)2	47.0	
34	原石(黒曜石)	(小)2	41.0	
35	原石(黒曜石)	(小)5	42.5	
36	原石(黒曜石)		42.0	
37	原石(黒曜石)		34.5	
38	原石(黒曜石)		24.5	
39	原石(黒曜石)	(小)2、(大)4	32.0	
40	原石(黒曜石)	(小)6	24.0	
41	剥片(黒曜石)	(小)5	10.0	
42	原石(黒曜石)	(小)2、(大)1	9.5	使用痕あり
計			94.985	



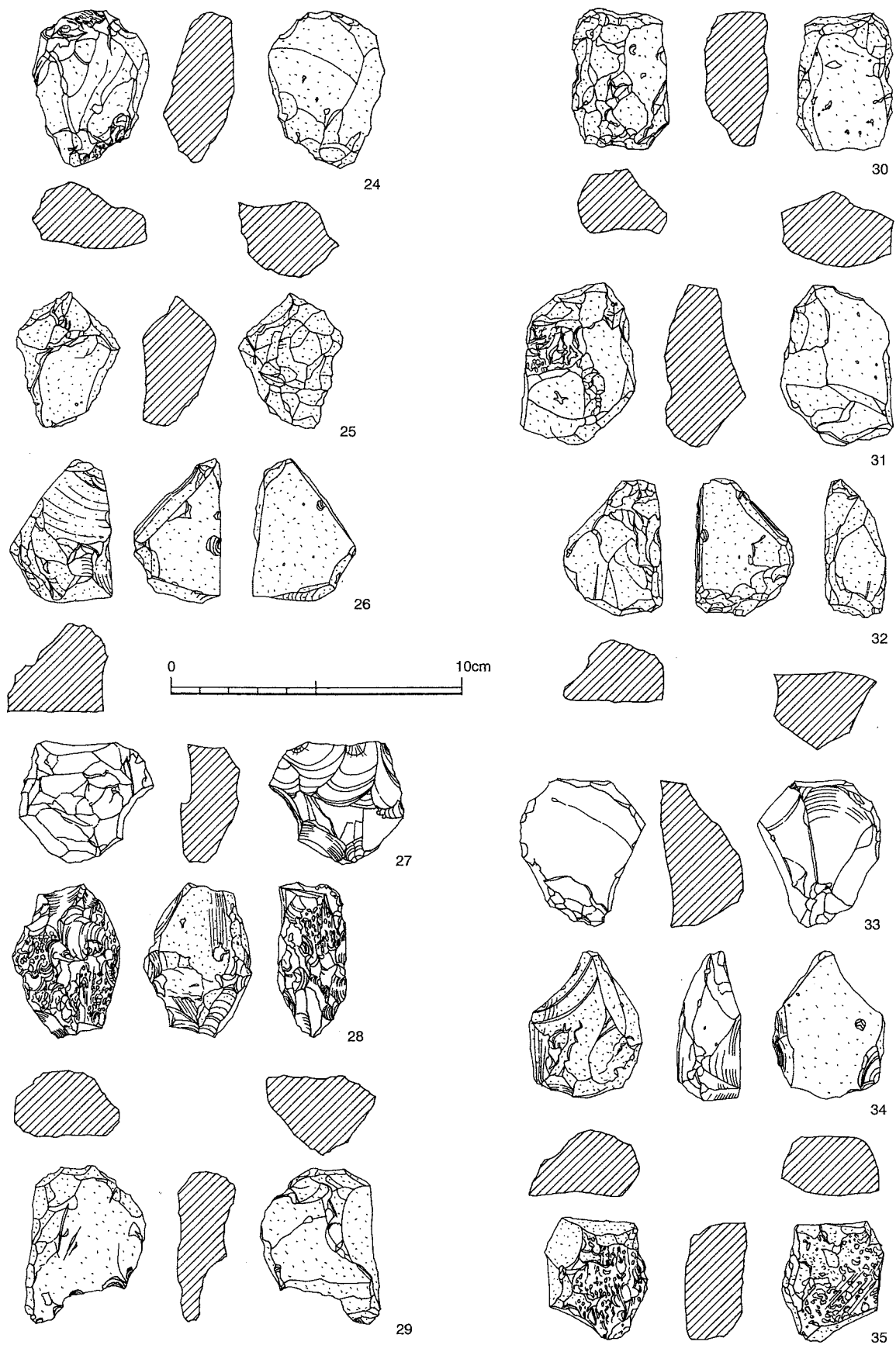
第15图 黑曜石原石实测图 I



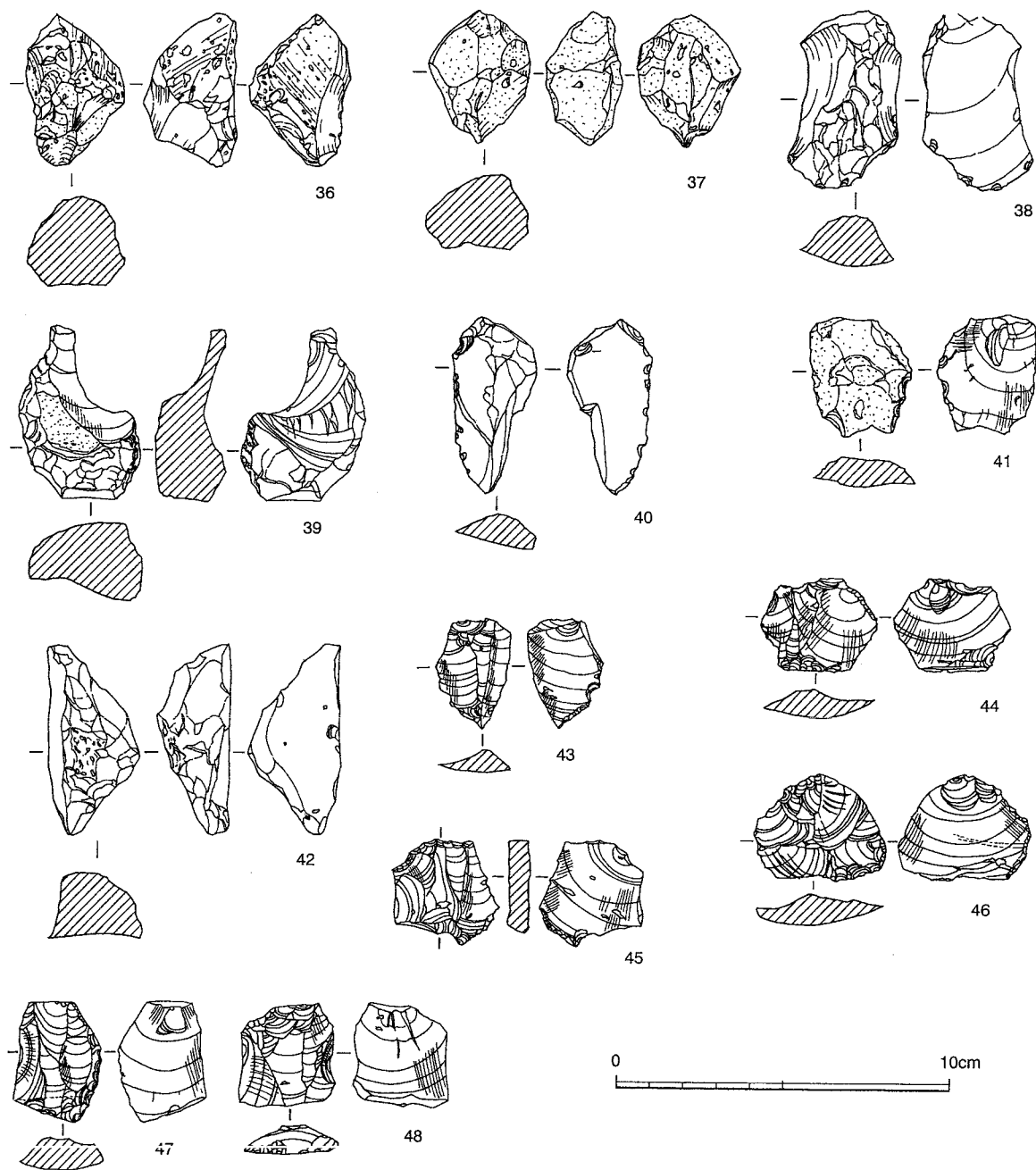
第16图 黑曜石原石实测图 II



第17图 黑曜石原石实测图Ⅲ



第18図 黒曜石原石実測図IV



第19図 黒曜石原石実測図 V

いる。2の剥片は3の原石から剥ぎ取られたもので、3の剥離面と接合できる。9～26、28～42は径数cmの黒曜石原石である。これらの原石から製作できる石器は石鏃のような小型の石器に限られる。27は石核として使用されている。片面に上を打点とした剥離面が4面存在するが、いずれもステップして剥離は全体に及んでいない。以上に示した黒曜石は灰色の強い黒色であり、長崎県佐世保周辺に産する黒曜石と見られる。43～48はいずれも加工痕あるいは使用痕ある剥片である。43は剥片のエッジに小さな剥離を加えている。44は打点の相対するエッジに刃潰し状の剥離が加えられる。45は打点側とその反対のエッジに刃潰し状と小さな剥離を加えている。46は打点右側の側辺に使用痕が見られる。47は打点左側の側辺に小さな剥離が加えられている。48は打点と反対側のエッジに使用痕が見ら

れる。

以上から黒曜石原石の集積は石器製作のために集積されたもので、この周辺で石器製作が行われたことを、周辺に散布する剥片は物語っている。

2、埋葬遺構

(1) 埋葬遺構の分布 (第20図)

埋葬遺構と考えられるのは集石を伴う土坑、甕棺墓である。いずれも2次調査のF・G・Hトレンチに確認した。埋葬遺構の分布図は第20図に示した。分布の概略を示すと以下のようになる。

第1号集積土坑墓はH-1区南半中央部に位置している。第1号集石土坑墓の北西部に約2.4m離れたH-2区を中心に第2号、第3号、第4号集石土坑墓が存在するが、第2・3号墓がより北側に存在し、両者は接した状態にある。第2・3号墓はH-2区の北半、東に偏ったところに位置するが、一部トレンチの壁にかかっている。第4号墓はG-2・3区、H-2・3区にまたがって位置している。第2・3号墓と第4号墓は約60cm離れている。これらの墓の北西部には約4mはなれて第5・6号集石土坑墓と第1号甕棺墓(埋甕)が存在する。第5・6号墓はF-4区の北半西側に位置し、第1号甕棺墓は第5・6号墓と約80cm離れてF-5区の北半中央部に位置している。これらの埋葬遺構は分布的には2次調査区のF・G・Hトレンチの対角線上、すなわち、北西に一直線上に位置している。時期的には集石土坑墓が検出土層の関係から前期の後半に位置づけられ、甕棺墓は晩期に位置づけられるが、同時期の土器は数点小破片が存在するに過ぎず、上層に存在した包含層が削平されて失われた可能性がある。

(2) 埋葬遺構 (第21・22図)

①第1号集石土坑墓 (第21図1)

H-1区に検出した集石土坑墓である。墓標として石を集積した土坑墓である。集石の石材は包含層に含まれる円礫よりも大きいものを利用しているため、包含層の円礫とは容易に区別がつく。本例では30×25×10cmの石材2個と30×15×10cmの石材1個の径3個を集積している。石材は土坑の中心に向かってわずかに傾斜している。周辺にも3個の円礫があり、これらの石も集石の一部の可能性もある。土坑は集石を取り除いた時点で確認した。上部の集石は標石と考えることができる。土坑の平面形は44×37cmの不整楕円形、断面形は鉢形をなし底面は平らである。深さ21cmを測る。内部からは何も出土していない。上部の標石は土坑の陥没に伴い沈み込んだような状態を示している。

②第2・3号集石土坑墓 (第21図2)

G-2区北半部に検出した集石土坑墓である。一部がベルトにかかり全体を検出していない。墓標として石を集積した土坑墓であるが、石材は第1号墓程大きくはないが。集石の石材は包含層に含まれる円礫よりも大きいものを利用しているため、包含層の円礫とは容易に区別がつく。本例では20×15×10cmの石材を最大に10×10×7cm程度の石材約20個を使用して、70×50cmの長方形に集積している。これら集積の南側にさらに小さい石が集積されているが、これらの石は長方形の集石の上に積み上げられていた石が落ちた可能性もある。土坑は集石を取り除いた時点で確認したが、土坑は接するように2ヶ所確認した。集石は1ヶ所の土坑を完全に覆うが、他の土坑はその一部を覆うに過ぎない。両方の土坑が共有した集石と見ることができよう。土坑は南側を第2号土坑墓、北側を第3号土坑墓とする。第2号土坑墓の平面形は63×37~55mの不整楕円形、断面形は船底状をなし底面は平らである。深さ10cmを測る。内部からは何も出土していない。第3号土坑墓の平面形は47cm+α×74cmの不整楕円形になると考えられるが、ベルトに隠れているため全体形は不明。断面形は船底状をなし、底面は平坦である。南側の土坑上縁近くに磨製石斧1本が出土している。深

さは第2号土坑墓が10cm、第3号土坑墓が12cmとほぼ同じである。

③第4号集石土坑墓（第21図3）

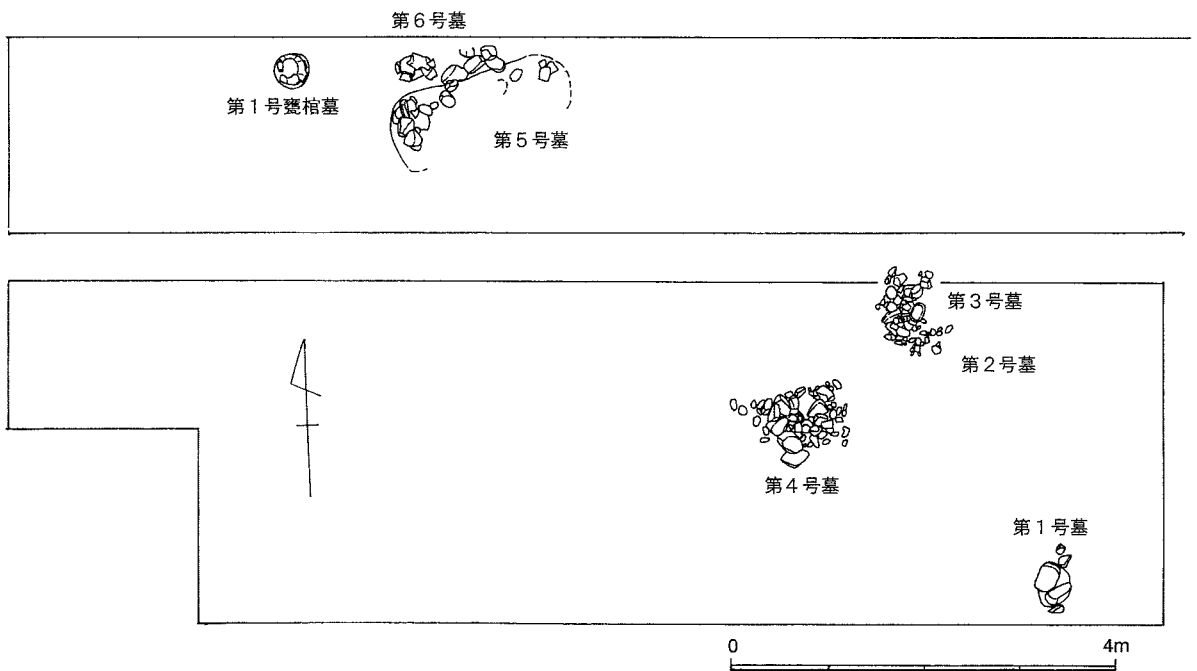
G-2・3区、H-2・3区にわたって検出した集石土坑墓である。墓標として30×20×10cmから10×10×10cm程度の石20数個を径80cmの円形に石を集積した土坑墓である。集石の石材は包含層に含まれる円礫よりも大きいものを利用しているため、包含層の円礫とは容易に区別がつく。東西の周辺にも小さな円礫があり、これらの石も集石の一部の可能性はある。土坑は集石を取り除いた時点で確認した。土坑の平面形は113×73cmの楕円形、断面形は舟底形をなし底面は平らである。深さ22cmを測る。内部からは石鏃、剥片、土器片各1点が出土している。上部の標石は土坑の陥没に伴い沈み込んだような状態を示している。

④第5号集石土坑墓（第22図1）

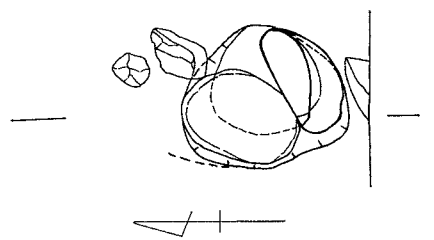
F-4区北西部に検出した集石土坑墓である。集石の存在に気づかず南側を深く掘りすぎたため南側を破損してしまった。よってその全体像は明らかにできない。墓標として25×25×10cmから10×10×10cm程度の石10数個をコ字状に並べているようであるが判然としない。元来は方形に標石を並べていた可能性もある。土坑は集石を取り除いた時点で確認した。土坑の平面形は188×65cm以上の隅丸長方形をなすと考えられる。断面形は舟底形をなし底面は平らである。深さ16cm前後を測る。内部の中央部には埋葬遺体の一部が遺存していた。足の部分と頭位と考えられるところに遺骨が保存状態が悪いなりに残っていた。状態からは屈葬されていたと考えられる。なお、土坑の中にも頭位と足位に集石がある。内部からは人骨以外は出土していないが、標石の間から磨製石斧1点が出土している。

⑤第6号集石土坑墓（第22図2）

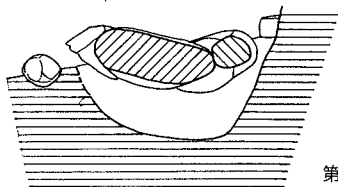
F-4区に検出した集石土坑墓である。墓標は板石を40×25cmの長方形に集積している。確認当初は小型の箱式石棺かと思ったが、標石を除いた時点で土坑を確認した。土坑の平面形は50×25cmの楕円形、断面形は箱形をなし底面は平らである。深さ15cmを測る。内部には25×15×10cmの石材があり墓とするには躊躇するが、一応、土坑墓として報告しておく。



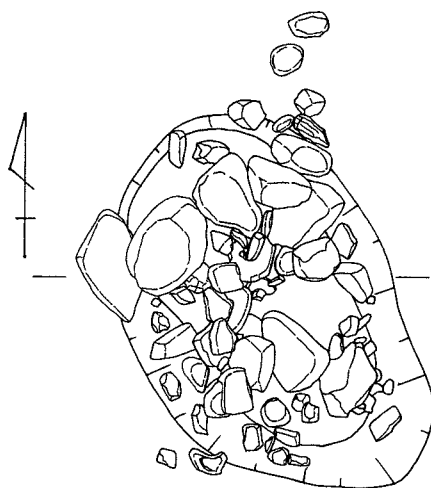
第20図 集石墓・甕棺墓分布図



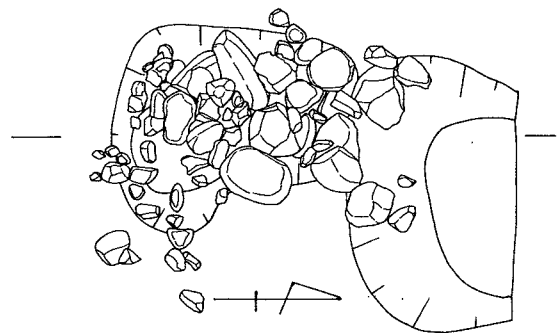
標高2.30m



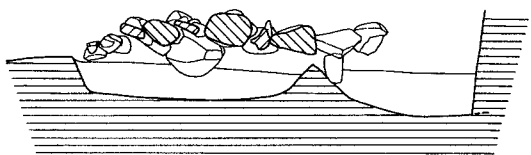
第1号集石墓



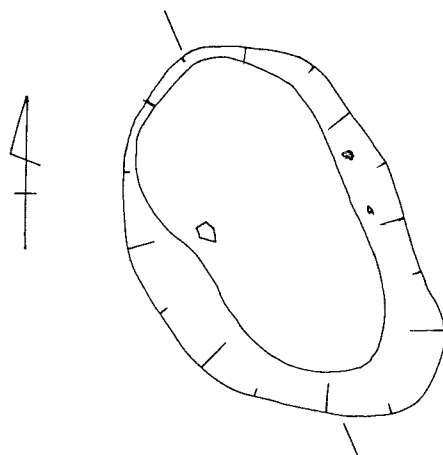
標高2.40m



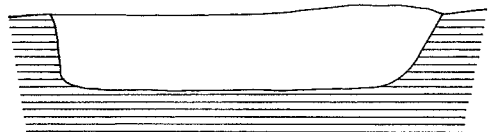
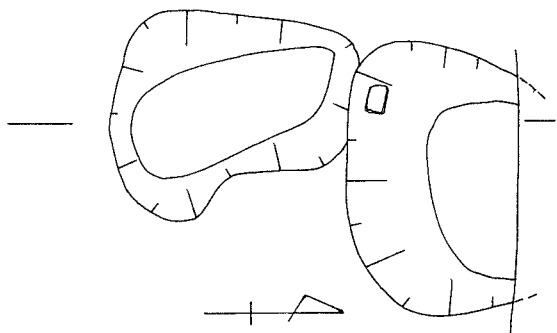
標高2.40m



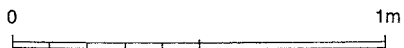
第2・3号集石墓



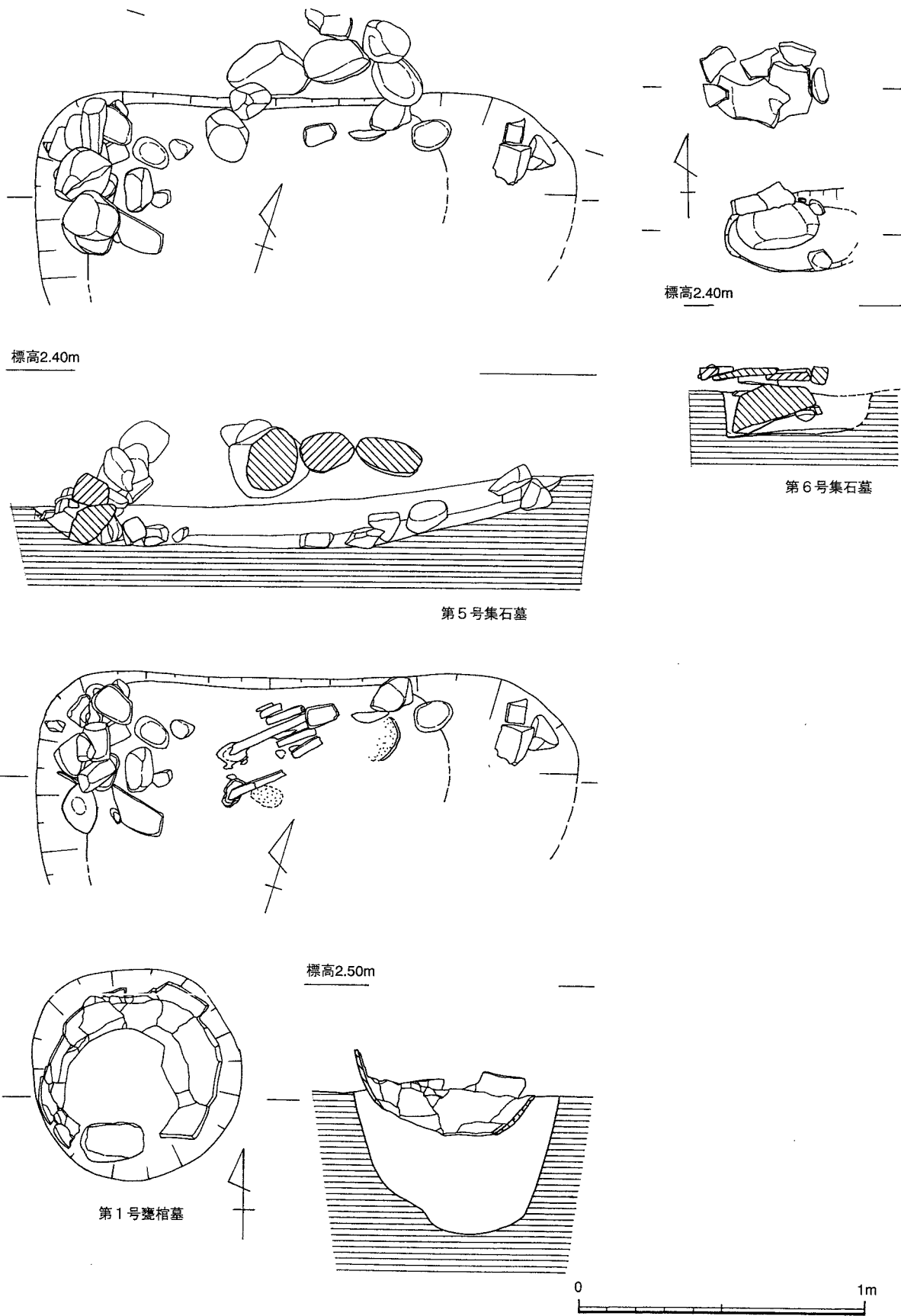
標高2.40m



第4号集石墓



第21图 第1~4号集石墓实测图



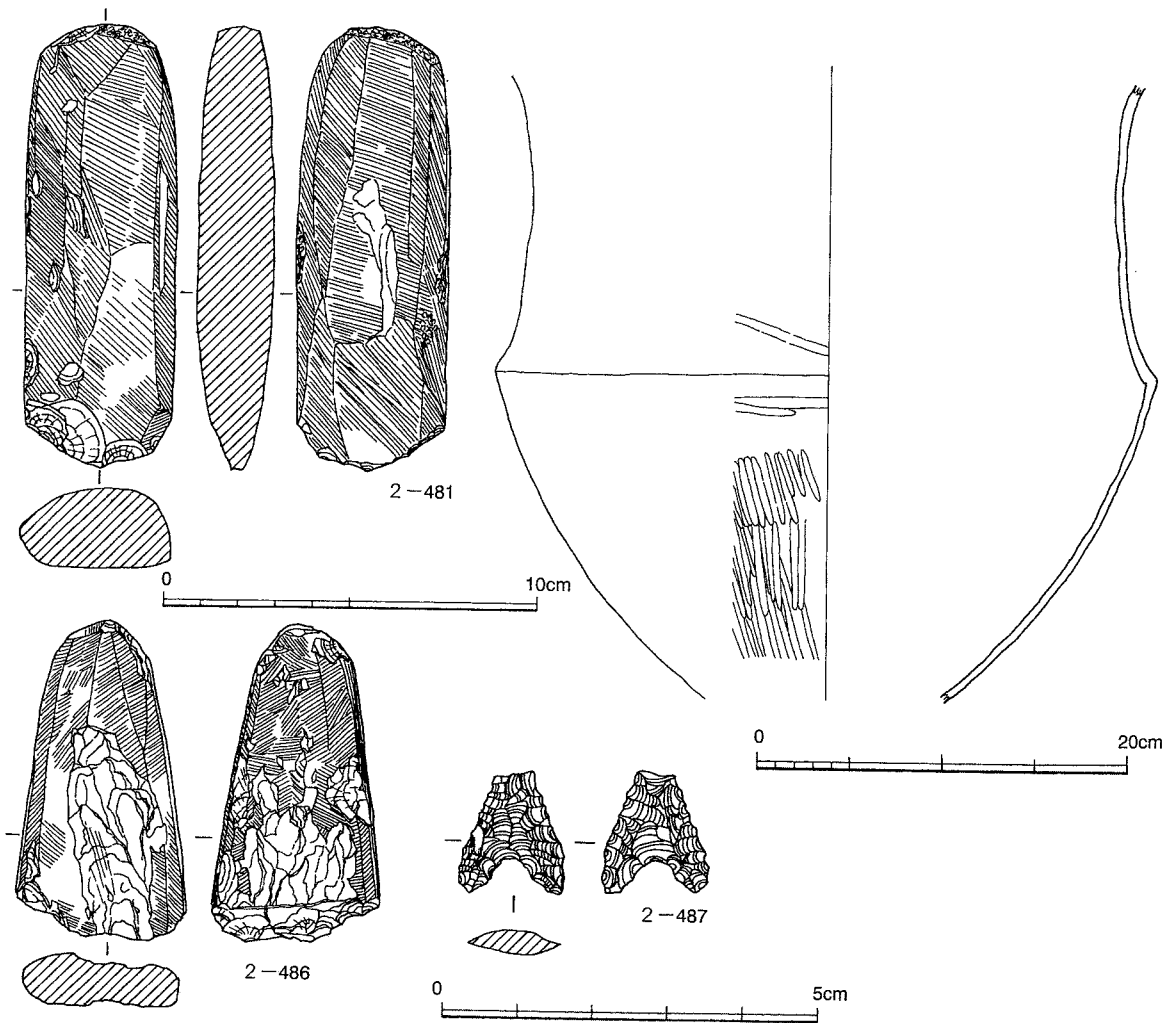
第22図 第4・5号集石墓・第1号甕棺墓実測図

⑥第1号甕棺（埋甕）墓（第22図3）

F-5区の北半中央部に検出した甕棺墓である。墓標等は存在しない。縄文時代晩期の大型の深鉢形土器を棺として利用している。径75cm、深さ47cmの円形の土坑に深鉢形土器を埋設している。土器は底部を欠き、体部の一部を欠損しているがその部分には石がはめ込まれている。土器の底部と土坑底の間には約35cmの空間がある。

(3) 出土遺物（第23図）

埋葬遺構から出土した遺物には磨製石斧2点、石鏃1点、縄文時代晩期の深鉢形土器1点がある。磨製石斧はいずれも刃部を欠損していて副葬品とは考えられないが、一点には欠損後の使用痕が見られるので、副葬されていた可能性もある。2-481、2-486は磨製石斧、2-481は第3号、2-486は第5号集石土坑墓出土である。2-481は硬砂岩製、全体に良く研磨されている。頭部は敲打によって調整され、刃部は欠損後に敲打状の使用痕がついている。長さ11.8cm、幅4.1cm、厚さ2.0cm、重量160g。2-486は蛇紋岩製、全体に良く研磨されているが体部中央には剥離痕が残っている。刃部を欠損している。現存長8.5cm、幅4.6cm、厚さ1.4cm、重量69g。2-487は黒曜石製の石鏃。先端部を欠損している。現存長1.65cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.55g。1は深鉢形土器。口縁部と底部を欠損し



第23図 集石墓群出土遺物実測図

ている。体部下半は丸味を持って緩やかに立ち上がり中位でくの字に屈曲して頸部に移行し、頸部はほぼ直立気味に立ち上がり端部がわずかに外反する。外面は縦のヘラ研磨調整。屈曲部径35cm、現存高33cmを測る。

第7章 包含層出土の遺物

本遺跡から出土した遺物は、先述したように縄文時代の土器、石器が主体であり、若干の残存状態の悪い獣骨等の自然遺物と古代の遺物（土師器、須恵器、磁器、滑石製品、製塩土器）があるが、後者については正確な同定が困難であり、さらに検討する必要があるので、古代の遺物と共に別稿にゆずることとし、本報告では縄文時代の遺物について述べることにする。

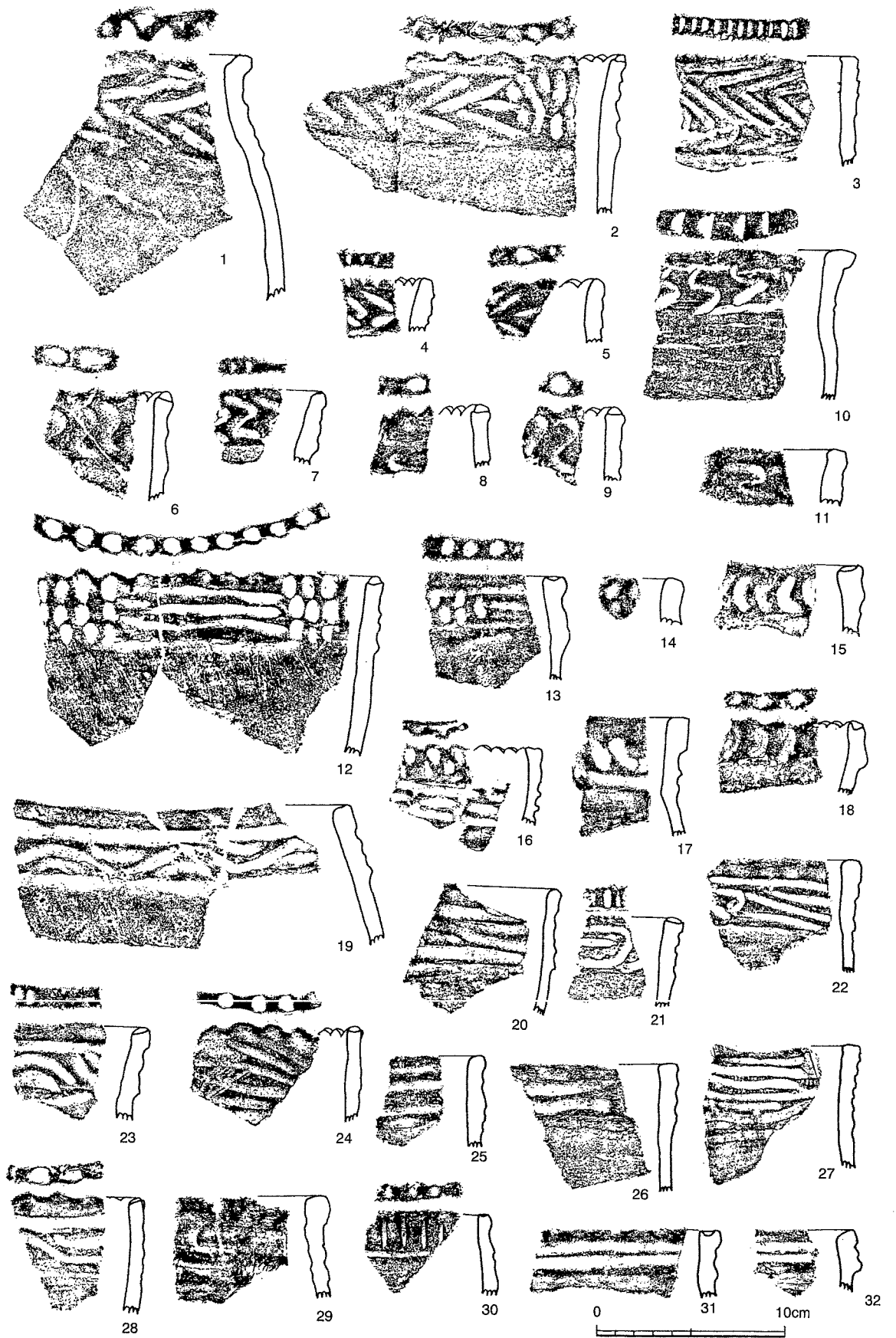
1、第2層出土の遺物

(1) 土器（第24～35図）

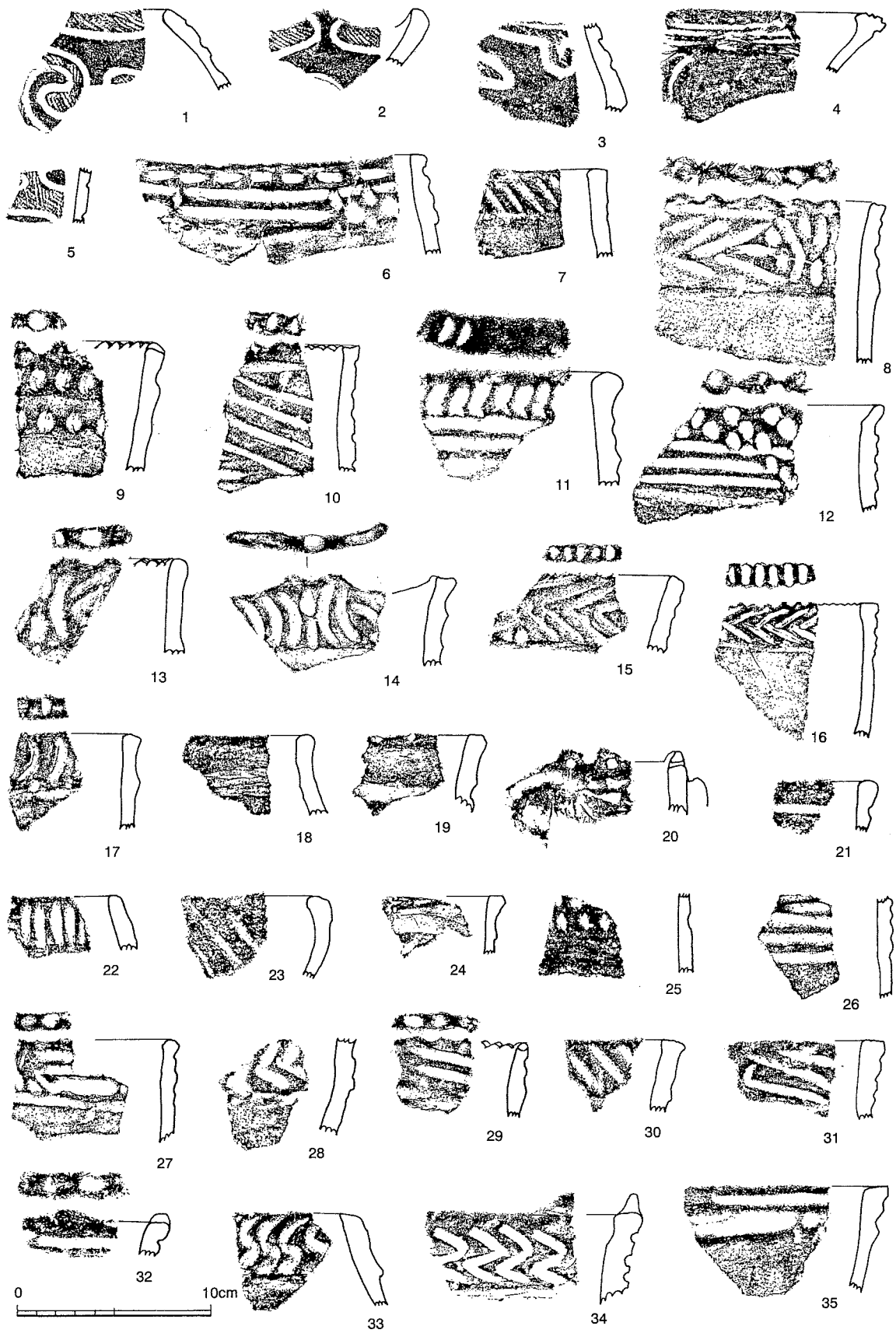
第2層からは後期初頭の南福寺式土器がほぼ単純に出土し、わずかに数点の磨消縄文土器が共伴している。以下、代表的な土器について説明する。

第24図は口縁部破片である。10、27を除いて他は、口縁部文様帯が帯状に肥厚し、下位の無文部と完全に区別している。1は肥厚部に平行斜線を二段に羽状に組み合わせた文様を横に連続させている。2も同様の文様を施文し、押点文と組み合わせている。3は斜線文を3段に組み合わせた羽状文を施文している。4、5は2段の羽状文を施文しているが向きが逆である。6～9は逆S字状文を並列施文している。10はS字状文、11は逆S字状文を並列施文している。10は文様施文部とそれ以下の無文部との境が不明瞭である。12、13は押点文と平行凹線文を組み合わせた文様を施文している。12は押点が3段に、平行凹線は3本施され、それが繰り返されている。13は凹点は2段、平行沈2本線が施されている。文様帯の境の段はともに明瞭である。14は小破片で凹点文が施されている。15はC字形の凹線が並列施文されている。19は口縁下に一条の凹線をめぐらし、その下に波状の凹線をめぐらし、波状の山と谷の部分に弧状の短い凹線を施文している。文様帯の境の段は明瞭である。16は文様が2段に施文されている。上段には烈点文が2段に施され、その下には短い凹縁を3条施文している。17は頸部でくの字に屈曲している。口縁直下は無紋帯として下半に短い弧状の凹線を斜めに並列施文し、さらに1条の凹線を施文している。18は肥厚した文様帯に逆C字形の凹線を並列施文している。20～29はやや細くなった沈線で直線と斜線、曲線を組み合わせて文様としている。沈線は29の様にヘラ描きしたものもある。30は文様帯の下端に沈線をめぐらして区画し、文様帯には縦の細線を平行に施文している。31、32は2条の平行凹線をめぐらしている。口縁部形態はさまざまで、1、10のように引き伸ばされ、平坦面が広がるものもある。口縁部には刻みが入られるものが多い。1、2、5、6、8～10、16、18、24、28は刻みが大きく、口縁部は小さな波状をなす。3、4、21はヘラ刻みの小さい刻み目を施している。7、23のように刻み目が部分的に施されるものもある。11、17、19、22は刻み目はなく平坦な口縁をなす。

第25図も3、5、25、26、28を除いてすべて口縁部破片である。1～5は第2層から出土した磨消縄文土器のすべてである。1は口縁部が大きく内傾する。2は口縁部が大きく外反する。3は胴上半部の破片である。4は鉢形の土器で口縁部は直線的に外方に伸び、口縁部は内側に肥厚する。5は胴部破片である。いずれも外面に磨消縄文を施文している。4は外面の残存状態が悪いが、3本単位の沈線が確認できるので福田K2式土器である。他は中津式土器である。6以下は口縁部破片で、いずれも口縁部に肥厚帯を持っている。6は口縁部直下に短沈線を横にめぐらし、その下に2条の平行凹線と押点文を組み合わせた文様を配している。7は平行斜線を施文する。8は第24図2と同一固体である。9は2段に押点文を施す。10は口縁直下に沈線1条をめぐらし、その下に平行斜線を施文している。11は口縁下に短沈線を縦に並列施文し、その下に平行した凹線2条を配している。12は口縁下



第24図 2層出土土器実測図 I

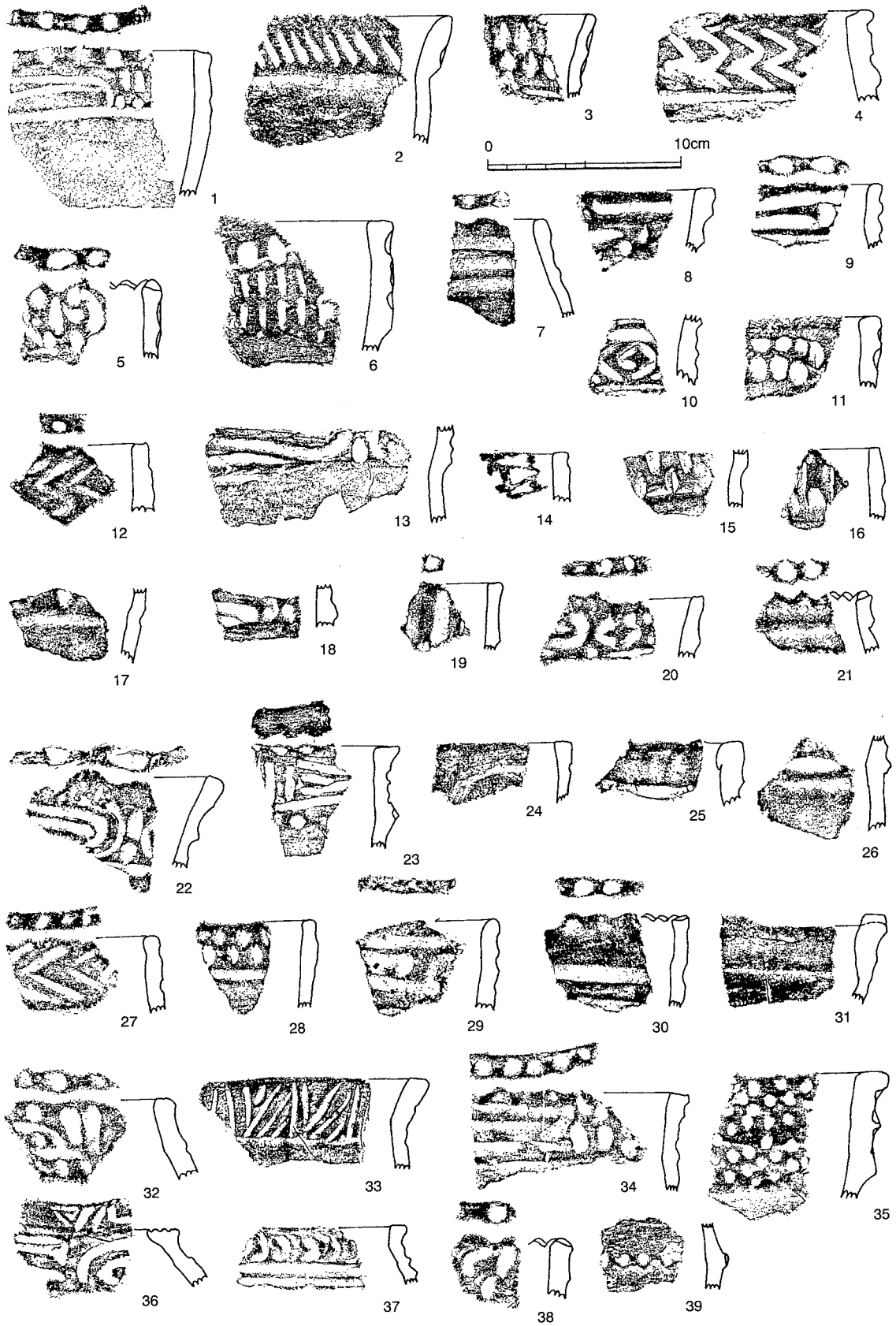


第25图 2層出土土器実測図Ⅱ

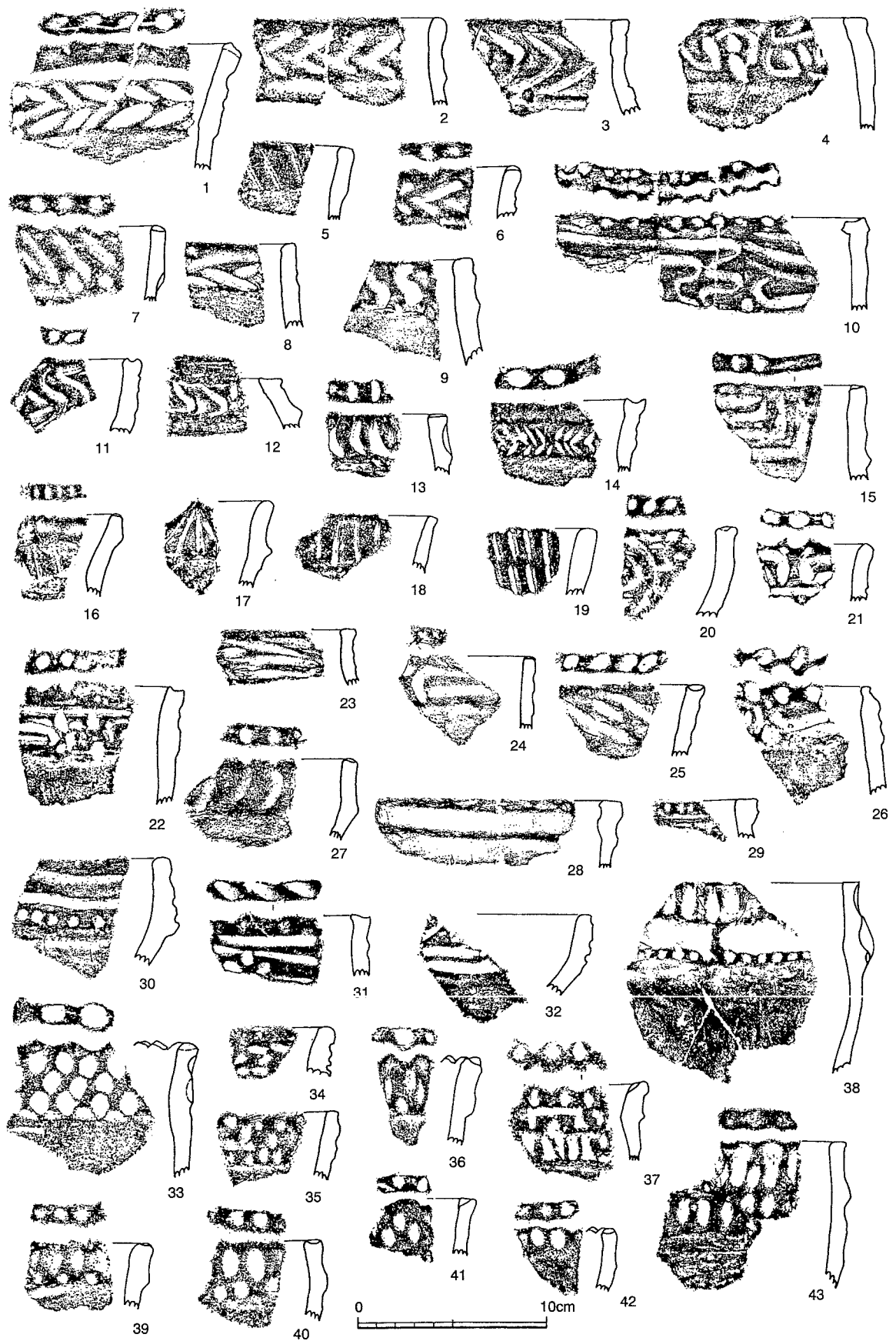
に2段の押点文を2段、その下に3条の平行沈線を施文する。13、14は中心に短沈線を2段に施し、その両側に弧状の沈線を並列している。15、16は平行斜線を羽状に組み合わせ施文している。17は弧状の短沈線を縦に並列させている。18は無文。19は肥厚帯の下端に凹線1条をめぐらしている。20は浅鉢形土器の把手部分の装飾である。上に突起が2個ありそれぞれに穿孔がみられる。21は沈線1条がめぐらされる。22は短沈線が縦に、23は斜線が平行に施文される。24は凹線が施文されるが、文様構成は明らかでない。25、26は口縁端部を欠いている。25は肥厚部に押点文、26は平行沈線が施文されている。27、31は直線と曲線を組み合わせて文様としている。28は羽状文、29は平行沈線、30は平行斜線を文様としている。32、35は平行沈線、33はS字状文、34は逆S字状文を並列施文している。口縁部形態は様々である。14は中心部が山形に隆起する。34は突起がついている。8～11、13、15～17、27、29、32は口唇部に刻みを入れている。

第26図も口縁部破片である。10、17、18、26、39は口縁上部を欠損している。1は口縁直下に押点を1列めぐらし、その下に沈線と押点文を組み合わせた文様を施文する。文様帯は肥厚せず沈線1条をめぐらして区画している。2は文様帯が大きく肥厚する。文様帯の下半に平行斜線を配している。3は押点文を2段に施文している。4は逆S字状文を並列施文している。5は押点文と弧状の短沈線を組み合わせて文様としている。6は口縁直下に押点文を1段施し、その下にへら描きの短沈線を縦に2段施文する。7は平行沈線、8、9、13は先端部が曲がった直線と押点文を組み合わせた文様を施文する。10は平行凹線の下にやや直線的な渦を中心に羽状文が配される。11は押点文が2段に施文される。12はやや直線的なS字状文を並列している。14は浅鉢の把手の装飾部分、三角形にへら削りした文様を組み合わせている。15は押点文を2段以上に施文している。16は縦の短沈線と押点文を交互に並列させている。17、18は沈線と押点を組み合わせたもの。19は縦の短沈線を並列する。20は短弧線と押点の組み合わせ文様、21は幅の狭い肥厚帯を持つが無文である。24～26は沈線の文様であるが構成は不明。27は羽状文、28は押点文を施文。29、30は沈線文様、31は無文である。32、34は沈線と押点の組み合わせ文様、33は頸部でくの字に屈曲し口縁部は外反する。口縁部は肥厚せず、横方向の沈線で文様帯を区画している。文様帯は2本の縦の沈線で区画しその間に平行斜線を施文している。35は円形の刺突文を不規則に施文している。36は口縁部が内傾し、口唇部は内側に引き伸ばされ平坦面が形成される。平坦面には細い沈線の短直線と曲線の組み合わせ、外面へら描きの直線と曲線の組み合わせの文様が施文される。37は口縁直下に逆C字状文を並列施文し、その下に平行凹線を2条以上を施している。38は弧状の短直線を、39は屈曲部に刺突文を施している。

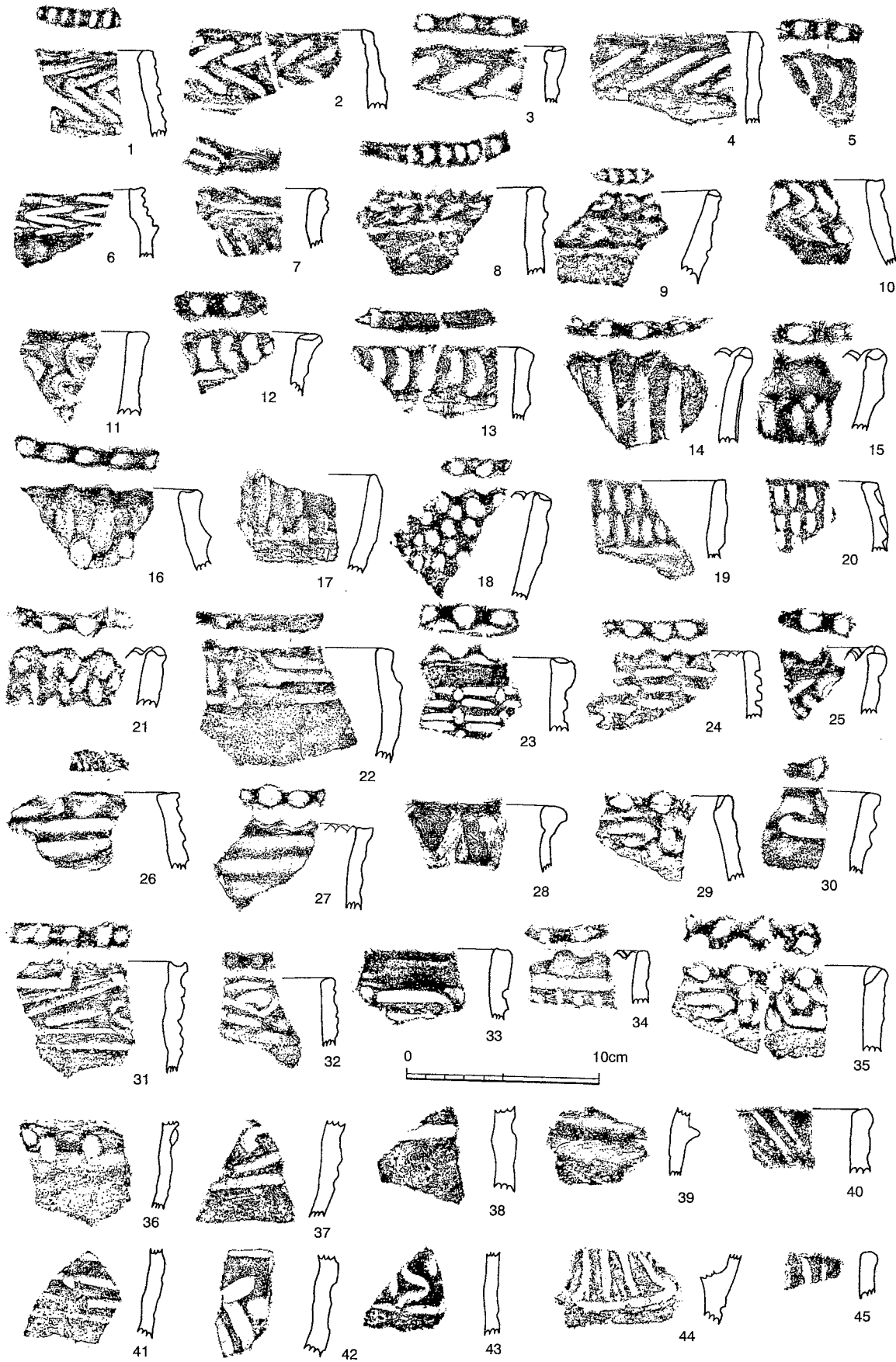
第27図はすべて口縁部の破片である。1～3、8、14は沈線を羽状に施文している。1は口縁直下に無文帯を置き、凹線をめぐらし区画している。14は肥厚帯の中央部にへら描きの細かい羽状文が向かい合わせに施される。4はU字形の曲線と押点を組み合わせた文様構成である。5はへら描きの平行斜線文。9、10～12はS字状文を施文した土器である。10はやや特殊でS字状文は直線の先端が変形したものである。口縁端部には押点文が施文されている。13はC字状文を並列施文し、27は逆C字状文を同様に並列施文している。15はL字形の沈線を重圏の長方形に組み合わせた文様構成になっている。16は口縁部肥厚帯が極端に狭い。17～19は細沈線で施文されている。20は曲線と押点の組み合わせ、21、24は曲線と直線の組み合わせ、22は直線と押点と曲線の組み合わせ文様を施文している。25は斜線と短斜線を平行に施文する。26は口縁直下に押点を並列させ、その下に曲線と押点を組み合わせた文様を施文する。28、29は文様帯の肥厚部が狭い。28には凹線1条を、29には刺突文を並列施文している。30は2条の平行沈線をめぐらし、その下に刺突文を並列施文している。31は平行沈線と押点の組み合わせ、32は平行沈線と斜線の組み合わせ文様を施文している。38は口縁直下に押点文を並列施文し、その下に突帯2条をめぐらし、下の突帯には刺突で刻み目を入れている。突帯間は無文



第26图 2層出土土器実測図Ⅲ



第27图 2層出土土器実測図Ⅳ



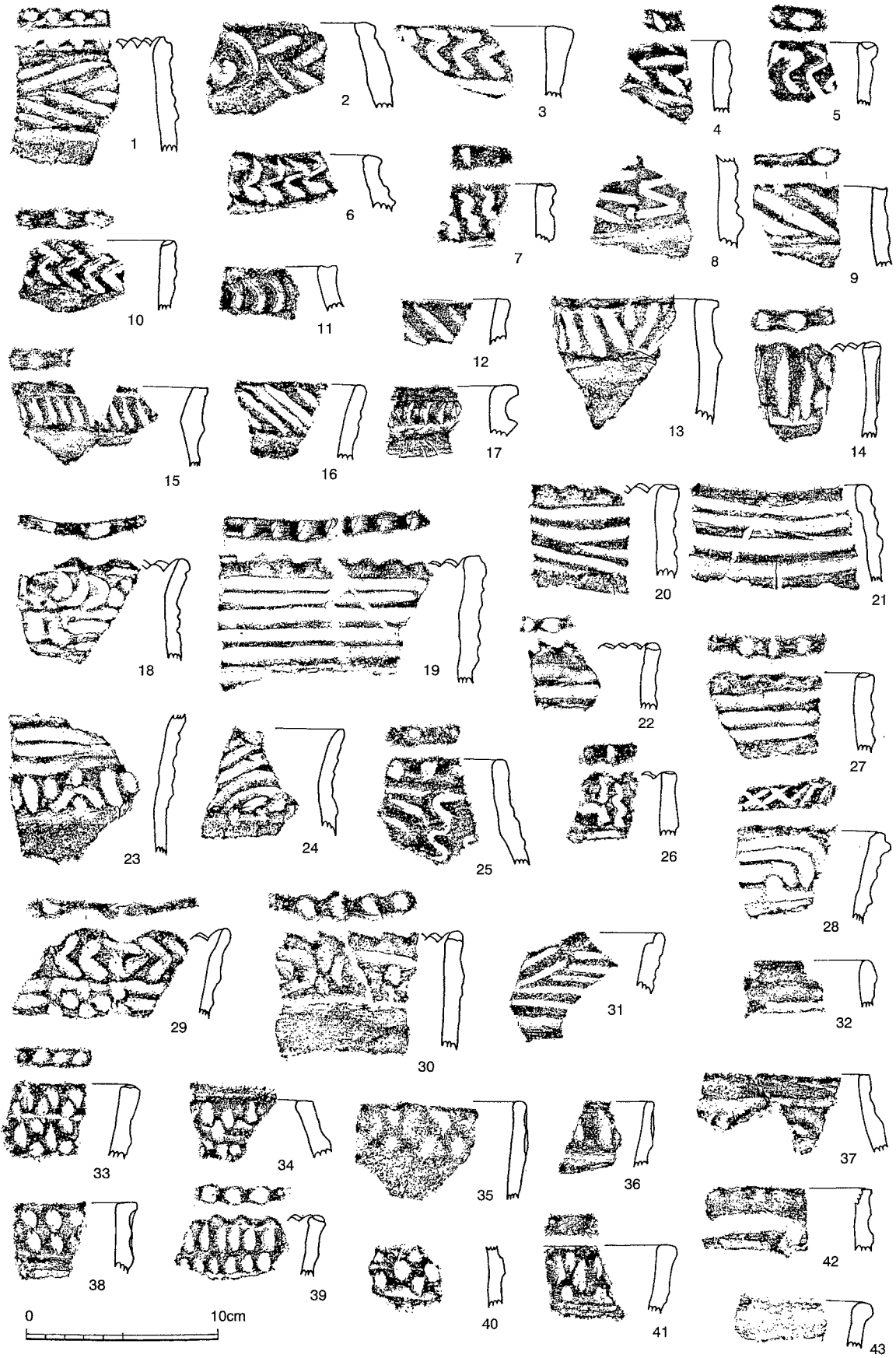
第28图 2層出土土器実測図V

で間を隆線で結んでいる。33～37、39～43は押点文を施文した土器である。33は3段に施文する。この土器は胎土に滑石を混入し、色調も赤みが強く明らかに在地の土器とは異なっている。長崎、佐賀県域からの搬入品と考えられる。

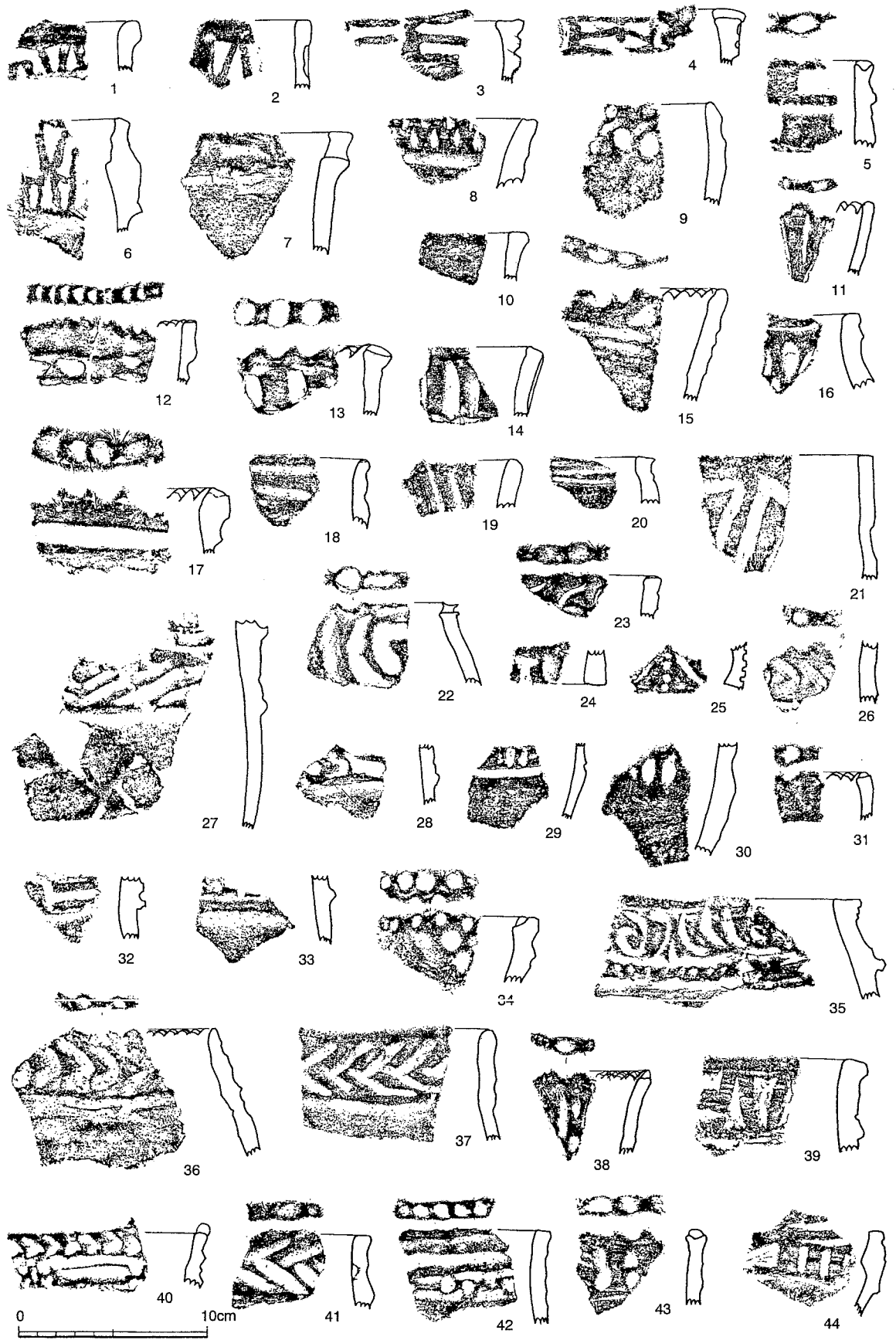
第28図も口縁部の破片である。36～39、41～44は口縁部の上半部を欠損している。1～3は羽状文を施文する。4は平行斜線文、5は逆C字状文、6は直線的な逆S字状文を施文している。7は肥厚帯が狭い。平行沈線2条がめぐらされる。肥厚帯の下には平行斜線が施文されている。8～11はS字、逆S字状文を施文している。9は口縁直下に逆C字状文を施文し、11は2段に施文している。12、13は短弧線を縦位に並列施文している。14は凹線を縦位に平行に配した施文である。14～21は押点文あるいは刺突文を施文した土器群である。15は肥厚部の直下に押点文をめぐらしている。16、17は短直線と押点文を組み合わせた文様を施文している。18～21は刺突文を、18は4段、19は2段、20、21は3段にわたって施文している。22は直線と押点文を組み合わせた文様を施文している。23は短直線と押点文を組み合わせ4段に、24は短直線を3段にめぐらしている。25は羽状文、26、27は平行沈線を施文する。28は三角形にヘラで削り取られた文様を入れている。29～35は直線と曲線を組み合わせて文様としている。33～35は曲線と直線、押点文で文様を構成している。36～45は直線、曲線、押点文等を組み合わせて文様としているが、全体の構成がはっきりしない。40は平行斜線文を施文している。44は把手部分に文様を入れている。

第29図も口縁部文様肥厚帯の破片である。1、2は羽状文を施文しているが、2には中心飾と考えられるところに渦巻文が見られる。4も羽状文と見られるがはっきりしない。3、5、6、7、10は逆S字状文を施文している。7は2段になっている。8は縦位に描かれたW字状文と短直線の組み合わせ文様である。9、12、13、15、16は平行斜線文、7は押点文をはさんで方向が逆になっている。11は逆C字状文を並列施文している。14は文様帯を横線で区画し、短直線を縦、押点文を2段に組み合わせている。18は上段に弧文が並列施文され、下段に直線と曲線を組み合わせた文様を配している。19～22、27は平行横線を施文している。19は5条、20は4条、一部にそこから始まる沈線を含んでいるので異なる文様になると考えられる。21は4条、22は2条、27は3条である。23は上段に3条の平行横線、下段に押点文を組み合わせた文様を配している。24は押点文と弧線と斜線を組み合わせている。押点文と弧線部分が中心飾になると考えられる。25は波状沈線と直線の組み合わせである。26は波状沈線と曲線の組み合わせ文様を施文している。28は直線の先端部が曲がった凹線と凹点文の組み合わせ文様である。口唇部には他に見られる刻み目とは異なり、ヘラ描きの細い沈線で×や斜線が入れている。29は上段に三角形を描いた沈線を中心に相対する羽状文を施文し、下段は押点文を組み合わせた文様を中心に両側に短沈線の平行横線を施文している。30は曲線と押点文の組み合わせ、31は平行斜線と平行横線の組み合わせ文様を施文している。32、43は無文である。33～36、38～41は凹点文を施文している。37は口縁直下は無文帯で、その下に曲線で文様を入れている。42は押点文と曲線の組み合わせ文様を施文している。

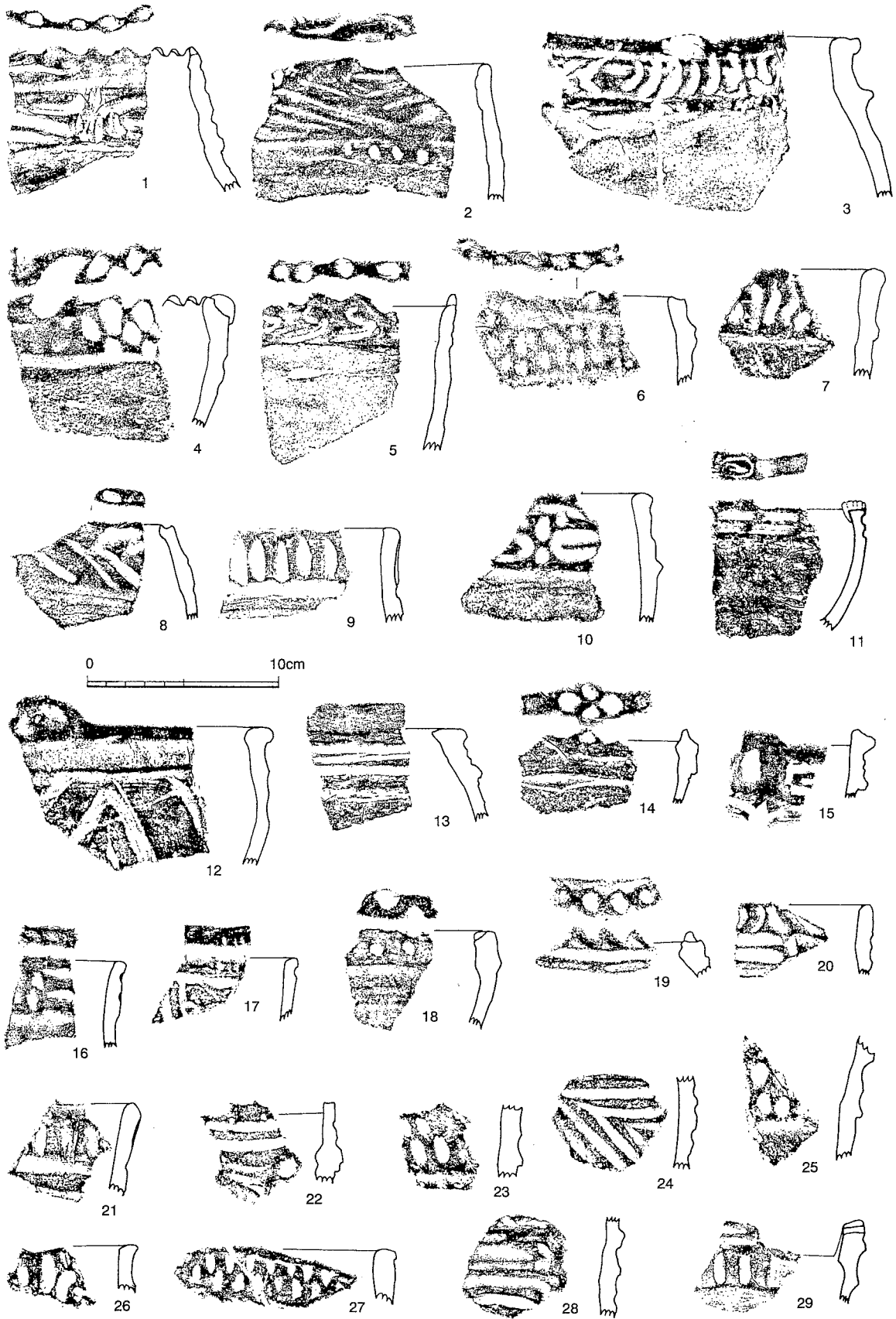
第30図も口縁部肥厚帯の破片である。1～6は三角形や長方形に面的にヘラ削りした文様を入れた土器である。7、10は肥厚帯が狭く、無文である。8は文様帯を横線で区画して、文様帯に2段の刺突文を施文している。9、12は押点文を施文し、12は口縁肥厚帯の下に施文している。11は短細線を縦に平行施文している。13、14は短凹線を縦に並列している。15、16は横線と押点文の組み合わせ、17は肥厚帯が狭く、凹線1条をめぐらしている。18、20は平行沈線2条をめぐらす。19は平行斜線文。21は直線を組み合わせて文様を構成するが、構成は不明。22は凹曲線の文様、23は細沈線の文様であるがどのような構成になるかは明らかでない。24は脚の可能性もある。25は装飾部分と考えられる破片で、透かしを持っている。沈線で三角形に区画し、その中に細かい円形の刺突を縦に4個施文している。26、



第29图 2層出土土器実測图VI



第30图 2層出土土器実測图Ⅶ



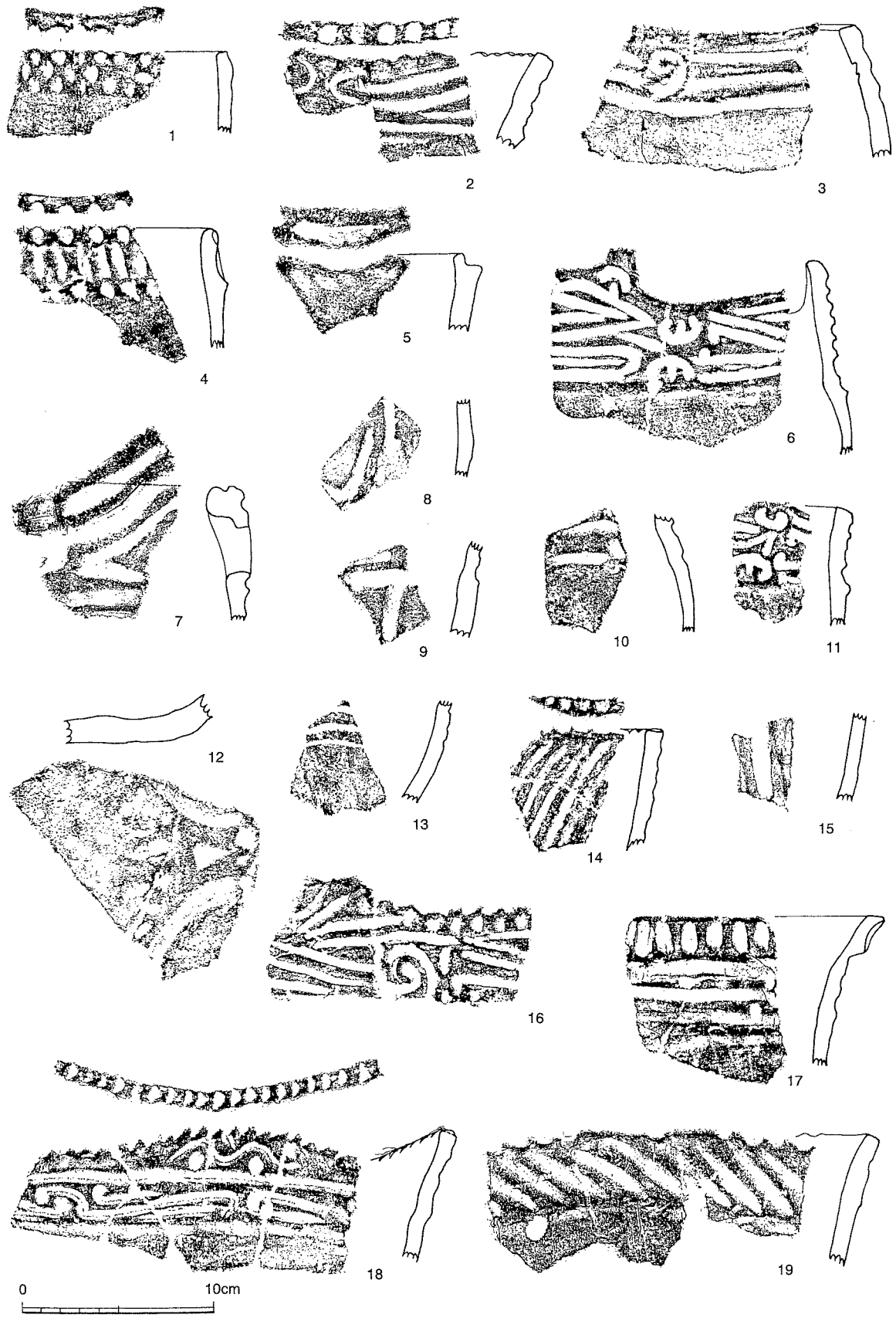
第31图 2層出土土器実測図Ⅷ

27、36、37、41は羽状文を施文する。26、27は上位が不明瞭、36と37、41は向きが逆である。28はS字状文を中心に両側に凹線を施文している。29～31、33、34は押点を施文して文様としているが、全体の構成は明らかでない。29は文様帯を横線で区画している。32は直線を方形に組み合わせているが、全体の構成は不明。35は文様帯の区画に刻み目の突帯をめぐらしている。文様は渦巻き文を中心に短弧線を並列施文している。38は短直線と押点文を組み合わせる。39、44は三角形に面的にヘラ削りした文様を組み合わせている。40は上段に逆C字状文を並列施文し、下段に押点文と凹線を組み合わせた文様を施文している。42は平行沈線と押点文を組み合わせている。43は押点文を施文している。

第31図も口縁部文様帯の破片である。1、2のように口縁部が肥厚しないものも含まれている。1はヘラ状工具により施文されているので明瞭でないが直線と押点で文様が入れている。2も同様である。3は口縁とその下に間隔を置いて突帯をめぐらし、文様帯を区画している。文様は円を描き中心飾として、相対する弧状の短線を並列したものである。4は押点文、5はS字状文を施文している。6は押点文を2段に施文し、7は肥厚帯に縦の沈線を並列している。8は羽状文を施文する。10は直線、楕円形、押点の組み合わせである。9は文様帯が凹線で区画され、短沈線を縦に並列施文している。11は浅鉢形土器、2段の平行短沈線の文様を入れる。突起部には細沈線で渦巻きを入れる。12は鉢形になると考えられる。口縁に半円状の突起がある。口縁はわずかに肥厚し、胴部にヘラ描きの三角形を中心に平行斜線が施文される。13は3条の平行沈線、14は狭い肥厚帯で無文、口唇部に刺突文を配している。15は直線を方形に組み合わせている。16は押点と直線の組み合わせ文様、17は直線で文様施文している。18は浅鉢と考えられる。肥厚部に小さい円形の刺突がある。19は横線をめぐらす。20は上段に縦の短弧線をめぐらし、下段に並行した短直線出文様が施文されている。21は文様帯区画の横線に縦の短直線を平行に施文している。22、24は沈線を組み合わせた文様である。23、25は押点文を2段に入れている。26は弧状の短線を組み合わせている。27は刺突を2段に施文している。28は平行沈線と弧線を組み合わせて文様としている。29は浅鉢形土器と考えられる。短直線と三角形にヘラ削りされた文様を組み合わせている。

第32図は口縁部文様帯の破片である。1は口縁部肥厚帯に3段の押点文を施文する。2は直線と曲線を組み合わせた文様を施文しているが、より直線化が進んでいる。3は3条の平行凹線をめぐらし、中に渦巻き文を入れている。4は文様帯の上下に押点文をめぐらし、間に、縦の短直線の並列文を施文している。5は口唇部に凹線を入れている。6、11は同一個体と考えられる。阿高式土器と同様の文様を入れているが線がやや細くなっている。口縁には把手をつけているが全形は不明。7は把手部分の破片である。口縁との間に三角形の透かしが入れられる。把手の縁部には凹線が入れられる。把手には三角形に沈線が入れられ、口縁下には凹線がめぐらされている。8～10には曲線あるいは直線で文様が入れているが構成は不明。12は丸底の浅鉢形土器の底部破片である。胴下半に凹線と三角形の削り文が入れられている。13は3条の沈線が巡る。14は平行斜線が施文される。15は胴部破片、平行した凹線が縦に入れられる。16は渦巻き文直線、押点を組み合わせて文様としている。構成は阿高式土器に近いがくずれが見られる。17は口縁部の肥厚帯は狭く高い。肥厚帯には押点文が並列施文され、肥厚帯の下に平行凹線がめぐらされる。18は口縁部肥厚帯はやや幅広い。口縁部には隆起部分がある。この部分は沈線1条がめぐらされ、上段と下段に分けられている。上段は波状の沈線の下に押点文を施文している。下段は押点と曲線を組み合わせた文様が展開するが、やや間延びしている。19は凹線の平行斜線を施文している。

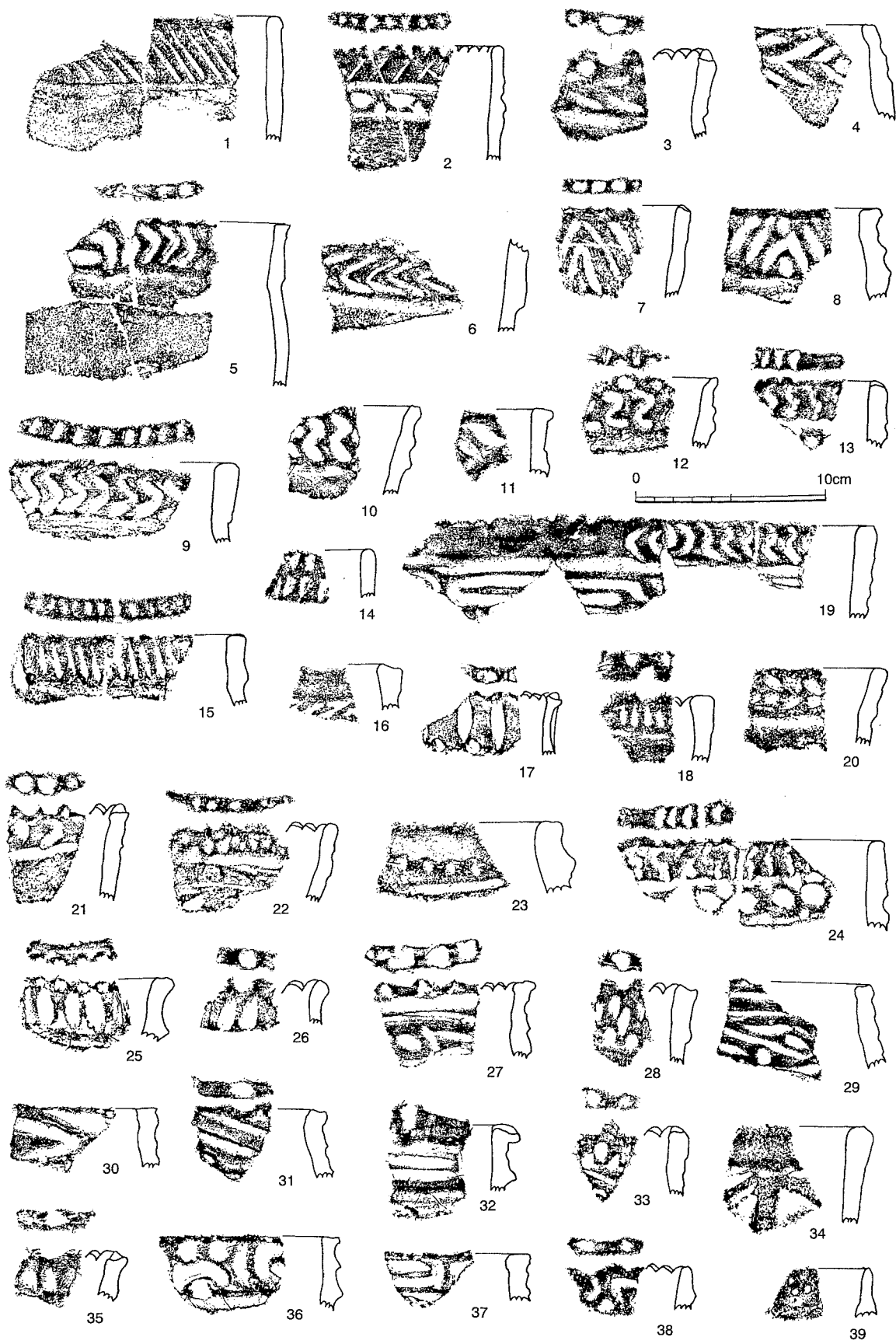
第33図も口縁部文様帯の破片である。1は細い平行斜線文、2は口縁下に細い沈線で平行斜線文を描き、下に横線と押点文を組み合わせて施文している。3～6は羽状文を施文している。7、8は斜線文の中心飾と考えられる部分である。山形に区画し、その両側に斜線が施されている。8は押点を



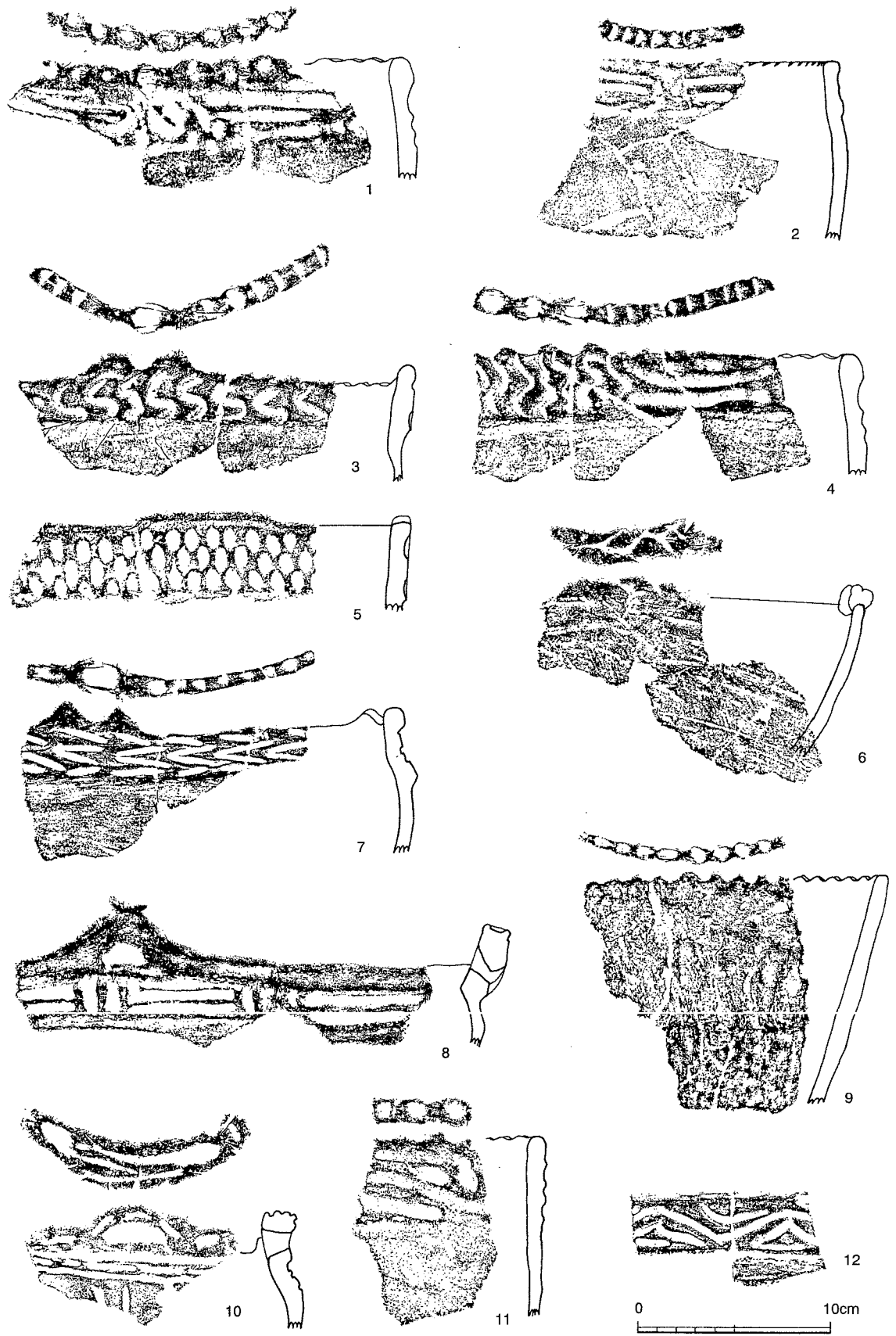
第32图 2層出土土器実測図区

加えている。9～13はS字状文、逆S字状文を施文しているが、様々である。14は短直線を2段に施文する。15、16は斜線文、17は短直線を縦に平行させ、その間の下に押点を施している。18は刺突文を横に並列させている。19は上下2段に文様が施文されている。上段の文様は部分的で、S字状文を主体に施文し、下段に長楕円形に区画した沈線を並列させている。20は肥厚帯に2段の押点文を施文する。21、22は横線で文様帯を区画し、21は逆C字状文を、22は押点文を施文している。23は口縁下に刻み目の突帯をめぐらしている。24は上段に曲がりくねった短沈線を縦に並列させ、下段に押点文を施文している。25、26は押点文を並列施文している。27、29～32は押点、直線を組み合わせて文様としているが文様構成は明らかでない。28、33、35は押点文を施文している。34は三角形にヘラで面取りした文様を組み合わせているが、全体の文様構成は不明。36～38は押点と曲線を組み合わせた文様を施文している。39は小さい円形の刺突を施している。

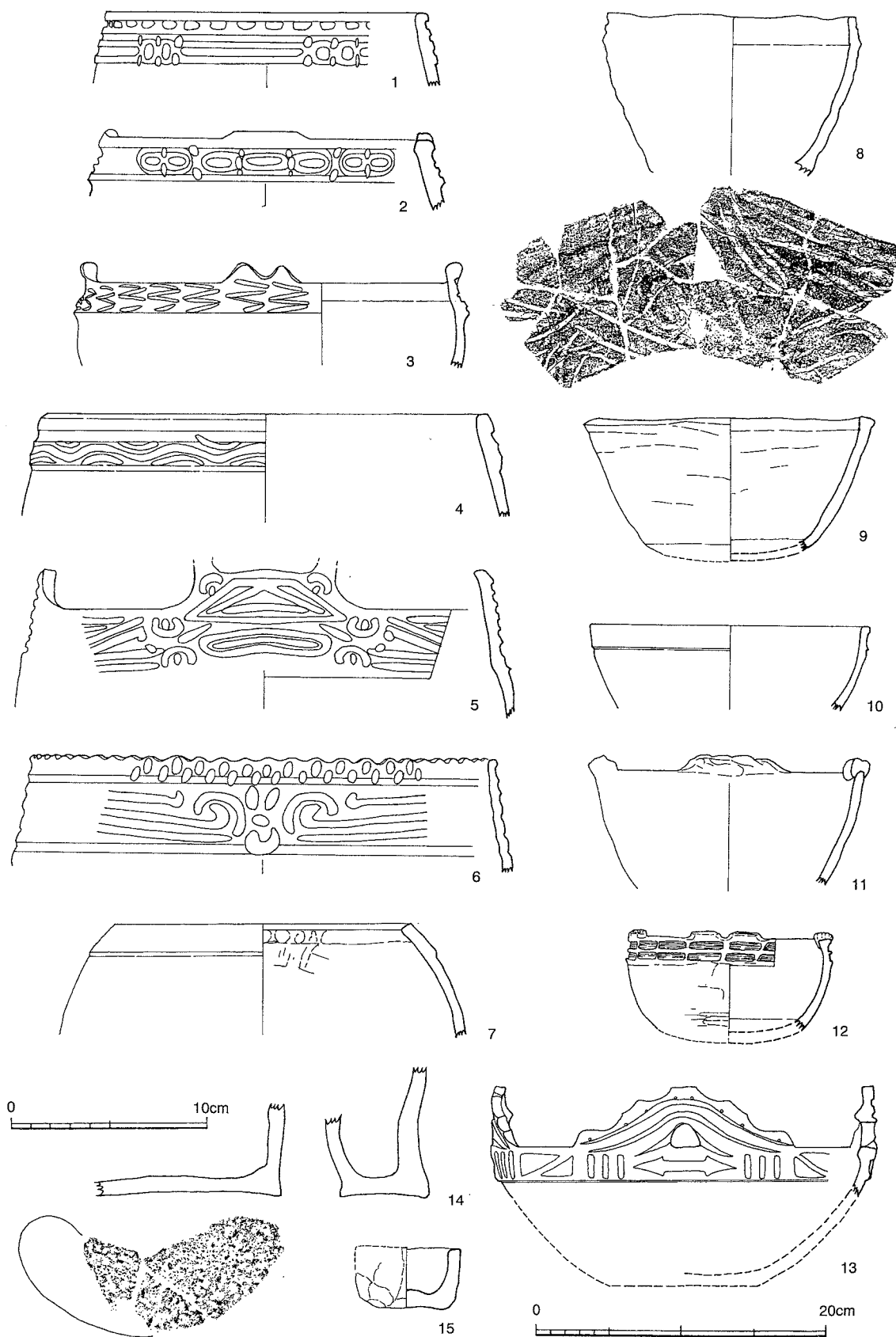
第34図は大きい口縁部破片である。1は口縁直下に押点文をめぐらし、その下の文様はややくずれているが、中心に短弧線と押点を組み合わせた文様を配し、その両側に沈線と曲線を組み合わせた文様を配しているが、文様構成は明らかでない。また、文様は左右対称にはなっていない。口唇部には大きな刻みを入れている。2は文様帯と無文部の境に沈線1条をめぐらして、文様帯を区画している。中心飾として押点3個を三角形に配し、その両側に2条の沈線を左右対称に施している。口唇部はヘラによる刻み目である。3は口縁部に2個のこぶ状の突起を貼り付けている。突起の下にS字状文、それ以外の部分には羽状文がめぐらされている。口唇部にはヘラによる刻み目が入れている。4は口唇部、口縁部文様帯ともに、部分によって大きく異なっている。破片左側にはS字状文が施文され口唇部は棒状工具により押点が施文され、口縁は波状をなすが、右側はやや弧状をなした凹線3条をめぐらしているが、口唇部の刻み目はヘラによる細かい刻み目で口縁は平坦である。5は口縁にやや幅広い1段高くなった隆起部分が作り出されている。肥厚した文様帯には押点文が3段に施文されている。押点文は指頭で施されたもので全てに爪の痕が明瞭に残っている。6は粗製の浅鉢形土器である。口縁部に1箇所隆起した突起部分がある。突起部は粘土紐を2本より合わせて内側から貼り付けたものである。外面は粗いヘラ状の工具で多方向から削られ細かい条痕が明瞭に残っている。内面はヘラによる丁寧な横ナデ調整である。7は口縁部の肥厚帯は顕著で、段の境は明瞭である。器形はこの境の部分でくの字形に屈曲する。口縁部には山形になるこぶ状の突起が2箇所につけられている。口唇部の刻み目は指頭で施されたと思われ、浅い押点状のくぼみに爪の痕が明瞭に残っている。肥厚帯の文様は棒状の工具で羽状文が2段に明瞭に施文されている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。8は浅鉢形の口縁部破片であるが、後で胴部下半までの破片と接合した。口縁部は大きく肥厚し断面形は方形を成す。文様帯もわずかに肥厚している。胴部は丸みを持ち、半球形をなす。口縁部には大きな突起がつく。突起は粘土紐2本を組み合わせ大きな山形に仕上げられている。突起の中央部にはやや三角形に近い楕円形の透かしが入れている。口唇部にも突起部には深い沈線が入れられていて、片方の沈線は透かしの部分まで貫通している。突起の頂部には環状の装飾が作り出されている。文様は縦に3本の平行沈線を入れ、その横に2本の平行した横線を入れ、次にまた縦の平行沈線で区画する文様を繰り返している。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。9は粗製の深鉢形土器である。口縁は大きい刻み目が入れられ波状をなす。外面は縦方向のヘラ削り状の調整である。10は口縁部に把手をつけた資料である。把手は半環状をなし、その両側に粘土帯を貼り付けたものである。把手部分は橋状をなし口縁部との間は日月形の透かしとなっている。把手の表面には短直線を横並びに配している。上面には3本の沈線を走らせ、把手の両側には深い凹線を入れている。口縁下と間隔を置いてその下に横線をめぐらし、間に短直線を連続して配している。その下にも押点や縦方向の沈線が施文されているが文様構成は不明。11は横線と押点文で文様をつけているが文



第33图 2層出土土器実測図X



第34图 2層出土土器实测图XI



第35图 2層出土土器実測図Ⅱ

様構成は明らかにできない。12は肥厚した文様帯に波状の沈線をめぐらし、波頭の下には沈線で三角形を描いた三角文を配し、谷の上には弧状の短線を配している。

第35図は器形の復元できる資料の一部を図示した。1～6は深鉢形土器である。1は復元口径22.4cm、口縁部はやや内傾している。口縁部に幅の狭い無文帯を置いて、短い凹線を横方向に連続して配している。その下にはやや大きい押点の四隅にやや小さい押点を配し、それを2～3単位で連続させた単位で口縁を4単位に分割し、間に2条の凹線を配した文様を施文している。ただし、上の凹線は切れ間なく一周している。文様帯は肥厚している。2は復元口径23.0cm、口縁部はわずかに内傾しているが、端部で直立する。口縁部には隆起部分が4箇所存在すると考えられる。隆起部はやや幅広い台形状をなす。口縁部下に無文帯を置き、文様帯の上下に沈線をめぐらし、文様帯を区画している。その間に沈線で楕円形を描き、楕円形の中に凹線を入れている。楕円形と楕円形の間には押点文を2～3個配している。文様帯は肥厚している。3は第34図7に示した土器である。復元口径26.4cm。口縁部には4箇所に2個の山形を単位としたこぶ状の突起がつけられている。文様帯は肥厚し、胴部の無文部分との境には高い段ができています。胴部はあまり張らない。内面は口縁より約1.5cm下って、稜線ができそれより下は膨らみを持って胴部に移行している。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。4は第24図19の復元図である。復元口径3.4cmである。口縁部は直線的に内傾している。文様帯の肥厚も大きい。文様は先に述べたとおりである。5は第32図6に示した土器の復元図である。復元口径37.0cmである。口縁部にはやや大きい方形の隆起部分があり、その両端部から粘土紐が伸びているが、途中で欠損している。両者をつないだ把手になると考えられる。文様は極めて鮮明で文様帯も幅広い。文様の構成は先に説明したとおりである。文様からみれば古段階の土器であるが、文様帯は肥厚している。6は復元口径33.0cmである。口縁部は刻みが入れられ、小さな波状をなす。口縁下1cmとその下5cmぐらいのところ横にめぐらした凹線があり文様帯を区画している。が、口縁直下には押点文が2段に施文され、下段の押点文は凹線と重複している。文様は中心に押点文とC字状の凹線を組み合わせた文様があり、両側にC字状の凹線と先端がワラビ状に曲がった直線、直線を組み合わせた文様を施文している。文様帯は肥厚せず、施文される文様も古いことから下層の土器が混入した可能性もある。7は無頸の壺形の土器である。復元口径20.8cm。口縁部は丸味をもって大きく内傾する。口縁部は帯上に肥厚し、下端に段がつく。口唇部は平坦に仕上げている。内外面ともに横ナデ調整であるが、一部口縁内側にはヘラ削り状の調整も見られる。8～13は鉢形あるいは浅鉢形の土器である。8は約半分を残す破片であるが、底部は欠損し形状は不明。やや深く、鉢形をなす。口縁部近くでわずかに屈曲し、口縁が立ち上がる。復元口径17.2cm。外面には横方向の荒い研磨後にヘラにより削り状、あるいは普通の沈線でもって文様を施文している。文様はやや弧状になった平行沈線で、菱形を基調とした文様を施文している。内面はやや丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。9は約3分の1を残す破片である。底部を欠損する。退部は直線的に外反し、底部は平底に近い丸底になると考えられる。口唇部はヘラなどによって平坦に仕上げられている。内外面ともに粗い横方向のヘラ研磨調整である。復元口径20.2cm。10は8と良く似た器形で口縁部近くでわずかに屈曲し、口縁が立ち上がる。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。復元口径19.4cm。11は第34図6に示した土器の復元図である。4箇所に突起が作られている。器形は前者同様に鉢形になる。詳細は先に述べたとおりである。復元口径19.0cm。12は小型の浅鉢形の土器である。復元口径19.1cm。2個を単位としたこぶ状の突起が4箇所にあると考えられる。突起の上面には渦巻き文が描かれている。口唇部は平坦である。口縁直下には筋が明瞭に残った短直線が2段に施文されている。内外面ともに横方向の粗いヘラ研磨調整である。13は華麗な隆起帯をつけた浅鉢形土器である。隆起帯にはさらに5個の突起がつきそれぞれに小さい円孔がうがたれている。隆起部には2条の平行沈線を施文し、口縁下の肥厚した

文様帯には縦に施文された平行沈線と三角形に面取りされた文様を組み合わせている。沈線には赤色顔料が塗られている。突起の円孔や顔料、装飾から考えて特別の用途がある土器とみられる。復元口径26.2cm。14は異形の土器である。底部胴部の一部が残っている。底部は半月形で一種の扁壺状のものであろうか。15はミニチュワ土器である。口径7.2cm、器高4.1cmである。

(2) 石器

同層出土の石器には、石鏃、同未製品、組合せ石銛の銛頭、石槍、スクレイパー、磨製石斧、同未製品（失敗品）、打製石斧、双角状礫石器、尖頭状礫石器、礫石器、石錘、有溝石錘、叩石、凹石、磨石、石皿、砥石、擦切具、ハンマー等がある。以下、遺物の説明については出土場所が明らかな物については遺物番号（1次調査については1-遺物番号、2次調査については2-遺物番号）で標記し、包含層出土で一括取り上げ遺物については、包-遺物番号で標記する。

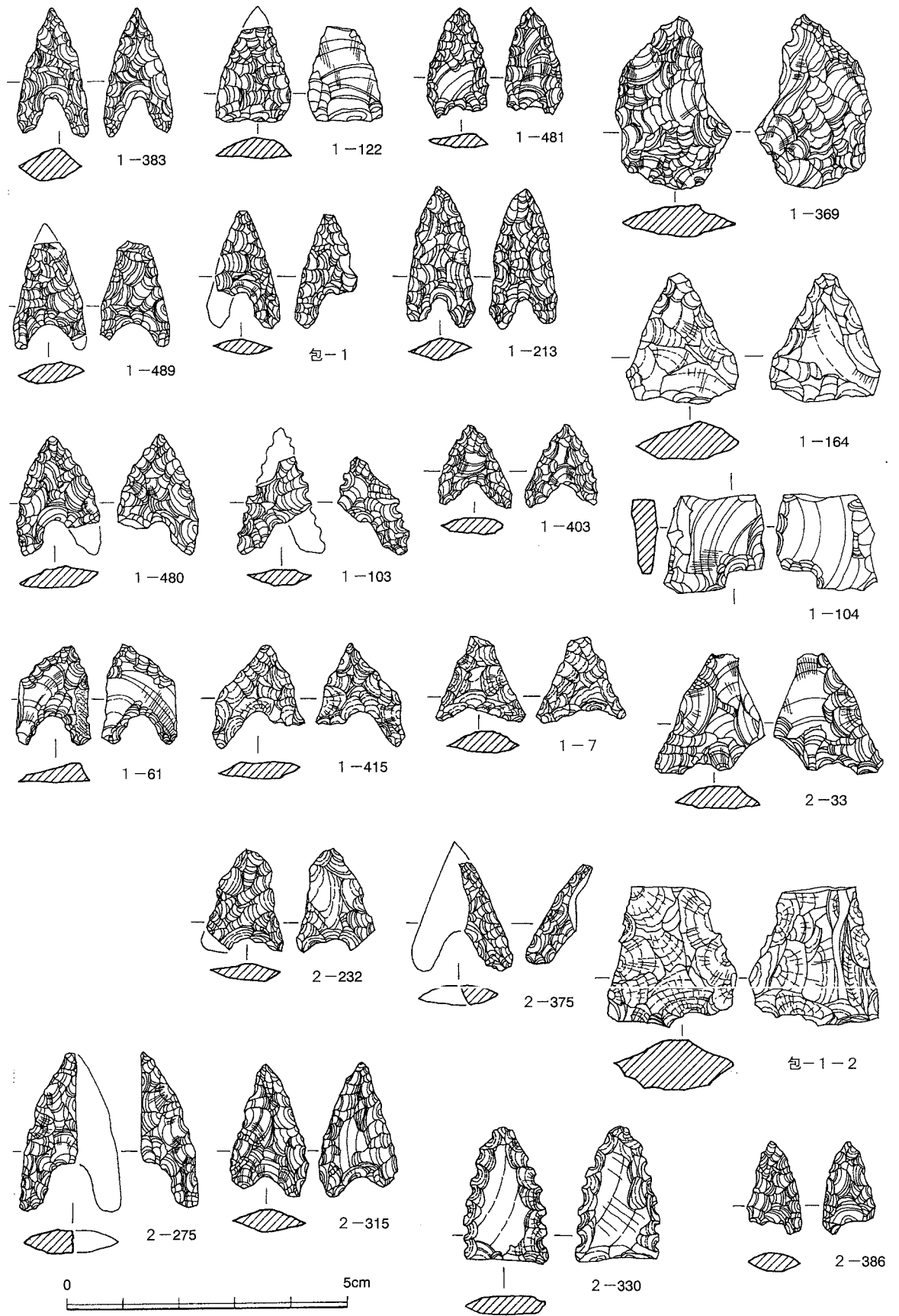
第36図は石鏃および同未製品を図示した。石鏃は形態から、a.長身で基部が平坦な石鏃（1-122、1-481）、b.長身で基部に浅い抉りを入れる石鏃（1-499、1-213、2-119、2-232、2-315、2-386）c.長身で基部に深い抉りを入れた石鏃（1-383、2-480、2-375、2-275）d.正三角形に近い形態で基部に浅い抉りを入れた石鏃（1-403、1-7）e.五角形をなし基部に深い抉りをいれた石鏃（1-61、1-415）f.形態的にはcではあるが側辺に鋸歯列をつくり出した石鏃（1-103）g.形態的にはaであるが側辺に大きい鋸歯列をつくり出した石鏃の7種類に分類できる。全体に押圧剥離を加えて丁寧に製作されているが、1-122は片面に大きく主要剥離面を残している。また、61は抉りと先端部に加工が加えられ、両面に大きく剥離面を残し、一種の剥片鏃と考えられる。2-330は側辺にやや大きい鋸歯列があり、石鏃よりも組合せ石銛の銛頭としての使用が考えられる。1-369、1-164、2-33は石鏃未製品である。石鏃、同未製品の計測等は第2表に示した。

第2表 第2層出土石鏃計測表

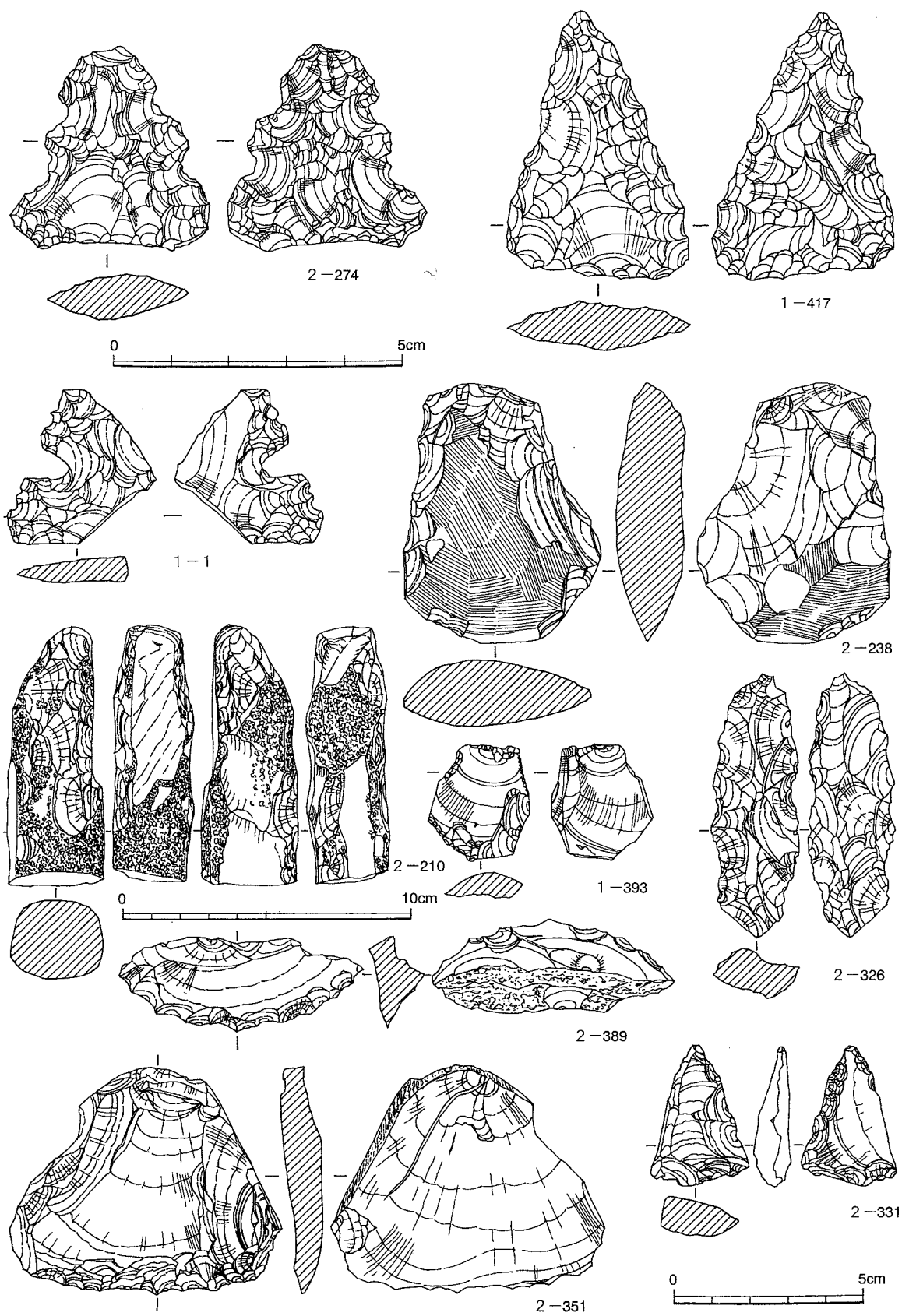
遺物番号	長mm	幅mm	厚mm	重g	石材	出土区	備考	遺物番号	長mm	幅mm	厚mm	重g	石材	出土区	備考
1-383	23.3	12.6	6.0	0.78	ob	B-2区	石鏃先端欠	1-61	16.6	12.6	3.4	0.49	ob	A-1区	石鏃
1-122	17.0+ α	13.6	4.0	0.67	ob	A-4区	石鏃	1-415	17.3	15.9+ α	3.0	0.54	ob	D-2区	石鏃
1-481	18.8	10.7	2.8	0.56	ob	D-2区	石鏃	1-7	14.7	14.7	4.0	0.58	オカサ	A-2区	石鏃
1-369	28.8	19.6	5.6	3.26	ob	B-1区	石鏃未製品	2-33	20.5	18.6	3.9		オカサ	D-3区	石鏃未製品
1-489	18.0+ α	12.2	3.9	0.75	ob	D-2区	石鏃、先端、片脚欠	2-232	17.1	13.0+ α	3.0		ob	D-3区	石鏃
包-1-1	19.1+ α	10.6+ α	3.0		ob	A-2区	石鏃、片脚欠	2-375	18.3+ α	9.4+ α	3.3	0.39	ob	H-3区	石鏃
1-213	24.1	11.6	3.9	0.88	ob	A-3区	石鏃	包-1-2	23.9+ α	21.9	8.7	5.05	オカサ	B-1区	石鏃未製品
1-164	22.1	19.1	6.1	2.61	オカサ	A-4区	石鏃未製品	2-275	27.0	10.3+ α	4.2	0.93	ob	D-3区	石鏃
1-480	19.9	14.2+ α	3.8	0.82	ob	D-2区	石鏃、片脚欠	2-315	22.6	13.5	3.9		ob	H-3区	石鏃
1-103	16.3+ α	12.7+ α	2.6	0.37	ob	A-3区	石鏃、先端、片脚欠	2-330	22.9	14.6	3.5	1.57	オカサ	D-3区	銛頭か
1-403	14.1	12.5	3.0	0.38	ob	C-2区	石鏃	2-386	15.8	9.4	3.2	0.44	ob	D-3区	石鏃
1-104	16.5	17.5	4.1	1.58	オカサ	A-3区	コンケーブスクレイパー 石鏃未製品								

1-104は黒曜石（腰岳）の剥片を利用したコンケーブスクレイパーである。抉り部分に両面から剥離を加えている。重量1.58gを測る。

第37図の2-274、1-417、1-1は組合せ石銛の銛頭である。2-274、腰岳産の黒曜石剥片を素材として、両面からやや粗い剥離を加え整形している。側辺に共に2ヶ所の大きい抉りがある。先端部と基部の両端を欠損する。長さ3.5cm+ α 、幅3.5cm+ α 、厚さ0.8cm、重量8g+ α を測る。P-3区出土。1-417は長身の三角形をなし、基部は平坦である。サヌカイトの素材に両面からやや粗い剥離を加え整形している。長さ4.7cm、幅3.2cm、厚さ0.8cm、重量9gを測る。1-1もサヌカイトを



第36图 2層出土石器实测图 I

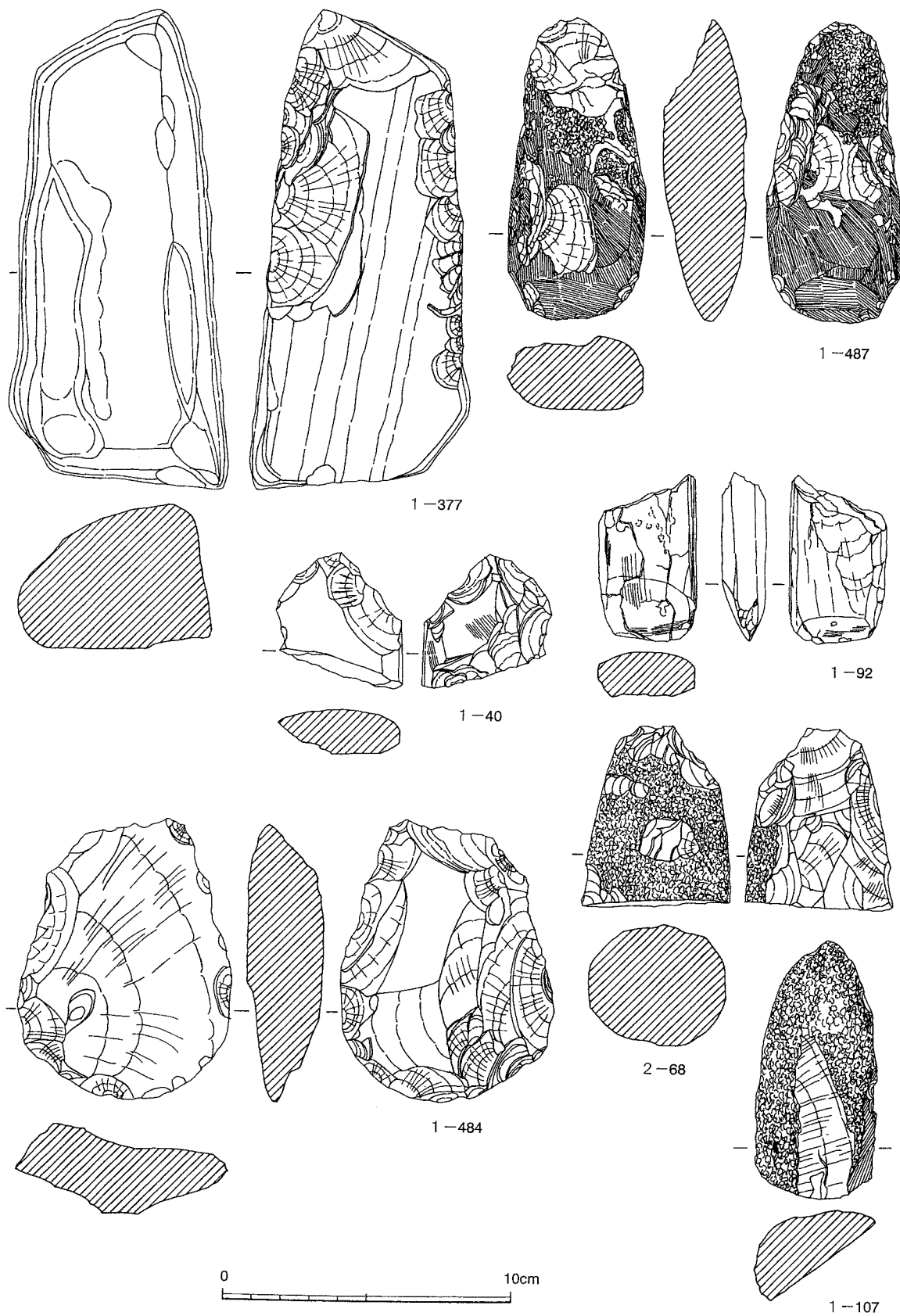


第37图 2層出土石器実測図Ⅱ

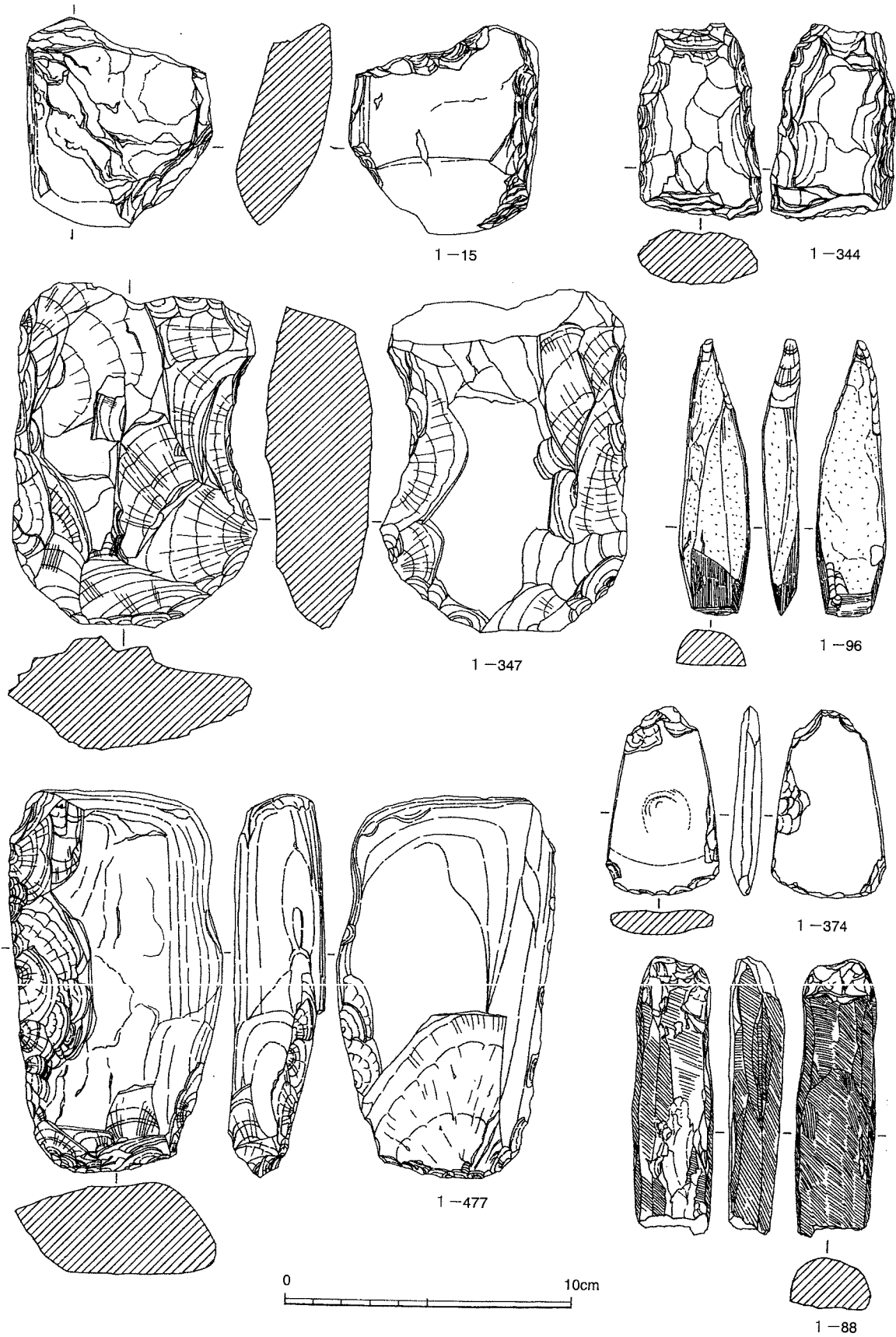
素材としている。大部分を欠損し、基部と側辺の一部を残すにすぎない。基部は平坦で側辺には2ヶ所に大きな抉りを入れ、抉りのない部分には鋸歯列がつくり出されている。長さ $1.7\text{cm} + \alpha$ 、幅 $2.6\text{cm} + \alpha$ 、厚さ 0.5cm 、重量 $2\text{g} + \alpha$ を測る。2-238は頁岩製の磨製石斧である。使用により頭部が折れた後、改めて胴上半部に剥離を加え再生している。現状では揆形をなすが、元来は短冊形に近い形状であったと考えられる。刃部周辺には丁寧な研磨が加えられ、刃部は鋭い。全体に風化が著しい。長さ 9.0cm 、幅 $4.0\sim 6.8\text{cm}$ 、厚 2.4cm 、重量 168g 。2-210は硬質砂岩製の柱状の磨製石斧未製品である。部分的に自然面を残し、小さな棒状の円礫を素材としていることがうかがえる。先ず素材に剥離を加え整形し、その後敲打を加えているが、この段階で半折し製作が中断されている。頭部は尖り気味に細くなり、他は柱状で断面形は楕円形をなす。長さ $9.0\text{cm} + \alpha$ 、径 $2.9\sim 3.3\text{cm}$ 、重量 $130\text{g} + \alpha$ 。1-393は黒曜石（腰岳）剥片を素材としたスクレイパーである。打面を除いたエッジの片面に二次加工がみられる。長さ 3.0cm 、幅 2.6cm 、厚 0.7cm 、重量 5.05g 。2-326はサヌカイト製の石槍と考えられる石器である。両面からやや粗い剥離を加え、柳葉形に整形している。長さ 6.9cm 、幅 2.3cm 、厚 1.3cm 、重量 15g 。2-389、2-351、2-331はサヌカイト剥片を素材としたスクレパーである。2-389は半月形をした横剥ぎの剥片のエッジ部分に両面から小さな剥離を加え刃部を形成する。打面に自然面を残す。長さ 6.4cm 、幅 $1.5\sim 2.5\text{cm}$ 、厚 1.2cm 、重量 14g 。2-351は略三角形をなし、打面に自然面を残す。エッジに片面から、二次加工を施し刃部を形成する。長さ 5.9cm 、幅 7.2cm 、厚 1.0cm 、重量 46g 。2-331はやや長身の三角形をなす。尖頭部がつくり出され、側辺と底辺に粗い剥離を加えている。形状等から石鏃未製品とも考えられる。長さ 3.7cm 、幅 2.6cm 、厚 1.0cm 、重量 7g 。

第38図には磨製石斧、同未製品、打製石斧を図示した。1-377は平面が短冊形をしたやや厚目の砂岩の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。片面の両側に剥離を加えただけで製作を中止している。長さ 16.5cm 、幅 $5.3\sim 7.3\text{cm}$ 、厚 5.0cm 、重量 936g 。1-487は頁岩製の磨製石斧である。頭部から胴部にかけて剥離痕、敲打痕を残すが、胴部から刃部にかけては丁寧に研磨されている。刃部は両刃で使用による刃こぼれが多い。長さ $10.4\text{cm} + \alpha$ 、幅 $2.3\sim 4.8\text{cm}$ 、厚 2.9cm 、重量 179g 。1-40は頁岩製の扁平な磨製石斧胴部破片。全体に丁寧に研磨されているが、頭部、刃部を欠損している。長さ $4.6\text{cm} + \alpha$ 、幅 $4.5\text{cm} + \alpha$ 、厚 1.5cm 、重量 $31\text{g} + \alpha$ 。1-92は頁岩製の扁平片刃石斧である。頭部を欠損する。全体に風化が著しく製作痕は明瞭でない。刃部は片寄り刃をなす。長さ $5.7\text{cm} + \alpha$ 、幅 3.4cm 、厚 1.5cm 、重量 $44\text{g} + \alpha$ 。2-68は頁岩製の打製石斧とみられる。頭部を欠損するが、全体形は刃部が広がる揆形をなすと考えられる。周囲に粗い加工を施し整形している。長さ $9.7\text{cm} + \alpha$ 、幅 7.4cm 、厚 2.6cm 、重量 $190\text{g} + \alpha$ 。2-68は乳棒状石斧の頭部破片。整形のための剥離痕と敲打痕が顕著であり、未製品の可能性も強い。良質の安山岩を素材としている。長さ $6.3\text{cm} + \alpha$ 、径 $4.2\sim 4.8\text{cm}$ 、重量 $164\text{g} + \alpha$ 。1-107も安山岩製の乳棒状石斧未製品と考えられる。頭部から胴部にかけての破片で節理にそって半截している。一部に剥離痕がみられるが、全体は敲打によって調整され、一部には研磨が加えられている。研磨中に破損し中断したと考えられる。長さ $9.0\text{cm} + \alpha$ 、幅 $4.3\text{cm} + \alpha$ 、厚 $3.2\text{cm} + \alpha$ 、重量 $123\text{g} + \alpha$ 。

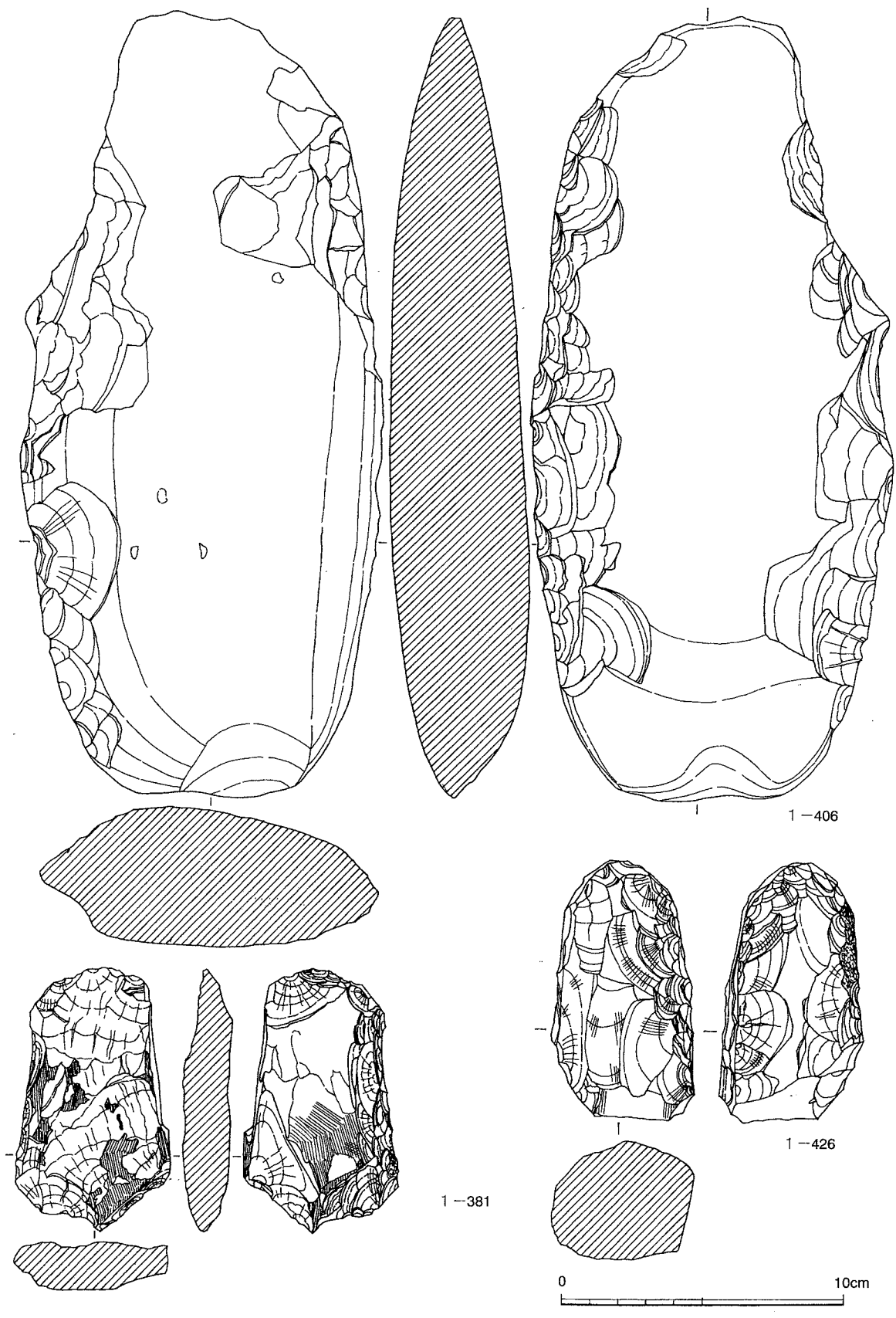
第39図は磨製石斧、同未製品を図示した。1-15は蛇紋岩製の磨製石斧刃部破片である。刃部は両刃、全体に摩耗し研磨痕等は不明瞭。長さ $7.3\text{cm} + \alpha$ 、幅 6.6cm 、厚 $2.5\text{cm} + \alpha$ 、重量 $153\text{g} + \alpha$ 。1-344は雲母片岩を素材とした磨製石斧未製品である。頭部から胴部にかけての破片であるが、頭部先端と刃部部分を欠損する。全体に粗い剥離を加え整形している。長さ $6.9\text{cm} + \alpha$ 、幅 4.3cm 、厚 1.9cm 、重量 $74\text{g} + \alpha$ 。1-347は砂岩製の大型の磨製石斧未製品である。一部に自然面を残し、円礫を素材としていることがわかる。両面から粗い剥離を加え整形し、さらに細部加工を施している。平面形は長方形であるが頭部を欠損する。長さ $11.9\text{cm} + \alpha$ 、幅 $7.6\sim 8.6\text{cm}$ 、厚 $2.9\sim 3.7\text{cm}$ 、重量 $458\text{g} + \alpha$ 。1-96は頁岩製の柱状片刃石斧である。棒状の自然石の一端に研磨を加え刃部をつくり出している。刃部は片側から



第38图 2層出土石器実測図Ⅲ



第39图 2層出土石器实测图IV



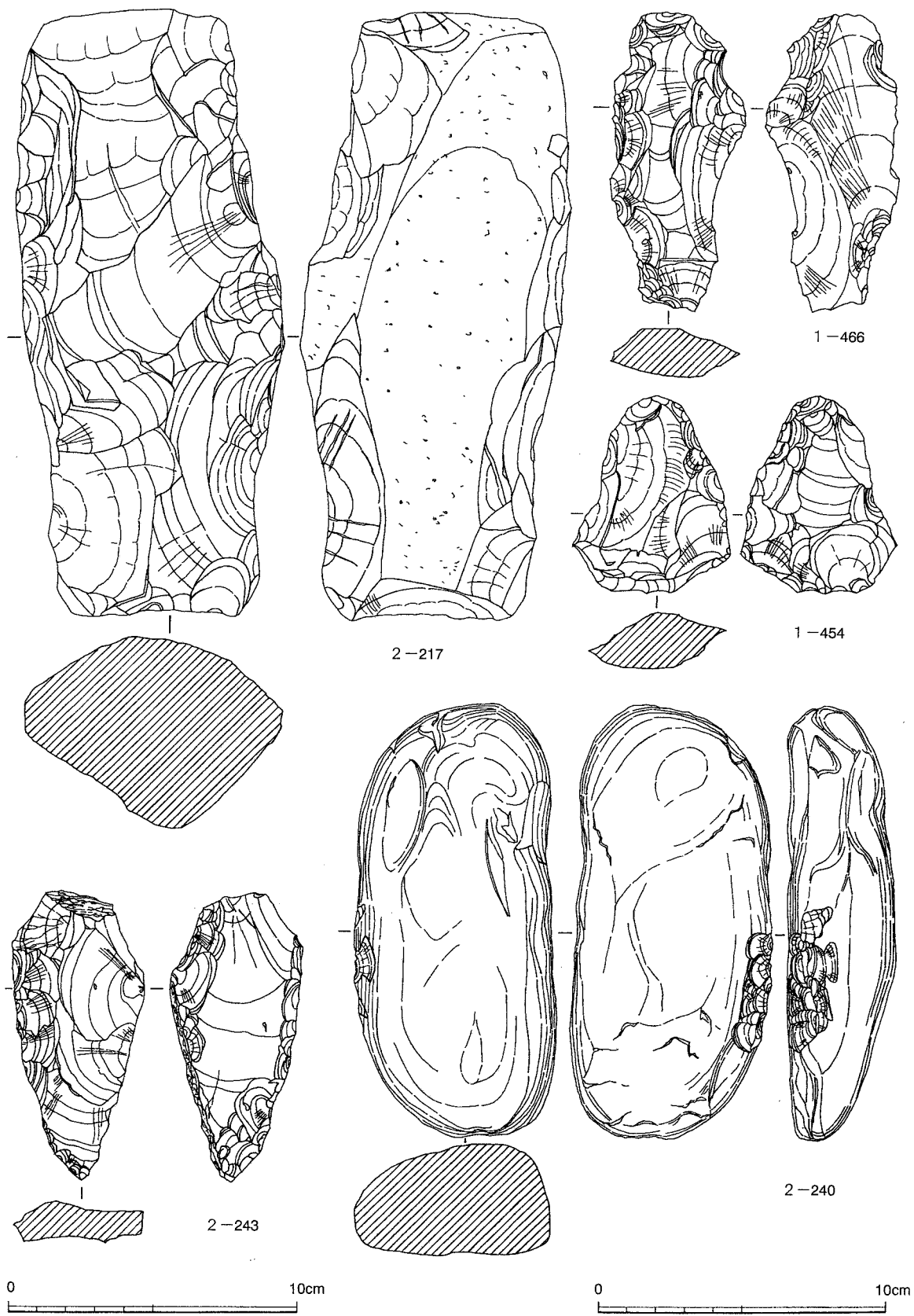
第40图 2層出土石器実測図V

研ぎ込まれた片寄り刃である。刃部以外には特別の加工はなく、胴部断面形はカマボコ形をなす。長9.5cm、幅0.6~2.5cm、厚1.2cm、重量37g。1-477は頁岩の扁平礫を素材とした磨製石斧未製品である。平面形は長方形をなす。刃部と側辺に剥離を加え整形しているが、その時点で製作を中断している。長13.2cm、幅7.4cm、厚3.2cm、重量451g。1-374は蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。平面形は揆形をなす。頭部を側辺の一部に剥離痕がみられるが、全体に丁寧に研磨される。研磨痕は不明瞭。刃部は片面が強く研ぎ込まれ片寄り刃をなす。また、刃部の使用痕が顕著で刃こぼれが目立つ。長6.5cm、幅4.0cm、厚0.8cm、重量20g。1-88は蛇紋岩製の柱状の磨製石斧で刃部を欠損している。頭部と胴部に若干の剥離痕がみられるが、全体に丁寧な研磨が加えられている。頭部よりやや下った所に浅い抉りがつけられている、いわゆる抉入石斧である。断面形はカマボコ形をなし、欠損する刃部は片刃になると推測される。長9.6cm+ α 、幅2.8cm、厚1.9cm、重量89g+ α 。

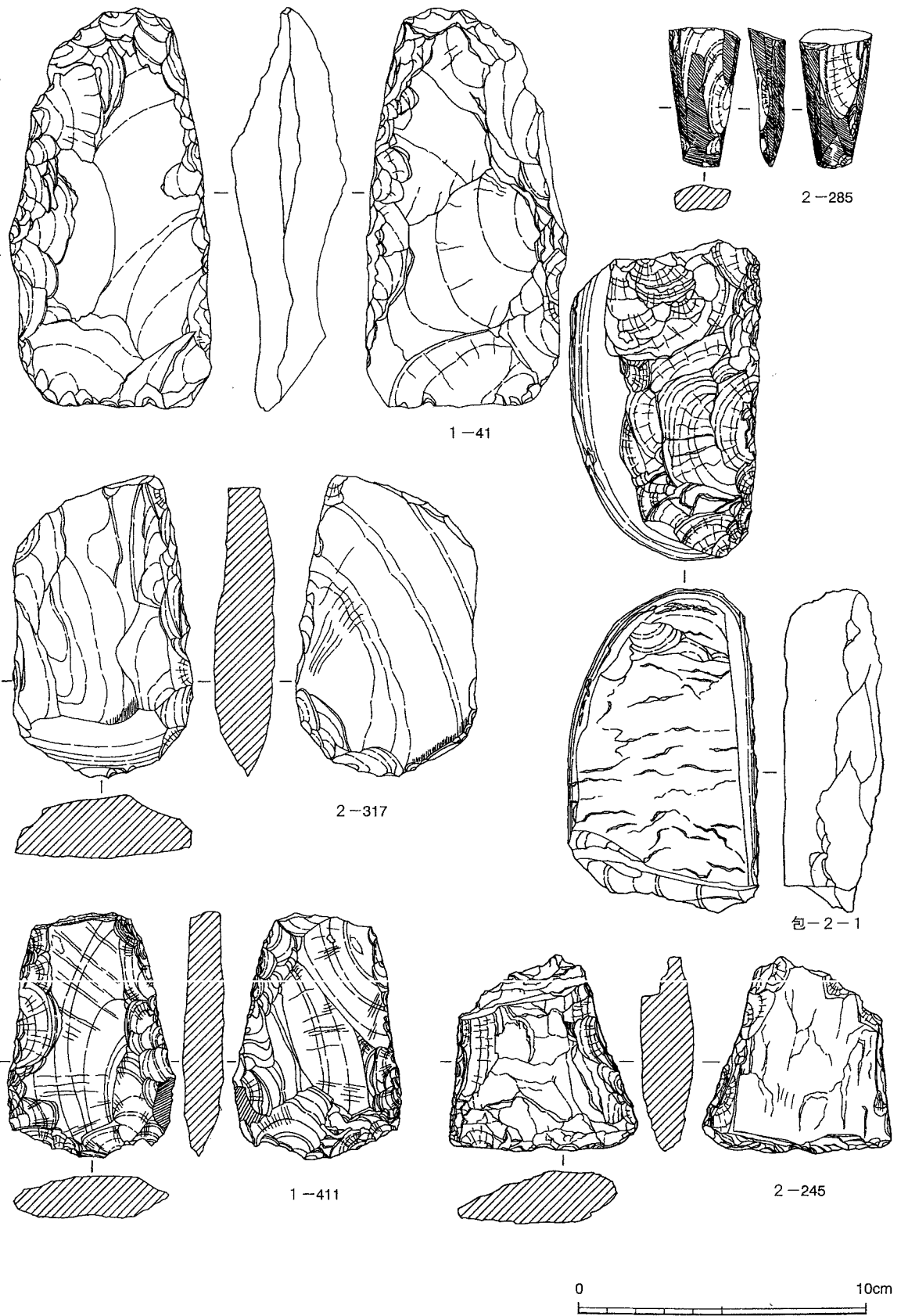
第40図は磨製石斧未製品を図示した。1-406は安山岩の扁平な自然礫を素材とした超大型の磨製石斧未製品である。平面形は小判形で、両端部は自然の状態では蛤刃状をなしている。側辺に両面から粗い剥離を加え整形しているが、側辺上部が剥離時に大きく割れているために製作を中断したと考えられる。長27.2cm、幅7.0~12.7cm、厚4.8cm、重量2200g。1-381は頁製の磨製石斧未製品である。平面形は揆形をなす。側辺の一方は節理を利用し、他方のみ剥離を加え整形している。部分的に研磨が加えられるが、刃部形成に失敗し、製作を中断している。長9.3cm、幅4.3~5.4cm、厚1.7cmある。重量113g。1-426は頁岩製の磨製石斧未製品である。両面から丁寧な剥離を加え整形し、側辺の一部に敲打を加えているが、その段階で刃部を欠損したと考えられる。厚さがあり伐採用の石斧と考えられる。長9.1cm+ α 、幅5.1cm、厚4.1cm、重量238g。

第41図は磨製石斧未製品とスクレイパーを図示した。2-217は玄武岩を素材とした大型の磨製石斧未製品である。平面形は短冊形をなす。片面には自然面を大きく残し、他面は両側から剥離を加え、石斧の略形に整形している。長20.9cm、幅5.7~8.9cm、厚6.5cm、断面形は不整楕円形をなす。重量1560g。1-466はサヌカイト製のスクレイパーである。不定形剥片の側辺に粗い剥離を加え刃部としている。長7.7cm、幅1.5~3.4cm、厚1.3cm、重量35g。1-454、2-243もサヌカイト製のスクレイパーである。1-454は不定形剥片の側辺の一方に両面から細かい剥離を加え刃部を形成している。長5.1cm、幅2.2~4.1cm、厚1.5cm、重量23g。2-243は縦長の剥片を素材としている。剥片は打面と側辺の一方に自然面を残している。先端部に加工を加え尖頭状に尖らせ、一方の側面に両面から細部加工を加え刃部を形成している。刃部の長さ6.5cmを測る。上記のスクレイパーとは異なり丁寧に製作されている。長7.5cm、幅3.5cm、厚0.6~0.9cm、重量27g。2-240は頁岩の扁平円礫を素材とした磨製石斧未製品と考えられる。隅丸の短冊形の石材を選択し、側辺の一部に敲打を加えて剥離を加えている。敲打器と考えることもできるが、大きさ、石材等から石斧未製品とした。同資料から石材の選択にあたって、製作すべき石斧の形状を考慮に入れていることが推測できる。長14.8cm、幅7.9cm、厚3.9cm、重量554g。

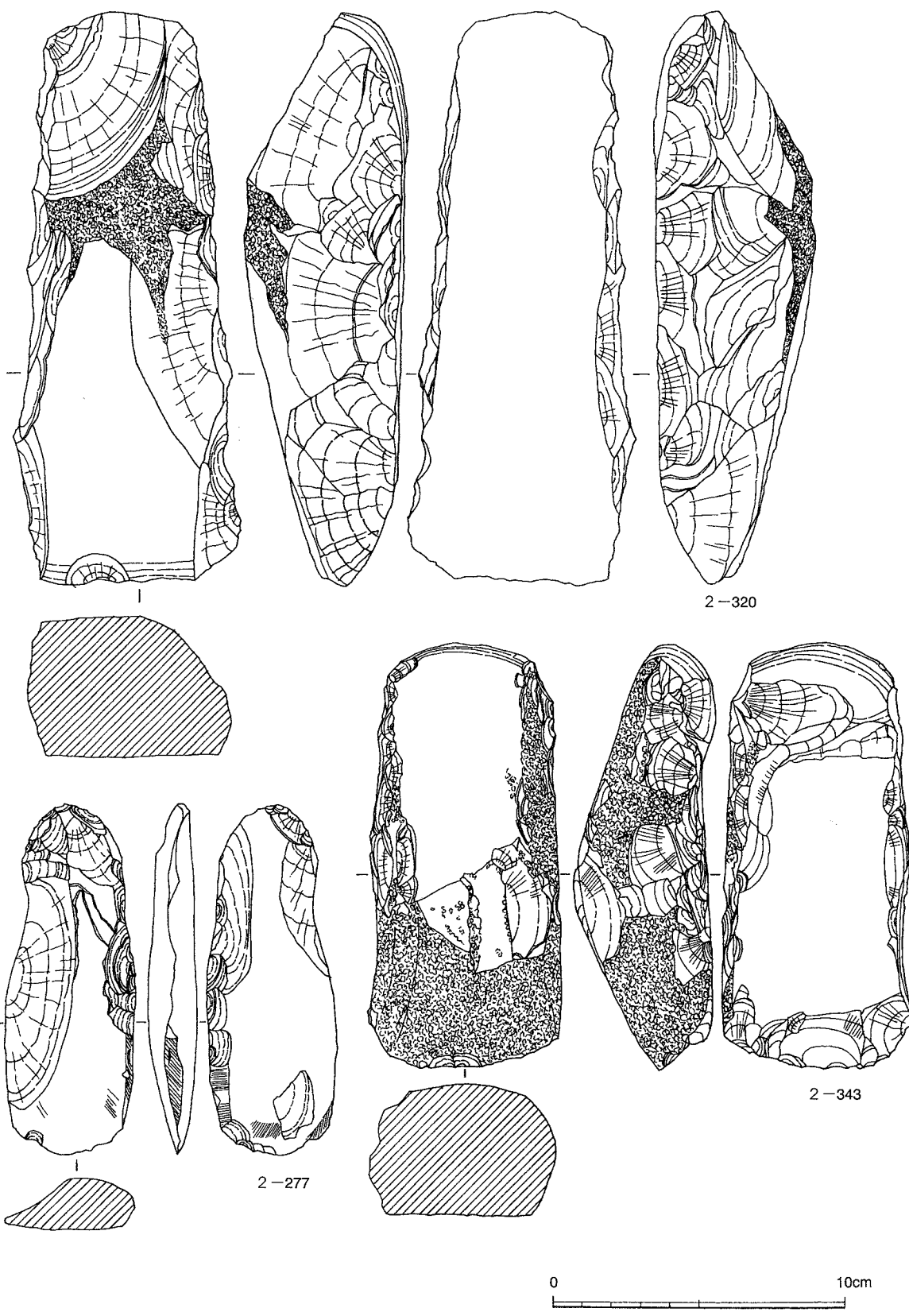
第42図は打製石斧、磨製石斧、同未製品を図示した。1-41、2-317は打製石斧である。1-41は安山岩の大型の剥片を素材として周縁部に剥離を加えて揆形に整形している。刃部には使用痕が認められ、未製品との区別は容易である。長14.0cm、幅4.3~7.0cm、厚4.0cm、重量363g。2-317は粘板岩の剥片を素材としている。頭部を欠損する。側辺は片面から剥離を加え整形し、刃部は自然面をうまく取り込み、片面から剥離を加え形成している。刃部は使用により部分的に磨滅している。平面形は短冊形をなす。長10.4cm+ α 、幅5.5~6.2cm、厚1.1~2.0cm、重量181g+ α 。2-285は頁岩製のノミ形磨製石斧である。石斧は胴下半から刃部にかけての破片で、胴上半部を欠損する。石斧は胴部から刃部に向かって徐々に幅をせばめ、刃部幅は1.3cmを測る。全体に良く研磨されるが、両面に剥離痕を残している。刃部は片側から研ぎ込まれ片刃をなす。刃部は使用による刃こぼれが顕著である。長4.8cm



第41图 2層出土石器実測图VI



第42图 2層出土石器実測图Ⅶ



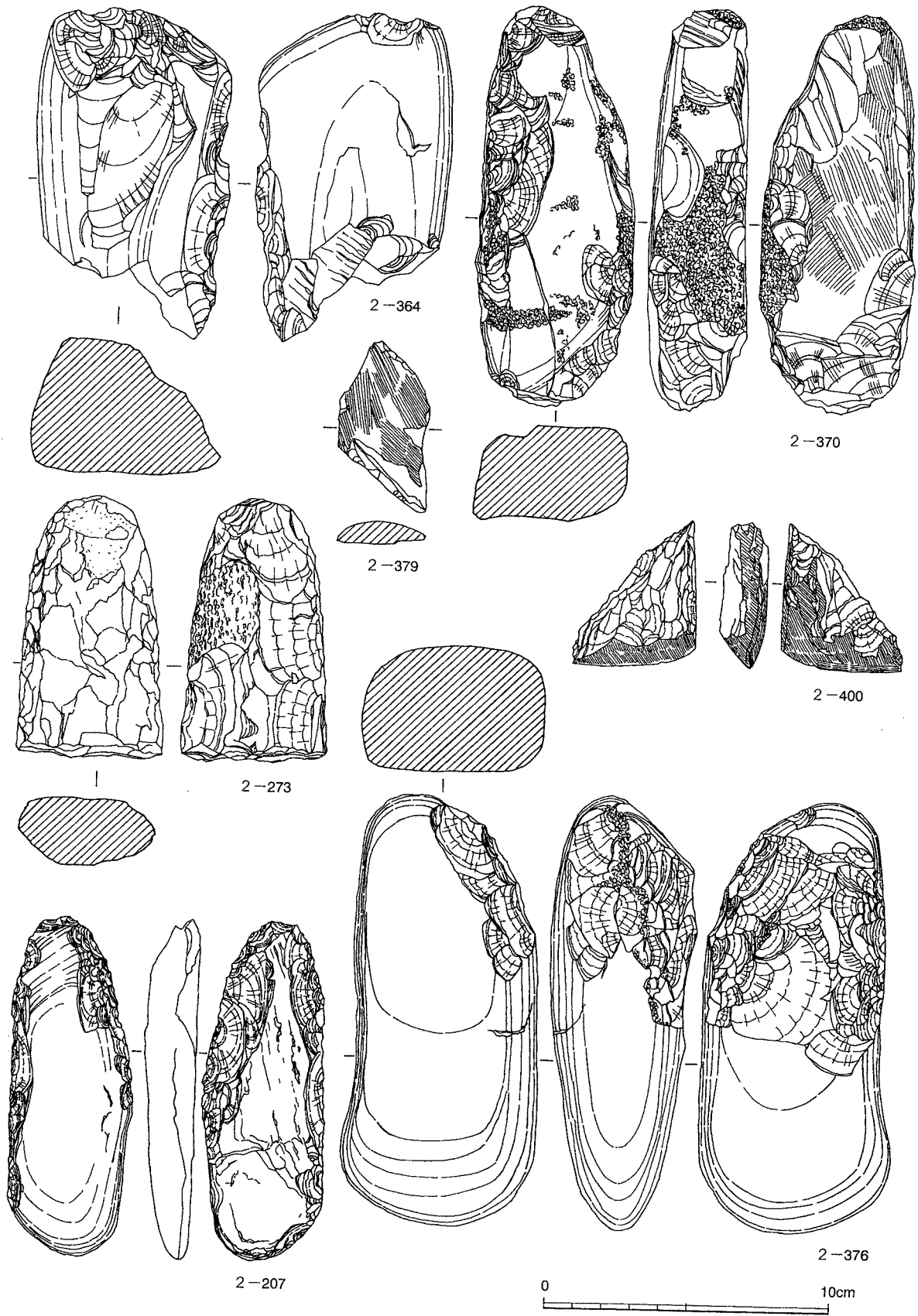
第43图 2層出土石器実測図Ⅷ

+ α 、幅1.3~2.5cm、厚0.7~1.3cm、重量17g+ α 。包-2-1は頁岩製の磨製石斧未製品である。円礫を半截し、半截面の逆の面は側辺の一方から剥離を加えて略形に整形するが、刃部に当たる部分が欠損したために製作を中断している。長12.2cm+ α 、幅6.7cm、厚3.5cm、重量318g+ α 。1-411はサヌカイト製の打製石斧あるいは石筥（スクレイパー）と考えられる石器である。大型の横剥ぎの剥片を利用し、平面形は揆形をなす。頭部に自然面を残すが、他の辺は両面から丁寧な剥離が加えられ刃部が形成される。長8.4cm、幅3.5~5.9cm、厚1.5cm、重量84g。2-245は蛇紋岩製の磨製石斧未製品である。胴下半から刃部にかけての破片、胴上半以上を欠損する。平面形は揆形をなし、刃部にむかって大きくひろがる。全体に細かい剥離を加えて整形する。片面に自然面を大きく残している。長6.6cm+ α 、幅4.7~6.5cm、厚1.9cm、重量81g+ α 。

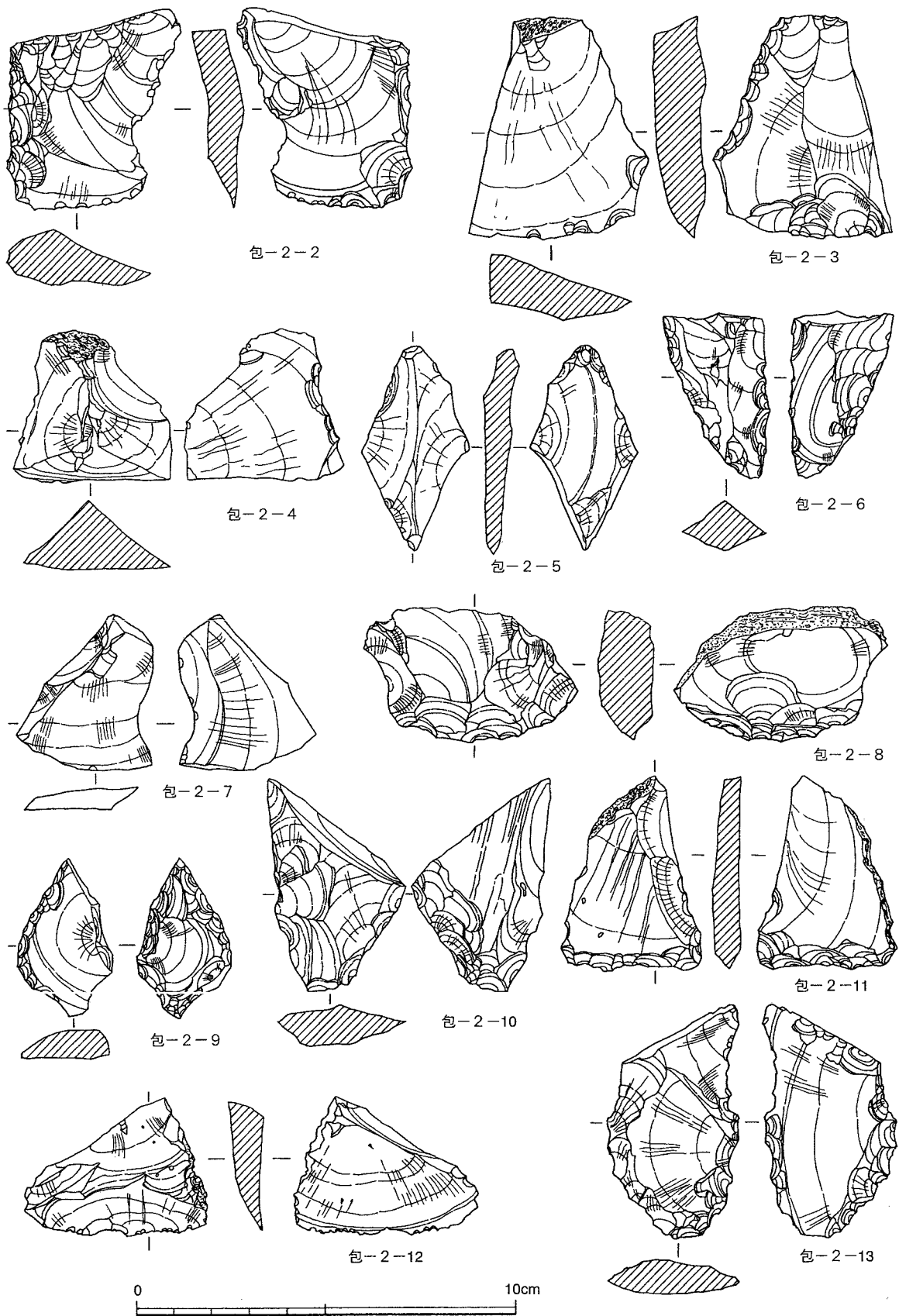
第43図は磨製石斧と同未製品を図示した。2-320は硬質砂岩を素材とした大型磨製石斧の未製品である。良く磨滅した扁平な大型円礫中央部を縦に打割し、石斧外形を整形するが整形加工は両側面に集中する。剥離はいずれも反面側より側面に加えられ、表裏面にはほとんど及んでない。凸部のある面の凸部に敲打が加えられ、平坦化が試みられているが、全体として製品には遠くおよばない。平面形は短冊形をなす。長19.5cm、幅5.2cm~7.3cm、刃部になる部分がやや幅広い。厚3.5cm~5.4cm、断面長方形をなす。重量1090g。2-277は安山岩製の磨製石斧である。表面が風化のため剥落し研磨痕等の詳細は明瞭でない。側辺に整形のための剥離痕が残る。全形は略短冊形をなし、側面と刃部の一部に研磨痕が観察できる。長11.8cm、幅4.4cm、厚1.7cm、重量106g。2-343は硬砂岩製の磨製石斧未製品である。隅丸長方形の円礫を素材として、側面に丁寧な剥離を加え整形後、側面と片面の全面にわたって敲打を加えているが、敲打段階に刃部が欠損したと考えられ、製作を中断している。長14.5cm+ α 、幅6.6cm、厚4.6cm、重量690g+ α 。

第44図は磨石石斧、同未製品を図示した。2-364は頁岩を素材とした磨製石斧未製品である。円礫に剥離を加えて整形するが、この段階で半折し、製作を中断している。長11.5cm+ α 、幅6.9cm、厚4.7cm、重量469g+ α 。2-370は硬砂岩の棒状の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。側辺の一部と刃部に剥離を加え整形するが、礫をうまく利用している。その後、部分的に敲打を加え調整し、片面には研磨を加えているが、なぜか製作を中断している。刃部形成が困難と考えたかもしれない。長13.9cm、幅5.3cm、厚3.3cm、重量403g。2-379は頁岩製の磨製石斧胴部破片である。全体に良く研磨されているが、部分的に敲打痕がみられる。長5.9cm+ α 、幅5.1cm+ α 、厚0.7cm+ α 、重量13g+ α 。2-273は蛇紋岩を素材とした磨製石斧未製品で胴上半から頭部にかけての破片で胴下半から刃部を欠損する。全体に細かい剥離を加えて整形し、一部に敲打を加えている。敲打段階で半折したため、製作を中断したと考えられる。全体形は揆形をなすと推測され、断面形は楕円形をなす。長9.2cm+ α 、幅2.6cm~5.2cm、厚2.4cm、重量157g+ α 。2-400は蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。刃部と側辺の一部を残し、他は欠損している。刃部は片側から研ぎ込まれ片刃をなし、刃部は鋭い。表面には一部剥離痕を残すが、全体に研磨が加えられている。長5.1cm+ α 、幅4.3cm+ α 、厚1.7cm+ α 、重量30g+ α 。2-207は頁岩の扁平な長楕円形の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。側辺の両面に剥離を加え整形するが、刃部は形成されていない。なぜ製作を中断したかは明かでない。長11.9cm、幅2.0~4.3cm、厚1.8cm、重量119g。2-376は頁岩の長楕円形の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。側辺の一部に両面から剥離が加えられ整形し、剥離の稜線上に一部敲打が加えられている。敲打器の可能性もあるが、形状や敲打痕から石斧未製品の可能性が強い。製作の中断が何によるか明かでない。長15.1cm、幅4.2~6.7cm、厚5.2cm、重量762g。

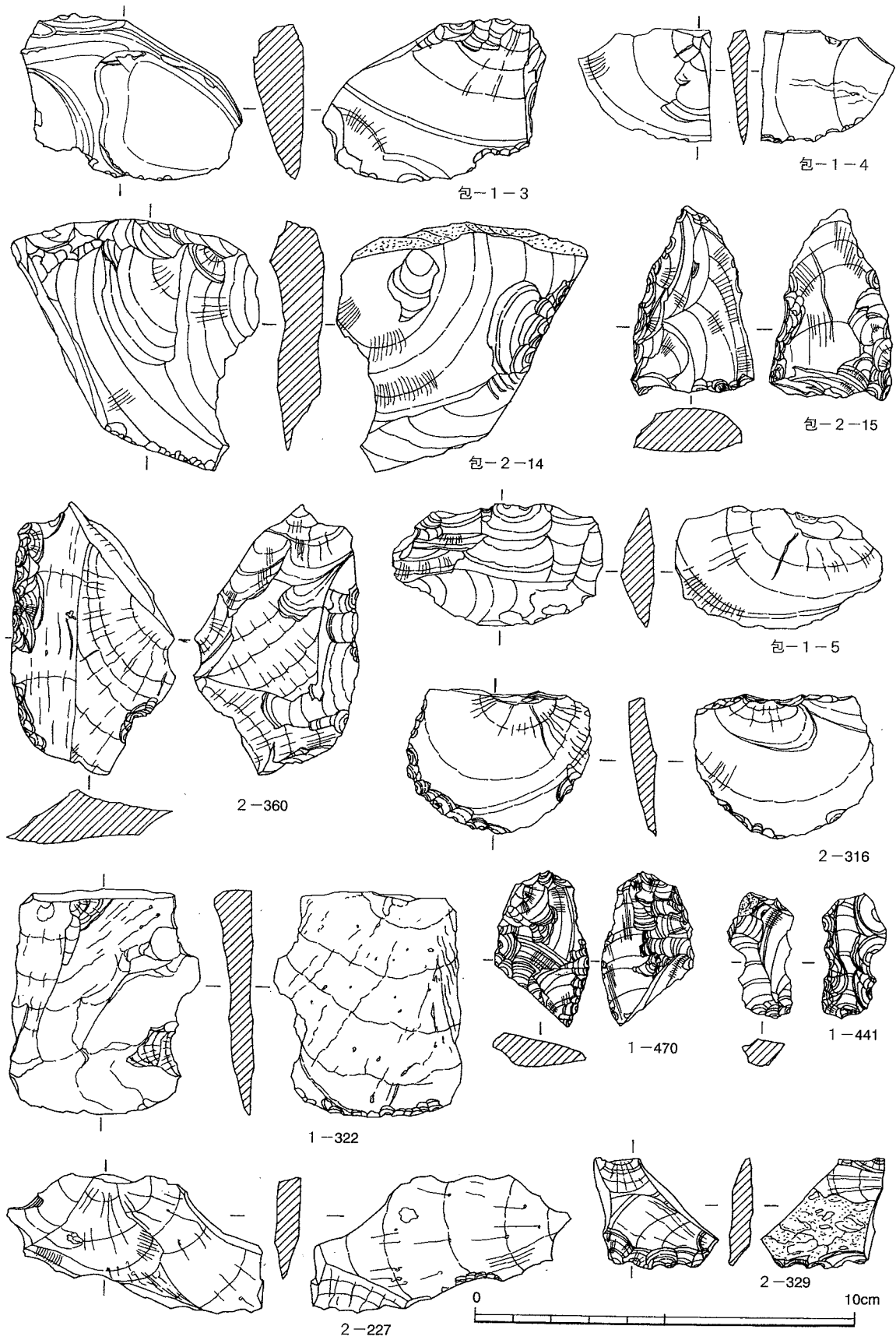
第45~47図はスクレイパーを図示した。第45図はいずれもサヌカイトの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。包-2-2は略長方形をなす。底辺と側辺の一辺に細かい剥離を加え刃部とする。



第44图 2層出土石器实测图区



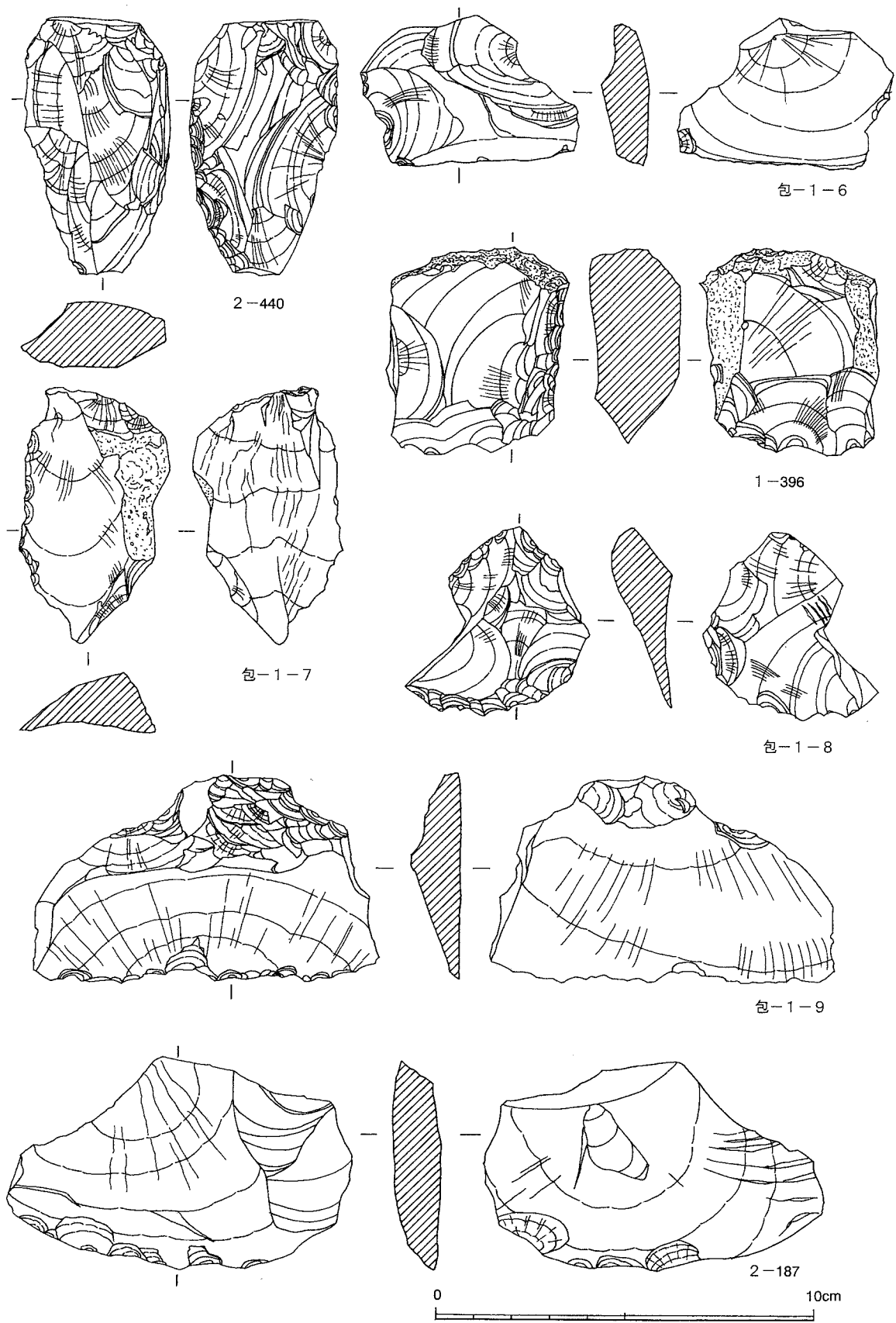
第45图 2層出土石器实测图X



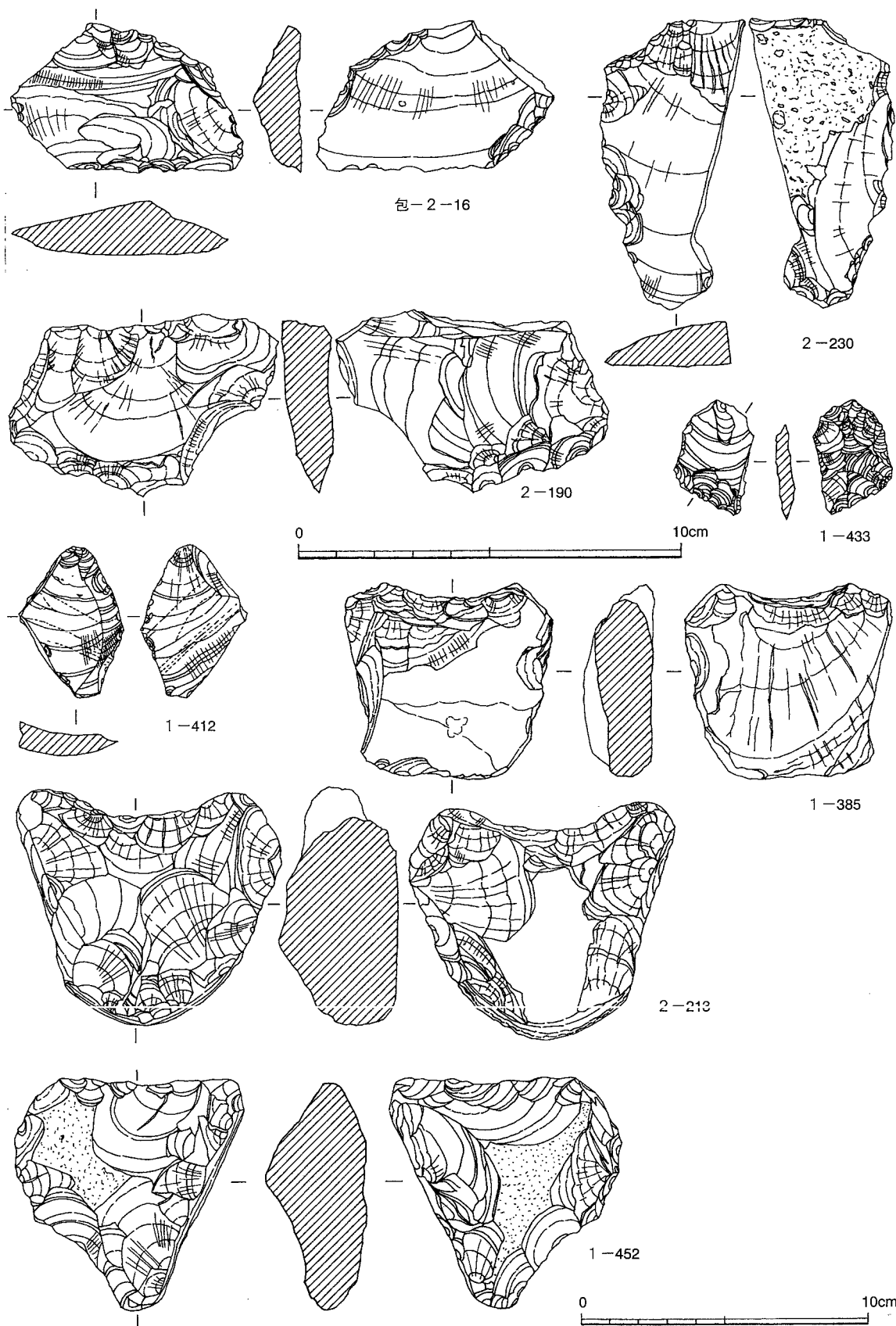
第46图 2層出土石器实测图XI

長5.2cm、幅4.5cm、厚1.5cm、重量28g。包-2-3は細長い台形状をなす。上辺が打面となり自然面を残す。底辺と側辺の一边に主に片面から細かい剥離を加えて刃部とする。長5.8cm、幅4.7cm、厚1.4cm、重量22g。包-2-4は一部に自然面を残す。側面に片面から剥離を加え刃部とする。断面三角形をなす。長4.0cm、幅4.1cm、厚1.9cm、重量22g。包-2-5は形状が菱形をなす。先端部に加工を加え先頭部をつくり出している。側辺には使用痕がみられる。長5.4cm、幅2.9cm、厚0.8cm、重量9g。包-2-6は細長い三角形をなす。側辺に両面から剥離を加えて刃部を形成する。断面形は菱形をなす。長5.7cm、幅5.5cm、厚1.8cm、重量29g。包-2-7は不整形をした剥片の湾曲した部分を使用したコンケーブ、スクレイパーである。使用部分はエッジが磨滅し変色し滑らかになり、一部刃こぼれもみられる。長4.1cm、幅3.7cm、厚0.6cm、重量7g。包-2-8は横剥ぎの剥片を素材としている。打面は自然面のままで、反対側のエッジに片面より剥離を加え刃部を形成する。長3.6cm、幅5.6cm、厚1.5cm、重量30g。包-2-9は横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーであるいは尖頭状石器である。打面と反対のエッジには両面から剥離を加え刃部を形成している。対面は片面から細かい剥離が加えられ、尖頭をつくり出している。長4.2cm、幅2.5cm、厚0.8cm、重量6g。包-2-10は平面形は三角形をなし、二辺に両面から剥離を加え刃部を形成している。長5.5cm、幅3.5cm、厚1.1cm、重量19g。包-2-11は平面形は三角形をなす。一边に自然面を残し、底辺の一边に両面から剥離を加えて刃部を形成する。長5.0cm、幅3.7cm、厚0.8cm、重量14g。包-2-12は平面形が三角形をなす。底辺の一边に使用による刃こぼれが無数にある。長3.6cm、幅4.9cm、厚0.9cm、重量11g。包-2-13は全形は楕円形をなす。一边に自然面を残す。他の辺には両面から剥離を加えて刃部を形成する。長6.1cm、幅3.5cm、厚0.8cm、重量18g。

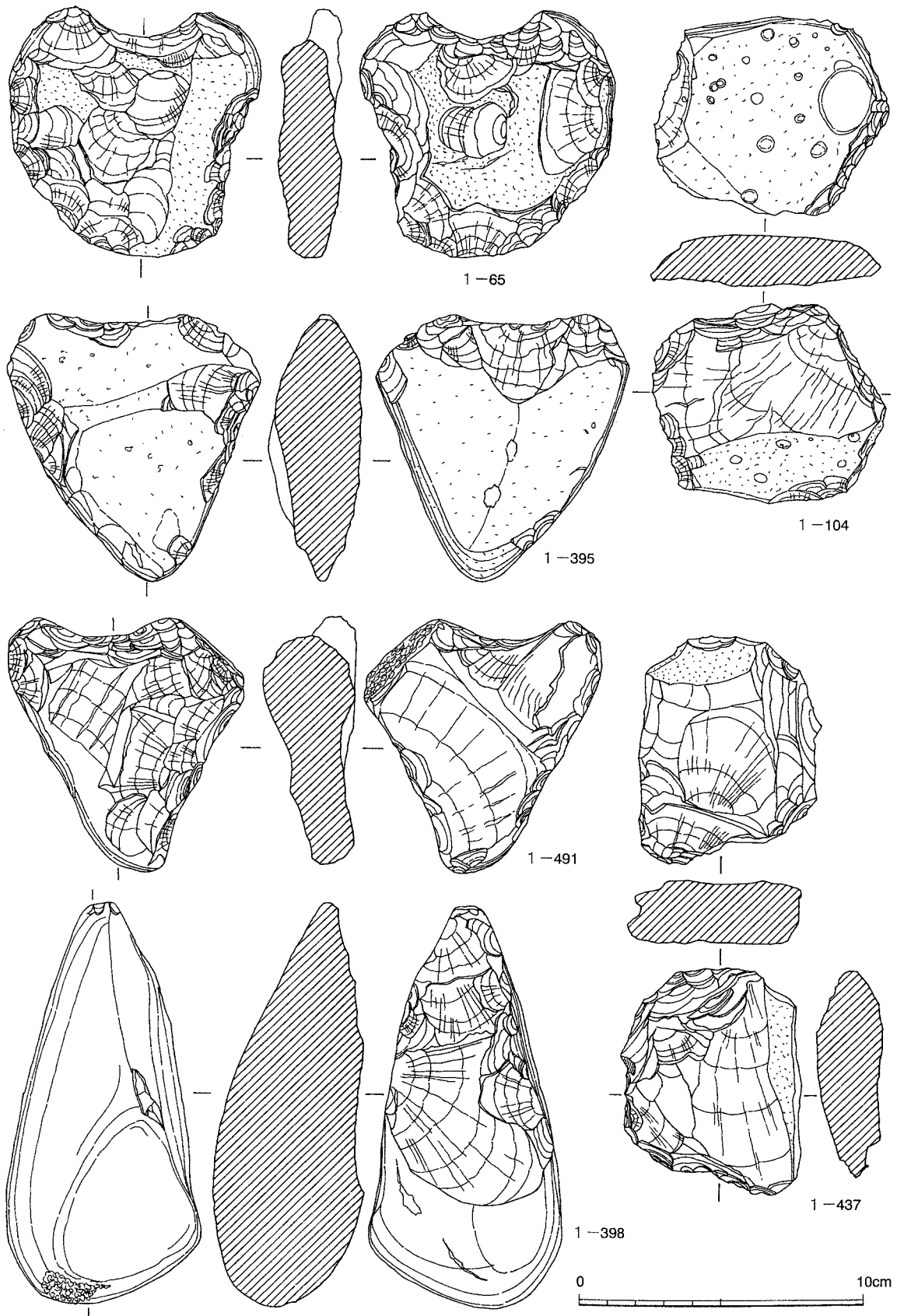
第46図包-1-3は頁岩の横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーである。片面は自然面のままで、底辺の一边に両面から細かい剥離を加え刃部を形成する。長4.3cm、幅5.8cm、厚1.3cm、重量34g。包-1-4、包-2-14はサヌカイトを素材としたスクレイパーである。包-1-4は横剥ぎの剥片が半折した物を利用する。打面の反対側のエッジに細かい剥離を加えて刃部を形成する。長2.9cm、幅3.6cm、厚0.6cm、重量4.04g。包-2-14は不定形剥片を素材とする。打面に自然面を残し、打面の反対側の一边とそれに接した一边に錯行剥離を加え刃部を形成している。長6.6cm、幅6.5cm、厚1.5cm、重量48g。包-2-15は頁岩の不定形剥片を素材としている。三角形をなし、三辺共に部分的に粗い剥離を加え刃部を形成している。長4.9cm、幅3.3cm、厚1.1cm、重量15g。2-360はサヌカイトの不定形剥片を利用したスクレイパーである。側辺の一边にやや粗い剥離を加えて刃部を形成する。長7.0cm、幅4.3cm、厚1.4cm、重量37g。包-1-5は頁岩の横剥ぎの剥片を素材としている。打面には調整痕がみられ、対面の反対側のエッジに使用痕が認められる。いわゆるUFである。長3.2cm、幅5.5cm、厚0.9cm、重量24g。2-316はサヌカイトの横剥ぎの剥片を素材とする。半円形をなし、剥片のエッジに両面から剥離を加え刃部を形成する。長3.8cm、幅4.8cm、厚0.6cm、重量12g。2-322はサヌカイトの長方形剥片を利用したスクレイパーである。対面と反対側の一边に片面から細かい剥離を加えて刃部を形成する。長5.9cm、幅4.9cm、厚1.0cm、重量27g。1-470は黒曜石（腰岳）の不定形剥片を素材としている。形は不整の楕円形、一边は粗い剥離で調整し、反対側の一边に片面から細かい剥離を加えて刃部を形成する。小型のスクレイパーである。長4.1cm、幅2.4cm、厚0.9cm、重量5.93g。1-441は黒曜石（腰岳）の剥片を素材としたコンケーブスクレイパーである。側辺の二辺に片面から加工を加え湾曲部をつくり出している。長3.2cm、幅1.8cm、厚0.7cm、重量3.46g。2-227はサヌカイトの横長の不定形剥片を素材としたコンケーブスクレイパーである。エッジの中央部に片面から細かい加工を施し抉り部をつくり出す。長6.8cm、幅3.3cm、厚0.6cm、重量13g。2-329はサヌカイト製のスクレイパーである。剥片の両端を欠損する。片面に大きく自然面を残す。一边に両面から剥離を加え刃部を



第47图 2層出土石器实测图Ⅻ



第48图 2層出土石器实测图Ⅻ



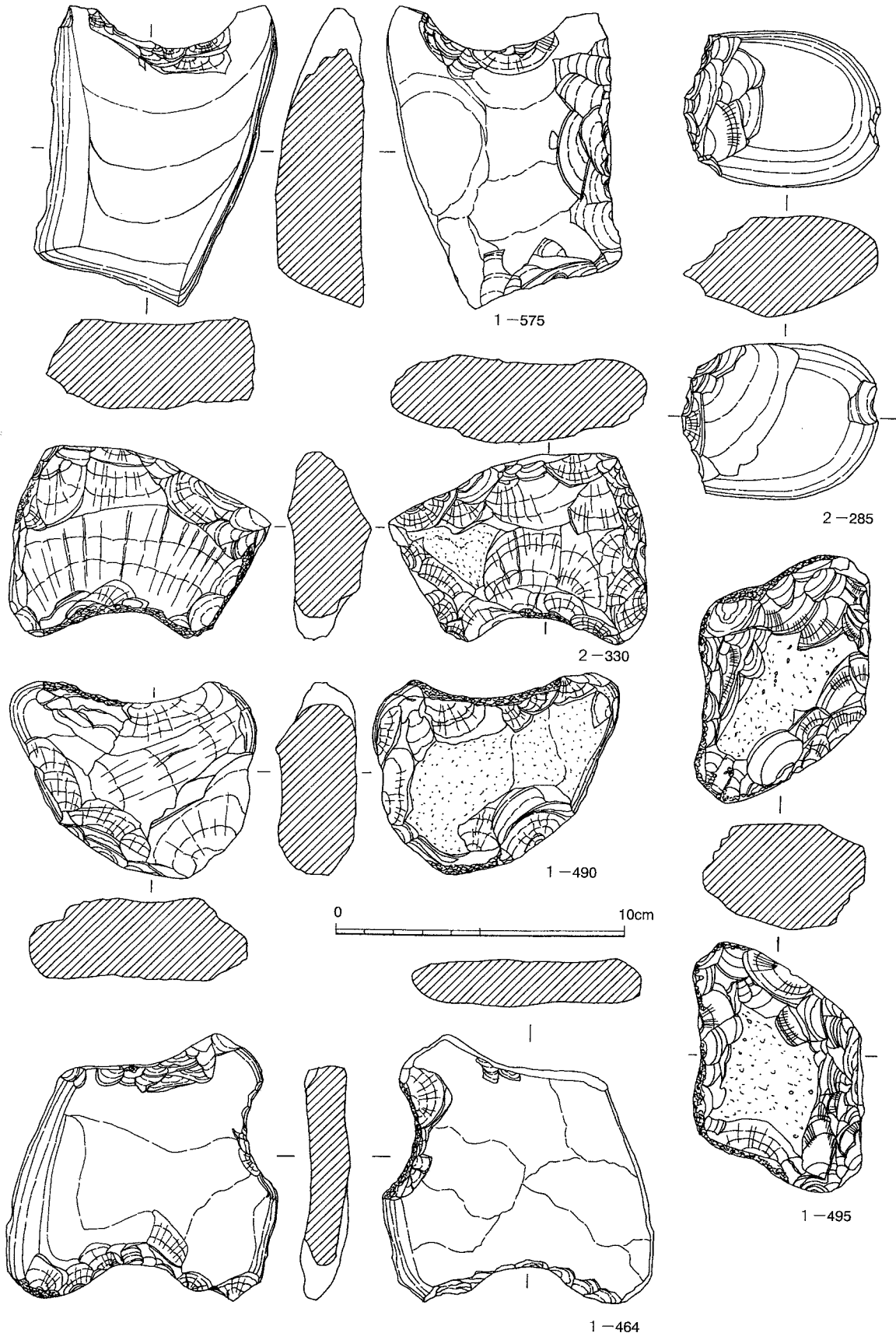
第49图 2層出土石器实测图XIV

形成する。長2.8cm、幅3.1cm、厚0.5cm。

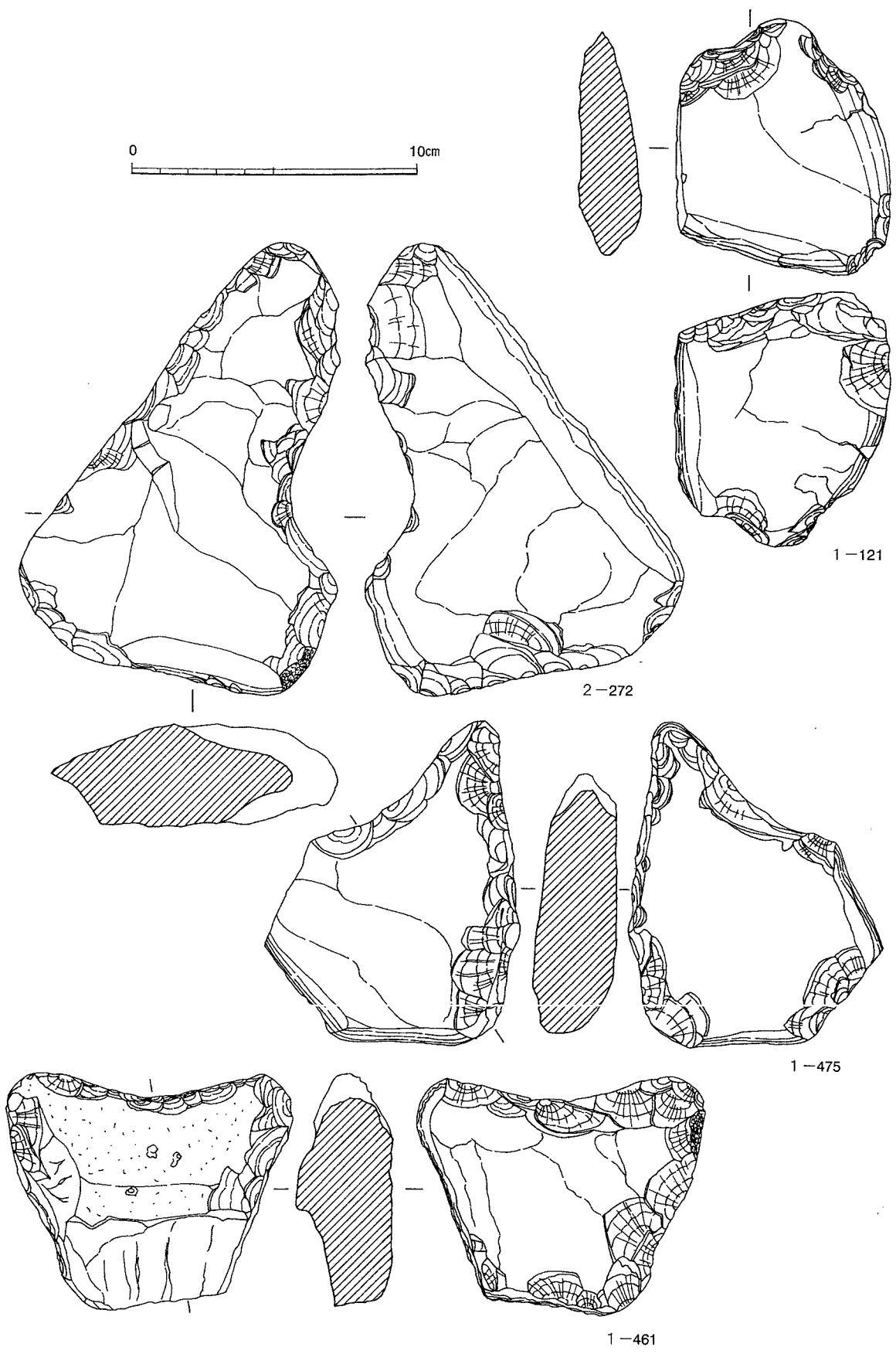
第47図にはスクレイパー、UFを図示した。2-440はサヌカイトの剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は楕円形をなし、側辺の一边に片面より細かい剥離を加え刃部を形成している。長6.7cm、幅5.8cm、厚1.7cm、重量49g。包-1-6は頁岩の横剥ぎの不定形剥片を素材としている。打面の反対の一边に使用痕があり、若干の刃こぼれが認められる。長3.9cm、幅5.7cm、厚0.8cm、重量26g。包-1-7はサヌカイトの縦剥ぎの不定形剥片の側辺の一边に片面から細部加工を施し刃部を形成する。一部に自然面を残す。長6.7cm、幅4.0cm、厚1.6cm、重量32g。1-396はサヌカイトの石核である。一部に自然面を残し、2ヶ所に剥離痕がある。長5.4cm、幅4.6cm、厚2.4cm、重量85g。包-1-8はサヌカイトの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。一部欠損するが剥片の周縁に主に片面より剥離を加えて刃部形成する。長4.9cm、幅4.8cm+ α 、厚1.7cm、重量22g。包-1-9は安山岩の横剥ぎの剥片を素材としている。対面と反対の一边に片面より細かい剥離を加え刃部を形成するスクレイパーである。長5.4cm、幅9.1cm、厚1.3cm、重量49g。2-187は玄武岩の横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーである。全体に風化が著しい。打面は平坦で、平面形は不整形。対面の反対のエッジに剥離を加えて刃部を形成する。長5.6cm、幅9.1cm、厚1.3cm、重量70g。

第48図はスクレイパーと礫器を図示している。包-2-16、2-190、2-230はサヌカイト製のスクレイパーである。包-2-16は横剥ぎの不定形剥片の三辺にそれぞれ片面から剥離を加えて刃部を形成する。長3.9cm、幅6.1cm、厚1.2cm、重量27g。2-190は残核を利用する。片面に打面を同じくして3ヶ所、他の面に1ヶ所の剥離面が残る。3ヶ所の打面の反対のエッジに両面から小さな剥離を加え刃部を形成している。打面には一部に磨滅がみられる。長4.7cm、幅7.2cm、厚1.3cm、重量42g。2-230は縦長の剥片を素材としている。片面に自然面を残し、側辺の一边に両面から剥離を加え刃部を形成している。長7.5cm、幅1.9~3.3cm、厚1.1cm、重量29g。1-433、1-412は黒曜石（腰岳）の剥片を素材とした小型のスクレイパー類である。1-433は片面は全面に押圧剥離を加え整形し、主要剥離面側は刃部のみに剥離が加えられる。刃部は二辺に形成される。長3.0cm、幅2.1cm、厚0.4cm、重量2.38g。1-412は不定形の剥片を素材とする。一部に自然面が残る。長軸の一边に刃部があり、使用による刃こぼれがみられる。長3.9cm、幅2.8cm、厚0.6cm、重量7g。1-385、2-213、1-452は双角状礫石器である。1-385は頁岩の扁平円礫を利用する。平面形は略方形をなす。一边に敲打による剥離がみられ、挟りがつくり出される。挟りは長4.0cm、深さ0.5cm、敲打面はつぶれて敲打面を形成している。他の一边には整形の剥離が認められる。突起部には使用痕は認められない。長6.7cm、幅7.2cm、厚1.5~2.0cm、重量133g。2-213は安山岩の円礫を素材とする。一部に自然面を残すが他は整形のための剥離が加えられている。平面形は台形状をなし、最も長い一边に敲打を加え挟り部をつくり出す。挟りは長さ6.0cm、深0.9cmを測る。挟りの両端に尖頭をつくり出している。長8.2cm、幅9.2cm、厚4.1cm、重量327g。1-452は安山岩の円礫を素材とする。全体に剥離を加え整形し、全体形は略台形をなす。一部に自然面を残す。側辺部は敲打による剥離で浅い挟りを入れ、上辺にあたる部分は剥離痕が顕著で、使用痕と考えることができる。長7.0cm、幅5.1~8.8cm、厚1.7~3.5cm、重量211g。

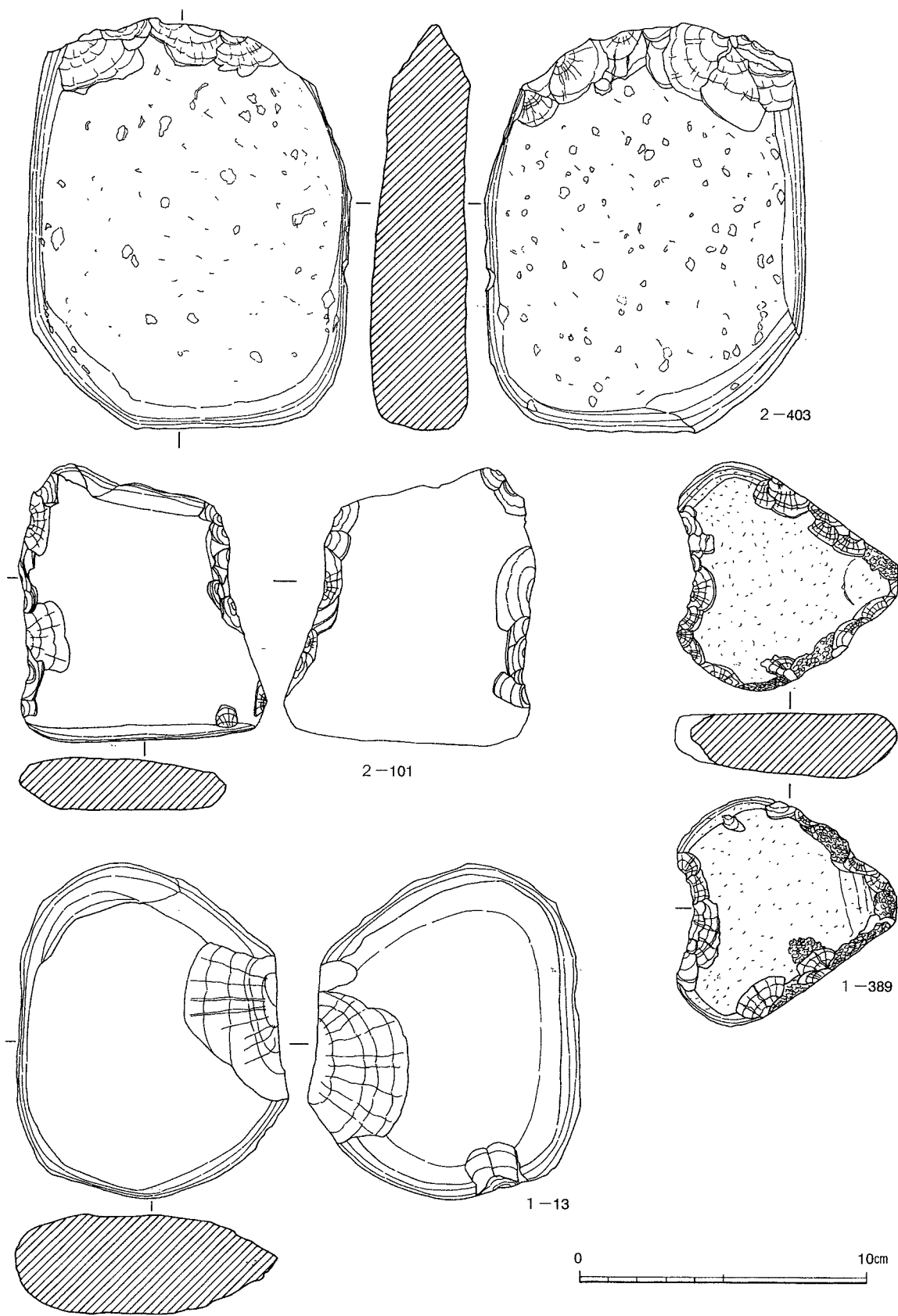
第49図に双角状礫石器、礫器を図示した。1-65、1-395、1-491は双角状礫石器である。1-65は安山岩の円礫を素材としている。一部に自然面を残す。周縁部に剥離を加え整形しているが二辺には敲打状の剥離を加えて挟りをつくり出す。挟りは長さ4.2cm、深さ0.9cmと長さ4.0cm、深さ0.5cmである。石器は長8.6cm、幅8.8cm、厚2.2cm、重量204g。1-395は安山岩の扁平円礫を素材とする。平面形は三角形をなす。一边に敲打を加えて浅い挟りをつくり出す。挟りは深さ0.3cmと極めて浅い。他の二辺には片面のみに整形の剥離がみられる。長9.2cm、幅9.0cm、厚1.7~3.0cm、重量272g。1-491は硬質砂岩の扁平円礫を素材とする。全体に剥離が施され、一部に自然面を残す。平面形は略三角形



第50图 2層出土石器実測図XV



第51图 2層出土石器实测图XVI

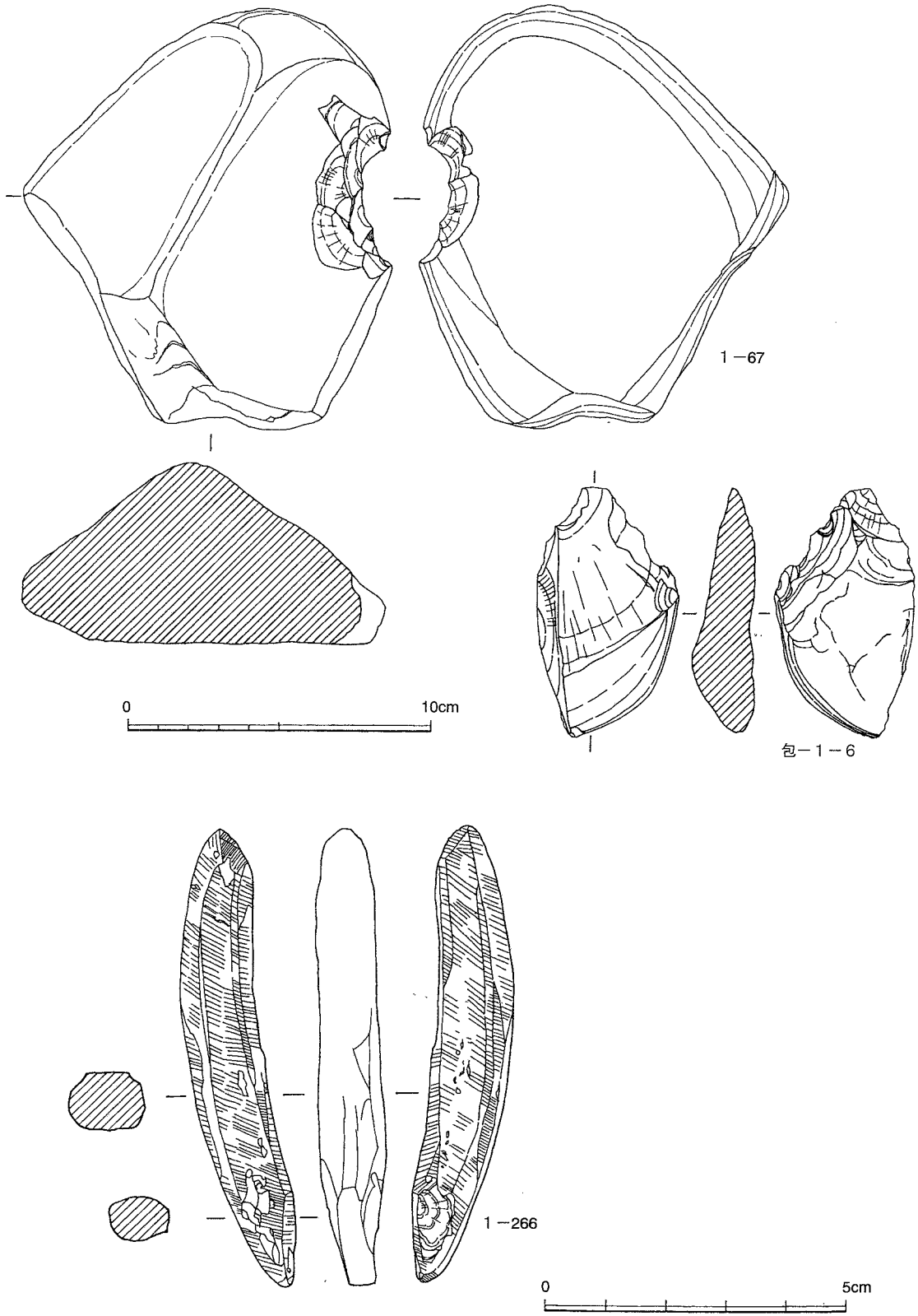


第52图 2層出土石器实测图XVII

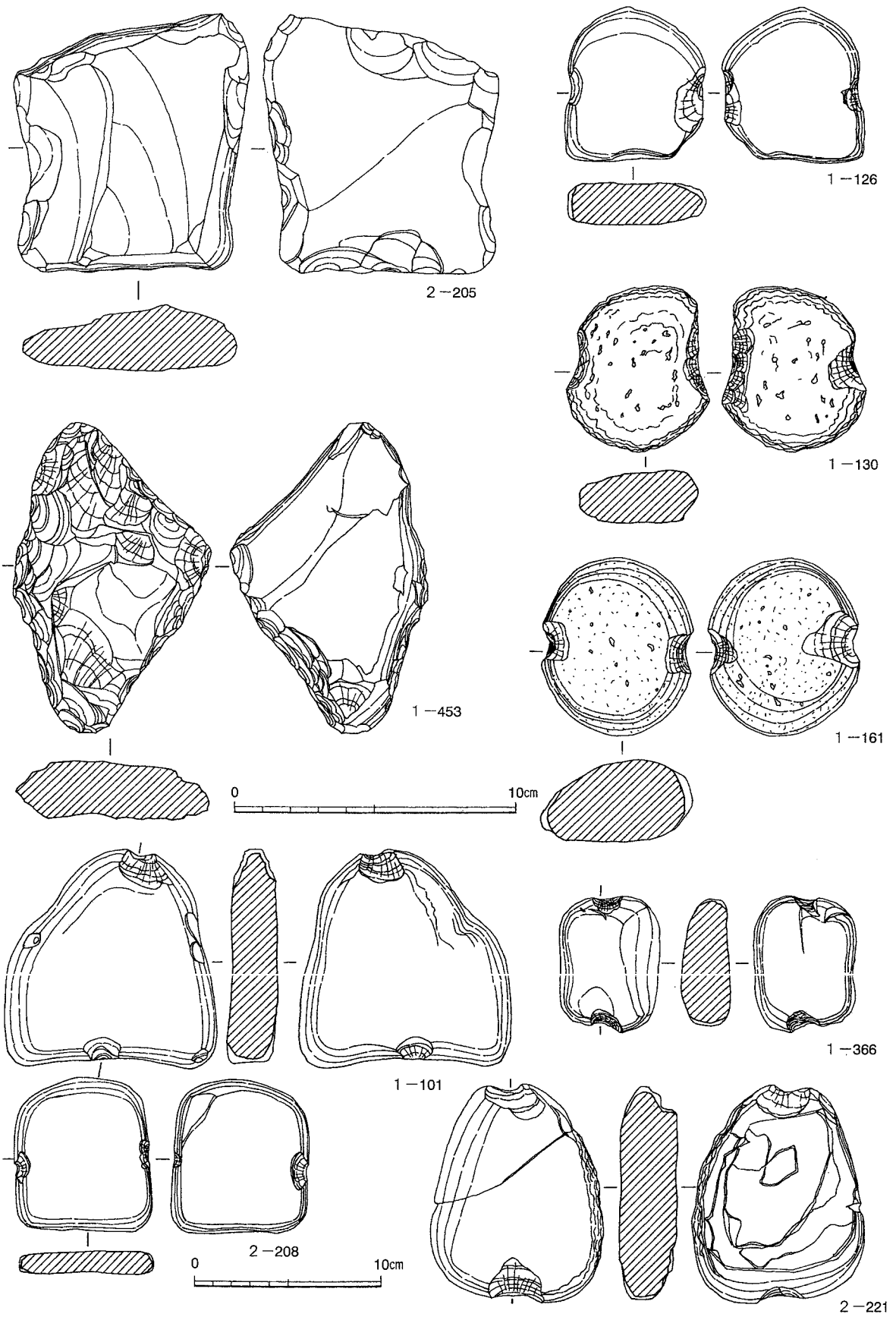
をなし、二辺に敲打による剥離が集中している。特に上辺は挟り部が敲打によって平坦になっている。挟りは深さ0.6cmと明瞭である。長8.9cm、幅8.3cm、厚1.6~3.1cm、重量220g。1-104、1-437、1-398は礫石器である。1-104は安山岩の扁平円礫を素材としている。平面形は略方形、片面の大部分を他の面の一部に自然面を残している。周縁部に両面および片面から剥離を加え整形し、さらに細部加工を施し刃部を形成する部分もあるが、大部分は敲打による剥離である点、双角状礫石器と共通している。長8.2cm、幅7.9cm、厚1.8cm、重量140g。1-437は安山岩の扁平円礫を素材とするが、ほぼ全面に敲打による階段状剥離があり、一部に自然面を残すのみである。平面形は略方形で、三辺に使用痕がみられる。長6.4cm、幅7.9cm、厚2.2cm、重量158g。1-398は棒状の安山岩円礫を素材としている。片面に両側辺から剥離が加えられ、打面にあたる一部に磨滅痕が認められる。また下端部の一部に打痕も観察できる。尖頭状の礫石器と考えられるが、石斧未製品と考えることもできる。長13.9cm、断面形は円筒状をなし、径1.0~6.8cm、重量548g。

第50図は双角状礫石器、礫石器を図示した1-575、2-330、1-490、1-464、1-495は双角状礫石器、2-285は礫石器である。1-575は安山岩角礫を素材としている。平面形は長方形、短軸の一辺と長軸の一辺に片面側から調整剥離が加えられ、短軸の他の一辺に両面から剥離が加えられ挟り部がつくり出される。挟り部には他例のような敲打痕は認められない。挟り部は長さ4.8cm、深さ1.4cm、挟りの両端に結果的に突起部が形成されるが、使用痕は認められない。長10.4cm、幅6.0~7.7cm、厚3.0cm、重量351g。2-330は硬砂岩の円礫を素材とするが、全体に整形のための剥離が加えられ、自然面は極一部に残っているにすぎない。平面形は長方形、長軸の一辺に敲打が加えられ挟りがつくり出される。挟り部と挟り部両端の突起部分は敲打（使用）によって平坦になる。挟り部は長さ4.7cm、深さ0.9cm。他の三辺も敲打痕が顕著である。長6.6cm、幅9.0cm、厚2.3~3.0cm、重量199g。1-490は安山岩の扁平円礫を素材とする。平面形は隅丸三角形、長辺に敲打によって挟りがつくられる。挟りは長さ5.7cm、深さ0.7cm、挟り部は敲打によって平坦になっている。典型的な双角状礫石器である。長6.8cm、幅9.7cm、厚2.9cm、重量206g、464は安山岩の扁平円礫を素材とする。平面形は長方形、隣り合う二辺に敲打によって挟り部がつくられる。挟り部は長さ6.0cm、深さ1.2cmと長さ3.8cm、深さ0.9cm。敲打によって両面に小さな剥離があるが、ほとんどが自然面のままである。十字形石器との関連も考えられる資料である。長9.3cm、幅9.1cm、厚1.7cm、重量171g。2-285は頁岩の小円礫を利用する。短軸の一辺に両面から大きな剥離を加えて刃部を形成するが、刃は鈍い。刃部と反対の一辺にも敲打による小さな剥離がみられる。長6.9cm、幅5.4cm、厚0.8~3.8cm、重量176g。1-495は安山岩の円礫を素材とする。平面形は菱形、両面共に中央部に自然面を残している。三辺に敲打を加えて剥離を行うが、敲打面は平坦になり、挟りがつくり出される。本例も一辺に0.4cmの浅い挟りができている。長6.0cm、幅8.7cm、厚2.7cm、重量231g。

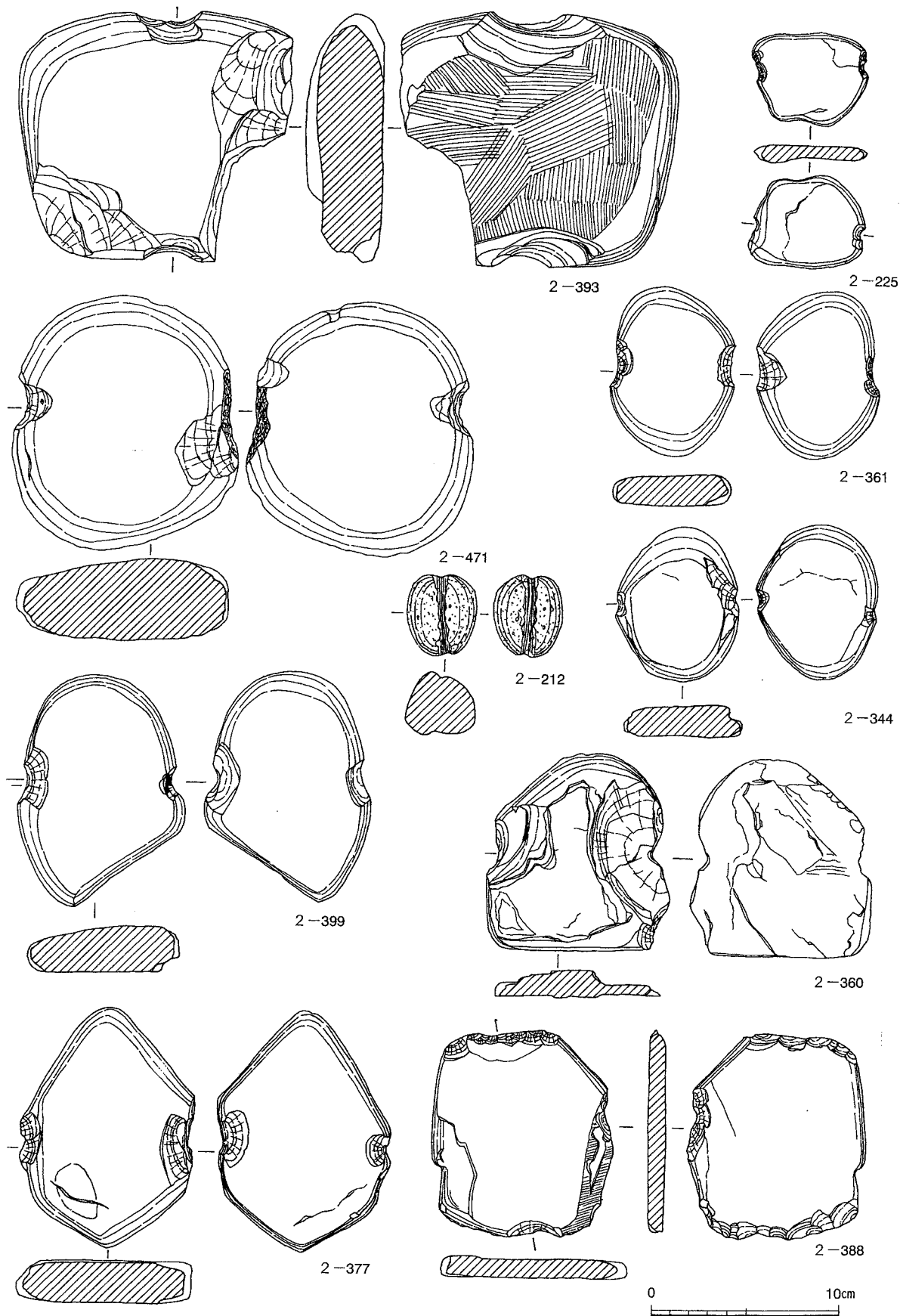
第51図は双角状礫石器、尖頭状礫石器、礫石器を図示した。1-121は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。短軸の一辺の中央部に尖頭状の突起をつくり出している。突起はその両側に挟り状の剥離を両面から加えたものである。突起部は磨滅によって丸くなる。相対する辺は片面から剥離を加えて整形している。長8.7cm、幅7.6cm、厚1.2~2.2cm、重量196g。2-272は安山岩の角礫を素材として一辺に挟りをもった礫石器である。平面形は挟り部を除けば略三角形をなし、三辺には使用によると考えられる剥離が存在するが、挟りのある一辺が最も著しい。挟り部は幅8.0cm、深さは1.7cm、半月形に挟れ、その部分は著しい敲打により幅0.5cm前後の平坦部ができています。両端の突起部にも若干の敲打痕が認められる。長15.8cm、幅11.3cm、厚1.4~3.7cm、重量550g。1-475は安山岩の扁平円礫を素材としている。二辺に剥離を加え尖頭をつくり出している。尖頭部は使用による磨滅によって丸くなる。また、剥離が加えられた一辺の剥離は敲打によるもので、浅い挟りがみられる。挟りは長さ



第53图 2層出土石器实测图XVIII



第54图 2層出土石器实测图XIX



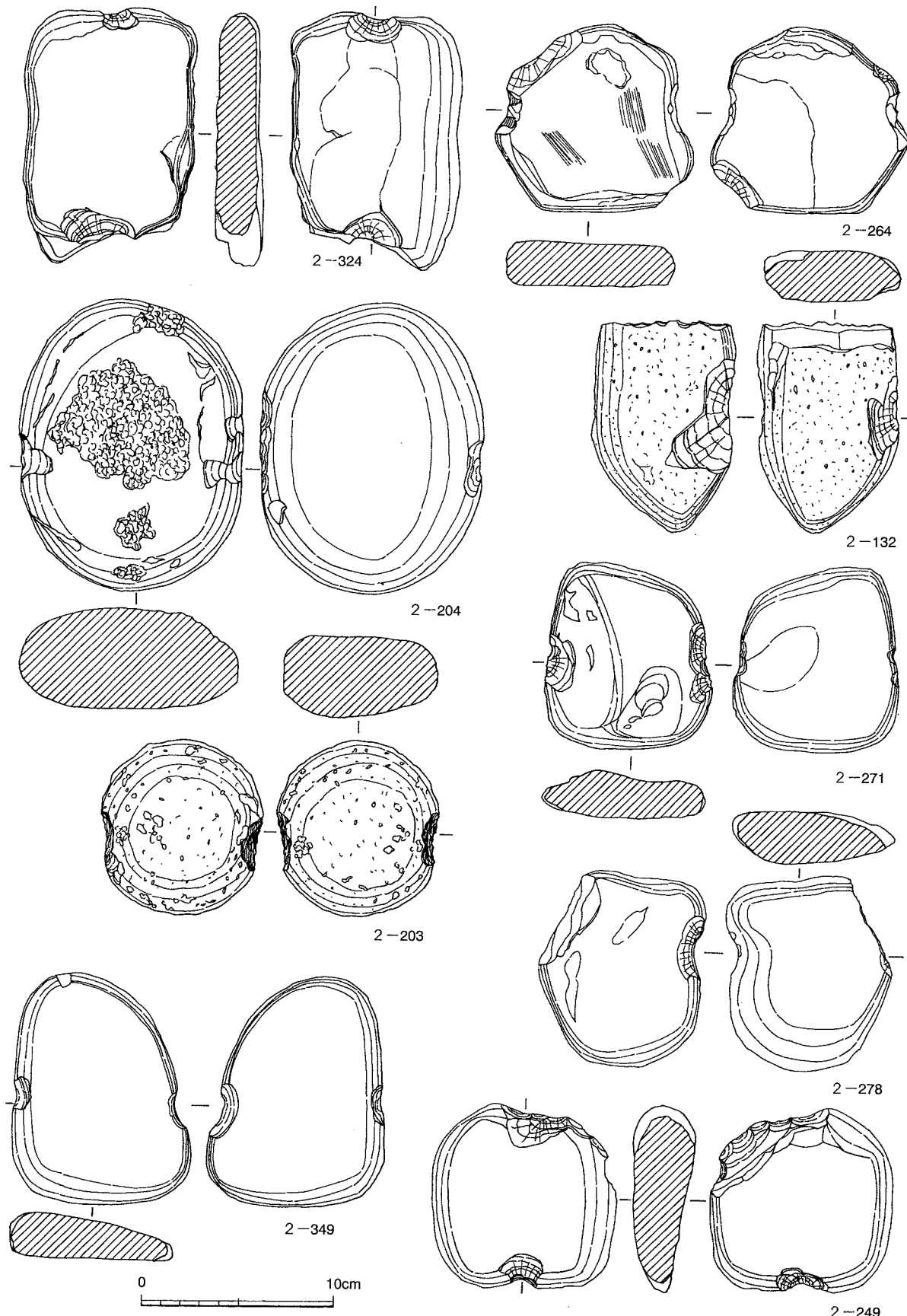
第55图 2層出土石器实测图XX

6.0cm、深さ0.7cm。石器は長11.3cm、幅10.0cm、厚2.8cm、重量359g。1-461は安山岩の扁平円礫を素材とした双角状礫石器である。平面形は台形となす。長辺に敲打を加え浅い抉り部をつくり出す。抉り部は長さ8.0cm、深さ0.8cm。抉り部の両面には細かい剥離ができる。他の三辺には両面あるいは片面から剥離を加え整形している。長8.3cm、幅10.0cm、厚2.0~3.3cm、重量339g。

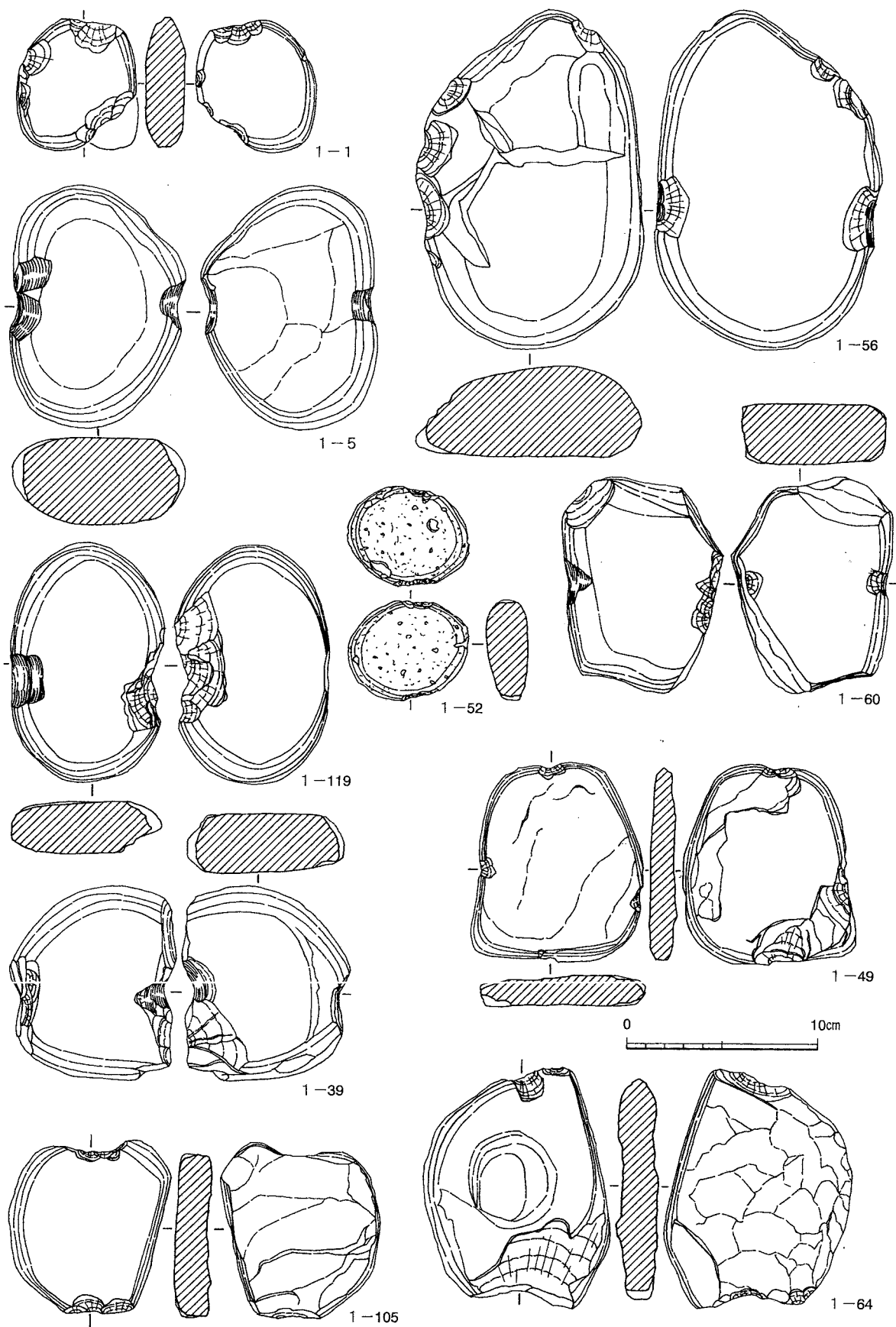
第52図には礫石器類を図示した。2-403は大型の安山岩円礫を素材とした礫石器である。平面形は長方形をなし、短辺の一辺に両面から剥離を加え刃部を形成しているが、刃部は鈍い。長14.1cm、幅11.1cm、厚3.3cm、重量884g。2-101は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は長方形をなす。長軸の相対する二辺に両面から剥離を加えて刃部を形成するが、刃部には敲打痕は認められない。長9.6cm、幅6.7~8.3cm、厚1.5~1.8cm、重量248g。1-13は安山岩質のやや軟質の円礫を素材とした礫石器である。長軸の一辺に両面から剥離を加え刃部を形成する。双角状礫石器の最初の姿の可能性がある資料である。長11.6cm、幅9.5cm、厚3.4cm、重量421g。1-389は安山岩の扁平円礫を素材とした双角状礫石器である。平面形は隅丸三角形、一辺に敲打によって抉り部をつくり出す。抉り部は長さ3.7cm、深さ0.6cm、両面には敲打による剥離がみられる。敲打面は平坦になる。抉り部両端の突起部には使用痕はない。他の二辺にも敲打痕と剥離痕がみられるが顕著でない。両面に大きく自然面を残す。長7.7cm、幅8.0cm、厚1.9~2.2cm、重量160g。

第53図に礫石器、結合式釣針の軸部を図示した。1-67は砂岩の大型の礫を素材とした礫石器である。長軸の一辺に敲打を加え抉りをつくり出している。抉りは長4.5cm、深さ1.0cmを測る。敲打部分は比較的丁寧である。他に加工の痕跡はない。平面形は不整形で、長13.8cm、幅5.6~12.2cm、厚4.9cm、重量1070g。包-1-6は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。礫を半割し、平面形は半月状をなす。上半部に両面から剥離を加えて刃部と尖頭部が形成される。長8.2cm、幅4.7cm、厚1.1~2.1cm、重量75g。1-266は頁岩を素材とした結合式釣針の軸部と考えられる資料である。現存長7.5cm、断面形は最大で1.2cm×1.0cmの楕円形をなす。針部との結合部と考えられる平坦面は長1.5cm、幅6.4cmの略長方形をなす。全体に良く研磨されている。軸頂部に紐結びの加工が認められず、未製品ないしは再生途中のものとみることが出来る。韓国鰲山里遺跡出土の結合式釣針の接合部と全長の相関関係がらみると頂部を約1.5cm欠損していると考えられる。

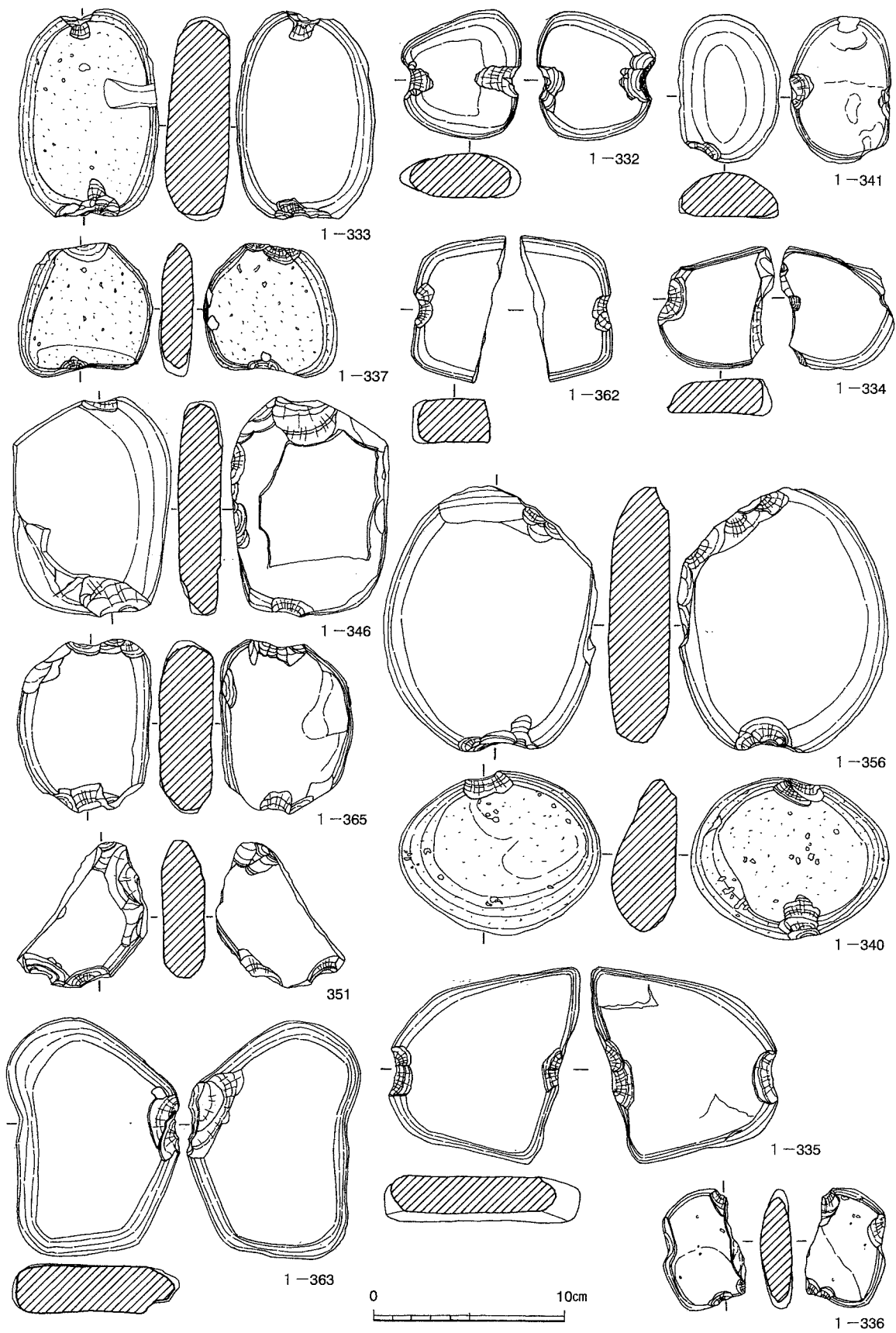
第54図は礫器、石錘を図示した。2-205は安山岩の扁平礫を素材とした礫石器である。平面形は方形、全体に風化が著しい。四辺に剥離が加えられているが、特に長軸の相対する二辺には敲打が加えられ浅い抉りができている。長9.0cm、幅7.2~8.5cm、厚1.2~2.4cm、重量261g。1-453は頁岩の扁平角礫を素材とした礫石器である。平面形は菱形をなす。片面は周縁部から剥離が加えられ整形するが、他の面では大きく自然面を残し、隣合う二辺に剥離が加えられ刃部を形成する。長10.9cm、幅7.0cm、厚2.1cm、重量165g。以上の2点を除いて他は石錘である。また、第55~59図は全てが石錘である。以下、簡単に説明を加える。1-126は砂岩の扁平円礫を利用。長軸の相対する二辺に両面から剥離を加え、抉りを入れる。長8.1cm、幅7.5cm、厚2.2cm、重量207g。1-130は安山岩質の扁平円礫を利用。長軸の二辺に両面から広い範囲に剥離を加え浅い抉りをつくり出す。長8.6cm、幅7.6cm、厚2.7cm、重量194g。1-161は安山岩の円礫を利用、平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくる。抉りにはさらに敲打を加え整形し、より確実なものにしている。長9.3cm、幅8.0cm、厚4.3cm、重量375g。1-101は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は略三角形をなし、頂点部とそれに対応する一辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れる。長11.2cm、幅11.2cm、厚2.7cm、重量506g。1-366は砂岩の円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。短軸の相対する二辺に両面から剥離を加え抉りをつくる。抉り部には後から敲打を加え整形している。長7.2cm、幅5.5cm、厚1.8~2.7cm、重量146g。2-208は硬砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形。長軸の相対



第56图 2層出土石器実測図XXI



第57图 2層出土石器实测图XXII



第58图 2層出土石器実測図XXIII

する二辺の中央部に両面から小さな剥離を加え、小さい抉りをつくり出す。長8.1cm、幅7.3cm、厚1.2cm、重量137g。1-221は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え、抉りを入れる。抉り部は剥離後さらに敲打を加えて整えている。また、長軸の一边の側面は敲打痕が顕著で、叩石としても使用されている。長11.6cm、幅9.2cm、厚3.1cm、重量466g。

第55図の2-393は大型の砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形であるが、一部を欠損している。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。抉りは片面側からの大きな剥離によるもので大きく明瞭である。なお、一面は砥石ないしは石皿として使用されている。面は使用によってやや凹み、研磨の条線が確認できる。長14.5cm + α 、幅13.0cm、厚3.5cm、重量966g + α 。2-225は小型の硬砂岩の扁平円礫を利用。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れる。長6.2cm、幅5.0cm、厚0.7~1.0cm、重量38g。2-471は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れるが、1ヶ所は敲打を加えている。長13.1cm、幅11.8cm、厚2.2~4.2cm、重量630g。2-361は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れる。抉り部に摩耗がみられる。長7.9cm、幅6.6cm、厚1.7cm、重量137g。2-212は安山岩の円礫を利用した有溝石錘である。全形は球状をなし、長軸中央部を一周する溝をめぐらしている。溝は研磨によって形成されている。長4.3cm、幅3.7cm、厚3.3cm、重量57g。2-344は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺に小さい剥離を入れて小さい抉りをつくる。長8.1cm、幅6.6cm、厚1.7cm、重量124g。2-399は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に両面から剥離を加え抉りをつくる。抉りは剥離後、敲打を加えて整え明確である。長11.9cm、幅8.7cm、厚1.7~2.4cm、重量324g。2-360は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整長方形、長軸の相対する二辺に片面より剥離を加え抉りを入れるが、剥離は大きく段をなしている。二次的に火を受け変色している。長10.3cm、幅9.7cm、厚1.4cm、重量160g。2-377は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は菱形をなす。短辺の角の部分に両面から剥離を加え抉りを入れるが抉りは浅い。一方の抉りは剥離後、敲打を加え整形している。長12.6cm、幅9.2cm、厚2.2cm、重量375g。2-388は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は略長方形をなす。短軸の相対する二辺には両面が剥離を整形し、中央部に浅い抉りを入れる。長軸の相対する二辺の中央部にも抉りを入れるが、片辺は自然の凹みを利用する。十字に紐結びができるようになっている。なお、短辺の一边には縁に沿って研磨が認められる。長10.8cm、幅9.7cm、厚1.0cm、重量172g。

第56図、1-324は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れる。長12.8cm、幅8.9cm、厚2.0cm、重量400g。2-264は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に研磨によって抉りをいれる。また、片面は砥石として使用されている。長9.6cm、幅10.4cm、厚2.2cm、重量338g。2-204は安山岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に1ヶ所と2ヶ所の抉りを入れる。石錘が大きいことより確実に結ぶための工夫か。また、片面の中央部には敲打痕が顕著で台石としても使用されたことがわかる。長15.0cm、幅11.6cm、厚5.1cm、重量1110g。2-132は安山岩の扁平円礫の半折品を利用、長軸の相対する二辺の中央部に錯行して剥離を加えて抉りをつくる。長10.9cm、幅7.5cm、厚2.5cm、重量329g。2-271は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形、長軸の相対する二辺の中央部に両面から小さな剥離を加えて抉りを入れるが、抉りは浅い。長9.6cm、幅8.8cm、厚2.5cm、重量277g。2-203は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用。平面形は円形である。長軸の相対する二辺の中央部に敲打を加えて抉りを入れる。長9.0cm、幅8.5cm、厚4.1cm、重量400g。2-278は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなすが、一部欠損する。長軸の相対する二辺の中部に抉りが入られるが一边は欠損により不明瞭、他辺は片面より剥離を加え、その後敲打を加え

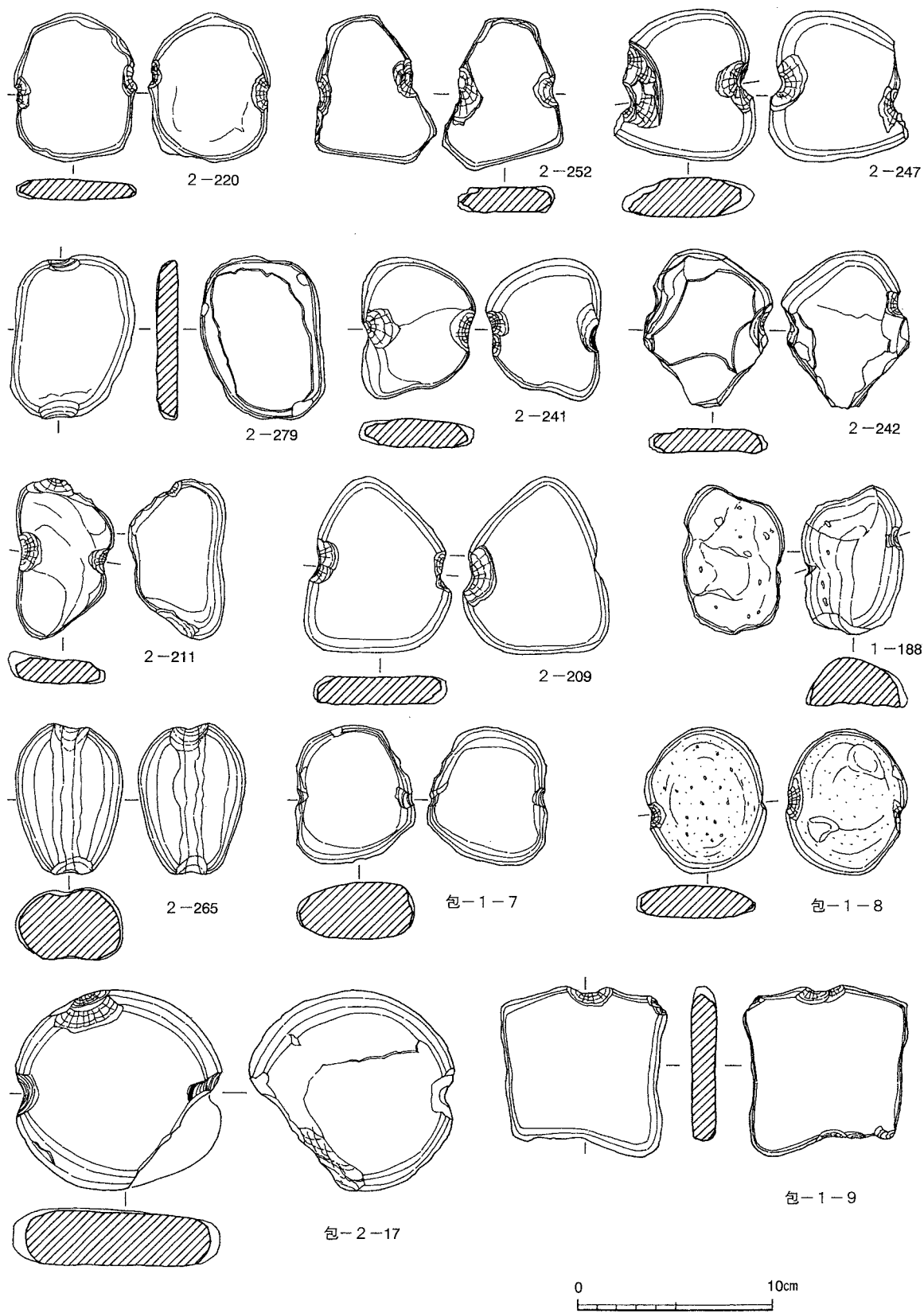
て整形する。長9.9cm、幅8.4cm、厚2.7cm、重量350g。2-349は火成岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に剥離を加え抉りを入れる。抉りは剥離後、敲打を加えて整形している。長11.9cm、幅9.4cm、厚1.0~2.3cm、重量313g。2-249は軟質砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸方形をなす。相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れるが、一辺はさらに周辺に剥離を加えて整形している。抉りには磨滅がみられ、使用痕と考えられる。長9.5cm、幅9.5cm、厚1.6~3.2cm、重量358g。

第57図の1-1は安山岩の扁平な小円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなすが、一角を欠損する。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れるが、一辺は欠損部がかかり不明瞭。長6.9cm、幅6.2cm、厚2.0cm、重量101g。1-5は砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。抉りは敲打でつくり出し、あとから研磨を加えて整えている。長12.4cm、幅8.8cm、厚4.5cm、重量680g。1-56は大型の砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加え、敲打で整えている。長17.4cm、幅11.8cm、厚4.7cm、重量1040g。1-119は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺に抉りを入れるが、一辺は両面から大きな剥離を加え、他辺は研磨を加えることによって抉りをつくり出している。長12.3cm、幅7.8cm、厚2.6cm、重量365g。1-52は小型の安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に小さな剥離を両面から加えて抉りを入れる。長6.2cm、幅5.2cm、厚2.2cm、重量76g。1-60は砂岩の扁平礫を利用。平面形は不整長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え小さな抉りをつくり出す。長10.8cm、幅8.4cm、厚3.1cm、重量425g。1-39は砂岩の扁平円礫が半割したものを利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加えた後、敲打を加え整え、さらに研磨を加えて溝状をなす部分がある。長9.9cm、幅8.7cm、厚3.0cm、重量355g。1-49は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。四辺の中央部に両面あるいは片面から剥離を加え抉りをつくり出す。長10.1cm、幅8.4cm、厚1.6cm、重量209g。1-105は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に片面から剥離を加えて抉りを入れるが、あまり明確でない。長9.1cm、幅8.3cm、厚1.8cm、重量196g。1-64は硬砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整形をなす。短軸の二辺に剥離を加え抉りをつくる。剥離は一辺が両面。他が片面からである。長12.0cm、幅9.9cm、厚2.1cm、重量300g。

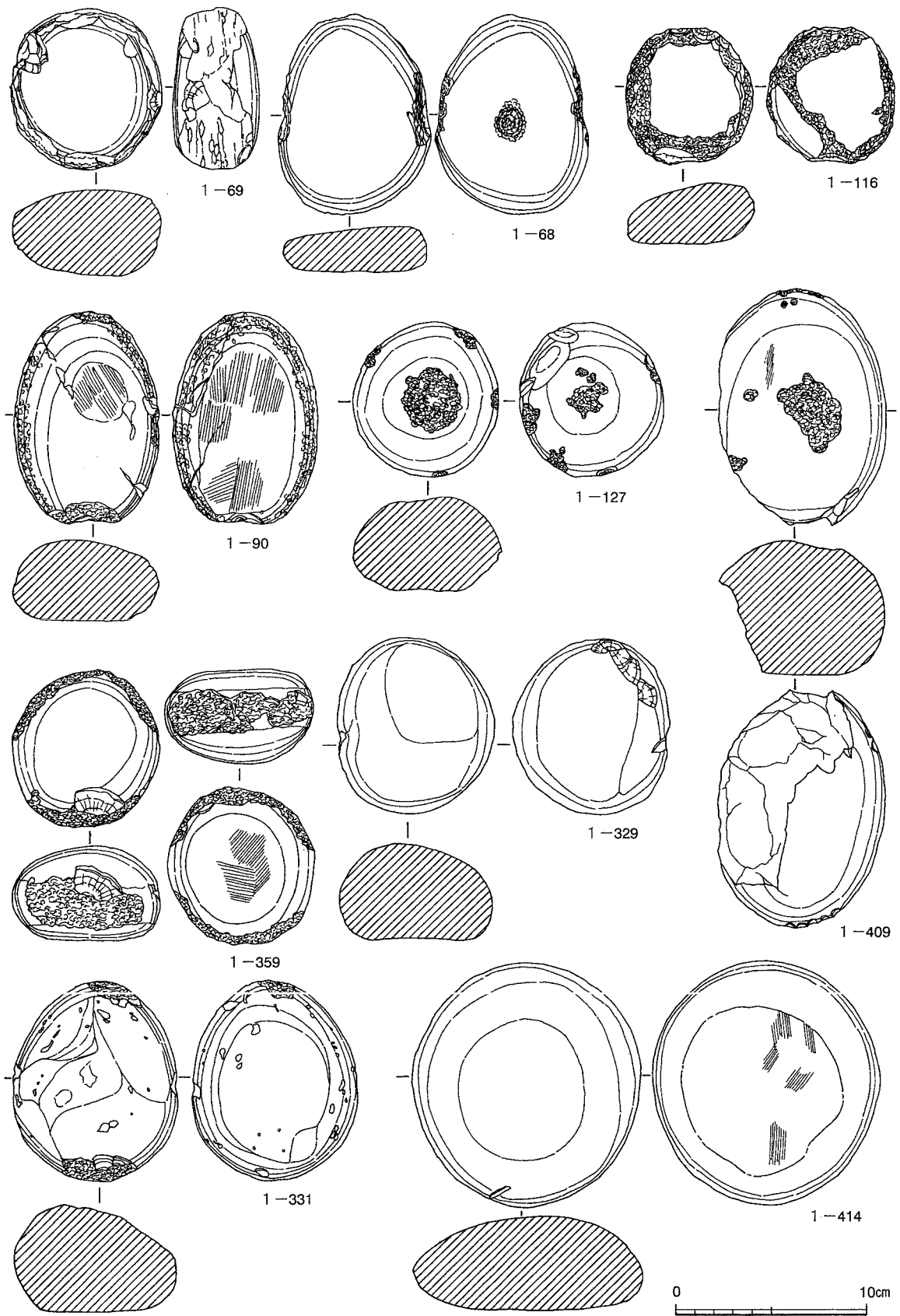
第58図の1-333は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に敲打によって抉りをつくり出す。長10.7cm、幅7.3cm、厚3.3cm、重量344g。1-332は硬砂岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りをつくり出す。抉りは両面から剥離を加えた後、敲打を加えて抉り部分を整え、なめらかにしている。抉り深く明確である。長6.5cm、幅6.1cm、厚2.3cm、重量123g。1-341は砂岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に片面から剥離を加えて抉りをつくり出すが、明確でない。二次的に焼けていて赤く変色する。長7.7cm、幅6.4cm、厚2.3cm、重量120g。337は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。相対する二辺に両面から剥離を加え抉りをつくり出すが、抉りは明瞭でない。長7.0cm、厚7.1cm、厚1.7cm、重量96g。1-362は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなすと考えられるが、半部を欠損する。一辺に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。長7.8cm、幅4.3cm + α 、厚2.3cm、重量118g + α 。1-334は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整形。相対する二辺に錯行関係で片面より剥離を加えて抉りを入れるが、抉りはあまり明瞭でない。長6.4cm、幅6.0cm、厚1.9cm、重量95g。1-346は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。短軸の相対する二辺の中央部をややはずれて両面から剥離を加え抉りをつくり出す。側面に

整形のための剥離がみられる。長11.4cm、幅8.2cm、厚2.3cm、重量351g。1-365は粒子の粗い砂岩の扁平円礫を利用。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。長9.1cm、幅7.0cm、厚2.9cm、重量260g。1-356は砂岩の大型の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。短軸の相対する二辺に両面から剥離を加えて抉りをつくり出すが、一辺の抉りは不明瞭である。紐の結びが突起を利用しV字形にかけものか。長13.7cm、幅11.2cm、厚3.2cm、重量730g。1-351は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整長方形をなすと考えられるが、割れて約1/3を欠損する。紐結びの抉りがやや特異である。短軸の一辺には両面から2ヶ所に剥離を加え突起部をつくり出している。他辺にも抉りの剥離の一部が残っている。同様のつくりであれば突起部をはさんで2ヶ所の抉りがあることになる。長7.5cm+ α 、幅7.0cm、厚2.3cm、重量116g+ α 。1-340は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは一方が両面から、他方が片面から剥離を加えつくり出す。長10.5cm、幅8.6cm、厚2.0~3.4cm、重量292g。1-363は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の一辺に両面から剥離を加え抉りをつくる。相対する辺には加工はなく、自然の凹みを利用。長12.3cm、幅8.9cm、厚2.6cm、重量427g。1-335は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整形をなす。長軸の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加えた後、さらに敲打を加えて整えている。長10.6cm、幅9.0cm、厚2.0cm、重量314g。1-336は安山岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は欠損があり不明であるが、略方形をなすと考えられる。相対する二辺に両面から剥離を加え抉りを入れている。長6.1cm、幅4.2cm+ α 、厚1.7cm、重量53g+ α 。

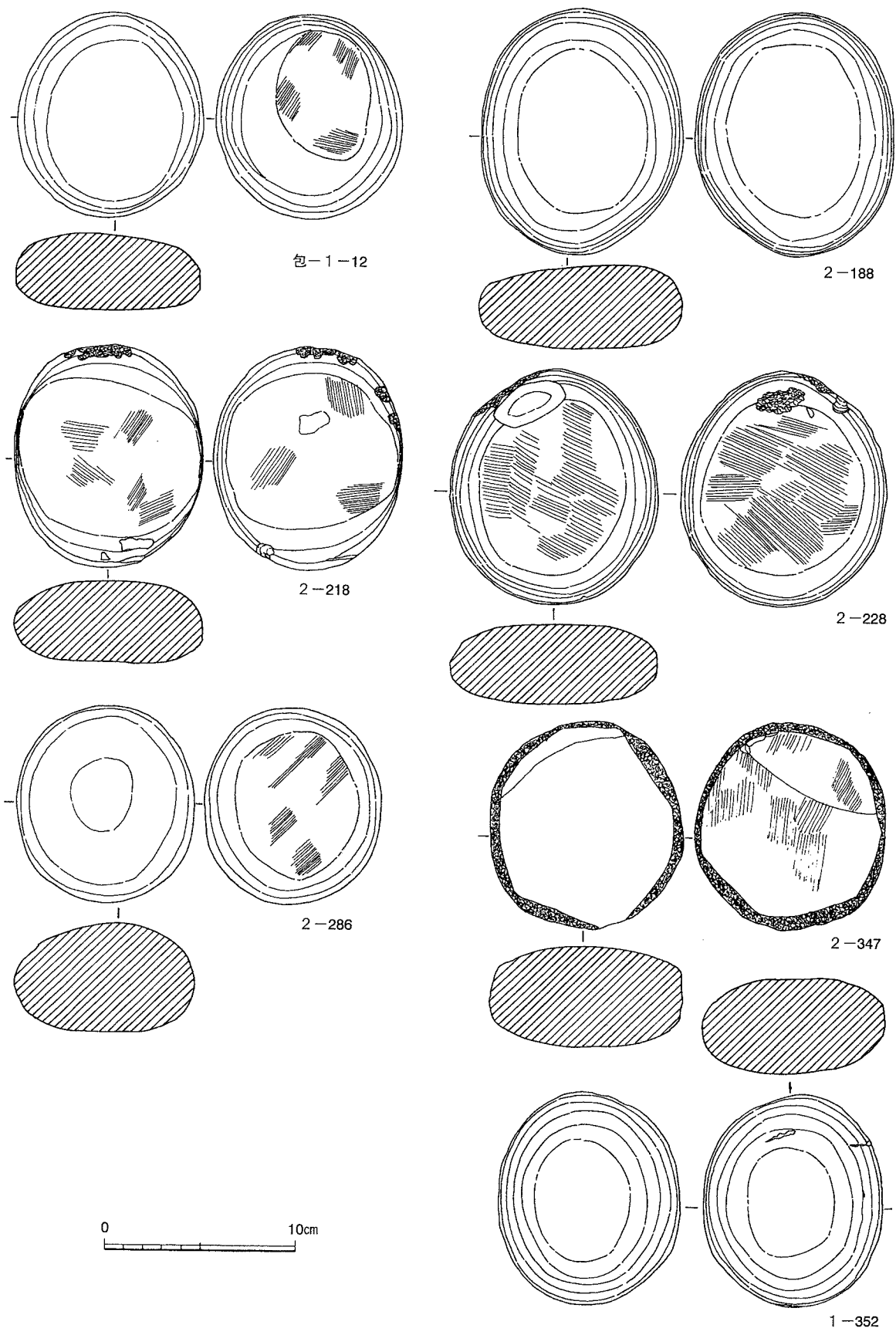
第59図、2-220は砂岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から細かい剥離を加えて抉りを入れる。長7.5cm、幅6.2cm、厚1.1cm、重量83g。2-252は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整長方形をなす。長軸の相対する二辺に両面から剥離を加えて抉りを入れるが、抉りは深くない。長7.5cm、幅6.2cm、厚1.3cm、重量93g。2-247は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。長軸の相対する二辺に抉りをつくり出す。抉りは両面から大きな剥離を加えるが、側面は使用によると考えられる摩耗痕がみられる。長7.7cm、幅7.3cm、厚2.0cm、重量144g。2-279は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。短軸の一辺に片面から剥離を加え抉りをつくり出し、他の一辺は自然の凹みをうまく利用している。長8.3cm、幅7.1cm、厚1.1cm、重量107g。2-241は安山岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は不整形をなす。長軸の相対する二辺に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。全体に風化が著しい。長7.2cm、幅5.8cm、厚1.5cm、重量85g。2-242は板状に剥離した砂岩を利用。平面形は不整形をなす。長軸の相対する二辺に、一方は両面から、他方は片面から剥離を加え、抉りをつくり出している。火を受けて赤変している。長7.9cm、幅6.6cm、厚1.2cm、重量80g。2-211は安山岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に片面から剥離を加え抉りをつくり出す。片面は自然のままである。長8.2cm、幅5.0cm、厚1.3cm、重量75g。2-209は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に片面から錯行関係で剥離を施し抉りをつくり出す。抉りは敲打で整形される。長9.0cm、幅7.5cm、厚1.4cm、重量142g。1-188は多孔質の火成岩の円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺にやや片寄りをもった片面から剥離を加え抉りを入れる。長さ7.4cm、幅5.2cm、断面形はコマボコ形をなし厚さ2.5cm、重量85g。2-265は砂岩の円礫を利用した有溝石錘である。平面的は長楕円形をなす。長軸の中央部に敲打によって溝を彫り込んだものである。長7.7cm、幅5.5cm、厚3.5cm、重量202g。包-1-7は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から小さい剥離を加えて、小さい抉りを入れる。長7.0cm、幅6.1cm、厚2.9cm、重量143g。包-1-8は安山岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。一辺は両面、他の一辺は片面からの剥離を加えているが、抉



第59图 2層出土石器実測図XXIV



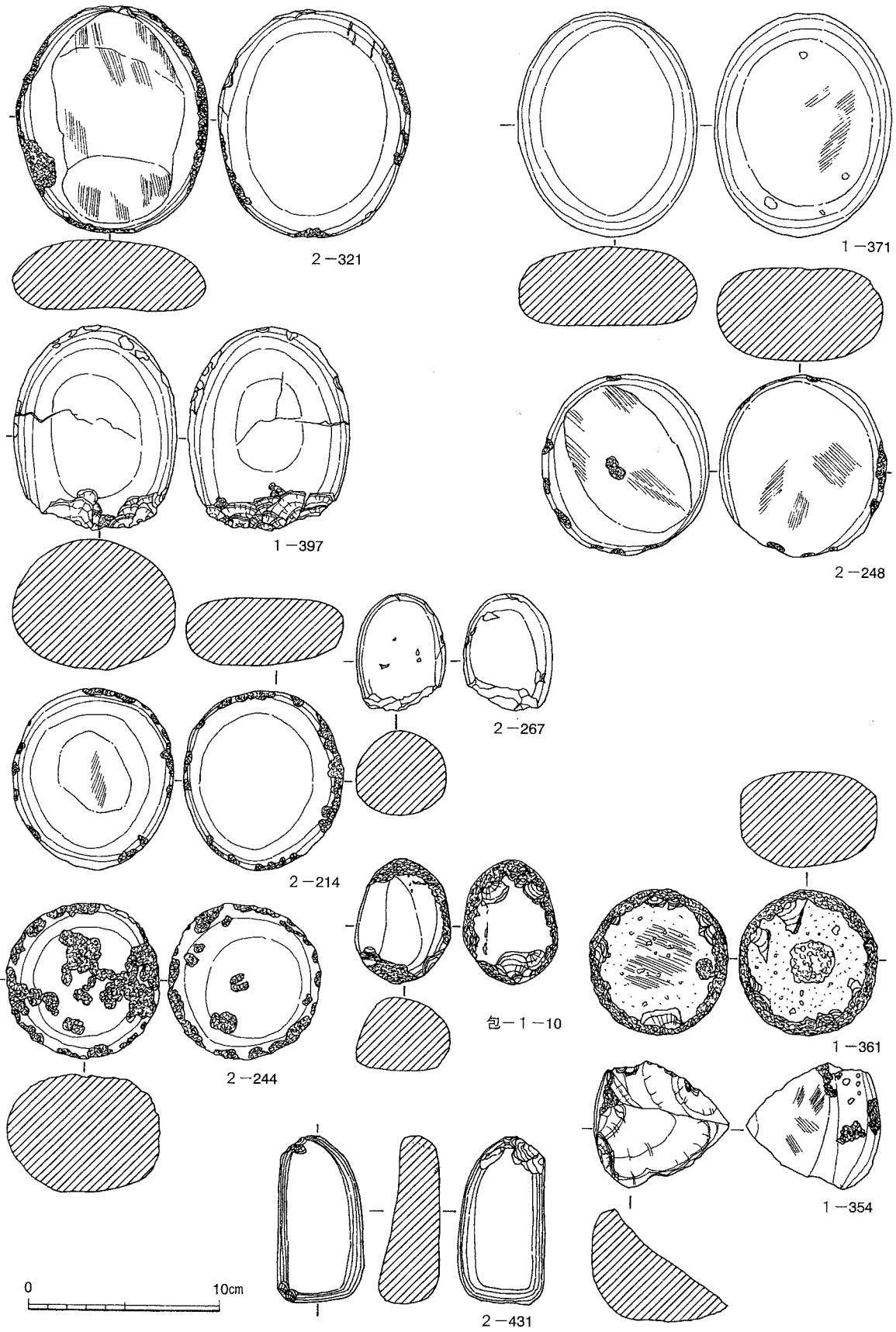
第60图 2層出土石器実測図XXV



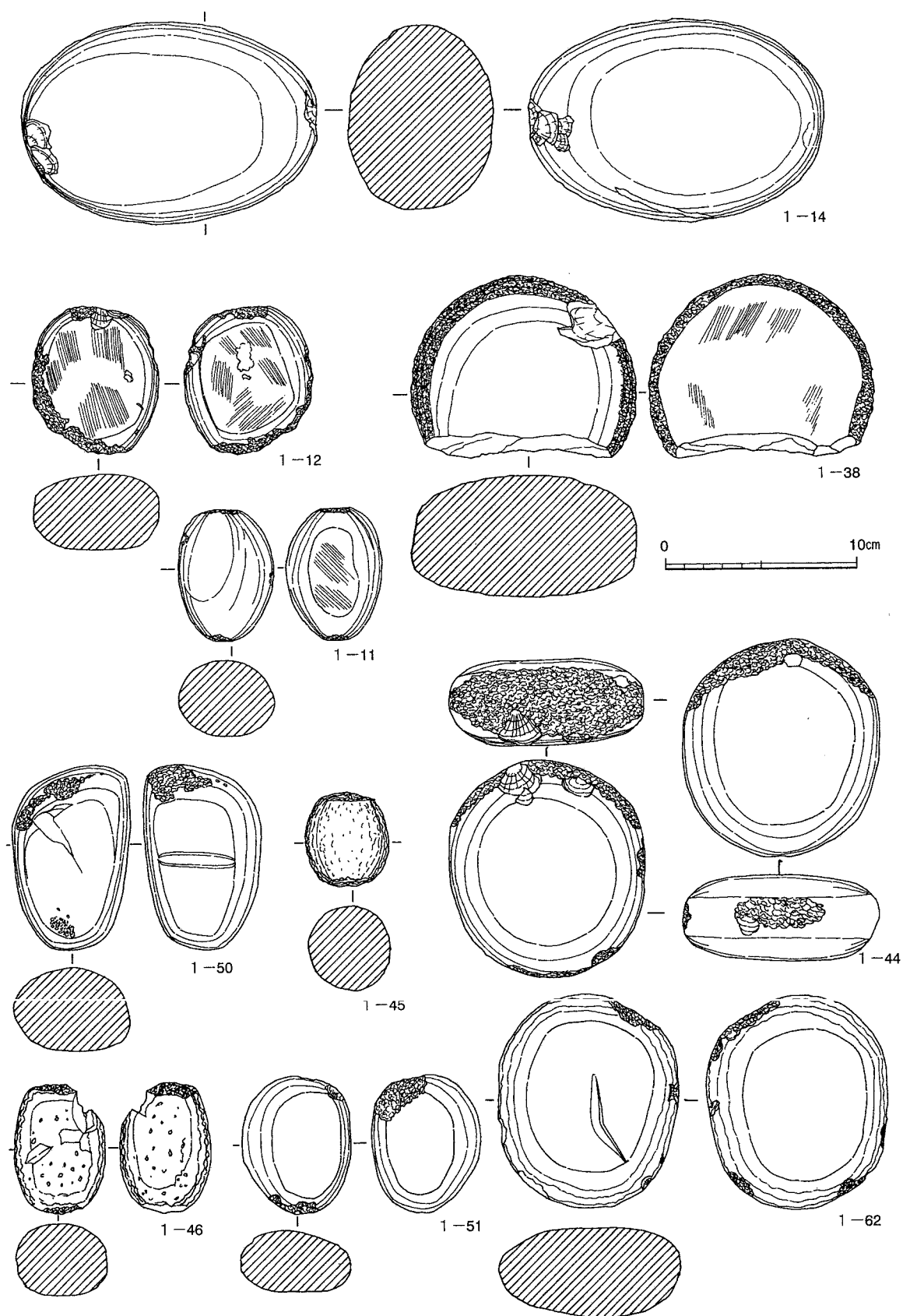
第61图 2層出土石器实测图XXVI

りはあまり明瞭でない。長7.5cm、幅6.0cm、厚1.6cm、重量92g。包-2-17はやや軟質の砂岩の扁平円礫を利用。平面形は円形をなすが一部を欠損している。短軸の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加え、さらに敲打を加えて整形する。使用による摩耗痕も顕著である。長11.5cm、幅10.0cm、厚2.8cm、重量392g。包-1-9は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は方形をなす。相対する二辺に抉りを入れるが、一辺は両面、他の一辺に片面から剥離を加えたものである。長8.2cm、幅8.4cm、厚1.2cm、重量158g。

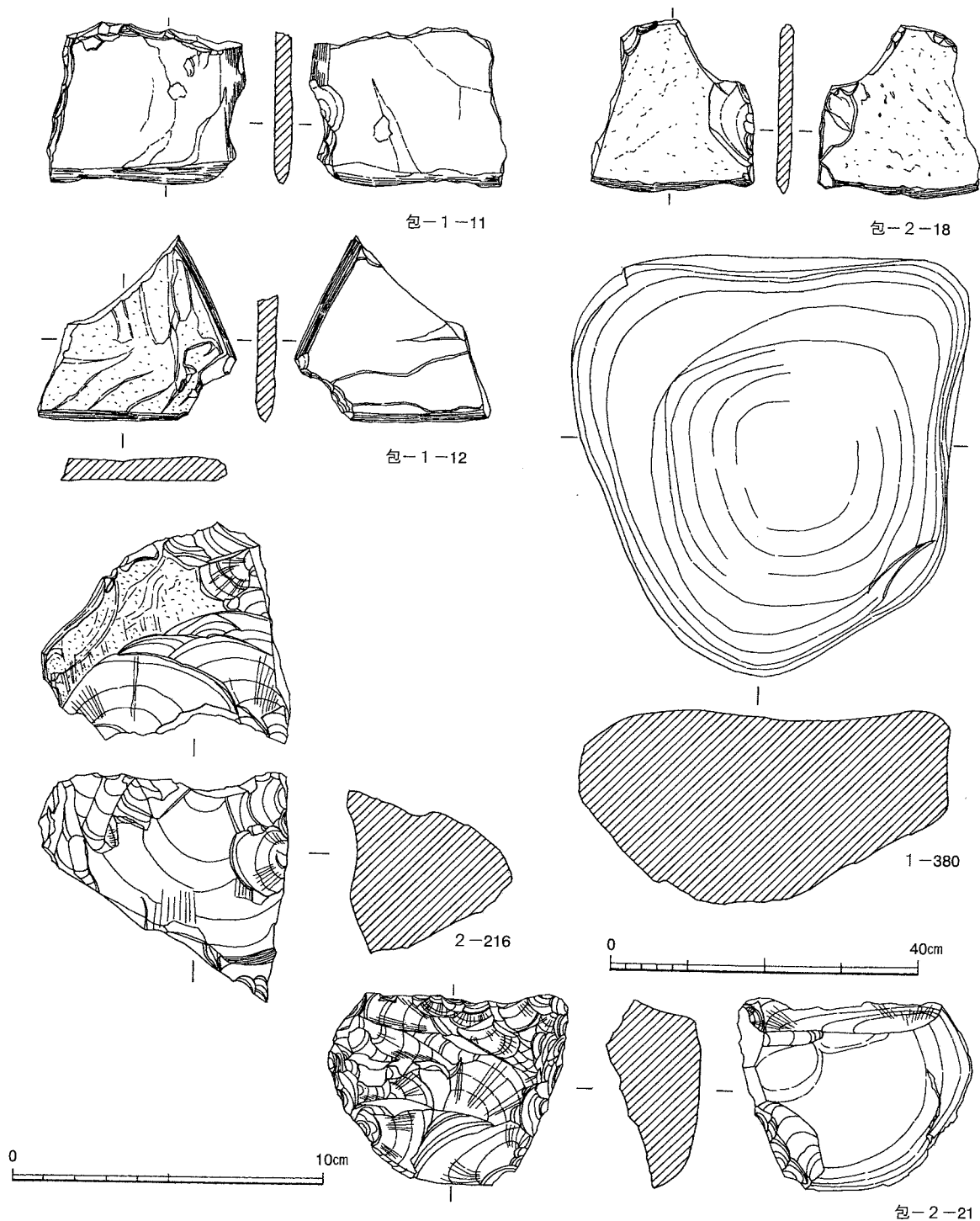
第60~63図は磨石、凹石、叩石を図示した。第60図、1-69は蛇紋岩の円礫を利用し、磨石、叩石として使用された石器である。平面形は円形、表裏面が磨石として使用され、側面の全周に敲打痕と小剥離が顕著に認められる。長8.2cm、幅7.8cm、厚4.3cm、重量429g。1-68は安山岩の扁平円礫を利用、凹石、叩石として使用されている。平面形は楕円形をなす。片面の中央部に敲打を加え凹部をつくり出すが、凹部は浅い。長軸の相対する二辺の中央部には敲打が加えられ、叩石としても利用されている。石錘としても使用可能である。長10.2cm、幅7.9cm、厚1.9~2.3cm、重量293g。1-116は砂岩の扁平円礫を利用した叩石である。側面の全周に敲打痕が顕著で、使用が激しい部分は平坦面をつくり出している。長7.0cm、幅6.6cm、厚1.9~3.0cm、重量200g。1-90は砂岩の円礫を利用した叩石、磨石である。平面形は楕円形をなす。磨石としての研磨面は両面に見られるが、片面は極一部が使用されている。叩石としての敲打面は側面の全周にわたってみられるが、短軸の一辺は特に顕著で敲打によって抉りができている。長10.9cm、幅7.5cm、厚4.1cm、重量492g。1-127は安山岩の円礫を素材とした凹石、叩石である。平面形は楕円形、表裏の中央部に敲打痕が顕著に認められるが凹みは少ない。側面の一部にも敲打痕があり叩石としても使用されたことがわかる。長8.1cm、幅7.5cm、厚4.8cm、断面形は楕円形をなす。重量338g。1-359は安山岩の円礫を利用した叩石、磨石である。片面が磨石として使用され、研磨痕がみられる。側面の敲打痕は長軸の相対する二辺の中央部の一部を除いて、その上下の半円部に顕著な敲打痕がみられる。長8.1cm、幅7.8cm、厚4.9cm、重量449g。1-329は砂岩の円礫を利用した叩石である。平面形は楕円形、短辺の側面に打痕と一部剥離が認められる。長9.1cm、幅8.2cm、厚5.0cm、重量442g。1-409はやや大型の砂岩の円礫を利用した凹石、磨石をかねた石器である。一部欠損しているが全体形は復原可能である。平面形は長楕円形をなす。一面が磨石として利用され、使用によって大きな平坦面が出来ているが、破損し一部を失っている。磨石と逆の面は自然面のままであるが、中央部に径4×3cmの楕円の範囲に打痕が顕著に認められ、わずかに凹んでいる。側面にも部分的に打痕がある。長12.4cm+ α 、幅8.8cm+ α 、厚6.9cm、断面形は一辺が直線的な楕円形、重量920g。1-331は石英(?)の円礫を利用した磨石、叩石である。平面形は楕円形をなす。片面が磨石として利用される。また、長軸の両端に敲打痕がみられる。長10.4cm、幅8.6cm、厚5.5cm、重量652g。1-414は砂岩の円礫を素材とした磨石である。平面形は略円形、片面がやや平坦で逆の面がやや丸味をもっている。形状は使用とは無関係であり、平坦面側に摩耗痕がわずかに認められる。長12.1cm、幅12.1cm、厚4.8cm、重量1006g。第61図 1-包-12は砂岩の扁平な円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形、片面の一部が磨石として使用されている。長径10.7cm、短径9.7cm、厚4.0cm、重量566g。2-188は安山岩のやや大型の扁平円礫を利用した磨石である。表裏の二面が磨石として使用され、磨面は平坦になる。長13.0cm、幅10.6cm、厚4.4cm、重量890g。2-218は玄武岩の円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなす。表裏二面が使用され、条線が観察できる。側面の一部には敲打痕も認められる。長径11.6cm、短径9.9cm、厚4.2cm、重量736g。2-228は安山岩のやや大型の扁平円礫を利用した磨石、叩石を兼ねた石器である。表裏二面磨面として使用され、磨滅によって平坦になり、一定方向の条線がはいる。また側辺の一部とそれに近い片面に敲打痕と小さい剥離がみられる。長12.3cm、幅0.8cm、厚4.1cm、重量784g。2-286は砂岩の円礫を利用した磨石である。



第62图 2層出土実測図XXVII



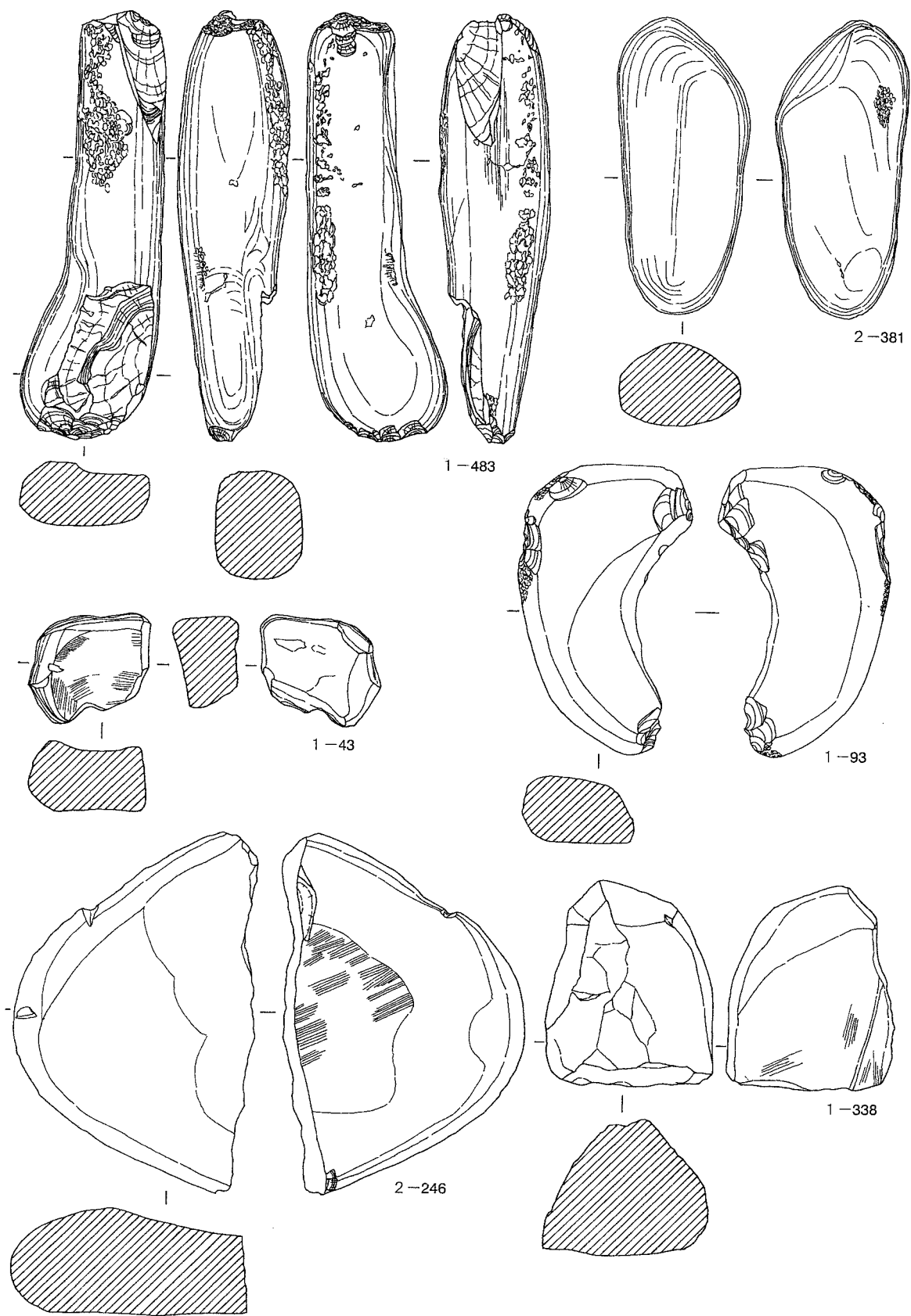
第63图 2層出土石器实测图XXVIII



第64図 2層出土石器実測図XXIX

平面形は楕円形をなす。一面が使用され、使用による条線が顕著であるが、使用回数が少なかったと考えられ、磨面は丸味をもっている。長径10.3cm、短径9.3cm、厚5.7cm、断面形は楕円形をなす。重量730g。2-347は砂岩の円礫を素材とした典型的な磨石、叩石である。使用が顕著で形態的に完成している。平面形は略円形、二面が磨面として使用され、磨いて平坦になっている。側面は叩石として使用され、敲打痕によって平坦面が形成されている。長径10.8cm、短径9.9cm、厚5.3cm、重量850g。1-352は礫岩の扁平円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなし、磨面として両面が使用され

ているが、あまり使い込まれておらずその範囲はせまい。長11.2cm、幅9.5cm、厚5.0cm、重量776g。第62図 2-321は玄武岩の円礫を利用した磨石、叩石である。平面形は楕円形をなす。磨石として使用されているのは片面のみである。通常の磨石とは異なり、長軸に沿って3面の使い分けがある。側面は叩石として使用され敲打痕が観察できる。長径11.7cm、短径10.2cm、厚3.6cm、重量796g。1-371は石英粗面岩の円礫を利用した磨石である。片面のみが磨石として使用されているが、擦痕はあまり明瞭でない。長径11.7cm、短径9.4cm、厚4.1cm、重量684g。1-397は安山岩の円礫を素材とした叩石である。短辺の側面に打痕が顕著に認められ、石槌状に使用されたことがわかる。他の側面にも打痕は認められるが顕著でない。長径10.6cm、短径8.5cm、厚6.7cm、断面は楕円形をなす。重量712g。2-248は安山岩の円礫を利用した石器で、磨石、叩石、凹石として多様に使用されている。平面形は略円形で、表裏の二面が磨石として使用されているが片面の使用が顕著であり、平坦部が形成されている。また、二つの磨面の中央部には打痕があり、凹石としての使用も認められる。周縁部の側面には敲打痕が顕著に認められ叩石としても使用されている。長径9.5cm、短径8.8cm、厚4.8cm、重量582g。2-214は多孔質の安山岩の円礫を素材とした叩石である。平面形は楕円形をなす。側面は部分的に敲打痕が認められる。長径9.3cm、短径8.5cm、厚3.5cm、重量346g。2-267は安山岩の小円礫を利用した叩石である。小円礫は長楕円形をなし、断面は円形である。長軸の一端を打面として石槌として使用されたと考えられ、打面には敲打痕が顕著に認められる。長径6.1cm、短径4.7cm、厚4.3cm、重量151g。2-244は安山岩の円礫を利用した磨石、叩石である。平面形は円形、一面が磨石として使用されているが、擦痕等は明瞭でない。他の一面と側面は叩石として使用され敲打痕が顕著に残っている。長径8.1cm、短径8.0cm、厚6.1cm、断面形は楕円形をなすが、側面は打痕により直線的になる。重量446g。包-1-10は石英の円礫を利用した叩石である。透明度はあまりないが白色をなす。平面形は不整楕円形、断面形はややいびつな楕円形である。側面の大部分が叩石として使用され剥離と打痕が顕著である。長径6.6cm、短径4.9cm、厚3.8cm、重量170g。1-361は安山岩の円礫を利用した叩石、凹石、磨石を兼ねた石器である。平面形は円形をなす。側面の全周に敲打痕がある。敲打痕はきわめて顕著で、単位ごとに平坦面をつくり、表裏面に小さな剥離がおよんでいる。表裏面は磨石として使用、磨面は全面におよび、磨滅によって平坦になる。片面の中央部には敲打が加えられ凹石となっている。長7.6cm、幅7.3cm、厚5.0cm、重量354g。2-431は花崗岩の扁平円礫を利用した叩石である。平面形は隅丸の長方形をなす。短軸の一辺に敲打、剥離が加えられ、他の一辺の一部にも小さな剥離がみられる。長8.6cm、幅4.5cm、厚3.2cm、重量182g。1-354は頁岩の円礫を利用した磨石、叩石であるが、割れて大部分を欠損している。やや大型品と考えられる。一面が磨石として使用されているが、擦痕等は不明瞭、側面には部分的に打痕が観察できる。現存長7.1cm、現存幅6.7cm、現存高5.8cm、現存重量191g。第63図 1-14は大型の安山岩の円礫を利用した叩石である。平面形は長楕円形、厚味のある一端が叩石として使用され、打撃による剥離がみられる。長径15.5cm、短径10.6cm、厚7.5cm、重量1390g。1-12は砂岩の円礫を利用した叩石、磨石である。平面形は不整円形をなす。敲打痕は相対する二辺の側面にあり、敲打痕の間は使用されていない部分もある。敲打痕の顕著な部分は平坦になる。表裏二面が磨石として使用され磨面は平行した条線が観察できる。片面の磨面には敲打痕の観察できる部分があり凹石としても使用されつつあったと考えられる。長7.6cm、幅6.6cm、厚3.9cm、重量273g。1-11は砂岩の小円礫を利用した磨石。叩石を兼用した石器である。平面形は楕円形をなす。表裏両面が磨石として使用されるが、使用の最初であるため範囲は狭い。長軸の両端に敲打痕が認められ、敲打部分は狭いが平坦になる。長6.7cm、幅5.0cm、厚3.9cm、重量158g。1-38はやや大型の砂礫岩を利用した磨石、叩石である。形態は完成しているが、約3分の1を欠損している。平面形は略円形、使用により平坦面が形成されている。側面と他の一面には打痕が顕著に認められ、やはり使用



第65图 2層出土石器実測図XXX

により平坦面が形成されている。径11.7cm、厚6.3cm、現存重量974g。1-50は頁岩の円礫を利用した叩石である。平面形は楕円形をなす。長軸の両端に敲打痕がみられるが、その一辺にはほぼ全てにみられるが、他の一辺は極めて少ない。長9.4cm、幅6.2cm、厚4.2cm、重量317g。1-45は砂岩製の投弾。全体を敲打で仕上げ、球状に整形している。特に長軸の両端に敲打痕が著しい。投弾としての使用が考えられるが、有溝石錘の未製品とも考えることができる。石材は一度火を受け赤変している。長4.9cm、径4.3cm、重量97g。1-44は頁岩の扁平円礫を利用した磨石、叩石を兼用した石器である。表裏二面が磨石として使用されている。磨面は全面におよび広い。長軸の両端の側面に敲打痕がみられるが、一辺の側面の敲打痕は顕著で平坦面が2ヶ所にみられ、他辺の側面の敲打痕は範囲がせまい。長11.1cm、幅10.1cm、厚4.4cm、重量788g。1-46は安山岩の円礫を利用した磨石、叩石を兼ねた石器である。平面形は隅丸の長方形をなす。磨痕の区別が困難であるが、石蝕状を呈する形状から6面すべてが磨面として使用されたと考えられる。長軸の両端には、その後敲打器に使用され、その痕跡が顕著に残っている。一部を欠損する。長6.6cm、幅4.7cm、厚3.7cm、重量144g + α 。1-51は砂岩の扁平円礫を利用した叩石である。平面形は楕円形をなす。長軸の両端部に敲打痕がみられる。長7.1cm、幅5.7cm、厚3.1cm、重量155g。1-62は安山岩の円礫を利用した叩石である。平面形は楕円形をなす。側面に点々と敲打痕がみられる。長10.9cm、幅9.3cm、厚4.5cm、重量562g。

第64図は擦切具、石皿、石核を図示した。包-1-11は板状の砂岩を利用した擦切具である。破損しているため全形は不明である。二側面に刃部を形成する。刃部には側面に平行した擦痕が条線として残る。刃部は丸くなる。長5.1cm + α 、幅6.4cm + α 、厚0.6cm、重量34g + α 。包-2-18は同様に板状の砂岩を利用した擦切具である。平面形は欠損部が多く明確でないが半円状をなすと推測される。直線的な一辺に刃部が形成される。刃部は側面に平行して擦痕が条線状に残る。刃部は丸くつぶれる。刃部以外の辺には粗い剥離が加えられ整形される。長5.5cm、幅5.2cm + α 、厚0.5cm、重量17g + α 。包-1-12は板状の硬砂岩を利用した擦切具である。平面形は欠損部が多く不明、現状では不整三角形をなす。二側面に刃部が形成される。刃部は両面から研磨され、側面に平行した条線が観察できる。刃部は丸くなる。長6.4cm + α 、幅6.0cm + α 、厚0.8cm、重量31g + α 。2-216はサヌカイトを利用した石核である。打面には調整の剥離を加えるが、一部に自然面を残す。剥離面には1ヶ所に剥離痕を残している。剥片は不定形の大型品である。長7.3cm、幅8.1cm、厚5.3cm、重量294g。1-380は砂岩の大型の礫を使用した石皿である。平面形は不整方形をなす。一面が石皿として利用される。磨面は36cm×34cmの円形で浅皿状に凹んでいる。凹みは約8cm、使用面は良く磨かれる。固定式の石皿と考えられる。長54cm、幅50cm、厚27.2cm。包-2-21は頁岩の円礫を利用した石核である。円礫をそのまま利用したもので、半割した面を主要な打面としているが、打面は一定していない。剥離面の反対面は自然面のままである。長6.1cm、幅7.7cm、厚3.1cm、重量165g。

第65図はハンマー、砥石、石皿を図示した。1-483は砂岩の棒状の自然礫を利用したハンマーである。形態は円柱状をなし、端部の一方はわずかに屈曲している。両端部には敲打痕と剥離がみられ、屈曲部と反対の側面の相対する面に敲打痕が顕著にみられる。敲打の激しい部分は平坦になっている。石槌状の使用と屈曲部を手にもち、ハンマーとして使用されたと考えられる。断面形は屈曲部がやや扁平の隅丸長方形、先端部隅丸長方形をなす。長14.7cm、幅3.1~4.3cm、厚3.7cm。2-381は頁岩のやや長い円礫を利用したハンマーである。側面の一部に敲打痕を認めるがあまり顕著でない。長10.3cm、幅3.5~4.5cm、厚2.9cm、重量159g。1-43は砂岩製の砥石である。平面形は不整長方形をなす。一面が砥石として使用され、使用によって凹みができる。長5.8cm、幅6.2cm、厚3.5cm、重量156g。1-93は頁岩の扁平棒状の円礫を利用したハンマーである。やや扁平で、平面形はL字形をなす。両端部に敲打痕とそれに伴う小さな剥離が加えられる。また、屈曲部の背面には5.0cmにわたって敲打痕が顕著

である。石器製作のハンマーとしての使用が考えられる。長10.0cm、幅3.0～5.5cm、厚2.3cm、重量174g。2-246は大型の砂岩の扁平礫を利用した石皿、中央部が凹み良く磨かれているが半折している。現存18.6cm、現存幅12.5cm、厚4.0～5.5cm、現重量1630g。1-338は砂岩の礫を利用した砥石である。平坦な一面が石斧用の砥石として使用されている。段をもって溝状に凹む。大部分を欠損する。現存長10.6cm、現存幅8.7cm、厚7.2cm、重量832g。

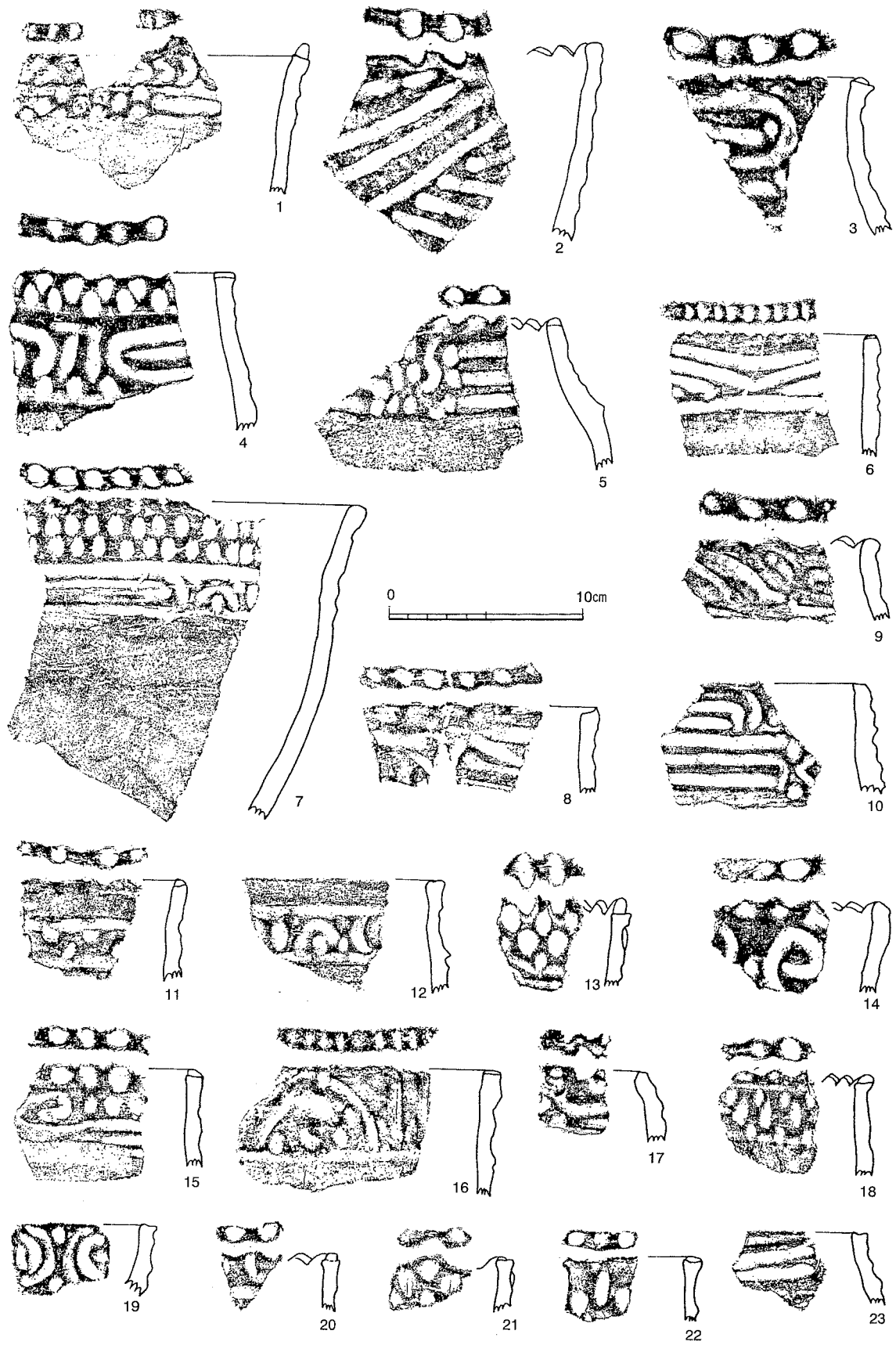
2、第3層出土の遺物

(1) 土器 (第66~71図)

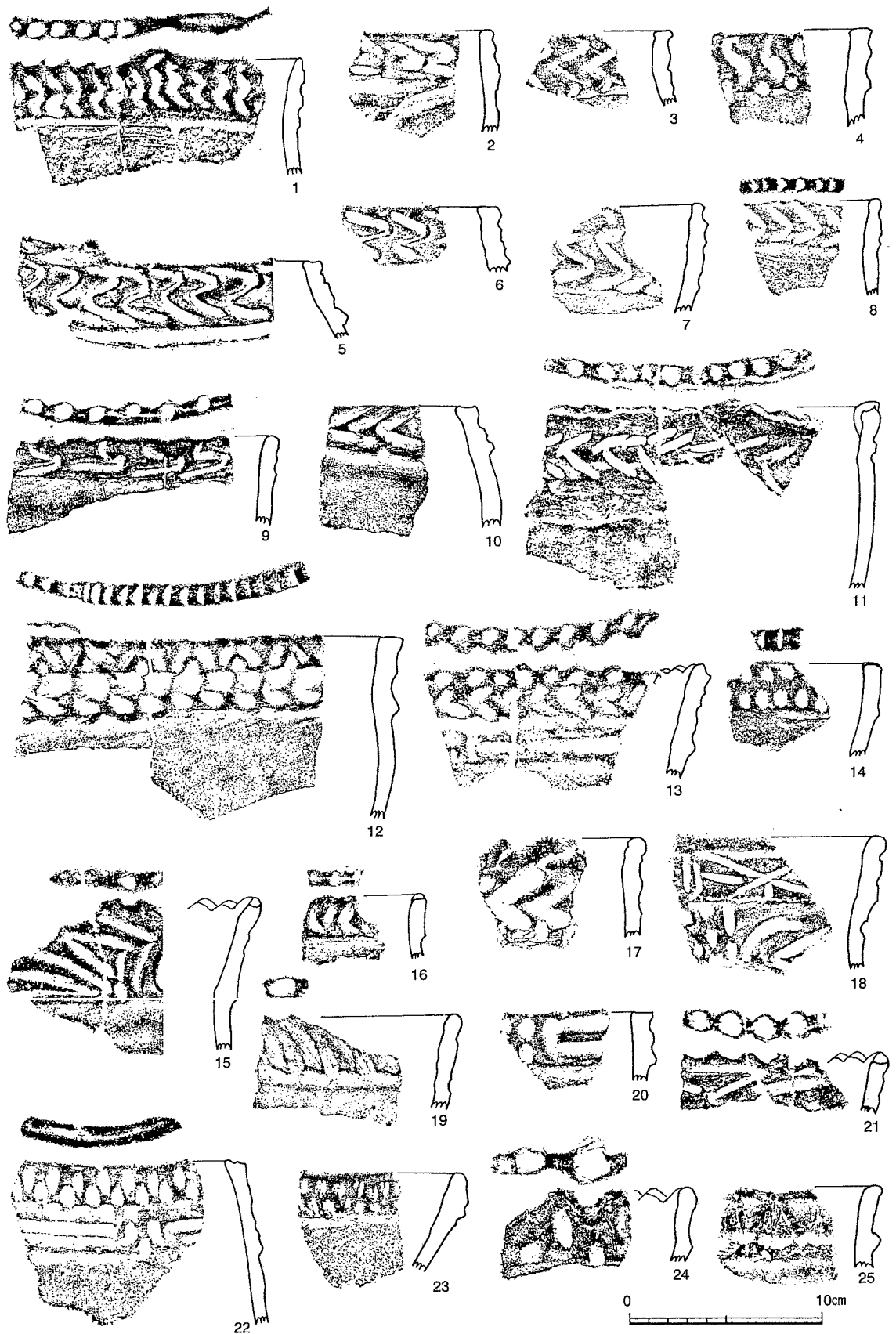
第3層からは第2層同様に後期初頭の南福寺式土器が単純に出土している。口縁部文様肥厚帯を持つ資料が少なくなる傾向にある。また、磨消縄文土器は1点も共伴していない。2層の土器とは型的に分離できそうである。以下、代表的な土器について説明する。

第66図1は口縁部に小さな突起がある。文様帯はやや幅広く2段に文様が施文されている。上段は逆C字状文を横に並列させ、下段に押点文と凹線を組み合わせた文様を施文している。文様帯の肥厚はない。口唇部にはヘラによる刻み目がつけられている。2の文様帯は広く、破片全面に文様が施文されている。文様は押点文と平行斜線を幾何学的に組み合わせている。口唇部には棒状工具により深い刻みが入れられ、口縁は波状をなす。1、2はいずれも外傾しながら直線的に立ち上がる。3は内傾しながら立ち上がり、口縁部は反転しながら直立する。文様は全面にあり、文様帯は幅広い。文様は曲線、直線、押点を組み合わせているが、構成は明らかでない。口唇部は棒状工具で刻み目が入れられ、波状をなす。4は文様帯が幅広く、肥厚しない。文様は口縁から1.5cmと6.5cmのところに凹線各1条をめぐらし区画している。上段には押点文を2段に施文している。下の押点は上の凹線と重複関係にある。押点には爪の痕が明瞭に残っている。下段は押点、短直線、直線、曲線を組み合わせて文様としている。口唇部は棒状工具で刻み目が入れられ、わずかに波状をなす。5は胴上部でわずかに屈曲し、上部は内傾しながら立ち上がる。屈曲部より上部が文様帯となっている。中心飾と考えられる部分はS字状文と押点文の組み合わせで、その両側に平行凹線3条を施文している。口唇部の刻みは大きく、口縁は波状をなす。6はほぼ直立する。口縁下の凹線1条をめぐらし文様帯を区画する。口縁直下に無文帯を置き、直線を1点に集約させている。口唇部には小さな刻みを入れる。7は大きい破片である。胴部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。文様帯は比較的幅広く凹線1条をめぐらし、文様帯を2分している。上段は押点文を2段に施文している。押点には爪の痕が明瞭に残っている。下段は中心飾としてC字状文の内側に押点を施文、その両側の上部にも押点、さらに両側にC字状文を施文する。C字状文は上下の区画線とつながって一体となっている。さらに両側に区画線の間に凹線1条を施文している。口唇部には棒状工具で刻み目を入れ、口縁部は波状になっている。9は曲線で文様を施文しているが文様構成は不明。8は直線を組み合わせて文様としているが構成は不明。8、9はともに口唇部に刻み目を入れている。10は中心飾と考えられる部分に押点が施文されているが構成は不明。中心飾の左側には5条の平行凹線が施文され上から1、4番目の直線の先端部がワラビ状に折れ曲がっている。11は口縁部に無文帯を置き、下に間隔を置いて2条の沈線がめぐらされる。沈線間には押点が2段に施文されている。口唇部には刻み目がある。12も同様に口縁部に無文帯を置き、間隔を持って2条の凹線がめぐらされ、その間にC字状文と押点文を施文している。13、18、21、22は押点文が施文されている。14は口縁直下に押点をめぐらし、下に押点と渦巻状の曲線を施文している。15は文様帯がわずかに肥厚している。上に押点文を2段施文し、下に先端がワラビ状に巻いた凹線を施文している。16は沈線をめぐらし文様帯を区画している。文様は曲線で半円状に囲み押点を施文している。17は曲線で文様が描かれるが、構成は不明。19は押点とC字状文を組み合わせている。20は小破片で明瞭でないが凹線1条をめぐらし、短直線を縦に平行させている。23は平行した凹線3条をやや斜めに施文している。

第67図1~7、9はS字、逆S字状文を施文した土器の1群である。1は文様帯がわずかに肥厚する。また口縁部には隆起部分があり、その部分の文様は逆S字状文の上に押点文を加えている。2は口縁部文様帯が肥厚し、その下の凹線が施文されるが、文様構成は不明。4も口縁部文様帯が肥厚する。肥厚部下端のS字状文の間に押点が施文される。5、6も文様帯が肥厚する。8、10、11は羽状



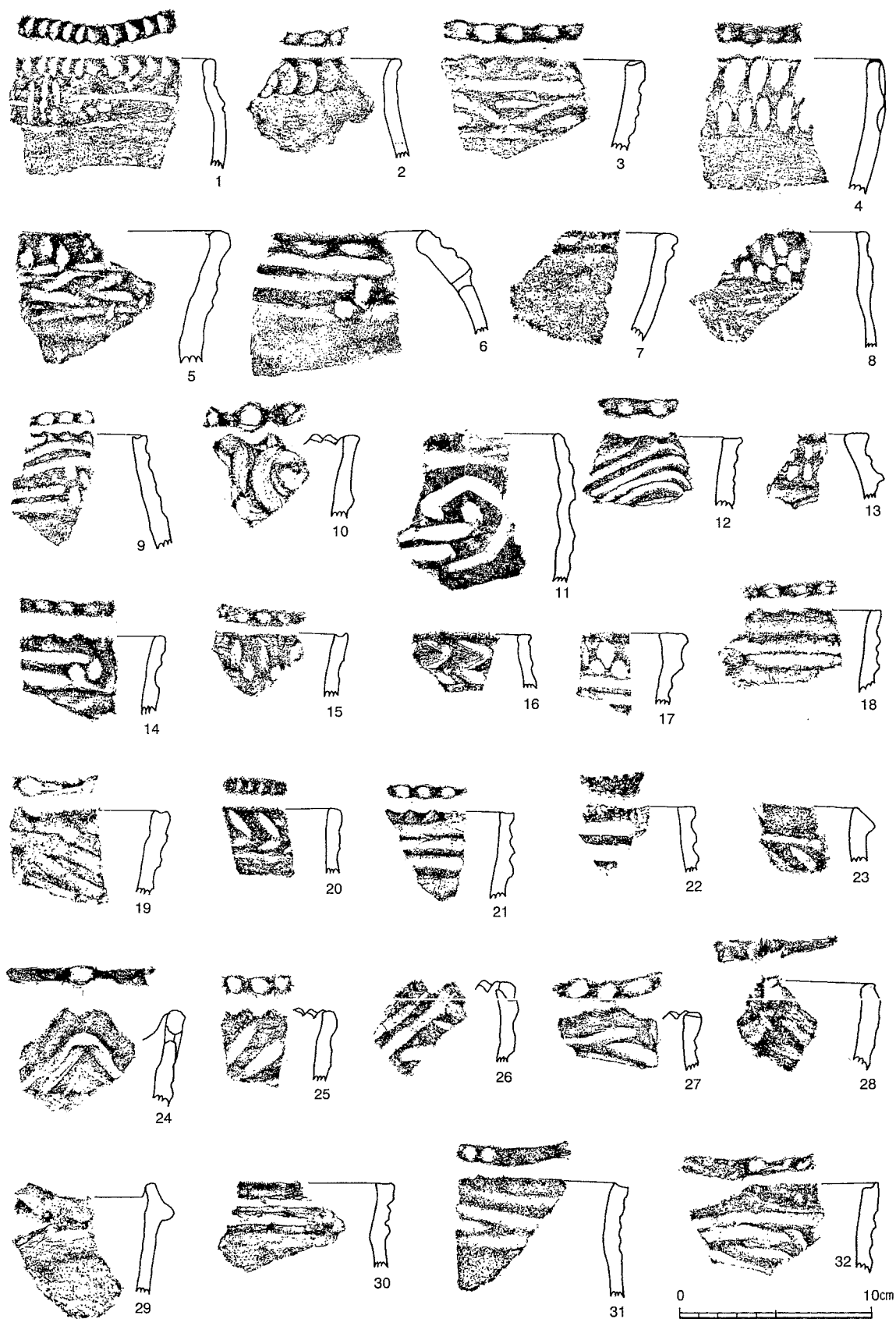
第66图 3層出土土器実測図 I



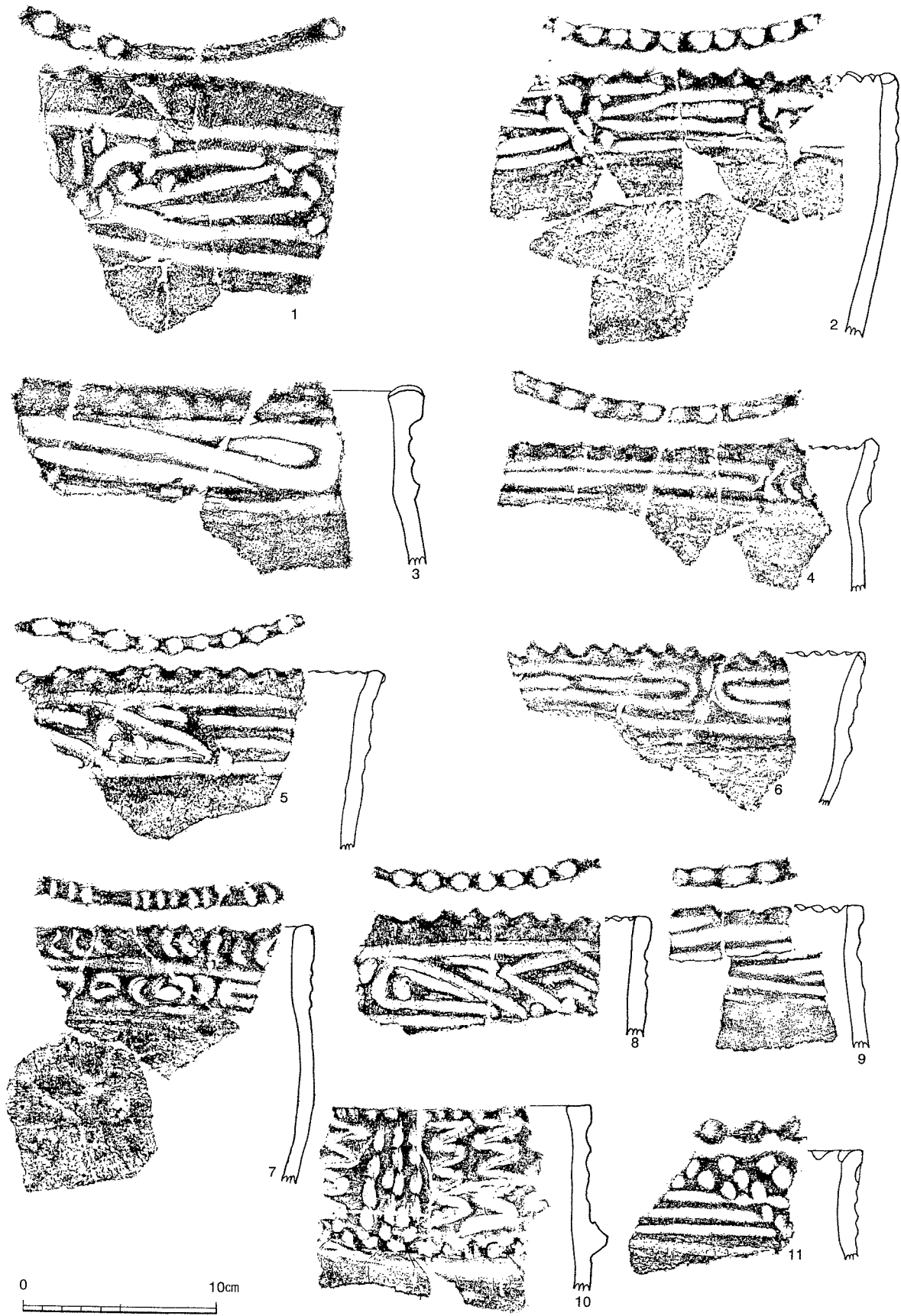
第67图 3層出土土器実測图Ⅱ

文を施文している。10は文様帯が肥厚している。12は文様帯が肥厚し、下端に段が形成される。文様は2段に分かれる。上段は短い弧線を山形に組み合わせ、それを横に並列施文し、山形の内側には押点文が施文されている。下段は太い凹線でC字状文が並列施文されている。口唇部にはヘラで細かい刻み目が入れている。13は文様帯がやや幅広いが、わずかに肥厚している。口縁直下に押点文を施文し、その下に羽状文を施文している。さらに下には平行凹線を施文している。口唇部には棒状工具で刻み目が入れられていて、口縁は波状をなす。14は文様帯がわずかに肥厚する。押点文を2段に施文している。口唇部にはヘラによる細かい刻み目が入れる。15は口縁部近くで屈曲して口縁は外反する。文様帯は幅広いがわずかに肥厚している。直線を幾何学的に組み合わせ文様としているが、全体の構成は明らかでない。16は口縁部文様帯が狭く、肥厚している。C字状文を並列施文している。17も口縁部形態は同様で、羽状文が施文されている。18は口縁部文様帯がわずかに肥厚し、その部分にはやや細い沈線で幾何学的な文様を施文している。さらに下には押点文、短沈線、曲線を組み合わせた文様を施文しているが全体の構成は不明。19は凹線1条をめぐらし文様帯を区画している。文様帯には斜めの凹線を密接施文している。20は文様帯が狭く肥厚している。押点文と2条の平行凹線文を組み合わせた文様を施文している。21は直線を組み合わせた文様であるが、文様構成は不明。口唇部には棒状工具で刻み目を入れ、口縁は波状をなす。22は口縁は内傾しながら立ち上がる。口唇部は平坦で口縁に平行して沈線1条が施文されている。文様帯は幅広いがわずかに肥厚している。文様は2段に施文され、その境に凹線1条がめぐらされている。上段には押点文が2段に施文され、下段には押点3個を中心に、両側に2条の平行凹線を施文している。23は口縁部が肥厚し、断面三角形をなす。肥厚部の下方に沈線1条をめぐらし、上には2段に刺突文を施文している。24は口縁部近くで屈曲し、口縁部は直立する。押点文が2段に施文されている。口唇部には棒状工具によって刻み目が深く入れられ、口縁は波状をなす。25は口縁下に突線1条が巡る。

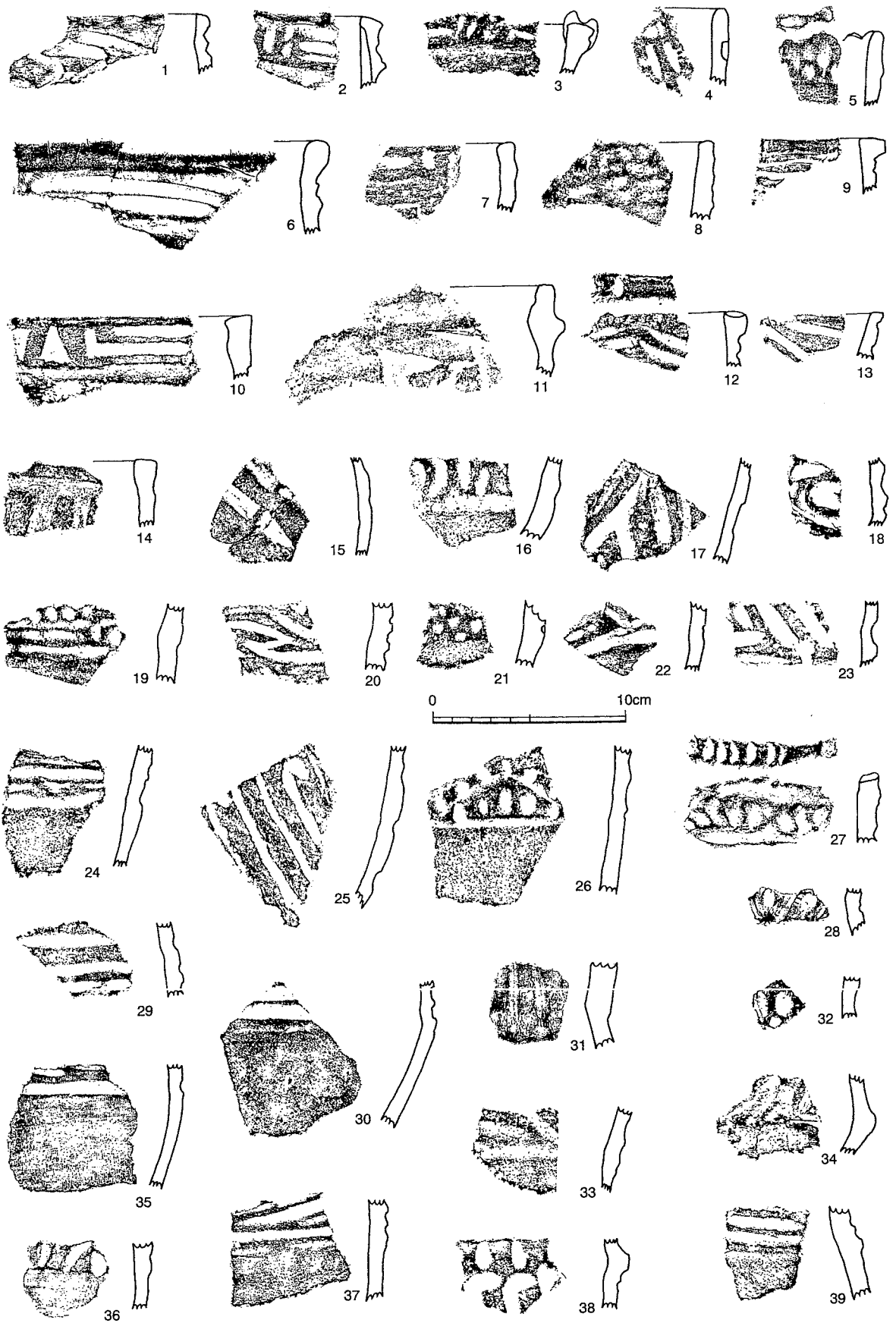
第68図 1は口縁部近くでわずかに屈曲し口縁部は内傾しながら立ち上がる。口唇部にはヘラによる刻み目が入れる。文様帯には区画はない。文様は沈線とたての短沈線、刺突を組み合わせている。2は口縁直下に弧状の短い凹線を1列めぐらしている。口唇部には棒状工具により刻み目が入れられている。3は口縁直下に狭い無文帯があり、間隔を置いて2条の沈線をめぐらし、文様帯を区画している。沈線の間には波状の沈線をめぐらし、谷と山の間に短沈線を入れている。4、8、13、15、17は押点文を文様としている。4、13、15、17は2段、8は3段に施文される。13は文様帯が肥厚し、17は下に平行凹線が施文されている。5は口縁直下に押点文を施文し、その下に間隔を置いて短沈線を2条連続させ、その間は羽状文で埋めている。6は丸味をもって大きく内傾している。文様帯は肥厚している。口縁直下に押点文を横に並列させ、その下に凹線2条と押点1個を施文している。7は口縁部が狭く肥厚し、横転と沈線を施文している。9～11は曲線と押点を組み合わせ文様としているが構成は不明。12は先端がワラビ状になった平行沈線を5条施文している。14は2条の平行する凹線と押点2個を施文しているが、全体の文様構成は不明。16は逆S字状文を施文している。18、21、22、30は平行凹線を施文する。19は斜行した凹線を施文しているが文様構成は不明。20は羽状文を施文している。23は口縁部が肥厚し、断面三角形をなす。口縁下に1条の沈線をめぐらし、その下に平行斜線を施文している。24は口縁が山形に隆起し、その頂部の口唇に押点を施文している。表面には隆起にあわせて凹線が施文されている。25は平行した凹線が斜めに施文されている。口唇部には棒状工具で刻みが入れられ口縁は波状をなす。26は平行斜線と平行横線を組み合わせ文様としているが文様構成は不明。27は凹線2本を施文している。28は口縁が山形になる。文様は口縁に沿って平行斜線が施文されている。29は口縁の下に粘土を貼り付けて断面三角形に肥厚させている。31は凹線4条を施文しているが、文様構成は不明。32も同様に4条の凹線を施文するが、文様構成は明らかでない。



第68图 3層出土土器実測図Ⅲ



第69图 3層出土土器実測図IV

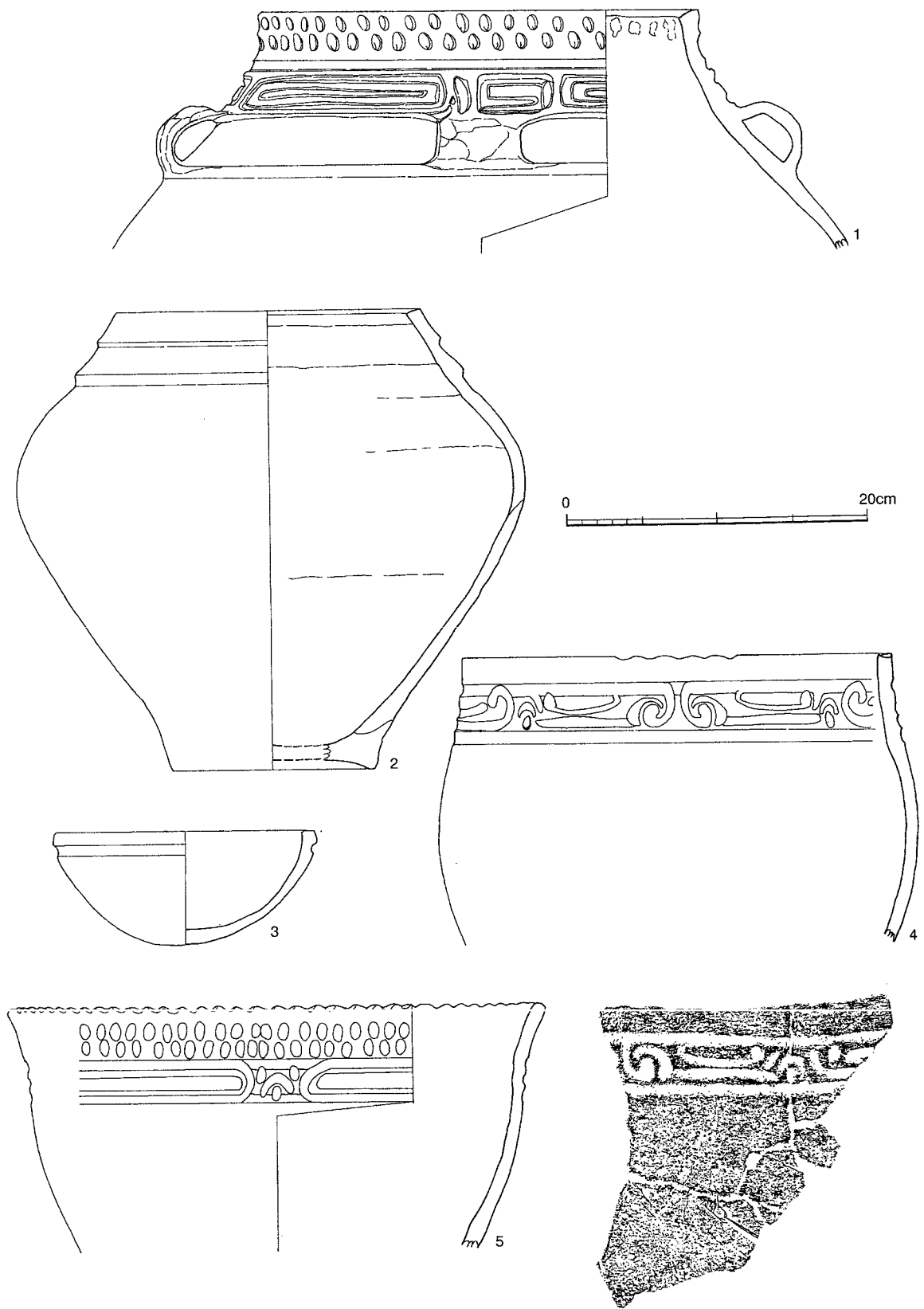


第70图 3層出土土器実測図V

第69図 1は口縁下に無文帯をおき、幅広い間隔において2条の凹線をめぐらし文様帯を区画している。直線、短沈線、弧線を組み合わせて文様とするが、本来の文様構成からするとくずれが大きい。口唇部には棒状工具で刻み目が入られるが、部分的で刻み目のない部分が多い。2は口縁部下に凹線1条をめぐらし文様帯を区画しているが文様帯はあまり広くない。文様帯は押点文の施文で分割しその間は凹線で三角形を基調とした文様を施文しているが、全体にくずれが大きい。口唇部には棒状工具によって刻み目が入られ、口縁は波状をなす。3は口縁部の文様帯が肥厚する。口縁直下に無文帯を置いている。この無文帯の肥厚が顕著で断面形は方形をなす。その下に太い凹線で細長い三角形を描き、その間の隙間も同様の凹線で埋めている。4は口縁部文様帯はわずかに肥厚するが狭い。C字状文を中心に左右に凹線文2条を施文している。中心に近い凹線の先端はワラビ状に曲がっている。口唇部には棒状工具により刻み目が入られるが、刻みは浅い。5は口縁部下に無文帯を置き、その下に広い間隔を持って2条の凹線をめぐらし文様帯を区画している。区画内に直線、押点を組み合わせて文様を構成しているが、くずれが目立つ。口唇部には棒状の工具によって刻み目が入られている。口縁部は低い波状をなす。6は文様帯がわずかに肥厚している。文様は2個の押点を上下に配し、それを中心に左右に凹線で長楕円形文を描き、その中に凹線の短直線を2個並列させている。その下には凹線1条をめぐらしている。口唇部には棒状工具で刻み目を入れ、口縁は波状をなす。7は口縁部文様帯がわずかに肥厚している。文様は2段に分かれ、それぞれの下端に凹線がめぐらされている。上段の文様はC字状文を部分的に間隔を持って施文している。下段の文様は押点の両側にC字、逆C字状文を2個ずつ配し、さらにその左側に凹線で三日月形に囲った文様を配し、さらにそれらの文様の両側に凹線2条をめぐらし、端部は弧線をつないでいる。口唇にはヘラで刻み目が入られているが、部分的に施文されていない。また突起が付けられているが形状は不明。胴部はヘラ削りで調整されている。8は口縁直下は無文帯となる。やや幅広い間隔において2条の凹線をめぐらし、文様帯を区画している。文様帯にはヘラにより押点、直線、曲線を組み合わせ三角形、菱形を基調とした文様を施文している。口唇部には棒状工具で刻み目を入れ、口縁は波状をなす。9は凹線を組み合わせた文様を施文しているが構成は明らかでない。10は厚手の土器で文様帯は幅広い。文様帯の境には刻み目の突帯をめぐらしている。文様は口縁端に押点文をめぐらし、その下に押点文を4段、3列施文しその両側にS字状文を縦に連続させた文様を施文している。11は2段に文様が施文されている。上段は押点文、下段は平行凹線4条と押点文で文様が構成されている。口唇部には棒状工具で刻み目が施文されている。

第70図は口縁部の小破片である。1は羽状文を施文している。2～4、7は押点と短直線を組み合わせて文様としている。5は押点文を2段に施文している。6は第69図3と極めて良く類似している。8は保存状態が悪い。9は口縁が肥厚し、断面方形をなす。細い沈線が施文されるが文様構成は不明。10、11は文様帯が肥厚する。面取りされた三角形文と沈線を組み合わせて文様としている。12～15、17、20、22～25、29、30、33、34、37、39は沈線ないしは凹線を施文しているが文様構成は不明。17、20、22、25は胴部の破片である。14は口縁部に突起がある。16は文様帯の境に凹線をめぐらしている。逆C字状文を並列施文している。18は胴部破片で、曲線を施文している。19は口縁の上部を欠損している。押点文と凹線の組み合わせ文様。21は刺突文を施文している。26～28、32は押点文を施文している。31は口縁部近くで屈曲する。わずかに肥厚し、縦の平行沈線を施文している。35は文様帯は凹線をめぐらし区画している。文様は短直線を連続施文している。36は押点とたての短直線を並列施文している。38は胴部破片。上に押点文、下にワラビ状の凹線をたてに並列施文している。

第71図は主な土器の復元図の一部である。1、2は壺形土器、3は浅鉢形土器、4、5は深鉢形土器である。1は大型の壺形土器で口縁部から胴の上部までが遺存している。復元口径29.4cm。現存胴



第71图 3層出土土器実測図VI

部最大径48.8cm。文様帯は3段に分かれている。2段目と3段目の下端に突帯が巡る。1段目は押点文を2段にめぐらし、2段目との境に凹線1条をめぐらす。2段目の文様は凹線3条をめぐらし、2条の縦の凹線を数箇所に入れて区画している。3段目の文様帯は無文であるが、突帯と突帯を結んだ橋状の把手が突いている。器面は内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。2は無頸の壺形土器である。復元口径20.4cm、胴部最大径34.0cm、底部径13.4cm、器高30.2cmを測る。底部はやや上げ底になり、胴部は底部から外傾しながら直線的に立ち上がり、胴上位で緩やかに屈曲して肩部を形成する。口縁部は強く内傾し直線的に伸びる。口縁端部はヘラで平坦に仕上げられている。口縁部には幅2cm程度で2段にわたって粘土を貼り付けて肥厚させ、それぞれに段を形成しているが、下の段が高い。外底部にはクジラの脊椎骨の圧痕が認められる。器面外面は口縁部から胴上半部にかけて横方向、胴中位が縦方向、胴下半部が横方向のヘラ研磨調整、内面は口縁部が横方向、胴上半部が斜方向から縦方向、胴下半部から内底部にかけて横方向のヘラ削りの調整を加えている。3は小型の浅鉢形土器である。約半分が遺存している。器形は半円状をなし、底部はきれいな丸底である。口唇部はヘラにより平坦に仕上げている。口縁の下にやや深い凹線1条をめぐらしている。器面の内外面は横方向のヘラ削り状の調整を加えた後に、横方工のヘラ研磨調整を加えているが保存状態が悪い。また、胎土に植物質の材が多量に混入されているので孔が多くみられる。底部は多方向からのヘラ研磨調整である。復元口径17.6cm、器高7.4cmを測る。4は口縁下に無文帯を置き、その下に間隔を置いて2条の凹線がめぐらされ、文様帯を区画している。区画内の文様は6分割されている。分割の中心となる文様は2種類あり、一つは押点文の上にC字状文をかぶさるように施文した文様で、他の一つは欠損しているため明瞭でないが入り組んだ渦巻き文を対称に施文した文様である。後者の文様が主文様と考えられ、この文様の上の口唇部だけに棒状工具によって、刻み目が入れている。主文様の間を埋める文様は凹線文でその両端に押点文が施文されている。器形は胴部がやや膨らみ口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がる。復元口径28.6cm。2箇所ドングリの圧痕がある。5は胴部が丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部にやや幅広い文様帯がある。文様帯は上下2段に分かれている。上段には押点文を2段に施文している。押点の中には爪の痕が明瞭に残っている。下段の文様は間隔を持ってめぐらされた2条の凹線によって区画されている。文様は中心に押点とそれを覆うようにC字状文が施文されC字状文の両端の上にも押点が施文される。さらにこれらの文様の両側にはC字状文が施文され、上下の区画線を結んでいる。中心文様の両側には凹線1条がめぐらされていて、結果的には3条の凹線がめぐっている。復元口径35.8cm。

(2) 石器

同層出土の石器には、石鏃、同未製品、石鋸、石匙、ドリル、尖頭器、スクレイパー、磨製石斧、同未製品、双角状礫石器、礫器、石錘、有溝石錘、叩石、凹石、磨石、石皿、有溝砥石、砥石、ハンマー、雨だれ石等がある。

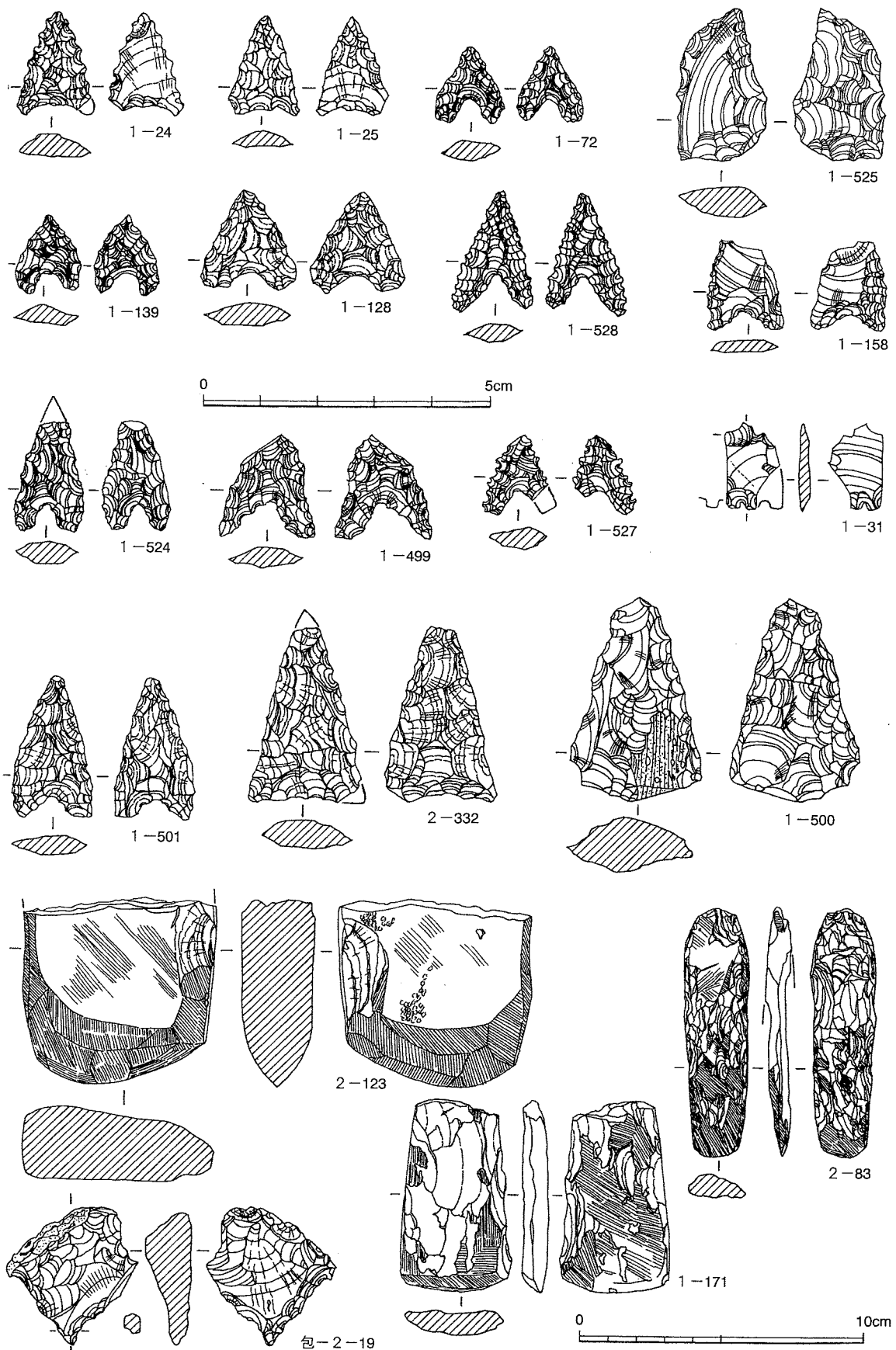
第72図には、石鏃、同未製品、石鋸、磨製石斧、ドリルを図示した。石鏃は形態的特徴から、a. 長身で基部が平坦な石鏃(2-332)、b. 長身で基部に浅い抉りを入れた石鏃、側辺に鋸歯列をもつ例もある(1-24、1-25)。c. 長身で基部にやや深い抉りを入れる石鏃、側辺に鋸歯列をもつ例もある(1-528、1-524、1-499、1-501)、d. cと同様の形態であるが剥片鏃になる例(1-158) e. 全体形が正三角形に近く基部に浅い抉りを入れる石鏃(1-128)、f. 小型の石鏃、全体形は正三角形に近く基部に深い抉りをもつ。側辺に鋸歯列をもつ例もある(1-72、1-139、1-524、1-527)。1-525、1-500は石鏃未製品と考えられる資料である。石鏃、同未製品の計測値、石材等は第3表に示した。

第3表 第3層出土石鏃計測表

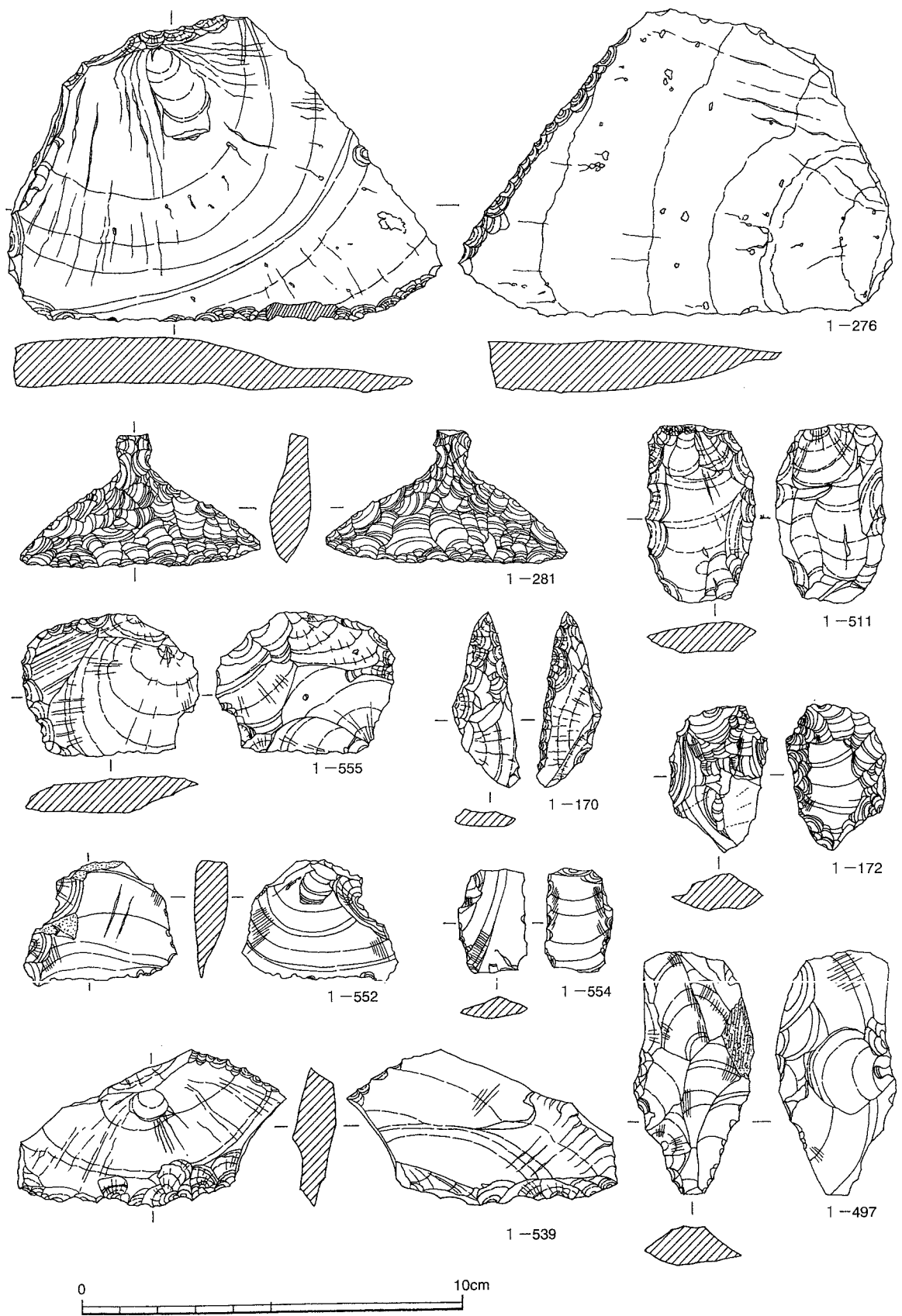
遺物番号	長mm	幅mm	厚mm	重g	石材	出土区	備考	遺物番号	長mm	幅mm	厚mm	重g	石材	出土区	備考
1-24	16.9	12.3+ α	4.2	0.64	サカハ	A-8区	石鏃	1-158	14.6+ α	11.9	2.2	0.54	ob	A-7区	剥片鏃
1-25	16.0	11.9	2.9	0.50	サカハ	A-8区	石鏃	1-524	17.6+ α	10.9	3.8	0.71	ob	C-2区	石鏃
1-72	12.2	11.4	3.4	0.28	ob	A-8区	石鏃	1-499	16.6	15.4	3.7	0.73	ob	B-2区	石鏃
1-525	25.3	15.1	5.3	2.21	ob	C-2区	石鏃未製品	1-527	12.7	10.2+ α	3.9	0.27	ob	C-2区	鋸歯鏃
1-139	12.6	10.4	3.6	0.30	ob	A-8区	石鏃	1-501	23.2	12.9	3.2	1.20	サカハ	D-2区	石鏃
1-128	16.2	15.7	3.8	0.92	サカハ	A-4区	石鏃	2-332	28.8+ α	18.5+ α	4.9		サカハ	D-3区	石鏃
1-528	20.1	13.2	3.2	0.51	ob	C-2区	鋸歯鏃	1-500	33.6	20.9	8.4	5.64	ob	D-2区	石鏃未製品

1-31は黒曜石（腰岳）の剥片でつくられた石鋸である。剥片は極めて薄く、一辺に細部加工が施され、鋸歯2個が作り出され、他は欠損する。長0.9cm+ α 、幅1.5cm、厚0.15cm、重量0.28g+ α 。2-123は砂岩の扁平円礫利用の磨製石斧である。上半部を欠損する。本資料は当初、砥石として使用され、その後磨製石斧として再利用されたものである。胴部の二面に砥面が残り、両面共にわずかに凹み、擦痕とわずかな敲打痕が残っている。その後、側辺に剥離と研磨を加え整形し、刃部は両面から砥ぎ出され両刃をなす。砥石と石斧研磨痕の間には明らかな違いが認められる。長6.5cm+ α 、幅6.8cm、厚2.0~2.5cm、重量162g+ α 。2-83は蛇紋岩製のノミ形の磨製石斧である。頭部がやや幅広いが短冊形をなし、完形である。研磨は刃部周辺に集中し、刃部は片刃をなす。頭部の研磨痕は刃部の研磨痕に比較し古い。元来は本資料より大きい石斧であったものが破損したことにより、再生されたと考えられる。長8.7cm、幅1.8~2.4cm、厚0.6~0.9cm、重量19g。包-2-19はサヌカイト製のドリルである。方形の剥片の一角の両側に細かい加工を施し、尖頭部をつくり出している。尖頭部には回転による使用痕が認められる。長3.6cm、幅3.5cm、厚0.5~1.2cm、重量11g。1-171は蛇紋岩製の小型の扁平片刃石斧である。形状は刃部にむかって広くなり揆形をなす。両面には剥離調整後に研磨を加えている。刃部は片面から研ぎ込まれ明瞭な片刃をなす。各面には研磨の違いが観察され、それらから本来はさらに大型の磨製石斧であったもので、その破損部を再利用して、小型の扁平片刃石斧に再生したものと考えられる。長6.7cm、幅3.0~3.8cm、厚0.9cm、重量30g。

第73図はスクレイパー、石匙、尖頭状石器を図示した。1-276はサヌカイト製の大型のスクレイパーである。台形状をなし、底辺と側辺の二辺に片面から細かい剥離を加え刃部を形成する。打面には打面調整が認められる。長8.1cm、幅11.4cm、厚1.3cm、重量127g。1-281はチャート製の横型の石匙である。両面から全体に丁寧な横圧剥離を加え整形する。つまみは低い二等辺三角形の頂部につくり出される。刃部は直線的で、両端部は尖頭状に尖る。長3.4cm、幅6.4cm、厚1.1cm、重量13g。1-511、1-555はサヌカイト製のスクレイパーである。511は小型の縦長の剥片の側辺に両面からやや粗い剥離を加え刃部を形成する。全体に風化が著しい。長4.7cm、幅2.8cm、厚0.8cm、重量14g。1-555は不整形の剥片を素材とし、平面形は略隅丸長方形。打面を除いた各エッジに使用痕があり、特に側辺の一辺には片面から細部加工を施し刃部を形成する。長3.7cm、幅4.7cm、厚0.9cm、重量18g。1-170はサヌカイト製の尖頭状の石器である。先端部は両面から細部加工を加え尖頭状に尖る。側辺には両面から剥離が加えられ刃部を形成する。全体に風化し灰色に変色する。石匙の失敗品か。長4.6cm+ α 、幅1.8cm+ α 、厚0.5cm、重量3g+ α 。1-172は黒曜石（腰岳）を利用した小型のスクレイパーである。周囲に細かい剥離を加え刃部を形成する。特に下半部に使用痕が集中する。長3.8cm、幅2.7cm、厚0.9cm、重量8g。1-552は黒曜石（腰岳）の横剥ぎの剥片を利用する。打面に自然面を残し、エッジ部分に使用による細かい刃こぼれがある。長3.1cm、幅4.1cm、厚1.0cm、重量8.04g。1-554は黒曜



第72图 3層出土石器实测图 I

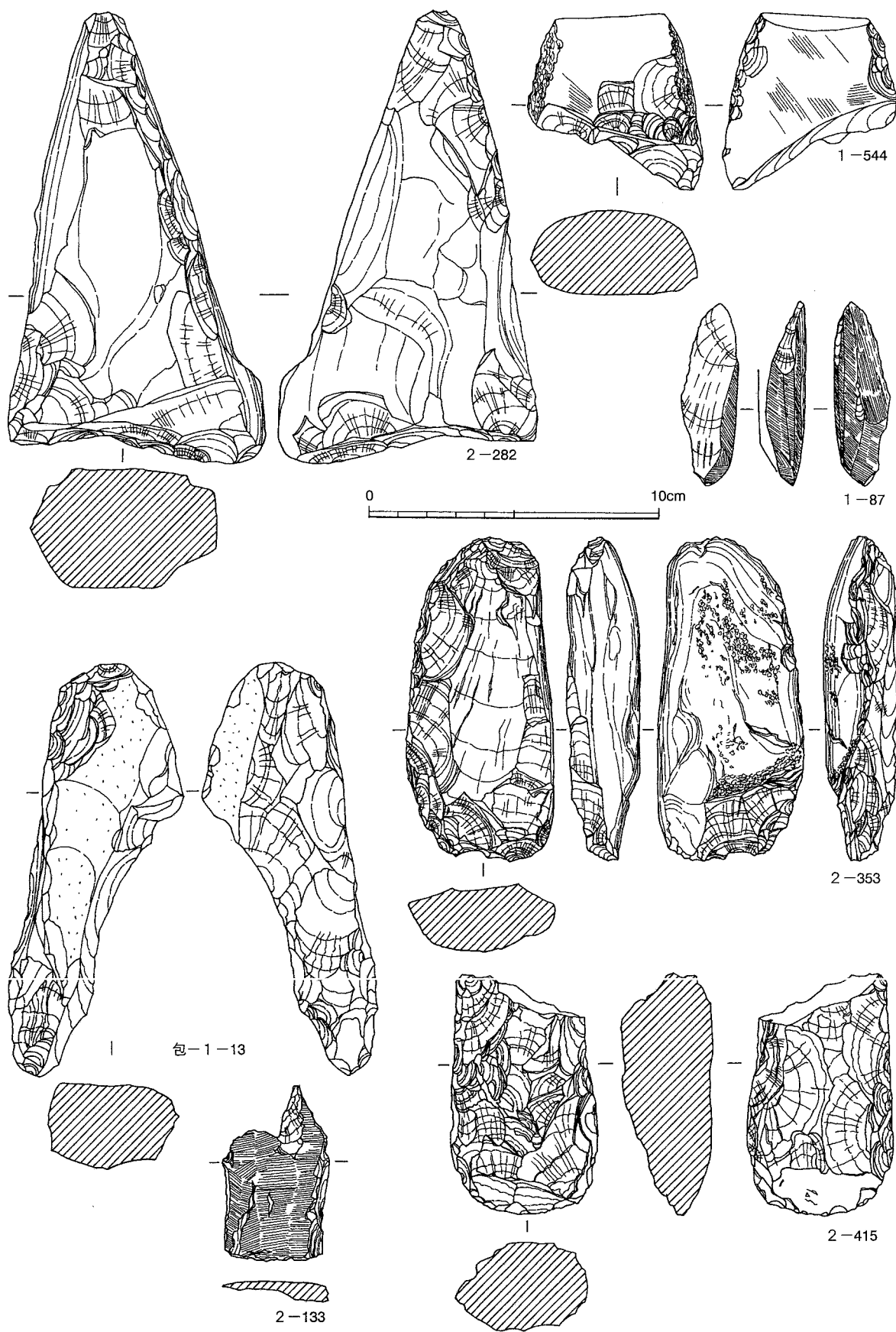


第73图 3層出土石器实测图Ⅱ

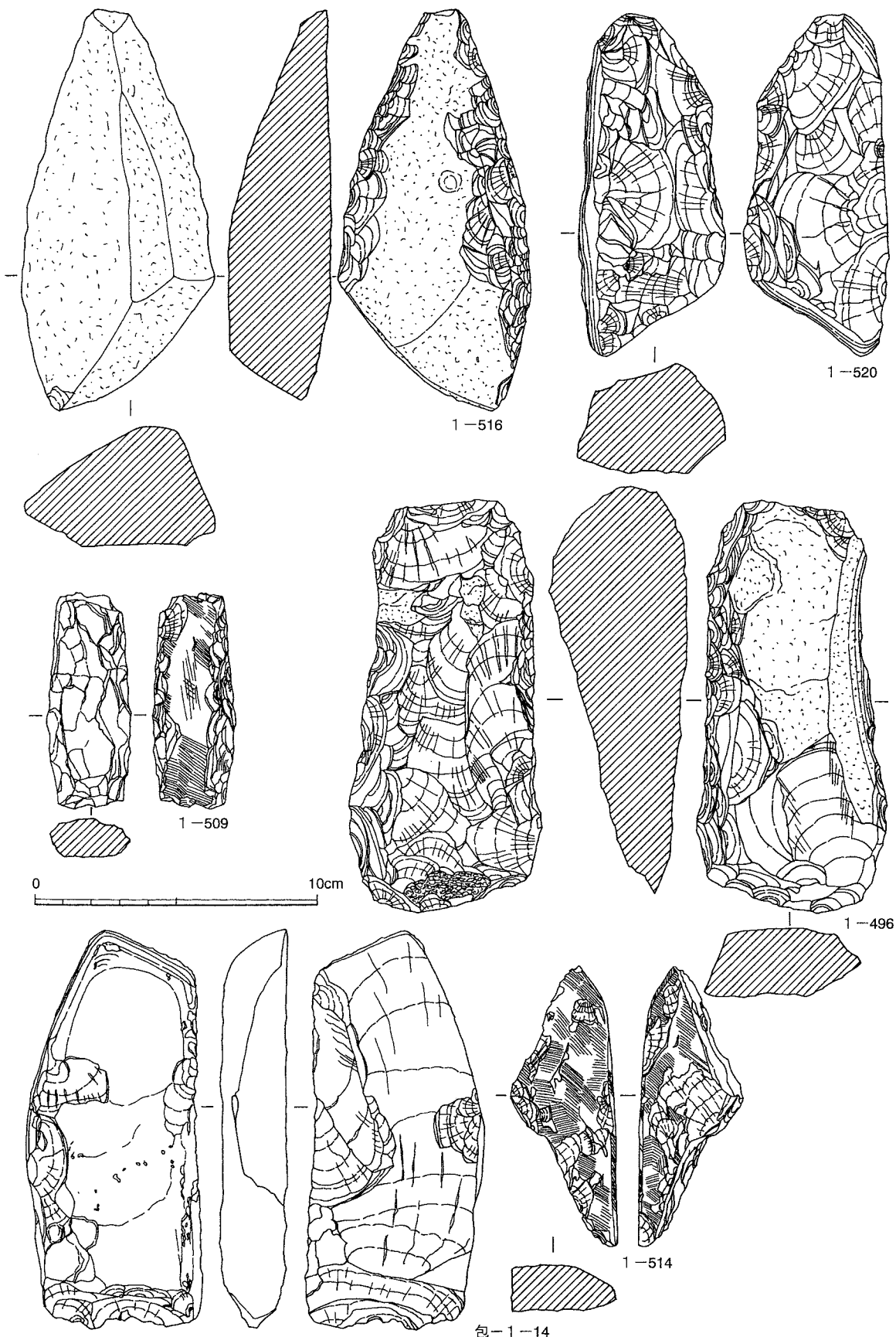
石（針尾島）の縦長剥片を素材としたサイド・ブレードである。剥片を半折しその下半部を使用する。側辺に細部加工を施し刃部を形成する。平面形は長方形、断面は低い三角形をなす。長2.6cm、幅1.8cm、厚0.6cm、重量2.52g。1-539、1-497はサヌカイト製のスクレイパーである。1-539は横剥ぎの剥片を素材とし、打面を除いたエッジ部分に両面から細部加工を施し刃部とするが、一部欠損している。長4.1cm、幅7.2cm+ α 、厚1.2cm、重量25g+ α 。1-497は不定形剥片の両側辺に細かい剥離を加えて刃部を形成する。一部に自然面を残している。長6.4cm、幅3.2cm、厚1.0cm、重量26g。

第74図は磨製石斧、同未製品を図示した。2-282は頁岩の礫を素材とした磨製石斧未製品である。平面形は細長い三角形状をなす。頭部は階段状剥離と平坦剥離を加え尖り気味に整形し、側辺部にも剥離が加えられるが、大部分は礫の状態のままである。刃部にも剥離が加えられるが、平坦部に剥離が及ばず、刃がつぶれた状態にあり、挟りをもつ礫石器に近いが、全体の形態や石材等から石斧未製品とした方がより可能性が高い。刃部調整がうまくいかなかったのが製作中断の理由であろう。長15.5cm、幅1.4~9.0cm、厚4.1cm、重量506g。1-544は頁岩製磨頭石斧の頭部の剥片である。側辺には調整の剥離痕、敲打痕が残る。全面に研磨が施されるが、半折の剥離で残存状態は悪い。長6.1cm+ α 、幅3.8~6.1cm、厚2.9cm、重量130g。2-87は頁岩製の磨製石斧である。刃部~側辺の破片、全体に良く研磨されている。刃部は片刃をなし、残存部から柱状の片刃石斧になると考えられる。長6.3cm+ α 、幅1.9cm+ α 、厚1.4cm+ α 、重量12g+ α 。2-353は安山岩の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。片面は自然面のままで、他の片面に剥離を加えて整形する。刃部は両面から剥離を加えるが、片面は剥離が大きくステップし段がつく。その部分に敲打を加えているがこの石斧は刃部形成に失敗したために製作を中断したと考えられる。長11.2cm、幅3.8~5.0cm、厚2.3cm、重量174g。包-1-13は安山岩の礫を素材とした磨製石斧未製品である。楔形をした石材の両面から剥離を加え整形するが、部分的に自然面を残している。整形段階で大きく欠損したため製作を中断したと考えられる。長14.1cm、幅3.0~5.0cm+ α 、厚2.8cm、重量178g+ α 。2-133は蛇紋岩製石斧の研磨面が剥離した破片である。研磨面には全面に横方向の平行条線（研磨痕）が顕著に遺存している。破片の大きさから扁平片刃石斧あるいは伐採用始刃石斧が考えられる。長5.9cm+ α 、幅3.7cm+ α 、厚0.7cm+ α 、重量12g+ α 。2-415は蛇紋岩製の磨製石斧未製品である。胴上半部から頭部にかけて欠損する。一部に自然面を残しており転礫を素材としたことがわかる。両面から剥離を加え整形するが片面に段をもって石材の取り残しがある。刃部の片面に研磨が加えられるが、他面は剥離のままであるが、両刃になると考えられる。長8.2cm+ α 、幅5.1cm、厚3.0cm、重量146g+ α 。

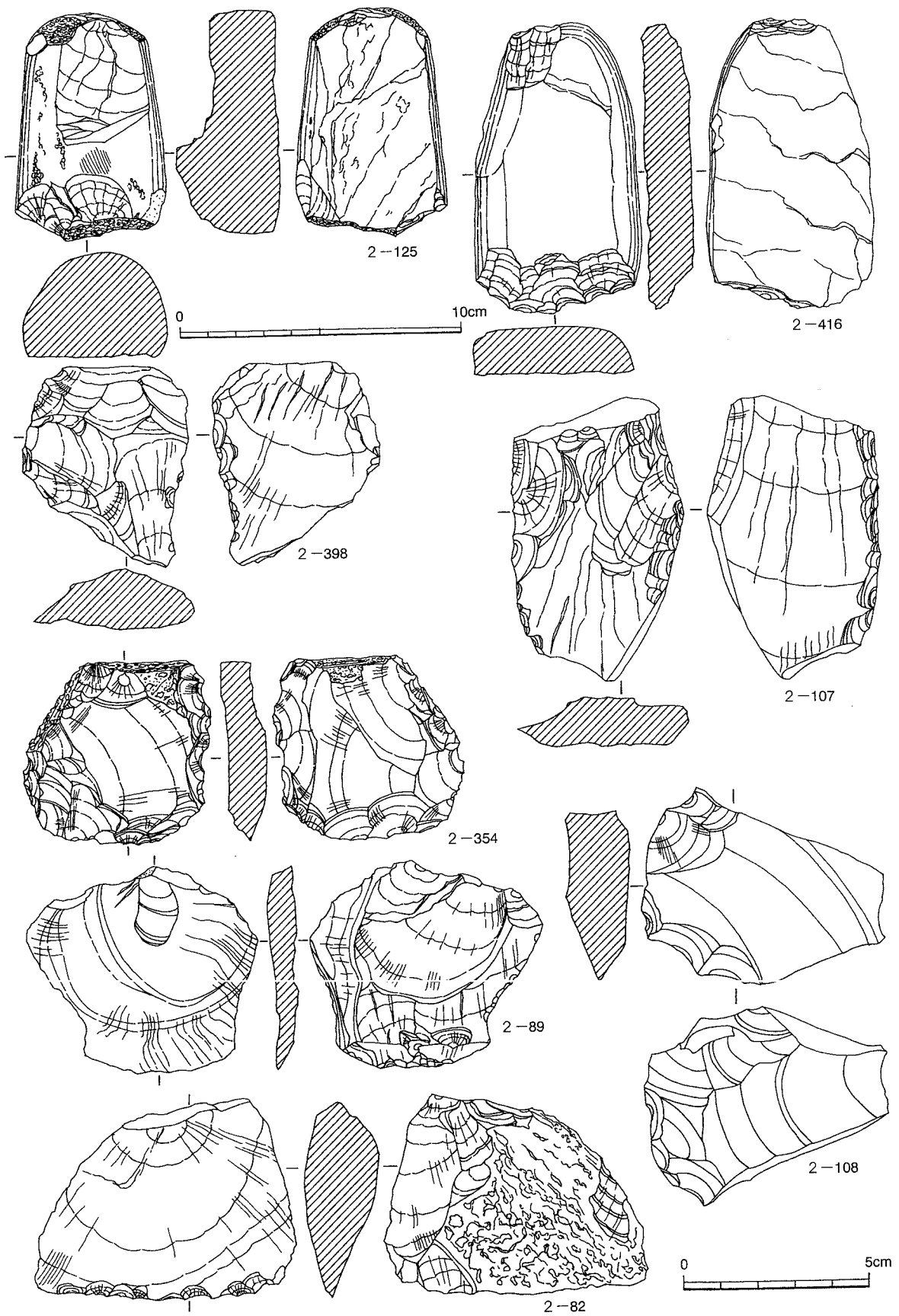
第75図は磨製石斧、同未製品を図示した。1-516は玄武岩の礫を素材とした磨製石斧未製品である。手ごろな石材の側辺に片面から剥離を加え側辺の調整をおこなっているが、その時点で製作を中断している。失敗はみられないため中断の理由は不明。長14.1cm、幅0.9~6.8cm、厚1.0~3.6cm、重量395g。1-520は安山岩の棒状の礫を素材とした磨製石斧未製品である。長軸、短軸の側面の一部に自然面を残している。両面は両側辺から剥離が加えられ整形されている。刃部形成はされておらず、刃部製作に無理があり、それが製作中断の理由か。長12.1cm、幅3.9~5.2cm、厚3.9cm、重量279g。1-509は蛇紋岩製磨製石斧破片を再利用して、さらに小型の磨製石斧を製作しようとした未製品である。片面には製品時の研磨部分を大きく残している。この面には条線が下半に顕著で、再製作時に新たに研磨を加えた可能性がある。全形は両面から剥離を加え短冊形に整形している。長軸両端部は折れていて長軸が短くなるが、これが製作中断の原因であろうか。未製品から想定できる製品は小型のノミ形石斧であるが、本遺跡出土の同様石器の出土例からすれば明らかに長さが不足する。長7.6cm、幅2.5~3.0cm、厚1.4cm、重量45g。1-496は頁岩製の磨製石斧未製品である。一部、側面と片面に自然面を残すが、他は全体にわたって丁寧な剥離が加えられ短冊形に整形されている。刃部も一応形成



第74图 3層出土石器实测图Ⅲ



第75图 3层出土石器实测图IV

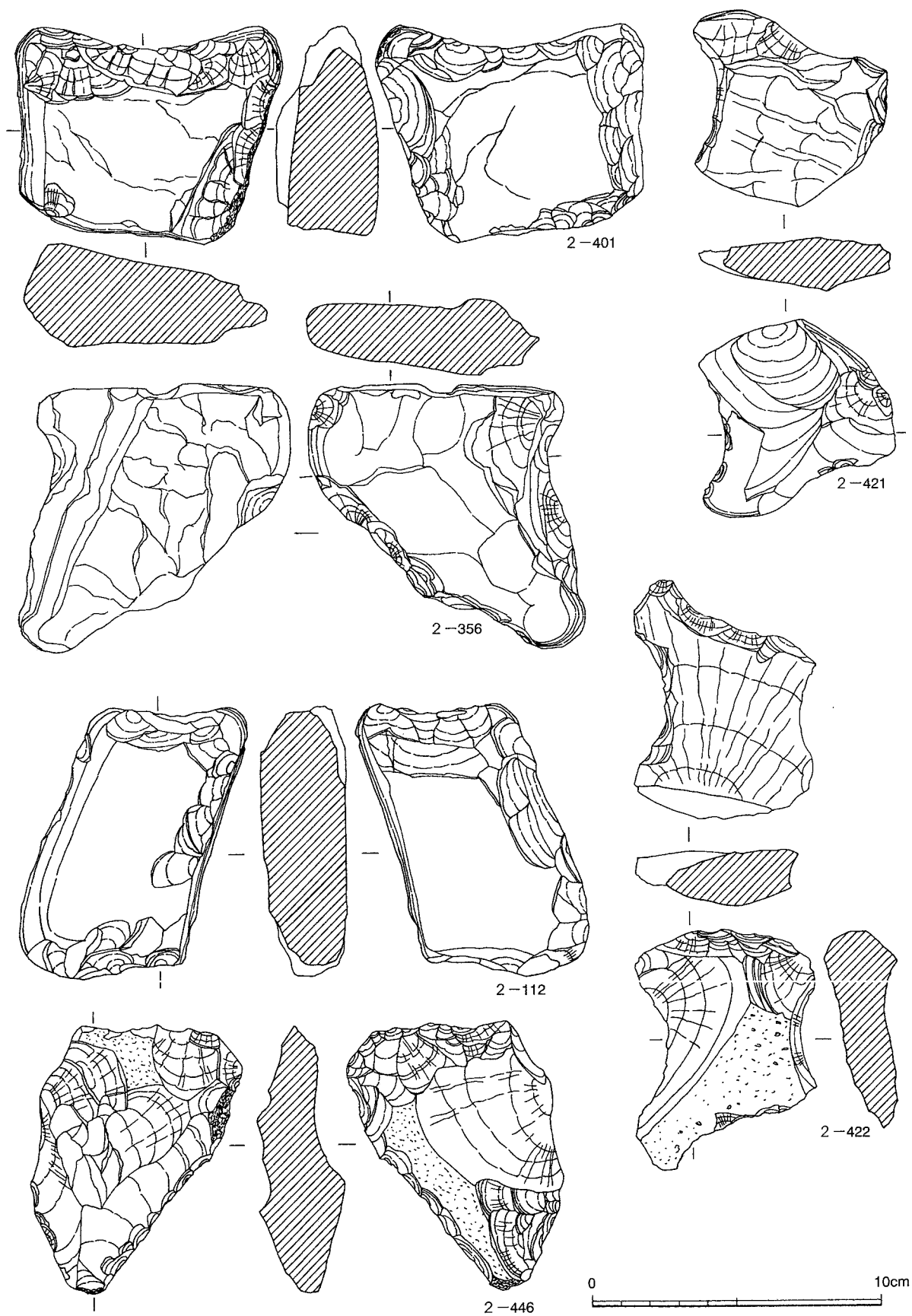


第76图 3層出土石器实测图V

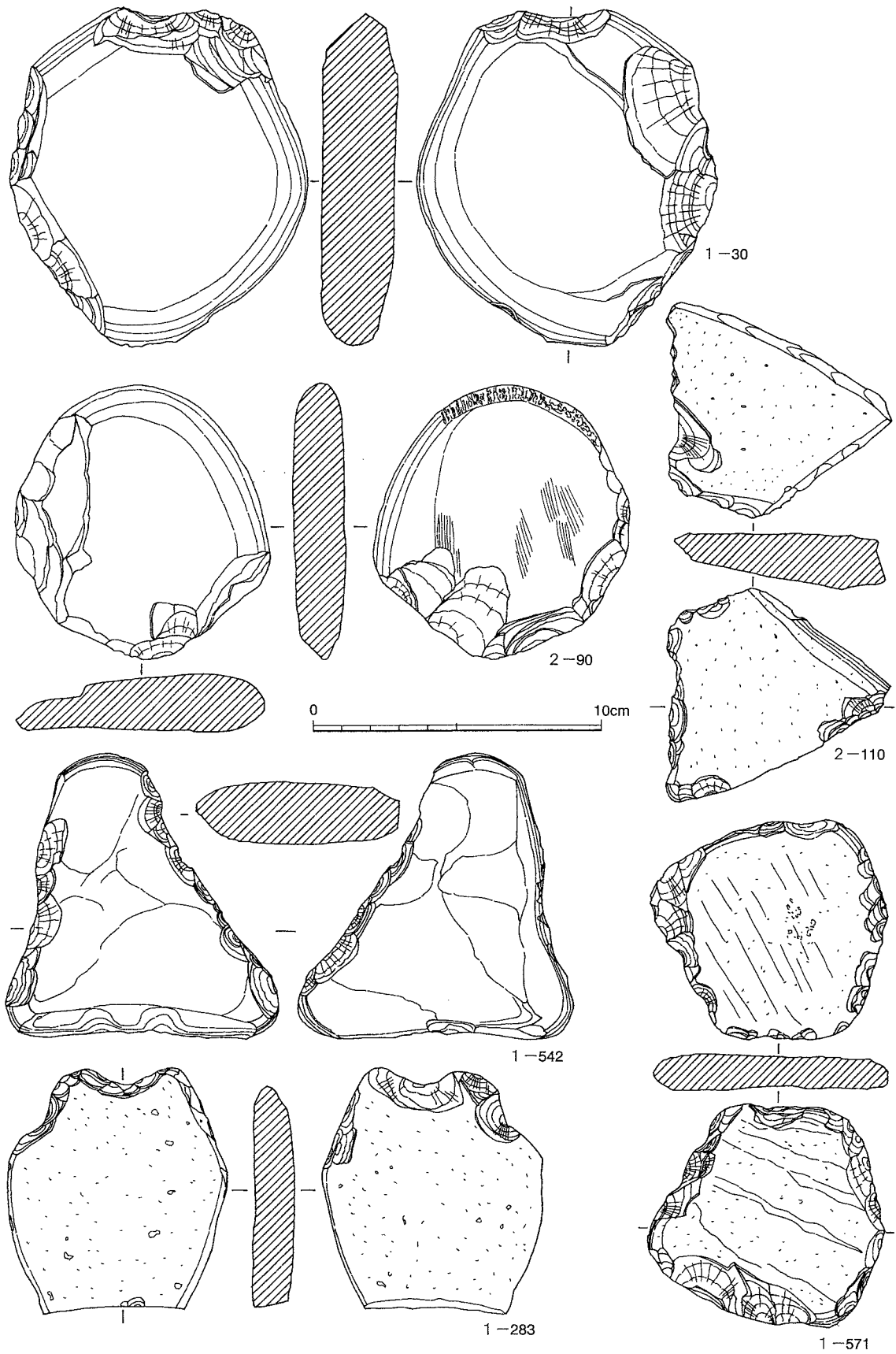
されており、一見打製石斧と見誤るほどである。頭部が厚く、その部分に敲打を加え厚を減じようとしていることや刃部の使用痕がないことから磨製石斧未製品の可能性が強い。長14.5cm、幅5.3～6.9cm、厚2.0～5.0cm、重量524g。包-1-14は頁岩円礫を半截した素材を使用した磨製石斧未製品である。片面には自然面を大きく残す。周辺に部分的に剥離を加え整形し、刃部は両面から剥離を加えている。長14.0cm、幅4.9～6.0cm、厚2.3cm、重量328g。1-514は蛇紋岩製磨製石斧の破片である。頭部から胴部にかけての一側刃部を残す。頭部は丸く仕上げ、側辺は直線的にのび、断面は扁平になるので、中型の両刃の石斧と考えられる。全体に丁寧に研磨されるが、部分的に剥離痕が残る。側面には研磨によって平坦面ができる。長10.0cm+ α 、幅3.7cm+ α 、厚1.6cm、重量51g+ α 。

第76図は石槌、磨製石斧未製品、スクレイパーを図示した。2-125は頁岩の石槌である。最初は棒状の磨石（磨棒？）として使用されたと考えられ、全体が磨耗している。その後、上下端が石槌に利用され、上下端は打痕によって平坦な面をつくるが、上端部はやや丸味をもち、下端部は中凹みになり、下端の使用が顕著であったことがうかがえる。なお、全体的に約2/3が打撃によって半截し、反対の面の上部にも大きな剥離がみられる。長8.1cm、幅4.3～5.4cm、厚3.8cm、重量213g。2-416は砂岩の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。円礫を半割し、頭部と刃部に剥離を加えて整形している。刃部は片面からの剥離である。片面に自然面を残す。全形は揆形をなす。製作中断の理由は不明。長10.3cm、幅2.8～5.9cm、厚1.7cm、重量151g。2-398、2-107、2-354、2-89、2-82、2-108はスクレイパーである。2-398はサヌカイトの不定形剥片を素材としている。長辺の一辺に両面から細部加工を施し刃部を形成する。刃部の長さ3.8cm、相対する一辺のエッジにも使用の痕跡が認められる。長5.3cm、幅1.2～4.5cm、厚1.6cm、重量33g。2-107は安山岩の剥片を素材としている。剥片は半折し、打面側を欠損する。長軸の一辺に両面から細部加工を施し刃部を形成する。刃部の長さ5.8cm。相対する一辺には整形の剥離が加えられている。長7.5cm、幅2.8～4.6cm、厚1.3cm、重量62g。2-354はサヌカイトの不定形剥片を素材としている。一部に自然面を残している。平面形は略方形をなし、三辺に両面から剥離を加え刃部を形成している。長4.8cm、幅4.9cm、厚1.0cm、重量37g。2-89はサヌカイトの不定形剥片を素材とした、いわゆる使用痕ある剥片である。平面形は略五角形をなし、打面を除いた各辺のエッジに使用による小さな刃こぼれが認められる。長5.4cm、幅3.7～6.3cm、厚0.4～0.8cm、重量23g。2-82は安山岩の不定形剥片を素材としている。片面に自然面を大きく残している。主要剥離面の打面の反対側の一辺に片面から細かい剥離を施し刃部を形成している。長5.3cm、幅7.1cm、厚2.0cm、重量76g。2-108は頁岩の不定形剥片を利用する。打面および相対する一辺のエッジに両面から剥離を加えて刃部を形成する。全体に風化が著しい。長6.5cm、幅5.2cm、厚1.7cm、重量52g。

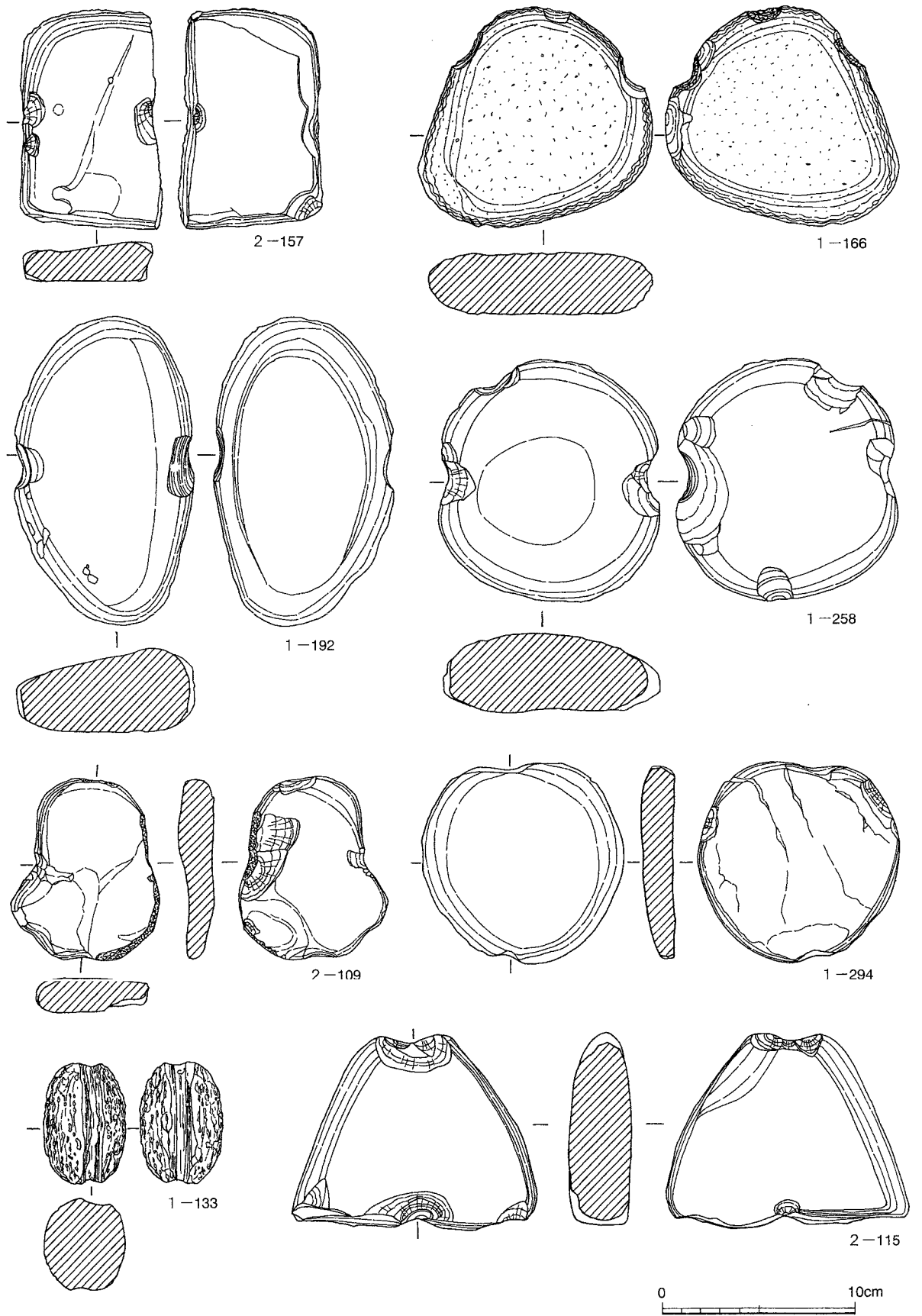
第77図は双角状礫石器、礫器等を図示した。2-401は花崗岩の扁平礫を素材としている。周縁部は両面から整形の剥離が加えられ、略長方形をなす。両面の中央部には自然面を多く残している。長辺の一辺には敲打によって抉り部がつくられる。抉り部は長さ6.7cm、深0.8cm、敲打部分は研磨したように磨滅している。抉りの両端には尖頭部がつくり出され、尖頭部は使用によって磨滅している。隣り合う二辺にも敲打痕がみられる。典型的な双角状礫石器である。長7.5cm、幅9.4cm、厚2.3～3.5cm、重量287g。2-356は安山岩の扁平円礫を利用した礫石器である。平面形は略三角形、二辺に剥離が加えられている。一辺は抉りが形成されるが敲打によるものでなく、剥離によるものである。抉りの深さ0.7cm、長9.0cm、幅9.0cm、厚1.8～2.6cm、重量241g。2-112は玄武岩の円礫を素材とした礫石器である。平面形は細長い平行四辺形をなす。四辺に剥離が施され、特に長軸辺の剥離は錯行関係にある。短軸の二辺には敲打による剥離であり、敲打部分には浅い抉りができる。長9.3cm、幅5.8cm、厚2.7～3.0cm、重量288g。2-446は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は略三角形、



第77图 3層出土石器実測图VI



第78图 3層出土石器実測図Ⅶ

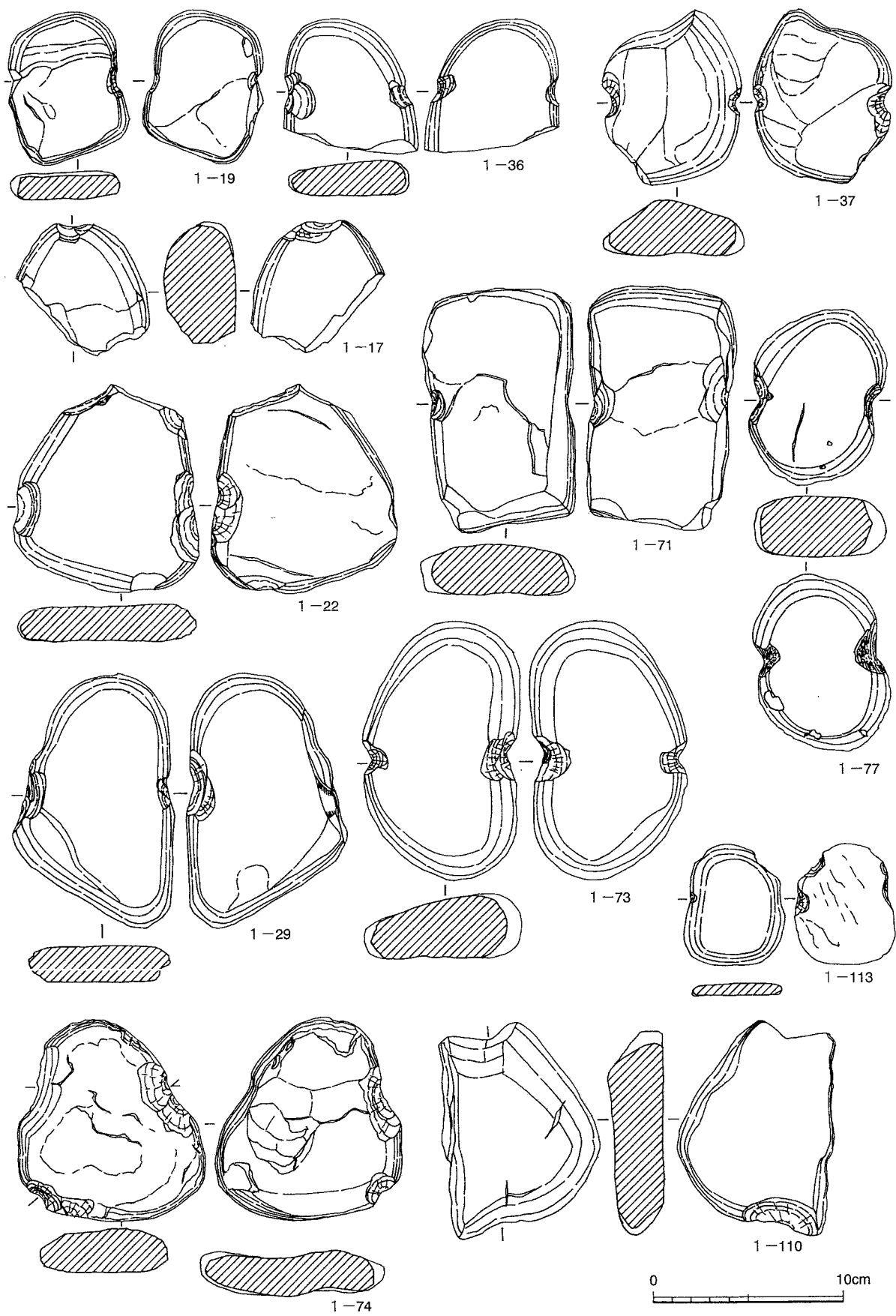


第79图 3層出土石器实测图Ⅷ

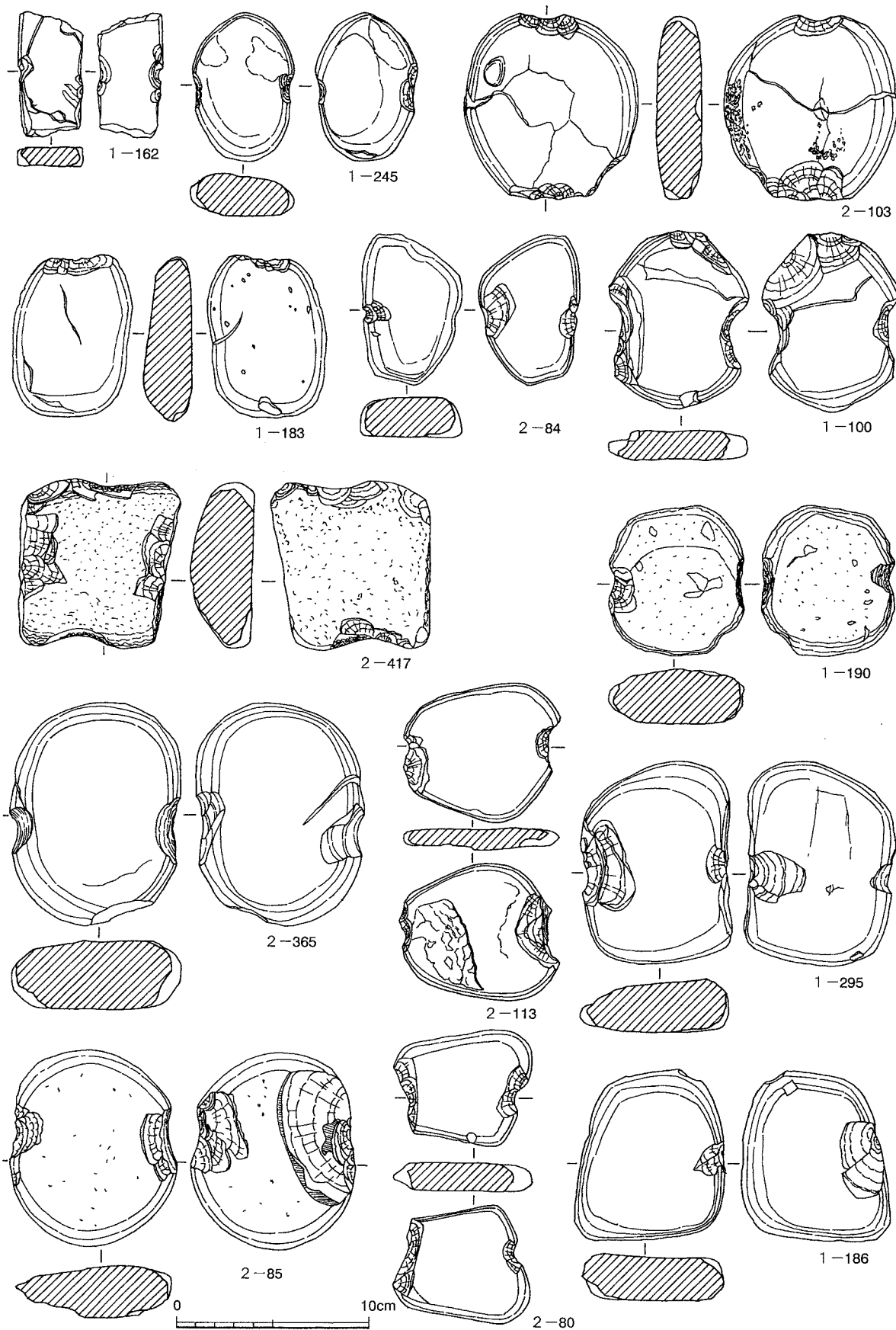
三辺に剥離を加えて整形するが、一部に自然面を残している。長辺の一辺に両面から剥離を丁寧に加えている。長9.1cm、幅1.5~6.8cm、厚1.2~2.8cm、重量197g。2-421は安山岩の大型の剥片を素材とした石器である。形態的には双角状礫石器に分類できるものである。二辺に敲打が加えられ、二カ所に抉り部をつくるが、使い込んだものではない。抉り部は深さ0.8cmと0.4cmである。長6.6cm、幅6.8cm、厚1.2~1.9cm、重量77g。2-422は前者と同様である。安山岩の大型の剥片を素材とした石器である。一部に自然面を残している。二辺に片面より剥離が加えられ、抉り部をつくり出している。抉りは深さ1.1cmと0.5cmである。長6.2cm、幅6.0~8.0cm、厚1.2~1.8cm、重量103g。

第78図は礫石器を図示した。1-30は砂岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。周縁の二カ所に両面から剥離を加えて刃部を形成している。長11.6cm、幅10.5cm、厚2.6cm、重量460g。2-90は砂岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は円形、約半分の周縁に両面から剥離を加えて刃部を形成するが、その反対の周縁には敲打痕が顕著である。また、片面は自然面のままであるが、他の面は砥石として使用されている。長9.5cm、幅8.9cm、厚2.0cm、重量202g。542は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は略三角形、二辺に敲打を加え剥離が両面にみられる。抉り部は使用が少ないためか浅い。長9.8cm、幅9.6cm、厚2.2cm、重量234g。2-110は安山岩の扁平角礫を素材とした礫石器である。半折され、平面形は略三角形をなす。一辺に剥離を加えて刃部を形成する。両面共に自然面を残す。長7.8cm、幅7.4cm、厚0.9~1.9cm、重量105g。1-283は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。円礫は元来楕円形をしていて、短軸の端部を折断し、相対する辺に加工を加え二カ所の突起部を作り出している。突起部は先端幅1.0cm、使用により丸く磨滅している。抉り部が二カ所にあり、幅2.5cm、深さ0.6cmと幅2.0cm、深さ0.3cmである。両面共に自然面を大きく残している。長8.5cm、幅5.0~7.7cm、厚1.3cm、重量136g。1-571は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器（円盤形石器）である。周縁には両面から剥離を加えて刃部を形成し、また、全形を不整円形に整形している。刃部は鋭くなく丸くつぶれている。長径8.2cm、短径7.5cm、厚1.0~1.3cm、重量106g。

第79~83図には主に石錘を図示した。**第79図** 2-157は砂岩の扁平礫を素材とする。礫を半割し、平面形は長方形、長辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくる。長11.0cm、幅7.2cm、厚2.0cm、重量278g。1-166は安山岩の扁平円礫を素材とする。平面形は隅丸三角形、隣り合う二辺の三カ所に抉りを入れる。抉りはいずれも丁寧な敲打によるが、頂部の抉りは浅い。紐の結び方が特異と考えられる。長12.2cm、幅10.7cm、厚3.1cm、重量478g。1-192は大型の砂岩円礫を利用。長辺の相対する二カ所に抉りを入れる。抉りは敲打後、研磨を加え丁寧で深い。長15.6cm、幅9.1cm、厚4.2cm、重量802g。1-258は安山岩の扁平円礫を利用。相対する4ヶ所に剥離によって抉りを入れるが1ヶ所は片面からのみの剥離である。長12.2cm、幅11.3cm、厚4.0cm、重量618g。2-109は安山岩の扁平円礫を利用。相対する四辺に抉りを入れる。3ヶ所は片面からの剥離、1ヶ所は自然の凹みを利用。この石器は石錘以外にも叩石として利用され、一辺に敲打痕が顕著である。長9.3cm、幅7.7cm、厚1.8cm、重量155g。1-294は砂岩の扁平円礫を利用。相対する二辺に抉りを入れる。1ヶ所は自然の凹み、他は研磨によっている。長10.2cm、幅10.1cm、厚1.6cm、重量239g。1-133は安山岩円礫を素材とする。全体を敲打によって整形、長軸中央部を一周する溝がつけられる。溝は敲打により整形し、後に研磨を加えている。長6.0cm、径4.2~4.5cm、重量147g。2-115は砂岩の扁平円礫を利用、長辺の相対する2ヶ所に両側から剥離を加え抉りを入れる。長12.6cm、幅9.7cm、厚3.2cm、重量556g。**第80図** 1-19は砂岩の扁平円礫を利用。長辺の相対する二辺に抉りを入れる。抉りの一方は自然の凹み、他方は両面から剥離を加えた後、敲打を加え整形する。長7.4cm、幅5.9cm、厚1.2cm、重量104g。1-36は砂岩の扁平円礫を利用、礫を半割した後、長辺の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは両面からの剥離によるが、1ヶ所は使用による磨耗がみられる。長7.4cm、幅6.8cm、厚1.8cm、重量125g。1-37



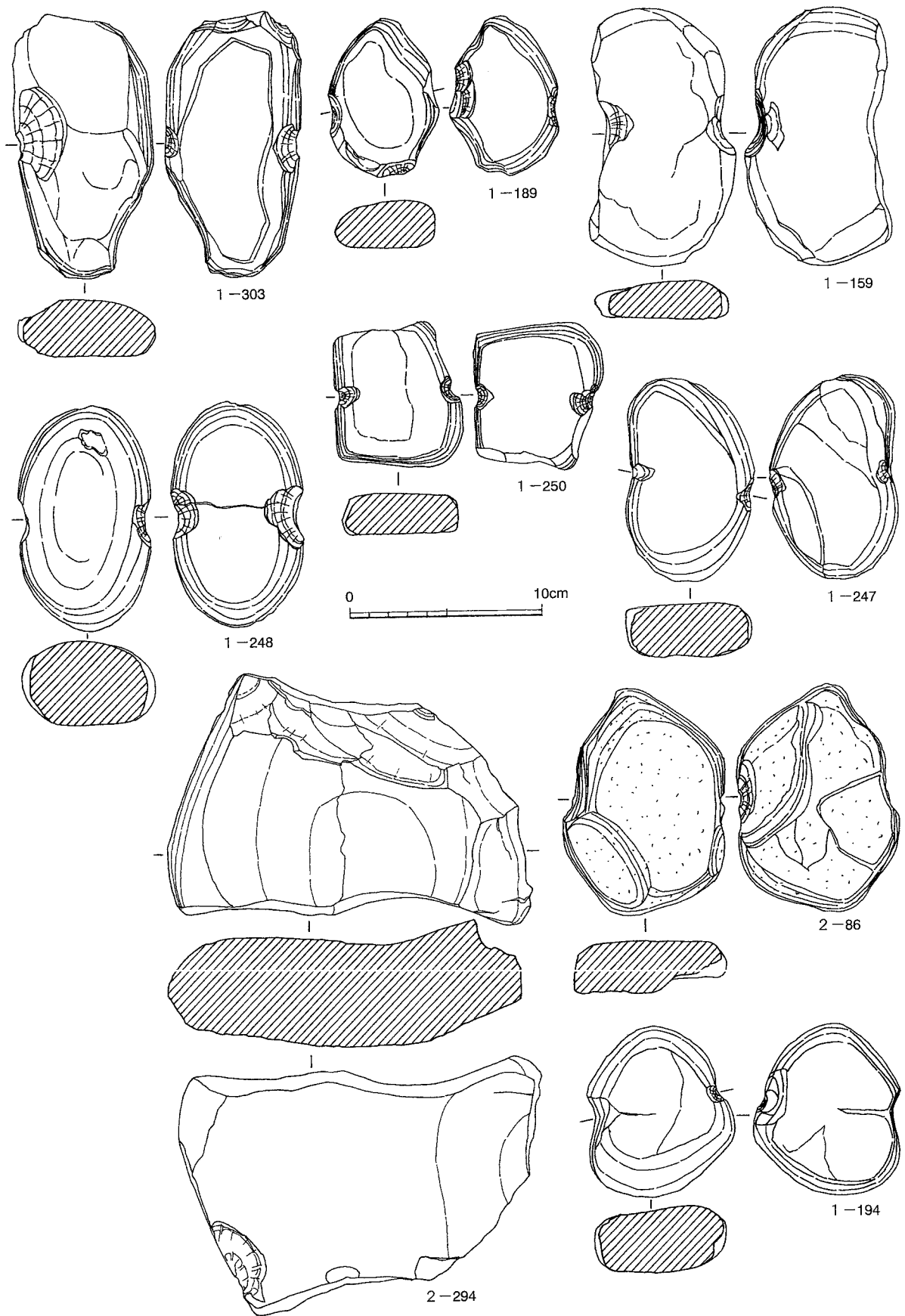
第80图 3層出土石器实测图区



第81图 3層出土石器実測图X

は硬質砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形。長辺の相対する2ヶ所に両面から剥離を加えて抉りを入れる。長9.2cm、幅7.3cm、厚2.8cm、重量221g。1-17は安山岩円礫を利用、半折し半分を欠損する。短辺の1ヶ所に抉りを入れる。抉りは剥離後、敲打を加えて整形している。長6.8cm+ α 、幅5.9cm+ α 、厚3.7cm、重量191g+ α 。1-22は砂岩の扁平円礫を利用。長辺の相対する2ヶ所に抉りを入れる。抉りは1ヶ所は両面から、他は片面からの剥離である。長10.5cm、幅9.8cm、厚1.8cm、重量284g。1-71は砂岩の扁平礫を利用。平面形は長方形をなす。長辺の相対する2ヶ所に打欠きによって抉りをつくる。長12.3cm、幅7.7cm、厚2.5cm、重量389g。1-77は火成岩の扁平円礫を利用。長辺の相対する2ヶ所に抉りを入れる。抉りは敲打によって整形し深い。一部に紐ずれの痕跡が認められる。長9.0cm、幅6.8cm、厚3.1cm、重量247g。1-29は砂岩の扁平円礫。長辺の相対する2ヶ所に剥離を加え抉りを入れる。抉りは一辺が両面、他の一辺が片面からの剥離である。長12.7cm、幅8.5cm、厚1.8cm、重量291g。1-73は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は長楕円形をなす。長辺の相対する二辺に両面からの剥離を加え抉りを入れる。抉りには紐ずれと考えられる磨耗が認められ、深く明瞭である。長13.2cm、幅8.0cm、厚3.2cm、重量485g。1-113は砂岩の薄い礫を利用。片面に磨耗痕がみられ、磨石として使用された後、剥離した部分を石錘として再利用したと考えられる。長辺の相対する2ヶ所に抉りを入れる。長6.2cm、幅5.3cm、厚0.6cm、重量30g。1-74は砂岩の円礫を利用。平面形は略三角形、三辺に抉りをつくり出す。抉りは2ヶ所が片面から、1ヶ所は両面からの剥離である。長10.3cm、幅9.7cm、厚2.2cm、重量290g。1-110は砂岩の円礫を利用。短辺の相対する二ヶ所に抉りを入れるが、1ヶ所は自然の凹み、他は片面からの剥離である。長11.0cm、幅8.1cm、厚2.9cm、重量332g。第81図 1-162は砂岩の扁平礫を利用。長軸の相対する二辺の中央部に剥離を加えて抉りを入れる。剥離は一辺が両面、他の一辺が片面から加えられたものである。抉りはあまり明瞭でない。長6.2cm、幅3.3cm、厚1.0cm、重量36g。1-245は硬質砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りを入れる。長7.5cm、幅5.2cm、厚2.2cm、重量108g。2-103は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れる。また、一側辺と片面の一部に敲打痕が認められ、叩石としても使用されている。長9.4cm、幅9.0cm、厚2.3cm、重量260g。1-183は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。短軸の相対する二辺に剥離を加え抉りを入れる。剥離は一辺は両面から、他の辺は片面からの剥離で抉りは目立たない。長8.2cm、幅6.0cm、厚1.7~2.5cm、重量180g。2-84は砂岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に剥離を加え抉りを入れる。抉りは片面から剥離を加えている。長7.7cm、幅6.2cm、厚2.1cm、重量129g。1-100は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は分銅形をなす。長軸の相対する二辺に両面から剥離を加え大きな抉りを入れる。また短軸の一辺に両面から剥離を加え整形している。抉りは大きく明瞭である。長9.0cm、幅7.2cm、厚1.5cm、重量137g。2-417は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は方形をなす。相対する二辺のそれぞれに片面から剥離を入れ、十字形に紐を結びつけるようにしている。抉りはあまり明瞭でない。長8.5cm、幅8.2cm、厚3.2cm、重量386g。1-190は多孔質の安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは辺の中央部に一ヶ所は敲打により、他の一ヶ所は両面から剥離を加えた後敲打を加えて整えている。長7.6cm、幅6.9cm、厚2.8cm、重量140g。2-365は砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加えた後、敲打を加えて整形している。長11.4cm、幅8.8cm、厚3.6cm、重量524g。2-113は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。短軸の相対する二辺に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。抉りは深く明瞭である。長8.0cm、幅7.2cm、厚1.1cm、重量90g。1-295はやや軟質の砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつ

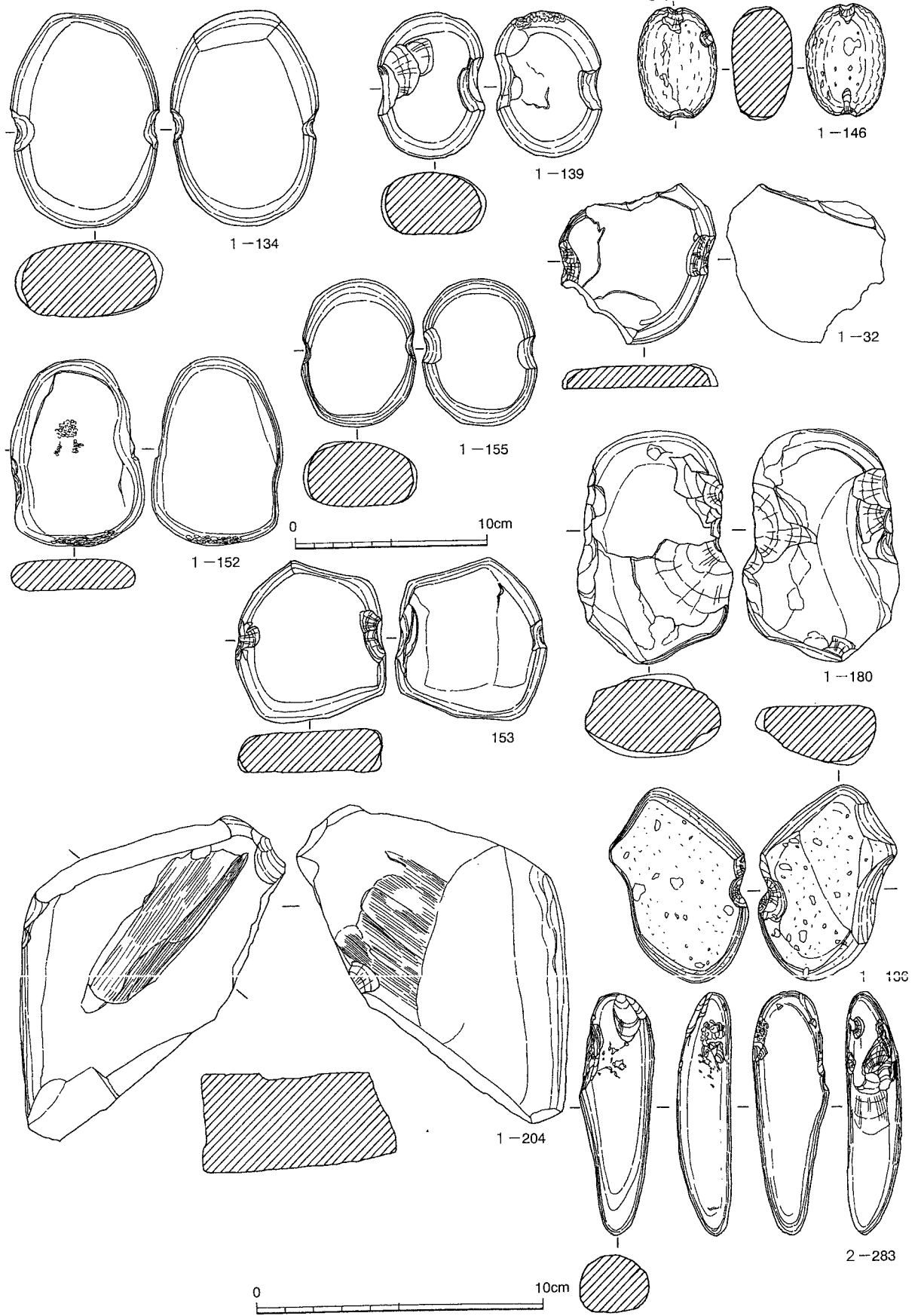
くり出す。長10.2cm、幅7.5cm、厚2.5cm、重量292g。2-85は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。剥離面の最も大きい1ヶ所には剥離の上から研磨が加えられている。長10.1cm、幅8.2cm、厚2.7cm、重量287g。2-80は砂岩の小型の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。長7.1cm、幅5.0cm、厚1.5cm、重量88g。1-186は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に錯行関係で片面より剥離が加えられ抉りがつくり出されるが、あまり明確ではない。長8.5cm、幅7.5cm、厚2.2cm、重量251g。第82図1-303は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整長楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りの剥離は一辺が両面から、他の一辺が片面がおこなわれる。長13.5cm、幅7.1cm、厚3.0cm、重量403g。189は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加えた後、敲打を加え整形する。使用による磨滅痕がある。長8.1cm、幅5.6cm、厚2.4cm、重量136g。159は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は不整長楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。抉りは片面から錯行関係で剥離が加えられ、剥離後、敲打を加え整えている。長13.2cm、幅6.9cm、厚2.0cm、重量269g。1-248は砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りをつくり出す。抉りは一辺が両面から、他の一辺が片面からの剥離で、その後敲打を加えて整形する。抉り部は深く確実である。長11.5cm、幅6.7cm、厚4.3cm、重量469g。1-250は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は隅丸長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長7.5cm、幅6.6cm、厚2.0cm、重量173g。1-247は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りを入れる。抉りにはさらに敲打を加えて整えている。長10.4cm、幅6.5cm、厚2.7cm、重量261g。2-294は大型の砂岩の扁平礫を利用した石皿である。一面の端部から中央部にむかってゆるやかに凹み、その面には摩耗痕がみられる。一部火に焼けている。全体形は破損が大きく推定することはできない。現存長19.0cm、現存幅12.5cm、厚4.9cm、重量1900g。2-86は硬砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の一辺の中央部に片面より大きな剥離を加え抉りをつくり出す。抉り部には2ヶ所の紐ずれの痕跡が認められる。他の一辺は自然の凹みを利用する。長11.6cm、幅8.5cm、厚2.7cm、重量364g。1-194は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺にある自然の凹みを利用する。一辺の抉りにはわずかに加工を加えている。長8.6cm、幅7.5cm、厚3.4cm、重量263g。第83図1-134は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から小さい剥離を加え抉りをつくり出す。抉りはさらに敲打を加えて整えている。長11.0cm、幅7.7cm、厚3.8cm、重量386g。1-139は砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りは剥離後、敲打を加えて整形し、さらに研磨を加えている。抉りは大きく確実である。また、短軸の一辺には敲打痕が顕著で叩石としても利用されている。長7.5cm、幅5.5cm、厚3.2cm、重量189g。1-146は安山岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。全面に敲打を加えて整形する。短軸の相対する二辺に剥離を加えて抉りを入れる。抉りは剥離後敲打によって整え、一部は溝状にのびている。有溝石錘との関連性が考えられる。長5.8cm、幅4.1cm、厚3.2cm、重量79g。1-152は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺に片面から剥離を加え抉りを入れるが、あまり明確でない。短軸の一辺と片面の一部に敲打痕があり、叩石としても使用されている。長9.6cm、幅6.9cm、厚1.6cm、重量182g。1-155はやや軟質の集石岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に抉りを入れる。抉りは両面から剥離を加えた後、研磨が全面に施されている。抉りは深く明確である。長7.6cm、幅6.0cm、厚3.3cm、重量163g。1-32



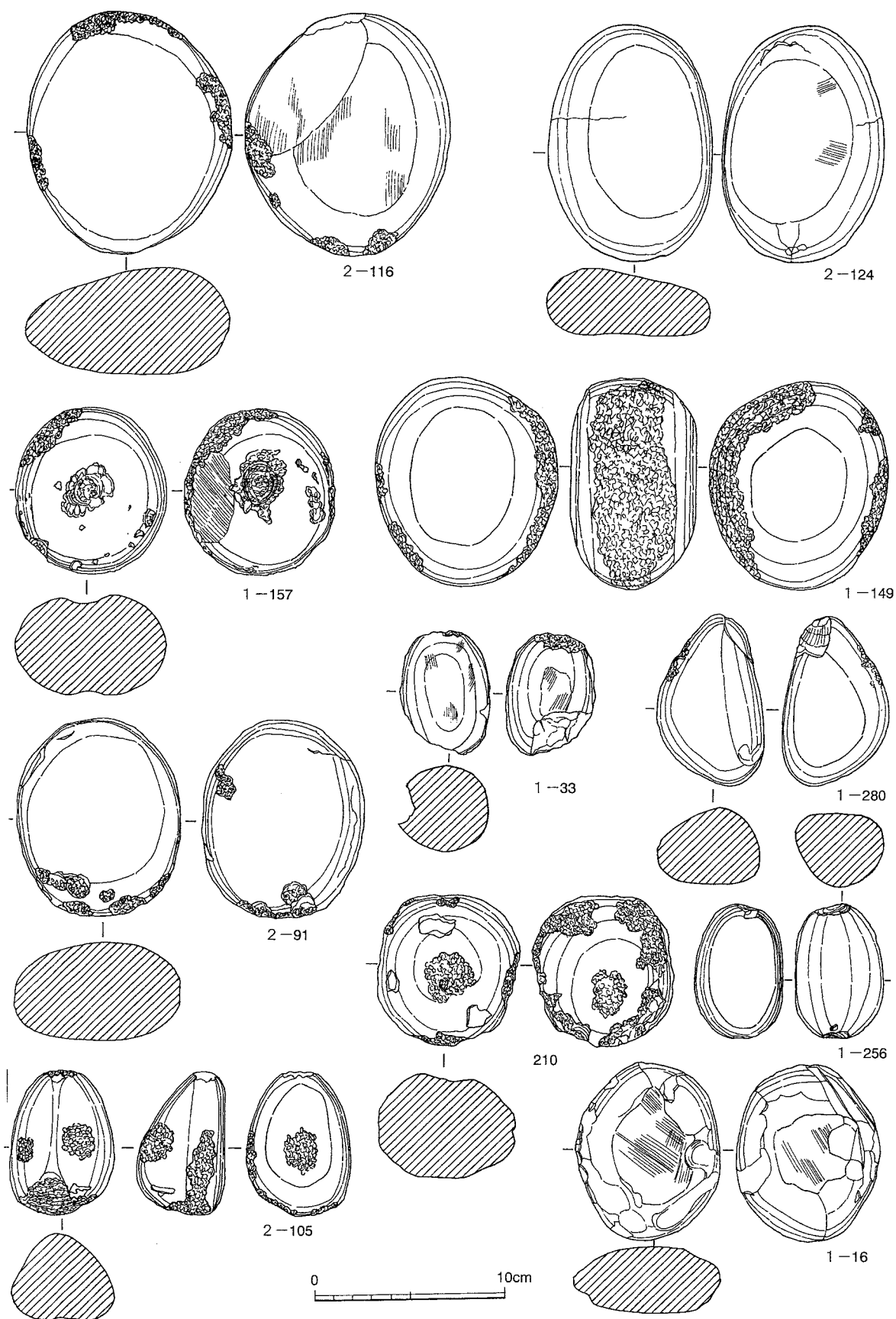
第82图 3層出土石器实测图XI

は砂岩の扁平円礫を利用。節理によってさらに扁平に剥離される。平面形は2ヶ所を欠損するため判然としませんが、楕円形をなすとみられる。長軸の相対する二辺の上下に片寄って片面から剥離を加え抉りをつくり出す。長8.8cm+ α 、幅7.8cm、厚1.1cm、重量94g。1-153は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は不整形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。抉りには紐ずれがあり平滑になる部分がある。長8.2cm、幅7.8cm、厚2.1cm、重量239g。1-180は安山岩の円礫を利用。平面形は不整形楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部より上位に両面から剥離を加えて抉りをつくり出すが、あまり明瞭でない。長11.9cm、幅8.1cm、厚3.8cm、重量389g。1-204は大型の砂岩の扁平礫を利用した砥石である。平面形は礫を半割して略三角形をなす。表裏二面が砥石として使用されている。一面は研ぎ面が溝状をなす。溝幅3.4cm、長11.3cm、砥ぎ幅2.0~2.5cm、深さ0.3cm、他の一面には五条の研ぎ面があるが、中央部が剥離しているため長さは不明。磨製石斧の仕上げに使用された砥石と考えられる。長19.3cm、幅11.6cm、厚5.1cm、重量1220g。1-136は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用。平面形は不整形楕円形をなす。長軸の相対する二辺のうち一辺には中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。他の一辺は自然の凹みを利用するが、使用部分は磨滅している。長10.2cm、幅6.9cm、厚2.8cm。2-283は頁岩の小さな棒状の礫を素材とした石器製作用のハンマーである。断面円形で棒状をなし、握る部分が細く、使用部位がやや大きくなる。三面に使用痕が認められる。いずれも小さな剥離と敲打痕があるが、あまり顕著ではない。小型石器の製作に使用されたと考えられる。長8.3cm、径1.0~2.4cm、重量58g。

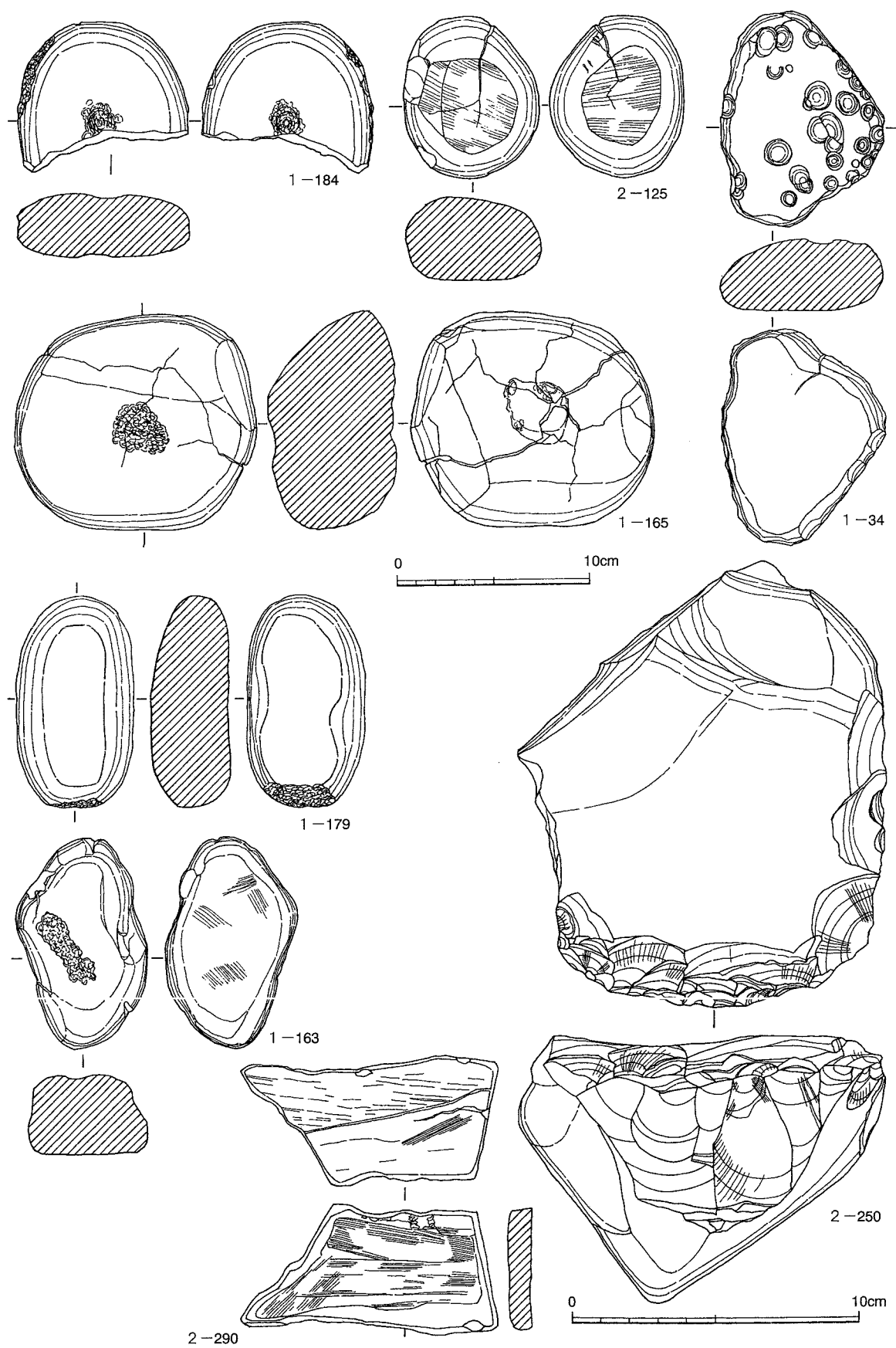
第84図には凹石、叩石、磨石を図示した。2-116は砂岩の円礫を利用した磨石、叩石に利用された石器である。磨石には一面が利用される。敲打痕は上下、左右の側面に顕著に認められるが一周するものではない。長12.6cm、幅10.8cm、厚5.5cm、重量982g。2-124は砂岩の円礫を利用した磨石ないしは砥石と考えられる。片面に研磨痕が観察できるが顕著ではない。長12.3cm、幅8.6cm、厚3.5cm、重量544g。1-157は安山岩の円礫を利用した凹石、叩石、磨石に使用された石器である。平面形は円形、表裏の二面中央部に敲打を加えて凹部がつくり出される。一面の一部には研磨痕がみられ、磨石としても使用されている。また、側面の二ヶ所には敲打痕が顕著に認められる。長8.5cm、幅7.8cm、厚5.1cm、重量385g。1-149は安山岩の円礫を利用した叩石である。側面の大部分に敲打痕が顕著に認められる。長10.8cm、幅9.5cm、厚6.6cm、重量908g。2-91は砂岩の円礫を使用した叩石である。平面形は楕円形、短辺の側辺部に打痕が顕著に認められる。長径10.4cm、短径8.6cm、厚5.1cm、重量606g。1-33は軟質凝灰岩の小円礫を利用した磨石、叩石である。一部を欠損している。全体が磨石として利用され、平面形は楕円形になると考えられる。両短辺の側面が叩石に使用され、敲打によって平坦面が形成されている。現状で長径6.5cm、短径4.7cm、厚4.6cm、重量101g。1-280は砂岩の円礫を利用した叩石である。平面形は隅丸三角形をなす。側面の一部に剥離と敲打がみられる。長8.8cm、幅5.5cm、厚4.0cm、重量236g。1-210は安山岩の円礫を利用した凹石、叩石である。平面形は不整形円形をなす。表裏の二面の中央部に敲打を加えて凹部をつくり出すが、凹部は浅い。側面にはほぼ全域にわたって敲打が加えられている。特に敲打が顕著な部分は平坦になっている。長7.8cm、幅7.3cm、厚5.4cm、重量354g。1-256は安山岩の円礫を利用した叩石である。長軸の両端に敲打を加え、小さな剥離がみられる。長6.9cm、幅4.7cm、厚3.7cm、重量137g。2-105は安山岩の円礫を利用した凹石、磨石、叩石を兼ねた石器である。平面形は楕円形をなし、断面形は隅丸三角形をなす。三面の平坦面の中央部に敲打が加えられ凹部がつくり出されるが凹部は浅い。平坦部の一面は磨石として利用されている。側面の約半分には敲打痕が顕著で叩石としても利用されている。長7.6cm、幅5.5cm、厚4.5cm、重量232g。1-16は頁岩の円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなし、表裏二面に研磨痕がみられるが範囲は狭くない。側面の一部には敲打痕がみられるが範囲は狭くない。側面の一部には敲



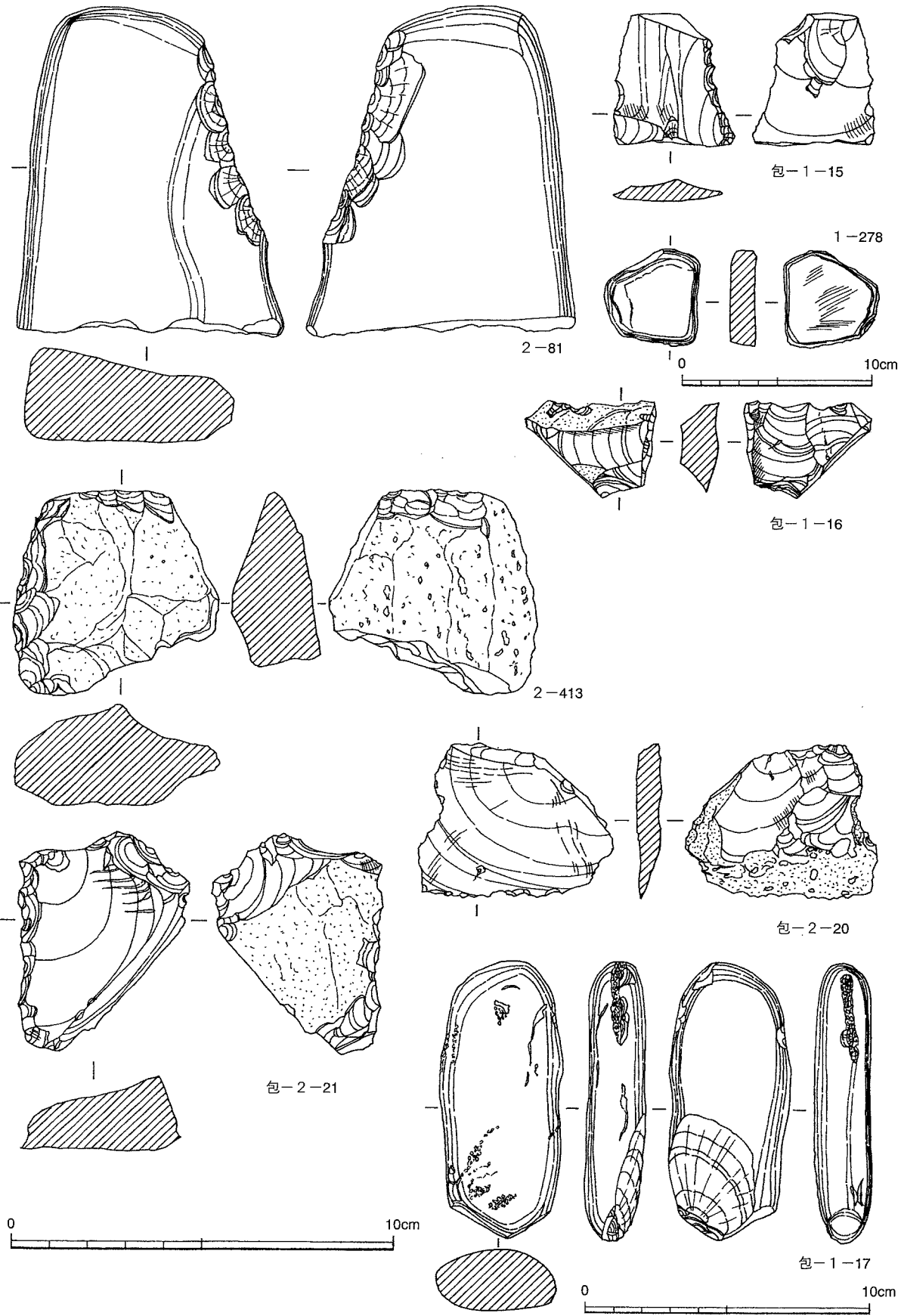
第83图 3層出土石器实测图Ⅻ



第84图 3層出土石器实测图XIII



第85图 3層出土石器实测图XIV



第86图 3層出土石器実測图XV

打痕と小さい剥離が認められ叩石としても使用されている。長9.2cm、幅7.6cm、厚3.5cm、重量307g。

第85図は凹石、磨石、雨だれ石、叩石、砥石、石核を図示した。1-184は砂岩の円礫を利用した凹石、叩石として使用された石器である。半割し、約半分を欠損する。表裏二面の中央部に敲打を加えて凹部をつくり出すが、凹部は浅い。また、側面の一部に敲打痕がみられる。長7.7cm+ α 、幅8.8cm、厚3.1cm、重量269g+ α 。2-125は砂岩の円礫を利用した磨石である。平面形は不整楕円形をなす。表裏二面が磨石として使用され、両面共に使用によって平坦面が形成されている。長径8.4cm、短径7.0cm、厚4.3cm、重量228g。1-165は安山岩のやや大型の円礫を利用した凹石である。平面形は、隅丸長方形をなす。一面の中央部に敲打が加えられ、径2.5~3cmが凹んでいる。他に加工は認められない。長径12.7cm、短径11.2cm、厚6.5cm、重量1070g。1-34は砂岩の扁平円礫を利用した雨だれ石である。平面形は隅丸三角形をなす。片面に円形の凹みが入られる。凹みは32ヶ所にあり、大きさは径0.4~2.0cmで一定していない。相互に切り合い関係にあるものも多い。片面には凹みは認められず、これらの凹みが人工的なものであることがわかる。長11.2cm、幅8.5cm、厚3.7cm、重量399g。1-179は砂岩の円礫を利用した叩石である。平面形は長楕円形をなす。短軸の一边の側面に敲打痕が顕著で石槌として使用されたとみられる。長10.8cm、幅5.9cm、厚4.1cm、重量386g。1-163は砂岩の円礫を利用した砥石、凹石である。平面形は不整の菱形をなす。一面の中央部に1m \times 4cmの範囲で敲打がみられ凹んでいる。他の一面は砥石として利用されている。長径10.9cm、短径6.8cm、厚4.1cm、重量427g。2-290は硬砂岩の扁平礫を利用した砥石である。平面形は不整形、砥石として使用されたのは二面で特に片面の使用が顕著で、他の一面は部分的に研磨痕がみられるに過ぎない。研磨には幅1.8cmの単位があり、磨製石斧の研磨に用いた砥石とみられる。長13.4cm、幅6.5cm、厚1.3cm、重量155g。2-250はサヌカイトの大型石核である。舟底形をした大型の自然礫を素材としている。打面に調整剥離を加え、三枚の縦長剥片を平行に剥離しているが、剥離は途中でステップし、石核の先端までおよんでいない。そのためか剥離は中断されている。剥離された剥片はいずれも自然面を残していると考えられる。大型の刃器製作を意図した石核と考えられる。長15.3cm、幅12.7cm、厚9.1cm、重量1940g。

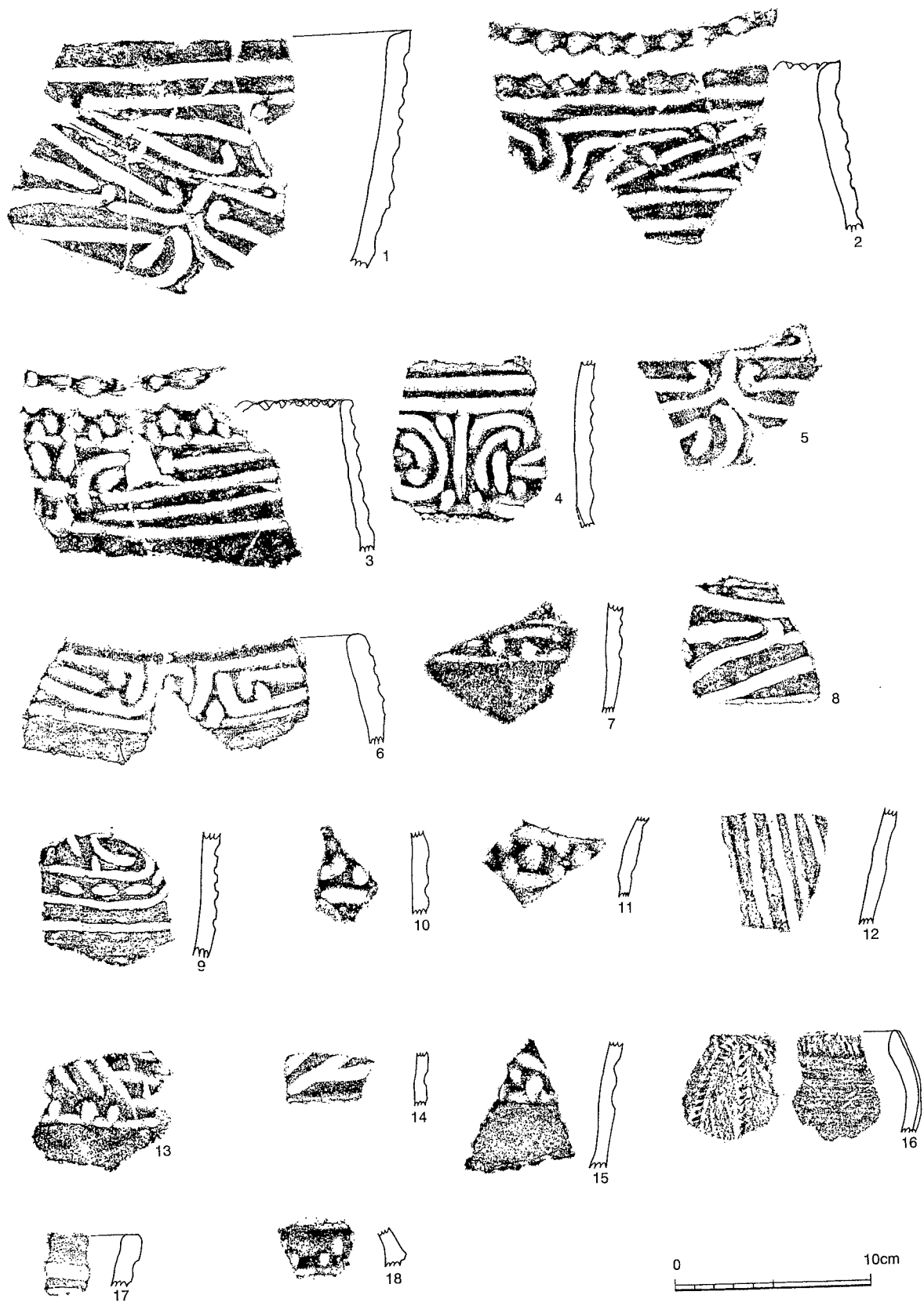
第86図は礫器、スクレイパー、ハンマーを図示した。2-81は安山岩の扁平円礫を利用した礫石器である。礫は半折され、平面形は台形状をなす。長軸の一边に敲打が加えられ、両面に剥離がみられる。双角状礫石器の初期の段階の姿を示すものか。長11.3cm、幅5.3~9.4cm、厚2.2~3.2cm、重量417g。包-1-15は粘板岩製のスクレイパーである。縦長の剥片の長軸の一边に片面から剥離を加えて刃部を形成する。長3.4cm、幅1.3~3.2cm、厚0.6cm、重量8g。1-278は砂岩の扁平円礫を利用した小型の砥石である。平面形は不整の五角形をなす。片面が砥石として利用されている。長5.1cm、幅5.0cm、厚1.4cm、重量55g。包-1-16は黒曜石（腰岳）の石核。片面に2面の剥離面があり、他の面には打面を90度変え剥離が加えられている。長2.5cm、幅3.4cm、厚1.0cm、重量9g。2-413は玄武岩の円礫を素材とした礫石器である。長軸の一边に片面から剥離を加え、隣り合う短軸の一边に両面から剥離を加えている。長8.1cm、幅7.2cm、厚3.5cm、重量172g。包-2-20はサヌカイト製のスクレイパーである。横剥ぎの剥片を素材とする。主要剥離面の打面と反対のエッジに細かい剥離を加えて刃部を形成する。反対の面には打面を同じくする剥離面が残り、その大半に自然面が残る。長4.0cm、幅5.0cm、厚0.6cm、重量16g。包-2-21はサヌカイト製のスクレイパーである。横剥ぎの剥片を素材とする。平面形は略三角形をなす。長軸の一边に両面から剥離を加えて刃部を形成する。片面には自然面を残している。長5.7cm、幅4.5cm、厚1.0~1.9cm、重量47g。包-1-17は頁岩製のハンマーである。長楕円形の扁平な円礫を使用。側辺部に敲打と若干の剥離がみられる。長9.6cm、幅4.4cm、厚2.1cm、重量140g。

3、第4c層出土の遺物

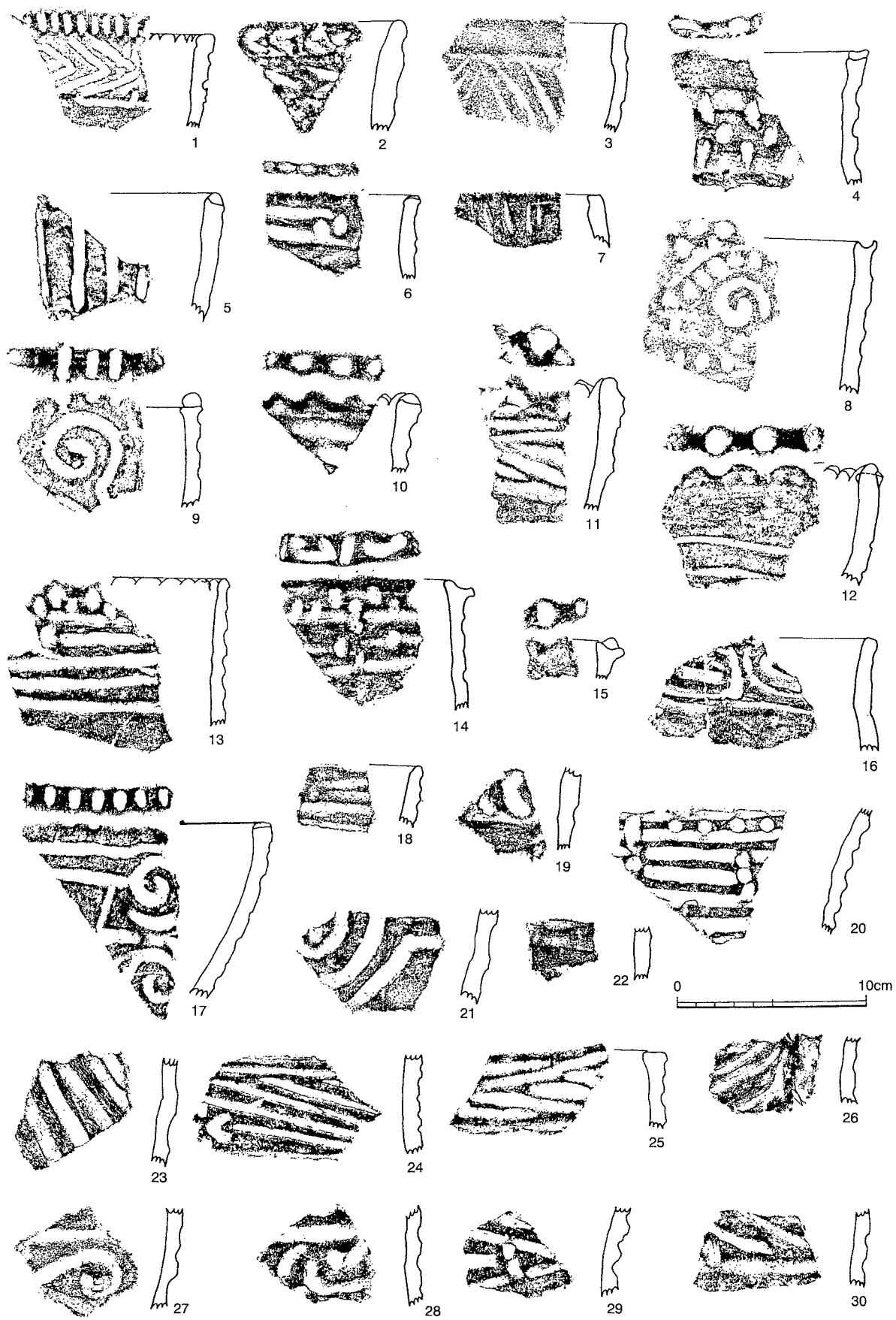
(1) 土器 (第87～90図)

第4c層からは阿高式土器が単純に出土している。次節に述べる第4層から出土する土器との間には変化は見られない。以下、代表な土器について説明する。

第87図1は深鉢形土器の口縁部である。文様帯は南福寺式土器に比較し幅広くなり、施文される凹線も幅広くなる。この土器は全面に文様が施文されている。口縁部に無文帯を置き、凹線1条がめぐらされる。その下に直線、先端がワラビ状に曲がった凹線、押点を組み合わせて文様を形成している。文様は三角形を基調としたものである。口唇部はへらで平坦に仕上げている。2は口縁部破片である。口唇部には棒状工具で深い刻み目が入れられ、口縁は波状をなす。口縁直下には無文帯があるが、口唇部の刻みで拓本では押点文が施文されているように見える。文様帯は幅広く凹線1条をめぐらして区画している。文様は入り組みになった渦巻き文を中心に直線、曲線の凹線と押点文を組み合わせて、基本的には三角形を基調とした施文である。3も口縁部の破片である。口唇部には棒状工具で深い刻み目が入れられ、口縁は波状をなす。文様帯は2段に施文され境には凹線1条がめぐらされている。上段の文様は押点文を2段に施文している。2段目の押点文は1段目の押点文の間に施文されるために上段の文様帯は狭い。また、押点は凹線と重複関係にある。押点には爪の痕が明瞭に残っている。2段目の文様は押点5個を配して中心文様とし、間は直線、曲線、先端がワラビ状に曲げられた凹線と押点文を組み合わせている。4は口縁部を欠損しているが、文様帯の中心文様を比較的良く残している。上方に凹線2条をめぐらし、文様帯の下方にも凹線をめぐらしている。文様帯は凹線で区画されていたと考えられる。縦に配された凹線を中心に、凹線の両端の両側に押点文を配し、その両側には左右対称ではないが、非常に良く似た曲線と押点文を組み合わせた文様が施文されている。5も口縁部を欠損しているが、口縁部文様帯の破片である。曲線と先端がワラビ状に曲がった直線の凹線を組み合わせた文様を施文している。6は口縁部の破片である。口縁は内傾しながら立ち上がる。口唇部はへら研磨により丸くおさめている。口縁直下に狭い無文帯を配している。文様帯は他の土器と比較して狭い。幅3cmの間隔をおいて凹線1条がめぐらされ、文様帯を区画している。曲線と押点の組み合わせで中心部文様が施文され、その両側には直線と押点を組み合わせて文様が施文される。文様は左右対称に近いが微妙に異なっている。文様帯に明瞭な段はないが文様帯が厚くなっている。7も口縁部破片である。口縁部文様帯は狭く沈線1条をめぐらし、文様帯を区画している。文様は短直線と押点文を組み合わせた文様であるが、文様構成は明らかでない。8は口縁端部を欠損している。文様帯は凹線で区画されていると見られるが定かでない。直線、曲線、押点を組み合わせているが文様構成は明らかでない。9は口縁部に近い胴部破片である。他の土器と比較して凹線が狭い。また、胎土には多量の滑石を混入していて他の土器の胎土と大きく異なるので他地域から搬入された可能性が強い土器である。文様帯の下端には凹線1条がめぐらされていて、文様帯を区画している。曲線と押点を組み合わせているが全体の構成は明らかでない。凹線間を短線で埋めている。古い要素を残した文様であるのか、地域の違いを示すものかは判断できない。10、11は口縁端部を欠損しているが、口縁部近くの破片と考えられる。10は文様帯下端に凹線1条がめぐらされ、文様帯を区画している。10、11ともに凹線と押点を組み合わせて文様を施文しているが、文様構成は明らかでない。12は胴部下半の破片である。表面に平行凹線を斜めに施文している。全面に菱形文状に施文する土器である。13、15は口縁端部を欠損しているが、口縁部近くの破片である。ともに文様帯の下端に凹線1条をめぐらし、文様帯を区画している。13は区画の凹線と重複するように押点が並列して施文され、上には平行凹線を斜位と横位に施文している。15は凹線と押点を施文するが、全体の構成は不明。14は凹線を組み合わせている。16は縄文を施文している。下層の土器が混入したと考えられる。第110図11と同



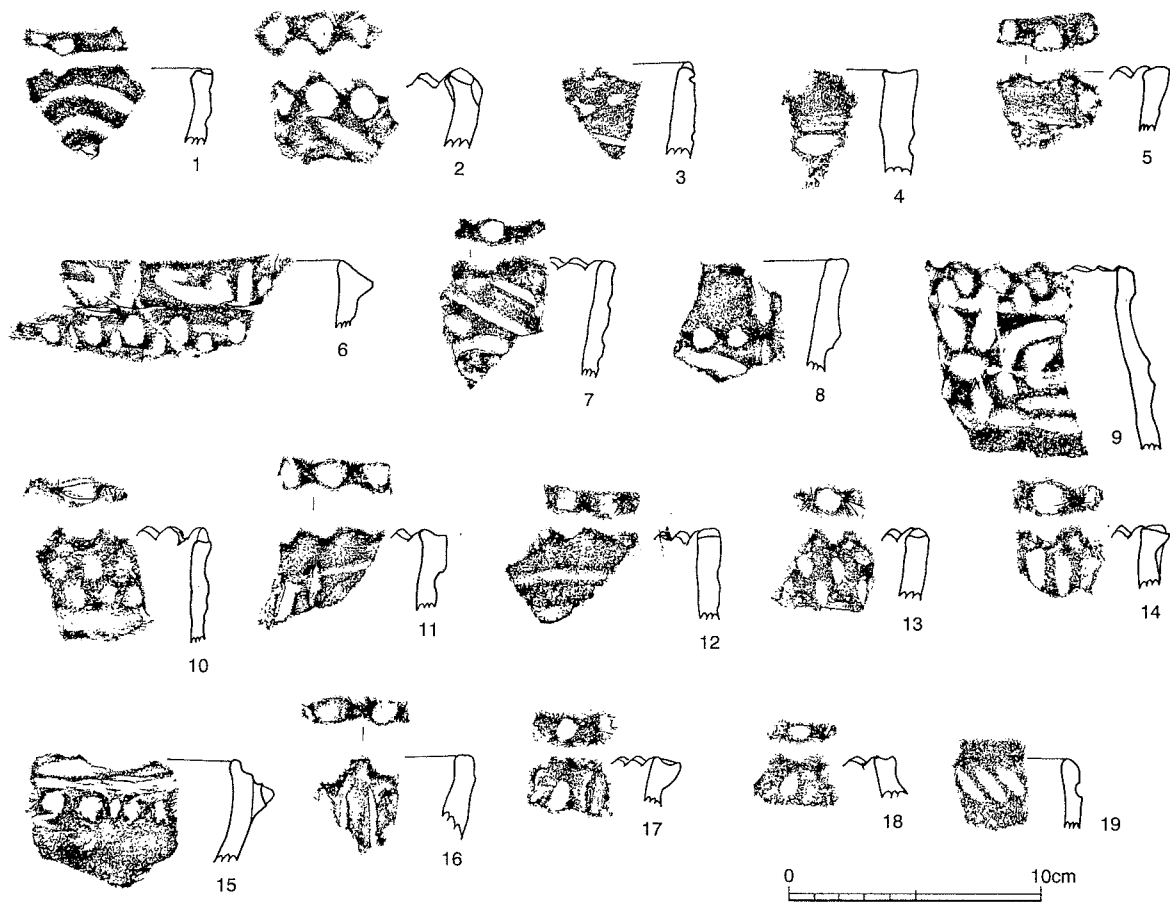
第87图 4c層出土土器実測图 I



第88圖 4c層出土土器実測図Ⅱ

一個体である。詳細は後述する。17は口縁部破片である。凹線2条を横走させている。18は口縁部が肥厚し、下端に段が形成される。押点文が施文される。上層からの混入品と考えられる。

第88図 1～4は口縁部破片である。1は口縁下に凹線1条をめぐらし文様帯を区画している。文様帯には羽状文を施文する。口唇部にはヘラによる浅い刻み目が入れられる。2は文様が2段に施文される。上段はC字状文を並列し、下段に羽状文を施文している。3は口縁部二無文帯を置き凹線1条をめぐらし区画している。下には平行凹線をハ字状に施文している。内面に屈曲の稜線が確認できる。4は口縁部に無文帯を置き凹線1条をめぐらし区画している。また間隔をおいて凹線1条をめぐらし文様帯を区画している。文様帯には押点文を3段に施文していて、上段と下段の押点は凹線と重複関係にある。口唇部には棒状工具で刻み目が入れられる。5は胴部破片である。平行凹線が縦に4条施文されている。後は全て口縁部破片である。6は凹線と押点を組み合わせている。7は口縁が内傾しながら立ち上がり、縦の平行した短直線を施文している。8は口縁部がわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部には棒状工具による刺突で刻みを入れる。文様帯は幅広く、下端に浅い凹線1条をめぐらし文様帯を区画している。口縁直下に押点を並列施文する。文様帯の中央部に凹線で渦巻き文を施文し、渦巻き文の上には渦巻き文に合わせて凹線の曲線を描き、間は押点文で埋めている。下にも同様に平行する弧線を描きその間は押点文で埋めている。区画線との間にも押点文が充填されている。9は口縁に台形上の突起がある。突起部には口唇部に棒状工具により深い刻み目が入れられている。突起の下には凹線で渦巻き文が施文され、その周りにも凹線が施文されているが文様構成は明らかでない。10、11は口唇部に棒状工具により刻み目が入れられ、口縁は波状をなす。文様帯には凹線が横、斜めに施文されているが文様構成は明らかでない。12も口唇部に棒状工具によって深い刻み目が入れられ口縁は波状をなす。口縁下には幅広い無文帯を置き、下に2条の沈線を施文している。13は口縁部に棒状工具により刻みを入れる。文様帯は幅広く凹線1条をめぐらし区画している。口縁直下には押点文を並列施文している。その下には凹線4条をめぐらしているが文様構成は不明。14は口縁端部を肥厚させ断面三角形に仕上げ、口唇部に幅広い平坦面を作り出し文様を施文している。文様は縦の凹線で等間隔に区画し、その間に凹線でC字状文、コ字状文を描いている。口縁下の文様帯は幅広く、下端に凹線1条をめぐらして区画している。口縁下には1条の凹線がめぐらされ、この凹線をはさむように上下に押点が施文され、さらにその上の両側に押点が施文されている。この部分が文様の中心と考えられる。両側には凹線と重複するように押点文が並列施文されている。下には中心をややずれて押点1個が施文され、その両側に凹線各1条がめぐらされている。なお、下の区画線と重複して押点1個が中心に施文されている。また中心をややずれて両側から穿孔された補修孔が1個存在する。15は口縁部小破片である。口唇部に棒状工具による刻み目が入れられている。16は文様帯がやや狭く、わずかに肥厚し段がある。直線と曲線の凹線を組み合わせた文様を施文しているが、全体の構成は不明。17は丸味を持ち外傾しながら立ち上がる。あまり深い器形ではなく鉢形をなす可能性もある。口唇部には棒状工具で押さえた刻み目を的確に入れてある。口縁は波状をなす。口縁直下に狭い無文帯が置かれ、無文帯は凹線をめぐらして区画している。下の文様帯は広く、文様は2段に施文されている。渦巻き文が上下2段に施文され、渦巻き文の間には凹線1条がめぐらされているが、渦巻き部分では途切れている。上段の文様は渦巻き文以外に横、縦の凹線を組み合わせている。下段は渦巻き文の周りに曲線を描き施文しているが、文様構成については不明。18は先端がワラビ状に曲がった凹線と直線の凹線を横に施文している。19はC字状文を並列施文している。20は口縁部に近い破片と見られる。文様帯は幅広い。文様は平行した凹線を基調として横に施文している。凹線文間は短線あるいは押点で区画されている。また上の凹線間には円形の押点文が並列施文されている。21は胴部破片である。太い凹線で渦巻き文が施文されている。22は胴部破片、凹線2条が施文されている。23



第89図 4c層出土土器実測図Ⅲ

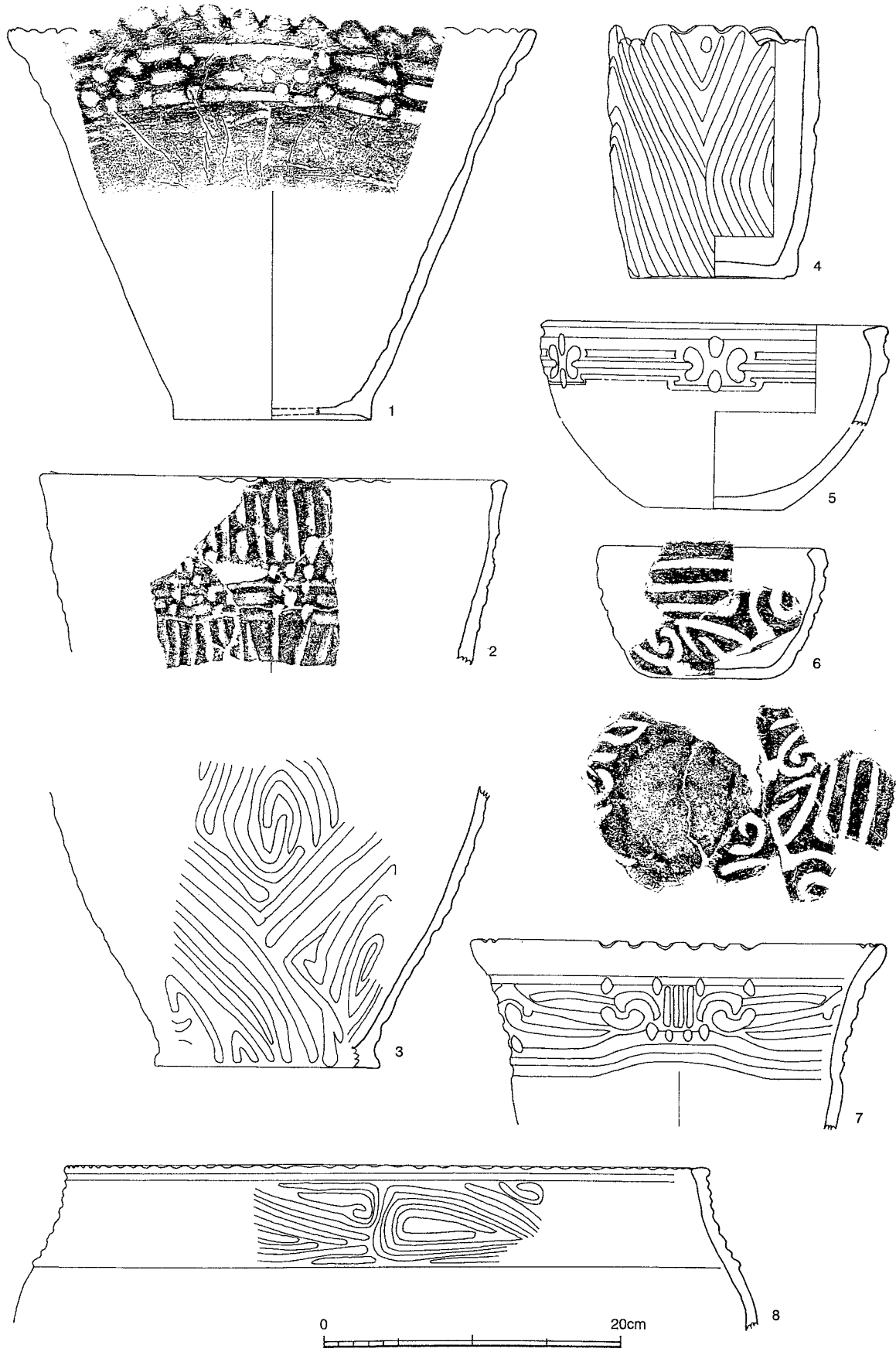
は胴部破片、平行した凹線が斜めに5条施文される。菱形を基調とした文様になると考えられる。24は口縁部に近い破片と考えられる。平行斜線を基調にC字状文、押点文が施文される。26も平行斜線を施文するが突帯が貼り付けられている。25は平行した凹線を斜位と横位に組み合わせている。27は胴部破片、渦巻き文と直線の凹線を組み合わせている。28は口縁部近くの破片、凹線1条をめぐらし、下に曲線と押点を組み合わせた文様を施文している。29は口縁部文様帯の下端に近い破片である。境に凹線1条をめぐらしている。直線の凹線と押点を組み合わせている。30も口縁部に近い破片と考えられる。文様帯の境に凹線1条をめぐらしている。平行した凹線を斜位に施文し、押点と組み合わせている。

第89図は全てが口縁部破片である。1は口唇部に刻み目を入れるが部分的である。平行した弧状の凹線を施文している。2は口唇部に棒状工具によって深い刻み目を入れ、口縁は波状をなす。口縁直下に押点文を並列施文する。下に凹線があるが文様構成は不明。3は細い沈線と刺突、4は凹線、5は押点が施文されるが文様構成は不明。6は口縁部を肥厚させ、断面三角形をなし、口唇部に幅広い平坦面を作り出す。平坦面には縦の凹線を入れ区画し、区画内にはC字状文を施文する。文様帯は大部を欠損しているが、押点文を2段に施文している。押点文には爪のあとが残る。7、8は凹線と押点を組み合わせた文様を施文している。8は口縁部が肥厚し下端に段ができている。上層の土器が混入した可能性が強い。9は口唇部に棒状工具によって刻み目が入れている。口縁部文様帯は2段に施文されている。上段の文様帯は凹線1条をめぐらせて区分されている。また、下段の文様帯の境

にも凹線1条をめぐらし、無文部と区画している。上段には押点文が2段に施文され、下段の押点文は凹線と重複関係にある。下段の文様は中心に押点1個を横向きに配し、その対角線の4箇所それぞれ押点を施文して中心飾とし、その両側に曲線、直線、先端がワラビ状に曲がった直線の凹線を組み合わせているが、片方の文様は欠損している。10は文様帯の境に凹線1条をめぐらしている。文様帯には押点文を2段に施文している。11、12、16はともに口唇部に棒状工具によって刻み目を付けている。文様は沈線を施文しているが全体の文様構成は不明。13は2段に押点文を施文している。14、17、18も押点文を施文しているが全体は不明。15は口縁直下に凹線をめぐらし、その下に刻み目の突帯をめぐらしている。19は口縁部に狭い無文帯置き、短い斜行した凹線を平行に施文している。

第90図は第4c層、第4層、表面採集資料を復元したものである。第4c層、第4層上半部は部分的に層の重なりが見られるが、出土土器には変化が見られないのでここで一括して説明を加えることにする。

1は深鉢形土器である。縦に約三分の一の破片を残して、ほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底で、わずかに上げ底状をなす。体部は外傾しながら直線的にのび、口縁部にいたる。全体としてバケツ形をしている。口唇部には棒状工具によって、深い刻み目が入られ、口縁は波状をなす。口縁直下には狭い無文帯を配して、凹線1条めぐらして区画している。その下にも一定の間隔を持って凹線1条をめぐらし、胴部の無文部との境を区画している。文様は区画の中心となる部分に押点4個を施文し、文様帯を分割しているが、何分割したかは明らかにできない。分割された中の文様は短凹線と押点を組み合わせて施文するが、押点は上下ともに文様帯の区画線と重複関係にある。復元口径36.0cm、器高27.2cm、底部復元径13.6cmを測る。第1次調査A-2区より出土。黒曜石原石の集積遺構に近い所から出土し、その意味は重要である。2は深鉢形土器の口縁部破片である。第103図8の復元図である。口縁は緩やかに立ち上がる。口唇部には棒状工具によって刻み目が施される。口縁は低い波状をなしている。文様は外面の全面に3段に分けて施文されている。口縁直下には極めて狭い無文帯がある。上段の文様は幅5cm前後、縦に凹線を縦に平行に施文し、その間に短い凹線を2個縦に入れて、凹線には1条の筋が明瞭に認められる。2段目の文様は幅3cm前後、帯状に土器をめぐっている。文様帯の上下には浅い凹線がめぐられ、文様帯を区画している。文様は凹線と押点を組み合わせたもので1の土器の主要文様と同一である。下段の文様は胴下半部を欠損しているので全容を知ることができない。凹線を縦、斜めに施文している。凹線はやや円弧を描くものがある。3の土器にみるような文様が施文されている可能性が強い。上段の文様に重複して両面から穿孔された補修孔1個がある。外面は丁寧なヘラ研磨調整、内面は斜位のヘラナデ調整、胴下半に指圧痕が凹凸で残り、上からナデが加えられる。復元口径32.0cmを測る。3は深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。底部は一部分を残すのみである。底部は安定した平底で、底部端がやや外に張り出す。体部は外傾しながら直線的に立ち上がるが上方にいくに従いやや丸味をもって立ち上がる。外面全面に凹線で文様が施文される。文様は単位として、入り組みになった渦巻き文をやや弧状になった凹線で菱形に囲むのを基調として、それらの文様を互い違いに2段にわたって施文している。口縁部まで同じ文様を施文するのか、口縁部には異なった文様を施文するのかは明らかでない。復元底部径15.6cm、復元胴部最大径30.0cmを測る。第2次調査E-(1)区出土。4は畑の深耕によって出土した土器である。多くを欠損しているがほぼ完形に復元することができた。底部は安定した平底である。体部はわずかに外傾しながら立ち上がるが、全体には傾きが少ないので円筒形をなす。口縁には4箇所に突起が見られる。突起は口縁より約1cm高い。口唇部には突起部分も含めて棒状工具によって刻み目が入られているが突起部分の刻みが大きい。外面全面に文様が施文されている。文様はやや弧状になった凹線を菱形状に組み合わせたものであるが、中心部の文様は、弧状の凹線を向かい合わせにただけで、3のような渦巻き文は見られない。外底部の中央部よりやや偏ってドングリ類



第90图 4c·4層出土土器実測图IV

の圧痕がある。復元口径14.4cm、器高17.2cm、底部径11.6cmを測る。5は浅鉢形土器の口縁部破片である。第103図4と同一個体である。胴下半から底部にかけて欠損するため全体の器形は明らかでないが、復原図に示したように平底になると考えられる。体部は外傾しながら丸味をもって立ち上がり、口縁端部内側に内傾するようになる。口唇部はやや内側に張り出し、ヘラ研磨によって平坦に仕上げている。口縁部文様帯は肥厚して文様帯の下端に段が形成されている。口縁直下には狭い無文帯が置かれ、凹線1条をめぐらして区画している。中心部文様は肥厚部が下に方形に突き出している。中心文様は上下に押点各1個を施文し、その両側にC字状文を相対するように配している。中心部文様で文様帯を分割し、その間には平行する2条の深い凹線を施文しているが、上の凹線がわずかに短い。胎土には滑石が多量に混入され、ヌメヌメとした触感がある。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整で仕上げている。胎土、文様等は従来の阿高式土器とは大きな違いがある。検討を必要とする土器である。復元口径23.8cm、推定器高12.5cmを測る。6は小型の浅鉢形土器である。底部と体部の四分の一を残している。底部は丸底に近い平底である。底部と体部の境がやや不明瞭である。体部は外傾しながら、やや丸味をもって立ちあがる。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに内側に張り出す。口唇部はヘラ研磨によって平坦に仕上げられているが、部分的に丸味を持っている。文様は体部外面の全面に施文されている。口縁直下には幅1cm程度の無文帯を置き、凹線1条をめぐらして区画している。その下の文様は凹線で渦巻き文、入り組みの渦巻き文、C字状文、平行線等の文様が組み合わせられているが、全体の文様構成は明らかにできない。しかし施文された文様はいずれも阿高式土器特有の文様である。復元口径15.8cm、器高9.0cm、底部径10.0cmを測る。内外面ともに横方向のヘラ研磨調整である。第2次調査A-1区出土。7は深鉢形土器の口縁部破片である。胴下半部下から底部にかけて欠損する。器形は胴下半はやや丸味を持って立ち上がり、下半部と上半部の境はわずかに屈曲し、上半部はほぼ直立に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部には文様の中心部の上に太い棒状工具によって刻み目が入れているが、他の部分には刻み目はなく平坦に仕上げられている。刻み目は中心部文様のある4箇所のみとみられる。口縁直下には幅2cm前後の無文帯を置き、凹線1条をめぐらして区画している。口縁部文様帯は6cm前後で、胴部の無文部の境に凹線1条をめぐらしている。中心部文様は上位に縦の短い凹線を3条施文し、その両側の上部に区画の凹線と重複する4個の押点が施文される。下にも同様に4個の押点が施文されているこれらの文様の両側にはC字状文とワラビ状文を入り組みにし、それらからのびる凹線と押点を組み合わせて文様を構成している。復元口径28.6cmを測る。8は大型の深鉢形土器である。胴部は大きく膨らむと見られ、上部は丸味を持って内傾する。口縁部はやや反り返るように立ち上がる。口唇部には棒状工具によって刻み目が入られ、口縁は小さい波状をなす。口縁直下には狭い無文帯があり、凹線1条をめぐらし区画している。口縁部文様帯は幅7cm前後でわずかに肥厚している。文様帯の下端には段を形成している。文様帯は縦に分割され、その間を右下がりの対角線によって二分し、三角形を基調とした文様を凹線で描いている。凹線の一部はワラビ状に曲がっている。凹線の間は隆起線上になっていて、文様を立体的にしている。復元口径44.2cmを測る。

(2) 石器

同層出土の石器には、石鏃、同未製品、組合せ石銛の銛頭、磨製石斧、同未製品、石匙、スクレイパー、双角状礫石器、礫器、石錘、砥石、凹石、叩石、磨石、石皿、石核等がある。

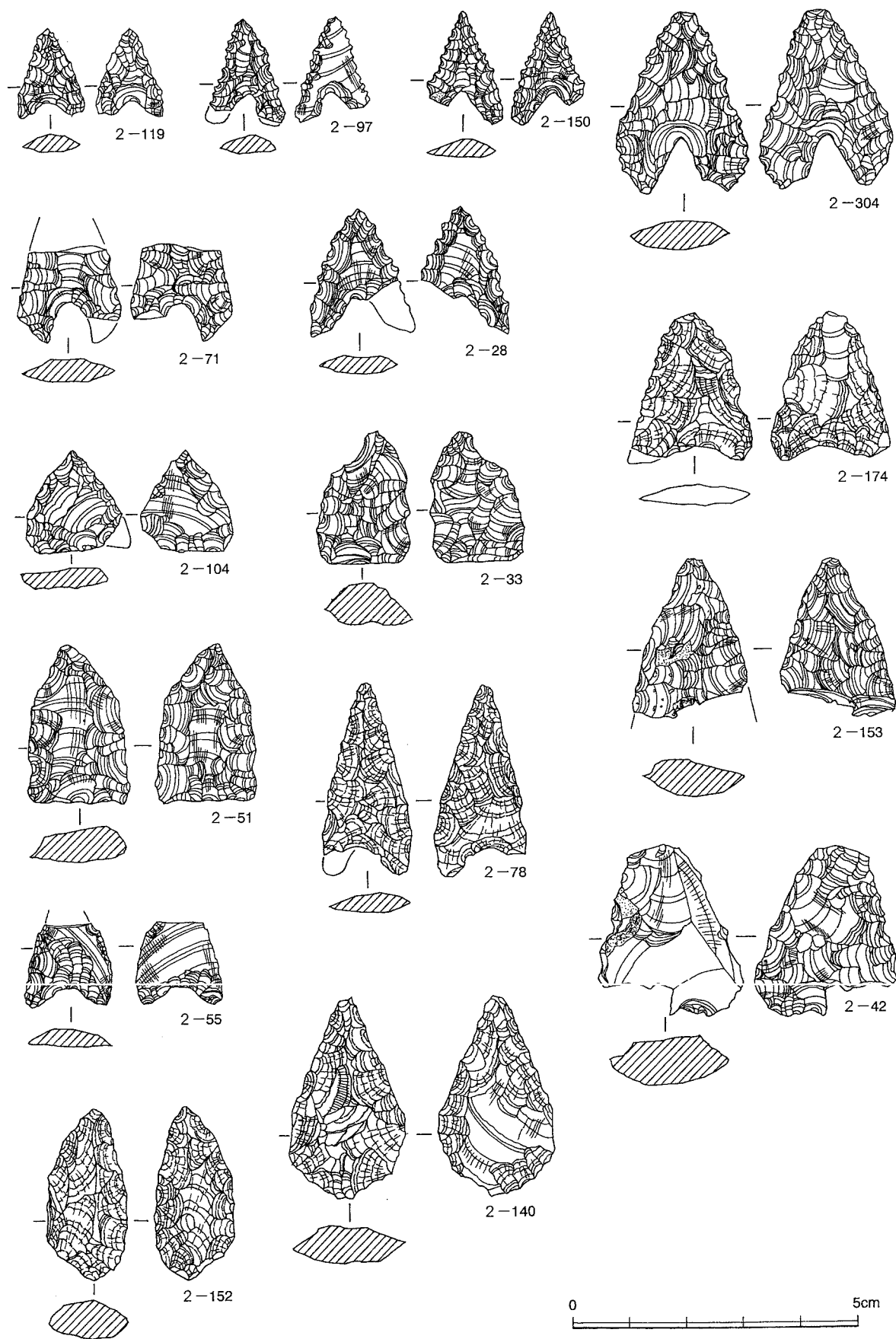
第91図には石鏃、同未製品を図示した。石鏃は形態的特徴から次のように分類できる。a. 柳葉形をした石鏃（2-152）b. 木葉形（最大幅が基部近くにある）の石鏃、（2-140）。c. 五角形をなし基部が平坦な石鏃（2-33、2-51）。d. 三角形で基部が平坦な石鏃（2-104）。e. 長身で基部に浅い抉りをもつ石鏃（2-174）。f. 形状eと同様であるが、基部の抉りがやや深い石鏃（2-78）。g. やや長身で基部の抉りが三角形に深い石鏃、資料によっては側辺に鋸歯列をもつ例もある（2-119、2-97、2-150、2-28、2-55）。h. やや大型の石鏃、長身で、基部の抉りは三角形に深い。脚部は側辺から内側に直線的に切り込む特徴がある（2-304、2-71）。2-153は脚部を欠損し、2-42は石鏃未製品である。石鏃、同未製品の計測値、石材等は第4表に示した。

第4表 第4層出土石鏃計測表

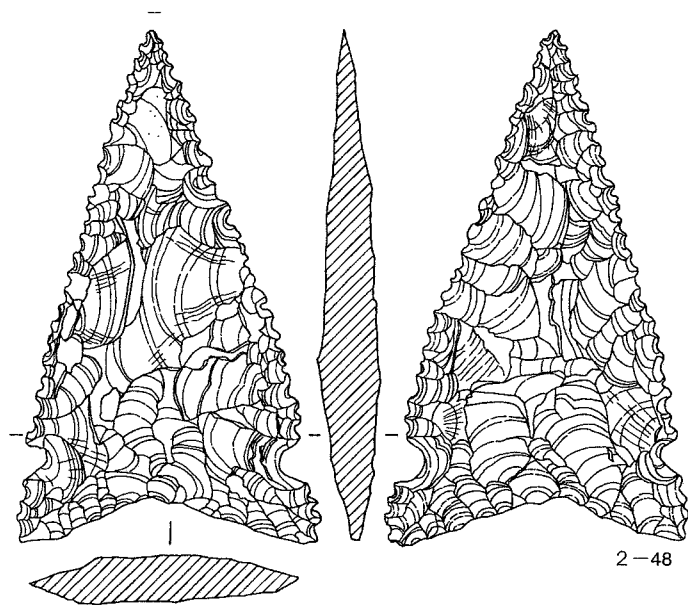
遺物番号	長mm	幅mm	厚mm	重g	石材	出土区	備考	遺物番号	長mm	幅mm	厚mm	重g	石材	出土区	備考
2-119	15.3	11.6	3.2		ob	E-1区	石鏃	2-174	25.7	21.0+ α	4.3		珪石	F-1区	片脚欠
2-97	17.5+ α	13.4+ α	3.8	0.38	ob	F-3区	鋸歯鏃	2-51	27.2	17.3	6.3	2.88	ob	E-3区	五角形鏃
2-150	19.6	12.9+ α	3.2		ob	F-5区	鋸歯鏃	2-78	32.7	15.2	3.4		珪石	F-6区	片脚欠
2-304	31.6	22.9	5.0	2.58	ob	E-5区	大型鏃	2-153	26.4+ α	19.7+ α	6.7	2.72	ob	F-5区	脚部欠
2-71	16.9+ α	18.0	4.1	0.84	ob	F-3区	上半、片脚欠	2-55	14.5+ α	14.7	3.5	0.63	ob	E-5区	頭部欠
2-28	22.1	15.9+ α	3.6	0.77	ob	E-2区	鋸歯鏃	2-152	29.3	13.6	6.6	2.88	珪石	F-5区	柳葉形鏃
2-104	17.7	16.9+ α	3.6	1.01	ob	E-2区	三角鏃	2-140	34.3	20.3	6.4		珪石	F-2区	柳葉形鏃
2-33	22.9	15.9	7.5	2.32	ob	G-3区	頭部一部欠	2-42	30.0	24.9	8.6		ob	F-3区	石鏃未製品

第92図には組合せ石銛の銛頭とスクレイパーを図示した。2-48、2-54は組合せ石銛の銛頭である。共にサヌカイトを素材とした優品である。2-48は長身の二等辺三角形をなし、基部には浅い山形の抉りを入れる。基部に近い側辺に相対して大きい抉りを入れ、側辺には鋸歯列をつくり出している。全体に丁寧な押圧剥離を加えている。長6.7cm、幅4.0cm、厚0.8cm、重量14g。2-54は先端部を欠損する。前者と形状は類似する。基部近くに大きな抉りを入れるが、前者より幅が広く、抉りの上部は逆刺の役割をもっていたと考えられる。側辺には鋸歯列をつくり出そうと意図しているが、鋸歯列は片側の一部にのみ存在する。基部には円弧状の浅い抉りがある。長4.1cm+ α 、幅3.7cm、厚0.8cm、重量9g+ α 。2-25はサヌカイト製のスクレイパーである。横剥ぎの大型の剥片を素材とし、周縁に剥離を加えて整形している。全体形は隅丸の長方形、側辺の一边が刃部で、刃部は両面から剥離を加えて形成するが、細かい加工はない。刃部は使用により磨滅して丸くなり、光沢をもっている。使用が著しかったことを物語っている。長9.3cm、幅5.0cm、厚1.8cm、重量80g。

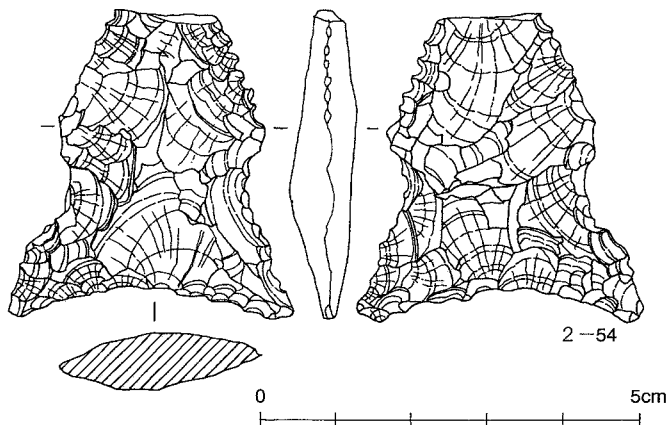
第93図には磨製石斧、石匙、尖頭状石器、スクレイパーを図示した。2-352は頁岩製の磨製石斧、頭部と刃部を欠損するが、全形はほぼ推測することができる。頭部から刃部に向かって徐々に幅を増加する楔形をなす。厚さは幅に比して扁平である。全体に良く研磨されているが、風化が著しいために、製作痕等は、あまり明瞭でない。欠損部と石斧表面の風化の状態が著しく異なるので、石斧の製作はさらに古い時期に遡る可能性が高い。長12.6cm+ α 、幅5.7~7.4cm、厚2.8cm、重量350g+ α 。2-76はサヌカイトの残核を素材としたスクレイパーである。三辺にやや粗い剥離を加え刃部を形成する。一部に自然面を残している。長6.4cm、幅2.8cm、厚1.5cm、重量23g。2-15はサヌカイト製の横型の石匙である。つまみと刃部の一部を欠損している。横剥ぎの大型の剥片を素材に丁寧に剥離を加えて



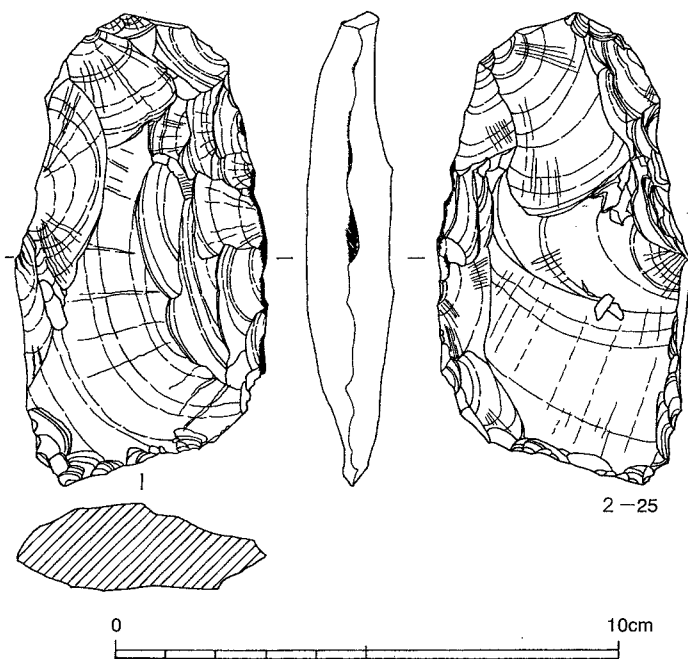
第91图 4c层出土石器实测图 I



2-48



2-54



2-25

第92図 4c層出土石器実測図Ⅱ

整形しているが、一部に自然面が残っている。つまみの部分は両側から細長い台形状の突起として整形され、刃部はつまみ部分を中心に両側に細長い槍先状に湾曲しながら左右対称にのびると考えられるが、片方の刃部を欠損している。先端部は尖り、刺突具としての用途もそなえている。全体は丁寧な押圧剥離で整形している。長 $3.2\text{cm} + \alpha$ 、幅 $7.1\text{cm} + \alpha$ 、厚 0.8cm 、重量 $15\text{g} + \alpha$ 。

2-158はサヌカイト製の縦型の石匙である。縦長の幅広い剥片を素材としているが先端部を欠損している。全体に風化が著しいが、欠損部の風化状態も同様である。つまみは両側から抉りを入れてつくり出している。刃部は剥離を加えて形成しているが、一辺は両面、他は片面からの剥離である。長 $6.3\text{cm} + \alpha$ 、幅 3.8cm 、厚 0.9cm 、重量 $22\text{g} + \alpha$ 。つまみの大きさは $1.2\text{cm} \times 0.8\text{cm}$ を測る。

2-24は黒灰色の地に黒色の筋がはいったチャート製の縦型の石匙である。横剥ぎの剥片を素材とし、一部に自然面を残している。両側の頭部に浅い抉りを入れてつまみをつくり出している。つまみは大きく全体の $1/3$ を占める。刃部は一辺のみで片面加工である。先端部は両面から剥離を加え尖頭部をつくり出している。長 5.2cm 、幅 $1.8 \sim 2.5\text{cm}$ 、厚 0.6cm 、重量 11g 。

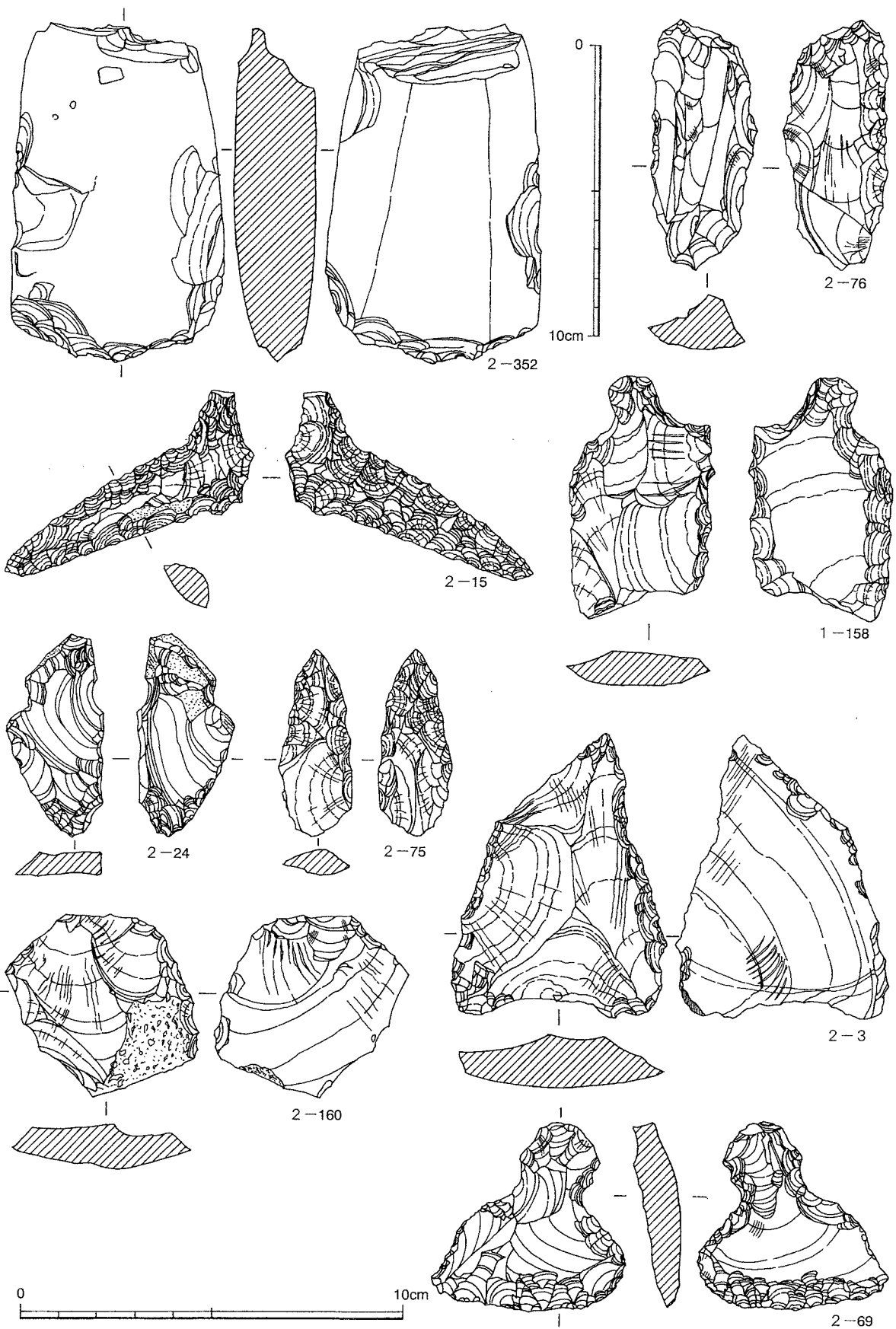
2-75はサヌカイト製の尖頭状石器である。両面から丁寧な剥離を加えて尖頭部をつくり出しているが、途中で半折しているため元来の姿は明らかでない。石槍あるいは石匙の刃部になるかは不明。長 $4.8\text{cm} + \alpha$ 、幅 1.9cm 、厚 0.7cm 、重量 $4\text{g} + \alpha$ 。

2-160はサヌカイト製のスクレイパーである。横剥ぎの不定形剥片を素材とする。主要剥離面の反対側の面には自然面を残している。平面形は五角形をなす。刃部は打

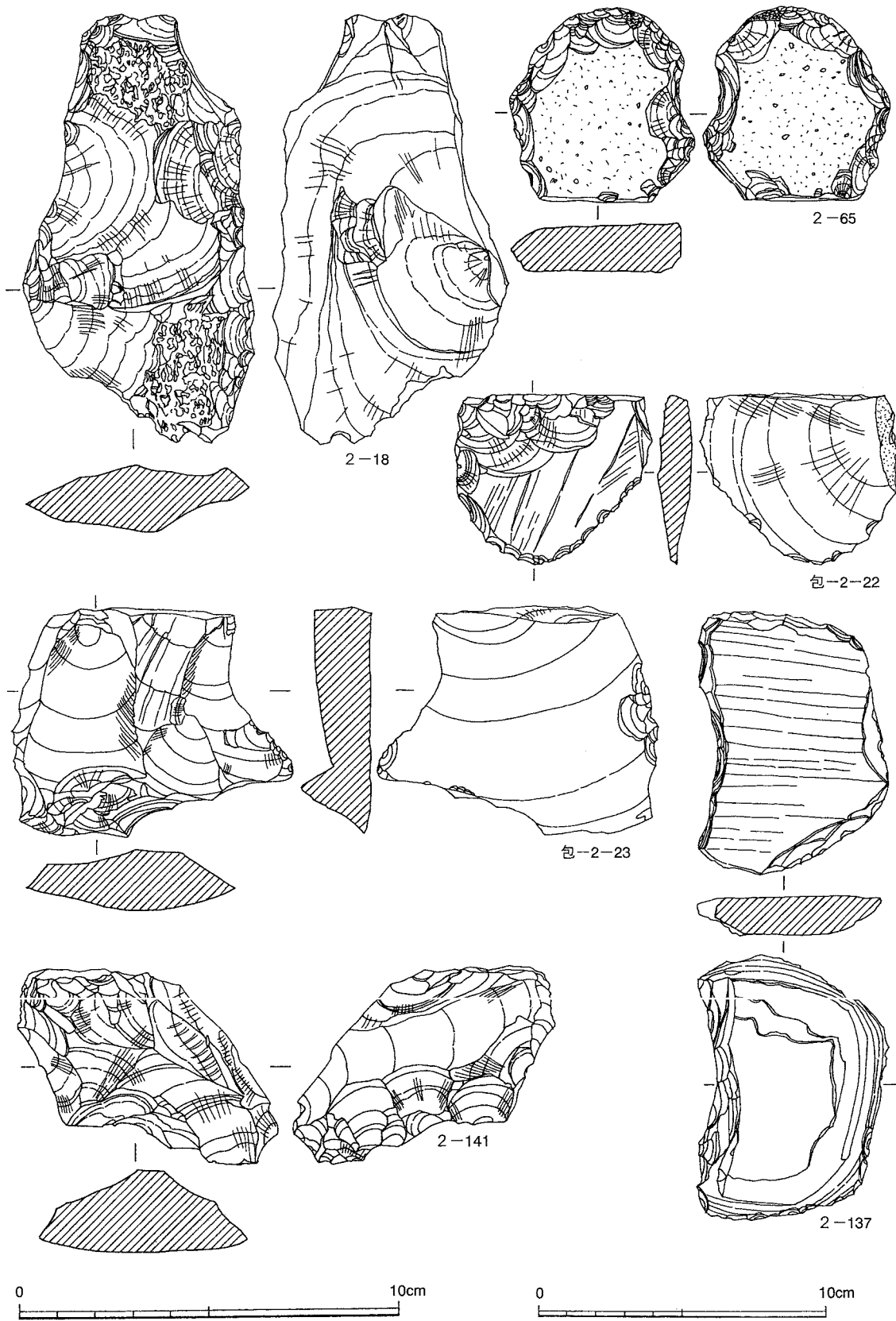
面および隣接する二辺に両面から細かい剥離を加えて形成している。長4.7cm、幅5.1cm、厚1.1cm、重量25g。2-3はサヌカイト製のスクレイパーである。平面形は大型の石鏃形の不整形三角形をなす。横剥ぎ剥片を利用し、エッジ部に細部加工を加え整形している。先端部は鋭い尖頭部がつくり出され、基部は浅い抉りをもつ。石銛の可能性もある。長7.3cm、幅5.7cm、厚1.3cm、重量38g。2-69はチャート製の横型の石匙である。横剥ぎの剥片を利用し、全形は略三角形をなす。打面側に大きい抉りを相対する二ヶ所につくり、つまみ部分をつくり出している。刃部は剥片のエッジ部分に両面から丁寧な押圧剥離を施し刃部を形成する。刃部端の一ヶ所は尖り、他はやや丸味をもつ。中央部に主要剥離面を大きく残している。長4.9cm、刃部幅5.1cm、厚1.0cm、重量20g。

第94図はスクレイパー、礫器を図示した。2-18はサヌカイト製のスクレイパーである。横剥ぎの大型の剥片を素材とする。主要剥離面の反対の面には部分的に自然面を残している。刃部加工は打面の反対のエッジ部分に片面からのみ剥離を加えて形成している。刃部の使用痕は大半が特に顕著である。長11.2cm、幅2.5~5.9cm、厚1.8cm、重量167g。2-65は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は不整形、三辺に両面から剥離を加えて刃部を形成するが、刃は鈍い。両面には自然面を大きく残している。長6.7cm、幅6.0cm、厚1.7cm、重量107g。包-2-22はサヌカイト製のスクレイパー、横剥ぎの不定形剥片を素材としている。平面形は半円形をなし、円弧部に主に片面から細かい剥離を加えて刃部を形成する。加工されない片面にも刃こぼれがみられる。長4.4cm、幅5.1cm、厚0.9cm、重量26g。包-2-23は頁岩の石核を再利用したスクレイパーである。主要剥離面の反対の面には、打面を同じくした剥離痕が2ヶ所にみられる。側辺の一辺に片面から剥離を加えて刃部を形成する。また、他の側辺の端部に両面から剥離を加え尖頭部をつくり出している。長5.9cm、幅7.4cm、厚1.5~1.8cm、重量83g。2-141はサヌカイトの残核を素材としたスクレイパーである。一部に自然面を残す。平面形は不整形長方形、長軸の一辺に両面から剥離を加え刃部を形成する。全体に風化が著しい。長5.1cm、幅5.6cm、厚2.1cm、重量52g。2-137は片岩系の扁平円礫を素材とした礫石器である。円礫を半割し、その部分に敲打による剥離を加え抉りをつくり出している。敲打部は2ヶ所にあり、敲打部分に平坦面ができています。抉りは深さ0.7cm。他の縁辺には整形の剥離が加えられている。長6.5cm、幅9.2cm、厚1.3cm、重量116g。

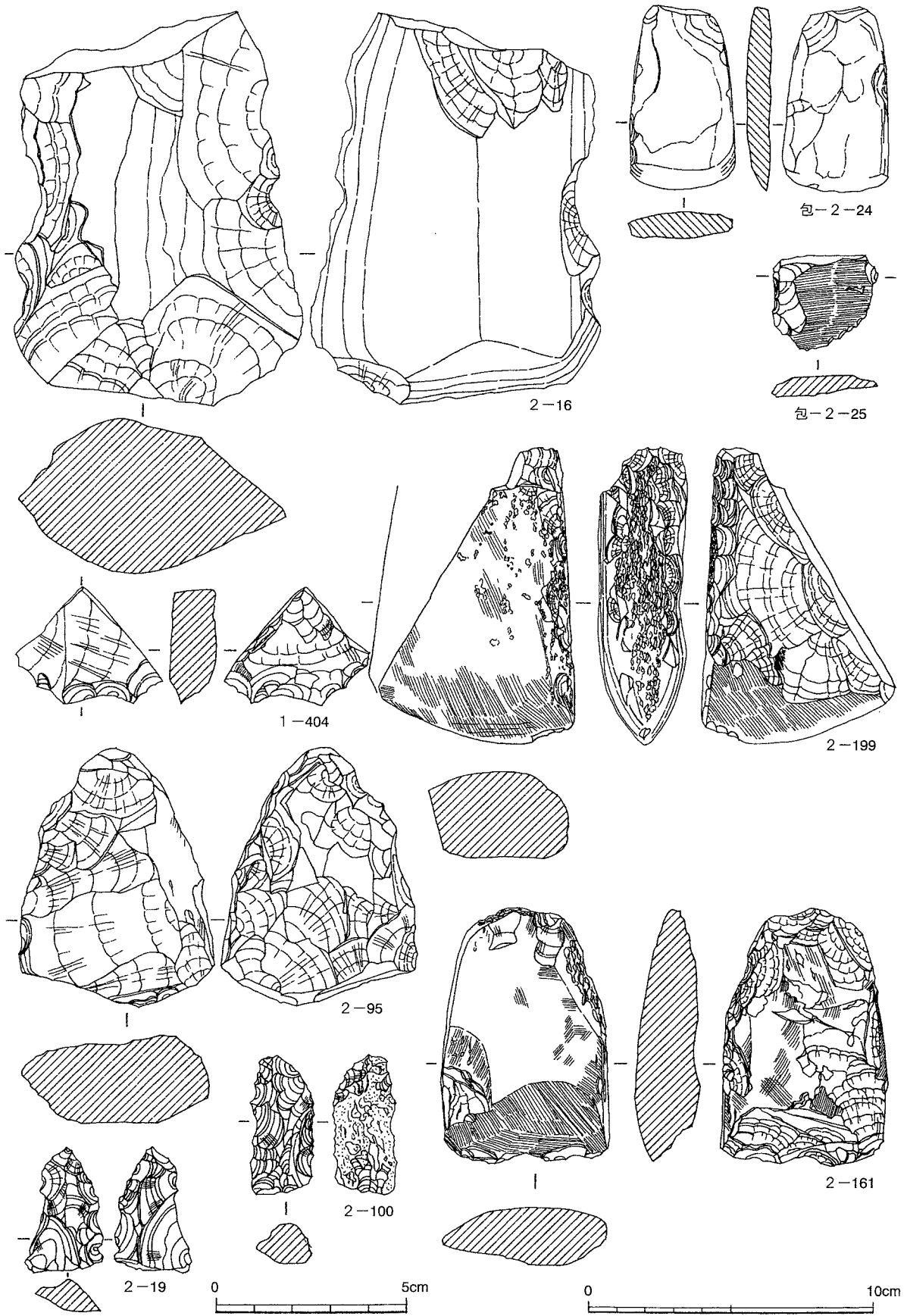
第95図は磨製石斧、同未製品、スクレイパー類を図示した。2-16は砂岩の大型の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。長方形の手ごろな自然礫を選び、片面から粗い剥離を加えた段階で半折したため製作を中断した資料である。片面は自然面をそのまま残す。長 $13.5\text{cm} + \alpha$ 、幅 $8.6 \sim 10.0\text{cm}$ 、厚 5.3cm 、重量 $744\text{g} + \alpha$ 。包-2-24は頁岩製の小型の扁平磨製石斧である。風化が著しく、表面が剥落している。刃部はゆるやかに円弧を描き、片刃をなす。側辺部は研磨され、わずかに平坦面が形成される。平面形は揆形をなす。長 7.3cm 、幅 $2.5 \sim 3.8\text{cm}$ 、厚 0.9cm 、重量 30g 。包-2-25は頁岩製の磨製石斧破片である。全体に横方向の研磨が加えられている。長 $3.3\text{cm} + \alpha$ 、幅 $3.6\text{cm} + \alpha$ 、厚 $0.6\text{cm} + \alpha$ 、重量 $9\text{g} + \alpha$ 。1-404はサヌカイト製のスクレイパーの破片である。一辺に両面から剥離を加え刃部を形成する。長 $3.0\text{cm} + \alpha$ 、幅 $3.8\text{cm} + \alpha$ 、厚 1.2cm 、重量 $12\text{g} + \alpha$ 。2-199は頁岩製の磨製石斧である。一側辺から頭部にかけて欠損する。復元すると斜刃をなす両刃の中型の磨製石斧になる。片面は剥離調整後、敲打を加え平滑にし、さらに全面に丁寧な研磨を加えている。他の面は剥離調整後、刃部のみに研磨が加えられている。側面は敲打によって仕上げ、研磨は加えられていない。刃部は両面から研ぎ出された両刃で蛤刃をなす。長 $10.2\text{cm} + \alpha$ 、幅 $6.8\text{cm} + \alpha$ 、厚 3.2cm 、重量 $243\text{g} + \alpha$ 。全形は揆形をなすとみられる。2-95は蛇紋岩を素材とした磨製石斧未製品である。一部に自然面を残し、素材が円礫であったことがわかる。両面から剥離を加え整形しているが、刃部の破損によって製作を中断している。形状は頭部が尖り気味、刃部にむかって拡がり三角形状をなすが、さらに下方にのび、揆形をなすと



第93图 4c層出土石器実測図Ⅲ



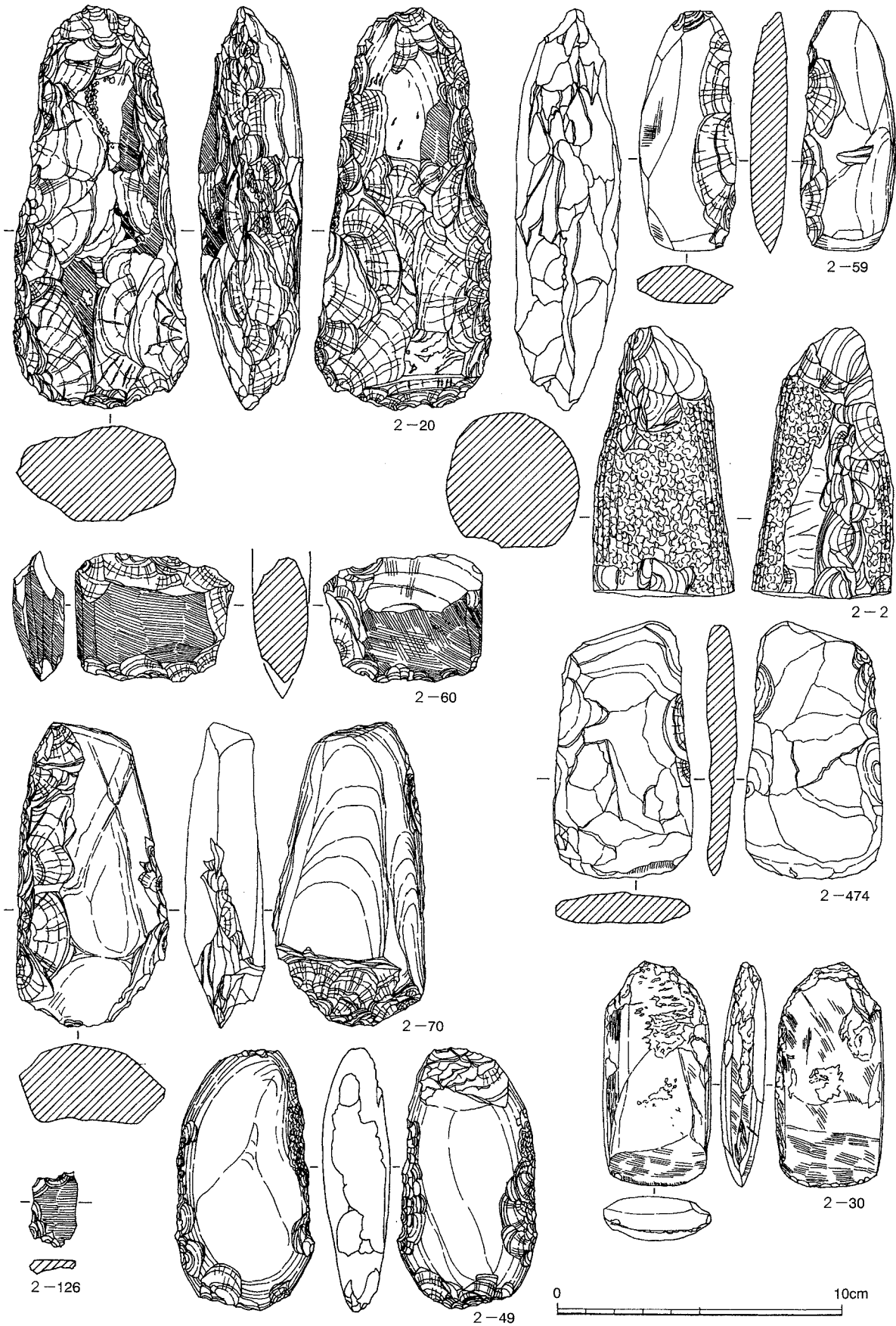
第94图 4c层出土石器实测图IV



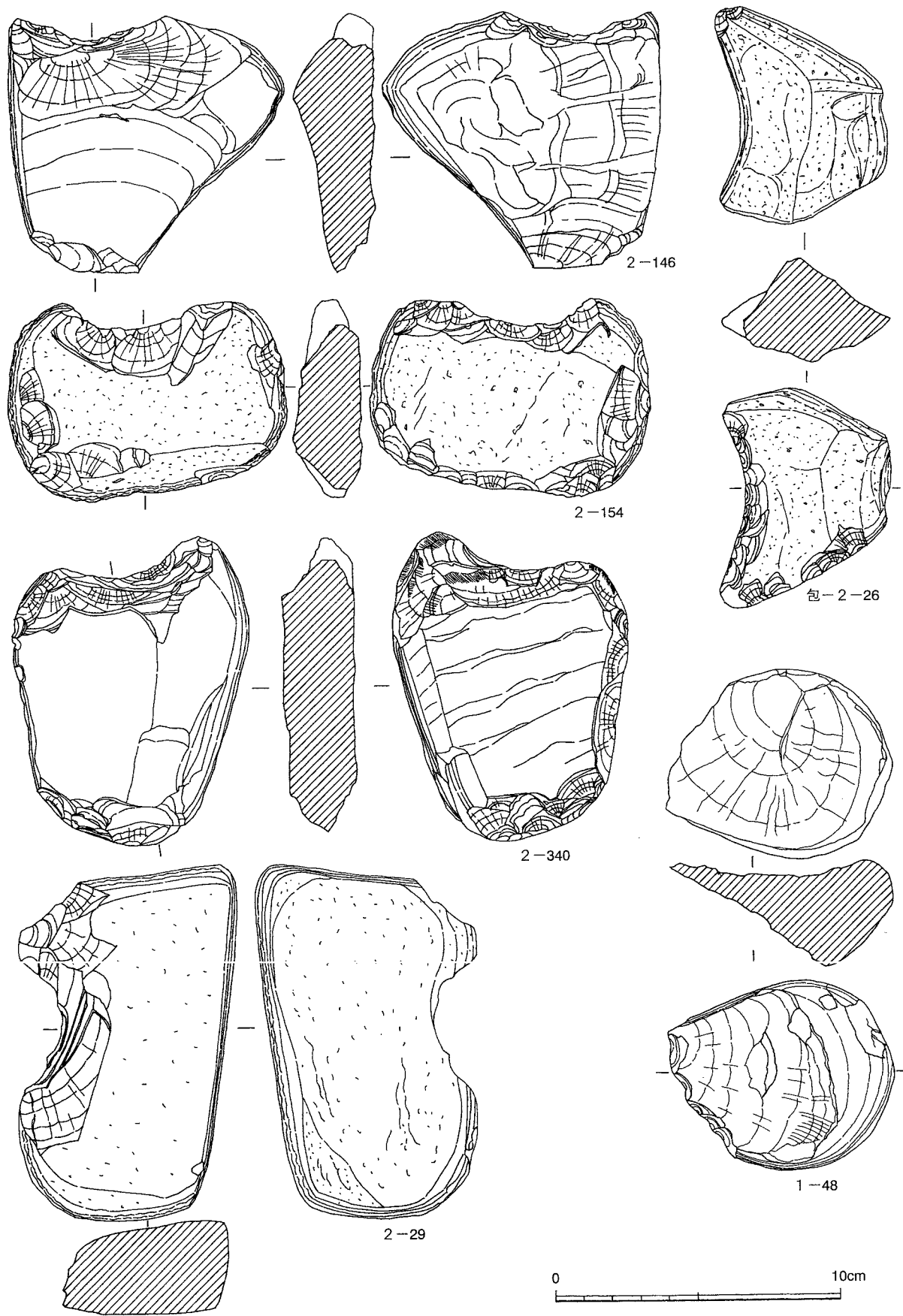
第95图 4c层出土石器实测图V

みられる。長8.8cm+ α 、幅2.5~6.9cm、厚3.0cm、重量205g+ α 。2-19は黒曜石（針尾島）を素材とした石鏃未製品か。両面から剥離を加え三角形に整形する。特に先端部には小さな剥離を加え、尖頭状に整形するが、基部は剥離のままで未加工である。全体に風化している。長3.3cm、幅2.0cm、厚0.8cm、重量4g。2-100も同様の石器、黒曜石（針尾島）を素材とする。片面に自然面を残し、他面には両側から剥離を加えて整形する。断面形は楕円形に近い、石槍の未製品か。長3.6cm、幅1.7cm、厚1.1cm、重量5.90g。2-161は黒色の強い紫色をした粘板岩を素材とした磨製石斧である。刃部を欠損する。平面形は刃部が拡がり揆形をなす。片面は一部に剥離痕を残しているが、全体に良く研磨されている。他面は全体に剥離痕を多く残し、研磨は中央部の高い部分にのみみられる。側辺は研磨され平坦面が存在する。刃部は両面から研ぎ出され、蛤刃をなすと考えられる。長8.9cm+ α 、幅3.7~5.6cm、厚1.5~2.3cm、重量143g+ α 。

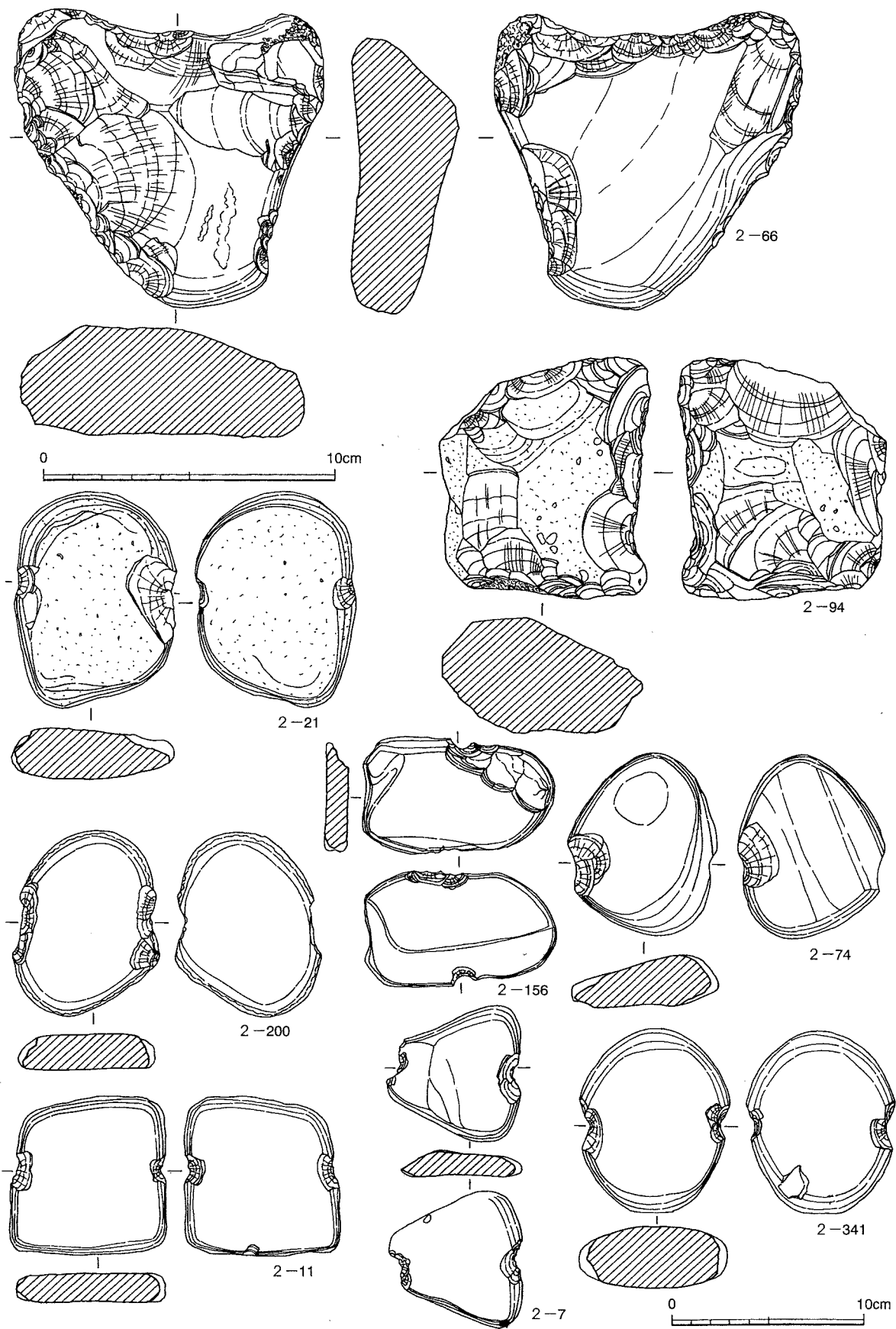
第96図は磨製石斧、同未製品を図示した。2-20は頁岩の円礫を素材とした未製品である。表裏面にわずかに自然面を残しているため素材の推定が可能である。全体に調整剥離が加えられ形状の整形はほぼ完了している。一部には敲打が加えられ、研磨痕もみられるが、刃部形成の剥離がステップしている部分があり、これが製作中断の原因であろう。全体形は揆形をなし、刃部は両刃、肉厚で伐採用の石斧と考えられる。長13.9cm、幅3.4~6.1cm、厚3.6cm、重量325g。2-59は頁岩製の小型の磨製石斧である。側辺の一边に剥離があり一部欠損している。全体形はやや胴ふくらみの短冊形をなす。全体に良く研磨されているが風化しているため、製作痕等は不明瞭である。刃部は両面から研磨され両刃をなす。長8.2cm、幅3.3cm+ α 、厚1.3cm、重量48g+ α 。2-60は頁岩製の扁平片刃石斧である。刃部付近の破片、刃部は使用によると考えられる小さな剥離が両面に拡がり、研磨による刃部は完全に消失しているが、剥離部分には使用痕とみられる磨滅痕が認められる。刃部は片側より強く研磨され片寄り刃をなす。長4.4cm+ α 、幅5.5cm+ α 、厚1.9cm、重量55g+ α 。2-2は硬質砂岩製の乳棒状石斧未製品である。一部に自然面を残しており、転石を利用したことがうかがえる。全体を剥離によって整形し、その後、敲打によって丁寧に調整するが、部分的に剥離痕が残っている。研磨痕がないので、敲打作業中に半折し、製作を中断したと考えられる。断面形はほぼ円形、頭部は尖り気味に整形される。長9.3cm+ α 、径3.5~5.0cm、重量303g+ α 。2-70は安山岩の扁平な棒状の転石を素材とした未製品である。側辺の一边に片面から整形の剥離が加えられ、全体形は揆形に仕上げている。刃部にも片面から剥離が加えられ、刃部形成を試みているが、剥離が大きくステップしている。これが原因で製作が中断したと考えられる。大部分に自然面を残している。長10.5cm、幅2.9~5.0cm、厚2.7cm、重量194g。2-474は頁岩製の磨製石斧である。完形品であるが、全体に風化が著しく、表面が剥落し、製作痕等の詳細は明らかでない。側辺の両側には整形のための剥離痕が残っている。刃部は片面から強く研磨された片寄り刃になると考えられるが不明瞭である。平面形は長方形であるが、頭部から刃部にかけて若干幅を増す。長8.9cm、幅4.0~4.8cm、厚1.0cm、重量72g。2-126は蛇紋岩製の磨製石斧破片である。研磨痕が明瞭に残っている。長2.5cm+ α 、幅1.6cm+ α 、厚0.5cm+ α 、重量2g+ α 。2-49は良質の頁岩の扁平円礫を素材とした小型の未製品である。平面形は隅丸長方形をなす。頭には剥離と敲打を加え、刃部には両面から剥離を加えて刃部を形成する。側面は調整剥離を加え、後に敲打を加えて整形している。製作中断が何によるかは明らかでないが、頭部の剥離がやや大きいことが原因かとも考えられる。形状からは扁平片刃石斧の未製品と考えて良い資料である。長9.0cm、幅2.7~4.9cm、厚2.4cm、重量131g。2-30は頁岩製の小型の扁平片刃石斧である。完形品、全体形は短冊形をなすが、頭部は台形状に敲打を加えて調整している。全体に良く研磨されるが、部分的に剥離痕を残している。刃部は片刃をなし、使用による小さな刃こぼれが顕著で、強く研磨される面には改めて研磨を加えており、他の研磨とは著しく異なる。研磨痕は細かい条線として明瞭に残っている。なお、



第96图 4 c 層出土石器実測図VI



第97图 4c層出土石器实测图VII

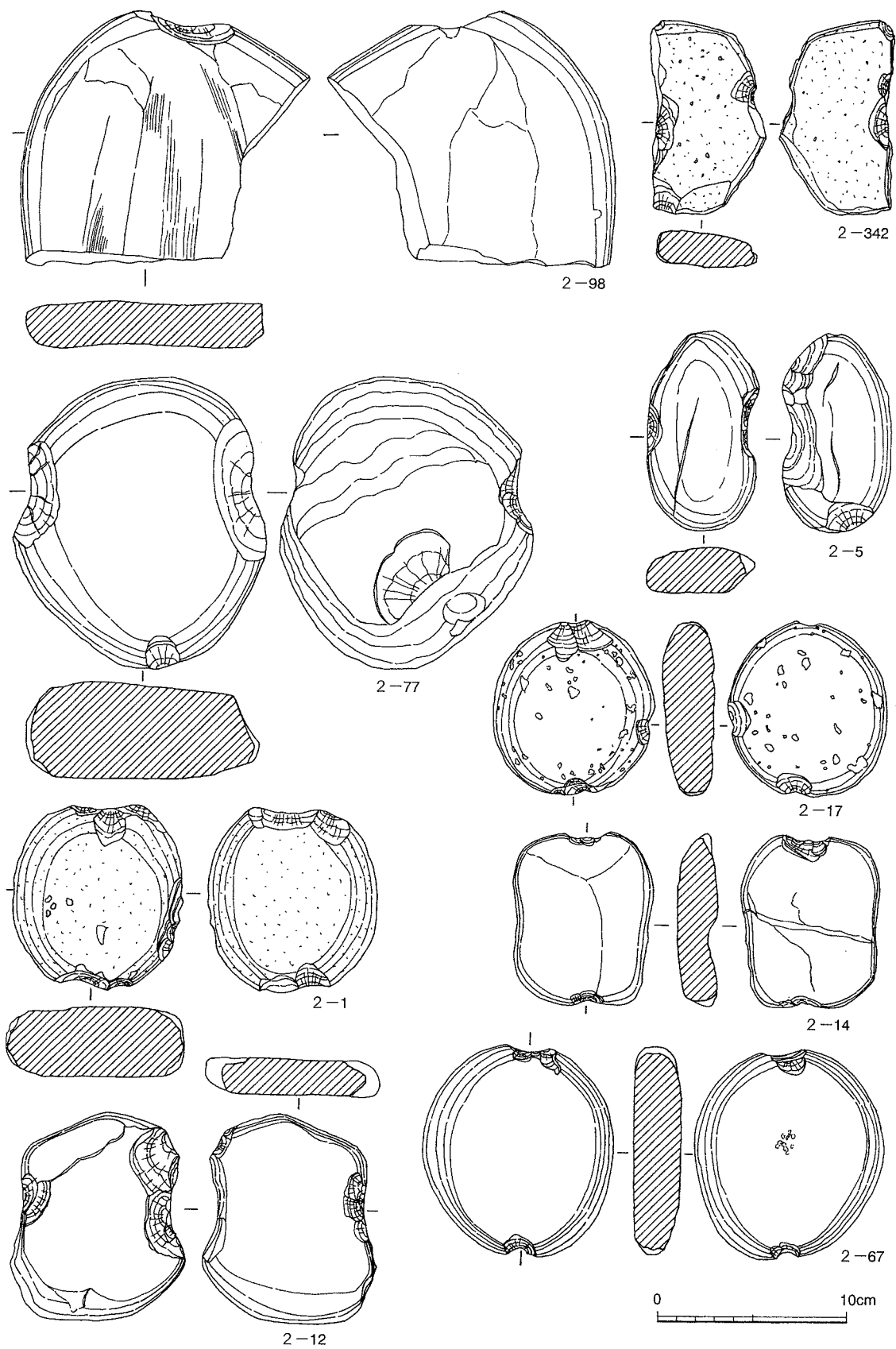


第98图 4c層出土石器实测图Ⅷ

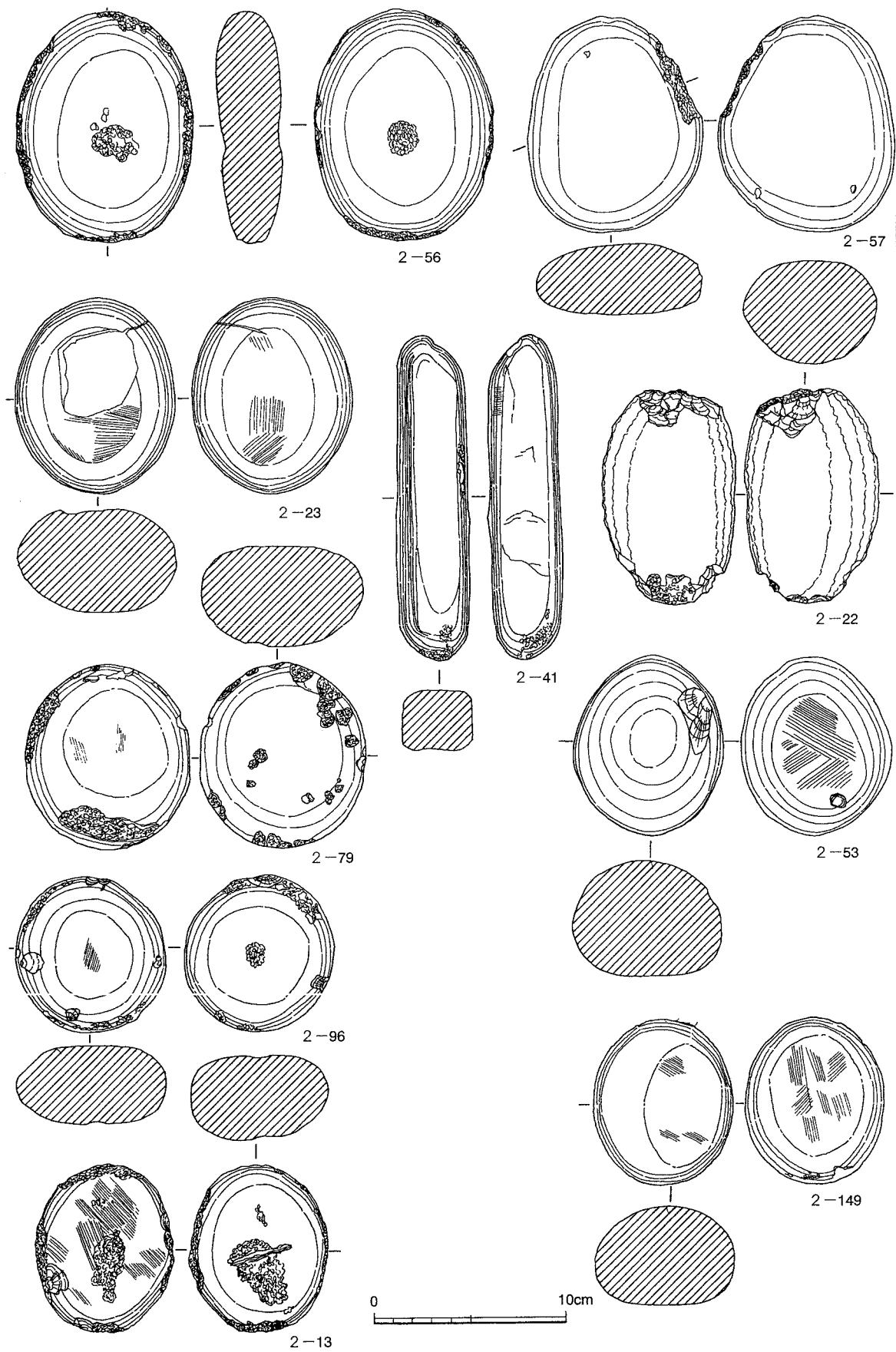
石斧の中位より側辺部や面上部に齧歯類動物（ネズミか？）によるカジリ痕が顕著に残っている。長7.8cm、幅4.9cm、厚1.5cm、重量74g。

第97図は双角状礫石器、礫器を図示した。2-146は頁岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器である。平面形は逆台形状をなす。上辺の片側に片寄って敲打による抉りが入れられ、両面に剥離がみられる。抉りは深さ0.8cm、長さ5.0cm。相対する辺にも両面から剥離が加えられている。長8.9cm、幅9.8cm、厚1.7cm～2.9cm、重量256g。2-154は安山岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器である。平面形は隅丸長方形、礫の周辺に細かい剥離を加え整形している。長軸の一边に敲打によって抉りをつくり出している。抉りは長さ5.2cm、深さ0.9cm。抉り部分には敲打によって両面にも剥離がおよぶ。敲打面は丸くつぶれている。抉りの両端の突起部分に使用痕はみられない。長6.9cm、幅9.8cm、厚2.1～2.4cm、重量225g。包-2-26は安山岩の小さな礫を利用した双角状礫石器である。平面形は逆台形状をなし、長辺に片面から敲打を加え抉りがつくり出される。抉りは長さ5.6cm、深さ0.8cm。抉り部分の他、側辺にわずかに剥離が加えられるが、大部分は自然礫のままである。長5.9cm、幅7.2cm、厚3.6cm、重量162g。2-340は硬砂岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器である。平面形は隅丸長方形をなす。短軸の相対する二辺に両面から剥離を加えている。特に上辺には敲打を加えて抉りがつくり出される。抉りは長さ5.0cm、深さ0.8cm、抉りの両端の突起部分は使用により磨滅している。側辺の一边に片面から整形の剥離が加えられる。長10.1cm、幅8.3cm、厚2.5cm、重量314g。2-29は玄武岩の扁平円礫を利用した礫石器である。平面形は不整の隅丸長方形をなす。長軸の一边に片面より剥離を加えて、抉りと突起部をつくり出している。抉りは長さ5.2cm、深さ1.5cm、他の例と異なり抉り部への敲打は顕著でない。突起部は基部の幅3.0cm、高さ1.5cm。突起部には使用痕は認められない。長7.5cm、幅12.3cm、厚2.7～3.2cm、重量508g。1-48は頁岩の円礫を利用した礫石器である。円礫両端部より打割を加え、残った残骸の一边に片面から剥離を加え、刃部を形成している。刃部にわずかに摩耗痕が認められる。刃部と打割以外には円礫の自然面を残している。長7.9cm、幅6.6cm、厚0.4cm～3.7cm、重量178g。

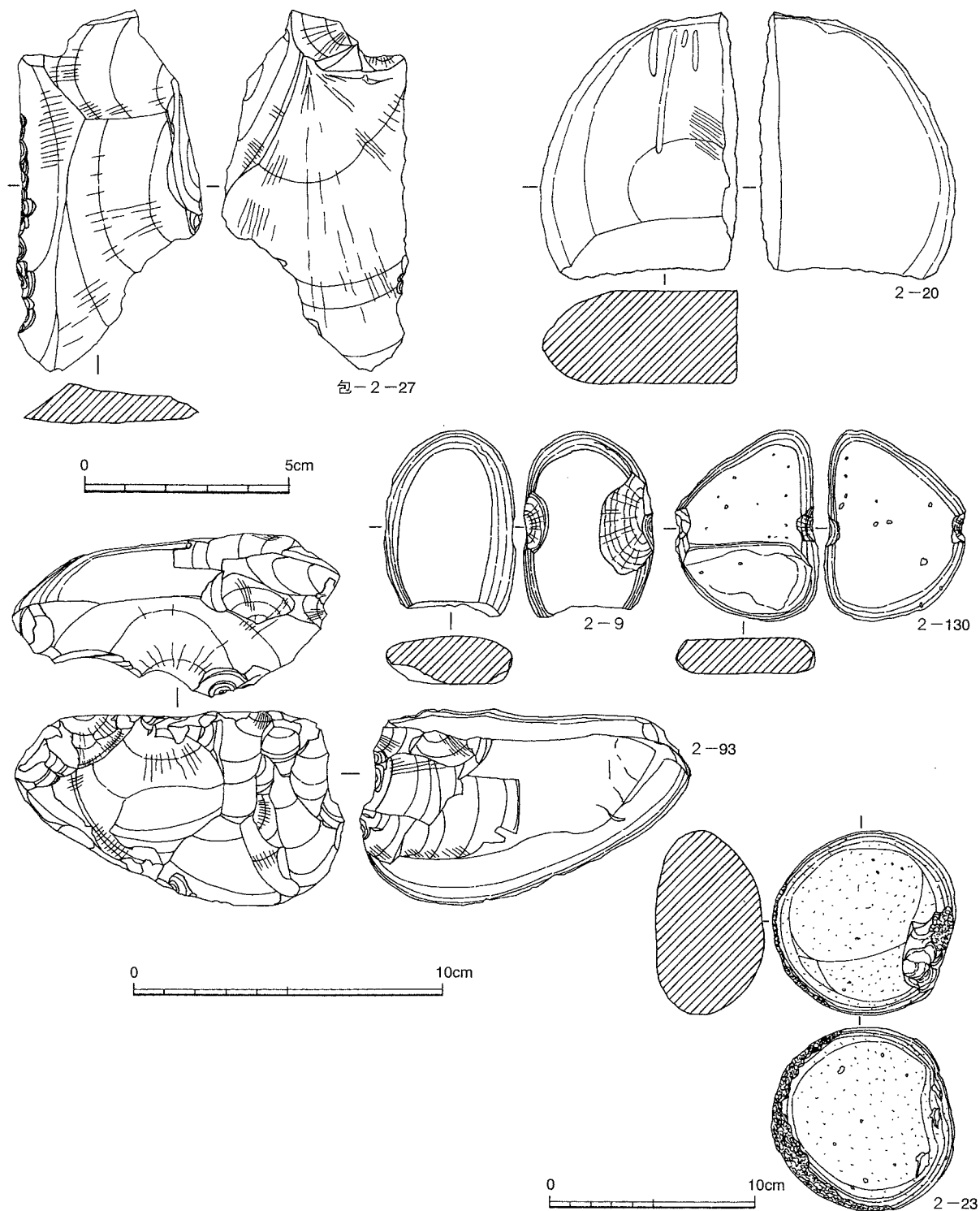
第98図は双角状礫石器、礫石器、石錘を図示した。2-66は頁岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器である。平面形は隅丸の三角形をなす。三辺に敲打とそれに伴う剥離が施される。特に上辺の敲打は顕著で、大きな抉りがつくり出される。抉りは長さ7.1cm、深さ0.8cm。抉りの両端の突起部にも敲打が加えられ、使用痕とみられる磨滅がみられる。他の二辺は抉りはほとんどみられない。表裏面には自然面を多く残している。長10.1cm、幅10.6cm、厚3.8cm、重量476g。2-94は安山岩の円礫を利用した礫石器である。平面形は略長方形をなす。長軸の一边を除いた三辺に敲打による剥離が加えられている。特に長軸の一边に加えられた敲打が顕著であり、浅い抉りができ、その両端は突起状に尖る。双角状石器の初期段階の石器とみられる。突起部には使用による磨滅がみられる。長6.8cm、幅8.2cm、厚3.9cm、重量279g。他は扁平円礫を利用した打欠きの石錘である。2-21は火成岩を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から抉りを入れる。長11.1cm、幅8.4cm、厚2.0～2.6cm、重量320g。2-200は砂岩の礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に片面から剥離を加え抉りをつくり出す。抉りは大きく明確である。抉りに紐ずれの痕跡が残る。長9.4cm、幅7.6cm、厚1.8cm、重量189g。2-156は砂岩の扁平礫を利用。平面形は長楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に一边は両面から、他の辺は片面から剥離を加え抉りを入れる。長9.8cm、幅5.9cm、厚1.2cm、重量107g。2-74は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に錯行関係で剥離を加え抉りをつくり出す。長9.4cm、幅7.7cm、厚1.6～2.7cm、重量210g。2-11は火成岩の扁平礫を利用。平面形は方形をなす。相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りの側面部分は磨滅し、研磨したようになっている。長8.1cm、幅8.1cm、厚1.5cm、重量210g。2-7は砂岩の礫を利用。平面形は隅丸の逆台形をなす。上下辺の中央部に両



第99图 4c層出土石器実測図区



第100图 4c層出土石器实测图X



第101図 4c層出土石器実測図XI

面から剥離を加え抉りをつくり出す。長6.9cm、幅7.0cm、厚1.1~1.4cm、重量82g。2-341は火成岩の礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え、抉りをつくり出す。抉りは敲打で整形され、深く明確である。長9.5cm、幅7.8cm、厚3.2cm、重量268g。

第99図は石皿（砥石）、石錘を図示した。2-98は大型の砂岩の扁平礫を利用した石皿（砥石）である。元来は平面形は楕円形をしていたと考えられるが、半分を欠損する。片面が石皿あるいは砥石

として使用されている。使用面は平坦であり、石皿特有の凹みはない。長 $13.2\text{cm} + \alpha$ 、幅 $15.1\text{cm} + \alpha$ 、厚 2.4cm 、重量 $616\text{g} + \alpha$ 。他は扁平円礫に打欠きを加えた石錘である。2-342は火成岩の礫を利用。平面形は不整長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に一辺は両面から、他辺は片面から剥離を加えて抉りをつくり出すが、抉りはあまり明瞭でない。長 10.1cm 、幅 5.9cm 、厚 1.8cm 、重量 160g 。2-77は大型の砂岩の礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に、一辺は両面から、他辺は片面から大きな剥離を加え抉りをつくり出す。長 15.0cm 、幅 13.3cm 、厚 5.1cm 、重量 1320g 。2-5は硬質砂岩の礫を利用。平面形は長楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離を加えて抉りをつくり出す。両面からの剥離は大きく抉りも大きく明瞭であるが、片面からの剥離は抉りが不明瞭である。長 10.3cm 、幅 5.8cm 、厚 2.4cm 、重量 211g 。2-17は安山岩の礫を利用。平面形は円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に、一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離を加え抉りをつくり出す。また、他の一辺にも両面から剥離を加え抉りをつくり出している。3ヶ所に抉りをもつ。長 9.1cm 、幅 8.5cm 、厚 2.7cm 、重量 252g 。2-1は集石岩の礫を利用。平面形は円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長 9.7cm 、幅 8.8cm 、厚 3.6cm 、重量 444g 。2-14は安山岩の礫を利用。平面形は隅丸の長方形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長 9.0cm 、幅 7.0cm 、厚 2.2cm 、重量 212g 。2-12は砂岩の礫を利用。平面形は不整長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離を加え抉りをつくり出す。長 10.8cm 、幅 9.1cm 、厚 1.9cm 、重量 283g 。2-67は硬砂岩の礫を利用。平面形は円形をなす。短軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りは敲打によって整形され、深く明瞭である。片面の中央部にわずかであるが敲打痕が確認できる。長 11.0cm 、幅 10.0cm 、厚 2.5cm 、重量 416g 。

第100図は磨石、凹石、叩石を図示した。2-56は砂岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。磨石、凹石、叩石を併用した石器である。両面の平坦面が磨石として使用され、さらにその中心部に敲打を加えられ凹みをつくり出しているが凹みは浅い。また、側面には敲打痕が顕著で叩石としても使用されている。長 11.8cm 、幅 9.2cm 、厚 3.3cm 、重量 538g 。2-57は安山岩の扁平円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の一辺の上半部の側面に敲打を加える。敲打は顕著で、敲打部は礫のカーブが失われ直線的になる。長 11.2cm 、幅 9.2cm 、厚 3.6cm 、重量 469g 。2-23は安山岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。両面の平坦部が磨石として使用されているが、一面には大きい剥落部がある。長 10.2cm 、幅 8.4cm 、厚 5.4cm 、重量 538g 。2-41は砂岩の棒状の礫を利用。断面形は隅丸長方形をなす。一方の先端部と胴中位の一部に敲打痕がみられる。叩石あるいはハンマーとして使用されたとみられるが、敲打痕は顕著でなく、使用が少なかったと考えられる。長 16.9cm 、幅 3.6cm 、厚 3.1cm 、重量 350g 。2-22は安山岩のやや細長い円礫を利用した叩石である。短辺の両端部が打面として使用され大きな剥離があり、打痕によって平坦面を形成している。長 11.0cm 、幅 7.0cm 、厚 5.4cm 、重量 471g 。断面形は楕円形をなす。2-79は安山岩の円礫を利用した磨石である。平面形は円形で一面が磨石として使用され平坦面になっている。側面は叩石として使用され、打痕が顕著に認められる。長径 9.6cm 、短径 8.6cm 、厚 5.2cm 、重量 510g 。断面形は楕円形をなす。2-96は砂岩の円礫を利用。平面形は円形をなす。磨石、凹石、叩石を併用した石器である。平坦部の一面が磨石として使用され、その反対面の中心部に敲打を加えて凹部をつくり出すが、凹部は浅い。側面の相対する2ヶ所に敲打痕が顕著に認められる。長 8.0cm 、幅 7.9cm 、厚 4.0cm 、重量 354g 。2-53は砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。平坦部の一面が磨石として使用されている。磨面には不定方向の条線が観察できる。長 9.3cm 、幅 7.9cm 、厚 5.9cm 、重量 508g 。2-13は砂岩の円礫を利用した磨石、凹石、叩石を併用した石器である。平面形は楕円形をなす。表裏二面の平坦部が磨石として使用され、磨面には同一方向の条線が観

察できる。また、この両面の中央部には敲打を加えられ、浅い凹みがつくり出される。側面には相対する四辺に敲打痕が顕著に認められ、その部分は平坦になり、隣接する敲打痕との間に空白部をもつ。長8.6cm、幅7.2cm、厚4.4cm、重量370g。2-149は多孔質の玄武岩の円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形で、表裏二面が使用されている。二面共に磨かれ平坦面をつくり出している。長8.5cm、短径7.3cm、厚4.9cm、断面形は楕円形をなす。重量454gを計る。

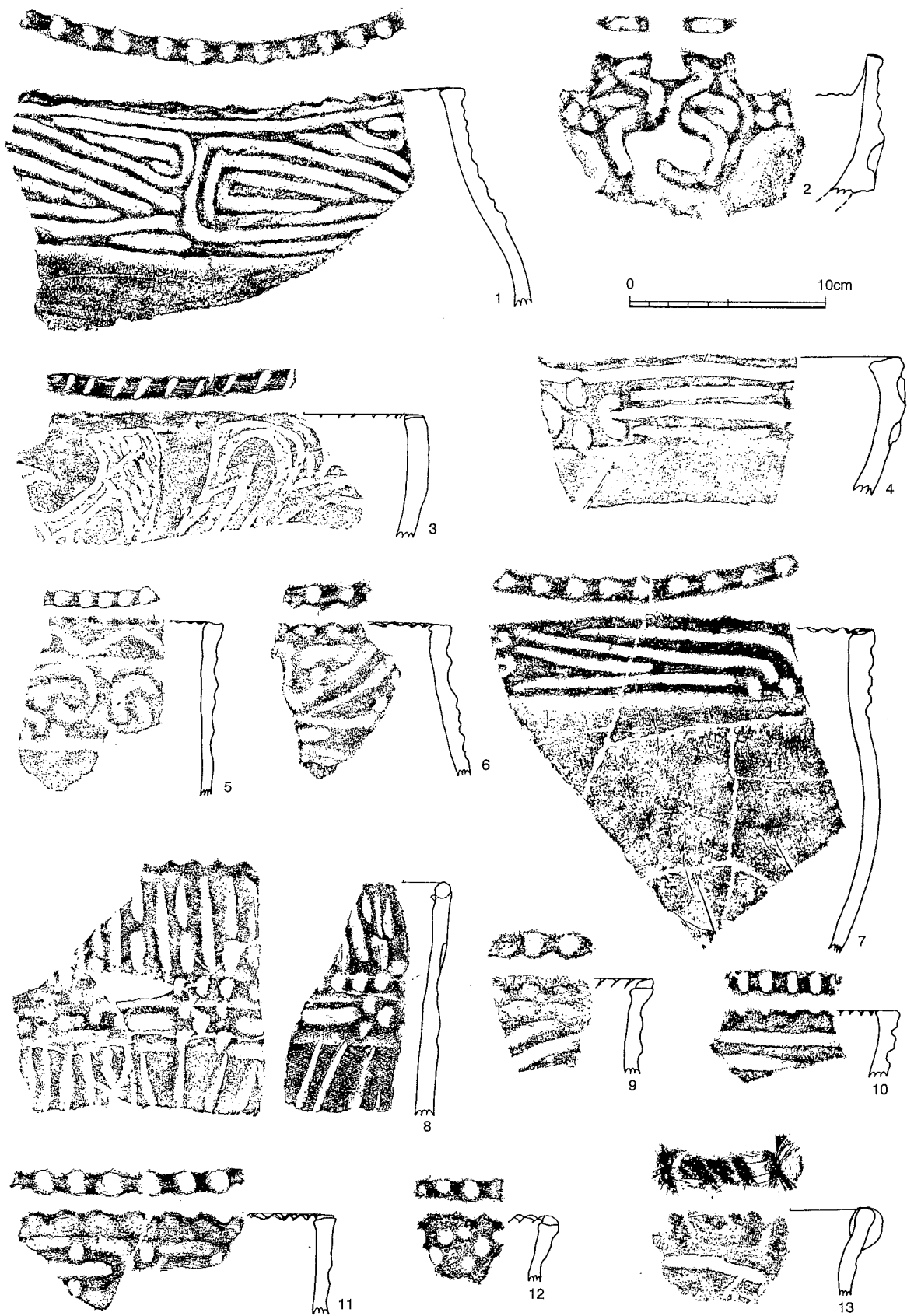
第101図はスクレイパー、石皿、石錘、石核、叩石を図示した。包-2-27はサヌカイト製のスクレイパーである。不定形の剥片を素材として、長軸の一辺に片面から剥離を加えて刃部を形成する。長8.7cm、幅4.5cm、厚1.0cm、重量39g。2-20は砂岩の大型の扁平礫を利用した石皿であるが、割れて全体の4分の1程度の破片になっていて、破損後に砥石に利用されている。全体の平面形は楕円形をなしていたとみられ、現存部は不整三角形をしている。一面が石皿として使用されていたと考えられ、中央部が良く研磨されている。縁の部分には数条の溝状の研磨痕が認められ、砥石としても利用されたことがわかる。現存長12.8cm、現存幅9.5cm、厚さ4.5cm、現存重量736g。2-9は砂岩の扁平礫を利用した石錘である。平面形は元来は楕円形であったと考えられるが、一部欠損している。石錘として利用されたのは欠損後である。長軸の相対する二辺の中央部に片面から剥離を加え抉りをつくり出すが明瞭でない。長8.9cm、幅5.8cm、厚2.3cm、重量194g。2-130は多孔質の火成岩の扁平礫を利用した石錘である。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りは敲打を加えて整形する。長9.2cm、幅6.9cm、厚1.8cm、重量134g。2-93は拳大のチャートの円礫を利用した石核である。長軸の一辺を打面として4点の不定形の剥片が剥離されている。さらに剥離面を右に90度回転させ、剥離面を打面として2点の不定形剥片が剥離されている。長10.8cm、幅5.3cm、厚5.3cm、重量286g。2-23は安山岩の円礫を利用した叩石である。平面形は円形をなす。長軸の相対する二辺に敲打痕がある。一辺は剥離の上に敲打を加えたものであるが、他は側面の半周に敲打痕がある。長8.9cm、幅8.9cm、厚7.3cm、重量496g。

4、第4層出土の遺物

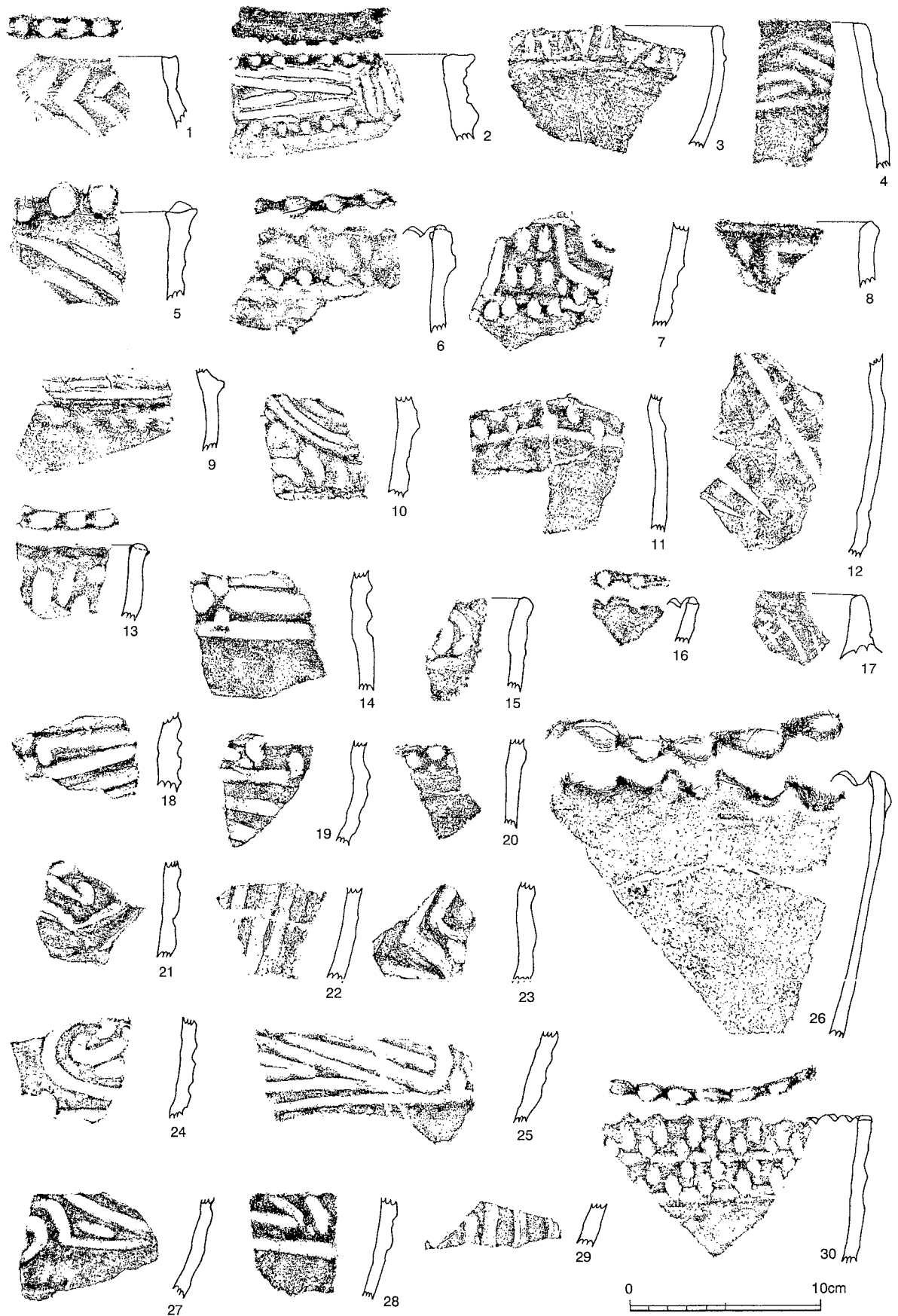
(1) 土器 (第102～103図)

第102図1～13はいずれも口縁部の破片である。1は前節で説明した第90図8の土器と同一個体である。第1次調査B-1区出土土器である。2は口縁部に二つの突起を持つ浅鉢形土器と考えられる。突起部分の頂部には凹線が入れられている。口唇部には刻みが入れられ、口縁部文様帯は突起部分を除いては幅2cm前後で、肥厚し、押点文が施文されている。突起の下には勾玉が向かい合ったような状態で粘土帯が貼り付けられている。粘土帯には凹線が入れられ、勾玉の孔にあたる部分を取り囲むように凹線が入れられ、全体として人の顔を表現しているようにも見える。3は深鉢形土器の口縁部破片である。丸味をもって立ち上がる。口唇部には細い棒状工具によって浅い斜めの刻みが入れられる。他の土器と異なり、ヘラ描きによる絵画的な文様が描かれている。何を表現したものかは明らかにできないが、今後検討を加えることにする。4は第90図5の土器と同一個体である。胎土、文様等から阿高式土器に先行する可能性もある。5は口縁部はほぼ直立する。口唇部に棒状工具によって浅い刻み目が入れられる。口縁部文様帯は2段に施文されている。1段目と2段目文様帯の下端に凹線1条がめぐらされ区画されている。1段目文様帯には山形の凹線文が施文され、2段目文様帯にはC字状文を入組み状に、さらに押点を組み合わせ文様としている。6は口縁部がわずかに内傾しながら立ち上がる。口唇部には棒状工具で刻み目を入れる。口縁部文様帯は幅広い。口縁直下に押点文を並列施文する。その下は直線と曲線の凹線を組み合わせて文様を構成しているが全体の文様は明らかでない。7は胴部が丸味をもって膨らむ。口縁部は外傾しながら直線的にのびる。文様帯はわずかに肥厚し、下端部に段を形成している。文様は先端がワラビ状に曲がった凹線、直線的な凹線、押点を組み合わせ施文する。口唇部には押点によって刻みを入れている。内面はヘラナデ調整であるが、条線が斜めに明瞭に残っている。8は第90図2と同一個体である。破片で若干異なるものがあるがいずれも同一個体とみてよいものである。1、2次調査の破片が接合している。9は口縁部がわずかに外反する。口唇部には棒状工具により刻み目が入れられる。口縁直下には押点文を施文する。その下には凹線文を横位、斜位に施文している。10は口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がる。口唇部にはやや細い棒状工具によりの確に刻みが施文されている。口縁直下には狭い無文帯を置き、凹線1条をめぐらし区画している。口縁部文様として区画の凹線に平行した凹線が施文されるが、文様の全体の構成は不明。11は口縁部が直立する。口唇部には棒状工具により深い刻み目が入れられ、口縁は波状をなす。口縁直下には狭い無文帯があり、凹線1条をめぐらし区画している。間隔を持ってさらに下に凹線1条をめぐらし文様帯を区画している。文様帯には短直線の凹線と押点を組み合わせ文様を構成している。12は口縁部は外反しながら立ち上がる。口唇部には棒状工具により、刻み目が施される。文様帯には押点文が施文されるが、全体の文様構成は明らかでない。13は口縁部に突起がある。突起は粘土紐を巻きつけたものでこぶ状になっている。口縁下には無文帯を置いている。凹線1条をめぐらし文様帯を区画している。文様帯には細い沈線が施文されているが、文様構成は不明。

第103図1～6、8、9、11、13、15～17、26は口縁部破片である。1は口唇部に棒状工具で浅い刻み目が入れられる。口縁部文様帯には羽状文が施文される。2は口唇部と口縁部文様帯の下端に刻み目突帯めぐらし、2単位の凹線を縦横に施文する。3は浅鉢形の土器である。口縁部に突起がつくが欠損している。口縁部文様帯はわずかに肥厚する。三角形に面取りされた文様を並列施文している。体部はヘラ削り状の調整である。文様を面取りする手法は南福寺式土器の特徴である。本資料が阿高式土器に共伴するのか、上層から混入したものか検討が必要である。4は口縁に直線と曲線を組み合わせた文様を施文している。5は口唇部に棒状工具により刻み目を入れている。平行した凹線を斜位に施文している。6は口唇部に刻み目を入れ、口縁は波状をなす。口縁部文様帯は肥厚し、文様部下



第102图 4層出土土器実測图 I



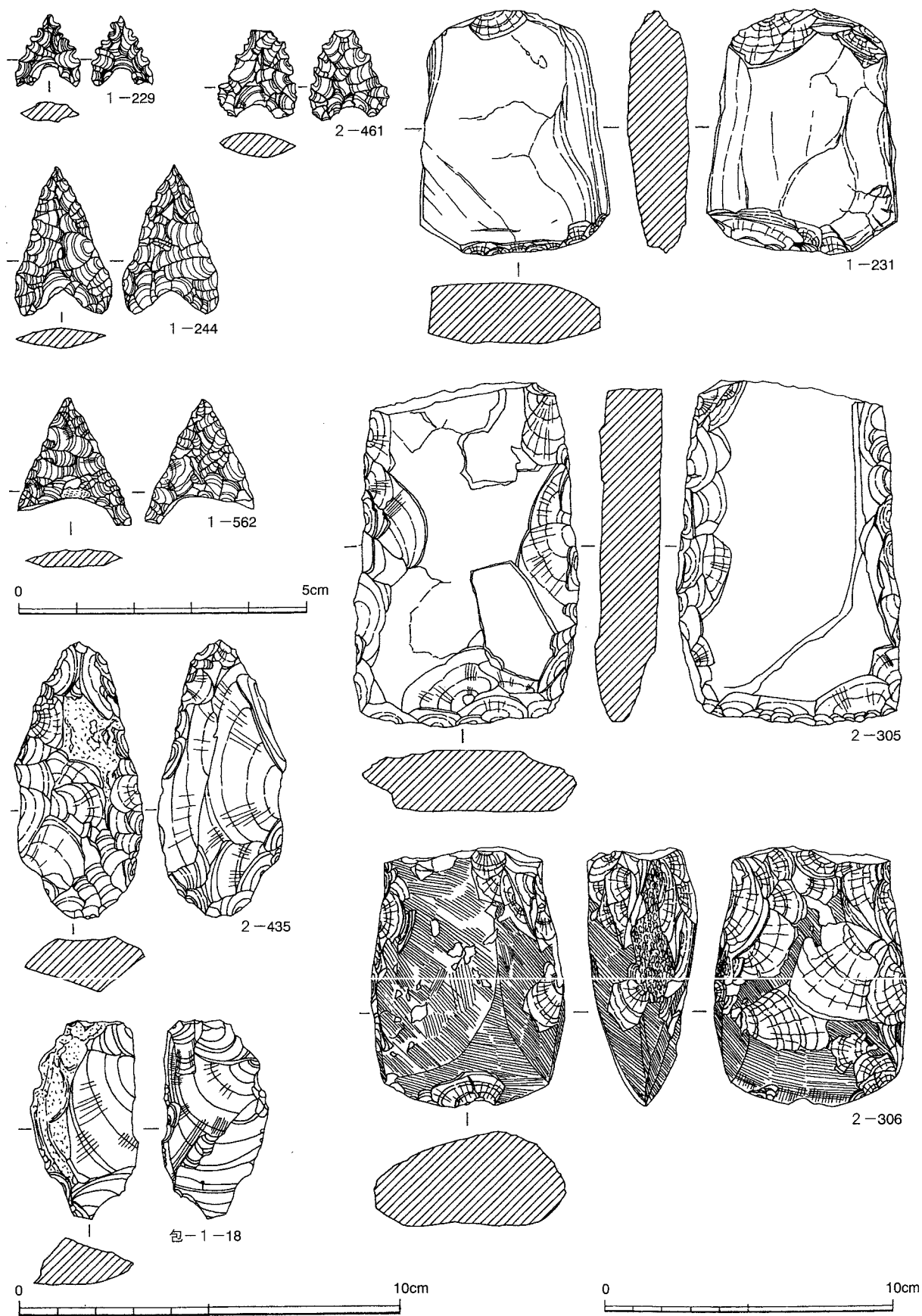
第103图 4層出土土器実測図Ⅱ

端に刻み目を施文し、文様帯には凹線と押点を施文している。7、8は曲線と押点を組み合わせている。7は上端に凹線1条がめぐらされる。曲線に囲まれた押点文は3段に施文されている。9は口縁下に刻み目の突帯1条をめぐらしている。10は口縁部が山形に隆起するが上部を欠損する。口縁部は肥厚しその部分に口縁に沿って凹線が施文されている。その下には短曲線と押点を組み合わせた文様を施文しているが文様構成は明らかでない。11は胴部の無文帯との境に凹線1条をめぐらし、文様帯には押点文が2段に施文されている。12は胴部破片。凹線が不規則に斜位に4条施文されている。13は口唇部にヘラで刻み目を入れるが浅い。文様は押点と短線を組み合わせているが構成は明らかでない。14は胴部の無文帯の境に凹線1条をめぐらし区画している。押点を中心文様に平行した凹線を組み合わせている。15は口縁文様帯に逆C字状文を並列施文している。16は無文で、口唇部に棒状工具により刻み目を入れている。17は沈線を施文しているが、文様構成は不明。18～25、27～29は胴部あるいは口縁部に近い破片である。18は押点と先端がワラビ状に曲がった凹線、直線的な凹線を文様としている。19は胴部破片。凹線と押点を組み合わせて文様としているが、構成は不明。内面は表面お文様が反映されて凹凸が著しい。阿高式土器の一つの特徴でもある。20は口縁部を欠損するが、文様帯は肥厚し下端に段が形成される。文様帯には小さい押点文が施文される。21は上部に凹線1条がめぐらされ、その下に先端がワラビ状に曲がった凹線、鈍角に屈曲した凹線を組み合わせて文様を構成するが、さらにその下に曲線の凹線を施文しているが、文様は不明。22は胴下半部の破片。斜行した凹線が3条施文されている。23は直線、ほぼ直角に屈曲した凹線と押点を組み合わせて文様としている。24は下端に凹線1条をめぐらし、左側には立てに凹線を施文している。その内側には曲線を組み合わせた入組みの渦巻き文を配している。25は口縁端部を欠損している。口縁文様帯はわずかに肥厚している。胴の無文部との境には凹線1条をめぐらし区画している。文様帯は直線と曲線、押点を組み合わせ三角形を基調とした文様を施文している。26は無文の深鉢形土器である。口唇部には棒状工具によって深い刻み目を入れて口縁は波状をなす。27は胴部破片。文様帯の区画線はない。曲線、短直線、直線の凹線を組み合わせて文様としている。右側の文様は三角形に区画した中に短直線を施文している。28は口縁端部を欠損している。口縁部文様帯はわずかに肥厚している。無文部との境に凹線1条をめぐらしている。文様は短い直線を組み合わせている。29は胴下半部の破片である。縦のヘラによる凹線が4条施文されている。30は口唇部に棒状工具により、深い刻み目が入られ口縁は波状をなす。文様帯は幅広く、2段に施文され、それぞれ凹線をめぐらして区画している。文様はそれぞれ2段の押点文が施文されている。押点文には爪のあとが明瞭にのこっている。

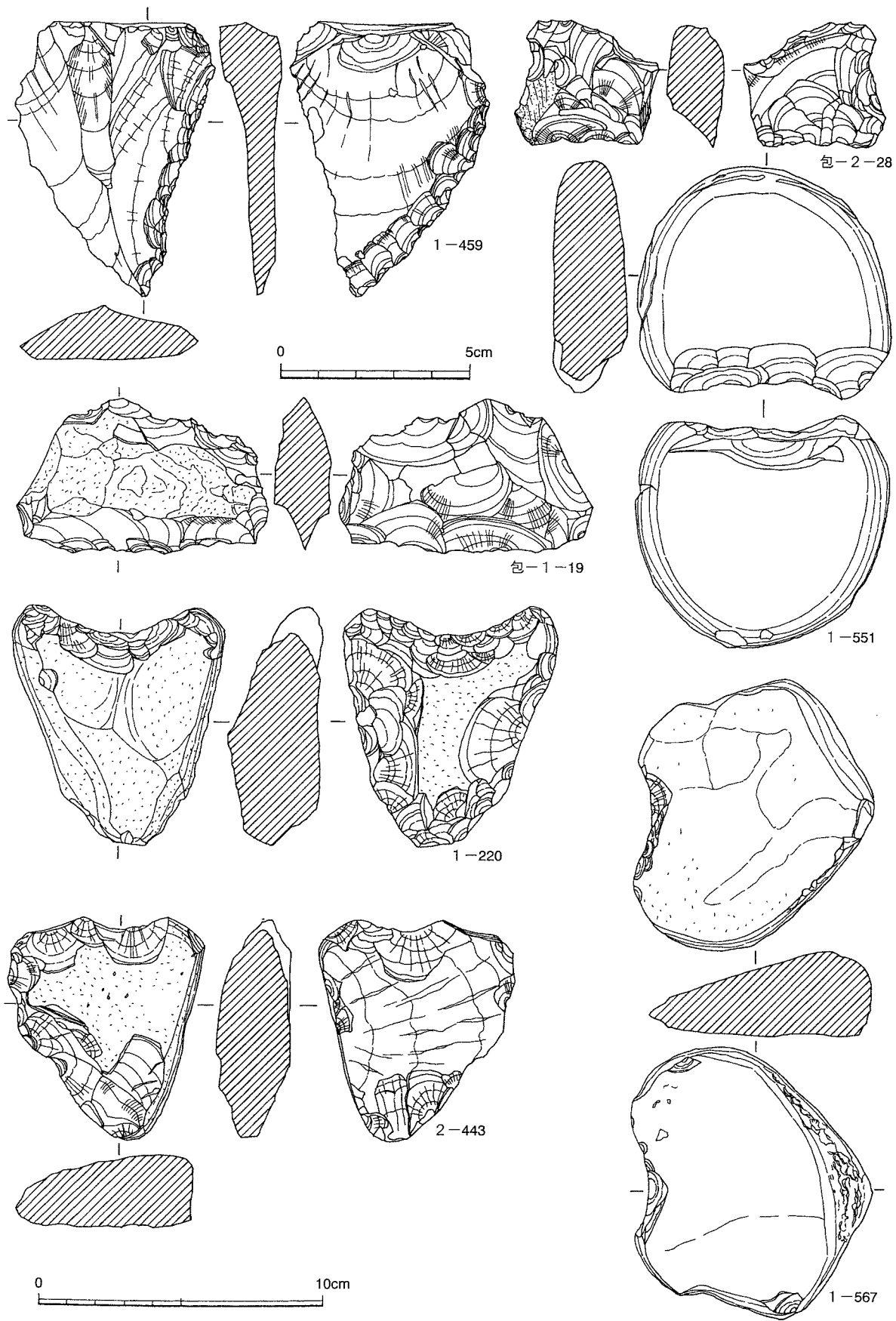
(2) 石器

同層出土の石器には、石鏃、石槍、磨製石斧、打製石斧、スクレイパー、双角状礫石器、礫器、石錘、有溝石錘、磨石、凹石、砥石、石核等がある。

第104図に石鏃、石槍、磨製石斧、同未製品打製石斧を図示した。1-229は黒曜石（腰岳）製石鏃である。小型の石鏃、正三角形に近く基部の抉りは深い。側辺には鋸歯列をつくり出す。長1.3cm、幅1.1cm、厚0.3cm、重量0.26g。2-461も黒曜石（腰岳）製石鏃、先端を一部欠損する。側辺には鋸歯列がつくり出される。基部の抉りは浅い。長1.5cm+ α 、幅1.4cm、厚0.4cm。1-244は黒曜石（針尾島）製石鏃、身長で基部に三角形の抉りを入れる。長2.6cm、幅1.7cm、厚0.3cm、重量1.05g。1-562は黒曜石（腰岳）製石鏃、下半部を欠損する。大型の石鏃と考えられる。長2.2cm+ α 、幅2.0cm+ α 、厚0.3cm、重量0.81g。石鏃は押圧剥離で丁寧に制作されている。1-231は硬質の頁岩の扁平礫を素材とした磨製石斧未製品である。平面形は長方形をなし、外形は整形の必要のない礫を選択している。頭部と刃部に剥離を加え整形しているが、製作を中断している。刃部の剥離がステップしているのが原因か。形状からは扁平片刃石斧の製作を意図したものか。長8.5cm、幅5.6～6.6cm、厚2.1cm、重量168g。



第104图 4層出土石器实测图 I

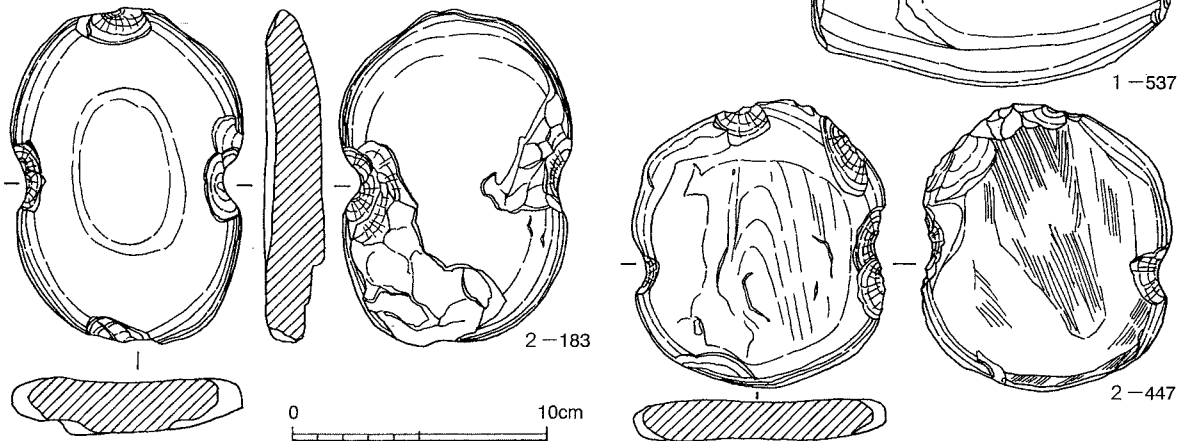
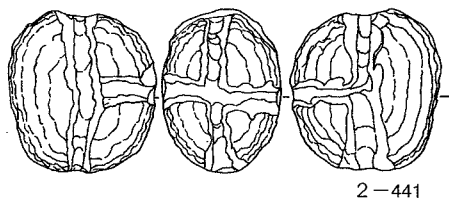
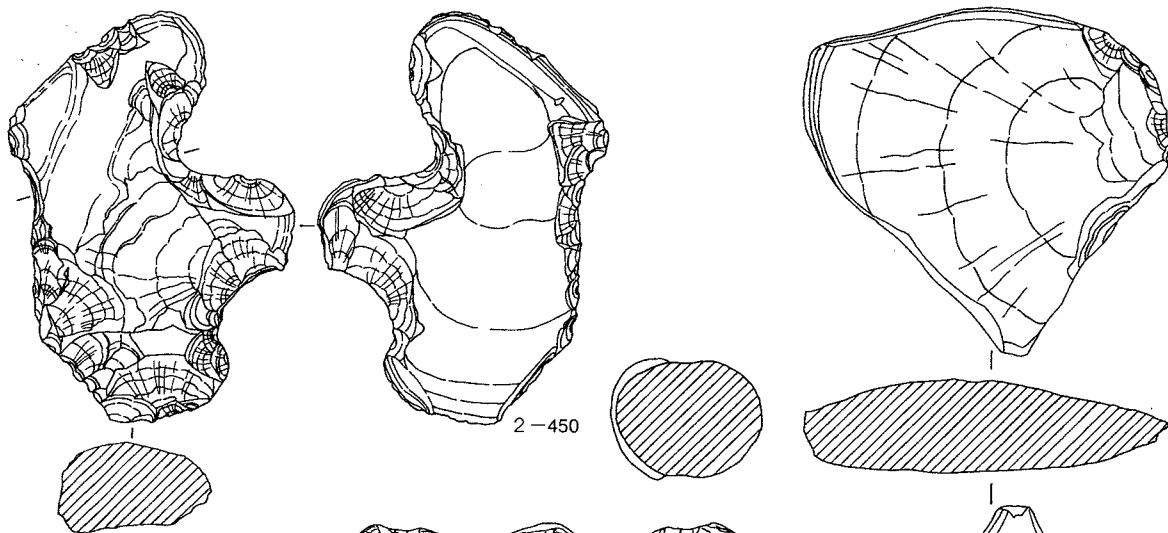
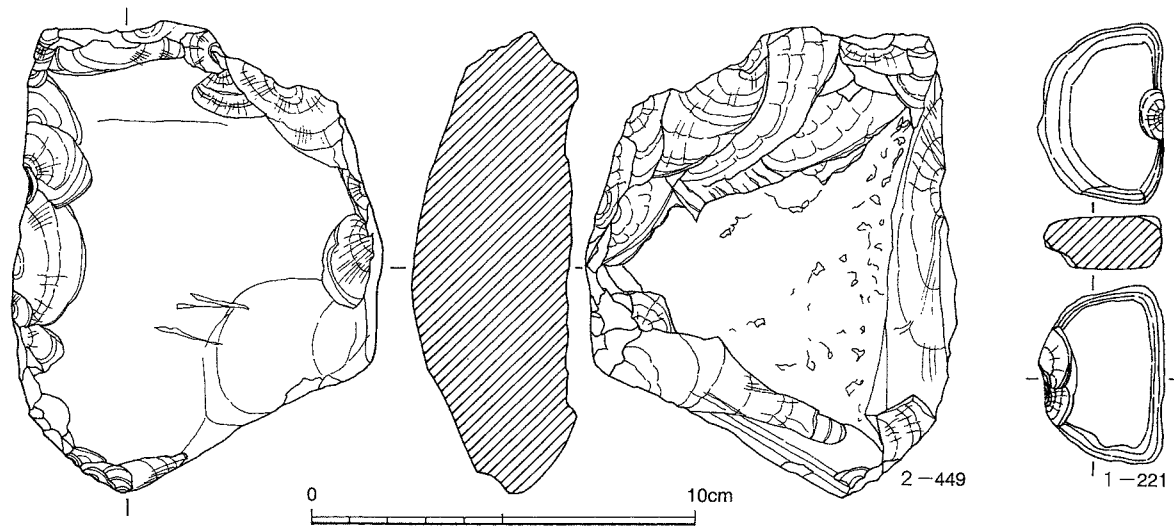


第105图 4層出土石器実測図Ⅱ

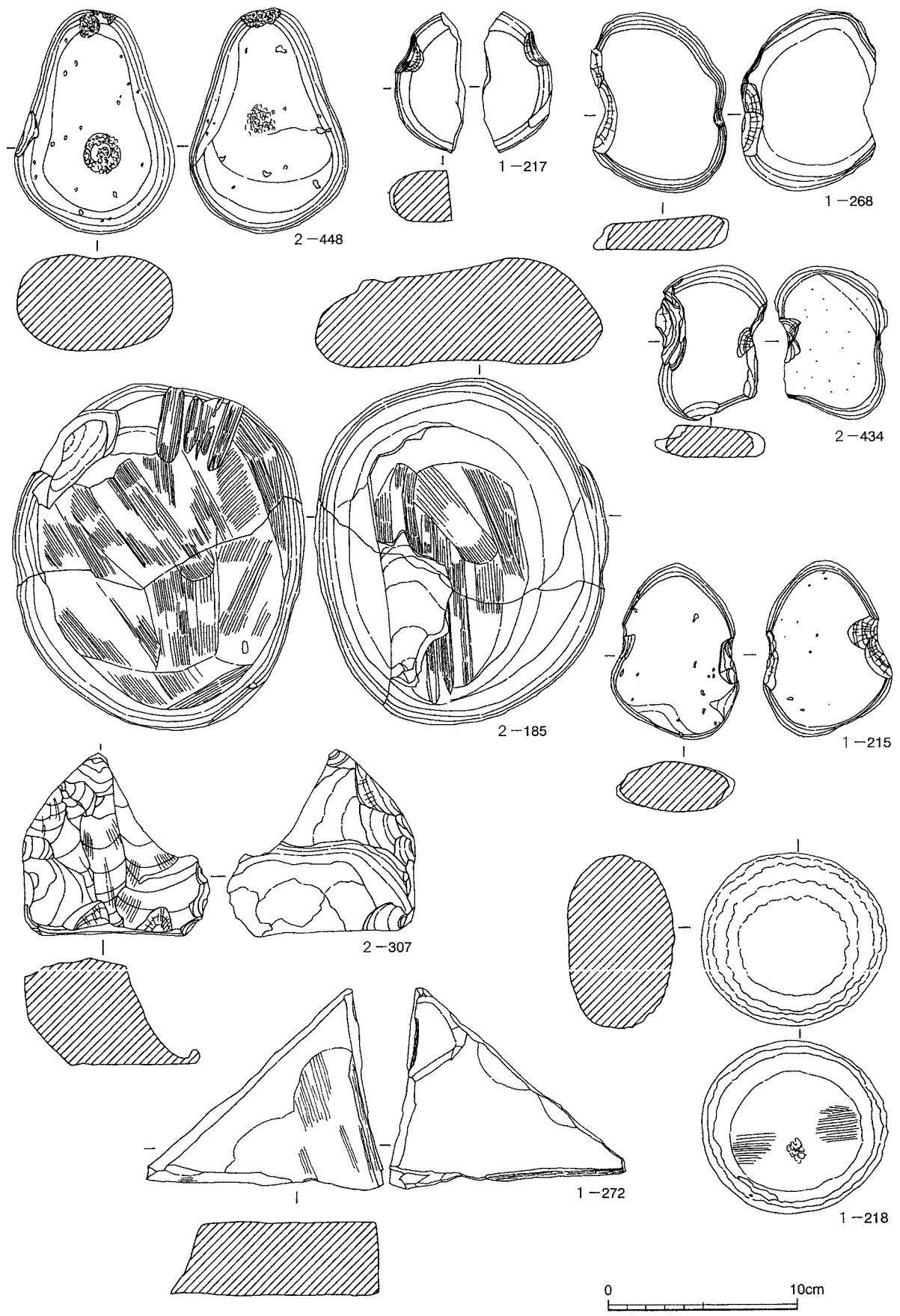
2-305は板状に剥がれる硬質の砂岩を素材とした磨製石斧未製品である。平面形はやや幅広の短冊形をなすが、頭部を欠損する。側辺と刃部には両面から剥離が加えられている。刃部形成にはさらに剥離を進める必要があるが、制作を中断している。頭部欠損が中断の原因であろうか。長11.9cm + α 、幅6.7~7.7cm、厚2.1cm、重量322g + α 。2-435はサヌカイトの横剥ぎの剥片を素材とした石槍である。片面の一部に自然面を残す。全体に側面から剥離を加えて柳葉形に整形している。特に尖頭部には細かい剥離を加えて丁寧につくり出しているが、やや丸味をもっている。長7.2cm、幅3.4cm、厚1.4cm、重量31g。包-1-18は黒曜石の不定形剥片を素材とした使用痕ある剥片である。平面形は不整楕円形となす。長軸の一辺に使用による小さい刃こぼれがみられる。裏面には自然面を残している。長5.0cm、幅2.7cm、厚1.2cm、重量14.34g。2-306は蛇紋岩製の磨製石斧である。胴上半から頭部にかけて欠損する。平面形は揆形をなすと考えられる。全体は剥離を加えて整形し、敲打を加えて調整後、研磨を加えている。片面はほぼ全面に研磨がおよんでいるが、他の片面は剥離面を多く残し、研磨は刃部に集中している。側面は敲打を加えて調整している。刃部は両面から研ぎ込まれ両刃をなす。刃部の先端には使用による縦位の擦痕が残る。長8.9cm、幅5.5~6.7cm、厚3.8cm。

第105図はスクレイパー、双角状礫石器、礫石器を図示した。2-459はサヌカイトの剥片を素材としたスクレイパーである。剥片は風化が著しく白灰色をなし、平面形は三角形をなす。打面は平坦、剥片の両側に錯行関係で剥離を加え刃部を形成している。先端部は尖頭状に尖る。長7.2cm、幅4.3cm、厚0.7~1.5cm、重量49g。包-2-28はサヌカイトの不定形の剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は略長方形。長軸の一辺に両面から剥離を加えて刃部を形成する。長3.3cm、幅3.8cm、厚1.6cm、重量19g。包-1-19は頁岩の残核を素材としたスクレイパーである。片面には自然面を残す。平面形は不整長方形。長軸の一辺に片面か細かい剥離を加えて刃部を形成する。長4.1cm、幅6.6cm、厚1.5cm、重量42g。1-551は砂岩の扁平円礫を利用した礫石器である。円礫を半割し、割れ口に両面から剥離を加えるが、剥離部分には敲打痕はみられない。加工端部に小さな尖頭部がつくり出されている。扱いはみられないが、双角状礫石器の初期段階の資料とみて良いものであろう。長8.1cm、幅9.0cm、厚2.6cm、重量265g。1-220は安山岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器である。平面形は略三角形をなす。一辺の敲打を加え扱いをつくり出す。敲打によって扱い部分の両面には剥離がみられる。扱い部は敲打によって平坦部をつくる。扱い部は長さ5.2cm、深さ1.0cm。扱いの両端には突起部ができ、共に使用によって磨滅し丸くなっている。側辺の二辺には片面から剥離が加えられ、整形されている。両面に自然面を大きく残している。双角状礫石器の典型例である。長7.3cm、幅7.5cm、厚3.2cm、重量215g。2-443は玄武岩の扁平円礫を利用した小型の双角状礫石器である。円礫を半割して加工を施したものである。平面形は三角形をなす。一辺に敲打を加え扱いを入れる。扱いは長さ2.6cm、深さ0.4cm。他の二辺には調整の剥離を加えている。長7.7cm、幅7.0cm、厚2.0~2.5cm、重量169g。1-567は安山岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器で、一部、叩石としても使用されている。平面形は不整楕円形をなす。長軸の上半の一部に両面から剥離が加えられ、扱いがつくり出される。扱いは長さ3.6cm、深さ0.5cm。扱いの反対の辺の側面には敲打痕が認められ叩石としての使用もある。長8.5cm、幅8.6cm、厚1.0~3.0cm、重量249g。

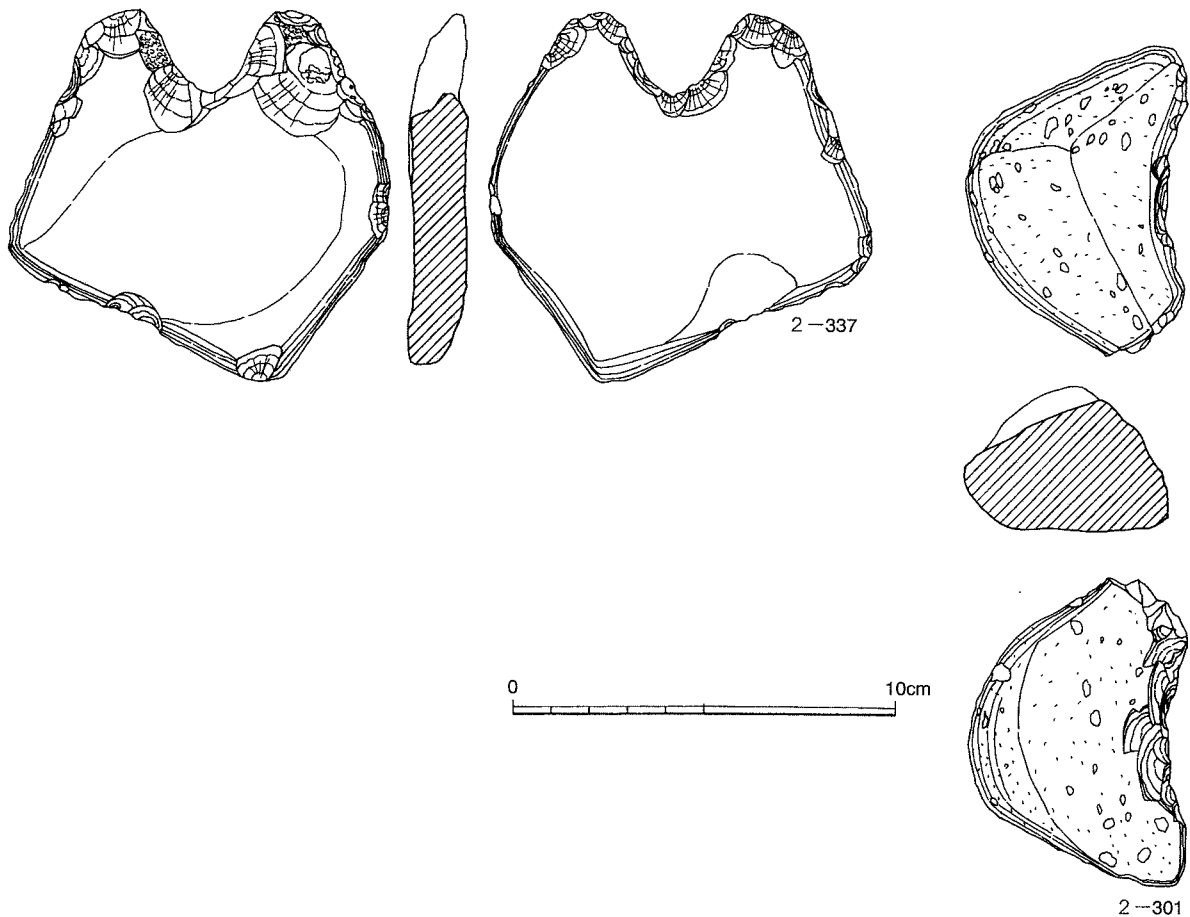
第106図は礫石器、有溝石錘、石錘を図示した。2-449は安山岩の転礫を利用した礫石器である。平面形は台形をなす。各辺に両面から粗い剥離を施し刃部を形成しているが、使用痕は認められない。製作途中のものか。長12.3cm、幅9.8cm、厚4.3cm、重量648g。1-221は砂岩の小型の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に錯行関係で剥離を加え扱いをつくり出す。扱いは明瞭でない。長6.9cm、幅4.9cm、厚2.0cm、重量102g。2-450は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。石材の各辺に剥離、敲打を加え扱い部を二ヶ所につくり出し、



第106图 4层出土石器实测图Ⅲ



第107图 4層出土石器実測図Ⅳ



第108図 4層出土石器実測図V

整形をおこなっている。挟りは敲打によって整えられる。挟り部はそれぞれ長さ4.2cm、深さ2.0cmと長さ2.8cm、深さ0.9cm。深さがきわめて深く、一見、十字形石器との関連が考えられる。長10.5cm、幅6.9cm、厚2.2cm、重量143g。2-441は安山岩の円礫を利用した有溝石錘である。全体を敲打によって整形し、球状に仕上げる。長軸の中央部に敲打によって溝を一周させ、さらに溝によって分けられた半分、長軸の中央部から半周する溝と側面の中央部から長軸に沿って半周する溝を敲打によって入れる。溝は長軸側面で十字形に交わる。長6.2cm、幅5.8cm、厚4.6cm、重量189g。1-537は砂岩の扁平円礫を利用した礫器である。平面形は略三角形をなす。一部に両面から剥離を加え刃部を形成している。長9.7cm、幅9.1cm、厚2.5cm、重量242g。2-183は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え挟りをつくり出している。挟り部には敲打を加え整え、明確である。また、短軸の相対する二辺の中央部には片面から剥離を加え挟りを入れるが、明確でない。長13.2cm、幅9.1cm、厚2.0cm、重量325g。2-447も砂岩の扁平円礫を利用した石錘、砥石を兼ねた石器である。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて挟りを入れる。挟り敲打で整形され紐ずれの摩耗痕がみられる。また、両面は砥石として使用され、使用面には条線が残り、やや凹み、片面では側面の研磨部分に綾線ができる。長11.2cm、幅9.6cm、厚1.6cm、重量233g。

第107図は凹石、石錘、砥石、磨石を図示した。2-448は砂岩の円礫を移用した凹石、叩石を兼ねた石器である。平面形は下ぶくれの楕円形をなす。両面の中央部に敲打が加えられ、凹部がつくり出されるが、片面は敲打痕があるのみであるが、他の面は径2cm程度の浅い凹みができる。長軸の狭くなった先端部にも敲打痕があり、叩石としての使用もみられる。長11.6cm、幅8.3cm、厚4.9cm、重量

570 g。1-217は砂岩の扁平円礫を利用した石錘であるが、大部分を欠損している。両面から剥離を加えてつくられた抉りが1ヶ所に残っている。抉りは敲打を加えて整形している。長4.0cm + α 、幅6.5cm + α 、厚2.7cm、重量81 g + α 。1-268は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の相対する二辺の中央部に錯行関係で大きな剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りの一つには紐ずれがみられる。長9.1cm、幅7.0cm、厚1.8cm、重量166 g。2-434は安山岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の相対する二辺の中央部に剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りは一辺の両面から、他の一辺は片面からの剥離である。長7.9cm、幅5.8cm、厚1.6cm、重量104 g。1-215は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。長9.0cm、幅6.7cm、厚2.6cm、重量209 g。2-185は砂岩の大型の扁平円礫を利用した砥石である。平面形は楕円形をなす。表裏二面が砥石面として使用されている。一面には1.3cm前後の単位で平行した擦痕がみられ、上部の端には溝状になった砥面が平行に並んでいる。また、他の一面は砥面が一部剥落しているが同様に溝状の砥面が並行してみられる。一見、玉砥に似るが、石斧製作の砥石とみられる。長18.1cm、幅16.3cm、厚5.6cm、重量1996 g。2-307は頁岩の石核である。剥離面に3個の剥片を剥ぎとった跡が残る。長6.4cm、幅6.6cm、厚3.7cm、重量142 g。1-218は安山岩の円礫を利用した磨石である。平面形は円形をなす。一面が磨石として使用されている。長9.5cm、幅8.9cm、厚5.5cm、重量459 g。1-272は砂岩の偏平礫を利用した砥石である。平面形は三角形をなす。主に砥石として利用され、砥面は帯状をなし、石斧用の砥石と思われる。砥面のすぐ横の稜線にも使用の痕跡が認められる。また反対の面の稜線の一つにも使用痕があり、ここは稜線をはさんで二面に痕跡があり、擦り切り具のような使用が考えられる。長12.6cm、幅10.5cm、厚3.8cm、重量504 g。

第108図には双角状礫石器を図示した。2-337は火成岩の扁平円礫を利用した礫石器である。平面形は五角形をなす。一辺に両面から剥離を加えた深い抉りをつくり出す。抉りは長3.5cm、深2.2cm、抉りの両端に突起部がつくり出される。長9.6cm、幅10.0cm、厚1.5cm、重量183 g。2-301は安山岩の円礫を素材とした礫石器である。平面形は半円形をなす。長辺に敲打を加え浅い抉りをつくり出す。敲打部分には両面に小さな剥離がみられる。敲打部は平坦部ができる。抉りは深さ0.5cm。長8.0cm、幅5.8cm、厚3.7cm、重量188 g。

5、第4下層～第5層出土の遺物

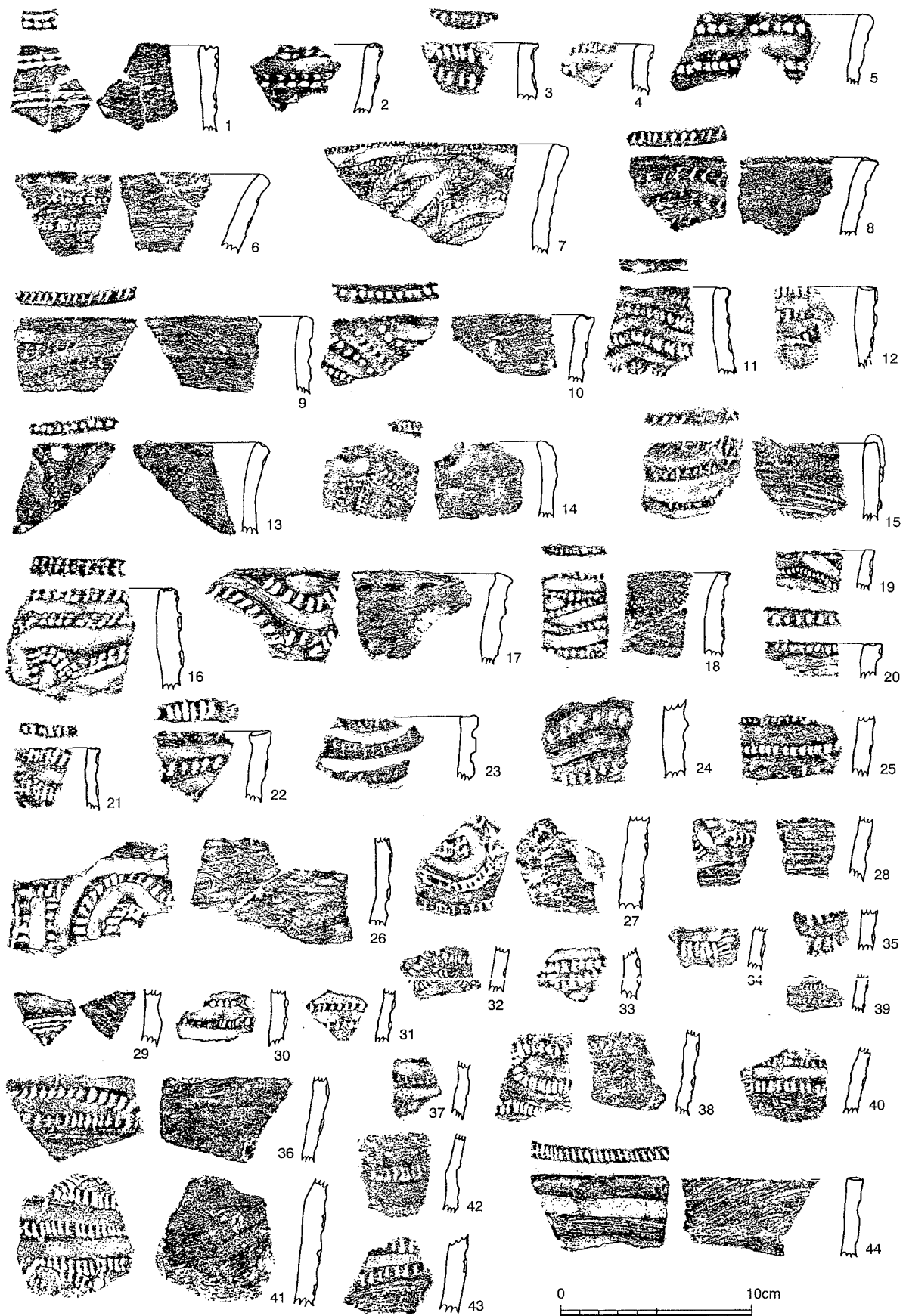
(1) 土器 (第109～112図)

第4下層～第5層からは並木式土器と南九州の春日式土器と瀬戸内地方の船元式土器が出土している。これらの土器を層位的に分離することは困難であった。強いて言えば、春日式土器と船元式土器が混在状態で下層に、4層下半から5層の上層に並木式土器が多い傾向にある。土器形式が多くなり煩雑になるので、ここで改めて類別を示しておきたい。

第1類 磨消縄文土器 (数が少ないので一括する)	第2層出土
第2類 南福寺式土器 (文様帯が肥厚する)	第2層出土
第3類 南福寺式土器 (文様帯は肥厚しない)	第3層出土
第4類 阿高式土器	第4c、4層出土
第5類 並木式土器	第4下層～5上層出土
第6類 春日式土器	第5層出土
第7類 船元式土器	第5層出土

第5類土器 (並木式土器)

第109図は並木式土器である。細分可能であるが量が少ないので一括する。第109図1～23、44は口縁部破片である。1は口唇部に2本単位の刺突文が施文される。文様は口縁部をやや下った所と間隔をおいてそれに平行に横走する2単位の連続刺突文が施文される。胎土に滑石が混入されている。2もほとんど同様に、口縁部に平行した3条の連続刺突文が施文される。胎土に少量の滑石を混入している。3は口唇部にへらによる刻みを入れ、口縁外面に口唇部と同様のへらによる連続刺突文を平行に2条横走施文している。以上3点には凹線は付けられていない。4は口唇部にへらによる刻み目を施文する。文様は口縁直下とその下に連続刺突文が施文されるが、周囲に凹線が施される。胎土に滑石は混入していない。5は口縁下とそれに平行して小さい棒状工具により連続刺突文が施文され、さらにその間に凹線が施文される。6は口縁端部を丸くおさめている。口縁下に無文帯を置き、1cmの間隔を置いて平行横走する押し引き文が施文されている。7は口縁端部は平坦に仕上げている。文様は口縁直下に小さい連続刺突文を施文しその下には6条の不規則な弧状の連続刺突文を施文する。一部は文様が接し羽状になるところもある。刺突文の間にはへらによる浅い凹線文が施文されるが規則性はない。胎土には滑石を混入している。8は口唇部にへらによる小さい刻み目が施文される。外面にはへらによるやや幅広い連続刺突文が弧状に平行して施文される。刺突文間にはへらで浅い凹線が弧状に施文される。9は8と同一個体の可能性が高い。刺突文、凹線文ともに曲線をなす。口縁直下に無文帯ができる。10は口唇部は平坦で、小さい棒状の工具で刺突文が施文される。外面には同様の工具で斜め方向に4条の平行した連続刺突文が施文され、刺突文下にはへら描きの浅い凹線文が施文される。11は口唇部は平坦に仕上げられる。棒状工具により太い刻みがまばらに施文される。外面にはへら状の工具でやや細長い刺突文が円弧を描くように4条施文されその間にへらによる浅い凹線が施文されている。12は口唇部にへらによる刻み目が施文される。外面は口縁直下から等間隔に3条の連続刺突文を施文し、その間に凹線を施文している。胎土に滑石を多量に混入している。13は口唇部は平坦に仕上げられ、小さい棒状の工具によって刺突文が施文される。外面の文様は口縁直下の押点文をはさむように両側から円弧上に連続刺突文を施文し、さらにその両側に浅い円弧状の凹線が施文されている。14は口縁部にこぶ状の突起が付けられているが欠損している。口唇部には2単位の刺突具で刺突文が施文される。文様は縦に施文された凹線の後から同様の刺突具で連続刺突文が施文されている。15は口縁部に文様帯からのびた小さな突起がある。口唇部にはへらで細い刻みが施文される。文様は突帯に刻みが施文されている。突帯の間は凹線状をなす。16は口唇部には2単位の櫛歯状の工



第109图 4下層~5層出土土器実測图 I

具で刺突文が施文される。外面の文様は口縁直下とそれに平行した2条、その下に斜線と弧線を組み合わせた1条に、口唇部と同じ工具で連続刺突文が施文され、その間に凹線文が施文されている。凹線文は阿高式土器の文様と同じである。17、26は同一個体であり、26は上下逆になっている。中心の文様として渦巻き文を配し、その周りには斜線や横線が配されている。文様にはヘラによる連続刺突文が施文され、その間に凹線文が施文されている。内外面とも横方向のヘラ研磨調整である。18は口唇部、外面に横、斜線に小さなヘラ状工具によって連続刺突文が施文され、その間に凹線文が施文されている。胎土には多量の滑石が混入されている。19は弧状の小さな連続刺突文と凹線が施文されている。20は口唇部と口縁直下に小さな棒状工具によって連続刺突文が、その下に凹線が施文されている。胎土に滑石を混入している。21は口唇部にヘラで刻み目を入れる。口縁直下とやや間隔を置いて2条のヘラによる連続刺突文を施文し、間に凹線が施文される。胎土に滑石が混入される。22は口唇部と外面に櫛歯状の工具によって連続刺突文が施文され、外面はその両側に凹線が施文される口縁部に無文帯を持つ。23は外面に細いヘラ状の工具によって円弧状の連続刺突文が施文され、その間は深い凹線文となっている。24は弧状に凹線が3条施文され、中の凹線を除いた上下の凹線に棒状工具により、連続刺突文が施文される。25は棒状工具によって並行した2条の連続刺突文が施文されている。胎土に滑石が混入されている。27はヘラ状工具による押し引き文で渦巻き文が施文され、間に浅い凹線文が入れられる。28は半截竹管で連続刺突文と凹線文が施文されている。胎土に滑石が混入されている。29は連続刺突文と凹線が施文されるが、文様構成は不明。30～35は連続刺突文と浅い凹線を併用している。刺突文は33は棒状工具、34、35はヘラ状の工具である。36は2条のヘラによる連続刺突文が施文され、間に浅い凹線を施文している。37、39は小さい連続刺突文が施文され、間に浅い凹線が施文される。39は胎土に滑石が混入されている。38、40もヘラによる連続刺突文と浅い凹線文が施文されている。41、43はやや厚手の土器である。半截竹管による連続刺突文と浅い凹線文が施文されている。42は1条の凹線に爪形の連続刺突文が施文されている。44は口唇部にヘラによる連続刺突文が施文されている。外面には2条の凹線がめぐる。胎土には多量の滑石が混入されている。第103図4と共通した要素が見られ、阿高式土器に先行する土器と見られる。第112図9～11も並木式土器である。9は壺形土器、口縁部から胴上半部にかけての破片である。約三分の一を残す。口縁部はくの字形に屈曲し、口縁端部は外反し、丸くおさめる。頸部はすばまり、肩部は大きく張り出し胴部最大径は上位にある。緩やかに湾曲しながら胴下半にいたる。器形的には長胴の短頸壺になる。外面の頸部から肩部にかけて、二本単位の櫛歯状の工具によって押し引き状に連続施文された2条の押し引き文を単位とした文様が施文されている。文様構成は中心飾を中心にシンメトリーをなす。押し引き文の間に凹線文と押点文が施文されている。口縁部内面に同じ工具により2条の押し引き文が施文されるが、1箇所V字形になる部分がある。押し引き文と凹線文の施文は切合い関係から凹線文が先で、押し引き文が後から施文されている。土器の成形については、頸部と胴部屈曲部に粘土接合部があり、屈曲部を作り出すために内面に指押さえの痕跡が顕著に認められる。外面の成形は横ナデ調整と見られ、胴下半部はヘラ状工具により縦方向に丁寧なヘラ削りが加えられ、その上から横方向の貝殻条痕が加えられる。内面は口縁部が横ナデ調整、肩部には横方向のヘラ削りが加えられ、その上から横方向の貝殻条痕を施すが、貝殻条痕は明瞭ではない。胴下半部は横方向の貝殻条痕の調整である。器壁は薄く厚さ5mm前後である。極めて精巧なつくりである。胎土には滑石が多量に混入されている。復元口径20.4cm、頸部径19.4cm、胴部最大径29.0cmを測る中型壺である。10は底部である。胎土等から同一個体の可能性もある。やや高い上げ底状をなし、底部端は大きく外側に張り出し、安定した底部である。底部径13.0cm、上げ底の高さ2.0cmを測る。11は深鉢形土器の口縁部である。4箇所に山形の隆起部がある。隆起部は鋭く尖る。器形はわずかに外傾しながら直線的に立ち上がり、隆起部の先端が

やや内傾する。口縁部にはやや幅広い文様帯があり肥厚している。口唇部にはヘラで刻み目が入れられ、文様は隆帯状をなし、口唇部と同様の工具で刻み目が施文される。文様構成は山形の下に長楕円形の隆帯を縦に施し、それから口縁に沿って隆帯が4条平行に伸びている。復原口径28.4cm。胎土には滑石を多量に混入している。

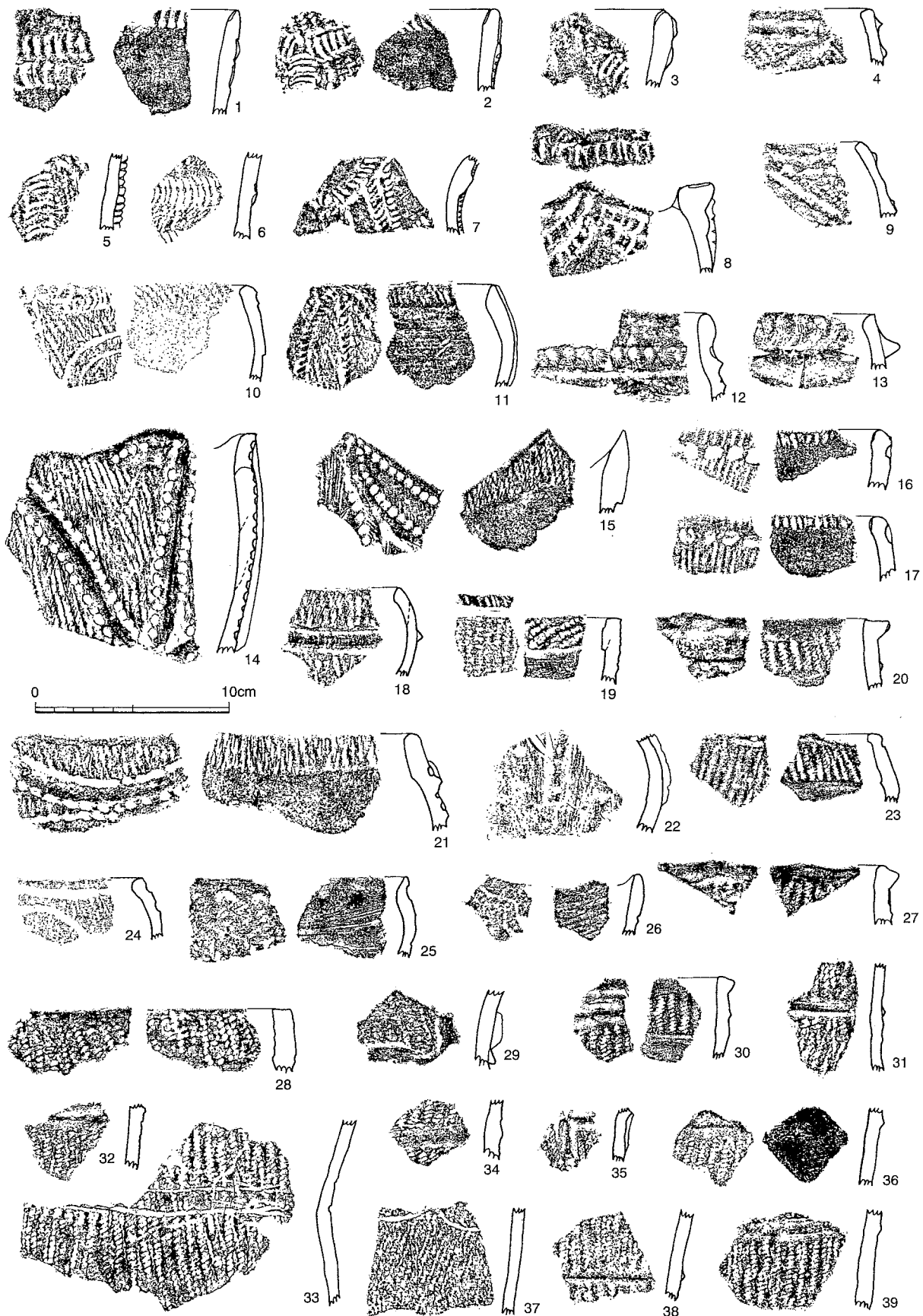
第6類土器（春日式土器）

量的には少ない。10点前後が出土している。接合できるので個体数にして5個前後がある。図示したのは3点である。第112図1～3がそれである。1、2は同一個体と考えられる。内外面は横方向の条痕で調整されている。共に口縁部には突起がある。1の突起は片方を欠損しているが、復原するとほぼ同形同大の突起となる。また、2の突起も同形同大に復元できるので、この土器は口縁部が波状になることがわかる。口縁部の文様は突起にあわせて山形をした3条の押し引き文（2単位のヘラ状工具によって施文）が平行に施文されている。3もほぼ同様であるが、口唇部に上記の施文具と同様なヘラによって刻み目が施文されている。内面は貝殻条痕で調整されている。図示していないが、この他に口縁部に刻み目を入れた突帯を波状に貼り付けた土器がある。これらの土器の胎土には滑石が混入されている。これらの1群の土器は第5類土器（並木式土器）より下層から出土し、第7類土器と共伴している。

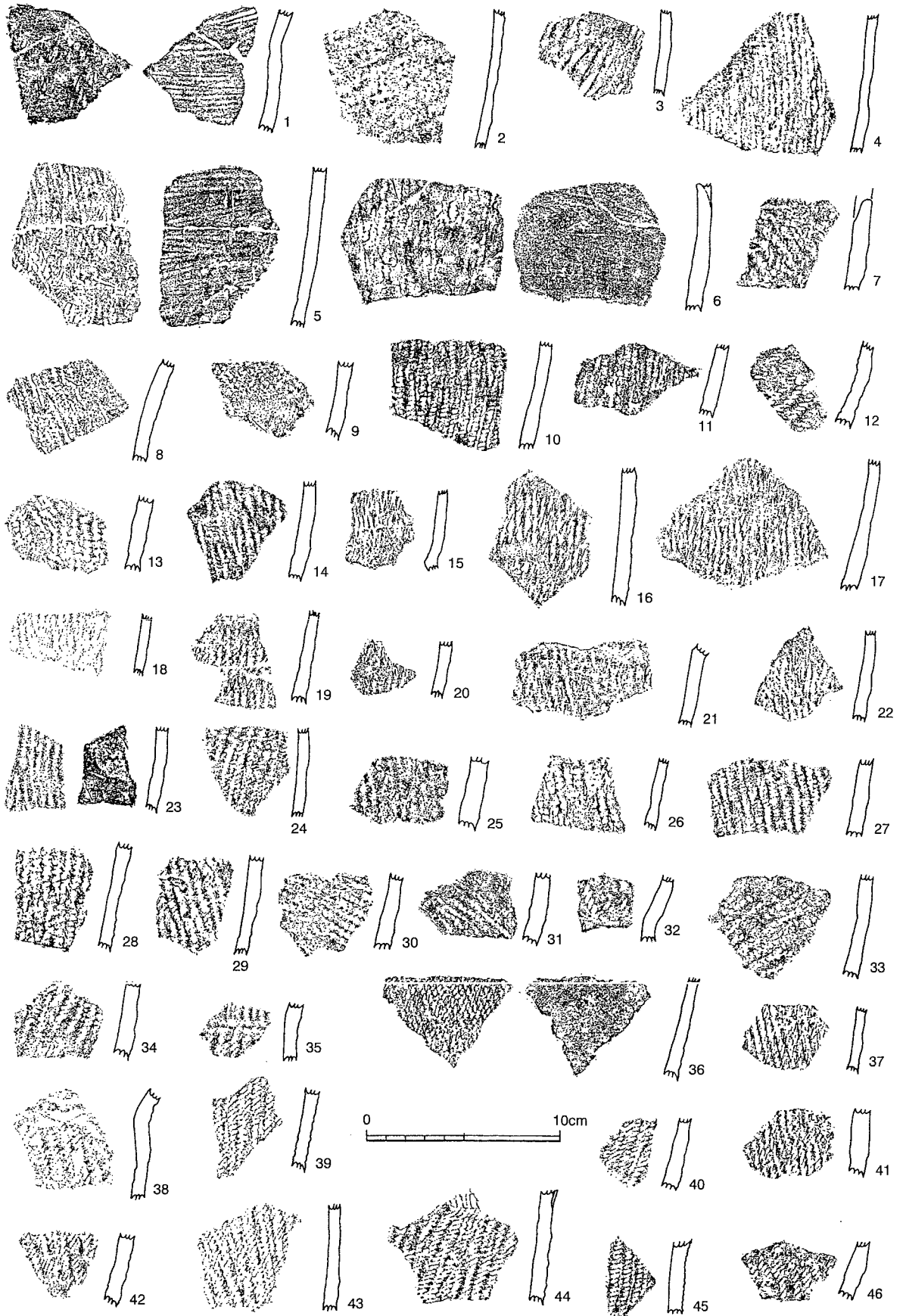
第7類土器（船元式土器）

量的には比較的多い。特に2次調査では単純に近い状態で出土している。層位的には第5類土器（並木式土器）の下位から出土している。第6類土器（春日式土器）とは共伴する可能性が高い。出土土器はさらに細分可能であるが、ここでは一括して説明を加える。

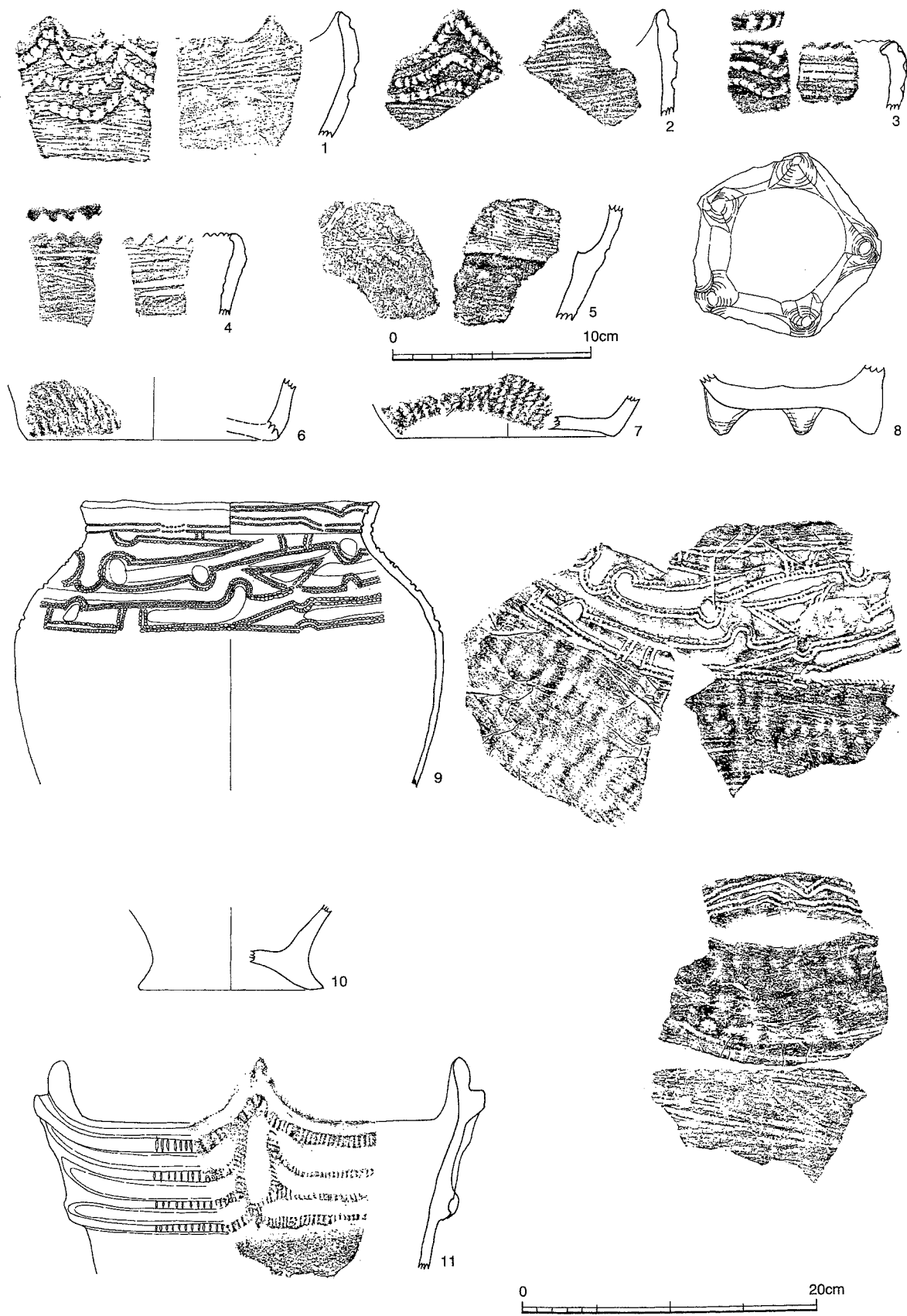
第110、111図に実測図を示した。第110図1～3は口縁部破片である。いずれもわずかに外傾し直線的に立ち上がる。外面の文様は隆帯に爪形文を施文したもので、1は口縁下に密接して横方向に2条、2は斜め方向と縦方向の隆帯が交差している。3は斜方向の隆帯である。3点とも口縁部内面に爪形文が施文される。4は地文に縄文を施文し、口縁下に横方向の隆起線を貼り付け、さらにそれから斜方向の隆起線を貼り付けている。5、6は地文に縄文を施文し、幅広い隆帯を貼り付け、その上に爪形文を施文している。7は頸部の破片である。器面は横方向のヘラナデ調整である。断面三角形の隆帯を縦、斜めに貼り付け、その上に刻み目を施文している。また、隆帯のすぐ横には隆帯に沿って櫛歯文が施文されている。なお、隆帯の刻み目には赤色顔料が残っており、元来隆帯は赤く彩色されていたと考えられる。8は口縁部破片、山形に隆起している。口唇部は平坦で幅広い、そこに半截竹管で押し引き状に爪形文を施文している。外面には突帯2条を口縁に沿って山形に配し、突帯には刻み目が施文されている。9は4と良く類似していて、同一個体の可能性もある。口縁下に隆線を横走させ、それに取り付くように斜走の隆線が貼り付けられている。地文として縄文が施文されている。10、11は口縁部破片、共にキャリパー状をなす。10は口縁直下に隆帯を貼り付け、爪形文を施文している。地文に縄文を施文し、沈線で2条の弧線が施文されている。口縁部内面にも縄文が帯状に施文されている。11は外面に隆線で円弧を描き、その中に縦の隆線を貼り付け、ヘラ状の工具で刻み目が入れられる。隆線で囲まれた部分に縄文が施文されている。口縁部内側には帯状に縄文が施文される。12は口縁下に隆帯1条がめぐらされている。隆帯の上面にはハイガイの殻頂部分を押しつぶしたような扇状押し文が並列施文されている。13は口縁下に耳状の突帯が貼り付けられている。口縁と突帯の間には扇状押し文が並列施文されている。14は口縁部の一部が丸味を持った山形に隆起している。山形の中心から垂下するように突帯1条が貼り付けられ、約11cm下ったところで両側に広がるような斜めの隆線が貼り付けられている。隆線の両側には竹状の工具によって刺突文が連続的に施文されている。地文として縄文が施文されている。15も山形に隆起した口縁部である。山形の先端は尖っている。山



第110图 4下層~5層出土土器実測図Ⅱ



第111图 4下層~5層出土土器実測图Ⅲ



第112图 4下層~5層出土土器実測図IV

形の下には弧状とそれより垂下する隆線が貼り付けられ、弧状の隆線と口縁部の間は肥厚している。口縁部の右側と隆線の両側には棒状の工具によって連続した刺突文が施文されている。地文として縄文が施文されている。口縁部内側にも帯状に縄文が施文されている。16、17は口縁の直下に棒状工具によりやや大きい円形の刺突文が連続して施文されている。地文として縄文が施文されている。内面には短い縦の刻み目が連続施文されている。同一個体の可能性が強い。18はキャリパー状の口縁をしている。口縁より約2cm下ったところに横方向の隆線1条が貼り付けられている。隆線の上側には細かい刺突文が連続施文されている。地文として縄文が施文されている。19は口縁部の小破片である。口唇部にヘラによる細い刻み目が施されている。外面には縄文が施文されている。内面は約1.5cm幅で帯状に粘土を貼り付けて肥厚させ、その上に縄文を施文している。20は口縁に粘土を貼り付けて肥厚させ、口唇部は平坦になる。口縁の断面は逆L字形をなす。口縁下にも小さい隆線1条をめぐらしている。地文として縄文が施文される。内面には口縁よりやや下ったところに幅約2cmの帯状に縄文が施文されている。21は口縁下に下向きの弧状の隆線とそれに対応する上向きの隆線が貼りつけられている。隆線の両側には棒状工具により円形の連続刺突文が施文されている。地文として縄文が施文されている。内面は口縁から約2cmの幅で縄文が帯状に施文されている。22はキャリパー状をした口縁部であるが端部を欠損している。縦に2条の隆線が貼り付けられている。地文に縄文が施文されている。左上に補修孔があるが、途中でやめていて貫通していない。23～25もキャリパー状の口縁部である。23は口縁直下に沈線1条をめぐらし、下位に縄文を施文している。内面には約2cmの幅で帯状に縄文が施文されている。24は口縁に狭い無文帯を配し、その下に凹線1条をめぐらし、さらに上向きの弧状の凹線を施文している。凹線は押し引き状に引いている。地文は細かい縄文である。25は口縁端部が外反する。直下に円形の押点文を並列施文している。26は外面に沈線をめぐらしている。27、30は口縁に突帯を貼り付けている。27は突帯の下にすぐ縄文を施文し、30はさらに小さい突帯をめぐらし、その下に縄文を施文している。共に内面にも縄文を帯状に施文している。28は内外面に縄文を施文している。29、31、32、34、35、36、38、39は地文は縄文で、突線を貼り付けている。33、37は共に地文に縄文を施文している。33は頸部の破片で、頸部にヘラによって、平行する2条の沈線がめぐらされている。37は弧状の沈線が波状に施文されている。第111図はいずれも頸部から胴部、あるいは胴部の破片である。地文として縄文が施文されている。施文された縄文は詳細に観察すると数種類に分類可能である。第112図5は頸部破片、外面に縄文を施文し、沈線が施文される。内側に段が形成される。6～8は底部破片である。6、7は外面に縄文が施文されている。6は復原底部径12.8cmを測る。7は若干上げ底状になる。復原底部径11.2cmを測る。8の底部は完全に残っている。底部外面には5個の突起が五角形に配されている。低い有脚の底部となっている。同様の底部破片はたくさんあり、第7類土器には普通に見られる底部である。編みかごの底部を写し取ったものと考えられている。

(2) 第4下層の石器

同層から出土した石器は、石鏃、同未製品、磨製石斧、スクレイパー、双角状礫石器、石錘、有溝石錘、磨石等があるが点数は少ない。

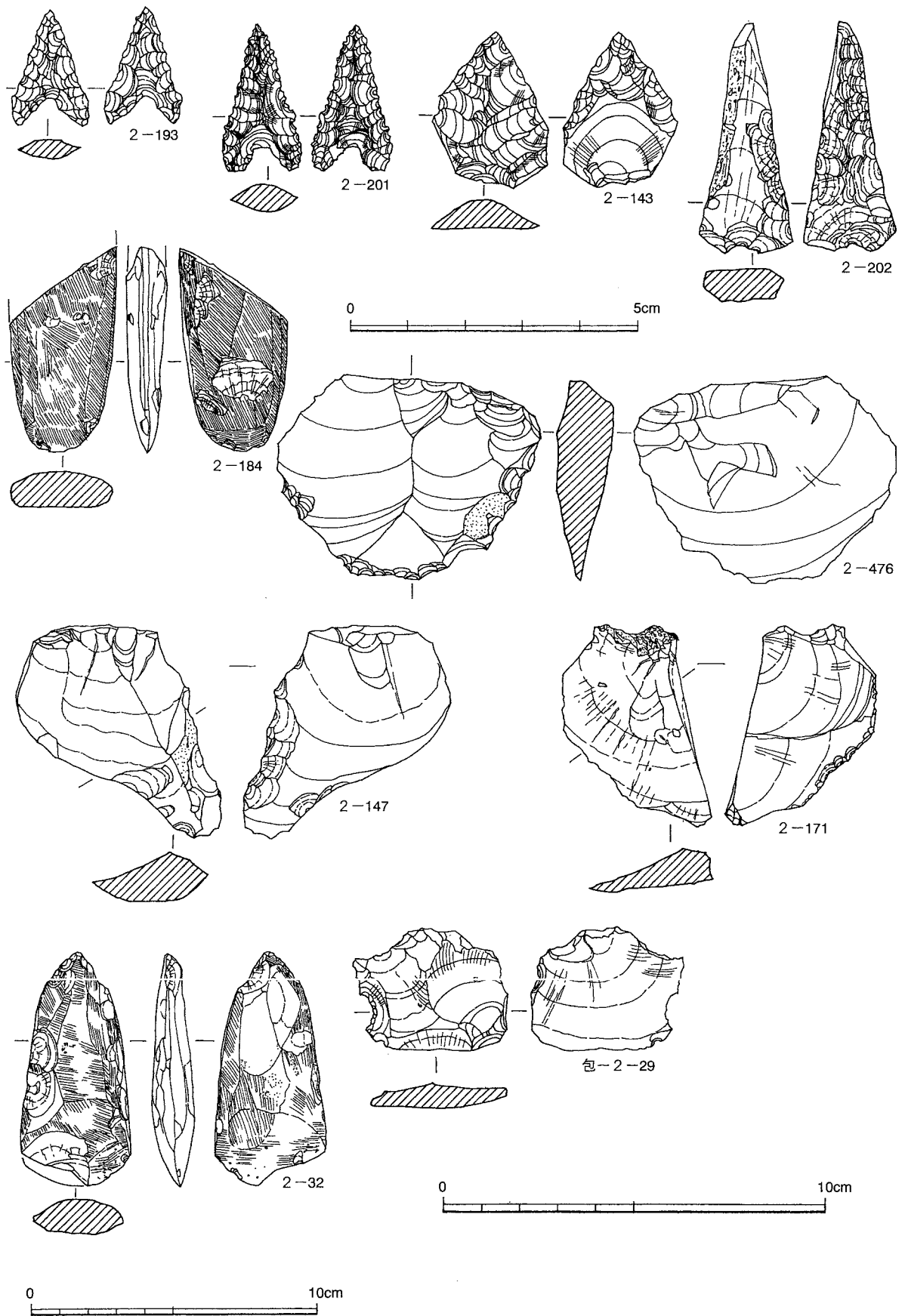
第113図には石鏃、同未製品、磨製石斧、スクレイパーを図示した。2-193は黒曜石（針尾島）製の石鏃である。平面形はやや身が長い二等辺三角形をなすが、脚部は側辺部で屈曲し直線的になる特徴をもつ。基部の挟りは三角形状でやや深い。長2.0cm、幅1.3cm、厚0.3cm、重量0.55g。2-201は黒曜石（腰岳）製の石鏃である。身が長く、基部の挟りはやや深い。側辺には鋸歯列がつくり出される。長2.6cm、幅1.4cm、厚0.5cm。2-143、2-202は共に丁寧な押圧剥離で整形される。2-143は透明度の強い黒曜石（腰岳）を素材とした石鏃未製品である。主要剥離面に丁寧な押圧剥離を平行に施し整

形するが、基部に近い1ヶ所が深く剥離され整形に失敗している。裏面は先端部に剥離を加えて尖頭部をつくり出すが、他は剥離面のままである。長2.7cm、幅2.0cm、厚0.5cm、重量2.34g。2-202はサヌカイト製の石鏃、平面形は二等辺三角形をなすが、極端に身が長い。両脚を欠損する。一方の側辺には自然面を残し、他の側面には刃潰し状の剥離が加えられ、主要剥離面を大きく残している。長4.0cm + α 、幅1.7cm + α 、厚0.5cm、重量3.12g + α 。2-184は頁岩製の磨製石斧、胴上半から頭部を欠損している。一部に剥離痕を残すが、全体に良く研磨され、研磨痕が明瞭に残っている。刃部は丸味をもち、両刃をなす。幅、厚さ共に刃部から胴部にかけて増える。全形は長楕円形をなすと考えられる。長7.1cm + α 、幅1.7~3.7cm、厚1.0~1.4cm、重量46g + α 。2-476はサヌカイト製のスクレイパーである。横剥ぎの剥片を素材として、打面を除いたエッジに片面から小さい剥離を加えて刃部を形成する。長5.4cm、幅6.9cm、厚1.5cm、重量46g。2-147もサヌカイト製のスクレイパーである。不定形の剥片を素材となす。平面形は隅丸の略三角形をなす。打面は平坦、剥片の先端に近い二辺に両面から小さい剥離を加え刃部を形成する。長5.5cm、幅5.5cm、厚1.3cm、重量34g。2-171はサヌカイトの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。横剥ぎの剥片のエッジに主要剥離面側から細部加工が加えられ、刃部が形成される。刃部に相対する一辺は折断され平坦になる。打面には自然面を残している。長5.2cm、幅2.0~3.2cm、厚0.9cm、重量15g。2-32は頁岩製の扁平石斧である。全体形は楕円形をなし、頭部は尖る。刃部は約半分を欠損するが、丸味をもっている。全体は剥離を加えて整形し、その後全体に丁寧な研磨を加えているが、胴半位の側面には剥離痕が残っている。刃部は二次的な研ぎがみられ片寄り刃をなす。刃部先端には使用痕がみられ、細かい縦方向の条線が残る。長8.0cm、幅1.6~4.0cm、厚1.5cm、重量50g。包-2-29はサヌカイトの横剥ぎの不定形剥片を素材としたコンケープ・スクレイパーである。側辺の一辺に片面から細かい剥離を加えて小さい抉りをつくり出す。抉りは長0.9cm、深さ0.2cm、長3.2cm、幅4.0cm、厚0.6cm、重量9g。

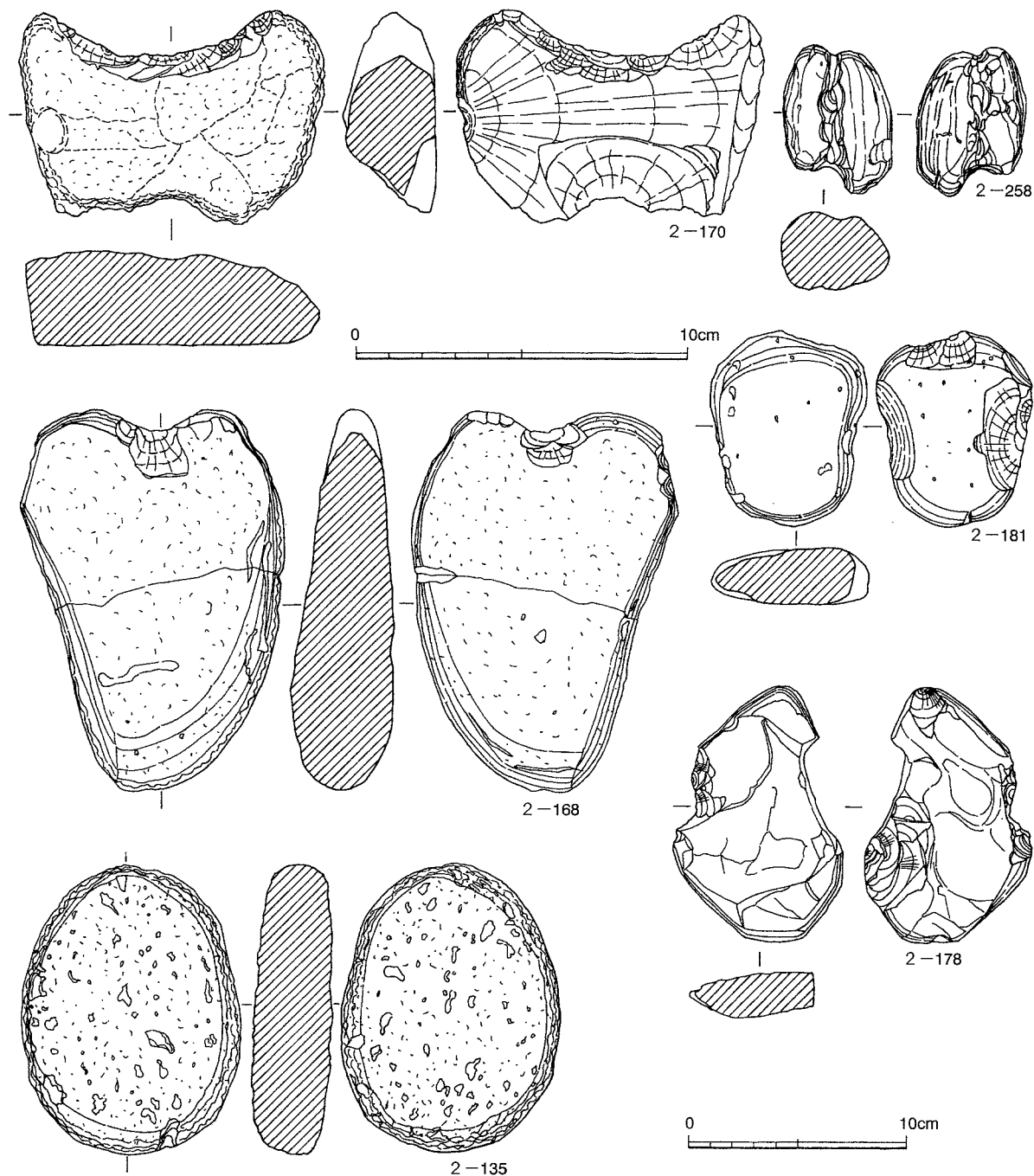
第114図は双角状礫石器、有溝石錘、石錘、磨石を図示した。2-170は安山岩の扁平円礫を利用した双角状礫石器である。片面は剥離面で自然面は残っていない。平面形は長方形、長軸の一辺に敲打を加え、それに伴う剥離で抉りがつくり出される。抉りは長6.7cm、深さ1.3cm。抉り両端の突起部には使用痕はみられない。また、抉りに相対する一辺の中央部には大きな剥離が加えられ抉りがつくり出され、石錘としても使用されているとみられる。長6.4cm、幅9.1cm、厚2.8cm、重量199g。2-258は砂岩の円礫を利用した有溝の石錘である。平面形は不整楕円形をなす。長軸の中央部に敲打を加え溝を入れ、一周させる。他の有溝石錘と比較し粗雑である。長6.7cm、幅5.0cm、厚3.6cm、重量144g。2-168は安山岩の円礫を利用した双角状礫石器である。平面形は楕円形をなす。短軸の一辺に敲打が加えられ、両面に剥離がみられる。一見して石錘の抉りに似るが、双角状礫石器の初期段階の形状とみられる。長11.5cm、幅4.0~8.0cm、厚1.0~3.2cm、重量358g。2-181は多孔質の火成岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸と短軸の隣合う二辺に片面から剥離が加えられる。長軸の他の一辺には自然の凹みが、それを利用した石錘とみられる長8.8cm、幅7.2cm、厚1.5cm、重量167g。2-178は頁岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は不整楕円形をなすが、長軸の一辺の一部を欠損している。他の一辺には両面から剥離が加えられ、抉りがつくり出されている。対応する抉りは欠損する。長11.5cm、幅7.7cm、厚2.0cm、重量216g。2-135は多孔質の安山岩の偏面円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなす。表裏二面が磨石と使用されている。研磨痕等は不鮮明であるが、使用により磨滅し両面共に平坦になる。長13.1cm、幅10.0cm、厚3.5cm、重量528g。

(3) 第5層の石器

同層出土石器には石鏃、石匙、ストレイパーがあるが、その数は極めて少ない。**第115図**に図示した。2-311、2-310、2-308、2-134は打製石鏃である。2-311は黒曜石(腰岳)を素材とする。

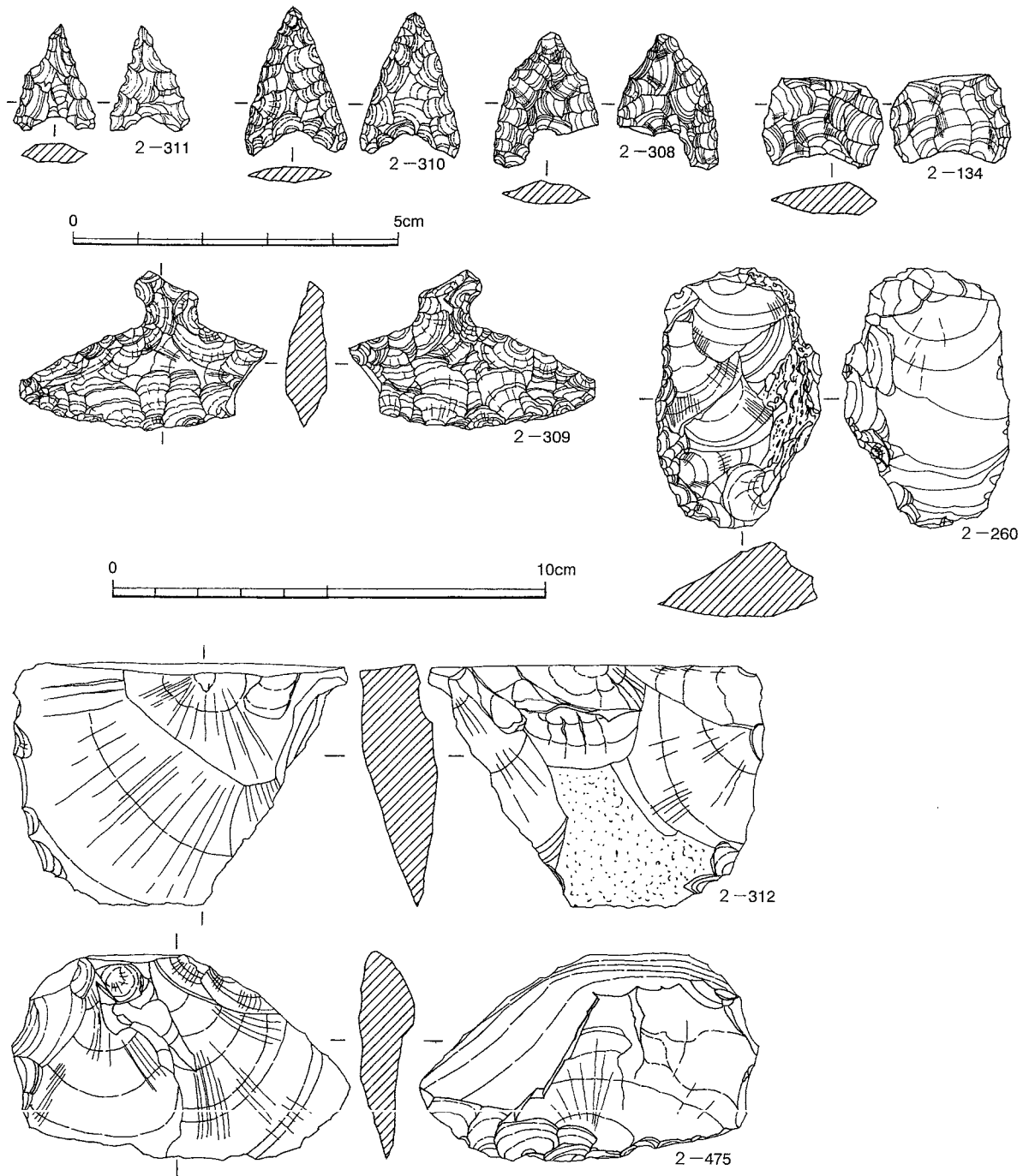


第113图 4下層出土石器実測图 I



第114図 4下層出土石器実測図Ⅱ

身がやや長い二等三角形をなし、基部の抉りは浅い。全体はやや粗い剥離で整形する。長1.6cm、幅1.3cm、厚0.3cm、重量0.43g。2-310はサヌカイト製。形状は前者と同様、基部に浅い抉りを入れる。全体に風化しているが、丁寧な押圧剥離で整形し、薄く仕上げている。長2.25cm、幅1.5cm、厚0.2cm。2-308は黒曜石（腰岳）製。形状は五角形をなすが、脚の片方を欠損する。基部の抉りは深い。全体に丁寧な押圧剥離を加え整形している。長2.1cm、幅1.6cm+ α 、厚0.35cm。2-134は黒曜石（腰岳）製。先端部を欠損する。基部に浅い抉りを入れる。全体に押圧剥離を加え整形しているが、剥離の加え方からすれば未製品（失敗品）の可能性もある。長1.4cm+ α 、幅1.8cm、厚0.5cm。2-309はサヌカイト製の横型の石匙である。つまみの一部と刃部の一部を欠損する。大型の横剥ぎの剥片を素材とし



第115図 5層出土石器実測図

たと考えられるが、主要剥離面はその一部を残すのみである。全体に丁寧な細部加工が加えられている。つまみと刃部の境には紐結びのための袢りが入られる。刃部は左右対称になり、両端部は尖るとみられるが、一方を欠損する。刃部は両面から丁寧な剥離が加えられ、両刃をなす。長3.6cm、幅5.8cm + α 、厚1.0cm、重量14g + α 。2-260はサヌカイトの縦長の剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は楕円形をなす。打面は平坦、主要剥離面の反対面には部分的に自然面を残している。側面の二辺に両面から細部加工剥離を加えて刃部を形成する。長6.0cm、幅3.8cm、厚1.7cm、重量34.3g。2-312は安山岩の不定形剥片を素材としたスクレイパーである。打面は平坦、主要剥離面の反対の面

には自然面を残している。剥片の一側辺に片面から剥離を加えて刃部を形成する。長5.5cm、幅8.7cm、厚1.6cm、重量68g。2-475は頁岩の横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーである。打面は自然面のままである。主要剥離面の反対の面の対面に相対する一辺に片面から剥離を加えて刃部を形成する。長4.7cm、幅7.8cm、厚1.3cm、重量41g。

6、第7～9層出土の遺物

(1) 土器 (第116～123図)

第7層以下の層の出土遺物は一括して説明を加える。第7層以下の層位は砂丘の中央部では整然としているが、遺跡の西側および南側については海進・海退現象によって層位が再堆積した状態で遺物が移動しているので、ここでは型的的に分類して、後で層位的な検討を加えたい。

第8類土器 (第116図)

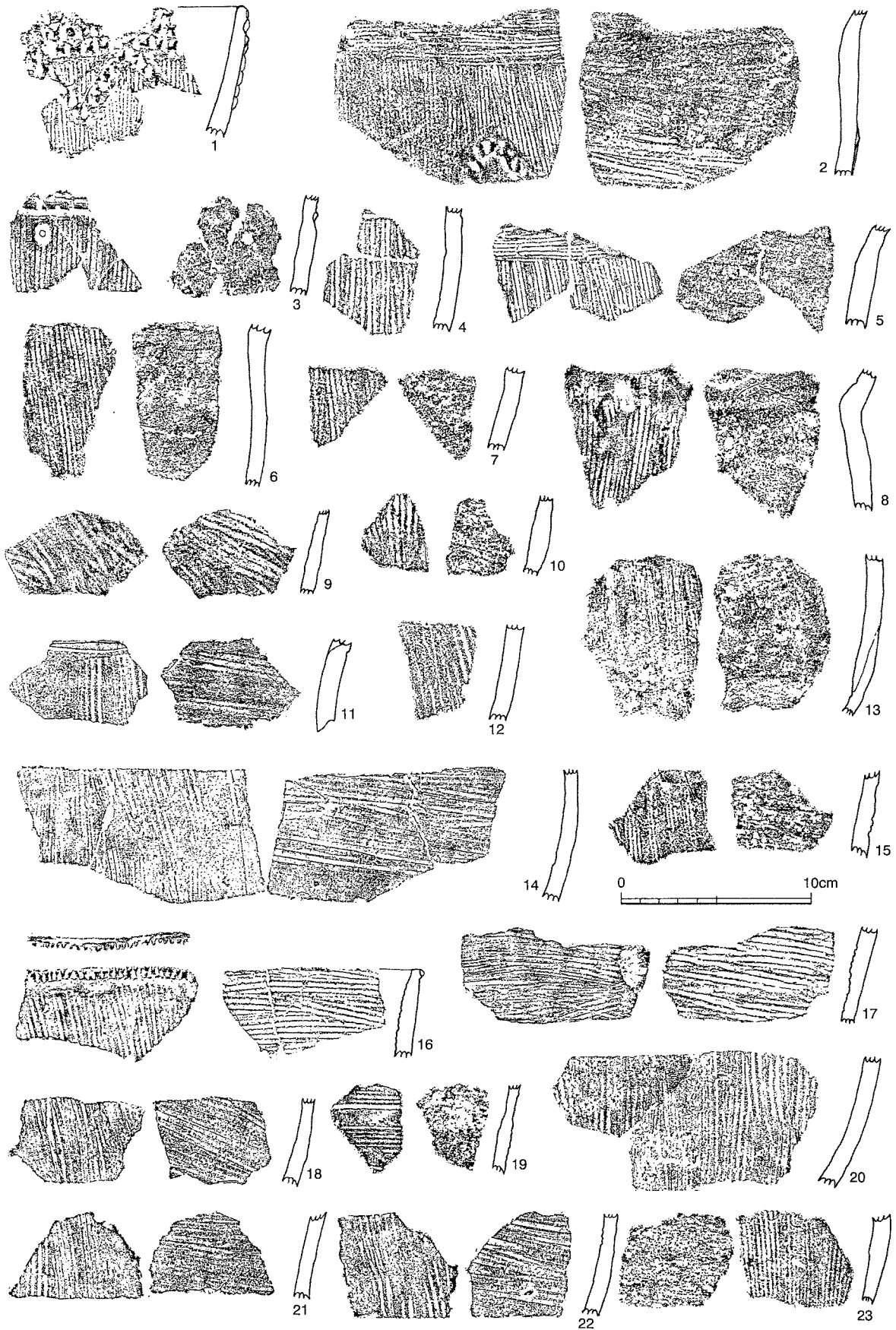
やや厚手の土器で縦方向、横方向あるいは両者を併用した丁寧な条痕を施文する土器の一群で、一部に刻み目を施文した隆線を貼り付けて文様としている。

第116図1は口縁部破片である。口縁は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁端部からその下にかけて密接するように隆線3条を平行に貼り付け棒状工具によって等間隔に上部から深く的確に施文している。その下には同様の隆線を山形に貼り付け、同一の工具によって上部から刻み目を入れている。地文として縦方向の丁寧な条痕が施文されている。内面は横方向のヘラ削り状の調整である。2は頸部から胴部にかけての破片である。胴部はやや丸味をもって膨らみ、頸部はややくびれる。口縁部は失われているが外反すると考えられる。地文として頸部に横方向、胴部に縦方向の丁寧な条痕が施文されている。頸部よりやや下った胴部には隆線が山形に貼り付けられ、隆線には棒状工具により下方から刻み目が的確に施文されている。内面は横方向の条痕の上からヘラ削り状の調整が加えられている。3は口縁に近い破片である。器形的には1に近い。隆線2条が平行にめぐられ、刻み目が入れている。地文には縦の条痕が丁寧に施文されている。内面はヘラナデ調整である。隆線のすぐ下に補修孔がある。両面からドリルで穿孔されている。4は上部にわずかに横方向の条痕が確認できる。胴部は丁寧な縦方向の条痕が施文されている。5は頸部から胴部にかけての破片である。頸部に横方向、胴部に縦方向の丁寧な条痕が施文されている。内面は横方向のヘラナデ調整。2と同一個体の可能性もある。6は頸部から胴部にかけての破片である。口縁は外反すると考えられる。外面は丁寧な縦方向の条痕が施文される。内面はヘラナデ調整である。7は胴部小破片。外面に丁寧な縦の条痕が施文される。8は口縁部から胴部にかけての破片である。胴部はやや膨らみを持ち、頸部はくびれている。口縁はくの字形に屈曲し大きく外反するが端部を欠損している。外面に縦方向の条痕が施文される。下から上に書き上げられたために頸部に粘土のたまりが見られる。内面は頸部から口縁にかけては横方向、胴部は斜めから縦方向のヘラナデ調整である。9～15、17～23は胴部破片である。9は内外面共に斜位の条痕が施されているが、他とは若干異なり条痕がやや丁寧でなく、文様としての効果が薄い。10、12、13、15、20、23は外面に縦方向の丁寧な条痕を施文し、内面は横、斜位のヘラ削り状のヘラナデ調整が施されている。11、14、17、18、21、22は外面に縦方向、内面に横方向あるいは斜め方向の条痕を施しているが中には条痕を消そうとしている部分もあり、文様としての意識が薄い。ここに分類した条痕土器もさらに細分が可能である。16は口縁部の破片である。口縁はわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げている。口縁直下に隆線を貼り付け、隆線にはヘラにより刻み目を的確に施文している。外面には縦の条痕を丁寧に施文している。隆線の下には貼り付けのための横ナデが認められる。内面は斜位、横方向の丁寧な条痕調整である。19は外面に丁寧に横方向の条痕が施文されているが一部無文部がある。文様効果を高めるためか、否かは明らかでない。

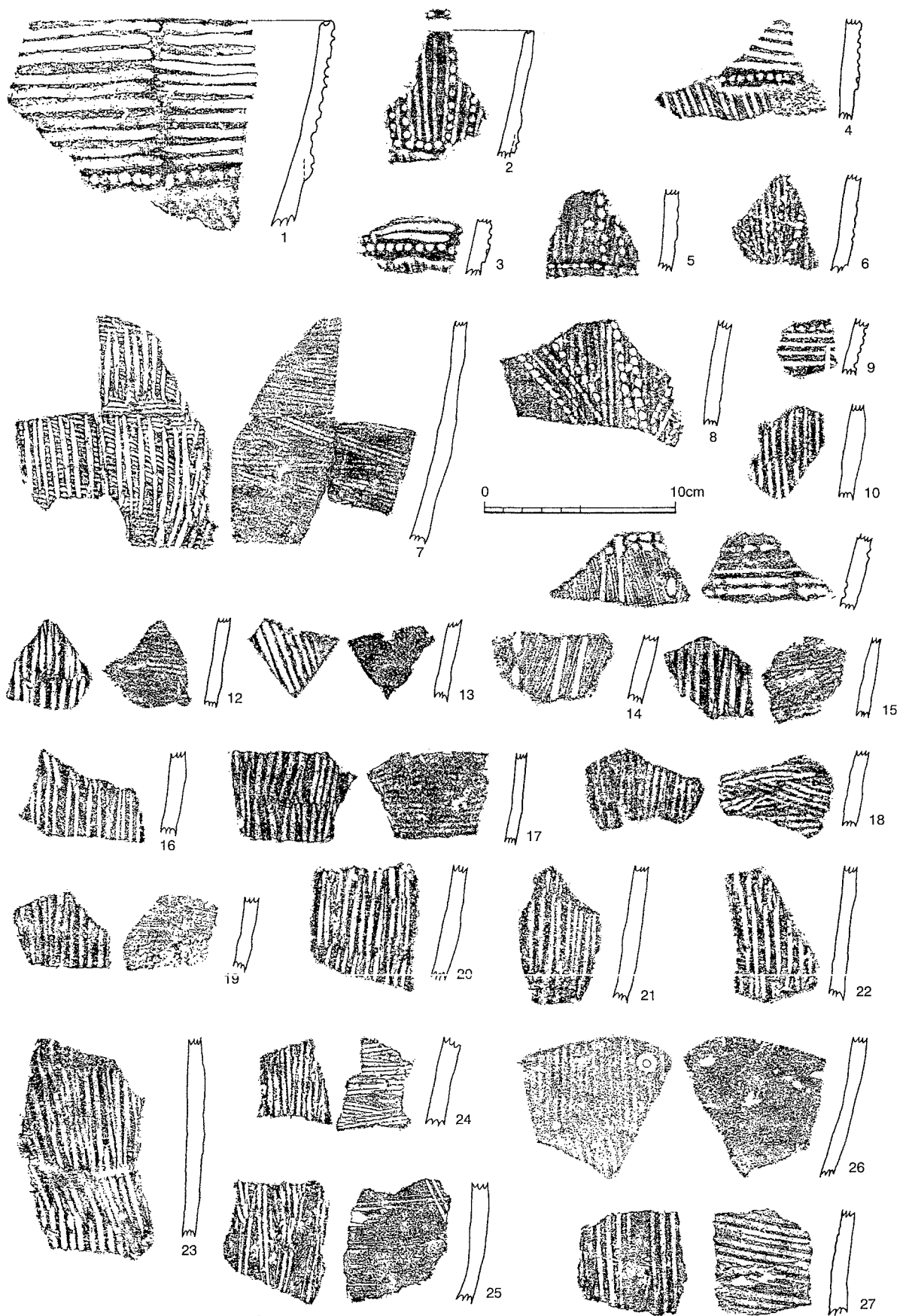
第9群土器 (第117図)

外面に短沈線、刺突を組み合わせ文様を施文する一群を、この群にまとめた。いわゆる曾畑Ⅲ式土器と称されている土器である。

第117図1は口縁部の破片である。口唇部には棒状工具による刺突文が施文される。口縁部文様帯



第116图 7~9層出土土器実測図 I

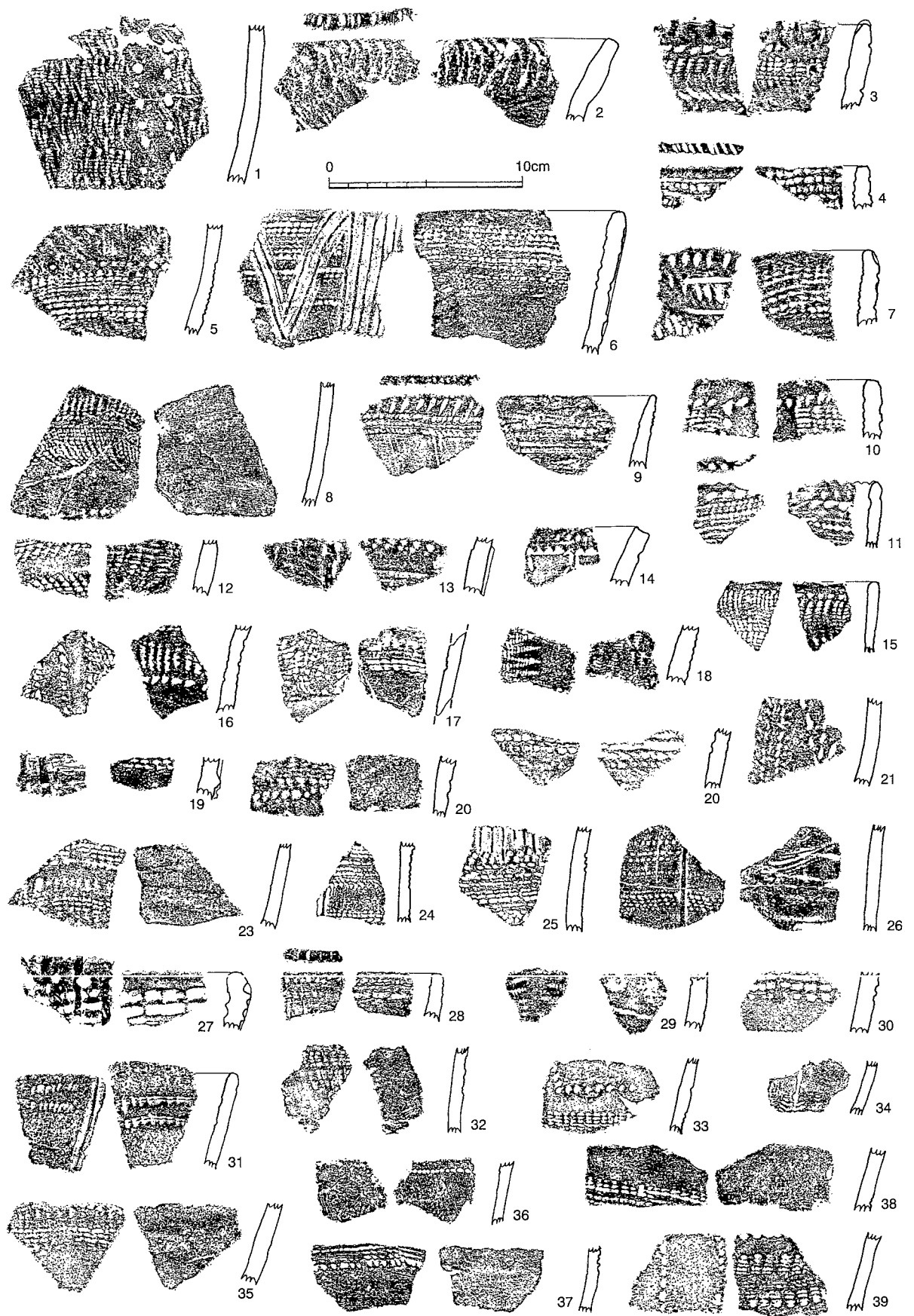


第117图 7~9層出土土器実測図Ⅱ

は幅広く約6cmの幅を有し、わずかに肥厚させている。文様は短沈線を平行に10～11段施文しそれを繰り返している。最下段には沈線の施文具によって連続刺突文を施文している。口縁部文様帯の下には縦の平行沈線が施文されている。内面は丁寧なヘラ研磨調整である。文様帯のすぐ下に補修孔が穿たれている。補修孔はドリルにより外面から穿孔されている。2も口縁部破片である。口唇部に刺突文を施文するのは1と同様である。口縁部文様帯も幅6cm前後と広く、肥厚している。文様は文様帯の最下段に施文具で連続刺突文を入れるのは共通している。沈線は縦方向に平行に引かれ、沈線数本の空間を取り。沈線間に縦に連続刺突文を施文している。肥厚帯の下には斜位の平行沈線が施文されている。3は口縁部文様帯の下段に近い部分の破片である。肥厚部の最下段には連続刺突文が施文されている。その上にはやや曲線状になった短線が平行に2条施文されている。肥厚帯の下には斜位の平行沈線が施文されている。4も同様の部分の破片である。口縁部文様帯は肥厚する。文様帯には横方向の平行短沈線が5条施文され、最下段に施文具により連続刺突文が施文されている。肥厚帯の下には全面に斜位の平行沈線が施文されている。3、4共に内面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整である。5、6、8は共に胴部の破片である。5、6は連続刺突文と縦の沈線の組み合わせであるが文様構成があまり明瞭でない。8は破片が大きく文様構成を知ることができる。文様は縦の沈線2条と縦に施文された連続刺突文2条を中心にしてそれから左右両側に約45度の斜位に連続刺突文4条を施文している。7は胴部破片である。外面には横、斜位に条痕を加え、さらにその上に縦方向の平行した短沈線を3段に施文している。内面は横斜位方向の貝殻条痕が施されている。9は胴部破片で、外面に横方向の連続刺突文と4条の沈線が施文されている。10は胴部破片、縦方向の短沈線が2段に施文されている。11も胴部破片、地文に細かい右下がりの条痕を施し、破片右端にそれに対応するような右上がりの条痕が施されている。上に2条の横方向の連続刺突文を施文し、縦に2条の縦の沈線を施文している。破片右端には押点文が縦に2個施文されている。内面には沈線と押し引き状に施文された線が横方向に5条平行に施文されている。14も同様の破片である。地文に斜位の細かい条痕を施し、縦方向の2条の沈線と押点文2個が施文されている。5、6、8、11、14の文様構成は口縁部文様帯と極めて近いが、次の第10類土器にも近い。後者に分類される可能性もある。12、13、15～27はいずれも胴部破片である。12は外面に平行する短沈線を2段に施文している。内面は横方向の貝殻条痕を施し、下半部は上からヘラナデを加えている。13は外面に斜位の平行沈線を施文している。15は外面に縦の平行短沈線を施文しているが一部重なりあっている。内面は横方向の貝殻条痕の上にヘラナデを施している。16は外面に平行した短沈線を縦に2段に施文しているが、上段は斜位になっている。内面には横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。17は外面に立て方向の短沈線を2段に施文している。沈線はほぼ平行になっているが部分的に平行せず、斜位になっているところもある。沈線端部は重なっている部分が見られる。内面は横方向の貝殻条痕調整である。胎土に多量の金雲母を混入している。18は外面に立て方向の沈線を施文する。内面は多方向から貝殻条痕を施し、上にヘラナデを加えている。19は外面に縦方向の平行沈線を施文している。内面はヘラによる削り状のヘラナデ調整である。20～23は外面に縦方向の平行短沈線を3段に施文している。各段の沈線の傾きは微妙に異なり、沈線端部は重なりあっている。内面は丁寧なヘラナデ調整である。24は外面に縦の沈線を施文する。内面は横方向の貝殻条痕調整である。25は外面の沈線がやや粗雑である。26は全体に磨滅している。外面に2段に縦の短沈線を平行に施文している。補修孔が穿たれている。27は外面に縦方向、内面に横方向の条痕を施している。

第10類土器 (第118図)

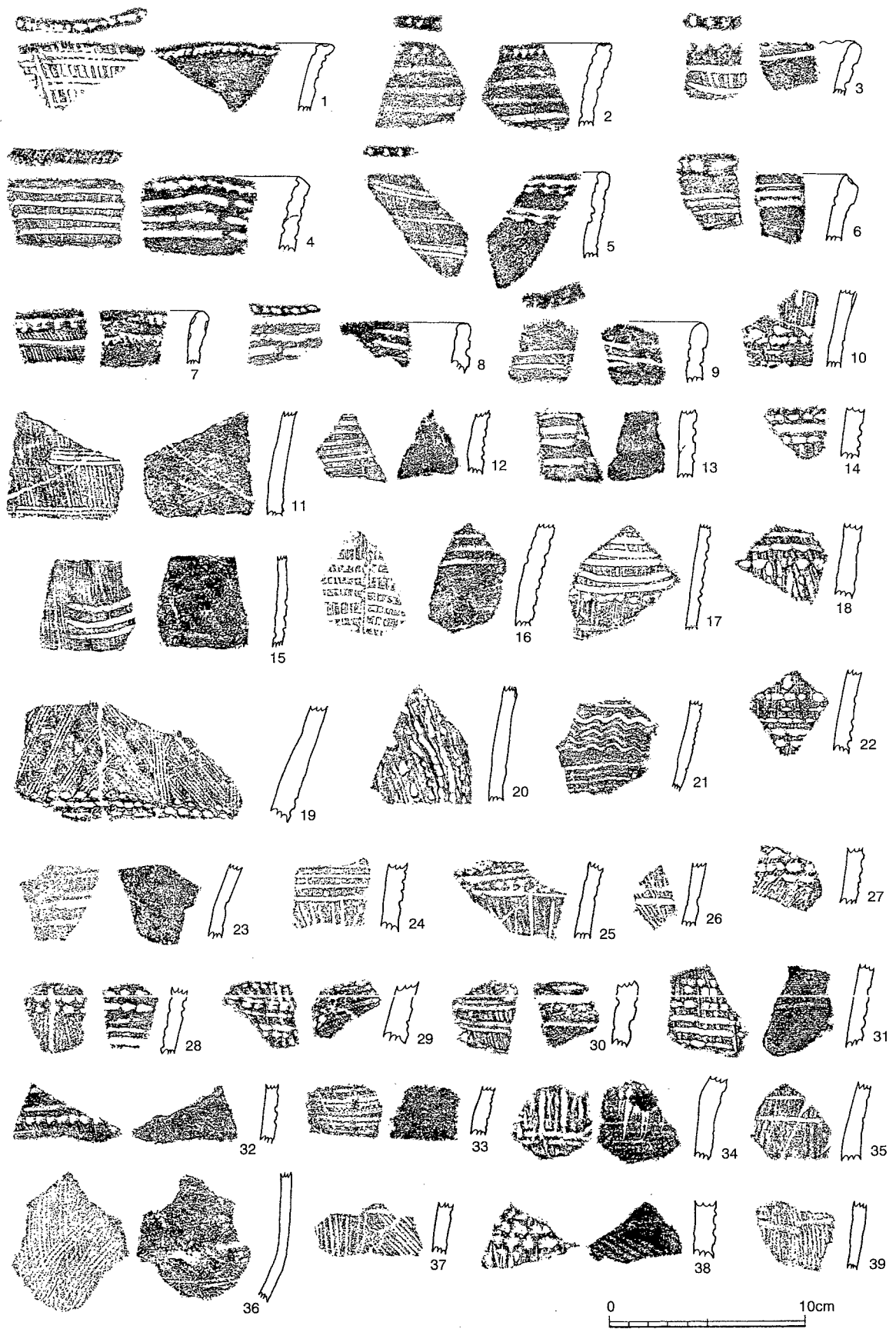
文様として貝殻腹縁により之の字文やその他の文様を施文、隆起線を貼り付けた土器の一群とそれに類する土器を第10類土器群として分類した。ただし、分類基準が曖昧なため第12類土器との区別が



第118图 7~9層出土土器実測図Ⅲ

困難なところもあり、今後さらに検討を加えたいと思う。なお、この一群にはかつて尾田式土器とされた土器を含んでいる。

第118図1は胴部破片である。縦に2列の刺突文を施し縦の空間によって文様を分割している。両側には貝殻腹縁を交互に施文する、所謂、之の字文を縦に3段に施文している。内面は横方向のヘラナデ調整である。2は口縁部破片、口唇部にヘラにより細い刻み目を入れる。外面には之の字文を縦に2段施文する。内面には同様の之の字文が施文されている。3は口縁部破片である。口縁に粘土を貼り付けて小さな突起をつけている。外面には狭い無文帯を置き1列の連続刺突文を横走施文している。その下には縦にした之の字文を2段にわたって施文している。内面も外面同様に狭い無文帯を置き連続刺突文を横走施文して、その下に之の字文を縦に帯状に施文している。4は口縁部小破片、口唇部にヘラにより細い刻み目を入れている。外面は狭い無文帯を置き、下に平行する沈線2条以上をめぐらしている。沈線間には連続刺突文が施文されている。内面には縦に之の字文が施文されるが、下半を失っている。補修孔1個が穿たれている。5は胴部破片、連続した貝殻押圧文を帯状に横方向に施文している。6は口縁部破片、口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。外面には口縁に狭い無文帯を置き、その下に狭い無文帯を挟んで帯状に2段の連続した貝殻刺突文を横走施文している。その上から2条の微隆起線を山形に貼り付け、その横には縦方向に5条の微隆起線文が貼り付けられている。内面は狭い無文帯を置きその下に帯状の連続した貝殻押圧文が横走施文されている。7は口縁部破片、外面は口縁に平行して2条の沈線で区画し、各段に刺突文を施文する。内面は連続した貝殻腹縁部の押圧文が帯状に施文される。8は胴部破片、上下2段に空白部を置いて之の字文が縦に帯状に施文されるが下段の文様は大部分を失っている。内面は丁寧なヘラ研磨調整である。9は口縁部破片、口唇部にはヘラによる刻み目が入られる。口縁直下にヘラによる斜位の短沈線が平行に連続的に施文され、その下には貝殻腹縁による押し引き文が帯状に施文されている。内面はヘラによる粗いナデ調整。10は口縁部破片、口縁に狭い無文帯を置き、その下に1条の刺突文、それにそれから垂下する刺突文が施文される。刺突文に囲まれた片方には貝殻腹縁による押し引き文が施文されている。内面も同様に口縁下に1条の刺突文をめぐらし、その下に貝殻腹縁による押し引き文を部分的に施文している。11は口縁部破片、口唇部に棒状工具により刻み目が入られる。外面は口縁下に刺突文をめぐらし、その下に貝殻腹縁による押し引き文を施文している。内面も同様に口縁下に刺突文をめぐらし、下に貝殻腹縁の押し引き文を施文するがヘラナデを加え文様が部分的に消えている。12は胴部破片、外面は無文帯を挟んで上下に之の字文を縦に施文しているが、文様の全形はわからない。内面にも之の字文を施文している。13も胴部破片、外面は縦に微隆起線文が貼り付けられている。上部に之の字文の端部があるが、欠損して全形は不明。内面にも之の字文の端部が確認できる。14は口縁部破片、口唇部は平坦に仕上げられる。外面は口縁直下に押し引き文が施文され、その下に2本単位の短沈線が間隔を持って施文される。内面は横ナデ調整。15は口縁部破片、外面は貝殻腹縁による押し引き文を2段に施文しているが、下段は約3分の2を失っている。内面には之の字文を縦に施文している。16は外面に間隔を持って縦に3条の刺突文を施文し、右側に貝殻腹縁の押し引き文を施文している。内面は最下段に刺突文1条をめぐらし、その上に貝殻腹縁による押し引き文を無文帯を挟んで2段に施文しているが、上段は殆ど失われている。17は胴部破片、内外面に貝殻腹縁による押し引き文を施文している。18も胴部破片、外面に之の字文を縦に帯状に施文している。内面に之の字文を縦に2段施文しているが、両方とも約半分を欠損している。19は胴部破片、外面には微隆起線を横に1条、縦に2条貼り付けている。内面には貝殻腹縁で押し引き文が施文されている。20は胴部破片、外面に貝殻腹縁の押し引き文を施文している。21も胴部破片、内外面共に貝殻腹縁による押し引き文を施文している。22～26、29、30、32～39はいずれも胴部破片である。22は外面に縦方向に貝殻腹縁に



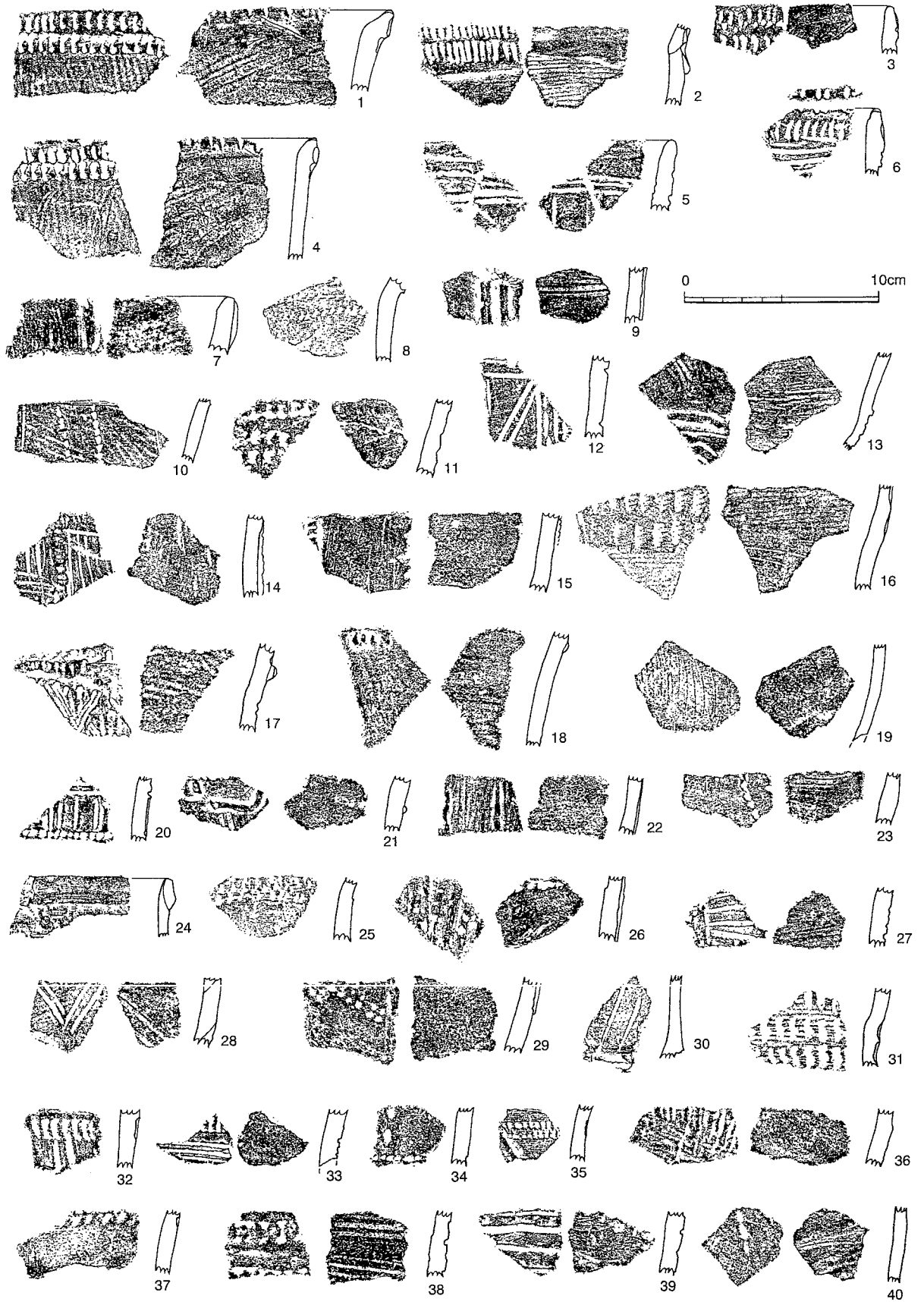
第119图 7~9層出土土器実測図IV

よる押し引き文を帯状に施文し、その左側には連続刺突文を斜位、縦位に施文している。23は外面に無文帯を挟んで上に貝殻腹縁による押し引き文を下に之の字文を縦に施文している。内面は横方向のヘラ研磨調整。24は外面に無文帯を挟んで貝殻腹縁による押し引き文を施文し、縦方向に微隆起線を貼り付けている。25は上位に縦方向に微隆起線文6条を貼り付けている。下には全面に貝殻腹縁による押し引き文を施文している。内面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整で仕上げている。26は無文帯を挟んで上下に貝殻腹縁による押し引き文を施文している。その上に縦位の微隆起線文を1条貼り付けている。27は口縁部破片、外面の口縁直下には円形の刺突文をめぐらし、その下に押し引き文を施文している。さらにその上に縦位の微隆起線文を3条貼り付けている。内面には単位の大きい押し引き文をめぐらしている。28は口縁部破片、口唇部にはヘラにより細い刻み目を入れ、外面には押し引き文を部分的に施文しその下に縦の沈線を2条入れている。内面にも押し引き文を施文している。27は外面に無文帯を挟んで縦に之の字文を施文する。内面には1条の押し引き文を入れている。30は破片の上部に押し引き文を施文している。31は口縁部破片、外面は口縁下に2条の押し引き文をめぐらし、縦位の微隆起線文1条を貼り付けている。内面には無文帯を挟んで2条の押し引き文をめぐらしている。32は外面に貝殻腹縁による押し引き文を2段に施文している。33は刺突文を楕円状にめぐらし、その下に無文帯を挟んで押し引き文をめぐらしている。34は破片の下位に押し引き文を施文する。35は破片の上位に之の字文を施文し、下に貝殻腹縁による押し引き文を施文している。36は外面に1条の連続刺突文を施文している。37、38は外面に押し引き文を施文している。39は外面に間隔を置いて縦に2条の連続刺突文を施文する。内面には無文帯を挟んで之の字文が上下2段に施文されるが上段は殆ど残っていない。

第11群土器 (第119図)

従来、轟C・D式土器として型式設定されていた土器の一群を一括し、説明を加える。

第119図 1～9は口縁部破片、10～39は胴部破片である。1は口唇部が平坦、棒状工具によって刻み目が入られる。外面は地文として細い平行斜線が施文され、その上に2本単位の竹管状の工具による沈線を3段にわたってめぐらしている。内面には1条の押し引き文が施文されている。2は全体に磨滅している。口唇部、口縁直下の内外面には刺突文が施文される。外面にはその下に3本の平行線が、内面には4本の平行線が施文されている。3は口唇部にヘラにより刻み目を入れ、外面には地文として細い縦の平行線を施文し、その上から2本平行線がめぐらされる。内面には1条の沈線がめぐらされる。4は口唇部に細い刻み目が入られる。外面には地文として浅く細い沈線を縦、斜め組合せその上に5条の平行した横線を入れる。内面は直下に押し引き文1条をめぐらし、下に3条の平行した短沈線をめぐらしている。5は口唇部に刻み目を入れる。外面には不鮮明であるが地文として斜線が施文されている。その上に2本単位の沈線を3条めぐらしている。内面は2本単位の工具によって押し引き文が2条が施文される。6は口唇部に棒状工具により刻み目が入られ、外面には他と同様の地文が施文され、3単位の沈線が入られる。内面にも同様の沈線がめぐらされる。7は口唇部に細い刻み目を入れる。外面には他と同様の地文が施文され、口縁直下には押し引き文が1条施文され、その下に沈線1条がめぐらされている。内面には2条の押し引き文が施文される。8は口唇部に刺突文が施文され、外面には1条の押し引き文が、その下に短沈線が横に2条めぐらされている。内面には短沈線3条が施文される。9は口唇部に刻みを入れるが不明瞭、内外面に2条の沈線をめぐらす。10は地文の上に押し引き文を施文している。11は地文の上に2本単位の沈線を上に2条密接して施文し、下に1条施文している。12は地文の上に3単位の沈線3条めぐらしている。13は短沈線を横に4条並列施文している。14は地文の上に上下に連続刺突文を施文し、その間に押し引き文1条を施文している。15は地文の上に弧状に平行した3条の沈線を施文している。16は地文の上から7条の



第120图 7~9層出土土器実測图V

短沈線を施文している。内面には3条の沈線をめぐらしている。17は地文の上に5条の沈線をめぐらす。その下に連続刺突文を施文している。18は地文の上から2単位の沈線をめぐらし、その下に連続刺突文を施文している。19の地文は縦、斜めに施文され文様を形成している。その上に3条の連続刺突文を施文している。20は地文の上に斜位に連続刺突文を施文している。21は5単位の工具で波状文を施文し、その下に同様の工具で直線文を描いている。22は地文の上に5条の連続した刺突文を施文している。23は地文の上に3条の沈線をめぐらしている。24は外面に細い沈線で4条の平行横線をめぐらし、下に6条の縦線を施文している。25は前者と同様の文様構成である。横線間に刺突文をめぐらしている。26は地文の上に1条の沈線をめぐらしている。27は地文の上に3条の連続刺突文をめぐらしている。28は地文の上に2条の連続刺突文をめぐらし縦の沈線1条を施文する。内面には2条の連続刺突文と沈線がめぐらしている。29は地文の上に3条の押し引き文を施文している。30は地文の上に凹線2条をめぐらしている。内面に3条の沈線をめぐらしている。31は地文の上に3条の連続刺突文と沈線をめぐらしている。32は地文の上に2条の沈線と1条の連続刺突文を施文している。33は2単位の沈線3条をめぐらしている。34は地文の上に2条の沈線をめぐらし、縦の沈線4条を交差させている。35は地文の上に2条、37は1条、39は食い違う1条の沈線をめぐらしている。36は地文のみ施文されている。38は地文の上に3条の連続刺突文を施文している。

第12群土器 (第122図15、16)

従来、曾畑I式土器と型式設定された土器の1群である。本遺跡から出土した土器は非常に少なく10点前後があるに過ぎない。第122図15、16がそれである。最下層の砂利層からの出土である。2点共に磨滅が著しい。15は胴部破片、16は底部破片である。共に棒状の工具で幾何学文様を的確に施文する。胎土には多量の滑石が混入されている。

第13群土器 (第120図～第123図)

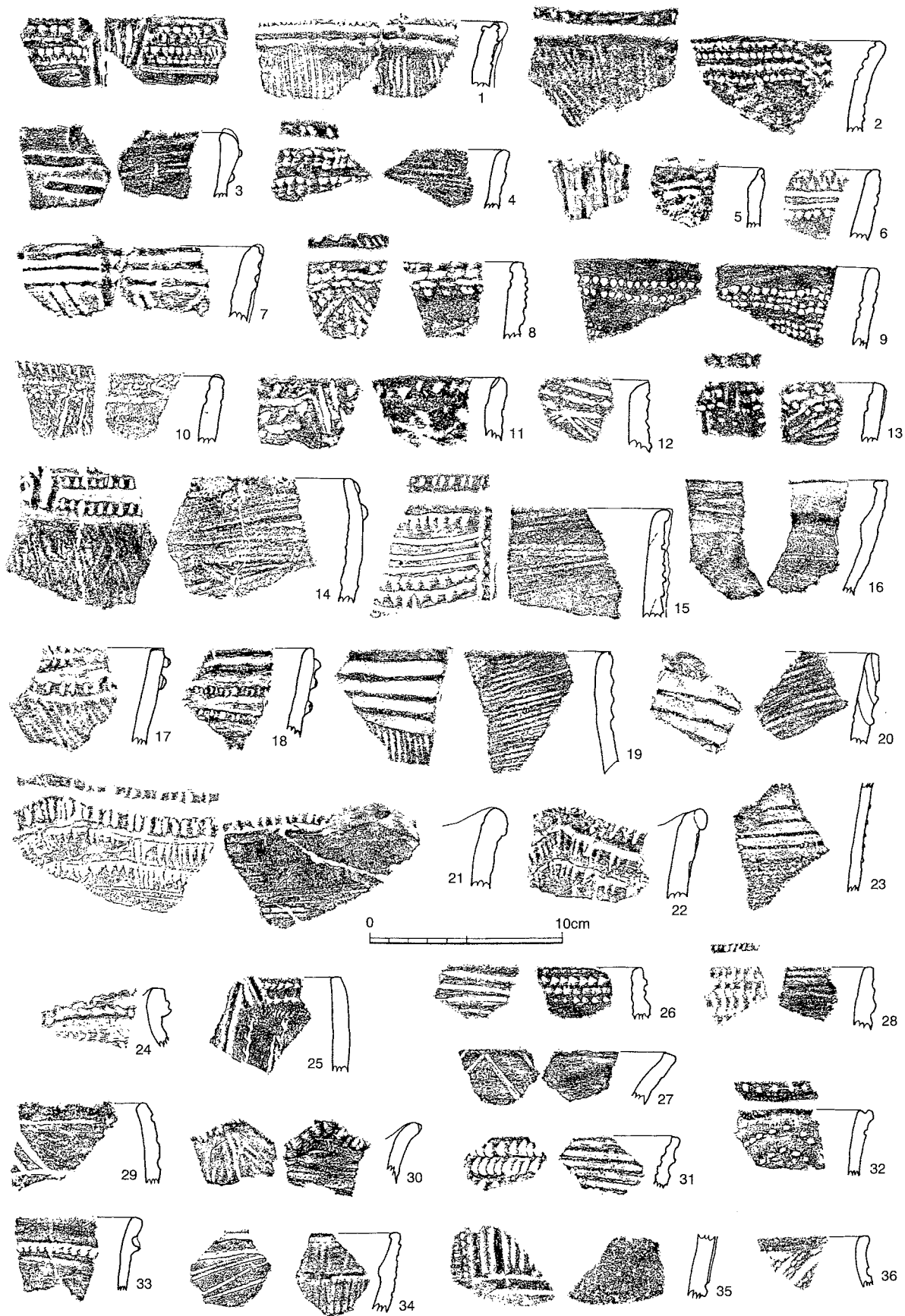
口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、その部分に文様を施文している土器の一群を第13群土器として分類した。第120図I、2、4、24、第121図21、22、24、第123図4、7がある。第120図I、4は同一個体の可能性もある。口唇部にヘラにより刻み目を入れる。外面は縦方向から斜め方向の貝殻条痕調整。口縁部肥厚帯とその直下に爪形文を連続施文している。内面は斜め方向の貝殻条痕調整である。粘土接合面が擬口縁状に明瞭に残っていて、粘土帯は幅1.5cm前後である。2は口縁端部を欠損している。口縁部肥厚帯に2段に、下から突き上げた刺突文が短直線状に連続施文されている。肥厚帯の端部には段が形成される。内面には粘土帯の接合部が明瞭に残っている。その下方は横方向の貝殻条痕調整である。8は口縁部を欠損しているがわずかに口縁部肥厚帯が残っている。肥厚帯には刺突文が施文され、その下に幅の狭いヘラにより押し引き文が2段に施文されている。24は口縁部に幅1cmの粘土帯を貼り付けて肥厚させている。肥厚帯には文様はない。内外面共に横方向のヘラナデ調整である。第121図21は低い山形口縁をなす。口唇部にはヘラにより刻み目が入られる。口縁部肥厚帯にはヘラにより細長い刺突文を連続的に施文している。肥厚帯の端部には段が形成される。その下には幅1cm強のヘラ状の工具で押し引き文が2段に施文されている。内面は横方向の貝殻条痕を施した後に、上から横方向のヘラ研磨を加えている。22は1と同一個体の可能性もある。口唇部にはヘラによる刻み目があるが不規則である。口縁部肥厚帯には部分的に刺突文が加えられる。その下には幅1cm強のヘラにより押し引き文が2段に施文される。内面は丁寧なヘラ研磨調整である。24は口縁部小破片、口縁は低い山形をなす。口唇部には棒状工具によって刻み目が入られるが規則的ではない。口縁部肥厚帯には下端に沿って連続刺突文が施文される。下端部には大きな段ができる。その下には幅0.7cm前後のヘラで押し引き文が2段に施文されるが下段は殆ど残っていない。第123図4は他の例とは若干異なるが、口縁部が肥厚するのでこの1群に入れた。口縁は大きく外傾しながら立ち上がる。

復元口径19.5cm。幅広く粘土帯を貼り付け4段に成形されている。外面は丁寧にヘラ研磨が加えられている。内面は横方向の貝殻条痕を加え、上からヘラ研磨が施される。7は胴部が膨らみ口縁はほぼ垂直に立ち上がる。口縁には幅2cm弱の粘土帯を貼り付け断面三角形に肥厚させている。肥厚帯には細く短い刺突文が3段に連続して施文されている。肥厚帯の段は高い。胴部はヘラナデ調整であるが凹凸がある。内面も同様の調整である。外面にはススが付着している。復元口径30.0cm。

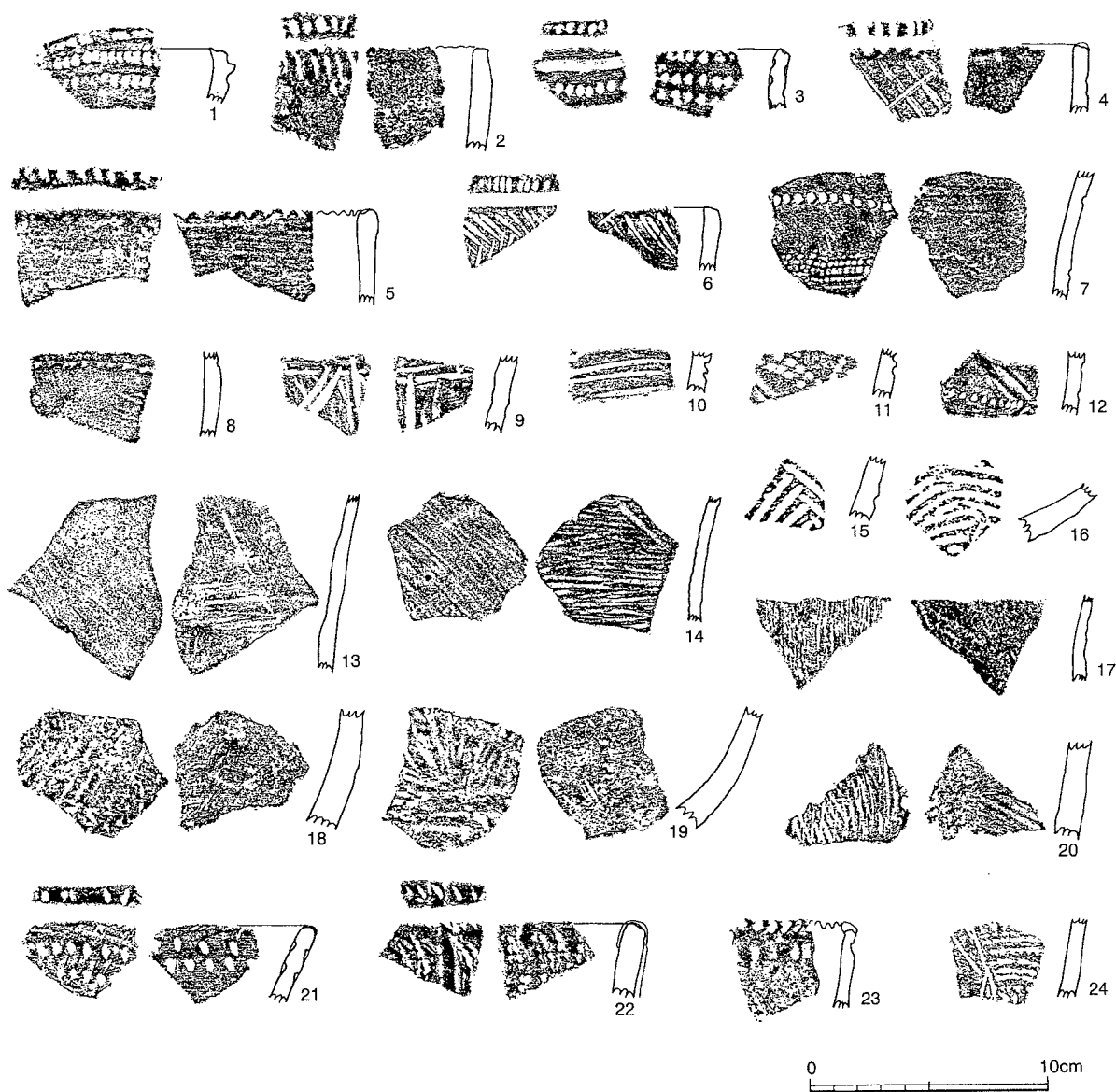
その他の土器群

第120～123図に示した土器について一括して説明する。なお、これまで述べた各群に該当するものも多量に含まれている。図版の関係であることを了承されたい。

第120図3、5、6、7は口縁部破片、他は胴部破片である。3は2段に貝殻の押圧文を施文している。5は口縁下に1条、やや離れて2条の沈線をめぐらしその間に押し引き文を施文、内面は口縁部に無文帯を置き、その下に3条の沈線をめぐらしている。さらにその下に縦線1条を施文している。6は口唇部にヘラで刻み目を入れる。口縁下に爪形文を施文、下に4条の沈線を施文している。7は口縁から縦に微隆起線文が貼り付けられている。9は2本の微隆起線文が縦に平行に貼り付けられている。10は斜位の貝殻条痕で調整され、押し引き文が斜位に2条施文される。11は押し引き文が3段に施文される。12は横、縦、斜位の沈線で文様を構成している。13は横方向に微隆起線文1条を貼り付けその下に横線と2条の波状に沈線が施文される。14は縦に隆起線文が貼り付けられ、刻み目が入られる。その両側には横、縦線を施文し方形の文様が入られる。15も縦の隆起線文1条が貼り付けられ、刻みが施文される。16は内外面に横方向の貝殻条痕を施す。その上に貝殻の押圧文を2段に連続施文している。17は上位に刻み目の突帯をめぐらし、その下に沈線で三角形を描いている。18は外面が縦方向、内面が横方向の貝殻条痕で調整される。上位に刻み目突帯1条をめぐらしている。19は外面に極めて細い沈線でやや弧状の縦の平行線が描かれている。20は下端に刺突文を連続施文し、上端に沈線2条をめぐらし、間に縦線5条を入れて区画している。21は曲線の微隆起線文を貼り付けている。22は縦に平行した微隆起線文2条を貼り付けている。23は刺突文を斜位に連続施文している。内面には上位に押し引き文を施文している。25は上位に3段の刺突文を連続施文している。26は縦の微隆起線文2条を貼り付けている。内面は上端に押し引き文を施文している。27は縦に刻み目を入れた微隆起線文を貼り付け、横には4条の横線を施文している。28は外面が2条の沈線で山形を描いている。内面は2条の斜線を施文している。29は連続刺突文を斜位に施文している。30は口縁部付近の破片である。口縁端部を欠損している。2条の斜線を施文する。31は貝殻の押圧文を3段に施文する。32は上位に爪形文を横に連続施文し、下位に縦の沈線2条を施文している。33は上位に縦の平行沈線3条を、下位に横の平行沈線3条を施文している。34は左端に縦方向の刺突文、下端に横方向の連続刺突文各1条を施文している。35は左端に斜位の微隆起線文を貼り付け、その横に横方向の貝殻押圧文を帯状に施文している。36は外面に縦方向の条痕を施文している。37は上端に連続刺突文を1条施文している。38は外面に横方向の押し引き文を帯状に2条施文している。内面は横方向の条痕を施す。39は横方向の平行沈線を4条施文する。40は外面に縦方向の押し引き文1条を施文するが途中で終わっている。内面は横方向の条痕である。第121図1～20、25～34、36は口縁部破片である。23、35が胴部破片である。1は中心の文様として微隆起線文をV字形状に貼り付け、口縁部と微隆起線の交点には瘤状の粘土を貼り付け小さな突起をつくり出している。微隆起線の間には縦の沈線3条を施文している。微隆起線の両側には押し引き文を2段に施文している。口唇部には沈線1条をめぐらしている。内面は口縁直下に微隆起線文1条をめぐらす。器面には縦方向の条痕を施している。2は口縁部が外反する。外面に縦、斜位の条痕を施す、口唇部には浅い刻み目が入られる。内面には4条の連続刺突文を施文する。刺突文は1箇所を下に向かって集約される。3は口縁外面から口唇部にかけて

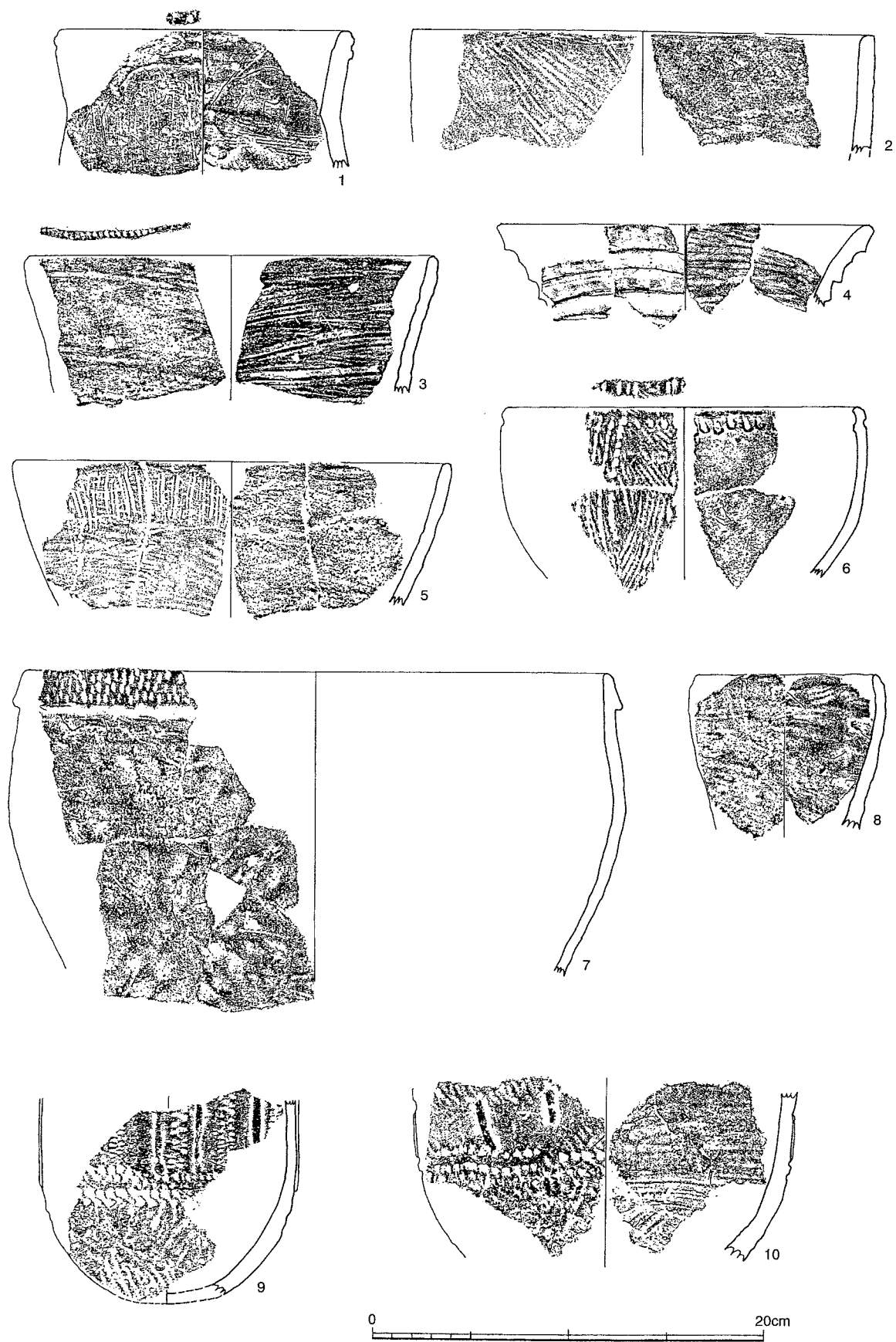


第121图 7~9層出土土器実測図VI



第122図 7～9層出土土器実測図Ⅶ

縦に短い微隆起線を貼り付け、その下に微隆起線2条を横位に貼り付けている。内面は横方向の条痕を施す。4は口唇部に刻み目を入れ、外面には狭い間隔を置いて上下2段に押し引き文を施文する。5は外面に立ての微隆起線文5条を貼り付け、内面には横方向の押し引き文2条を施文している。6は口縁下に2条の連続刺突文をめぐらし、その下に2条の平行沈線をめぐらし区画して、さらに下に1条の連続刺突文をめぐらしている。7は口縁に3条の微隆起線を平行にめぐらし、その下に斜位の微隆起線を貼り付けている。また、縦方向に1条の隆起線を貼り付け、口縁部に小さな突起を作り出している。8は外面の口縁下に3条の連続刺突文をめぐらし、その下に2条の連続刺突文を山形に配し、間を刺突文で埋めている。内面には4条の連続刺突文がめぐる。口唇部には部分的に細かい刻み目を入れる。9は口縁の内外面に無文帯を置き、外面には2条の連続刺突文を施文する。破片の肩にも刺突文があるが、文様構成は不明。内面は3条の連続刺突文が狭い無文帯を挟んで2段に施文する。10は口唇部に刻みを入れる。外面は連続刺突文を2段にめぐらし、縦の2条平行線を施文する。内面には連続刺突文と沈線1条がめぐる。11は連続刺突文と押し引き状の沈線を交互に施文する。右に区



第123图 7~9層出土土器実測図Ⅷ

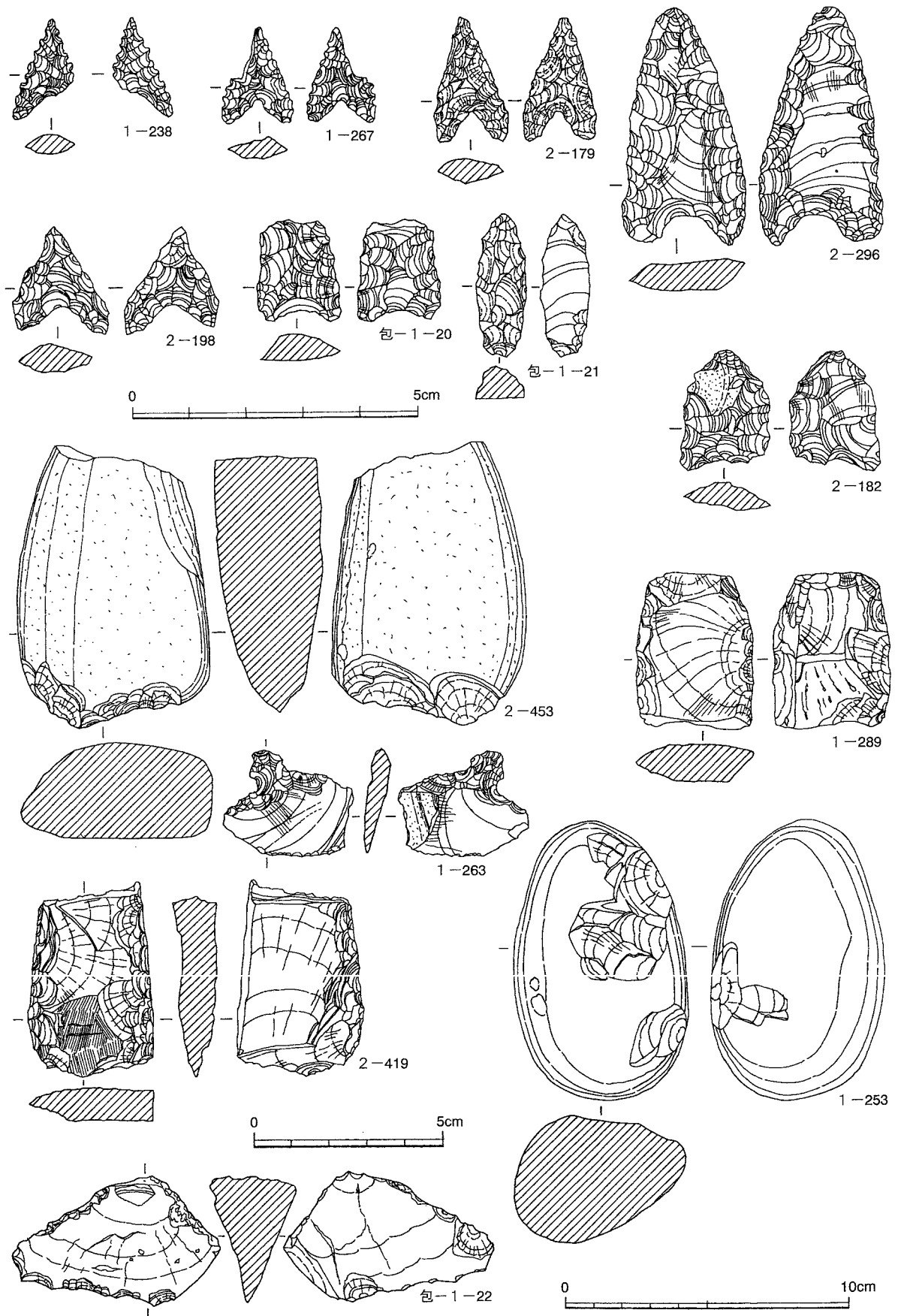
面の沈線を入れ、右側も同様の文様を施文する。内面は連続刺突文1条がめぐる。12は外面に沈線3条をめぐらしその下に斜線を施文するが、文様構成は不明。沈線間には刺突文を施文する。13は口唇部に刻みを入れる。外面は3段に連続刺突文を施文し、その上に縦方向の微隆起線文2条を貼り付けている。内面も3段に連続刺突文を施文している。14、17は同一個体の可能性がある。器面は斜位の条痕で調整する。口唇部とその下に2条の隆帯をめぐらしている。隆帯には棒状工具により刻み目を施文する。部分によって隆帯間を結ぶように粘土紐を2条貼り付ける。内面は横方向の条痕調整である。15は口唇部に棒状工具により刻み目を入れる。口唇部とそれに直交して隆帯が貼り付けられる。縦の隆帯には棒状工具で刻み目を入れる。口縁下に押し引き文1条をめぐらし、下に3条の平行沈線を弧状に施文、さらに2段の押し引き文、1条の沈線をめぐらしている。内面は横方向の条痕調整である。16は口唇部は平坦で内側に張り出す。外面様の浅い凹線をめぐらす。内面には屈曲部ができています。18は外面に3条の隆帯をめぐらしている。下の2条に刻み目が施文される。19は4条の凹線がめぐる。凹線間は隆帯状になる。凹線の下は縦の条痕を丁寧に施文している。内面は斜位の丁寧な条痕調整である。20は口縁部に粘土帯を貼り付け、肥厚させる。隆起線文を斜位に3条貼り付けている。23は破片の上位に横方向の微隆起線が4条貼り付けられている。25は口縁に2条の押し引き文を施文し、斜位に微隆起線を貼り付けている。縦に貝殻の押圧文がある。26は口縁に3条の横方向の沈線をめぐらし、その下に隆帯1条をめぐらしている。内面には3条の押し引き文を施文する。28は口唇部にヘラで刻み目を施文する。外面には押し引き文を4段に施文する。内面は横方向の貝殻条痕の上からヘラナデを施す。27は山形の沈線を施文し、その両側には山形に平行した斜線を施文する。内面は横方向のヘラ研磨調整である。29は口縁部と約2.5cmの間隔を置いて2条の平行沈線を施文し、その間に平行した斜線を施文している。30は口縁が低い山形をなす。口唇部にはヘラ状工具で刻み目を入れる。外面は縦、斜位の条痕で調整する。内面は横方向の貝殻条痕を加えた後にヘラナデを加えている。31は外面に爪形文を3段に施文している。内面は横方向の貝殻条痕調整である。32は口縁端部外面が外に張り出し、口唇部は平坦に仕上げている。口唇部には刺突文を施文する。外面には重弧文状に刺突文を施文している。内面はヘラナデ調整。33は口縁下に狭い無文帯を置き、その下に微隆起線を貼り付け、微隆起線の直上に押し引き文を施文している。34は外面に不規則な斜線6条を施文している。内面には縦の条痕を施す。屈曲部があり稜線となっている。35は破片の下端に隆帯1条をめぐらし、その上に縦の平行した隆線2条を貼り付けている。隆線間は無文、隆線の左側は縦の連続刺突文3条を施文し、隆線の右側には縦の平行沈線3条を施文している。36は口縁が大きく外反する。斜線3条を施文し沈線間に刺突文を施文する。第122図1～6、21～23は口縁部破片、他は胴部破片である。1は口唇部から外面にかけて3条の押し引き文を施文している。2は口唇部に刻みを入れ、口縁には縦の短沈線を平行に施文する。3は口唇部に刻み目を入れる。外面に1条の沈線をめぐらし、その下に連続刺突文を施文、内面には3条の連続刺突文をめぐらしている。4は口唇部に刻み目を入れ、外面には沈線で斜格子を描く。5は口唇部にやや深い刻み目を入れる。内外面は横方向の条痕調整。6は口唇部に刻み目を入れる。外面に羽状文を施文、内面には斜めの平行線を施文する。7は破片の上方に連続刺突文を1条めぐらす。無文帯を挟んで貝殻腹縁の押し引き文を施文している。8は破片の上方に押し引き文1条を施文。9は内外面に横、縦、斜の沈線で文様を構成している。10は3条の沈線をめぐらしている。11は微隆起線が貼り付けられ、横に連続刺突文2条を施文している。12は斜位の微隆起線2条を貼り付け、1条の連続刺突文を施文している。13、14、17～20は無文、内外面に条痕を施す。21は口唇部に刻み目を施す。内外面に2条の連続刺突文を施文している。22は内外面に之の字文を施文、外面に縦の微隆起線文を貼り付けている。23は口唇部に刻み目を入れている。直下に刺突文をめぐらしている。24は縦に沈線を入れ、破片右側に押し引き文を施文している。第123図は復

元した土器である。1は頸部で屈曲し、口縁は外傾しながら直線的に立ちあがる。口縁部に2条の隆帯をめぐらす。隆帯には刻み目を施す。復元口径14.6cm。2は口縁がまっすぐに立ち上がる。外面は斜位の貝殻条痕、内面は横のヘラナデ調整である。復元口径23.6cm。3は口縁が外傾しながら立ち上がる。口唇部に刻みを入れる。内外面共に横の条痕調整。復元口径21.2cm。5は椀形の器形をなす。内外面ともに横の条痕調整。口縁に立て方向の条痕を施文し、文様としている。復元口径22.6cm。6は椀、半球状をなす。口唇部には刻みを入れる。外面は縦～斜位の貝殻条痕調整。口縁内外面に刺突文をめぐらし、外面には縦の押し引き文4条を単位として等間隔に施文している。復元口径18.6cm。8は小型品。内外面共に条痕の上にナデを加える。復元口径9.6cm。9、10は共に丸底をなす。地文は貝殻条痕調整。9は下半に押し引き文2条をめぐらしその上に微隆起線を縦に3条間隔を持って貼り付け、間に押し引き文を縦に施文している。10は下半に連続刺突文2条をめぐらし、その上に間隔を置いて押し引き文を施文し、その間に微隆起線文2条を貼り付けている。9、10は第10群土器である。

(2) 第7層の石器

同層から出土する石器には、石鏃、石匙、磨製石斧未製品、スクレイパー、礫石器、石錘、砥石、石皿、磨石、叩石、凹石等がある。石器の絶対量は少ない。

第124図は石鏃、石匙、磨製石斧未製品、スクレイパーを図示した。1-238、1-267、2-179、2-296、2-192、包-1-20、包-1-21、2-182は石鏃である。1-238は黒曜石（針尾島）、1-267は黒曜石（腰岳）を素材とする。ほぼ同じ形態を有する。やや身の長い二等辺三角形をなし、基部の挟りは三角状でやや深い。側辺に鋸歯列をつくり出す。1-238は脚の一方を欠損、1-267は先端から側辺の一部を欠損する。1-238は長1.8cm、幅1.1cm+ α 、厚0.35cm、重量0.32g。1-267は長1.7cm+ α 、幅1.2cm、厚0.35cm、重量0.37g。2-179はサヌカイトを素材とする。身の長い二等三角形をなし、基部の挟りはやや深い。全体にやや粗い押圧剥離を加え整形している。長2.2cm、幅1.3cm、厚0.4cm。2-198はチャート素材とする。正三角形に近い形態であるが、一側辺がやや短く、先端部が中軸線よりずれる。基部の挟りは三角形でやや深い。全体に押圧剥離を加え整形する。長1.9cm、幅1.7cm、厚0.5cm、重量0.94g。包-1-19は黒曜石（腰岳）を素材とする。身の長い石鏃であるが先端部を欠損する。基部の挟りは浅い。長1.8cm+ α 、幅1.5cm、厚0.4cm、重量1.12g。包-1-21はサヌカイトを素材とし、柳葉形をなす。断面形は略三角形をなす。片面は両側からやや粗い剥離を加えて整形し、他の片面は主要剥離面のままで、基部にわずかに細部加工が施される。長2.5cm、幅0.9cm、厚0.5cm、重量1.17g。2-296は黒曜石（針尾島）を素材とした大型の石鏃である。長身の石鏃で基部の挟りは台形状で浅い。先端部は尖らず丸くなる。表裏共に中央部に剥離面を大きく残している。周縁部には表裏共に細部加工を施し整形している。長4.2cm、幅2.2cm、厚0.5cm。2-182は黒曜石（腰岳）を素材とする。やや粗い剥離を加え五角形に整形している。基部には浅い挟りを入れる。片面に自然面を残し、先端部が折断されたままになっており、未製品の可能性もある。長2.1cm、幅1.6cm、厚0.4cm。2-453は玄武岩の円礫を利用した磨製石斧未製品である。短軸の一辺に両面から剥離を加え刃部を形成している。刃部以外には加工の痕跡はなく、自然面のままであるが、頭部を欠損している。これが製作中断の原因とみられる。平面形は揆形をなす。長9.8cm+ α 、幅5.0～6.8cm、厚3.6cm、重量358g+ α 。1-289は砂岩の大型剥片を素材とした磨製石斧未製品と考えられる。横剥ぎの剥片であり、平面形は長方形をなすが、半折して約半分を欠損している。片面の一部に自然面を残している。側辺には両面から剥離を加えて整形している。短軸の一辺には両面から剥離を加えている。刃部形成とも考えられるが、頭部の可能性もあり判断しがたい。形状等からすれば扁平片刃石斧の未製品と考えられる。長5.4cm+ α 、幅4.2cm、厚0.9～1.4cm、重量49g+ α 。1-263はチャートの剥片を素材とした石匙である。横剥ぎの剥片を利用し、対面と反対のエッジを刃部として使用する。刃部には使用による

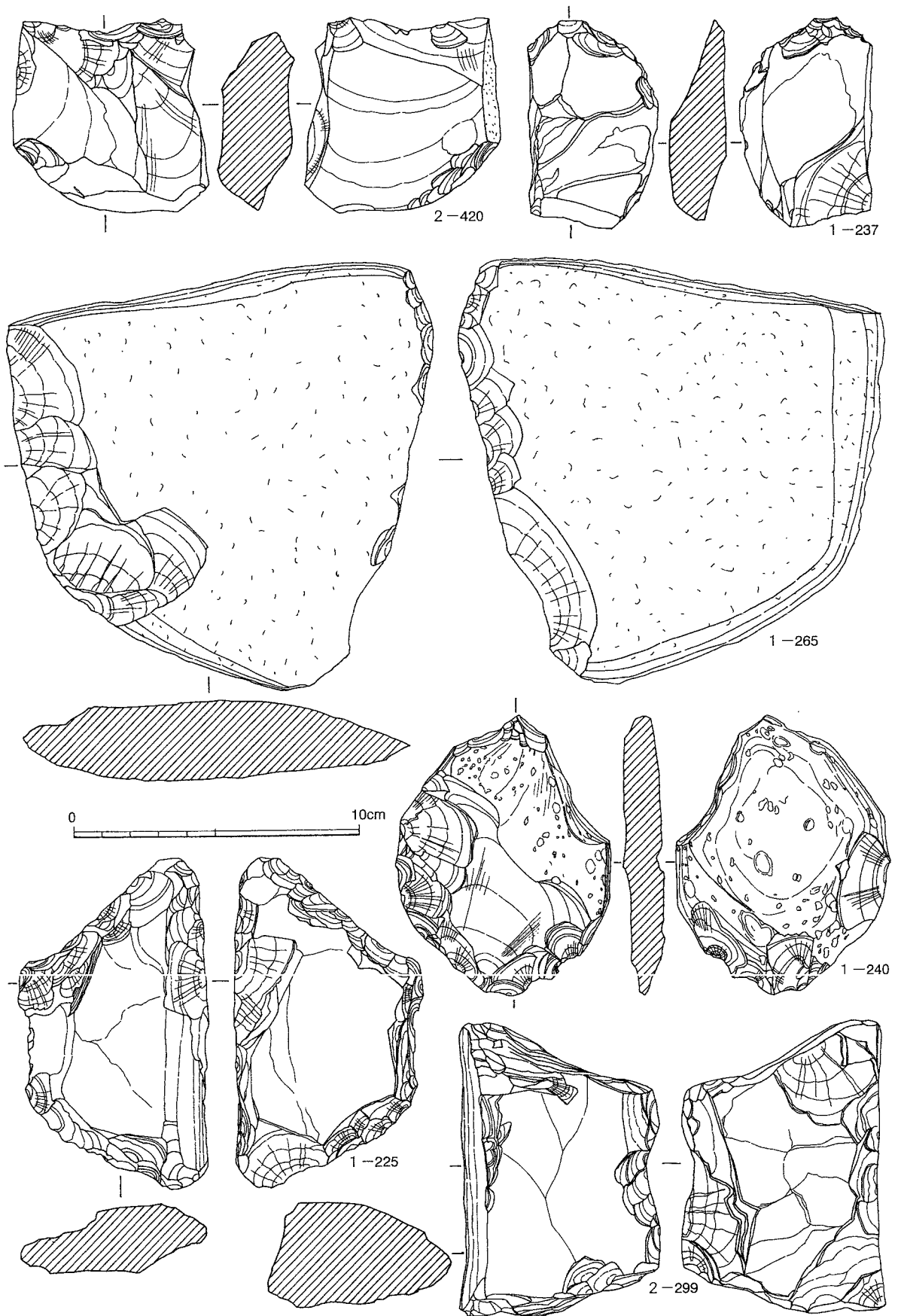


第124图 7层出土石器实测图 I

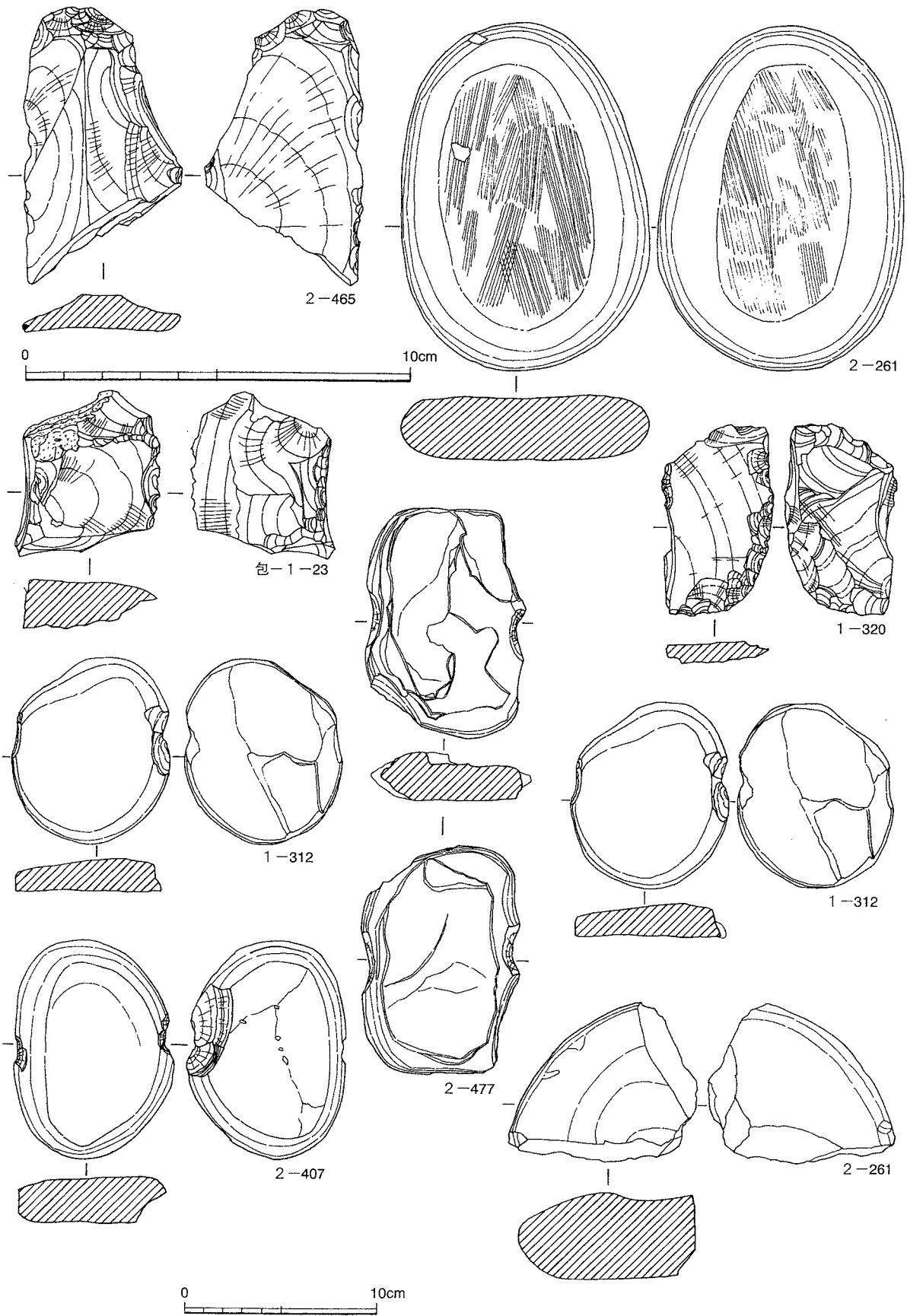
小さな剥離痕がみられる。対面側には両面からいねいな剥離を加え、つまみ部分がつくり出されている。片面に一部自然面を残している。小型の石匙である。長2.8cm、幅3.4cm、厚0.5cm、重量4.8g。2-419は頁岩の剥片を素材とした磨製石斧未製品である。頭部の一部を欠損する。平面形は揆形をなすと考えられる。側辺には細かい剥離を加えて整形している。刃部も片面から大きい剥離を加えて形成するが、剥離はスラップしている。剥離が加えられ面の反対の面には研磨を加えている。長6.8cm+ α 、幅3.6~4.4cm、厚1.5cm、重量59g+ α 。1-253は頁岩の円礫の一部に剥離を加えたものである。石材や剥離の入れ方から石斧未製品を考えて良い資料である。石材を選別した直後の資料と考えられる。長9.7cm、幅6.2cm、厚4.4cm、重量367g。包-1-22はサヌカイトの横剥ぎの剥片を利用したスクレイパーである。打面は自然面を利用している。対面と反対側のエッジに片面から剥離を加えて刃部を形成する。長3.3cm、幅5.6cm、厚2.3cm、重量9g。

第125図は礫石器を図示した。2-420は頁岩の礫を利用する。平面形は不整形をなす。片面は大きく剥離され、他の一面には自然面を残す。短軸の一辺に片面から剥離を加え、抉り部をつくり出す。抉りは浅い。長6.7cm、幅6.9cm、厚2.5cm、重量167g。1-237は頁岩の円礫を利用した礫石器である。平面形は不整形をなす。短軸の一辺に両面から剥離を加え刃部を形成する。他の一辺に片面から大きな剥離を加えている。長7.3cm、幅4.6cm、厚2.0cm、重量76g。1-265は安山岩の大型の扁平礫を利用した礫石器である。平面形は不整形をなす。相対する二辺に錯行関係で剥離を加えて刃部を形成する。長14.8cm、幅14.9cm、厚2.8cm、重量832g。1-240はサヌカイトの扁平礫を利用した礫石器である。平面形は不整形をなす。短軸の一辺を中心として約半周に両面から剥離を加え刃部を形成している。両面に自然面を大きく残している。長9.6cm、幅7.6cm、厚1.4cm、重量140g。1-225は安山岩の扁平礫を素材とした礫石器である。平面形は台形をなし、四辺に両面から剥離を加えて刃部をつくり出している。両面の中央部には自然面を多く残している。四隅の角のうち三ヶ所の角(尖頭部)は使用により摩耗し丸くなっている。長11.4cm、幅6.7cm、厚2.4cm、重量216g。2-299は安山岩の円礫を利用した礫石器である。礫の両端部が折断され、平面形は台形状をなし、前者と極めて類似している。台形の上辺にあたる一辺に敲打によって両面に剥離が加えられ、浅い抉りが形成されている。抉りは深さ0.5cm、双角状礫石器の一種と考えられる。長10.1cm、幅7.0cm、厚2.0~3.5cm、重量326g。

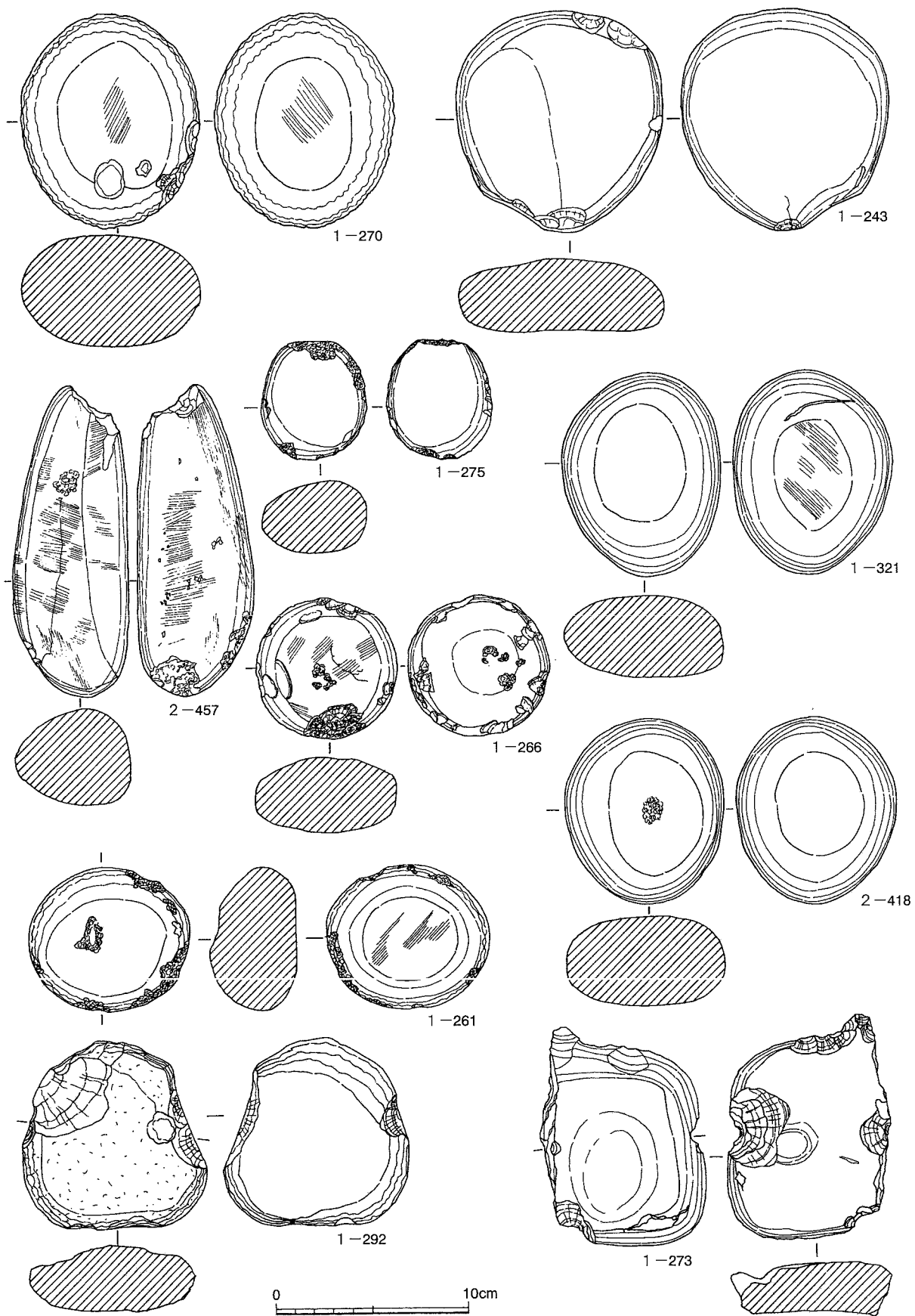
第126図はスクレイパー、凹石、石錘、石皿を図示した。2-465は頁岩の不定形剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は不整形をなす。長軸の一辺に片面から細かい剥離を加え刃部を形成する。長7.1cm、幅4.1cm、厚1.0cm、重量24g。包-1-23はサヌカイトの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は不整形をなす。一部に自然面を残す。長軸の一辺に片面から細部加工を施し刃部を形成している。長4.3cm、幅3.8cm、厚1.2cm、重量24g。2-261は大型の砂岩の扁平礫を利用した石皿あるいは砥石と考えられる石器である。平面形は長楕円形、表裏二面の中央部に長軸に沿った擦過痕が顕著に認められ、わずかに凹む。長径18.0cm、幅12.8cm、厚3.3cm、重量1250g。1-320は頁岩の不定形剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は不整形をなす。円弧状のエッジ部に片面から細部加工を施し刃部を形成する。また、主要刃部と相対する辺にも錯行関係で細部加工を施し細かい刃部を形成する。長5.0cm、幅3.0cm、厚0.6cm、重量10g。1-312、2-407、2-477は扁平礫を利用した石錘である。1-312は砂岩円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺に片面から剥離を加えて抉りを入れる。長 ϕ cm、幅8.2cm、厚1.7cm、重量174g。2-407は硬質砂岩の円礫を利用。長軸の相対する二辺の中央部に一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離を加え抉りを入れる。長11.1cm、幅8.2cm、厚2.3cm、重量306g。2-477は砂岩の円礫を利用。平面形は不整形の楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長11.6cm、幅8.1cm、厚2.5cm、重量260g。2-261は砂岩の円礫を利用した石皿ないしは砥石である。大



第125图 7層出土石器实测图Ⅱ



第126图 7層出土石器実測図Ⅲ



第127图 7層出土石器実測图IV

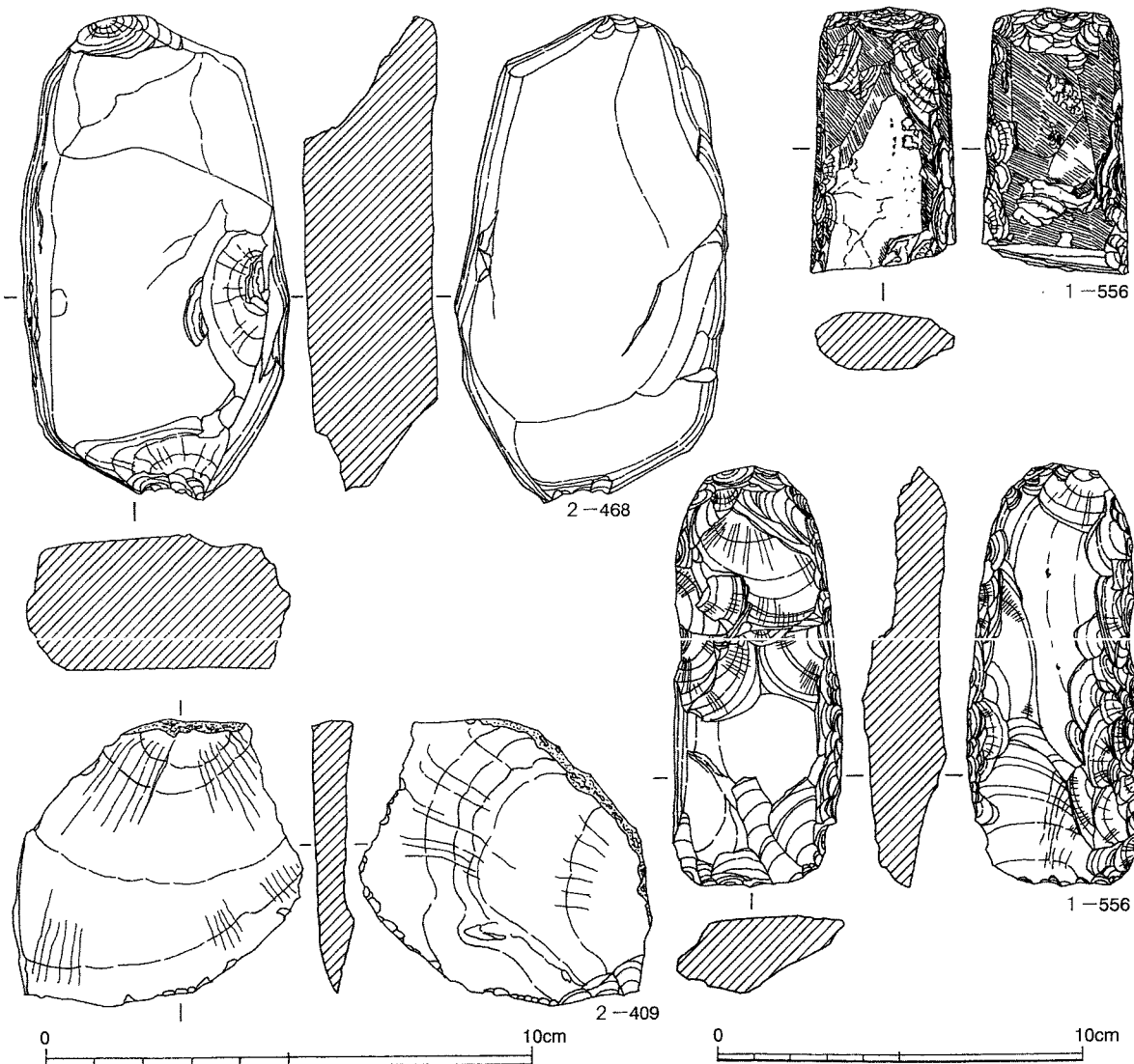
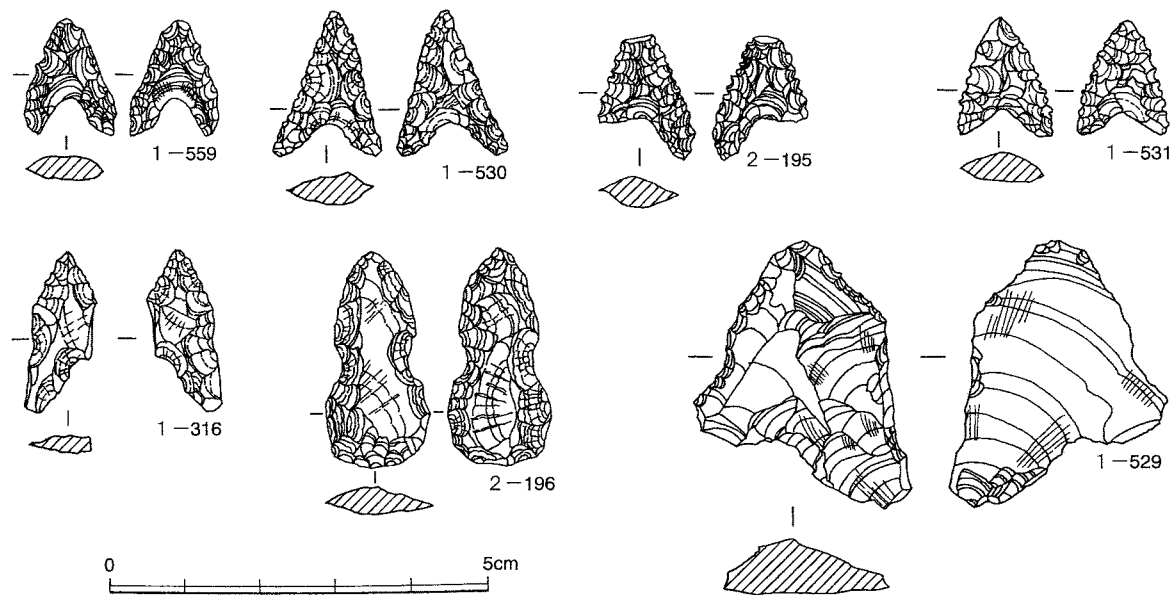
型の円礫であるが大部分を欠損している。一面に大きな凹みがあり石皿状をなすが、あまり使用痕が明瞭でない。反対面は砥石として使用され擦過痕が明瞭に残っている。現状で長径9.8cm、短径8.3cm、厚4.5cm、重量402g。

第127図は磨石、叩石、凹石、石錘を図示した。1-270は安山岩の円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなす。表裏二面が磨石として使用されるが、磨面の範囲は狭く、使用の初期段階の資料とみられる。長11.0cm、幅9.2cm、厚5.7cm、重量712g。1-243は粒子の粗い砂岩の扁平円礫を利用した叩石である。平面形は不整形、側面に部分的に打痕が観察できる。長径11.4cm、短径10.4cm、厚3.8cm、重量678g。2-457は砂岩の棒状の円礫を利用した磨石、叩石である。全体に長軸に直交した擦過痕が顕著に認められる。一般的な磨石とは異なった使用法が考えられる。両端部には敲打痕が顕著で叩石としても使用されている。一方の端部は欠損している。現状で長径16.2cm、短径6.1cm、厚5.0cm、断面形は隅丸の三角形をなす。重量612g。1-275は安山岩の小円礫を利用した叩石である。平面形は楕円形、側面から叩石として使用されているが、短辺の一边の使用が顕著で平坦面が形成されている。長径6.1cm、短径5.5cm、厚3.7cm、重量132g。1-266は安山岩の小円礫を利用した磨石、叩石である。平面形は円形、二面が磨石として使用されているが、片面がより使用されている。側面は叩石として使用され平坦になっている。長径7.5cm、短径7.4cm、厚3.9cm、重量258g。1-321は安山岩の円礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなす。表裏二面が磨石として使用されるが、磨面は狭い。長10.5cm、幅8.4cm、厚4.2cm、重量540g。1-261は安山岩の円礫を利用した凹石、叩石、磨石を兼ねた石器である。平面形は楕円形をなす。一面が磨石として使用されるが、磨面は狭いが平坦になる。磨面と反対面の中央部より片寄った所に敲打が加えられ凹みができている。側面には点々と敲打が加えられ、敲打が顕著な部分は抉りや平坦になっている。長8.3cm、幅7.4cm、厚4.5cm、重量384g。2-418は集石岩の円礫を利用した磨石である。表裏二面が磨石として使用されているが、磨面は狭いが、その部分は平坦となっている。片面の中央部には敲打痕がわずかに認められ、凹石として使用されたこともうかがえる。長9.4cm、幅8.2cm、厚4.6cm、重量516g。1-292は軟質の安山岩を利用した石錘である。平面形は不整形楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部より上方に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。短軸の一边の中央部には自然の抉りがあり、三ヶ所の抉りを使用したと考えられる。長9.6cm、幅9.5cm、厚3.3cm、重量294g。1-273は火成岩の扁平円礫を利用した石錘である。大型石錘として使用したものが半折し、その後改めて石錘として再利用された資料である。半折部に接して、最初に入れられた抉りが残るが、一方は抉りの中央で折れている。再利用の抉りは長軸の相対する二辺（一边は半折部）の中央部に片面から剥離を加え抉りをつくり出している。長11.4cm、幅8.4cm、厚2.6cm、重量329g。

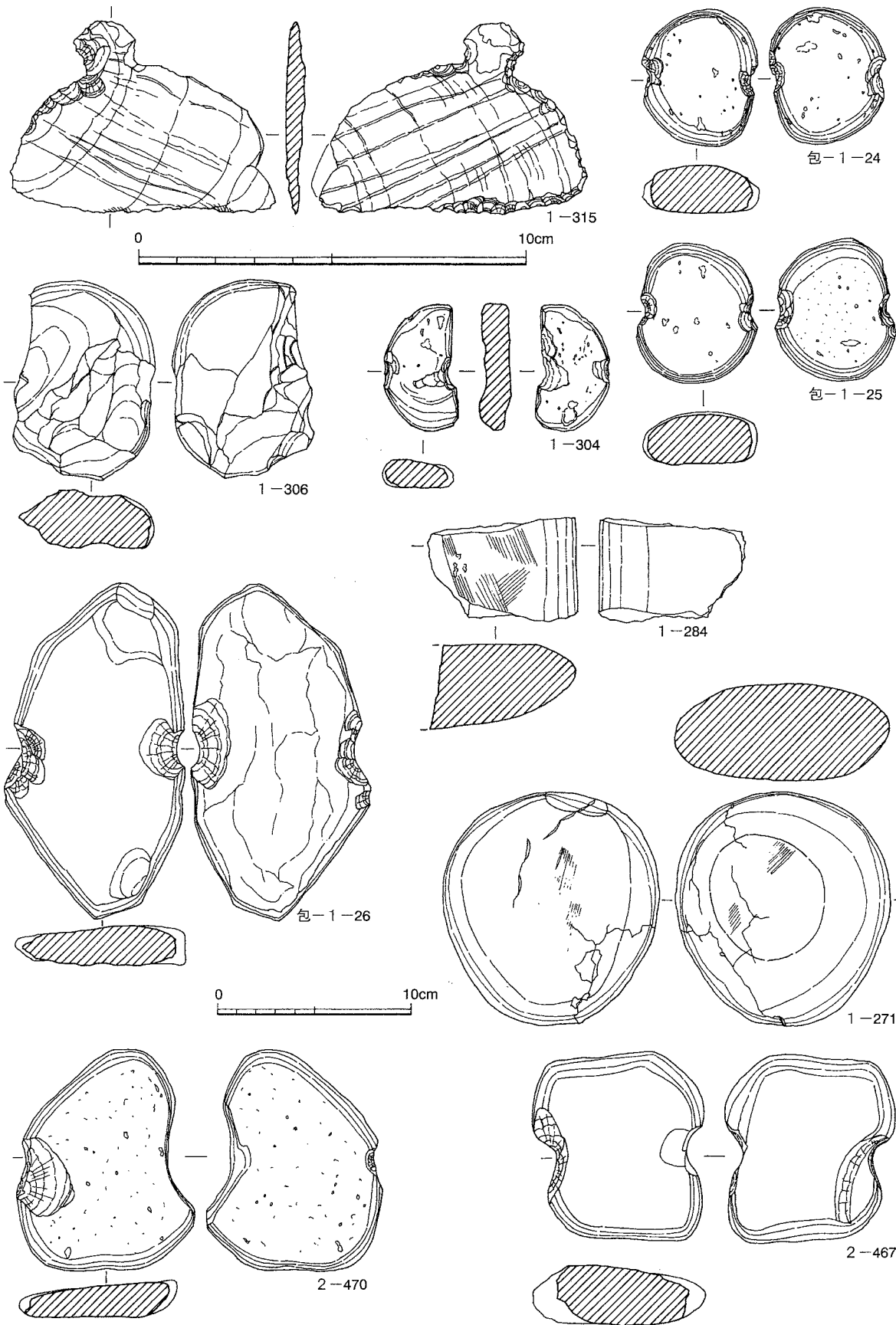
(3) 第8層の石器

同層出土石器には石鏃、石匙、磨製石斧、同未製品、スクレイパー、磨石、石皿、石錘がある。

第128図は石鏃、磨製石斧、同未製品、スクレイパーを図示した。1-559は黒曜石（腰岳）製の石鏃である。やや身が長い二等辺三角形をなす。基部の抉りは深い。全体に丁寧な押圧剥離で整形する。長1.6cm、幅1.2cm、厚0.3cm、重量0.43g。1-530はサヌカイト製の石鏃である。身がやや長い二等辺三角形、脚は若干外に開く。基部の抉りは三角形でやや浅い。丁寧な押圧剥離で整形される。長1.9cm、幅1.5cm、厚0.4cm、重量0.60g。2-195は黒曜石（腰岳）製の石鏃である。形態的には1-559と同じであるが、先端部と片脚を欠損する。側辺には鋸歯列をつくり出す。長1.6cm + α 、幅1.2cm + α 、厚0.4cm、重量0.52g + α 。1-531はサヌカイト製の石鏃である。ややふくらみをもった二等辺三角形で基部の抉りは三角形で浅い。側辺に細かい鋸歯列をつくり出す。全体に丁寧な押圧剥離を施す。長1.5cm、幅1.2cm、厚0.4cm、重量0.43g。1-316はサヌカイト製の石鏃である。形状は細長い五角形をな



第128图 8層出土石器实测图 I

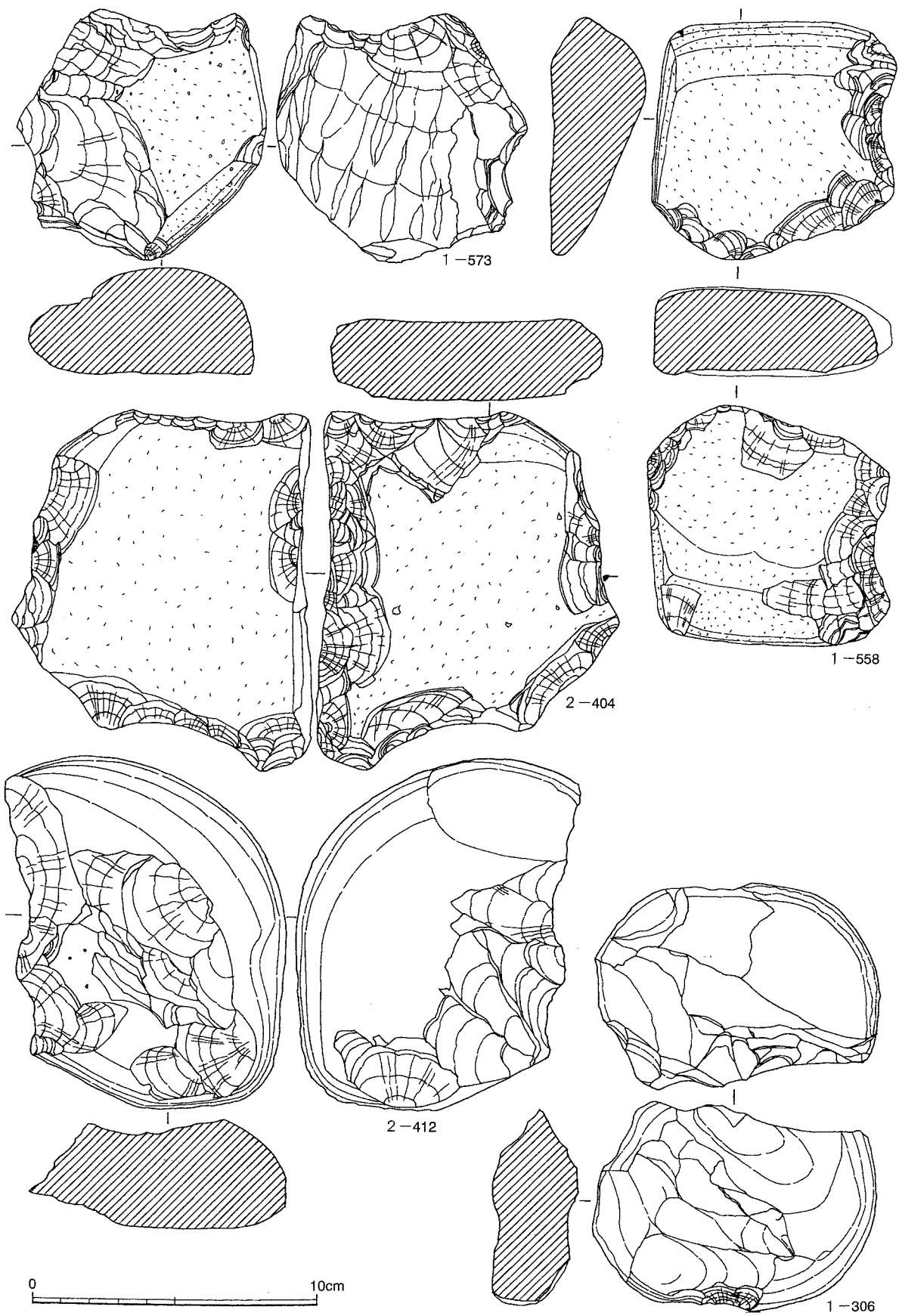


第129图 8層出土石器实测图 II

すが、片脚を欠損する。全体はやや粗い押圧剥離で整形している。長2.1cm、幅1.0cm + α 、厚0.2cm、重量0.41 g。2-196はサヌカイト製の石鏃。両面の中央には大きな剥離面を残し、周縁部に細かい剥離を施し整形している。全体形は柳葉形をなし、両側の中央に抉りを入れた特異な形をしている。先端部は使用により磨滅している。長2.8cm、幅1.4cm、厚0.4cm。1-529は黒曜石（腰岳）の剥片を利用した尖頭状石器である。片面は主要剥離面のままでほとんど剥離を加えていない。他の面は周縁に細かい剥離を加えて整形するが、特に尖頭部は丁寧である。長3.5cm、幅2.9cm、厚0.7cm、重量4 g。2-468は頁岩の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。平面形は不整長方形をなす。石斧原材として選択された後、片面の短辺、長辺の一部に剥離を加えているが、その段階で製作を中断している。長13.1cm、幅7.4cm、厚3.5cm、重量424 g。1-556は板状の節理のある頁岩製の磨製石斧である。胴下半から刃部にかけて欠損する。全体に風化しているが、保存状態は良好である。石斧は片面の一部に自然面を残している。自然礫に剥離を加えて整形し、さらに一部に敲打を加え、最終的に研磨を加えて仕上げている。部分的に剥離痕を残しているが研磨は全体におよび研磨痕も良く残っている。長7.2cm + α 、幅3.5~4.0cm、厚1.5cm、重量69 g + α 。1-556は頁岩の円礫を素材とした打製石斧である。片面の一部に自然面を残している。全体に粗い剥離を加えて整形し、頭部から側辺部にかけては細かい剥離を加えて整形している。刃部は両面から剥離を加えて形成し、刃部には使用による刃こぼれがみられる。頭部と刃部は使用により磨滅している。長11.4cm、幅4.6cm、厚2.0cm、重量133 g。2-409はサヌカイトの横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーである。打面から側辺の一边には自然面が残る。打面の対するエッジには使用による細かい剥離がみられる。長5.7cm、幅6.0cm、厚0.8cm、重量28 g。

第129図は石匙、石皿、磨石、石錘を図示した。1-315はサヌカイトの横剥ぎの剥片を素材とした横型の石匙である。上辺の中央部よりやや片寄った位置につまみをつくり出している。刃部は片面から剥離を加え形成されるが、一部はエッジをそのまま利用している。つまみのくびれ部分には黒色の付着物がある。装着のためのものかどうかは判別できない。長4.9cm、幅6.9cm、厚0.5cm、重量16 g。包-1-24は多孔質の安山岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長6.9cm、幅6.0cm、厚2.5cm、重量142 g。1-306は玄武岩の円礫を素材とした礫石器である。片面は自然石のままで、側辺の一边に片側から剥離を加えている。刃部は鋭くない。長10.1cm、幅8.4cm、厚3.0cm、重量275 g。1-304は集石岩の扁平円礫を利用した石錘。平面形は半円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長6.5cm、幅3.5cm、厚1.5cm、重量40 g。包-1-25は安山岩の扁平円礫を利用した石錘。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長7.3cm、幅6.2cm、厚2.6cm、重量141 g。1-306、包-1-26は砂岩の扁平円礫を利用した石錘。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。抉りは明確である。長17.3cm、幅9.2cm、厚2.0cm、重量407 g。1-284は砂岩の扁平円礫を利用した石皿の破片である。小破片であり全形は不明。片面が石皿として利用され、磨面の擦痕が観察できる。長5.4cm + α 、幅7.7cm + α 、厚4.3cm + α 、重量254 g + α 。1-271は安岩の扁平礫を利用した磨石である。平面形は楕円形をなす。一面が磨石として使用され、わずかに平坦面をつくり出している。長径11.9cm、短径11.1cm、厚5.9cm、重量736 g。2-470は安山岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は不整形をなす。長軸の一边に両面から剥離を加え抉りを入れ、他辺は自然の凹みを利用している。長12.1cm、幅9.1cm、厚1.8cm、重量236 g。2-467は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は隅丸長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に片面から剥離を加え抉りをつくり出す。抉りには敲打を加え整形され、明確である。長9.6cm、幅8.7cm、厚3.1cm、重量362 g。

第130図は礫石器を図示した。1-573は玄武岩の円礫を素材とした礫石器である。片面に礫の自然



第130图 8層出土石器实测图Ⅲ

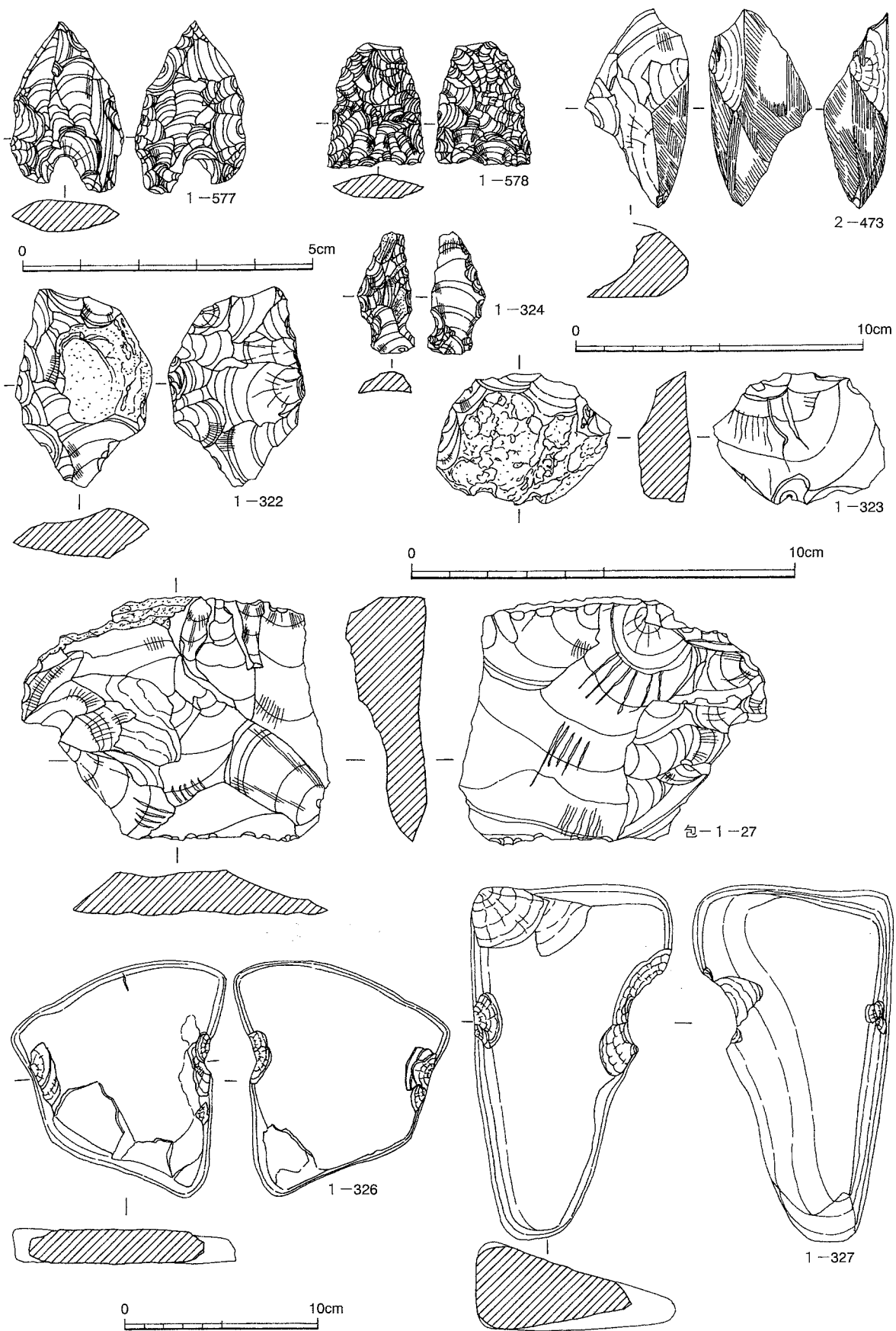
面を大きく残している。周縁の約半分に敲打を加え、二辺に小さな抉りをつくり出している。敲打部分は双角状礫石器と共通したものである。長8.7cm、幅8.7cm、厚3.7cm、重量366g。1-558は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は略方形をなす。短軸の一边に敲打を加えて抉りをつくり出す。敲打によって両面に剥離がみられる。抉りは長さ3.3cm、深さ0.5cm。抉り部に接する一边には両面から小さな剥離を加えて刃部を形成する。刃部は円弧をなし、辺の全周におよんでいる。長8.6cm、幅6.6~8.4cm、厚3.0cm、重量290g。2-404は安山岩の扁平円礫を素材とした礫石器である。平面形は略長方形をなす。剥離は四辺すべてに認められるが、長軸の一边には両面からの剥離が加えられているが、他の三辺に認められる敲打状の剥離は認められない。敲打が認められる三辺には浅い抉りがつくり出される。長12.5cm、幅10.7cm、厚2.8cm、重量577g。2-412は玄武岩の円礫を利用した礫石器である。平面形は隅丸長方形をなす。長軸の一边に両面から粗い剥離を加えて刃部を形成する。長13.2cm、幅10.0cm、厚3.8cm、重量680g。1-306は安山岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の相対する二辺に片面から剥離を加え抉りを入れるが、抉りは明確でない。長10.0cm、幅7.3cm、厚3.0cm、重量275g。

(4) 第9層の石器

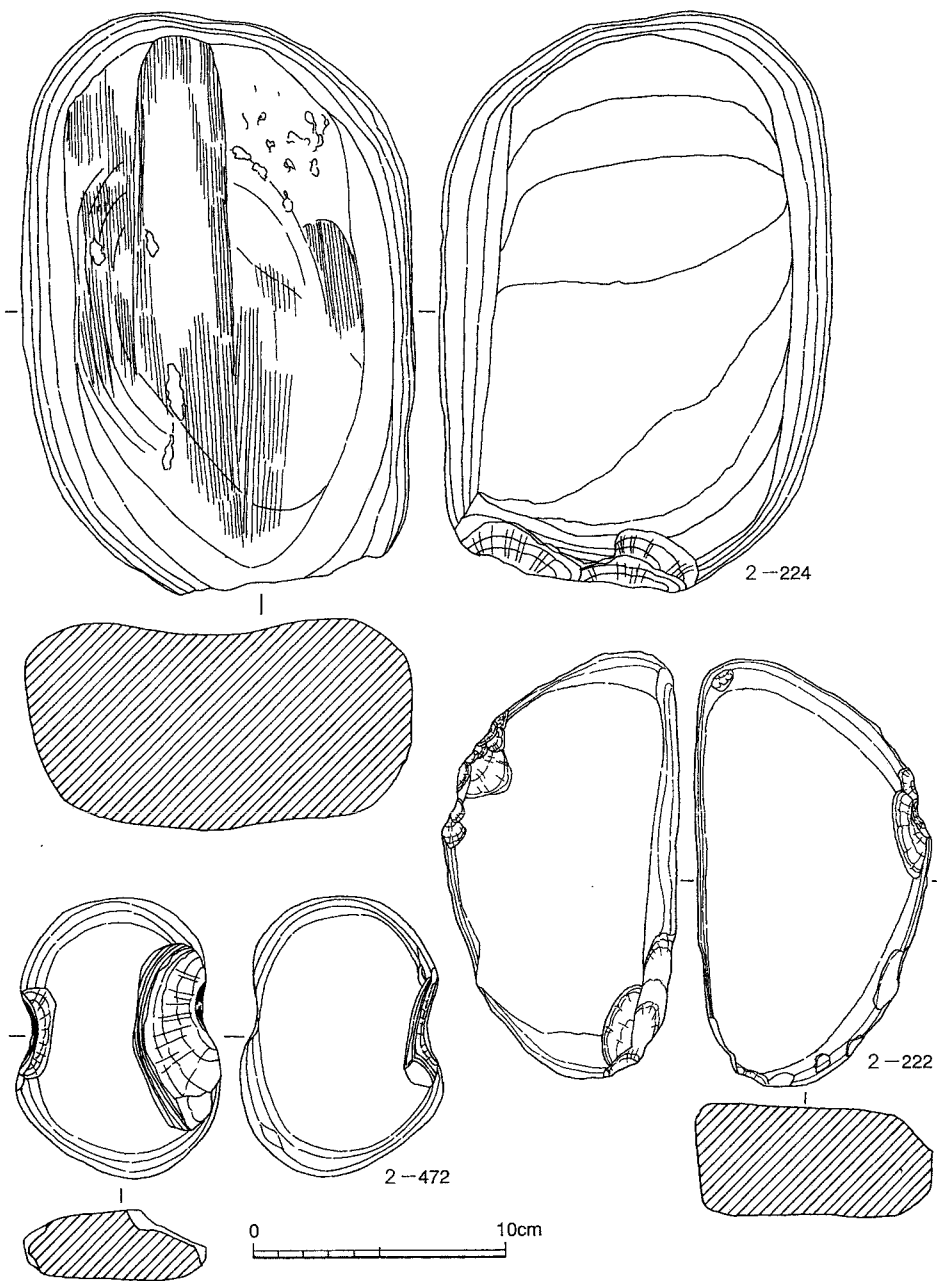
同層出土石器には石鏃、磨製石斧、スクレイパー、砥石、磨石、叩石等があるが、点数はきわめて少ない。

第131図、1-577、1-578は石鏃である。1-577は黒曜石（腰岳）を素材とする。側辺は丸味をもち、基部の抉りは小さいがやや深い。全体に粗い剥離で整形されている。先端部に未加工で刃部が形成されなどがあり、未製品の可能性もある。長3.0cm、幅1.9cm、厚0.5cm、重量2.97g。1-578は黒色の透明度の強い黒曜石（腰岳）を素材とする。平面形は長身の二等辺三角形をなすが、先端部を欠損する。基部は平坦である。全体に押圧剥離を加えて整形するが、やや粗雑である。長2.2cm+ α 、幅1.7cm、厚0.4cm、重量1.46g+ α 。2-473は頁岩製の磨製石斧の破片である。全体に良く研磨され、研磨痕も良好に残っている。刃部付近の破片で刃部は両刃になると考えられる。伐採用の石斧と考えられる。長6.8cm+ α 、幅3.6cm+ α 、厚2.3cm+ α 、重量37g+ α 。1-324は黒曜石（腰岳）を素材とした小型の石匙（抉入石器）である。縦長の剥片を利用するが先端部を欠損する。主要剥離面と反対の面の一部には自然面を残す。打面側に錯行関係で剥離を加え抉りをつくり出し、つまみを作る。刃部も同様に両側に錯行関係で刃部を形成する。長3.2cm+ α 、幅1.4cm、厚0.5cm、重量1.90g+ α 。1-322はサヌカイトの不定形剥片を利用したスクレイパーである。片面の一部に自然面を残す。平面形は不整楕円形をなす。長軸の一边に両面から剥離を加えて刃部を形成する。長5.2cm、幅3.5cm、厚1.3cm、重量20g。1-323はサヌカイトの横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーである。主要剥離面と反対の面には自然面を多く残している。片面から粗い剥離を加えて刃部を形成する。長3.4cm、幅4.5cm、厚1.4cm、重量22g。包-1-27はサヌカイトの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。打面に自然面を残し、打面と反対の一边のエッジに両面から小さい剥離を加えて刃部を形成する。長6.3cm、幅8.0cm、厚2.1cm、重量73g。1-326は硬砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は不整方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長12.1cm、幅11.2cm、厚1.8cm、重量319g。327は安山岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は隅丸三角形をなす。長軸の相対する二辺の中央より片側に片寄った所に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。一方の抉りは大きく明確であるが、他の抉りは綾線部分に小さい剥離を加えるのみで、あまり明確でない。長18.1cm、幅3.0~10.4cm、厚1.6~4.3cm、重量886g。

第132図には砥石、石錘、叩石を図示した。2-224は砂岩の大型の礫を利用した砥石である。平面形は隅丸の長方形をなす。片面の一面が砥石として利用されている。砥面は使用により凹み、一見し



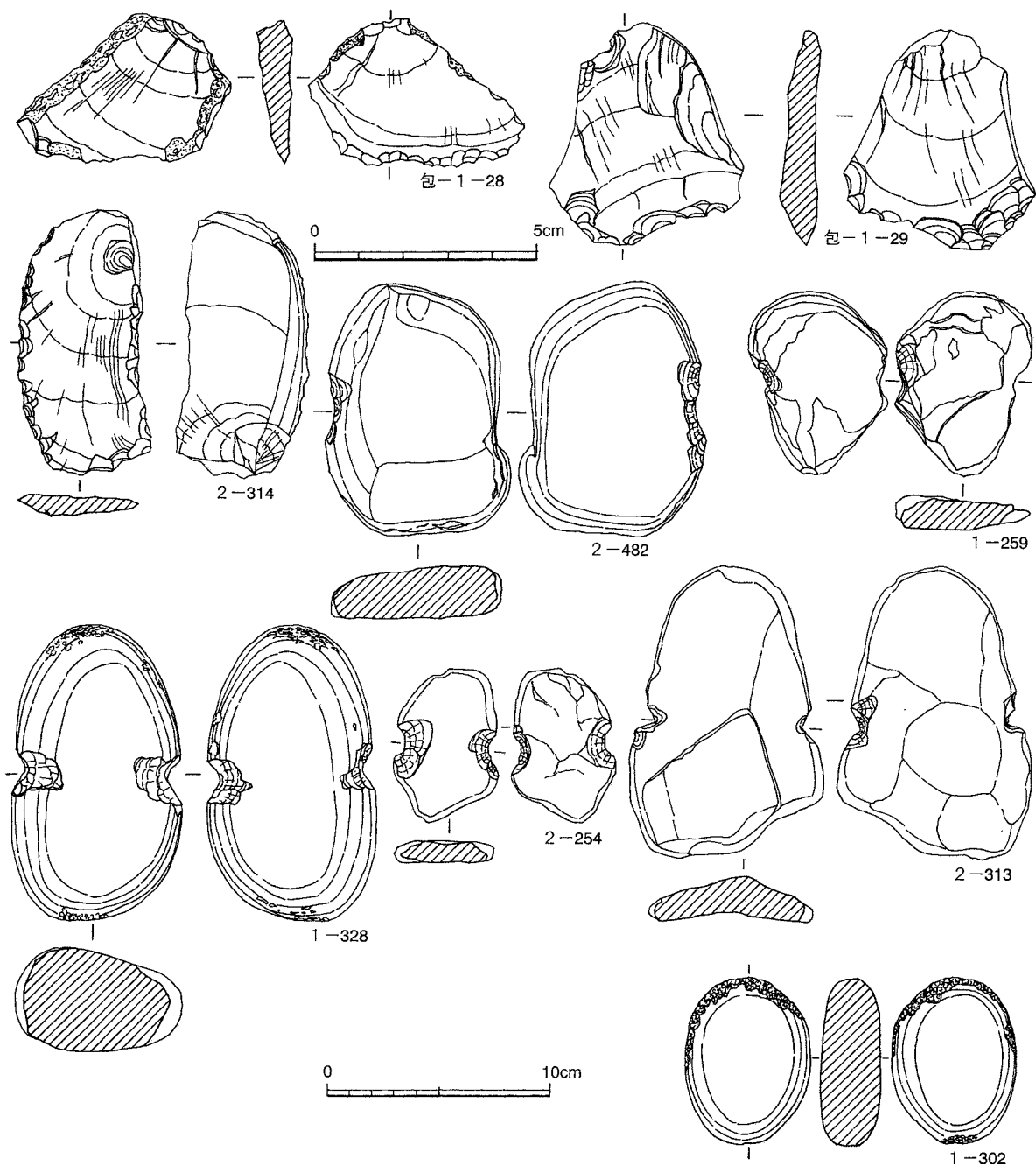
第131图 9层出土石器实测图 I



第132図 9層出土石器実測図Ⅱ

て石皿とみえるが、砥面に幅3.8cm前後の砥ぎの単位があり、磨製石斧等の砥石であることがわかる。砥面には一部敲打痕もみられる。長22.8cm、幅15.4cm、厚8.1cm、重量3790g。2-472は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の相対する二辺の中央部に一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りは剥離後、敲打を加えて整形し明確である。長10.7cm、幅7.9cm、厚2.7cm、重量314g。2-222は砂岩の扁平円礫を利用した叩石である。平面形は長楕円形をなす。全体に火を受け赤変しているが、片面がより顕著である。側面の二ヶ所に打痕がみられ、剥離痕も存在する。叩石として利用されたことがわかる。仮面は砥石としても使用され、擦過痕が観察できる。長径16.7cm、短径9.4cm、厚4.4cm、重量984g。

第133図にはスクレイパー・石錘、叩石を図示した。包-1-28はサヌカイトの横剥ぎの剥片を素材としたスクレイパーである。打面は調整されるが、それに接する側辺には自然面を残す。打面の反



第133図 9層出土石器実測図Ⅲ

対のエッジには片面から小さい剥離を加えて刃部を形成する。長3.3cm、幅4.7cm、厚0.8cm、重量9g。包-1-29はサヌカイトの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。平面形は不整六角形をなすと考えられるが、一部が折断され欠損している。打面に相対する二辺のエッジに両面から細かい剥離を加え刃部を形成している。長4.9cm、幅4.5cm+ α 、厚0.9cm、重量21g+ α 。2-314は安山岩の剥片を素材としたスクレイパーである。全体に風化が著しい。礫を半割したような剥片で、横剥ぎにもかかわらず、縦長の長方形をなす。長軸の一端に片側から剥離を加え刃部を形成している。刃部の長さ5.0cm。長6.0cm、幅2.6cm、厚0.4cm、重量12g。2-482は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。長軸の一端の中央部に両面から剥離を加え袂りをつくり出している。他の一端は自然の袂りを利用している。長11.1cm、幅8.3cm、厚2.3cm、重量321g。1-259は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は

不整の楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に、一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離が加えられ抉りがつくり出される。長8.1cm、幅5.2cm、厚1.4cm、重量82g。1-328は砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。抉りは深く、敲打で丁寧に整えている。長軸の両端には敲打痕がみられ叩石としても使用されている。長13.0cm、幅7.5cm、厚4.6cm、重量609g。2-254は小型の砂岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は不整長方形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて抉りをつくり出す。抉りは深く明確である。長7.0cm、幅4.7cm、厚1.0cm、重量40g。2-313は火成岩の扁平円礫を利用した石錘である。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え抉りをつくり出す。長13.1cm、幅8.8cm、厚1.6cm、重量210g。1-302は硬砂岩の扁平円礫を利用した叩石である。長軸の両端は側面に敲打痕がある。一方の敲打痕はほぼ上半部を占め顕著であるが、他方の敲打痕は小範囲にとどまっている。長7.5cm、幅5.6cm、厚2.7cm、重量161g。

7、土製品・石製品（第134、135図）

土製品には土偶、動物形土製品、スタンプ形土製品、土器片利用の土製円盤、石製品として岩偶がある。また、土器の装飾としてマムシ（蛇）を表現した例がある。これらの遺物は土器片利用の土製円盤を除けば、九州の縄文時代には極めて珍しく、ほとんど例はない。他地域との交流、文化伝播を考える上で貴重な例である。

①土偶（第134図1、図版39-①、②）

土偶は鹿児島県上野原遺跡の早期例を除けば最も古い例となる。これ以降に九州では土偶が増加することを考えれば重要な意味をもつ。

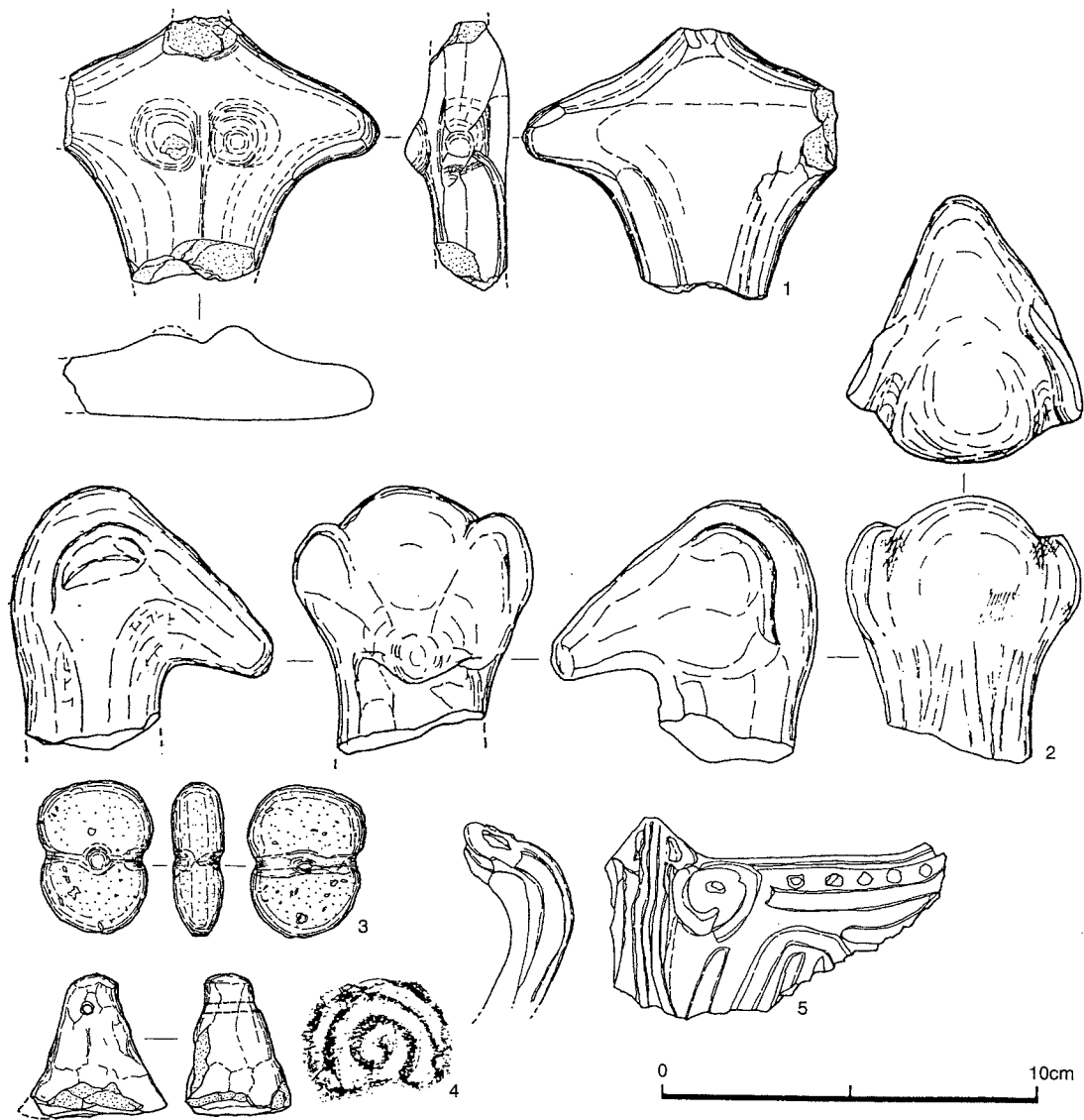
土偶は下半身、右腕、頭部、右乳房を欠損している。現存長7.0cm、現存幅8.2cm、厚さ2.0cm全体は扁平につくられている。左手は真横にひろげ、先端部は尖り気味に丸くおさめている。乳房は椀形をして盛りあがる。乳房の谷間から腹部にかけて浅い沈線が観察できる。頭部は欠損しているが、元来、はっきりした頭部がつくのではなく、突起状におさめていた可能性が強い。背中はヘラ削りによって整形している。下半身は断面から推測すると先ぼそりに舌状におさめていたと考えることができる。胎土、焼成、色調は共伴する南福寺式土器と共通し、胎土は砂粒を混入するが良質、焼成は良好、色調は赤褐色をなす。胎土等からみて、本遺跡あるいは周辺の遺跡で製作されたことは間違いないものであろう。後述する動物型土器品とも共通している。第1次調査D-2区のⅢ層出土。

②動物型土製品（第134図2、図版39-④、41-②）

動物形土製品と考えられる資料は2点出土している。1点は頭部から首にかけての資料、他の1点は上半身の資料である。

第134図2は大型の動物形土製品の頭部資料である。首より下を欠損している。首は断面が円形で直立する。頭部は球形をなし、顔面から口にかけて大きく前面に突き出し、先端部は尖り気味に丸くおさめている。頭部の上位の両側に丸い耳をつけるが、顔面には目、鼻、口の表現はない。どのような動物を形どったかは不明である。後ろから見た状態はサルに近いが、顔面の状態からは類似する動物は想像できない。現存高6.7cm、後頭部から顔面突出部まで7.2cmを測る大型品である。胎土、焼成、色調は前述した土偶と同様である。D-2区Ⅲ層出土。中期末の阿高式土器と共伴している。

図版39-③は前者同様に動物型土製品と考えられる資料である。前者と比較すると、小型で作りが悪く、土製品とするにはやや難があるが、頭部と考えられる部分がつくり出され、手と考えられる部分もあるので一応、動物土製品として紹介する。全長4.2cm、頭部と考えられる部分は顔面が前に突き出し、尖り気味におさめられる。首は細まり、その下位に側面から突起状に粘土を張り出さ



第134図 土偶、土製品、岩偶、蛇の装飾のある土器

せ、手を表現している。胎土、焼成は前者同様で、色調は褐色をなす。C-3区、IV層出土。中期、阿高式土器に共伴する。

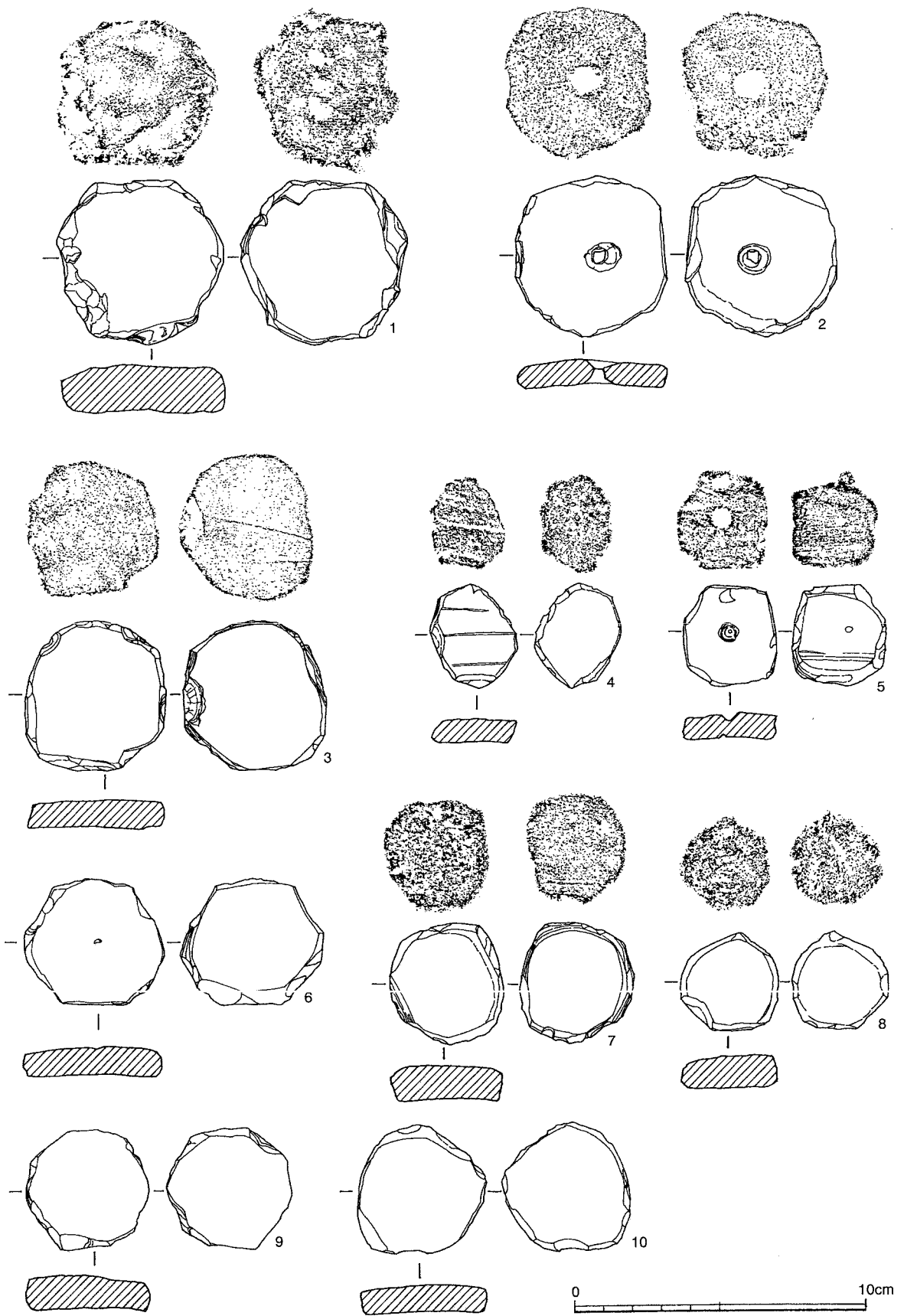
③岩偶 (第134図3、図版39-①、②)

岩偶は多孔質の軟質の石に加工したものである。全体に表現が簡略化されている。扁平な自然円礫の中央部に径0.5cmの穴を彫み、それを中心に礫を一周する細い溝を刻みこむ。全体形は分銅形をなし、土偶の形状に通じるものがある。長径4.0cm、短径3.1cm、厚さ1.3cmの小型品である。第1次調査A-1区、2層出土。南福寺式土器が共伴する。

④スタンプ型土製品 (第134図4)

スタンプ形土製品は粘土を円錐形に整形し、頭部に径0.2mmの紐孔が真横に穿たれている。スタンプ面には渦文が彫り込まれている。畑の深耕によって出土した資料である。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は良好、色調は赤褐色をなす。胎土等は土偶、動物形土製品と同様であり、本遺跡を含めた周辺で製作されたことは間違いない。九州では極めて珍しい資料である。

⑤蛇の装飾ある土器 (第134図5)



第135図 土製円盤実測図

本資料はスタンプ形土製品同様に畑の深耕によって出土したものである。第2次調査の発掘所見からすると中期土器に共伴した可能性が高い。胎土は本遺跡出土土器とは異なり、施文された文様も九州では見られないので他地域から搬入された土器とみられる。土器はキャリパー状の口縁をもつ深鉢形土器である。地文に縄文を施文し、口縁部には平行沈線を施し、その間に刺突文を配している。その下に曲線で文様を描くが詳細は不明。蛇の装飾は粘土紐を貼り付けて隆起させ、胴下半部から口縁部に向かってたちあがっているが、下半は欠失して明らかでない。口縁部に突出して頭部がある。蛇の体部には体軸に沿って三本の沈線を入れ、頭部は上から見るとマムシ特有の三角形をなす。頭部の中央部には体部からのびた沈線があり、その両側に刺突文を施し、目を表現している。口縁部に突起状に突出した頭部は土器の内部を向き、アゴまで裂けた口を沈線によって表現している。鎌首を持ちあげたマムシがリアルに表現されている。

⑥土製円盤（第135図）

10点が出土した。全てが土器を再利用して製作された土製円盤である。2・3層からの出土品で、いずれも南福寺式土器に共伴するものである。

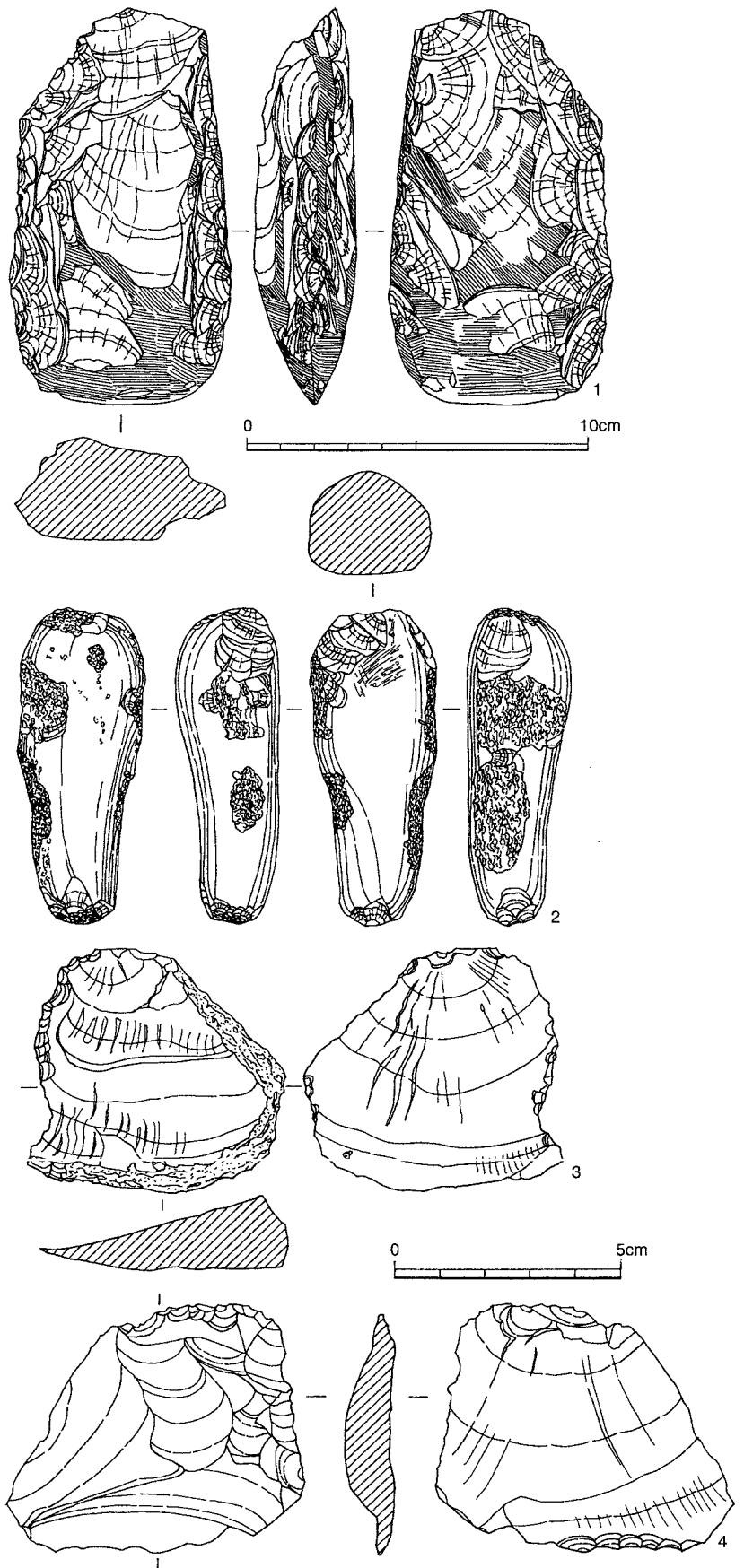
第135図1は深鉢形土器の底部破片の中央部を利用している。外内底部共に指頭圧痕のため凹凸が著しい。周縁部に剥離し円形に整形した後、敲打を加えて稜線をつぶし、わずかに研磨を加えている。長径5.8cm、短径5.6cm、厚さ1.6cm、重量56gを測る。C・D-2区、2層出土。2は胴部破片を利用している。外面はヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。外面にはススが付着している。周縁部は剥離を加えて整形した後に敲打で稜線をつぶし、わずかに研磨を加えている。円盤の中央部には径4mmの不整形の穴が穿孔されている。孔はドリルで穿たれたものではなく、やや不整形で内外面に剥離がみられる。長径5.6cm、短径5.2cm、厚さ0.9cm、重量29gを測りわずかに湾曲している。2次調査、B-3区、3層出土。3は深鉢形土器の胴部破片を再利用したものである。外面はヘラ研磨されているが凹凸がある。内面は丁寧なヘラナデ調整である。周縁部は剥離を加えて整形した後に研磨を加えているが、部分的に剥離部分が残っている。内面の中央部に穿孔のためと考えられるわずかな凹みがある。長径5.1cm、短径4.9cm、厚さ0.9cm、重量30gを測る。B-2区、2層出土。4も深鉢形土器の胴部破片を再利用したものである。以下の5～10も深鉢形土器の胴部破片を利用したものである。外面はヘラ削り状の調整、内面はナデ調整である。周縁部は細かい打割で整形している。長径3.6cm、短径3.0cm、厚さ0.8cm、重量8g。2次調査、B-3区、2層出土。5は外面がヘラ削り状の調整、内面は横ナデ調整である。周縁部は粗い打割によって略方形に整形している。外面中央部にはドリルにより径0.7cmの穴をあけかけているが、貫通していない。裏面にも中央部をやはらずれて穿孔途中の小さな穴が観察できる。長径3.5cm、短径3.2cm、厚さ0.9cm、重量11g。わずかに湾曲している。2次調査、C-3区2層出土である。6は内外面共に保存状態が悪く調整は不明。周縁部は粗い打割によって整形しているが全体に摩滅している。表面の中央部に穿孔のための穴が痕跡程度に残っている。長径5.0cm、短径4.3cm、厚さ1.1cm、重量22g。わずかに湾曲している。平面形は隅丸の六角形をなす。1次調査、C・D-2区、2層出土。7は外面にカルシウム状の付着物があり調整の詳細は不明。内面は板ナデ調整で条線が観察できる。周縁部は丁寧に整形され、一部に研磨が加えられている。平面形は略円形をなす。長径4.2cm、短径4.0cm、厚さ1.2cm、重量21g。わずかに湾曲している。1次調査、A-1～3区、3層出土。8も同様に外面にカルシウム状の付着物があり、調整の詳細は不明。内面はナデ調整。周縁部は丁寧に整形されているが、やや摩滅している。平面形は略円形。長径3.4cm、短径3.3cm、厚さ1.1cm、重量12g。1次調査、A-1～3区、2層出土。9は外面はヘラ削り状のヘラ研磨調整。内面は丁寧なヘラ研磨調整である。周縁部はやや粗い打割によって整形されている。平面形は略円形をなす。長径4.4cm、短径4.1cm、厚さ1.0～1.2cm、重量21g。1次調査、A-1～3区、3層出土。

10は外面がヘラ削り状のヘラナデ調整。内面は横ナデ調整。周縁は粗い打割により略円形に整形し、一部に研磨を加えている。長径4.5cm、短径4.4cm、厚さ0.9cm、重量17g。2次調査、D-3区、2層出土。

8、その他の石器

本章では出土位置、層位が不明な石器および、範囲確認の各トレンチから出土した石器を紹介しておく。

第136図は磨製石斧、ハンマー、スクレイパーを図示した。1は黒色の頁岩製の磨製石斧である。頭部を欠損するが、ほぼ全形を知ることができる。全形は短冊形をなす。剥離を加えて整形した後、全体に研磨を加えている。体部の研磨は斜行しているが、刃部は刃に平行した研磨を加えている。刃部は使用のため磨滅し、研磨痕は消えている。刃は両刃をなし鋭い。全体に研磨が丁寧に加えられているが、部分的に剥離が残っている。本資料で注目されるのは、頭部の欠損後再生の加工がみられる事である。側辺の片方に研磨痕がみられず、新たに剥離を加えて整形している。剥離のパティナが新しく容易に区別がつく。長11.5cm+α、幅6.5cm、厚3.0cm、重量255g。2は頁岩の棒状の円礫を使用したハンマーである。礫は長さ9.2cm、径は基部が2.3cm、先端部が径3.7cmを測り、基部から先端部に向かって徐々に大きくなる。両端部は石槌状に使用されたと考えられ、敲打痕とそれに伴う小さな剥離がみられる。棒状部の側面の相対する二

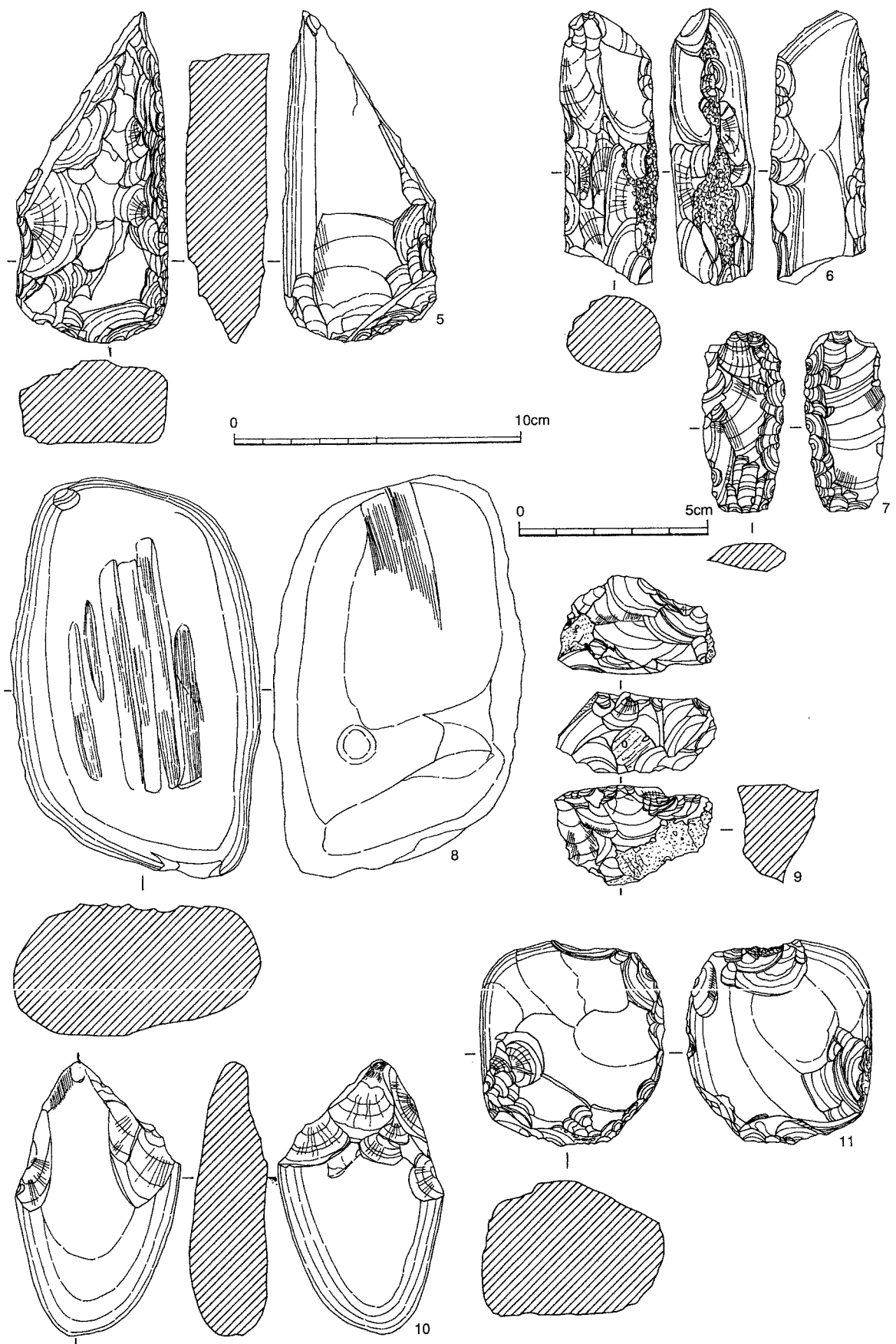


第136図 採集遺物実測図 I

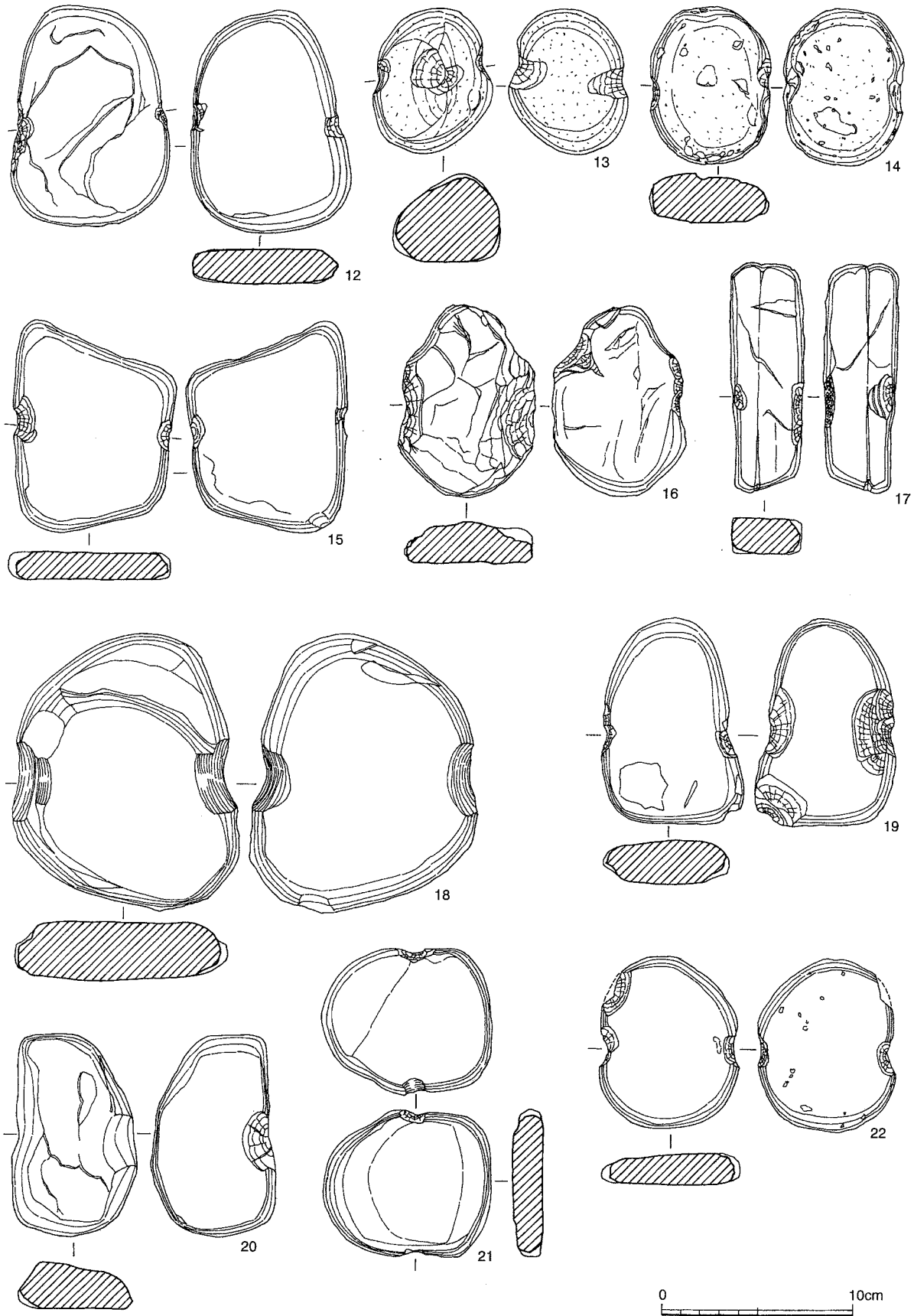
面に敲打痕が顕著に認められる。他の二面にはほとんど痕跡は認められないが、先端部にわずかな敲打痕と擦痕が認められる。石器製作に使用されたハンマーと考えることができる。重量139 g。以上、二点は馬場の砂礫層の出土。3はサヌカイトの横剥ぎの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。短軸の一边のエッジに両面から剥離を加えて刃部を形成する。他の側辺部には自然面を残す。長5.4cm、幅5.7cm、厚1.6cm、重量36 g。4はサヌカイトの横剥ぎの不定形剥片を素材としたスクレイパーである。打面の反対の一边のエッジに片面より細かい剥離を加えて刃部を形成する。長5.4cm、幅6.6cm、厚1.0 cm、重量37 g。以上二点のスクレイパーは東トレンチの出土品である。

第137図には磨製石斧未製品、サイドブレード、砥石、石核、叩石、礫器を図示した。5は頁岩の円礫を素材とした磨製石斧未製品である。片面は側辺部から丁寧な剥離を加えて整形しているが、他の面には自然面を多く残し、剥離は刃部に集中している。刃部は両刃に整形されている。胴上半から頭部にかけて欠損しており、この段階で製作を中断したと考えられる。長11.6cm + α 、幅5.3cm、厚2.9cm、重量231 g + α 。短冊型の両刃の伐採具としての磨製石斧を意図したものであろう。6は頁岩の棒状の礫を素材とした磨製石斧未製品である。棒状の礫の周囲に剥離を加え整形し、さらに部分的ではあるが敲打を加えている。片面と他の面の一部に自然面を残している。敲打を加える段階で刃部側が半折し、製作を中断したと考えられる。長9.6cm + α 、断面形は楕円形をなし、中央部で3.4cm × 2.7cmをはかる。重量131 g + α 。7は黒曜石（腰岳）の縦長剥片を素材としたサイド、ブレードである。平面形は長方形をなす。長軸の一边に両面から細かい剥離を加えて刃部を形成する。長3.1cm、幅1.4cm、厚0.5cm。8は砂岩の円礫を利用した砥石である。平面形は不整楕円形をなす。表裏面が砥石として使用されている。一面は中心部に砥面があり、六条の溝状の砥跡がみられる。玉砥ないしは石斧用の砥石とみられる。他の面は端部に二条の砥面がみられ、使用痕は少ない。長14.0cm、幅8.7cm、厚4.6cm、重量680 g。9はサヌカイトの石核である。断面形は船底形をなす。打面には調整が施される。剥離には不定形剥片を剥離した痕跡が三ヶ所にみられる。一部に自然面を残している。長3.5cm、幅5.5cm、厚2.9cm、重量53 g。10は頁岩の扁平円礫を利用した礫石器である。長軸の上半部の二辺に両面から剥離を加え尖頭部をつくり出す。尖頭部は使用によって磨滅している。長9.4cm、幅5.8cm、厚2.7cm、重量178 g。11は頁岩の円礫を利用した叩石である。平面形は隅丸の方形をなす。側面の一角を除いた全面に敲打が加えられ、小さな剥離が無数に存在する。敲打痕より小剥離が多いことは使用用途の違いを想起させる。長7.1cm、幅6.4cm、厚4.6cm、重量301 g。

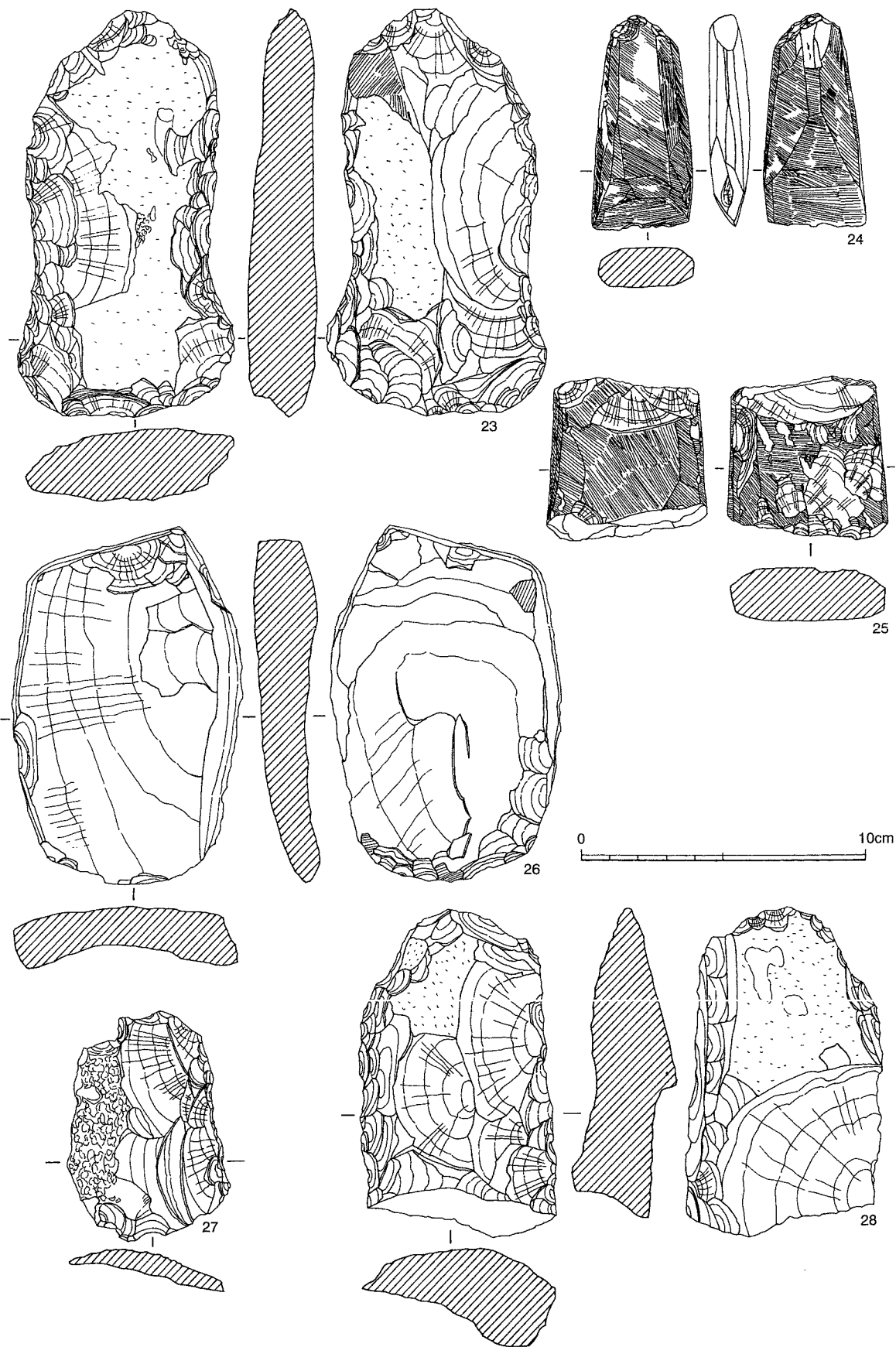
第138図には扁平円礫を利用した石錘を図示した。12は砂岩の円礫を利用。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え袂りをつくり出す。袂りは浅く不明瞭である。長11.2cm、幅8.1cm、厚1.8 cm、重量265 g。13は火成岩の円礫を利用。礫は丸味も三稜をなす。長軸の三稜に両面より剥離を加え袂りを入れる。袂りには敲打を加え整え、紐ずれが顕著に認められ、有溝石錘に近い状況をなす。長7.4cm、幅6.1cm、厚4.3cm、重量198 g。14は多孔質の火成岩の円礫を利用。長軸の一边の中央部に片面から剥離を加え袂りを入れ、他辺は中央部の自然の凹みに研磨を加え袂りをつくり出す。長8.1cm、幅6.4cm、厚2.5cm、重量172 g。15は砂岩の円礫を利用。長軸の相対する二辺の中央部に両面から細かい剥離を加えて、浅い袂りをつくり出す。長10.8cm、幅8.4cm、厚1.5cm、重量231 g。16は砂岩の円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に、一边は片面から、他辺は両面から剥離を加えて袂りをつくり出している。長9.9cm、幅7.0cm、厚2.1cm、重量173 g。17は砂岩の円礫を利用。平面形は短冊形をなす。短軸の相対する二辺には節理によって自然の小さい袂りと溝ができる。また、長軸の相対する二辺の中央部よりやや下った部分に両面から剥離を加え袂りをつくり出している。剥離の一部には敲打が加えられている。長11.7cm、幅3.9cm、厚1.8cm、重量158 g。18は大型の砂岩の円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え袂



第137图 采集遺物実測図Ⅱ



第138图 採集遺物実測図Ⅲ



第139图 採集遺物実測図IV

りをつくり出す。扱いは剥離後、研磨を加えて整形するため、深く明確である。長14.2cm、幅11.7cm、厚2.9cm、重量720g。19は砂岩の円礫を利用。平面形は不整楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加えて扱ひをつくり出す。扱ひは一辺は二ヶ所となり、紐ずれのため摩耗している。長10.5cm、幅7.4cm、厚2.2cm、重量236g。20は砂岩の円礫を利用。平面形は不整の長方形をなす。長軸の一辺の中央部に片面から剥離を加え扱ひをつくり出す。他の一辺は自然の凹みを利用して。長10.4cm、幅6.5cm、厚2.4cm、重量226g。21は砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に、一辺は両面から、他の一辺は片面から剥離を加えて扱ひをつくり出す。扱ひには紐ずれが観察できる。長8.6cm、幅7.5cm、厚1.5cm、重量156g。22は多孔質の砂岩の円礫を利用。平面形は楕円形をなす。長軸の相対する二辺の中央部に両面から剥離を加え扱ひをつくり出す。長8.8cm、幅7.3cm、厚1.6cm、重量144g。

第139図には出所不明、表面採集資料の打製石斧、磨製石斧を図示した。23は砂岩の扁平円礫を利用して製作された打製石斧である。表裏面の一部に自然面を残している。両面から整形のためやや粗い剥離が加えられ、さらに細かい剥離を加えて整えている。長軸の中央よりやや下半に浅い扱ひが両側に入れられ、刃部は扱ひ部から拡がり、揆形状をなすが、全体形は長方形をなす。刃部は鋭くなく、一部剥離がステップして段を形成している。磨製石斧の未製品との区別が困難であるが、本資料は刃部に使用痕が認められ、剥離部が磨滅し、土掘り等に使用されたことがわかる。長14.2cm、頭部幅6.5cm、扱ひ部幅6.1cm、刃部最大幅7.2cm、厚2.5cm、重量287g。遺跡の東側における表面採集資料である。24は淡緑色の蛇紋岩を素材とした小型の磨製石斧である。全体に丁寧な研磨が加えられている。刃部は片側から強く研磨が加えられ、反対側の刃部形成がゆるやかなため、片寄り刃になっている。片刃石斧を意識したもので、弥生時代の扁平片刃石斧と同様の用途をもっていたものと考えられる。製作にあたって擦切扱法が用いられた可能性のある石斧である。擦切り痕は残っていないが、側辺の一辺には研磨前の剥離痕が残っているのに対し、擦切られたと考えられる一辺には剥離痕は見られず、また側辺も直線をなしていること、断面の形状等、擦切具の存在等から擦切石斧の可能性の強い資料である。長7.5cm、幅2.5~3.5cm、厚1.4cm、重量52g。表面採集資料である。25は頁岩を素材とした扁平磨製石斧である。頭部と刃部を欠失している。頭部は折断後、そのまま使用されたものらしく、折断面に磨滅痕が認められる。刃部は片側からの強い力によって折断している。石斧自体は剥離によって整形後、丁寧な研磨が加えられているが、部分的に剥離痕を残している。研磨痕は細かい条線として明瞭に残っている。扁平石斧であることを考慮すれば、本例も前者同様に片刃（片寄り刃）になると考えられる。現状で長5.7cm、幅5.1~5.7cm、厚1.8cm、重量94g。全体の平面形は揆形をなすと考えられる。2次調査G区より出土しているが、出土層位が不明になった資料である。26は頁岩製の打製石斧である。頁岩の礫を輪切り状に半截した剥片を素材として利用している。平面形は短冊形をなす。刃部を除いた三辺の側面には円礫の時の自然面がそのまま残っていて後世によるカジリを除けば特別の加工は施されていない。剥片は片面が前段階の剥離によって凹み、刃部の形成は凸面からのみ細かい剥離を入れている。剥片の凹みと刃部がうまい具合にかみ合い、土掘り具としては良好な状態となっている。刃部には使用による磨滅痕が残っている。手鋏としての用途を考えることができる。長12.4cm、幅8.1cm、厚1.8cm、重量257g。表面採集資料である。27は頁岩を素材とした磨製石斧未製品の破片である。整形のための剥離が全面に施され、敲打段階において破損したと考えられ、一部に敲打が施され、剥離痕を消している。現存長8.0cm、現存幅5.8cm、厚0.5cm、重量41g。残存部から推定して伐採用の大型の磨製石斧を意図したものと考えられる。28は砂岩製の打製石斧あるいは磨製石斧の未製品と考えられる資料である。砂岩の角礫を素材としていて片面と側面の一部に自然面を残している。両面から粗い剥離を加えて整形しているが、途中で折れている。現存長11.4cm、幅7.8cm、厚1.5~3.3cm、重量276g。

第8章、調査まとめ

大矢遺跡の調査成果は、これからの九州の縄文文化を考察していく上で看過できない重要な問題点を含んでいる。問題点は多岐にわたり、ここでその全てを検討するわけには行かないので、二、三の問題点を抽出して、検討を加えることにする。1は縄文土器の編年に関する問題点である。本遺跡の一つの特徴として、前期から後期初頭にかけての土器が層位的に出土したことである。九州の縄文土器編年の基礎的資料を提供するものである。2は磨製石斧の製作址の確認である。磨製石斧未成品の存在と製作工具の存在は、磨製石斧の製作工程とその製作の意義を説明する重要な手がかりが把握できるといえる可能性がある。これもまた大きな問題の一つである。3は縄文土器に見られる種子の圧痕である。圧痕の問題は別稿で述べたところである。米〔玄米と考えられる〕等の圧痕があり、縄文農耕の問題点も検討する必要があるが、極めて重要な問題である。SEMによる観察が終了してないので、再度、検討して別稿を用意することにする。

1、縄文土器の編年

本遺跡の大きな特徴は各時期の土器が層位的に出土していることである。後期から中期にかけては層位的に乱れはないが、前期の層は遺跡の周辺部で自然撓乱のため、層位と土器の関係は正確に把握できていないので、層位的に安定している遺跡中央部の層位と土器の関係を参考に、他の周辺部から出土した土器の位置付けを考察してみたい。

まず、本遺跡で最も古い土器は層位的には明確でないがG-1区、F-2区の最下層の礫層から出土した土器である。わずかに10点未満の出土で量的に少ないが第12類土器と分類した土器である。典型的な曾畑式土器である。土器は摩滅している。さらに下層に包含層が存在する可能性があったが、湧水のため深掘りを断念した。次にくる土器群は第11類土器と分類した土器群である。これまで轟D式土器として分類されていた土器群である。土層的にはがA~D・H区では最下層の8、9層に包含されている。ただし第11類土器に分類した10、18、22、25、28等は層位的に上層からの出土であり、この類に含まれるものでないかもしれない。次に比定できるのが第10類土器に分類した土器群である。尾田式として型式名が付された土器の1群である。第8層から第7層にかけて主に出土している。次に比定できるのが第9類に分類した土器群である。曾畑Ⅲ式土器として分類された土器群である。第7層を中心に出土している。次に比定できるのが第8類土器に分類した条痕文土器、第13類土器に分類した口縁に粘土帯をめぐらし肥厚させた土器群、その他の土器群として分類した土器群である。第7層を中心に出土しているが各群の前後関係は明らかでない。これら前期の土器に後続するのが中期の土器群である。4下層~5層に船元式土器、春日式土器、並木式土器が包含されるが、船元式土器が若干下位より出土している。4層、4c層に阿高式土器が包含されている。その上部の第2、3層には南福寺式土器が包含されているが、第2層と第3層の南福寺式土器には型式的に若干の差異が存在する。第3層の南福寺式土器には口縁部に肥厚帯はあまり顕著ではなく、文様帯も幅広いのに対し、第2層の南福寺式土器は口縁部肥厚帯は顕著である。また中津式土器や福田KⅡ式土器の磨消縄文土器が伴う。

大矢遺跡における出土土器の編年について概略を述べたが、今後、層位と出土土器の関係を再検討して別稿において詳述したいと考えている。

2、磨製石斧製作址の確認

(1) はじめに

大矢遺跡の成果の一つに石器製作址、特に磨製石斧の製作址の確認がある。磨製石斧の製作を示すものとして最も有効なのは製作途中の、いわゆる未製品の存在である。加えて、その加工道具がそろえばその遺跡で磨製石斧の生産がおこなわれたことは疑いない。さらにその生産の場が解明できれば磨製石斧の生産システムがより具体的に把握することができる。幸いにも大矢遺跡では製作の場を明らかにすることができ、加工道具類もセットで確認している。石斧製作で生じる剥片、碎片類も多量に存在する。剥片、碎片の分析は石斧製作の工程を具体的に示すのに有効であるが、今回は時間の関係で分析していないので、今後を期して、ここでは省略する。なお、ここで取り上げた未製品はいずれも失敗品であり、これから加工を進めれば製品になるものではない。また、加工道具としては剥離用のハンマー（当然、骨角製のハンマーが存在したと考えられるがここでは遺存していない）、敲打用のハンマー、叩石、研磨用の砥石がある。

以下、大矢遺跡における磨製石斧の製作址、磨製石斧製作の諸段階、磨製石斧製作の意義について検討してみたい。

(2) 磨製石斧製作址の抽出

第140図は中期・後期初頭の磨製石斧製作関連の石器である磨製石斧、同未製品と石斧製作の土具類であるハンマー、砥石の分布図を示した。なお、叩き石については石斧製作のみに使用されるものではないので中期～後期をまとめて第141図に分布図を示した。

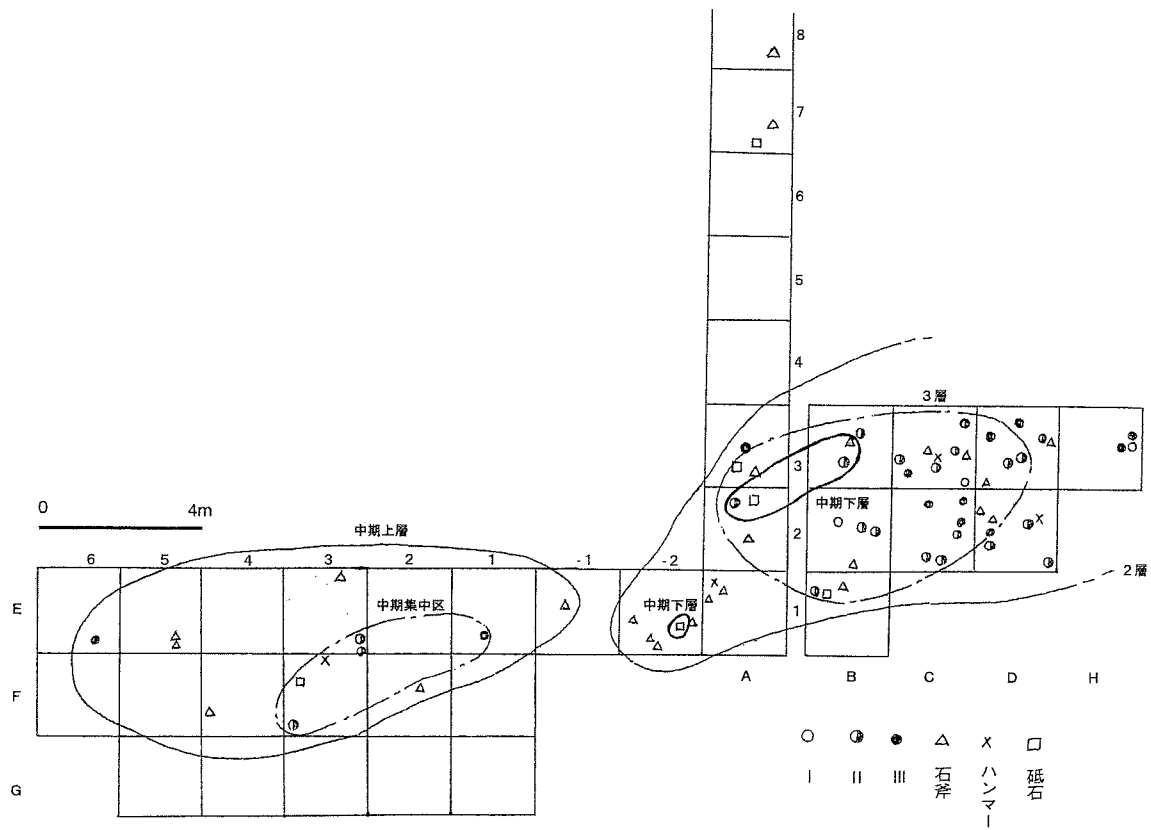
中期（阿高式土器）の包含層は遺跡全面に広がっているが、調査区の東側に堆積する層とその西側に、東側の層の上に一部重複しながらさらに西に広がる層がある。出土土器からすれば、大きな時間差は考えられないが、一応、下層と上層の関係で把握しておきたい。

まず、第140図の中期段階について検討して、石斧製作址の存在を浮かび上がらせることにする。

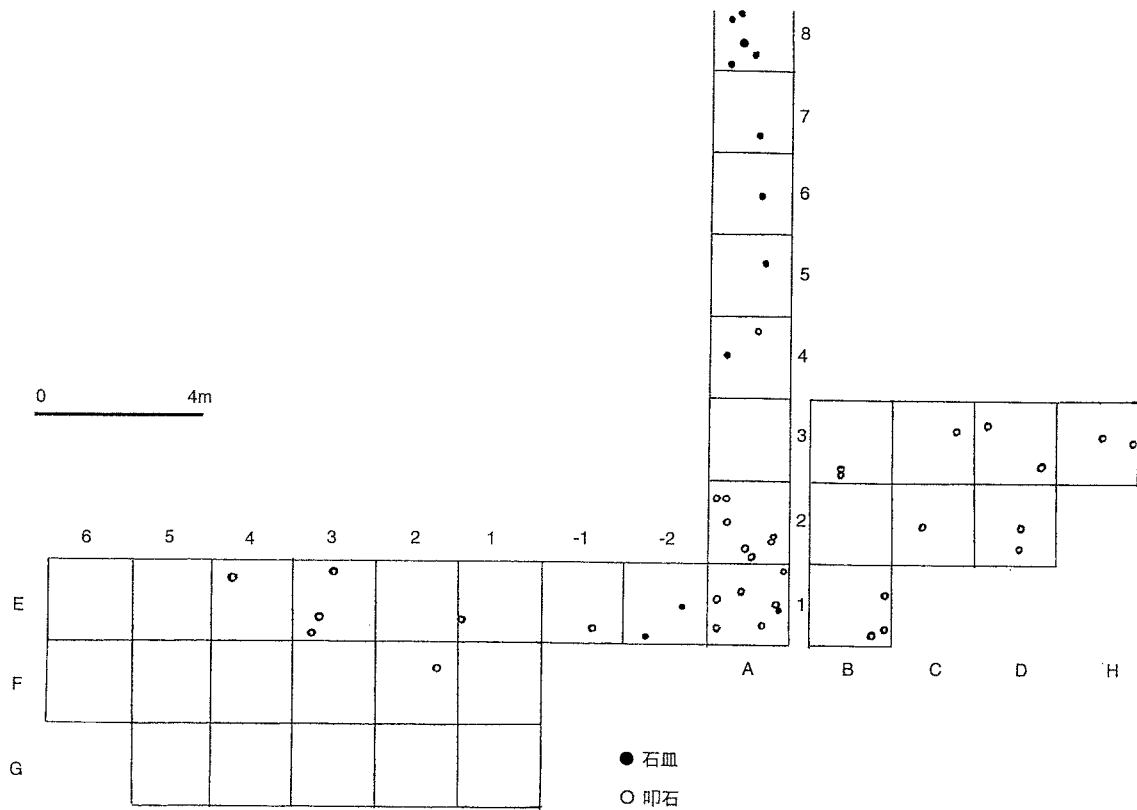
阿高式土器下層段階における磨製石斧製作関連の石器は極めて少ない。関連石器の分布は調査区の中央部よりやや東に片寄っている。E-(-2)区では石斧用砥石1点、A-2区では未製品1点、B-3区では磨製石斧1点、未製品1点の計4点である。関連石器の内訳は磨製石斧1点、未製品2点、石斧用砥石1点である。点数が少なく、散在的であるが6.5m×1.5mの範囲に存在して、未製品と加工道具がそろっているので、一応、製作の場と考えて良いと思われる。なお、A-2区の西側には40個の黒曜石原石を集積した遺構が存在していて、この周辺が磨製石斧を含めた石器製作の場であったことを示している。

阿高式土器上層段階においては磨製石斧、同未製品、ハンマー、石斧用砥石があり、分布は図でも明らかな様に調査区の西側に片寄っている。E-6区では未製品1点、E-5区では磨製石斧2点、F-4区では磨製石斧1点、E-3区では磨製石斧1点、同未製品2点、F-3区では未製品、ハンマー、石斧用砥石各1点、F-2区では磨製石斧1点、E-1区では未製品1点、E-(-1)区では磨製石斧1点の計13点が出土している。関連石器の内訳は磨製石斧6点、同未製品5点、ハンマー、石斧用砥石各1点である。やや散在的であるが製作址の一端を抽出することができる。E-1～3区、F-2、3区にかけての4.5m×2mの範囲に未製品4点、ハンマー、石斧用砥石各1点の計6点の石器・未製品が集中している。また、その周囲11.5m×4.0mの範囲には6点の磨製石斧と1点の未製品が散在している。1点の未製品は集中区から約5m離れている。

後期の磨製石斧、同未製品、ハンマー、石斧用砥石の分布は同様に第140図に示した。上下二層にわたってみられ、上下層共に分布は主に調査区の東側に片寄っているが、時期によって若干の分布の違



第140図 大矢遺跡における中期・後期の磨製石斧製作関連石器分布図



第141図 大矢遺跡における叩石・石皿分布図

いが認められる。

下層の分布状態は次のようになる。E-(-2区)では磨製石斧4点、A-3区では石斧用砥石1点、A-7区では石斧用砥石1点、A-8区では磨製石斧1点、B-1区では未製品1点、B-2区では磨製石斧1点、C-2区では未製品3点、C-3区では未製品2点、ハンマー1点、D-2区では磨製石斧1点、D-3区では未製品2点の計18点が出土している。関連石器の内訳は磨製石斧7点、同未製品8点、ハンマー1点、石斧用砥石2点である。中期に比較してやや密になる。中期同様に未成品が集中する製作址を抽出することができる。A-2・3区、B-1~3区、C-2・3区、D-2・3区にかけての7.0m×4.0mの範囲に磨製石斧2点、未製品8点、ハンマー1点、石斧用砥石1点の計12点が集中している。また、やや西側に離れたE-(-2)区に磨製石斧4点が出土して同一の製作址と考えられる。さらにAトレンチの北端A-7・8区において磨製石斧、石斧用砥石各1点が出土しているが、この地点は砂丘と後背湿地との境であり、製作址とは考えられず、単に遺物が投棄された場所とみられる。

上層における分布は次のようになる。A-1区では磨製石斧2点、ハンマー1点、A-2区では磨製石斧1点、石斧用砥石1点、A-3区では磨製石斧1点、未製品1点、A-7区では磨製石斧1点、B-1区では磨製石斧1点、石斧用砥石1点、B-2区では未製品3点、B-3区では未製品1点、C-2区では未製品3点、C-3区では磨製石斧2点、未製品4点、D-2区では磨製石斧1点、ハンマー1点、未製品4点、D-3区では磨製石斧2点、未製品3点、H-3区では未製品3点の計37点が出土している。関連石器の内訳は磨製石斧11点、同未製品22点、ハンマー2点、石斧用砥石2点である。下層とほぼ同様な集中区を抽出できるが、東側は調査区外に延びるため規模的にはさらに大規模になるとみられる。A-7区を除いた関係石器出土区の11.0m×5.0mの範囲に磨製石斧1点を除いた前記の石器、同未製品計36点が集中しているが、未製品が東側に多く、西側に製品が多い。この傾向は下層でも看取することができる。

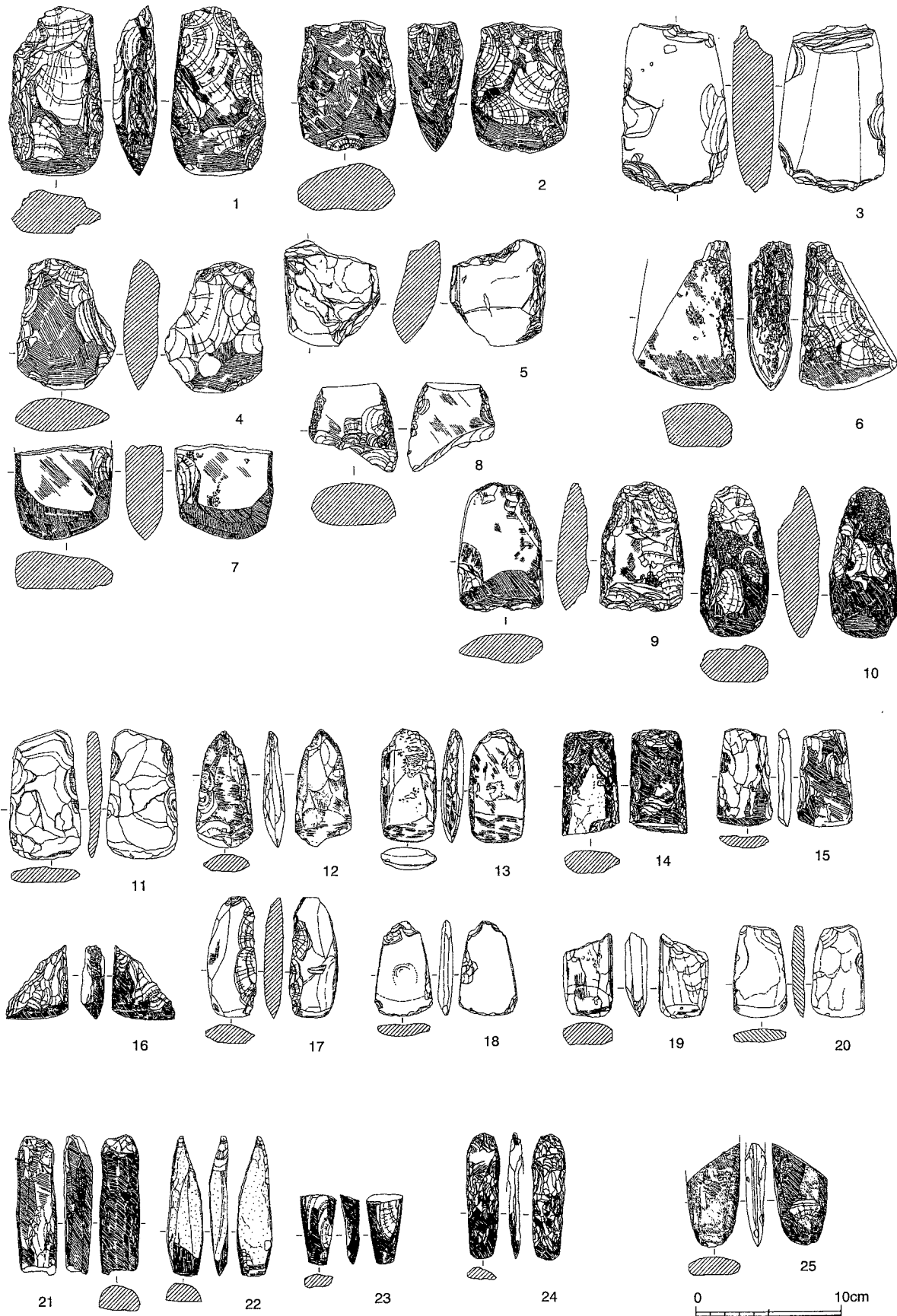
第141図に磨製石斧の製作の敲打段階の道具として使用されたと考えられる叩石の分布を示した。ただし、叩石の使用は植物の処理を含めて極めて多用であるため、一つの使用を限定することはできない。先の石斧製作関連遺物の分布と比較しながら検討してみよう。一般的に叩石は縄文時代草創期から存在する石器である。特別の加工を要しなく、自然の円礫を利用するためにその数は多く、遺跡では普通に出土する石器である。余りに普通にある石器であるため、あまり注目を集めることがなく、その実体は不明な点が多い。数量的変遷についても明らかでない。また、自然円礫が利用されるため、遺跡で見過ごされる場合も多い。本遺跡でも前期段階から存在しているが、その数は多くない。多くなるのは後期以降である。

阿高式土器下層段階では1点があるのみである。

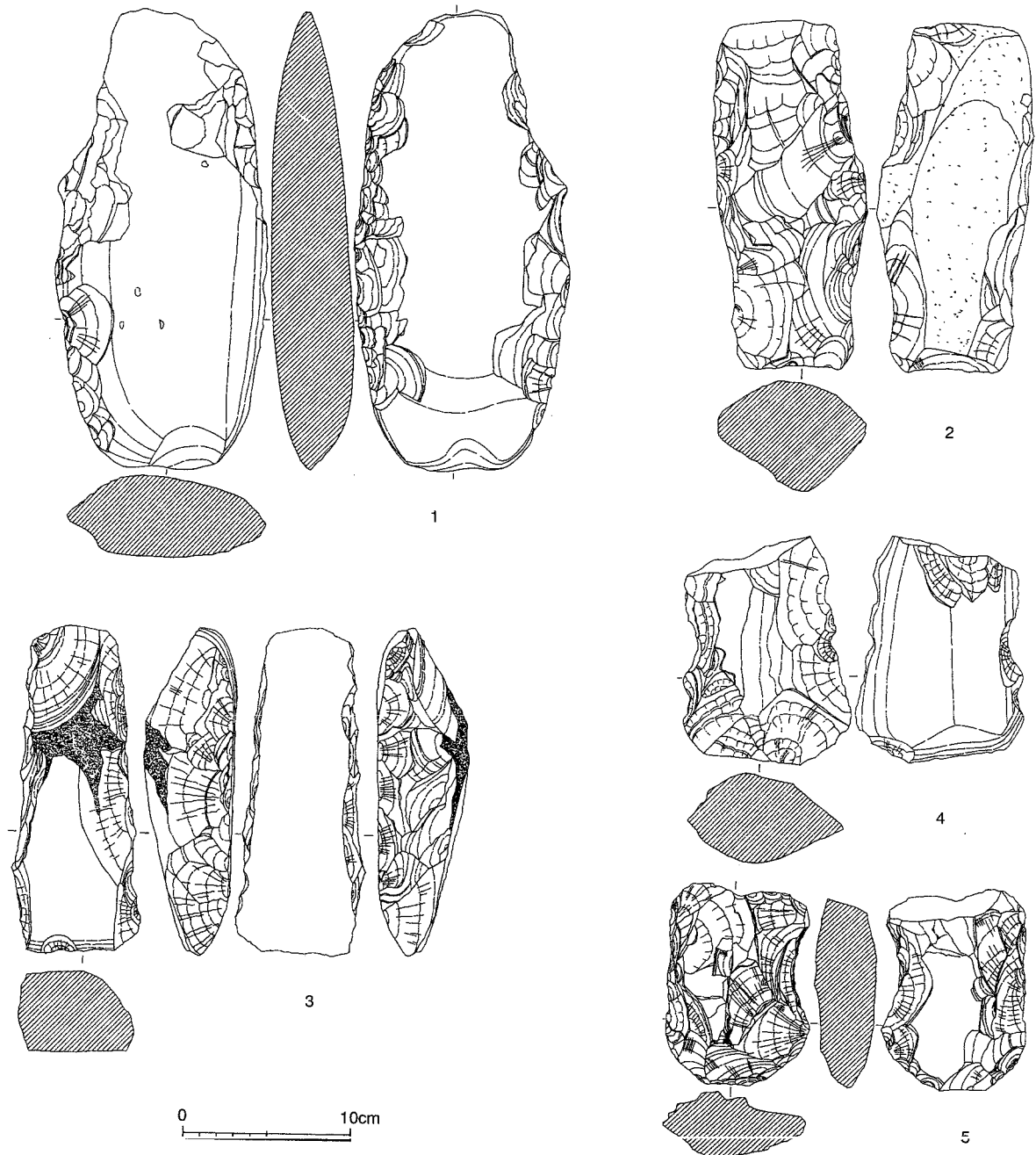
阿高式土器上層段階ではE-4区に1点、E-3区に3点、E-1区に1点、E-(-1)区に1点、F-2区に1点の計7点が出土している。未製品の集中区には入らないが、集中区の周辺区には完全に入ってしまう。ただし、周辺区には1点を除いて未製品や道具類がなく、他は磨製石斧の製品である。それを考えると叩石が石斧製作と直接関連するか否かは判断できない。

後期下層段階ではH-(-2)区に2点、A-1区に1点、A-4~7区に各1点、A-8区に5点の計12点が出土している。A-8区に集中しているが、この地区は前述した様に砂丘と後背湿地との境であり、廃棄物の投棄場所となっていたと考えられる。3点が集中区内に入るが、他は大きく離れている。集中区にはいる3点も周辺にある石器は磨製石斧のみであり、状況的には前者と同様である。

後期上層段階ではA-1区に6点、A-2区に7点、A-4区に1点、B-1区に3点、B-3区に2点、C-2・3区に各1点、D-2・3区、H-3区に各2点の計27点が出土している。A-



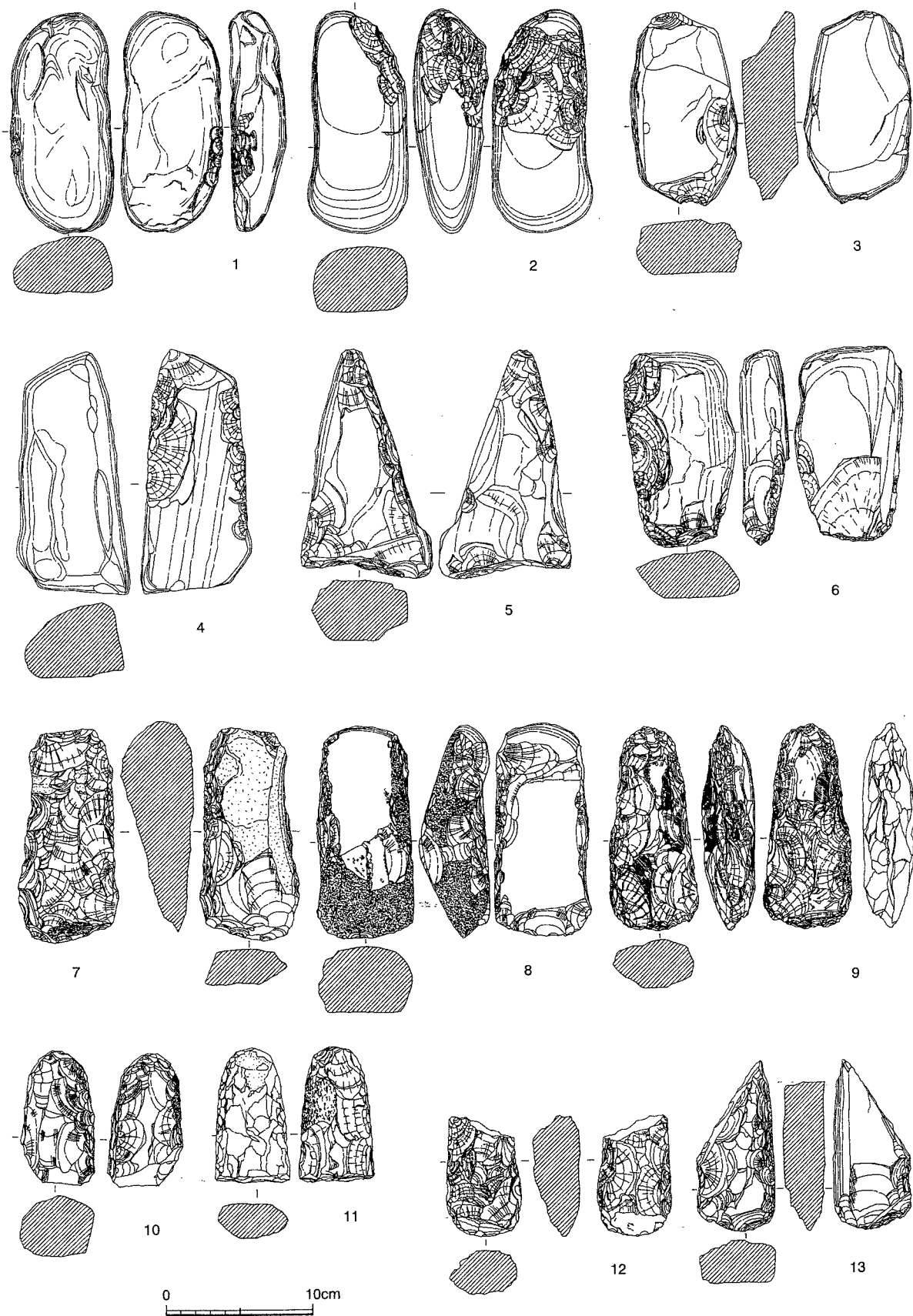
第142図 大矢遺跡出土磨製石斧集成



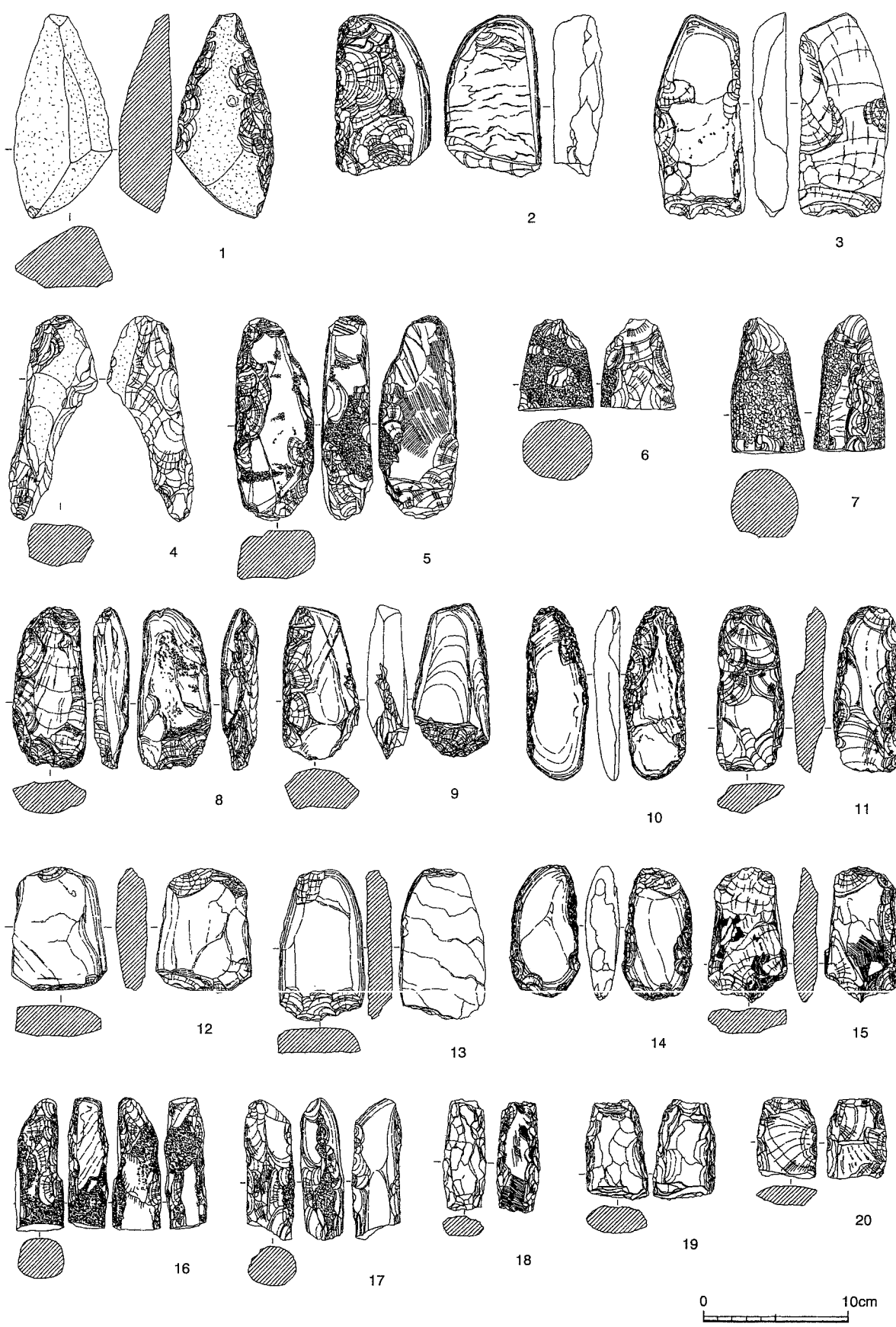
第143図 大矢遺跡出土磨製石斧未製品集成 I

1・2区に集中区があり13点が出土している。A-4区の1点を除いて他は殆どが石斧製作の集中区内に入ってしまう。叩石の集中区は磨製石斧の製品が集中する部分と重なるのは、阿高式土器上層、後期下層段階と同様である。未製品集中区と重なり合う叩き石は10点前後である。このような状況から叩き石と磨製石斧製作を単純に結び付ける訳にはいかないが、少なくとも叩石の一部が石斧製作に関与したと考えて良いと思われる。なお、三時期において叩石と磨製石斧製品と重なり合うことには注意する必要があるだろう。次項で述べる様に敲打段階は研磨の直前に行われることを考えれば、無視できないことである。

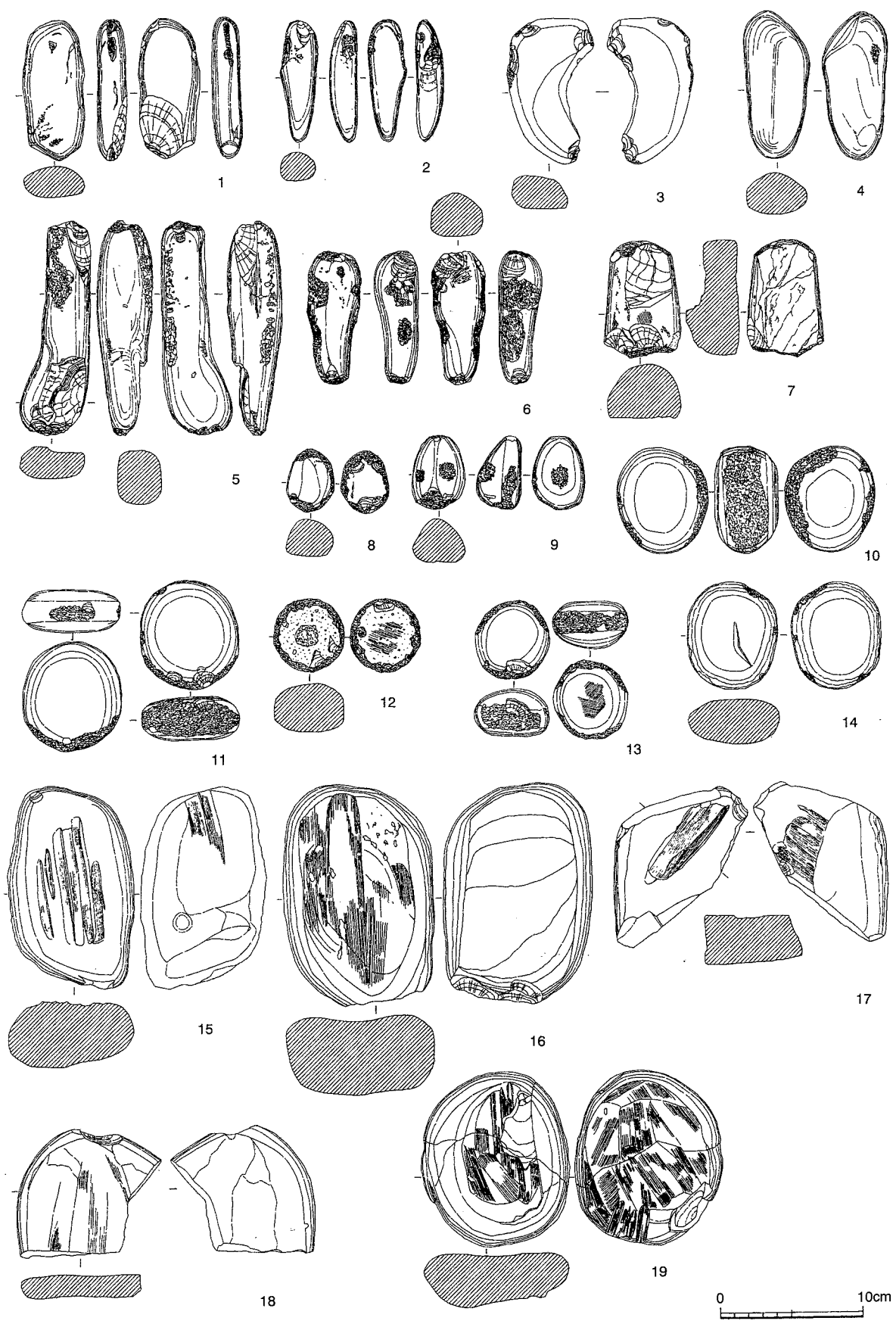
以上、大矢遺跡における磨製石斧の製作址の状態と変遷をみてきたが、ここで若干のまとめをしておこう。ここでは示していないが、磨製石斧の未製品は前期の層からも出土している。このことから



第144図 大矢遺跡出土磨製石斧未製品集成Ⅱ



第145図 大矢遺跡出土磨製石斧未製品集成Ⅲ



第146図 大矢遺跡出土磨製石斧製作工具集成

本遺跡では前期以降継続的に石斧製作が行われたのは間違いなからう。ただし、前期段階は必要に応じて1個1個が製作されたと考えられる。場として未製品と道具類がセットになって出現するのは中期後半・阿高式土器下層の段階である。この段階は場の出現期として把握されよう。この時期の製作址は前述したように、極めて小規模で未製品を含めて石器類は少ない。次の阿高式土器上層段階には、場所を西側に移し、規模的には10㎡前後の場が設定されているが未製品を含めた石器類は10数点に留まり、この場における磨製石斧の製作量がそれ程ではなかったことを示している。次の後期下層段階では、場を再度東側に移動させている。規模は前段階と大差ないが未製品を含めた石器類はほぼ倍増していて、磨製石斧の製作がより活発になってきたことを示している。次の後期上層段階は場としては前段階を踏襲するが、規模は遙かに大規模になったと考えられ、東側は調査区外に延びている。また未製品をはじめとした石器類も前段階から倍増していて、未調査区を含めると数倍の磨製石斧の製作量を考えることができる。

以上をまとめると、中期後半に始まる石斧製作の場は、後期前半にかけて急速に大規模化し、磨製石斧の製作量を急速に高めていったとみることができる。何故に磨製石斧が必要になったのであろうか。

(3) 大矢遺跡における磨製石斧の製作工程

次に、磨製石斧の製作工程について見ていくことにする。

a 原石の採集

まずは石器の原材料の確保の問題がある。大矢遺跡で石斧の素材として利用されている石材は、蛇紋岩、頁岩、安山岩、砂岩、玄武岩、ホルンフェルス等種類が多く、特定の岩石に集中しているわけではない。このことから明らかな様に、遺跡周辺に良質の石材が産出するわけではない。では、石斧製作のための石材はどこから求めたのであろうか。本遺跡で石斧の素材として利用しているのは、未成品から見ても明らかなように、いずれも円礫である。これら円礫は遺跡の立地する砂丘の基盤層をなす礫層に含まれていて、遺跡前面に拡がる礫浜から求められた可能性が強い。ただし、蛇紋岩については礫層中には見出すことができない。当然、他から持ち込まれていると見なければならぬが、自ら原産地に出かけ採取したか、交易によって入手したかは定かにはできない。蛇紋岩が他から持ち込まれたことは、遺跡内に蛇紋岩の剥片等が極端に少ないこと、石斧が破損した場合、それに再加工を加え小型の石斧に再生し、蛇紋岩そのものを大切に有効利用が図られていることから肯首することができる。

石斧の素材として円礫を採集するに際しては、目的とする大きさ、形状が合致したものを選び後の作業の省力かをはかっていると考えられる。また、石質を調べるために部分的に打ち欠きを加えている。この石質の調べ方は黒曜石も共通していて、A-2区の黒曜石原石の集積遺構の黒曜石原石にも認められ、ここでは打ち欠いた剥片と原石が接合している。

b 剥離・整形段階

素材を選択した後は、素材に剥離を加えながら石斧の粗方の形に整える工程である。この段階の工具としては使用されるのはハンマーである。第146-1~6図に示す様にハンマーは丸い棒状の礫を利用した敲打器である。手に握りやすく、先端部には敲打痕が顕著に残っている。大矢遺跡から出土しているものは大部分が頁岩製である。10本前後が出土しているが数としては少ないので、石製のハンマーと共に骨・角製のハンマーが使用されたと考えられ、むしろ、骨・角製のハンマーが多かったと考えられる。

剥離・整形段階の作業としては、側辺の剥離から始めている例が多いが、側辺の剥離は全面に施す訳ではなく、元々原石の選別段階において形状等は吟味されているので、側辺の剥離は一辺の片面のみ、あるいは一辺の両面、さらには二辺の片面のみに剥離を加えるなど様々であるが、基本的には石斧の

概略形を整えるのが目的であるので、側辺の剥離は最小限にとどめられ、多くは自然面のままである。この段階での失敗例は極めて少ない。次に刃部形成のための剥離が両面から加えられているが、刃部形成の剥離には苦勞のあとが見て取れる。未製品のまま廃棄されているのはいずれも刃部形成において平坦剥離の力がおよばず階段状剥離に成り、大きな段が付き過ぎて修正が効かなくなったものが殆どである。

この段階で廃棄された未製品の中には上記の例とは異なり、より丁寧に剥離を加えて整形した一群がある。ほぼ全面に剥離が加えられ、殆ど自然面を残していない。断面形は楕円形をなし、厚い。頁岩、蛇紋岩を素材としたものが多い。工程的には進歩したものである。剥離を充分に加えないまま敲打を加えているものがあることを考えれば、かなり完成度が強く、大きさもそろっている。

c 敲打段階

剥離を加え、ある程度の整形が整った段階に剥離によってできた稜線を敲打器によって潰す工程である。しかし、本遺跡では一部ではあるが比較的早い段階から敲打技法を用いている。例えば、素材の部分的な高まりを除く場合、平坦剥離をうまく施すことができず、平坦剥離に変わって敲打技法を用いている例（第143-3、145-8図）、石斧の大きさに関係なく見られる。ただし、それでうまくいかなかったとみられ、途中で放棄されている。

整形後、敲打が加えられる石斧は、断面形が円形に近い、いわゆる乳棒状石斧や柱状石斧と呼ばれる断面が厚い石斧に限られている。敲打は丁寧に殆ど剥離が分からなくなるように施されていると考えられ、第143図7のように途中で放棄された未製品においても丁寧な敲打痕が見られる。この段階での破損も多かったと考えられ、先に見た例はいずれも、見事に半折したものである。

先に見た、全面に丁寧な剥離が施される石斧については敲打される例は極めて少ない。部分的に僅かに敲打されている例があるが、大部分は敲打されることなく、直接、研磨工程に移行すると考えられる。

敲打に使用される石器はハンマー、叩石が考えられる。打痕の状態からは叩石がより有効であったと考えられる

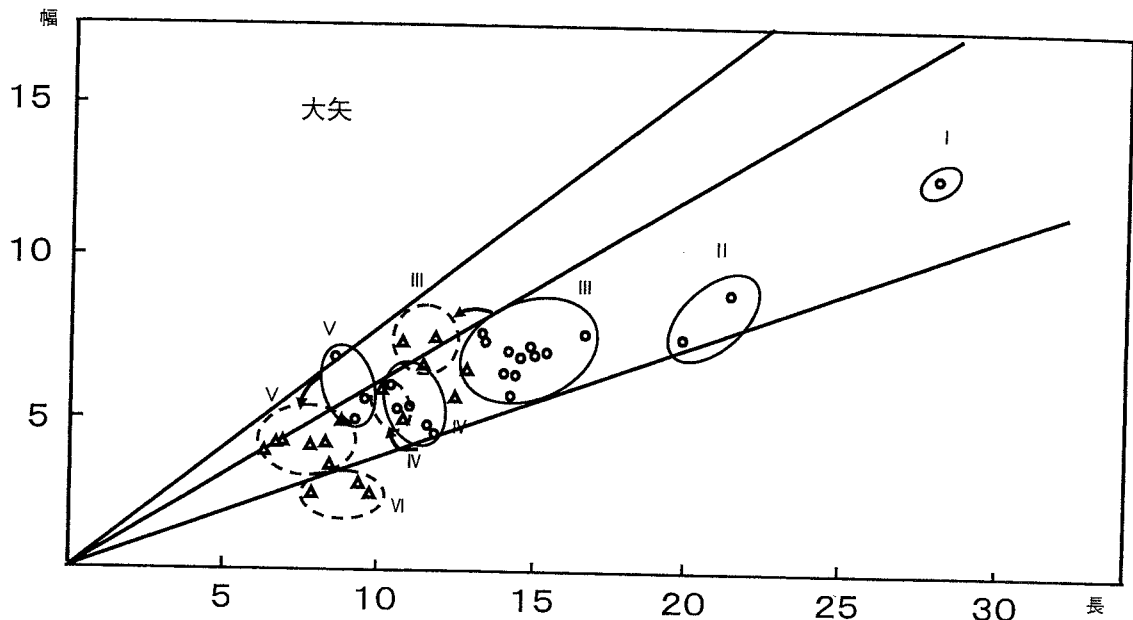
d 研磨段階

磨製石斧の仕上げとして研磨工程がある。研磨工程で大切な道具は砥石である。磨製石斧の砥石は、一見石皿と区別がつかないが、砥面に石斧用砥石の特徴である石斧の幅の条線（凹み）がつくことによって区別できる。砥石にはいずれも砂岩を利用している。この段階の失敗品はほとんどないと考えられる。製作址周辺から出土した磨製石斧はいずれも使用中に破損したものとみられ、刃部の再生あるいは加工を加え再生するために、この場所に持ち込まれたものと推測される。なお、研磨工程には水が必要であるが、製作址の近くには水はないので、深鉢等の容器に水を入れていたものと考えられる。中期・阿高式土器の深鉢形土器が約半分を残して、製作址に横たわって出土したこともあながち無関係ではなからう。

以上、大矢遺跡における磨製石斧の製作工程について見てきた。まとめると、制作工程は、a. 石斧の素材としての原石の採集、b. 剥離・整形の段階、c. 敲打による調整段階、d. 研磨段階、と言う磨製石斧製作の一般的な工程が基本となっているが、b. 段階に敲打技法を施し、平坦剥離の代わりとしている資料がある。また、b段階からc段階を飛び越してd段階に移行する資料もある。このように工程が一定していないことは、磨製石斧製作の初期段階としての位置付けが可能であり、磨製石斧の製作が、それ程の量産体制に突入していないことを示していると考えられる。

(4) 磨製石斧と磨製石斧未製品の関係

次に大矢遺跡における磨製石斧の未製品と製品の関係について検討してみよう。



第147図 大矢遺跡における磨製石斧未製品と長幅比の分布

第147図は磨製石斧未製品と製品の長幅比をグラフにしたものである。横が長さ、縦が幅を示している。未製品を白丸、製品を白抜き三角で示した。

まず、未製品からみていくことにする。それぞれにまとまりがあり、7類に分類することができる。

未製品Ⅰ類：超大型品で1点があるに過ぎない。長さ28cm、幅13cm前後である。

未製品Ⅱ類：大型品で4点があるが2点は半折していて長さが不明。2点が計測可能である。長さ19～22cm、幅7～10cmである。

未製品Ⅲ類：中型品で16点があるが5点は半折していて長さが不明。11点が計測可能である。長さ13～17cm、幅5～8cmである。

未製品Ⅳ類：小型品で5点がある。長さ10～12cm、幅4～6cmである

未製品Ⅴ類：扁平な小型品で3点がある。長さ8～10cmである。

未製品Ⅵ類：断面が円形をなす乳棒状の石斧未製品であるが、半折して計測不能である。2点がある。

未製品Ⅶ類：鑿形の石斧未製品である。3点があるがいずれも半折して計測不能である。

次に磨製石斧の製品をみていこう。未製品同様にそれぞれにまとまりがあり、4類に分類できる。

製品Ⅰ類、中型品で両刃の磨製石斧である。7点があり、殆どが欠損している。どうか計測に耐えるもの3点がある。長さ10～12cmであるが、頭部を欠損しているので実際は長さが12～16cm程度になると考えられる。幅6～8cmである。

製品Ⅱ類、Ⅰ類よりさらに小型になる両刃の磨製石斧である。2点があり、長さ9～11cm。

製品Ⅲ類、小型の磨製石斧、扁平で片刃（偏り刃）になる、いわゆる扁平片刃石斧である。10点があり、7点が計測可能である。長さ6～9cm、幅4～6cmである。

製品Ⅳ類、細長い鑿形の石斧である。柱状をなし（一例は再生品であり扁平である）、刃部は片刃になる。4点があり、2点は完形品、1点は刃部を欠損しているが長さは復原できる。長さ7～11cm、幅2～3cmである。

製品V類、やや幅広の鑿形の石斧である。刃部破片で計測は不可能である。

次に、未製品と製品の関係をみていく。先ず未製品I類は1点と数も少ないが、これに対応する製品は存在しない。未製品II類は4点あるが、これらにも対応する製品は存在しない。未製品III類は11点があり、これらに対応するのが製品I類である。7点があるが、殆どが欠損している。消耗度が著しく、使用が頻繁であったことが伺える。未製品IV類は5点あるが、これに対応するのが製品II類である。2点がある。製品I類に比較してやや小型であるが、使用は殆ど同じと考えられる。未製品V類は3点あるが、これらに対応するのは製品III類である。10点があり、7点は殆ど完形品に近い。未製品VI類は2点あるが、対応する製品はない。未製品VII類は3点あるが、これらに対応するのは製品IV類である。4点がある。全ての磨製石斧が本遺跡で製作されている。

両刃で、いわゆる蛤刃の石斧は樹木の伐採具と考えられる。対応する石斧は未製品I～IV類、IV類、製品I、II類である。総点数32点があり、そのうち未製品が23点、製品が9点である。未製品が圧倒的に多い。特に未製品I、II、VI類は遺跡内に製品が存在せず、使用場所が遺跡外であったことを示唆している。また、未製品III、IV類に対応する製品I、II類にしても未製品が多く、製品の殆どが破損品であることを考えると、やはり使用場所は遺跡以外の場所であったとみることができる。

これに対し樹木の加工具と考えられる扁平片刃石斧、柱状片刃石斧（鑿形石斧）は前者と逆のあり方をしている。扁平片刃石斧は未製品V類、製品III類が対応し、総数13点があり、内訳は未製品3点、製品10点で圧倒的に製品が多く、7点がほぼ完形品である。柱状片刃石斧は未製品VII類、製品IV類が対応し、総数7点があり、内訳は未製品3点、製品4点で、ほぼ同数である。製品が遺跡内に多く残されていることは、これらの石斧が遺跡内で使用されたことを示唆している。

(5) 磨製石斧製作の意義と磨製石斧の用途

磨製石斧は縄文時代の全期間を通じて使用され縄文人にとっては欠かせない道具の一つである。故に磨製石斧の製作は縄文時代を通じて製作されたことは間違いないが、その製作址あるいは入手方法についてはあまり明らかにされていない。しかし、最近の調査の進展にともないかなり明らかになってきた。磨製石斧の製作は、縄文時代早期の段階において、南九州では一部明らかになりつつあり、また北部九州でも、前期段階に磨製石斧の未製品が見つかりつつある。しかし、これらの縄文時代早期・前期の磨製石斧製作址は、規模が小さくその生産活動は、自家消費的である。それに反して、縄文時代中期後半から後期前半にかけて、西北九州で明らかになりつつある磨製石斧製作址の規模は大きく、磨製石斧生産が、自家消費だけでなく、他の集落を巻き込む様になる。磨製石斧の生産を紐帯として集落間の関係が生じてくる。極めて注目すべき事柄である。筆者はかつて天草諸島における領域問題を追及したことがあるが、そこでは縄文人の集落の領域は半径5kmが一般的であるが、その中であって領域間で大きな違いがあることがわかった。例え、隣り合った領域でも全く違った生活パターンが繰り広げられていることである。磨製石斧の製作については現在判明している遺跡は沖の原貝塚、大矢遺跡、浜崎貝塚、柏持遺跡があるが、大矢遺跡と浜崎貝塚が同じ領域の拠点集落である以外は、いずれも異なった領域に属している。そして隣り合った領域には磨製石斧の製作址は皆無である。すなわち、幾つかの領域の中で磨製石斧の製作は1ヶ所のみで行われ、そこから磨製石斧を供給していたと見られるのである。そしてそれは大矢遺跡と浜崎貝塚に関係のように、一つの領域で磨製石斧製作が継承されていたと見られるのである。そのような、磨製石斧の供給パターンが崩れるのがいつなのか、興味ある問題である。

西北九州においては前述したようなパターンが成立するのが中期後半から、後期前半にかけてであろう。この時期に磨製石斧の製作が明らかな地域は、現在のところ西北九州に限られている。しかも、その分布圏は環玄界灘漁撈文化圏と完全に一致することは偶然ではないと考えられる。磨製石斧の用

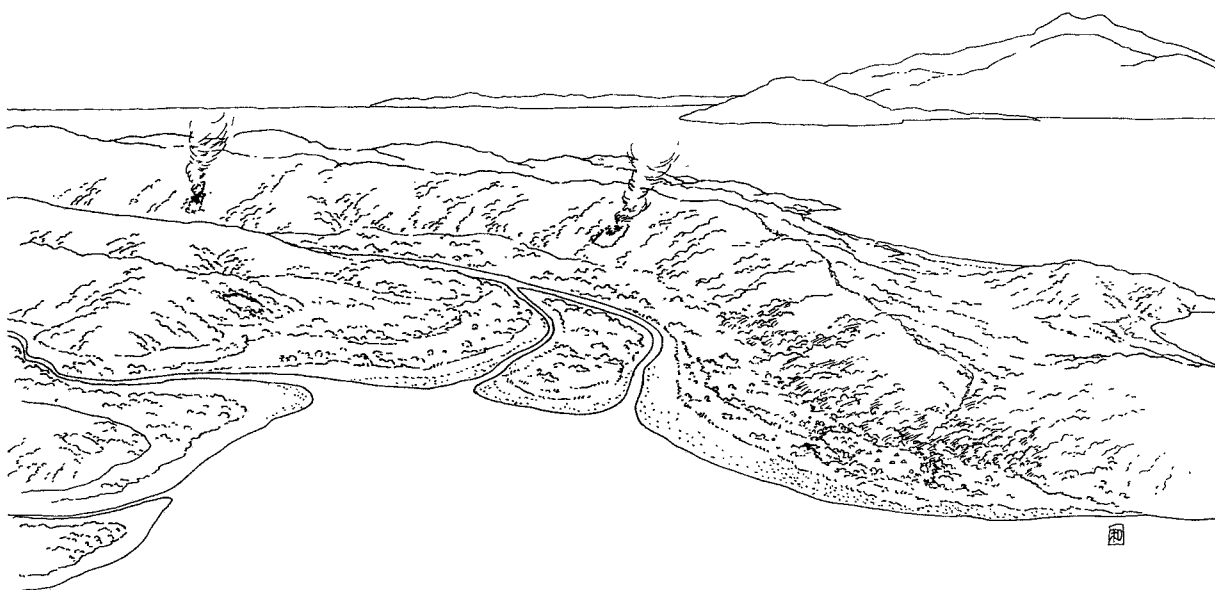
途と大きく関係していると考えられるのである。これまでも前期において、磨製石斧の増加する時期はあったが、前期には環玄界灘漁撈文化圏の成立期でもあり、丸木船の製作と大きく関わっていたとみられるのである。では中期後半、後期前半は何と係わったのであろうか。磨製石斧の本来の使用である樹木伐採との関係で再検討する必要がある。

第9章 大矢遺跡物語

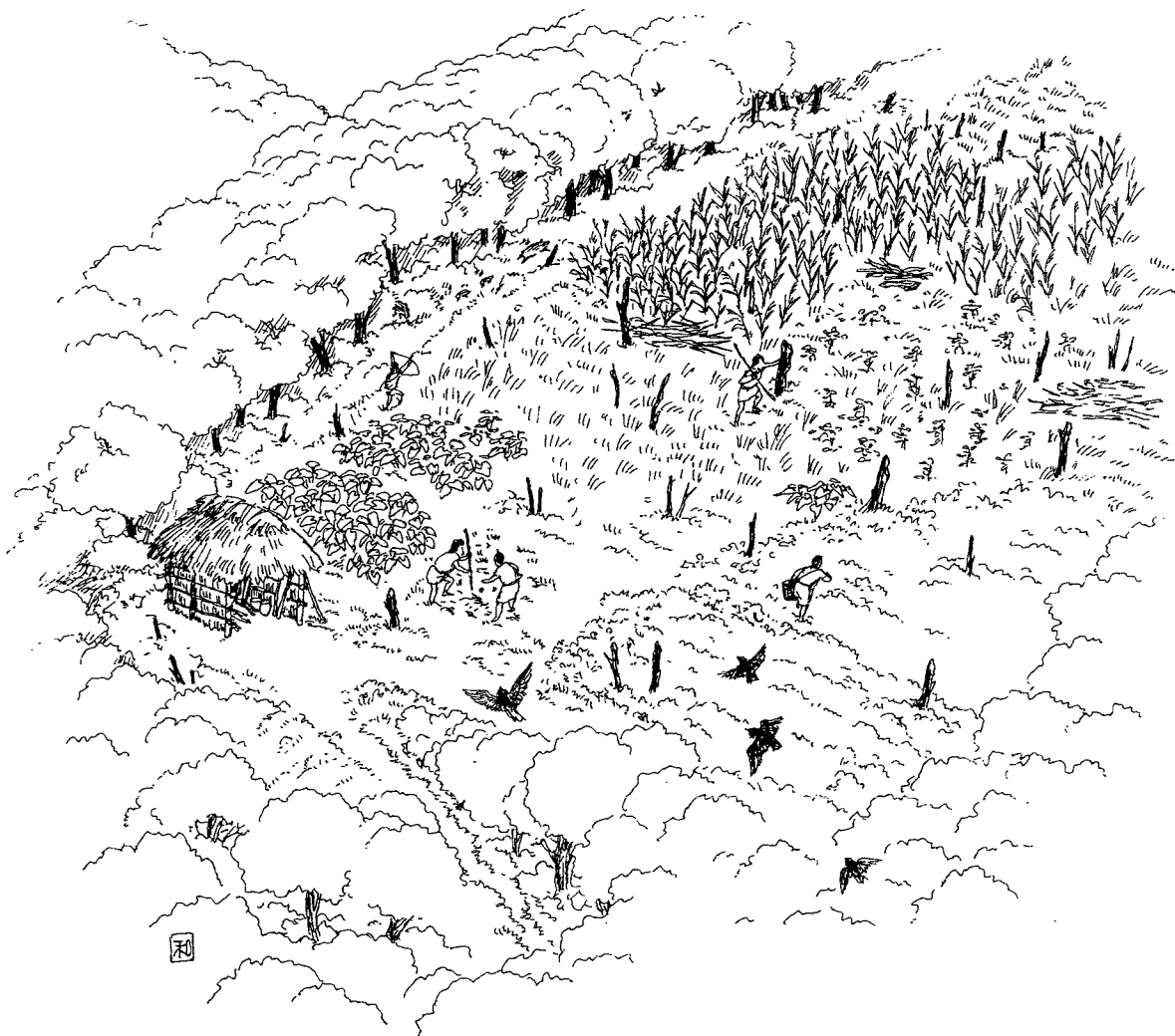
時間を4000年程さかのぼって、大矢遺跡に住んでいた縄文人の生活を見てみよう。4000年前といってもどんな時代であったのか想像がつかますか。天草にはどんな人たちが住んでいて、どのような道具を用いて、どのような生活をしていたのでしょうか。発掘調査でわかったことから縄文時代の生活を復元的に見ていきたいと思えます。

まず環境の違いにびっくりするでしょう。どんな環境だったのでしょうか。本渡の町が一望できる十万山に登ってみよう。山には今みたいな道路はありません。獣道を伝いながら頂上目指しますが、繁茂する木々によってさえぎられ、なかなか到達できません。樹木を観察するとシイの木やカシの木等のドングリのなる木が主です。中にはツバキ、カジノキなどもあります。これらの樹木の木の葉は太陽の光でテカテカと光るので照葉樹と呼ばれています。日当たりの良いところには山芋のつるも見かけます。ドングリや山芋などは縄文人の主要な食料となります。秋には編み袋を下げ、堀棒を持った縄文人がドングリや山芋の採集に精を出す光景が目に浮かびます。ようやくたどり着いた頂上は照葉樹林に覆われ、今、展望台からみる景色は見れません。勇気を出して木に登ってみましょう。ようやく目に景色が飛び込んできます。しかし、今の景色とは異なっています。市街地に当たる部分には陸地がありません。完全に海の中でした。平野はほとんどなくなっています。広瀬川には複数の河口があり、その間が低湿地となっていて、わずかに平地が残っています。低湿地にはアシが茂っています。川と山の間の狭い段丘には草木が茂り、山地や丘陵は十万山同様に照葉樹林に厚く覆われています。北側の山地の先には有明海が横たわり、その先には雲仙岳の雄姿が青く浮かぶ景色は昔も今も同じです。

良く目を凝らしてみましよう。地面は海と陸地の間に少し見えるだけですが、広瀬川の河口の右側丘陵から延びる砂丘に円く緑のない部分があります。その中に数軒の家も見えます。大矢の集落です。目を山地に移してみましよう。数箇所山の斜面から煙が出ています。また、離れた斜面には樹木が



第148図 縄文時代の大矢遺跡遠望



第149図 焼畑想像図

切り払われ開地となったところがあります。何でしょうか。行ってみることにしましょう。

集落から広瀬川沿いにできた道を歩くこと30分、本泉で斜面に上る小さな枝道を上ること約300m、照葉樹の木陰が切れ、急に明るくなります。ここは約70aにわたって照葉樹林が切り開かれています。小道を上り詰めたところに粗末な小屋があります。切り開かれたところを観察すると、高さ1m前後の切り株がいたるところに黒く焼けた状態で立ったままになっています。切り株の間には雑穀類や豆類、野菜類が植えられています。あるものはすでに収穫を待つばかりになっているし、あるものは芽が出たばかり、成長途中の作物もあります。そうです。ここは縄文時代の焼畑耕地なのです。粗末な小屋はこの耕地に設けられた出作り小屋です。道具類を置いたり、修理したり、収穫の時期など忙しい時には寝泊りもします。ただし、焼畑農耕では大きな収穫は望めません。収穫時期には昆虫や小鳥、小動物も収穫物を狙って集まってきます。ここで食物連鎖の戦いが繰り広げられます。時にはイノシシやシカなどの大型獣も加わります。それら害鳥、害獣を追い払うのも大事な仕事です。イノシシやシカには柵を設けて進入を防いだと考えられます。追い払う道具として投石や弓が必要になります。ネズミなどの小動物には罠が有効です。当然そこで捕獲した鳥や獣は食料となります。農耕が始まって狩猟が衰退するという従来の考えは改めなければなりません。本格的な狩猟は別にして、小規模な狩猟は逆に盛んになったと思われま

狩猟、漁撈、植物採集が暮らしの主体を占めていた縄文時代に、原始的とは言え新しく農耕が加わったことは大きな画期です。では農耕が始まったことで何が変わっていくのでしょうか。村の生活をのぞいてみよう。第150図に村のある時期の一コマを示してみました。家の数ははっきりしませんが、少なくとも4～5軒の竪穴の住居があります。いずれの家も入り口は南を向いています。家の前では数人の男と男の子が何かを作っています。石を打ち欠き、その横では砥石で何かを磨いています。そうです。ここでは磨製の石斧を作っているのです。焼畑農耕をするためには耕地の樹木を伐採する必要があります。樹木の伐採道具である磨製石斧が多量に必要なようになってきたのです。大矢の集落では集落の前にある海岸が礫浜になっているために、石斧の材料は無数にあります。適当な円礫を採取し加工すると以外に簡単に磨製石斧が出来上がるのです。やがて、他の集落の磨製石斧も作ってやるようになったのです。弓矢の先端に着ける鏃も作っています。鏃を作るには黒曜石のようなガラス質の特殊な石が必要です。なかなか手に入らないので、西北九州の佐世保から船で物々交換にやってきた人々から入手し、多量にストックしています。

焼畑農耕が大矢の集落にもたらされたのは漁撈仲間からです。漁撈仲間のネットワークは広く、遠く韓半島の南部の人々とも交流があったのです。そのことを示すように、漁撈具は互いに教えあっていました。それらの漁撈具を使った漁撈のひとコマを第151図に示しました。丸木船で沖に出て、大型の結合式釣針で、かかった大型の獲物を船まで手繰り寄せ、銚でとどめをさすという勇壮な漁法で



第150図 磨製石斧製作状況（想像図）



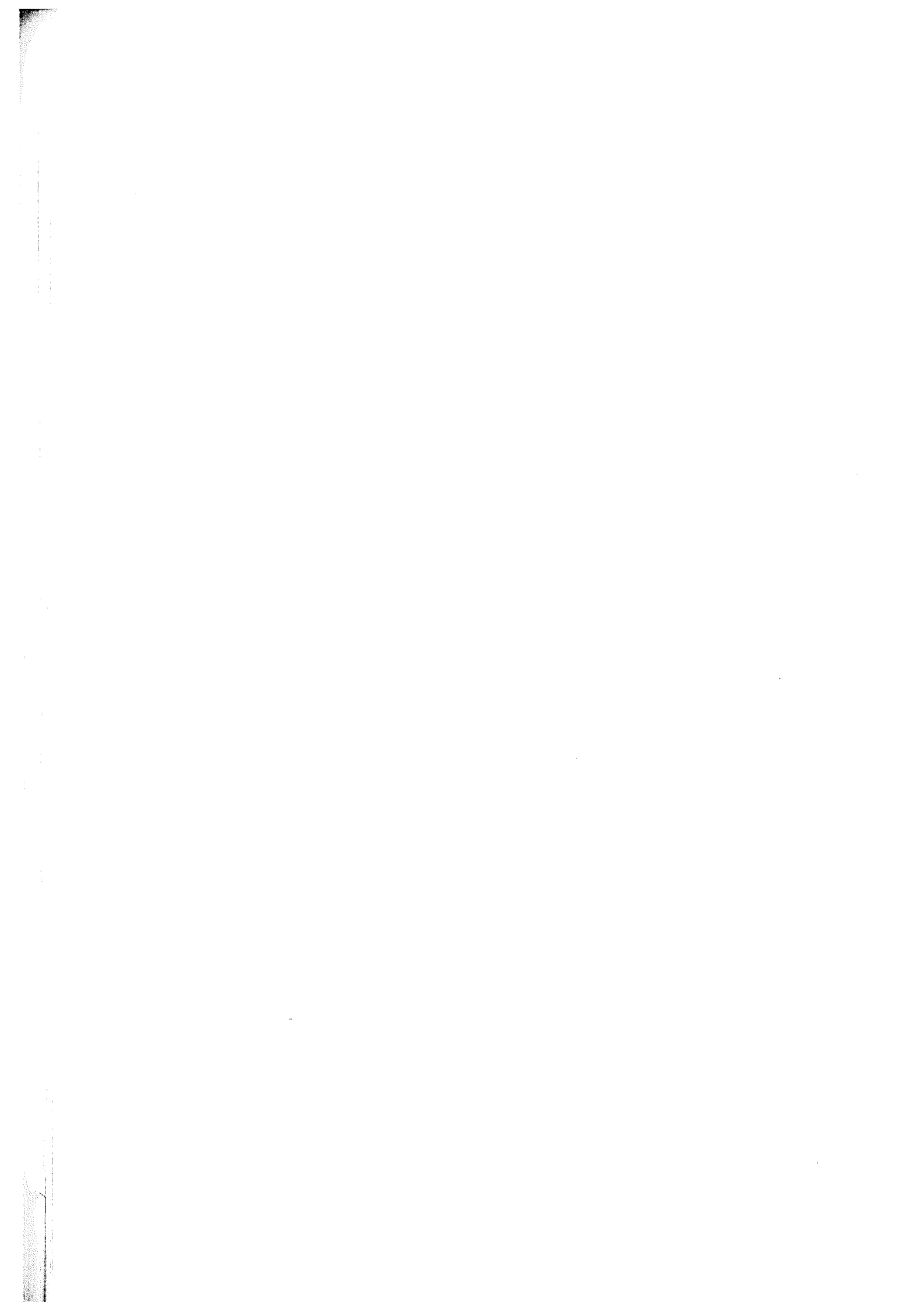
第151図 縄文時代の漁（想像図）

す。このとき使用される結合式釣針は軸部が石製、針部が骨製の韓半島からもたらされた鰲山里（オサンニ）型結合式釣針あるいはそれから発展したと見られる軸部は鹿の鹿角、針部は猪の牙を利用した西北九州型結合式釣針が使われます。大矢の集落、隣の一尾の貝塚からは石や巻貝の軸で作られた鰲山里型結合式釣針の軸部が出土しています。これは極めて珍しいことで、ひょっとしたら韓半島の人々が来ていたかも知れません。天草で一般的な釣針は西北九州型結合式釣針で、一尾の貝塚やその隣の沖の原の貝塚からたくさん出土しています。最後にとどめを刺す銚はどんな物だったのでしょうか。これも韓半島と関係が深いものです。この銚は銚頭に石鋸を組み合わせて一個の銚とする、組合せ石銚です。銚頭は鋸を大きくしたようなもので長さ5～6cm前後、先端は尖り、側辺には鋸齒列が作り出され、中には両側に大きい抉りを入れる物もあります。石鋸は長さ2～3cm、一辺に鋸齒列を入れています。大型の獲物は何でしょうか。まだはっきりしていませんが、大型の魚類やサメ類が考えられます。貝塚に残された魚骨からするとサメ類が有力です。サメはどう猛でおっかない魚類ですが、死んだら全身にアンモニアが回り便所臭いにおいがしますが保存がききます。冷蔵庫のなかった縄文時代にはありがたい魚類です。

大矢の集落は天草地方に残された遺跡に過ぎませんが、その生活、使用された道具類を探求していくと、とても一地方では解決できない大きな問題を含んでいることがわかったと思います。遺跡の調査成果の一つ一つの積み重ねが問題の解決につながります。

版 圖





①遺跡遠景
(十万山より東を望む)



②遺跡遠景
(十万山より北東を望む)



③遺跡遠景
(十万山より北東を望む)



④遺跡遠景
(海側より遺跡を望む)



図版 2



①遺跡近景
(北側より、中央畑地在遺跡)



②遺跡近景
(北側より、中央畑地在遺跡)



③遺跡近景
(南側より)



④遺跡近景
(東側より、右側が後背湿地)

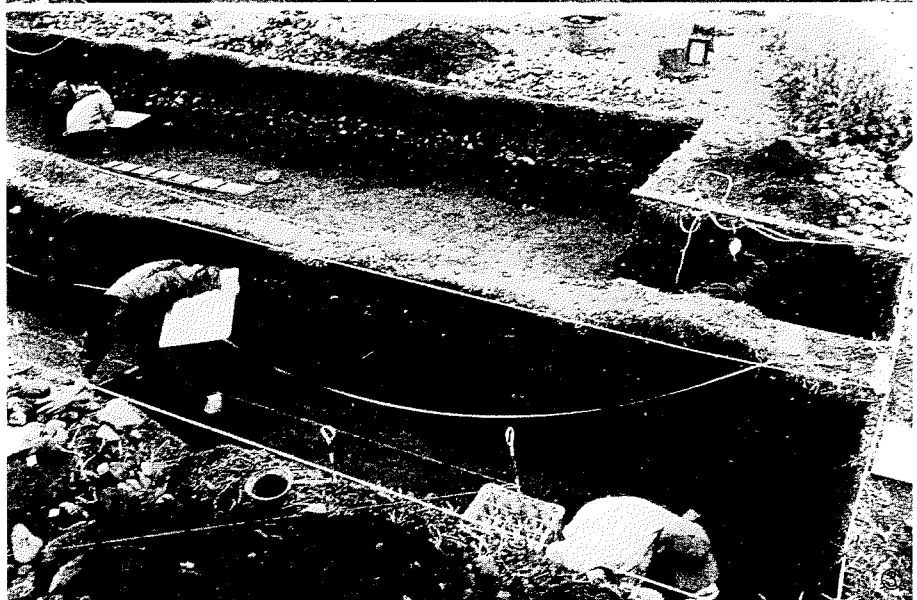
①遺跡調査風景
(第1次調査)



②遺跡調査風景
(第1次調査)



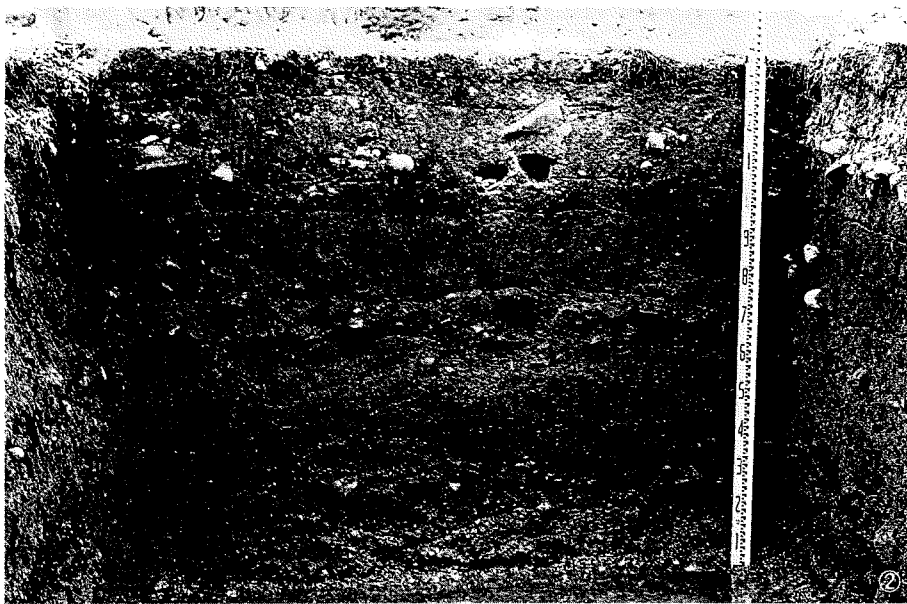
③遺跡調査風景
(第2次調査)



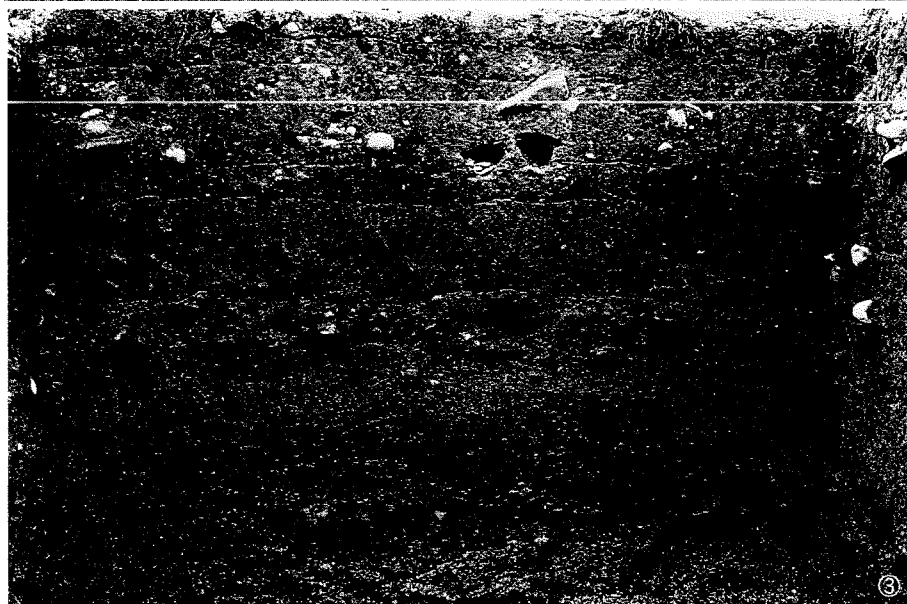
图版 4



①遺跡土層断面
(A-1区南壁)

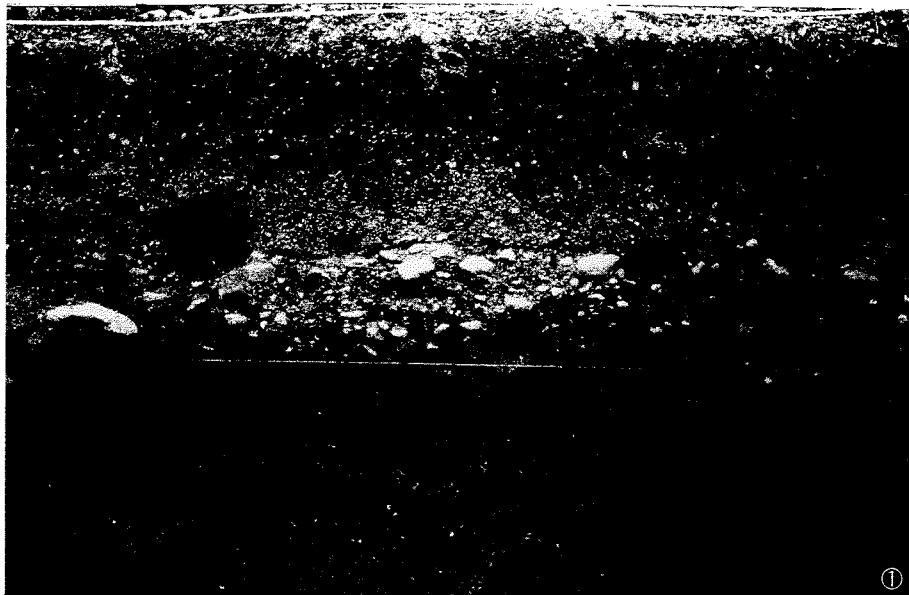


②遺跡土層断面
(B-1区南壁)



③遺跡土層断面
(B-1区南壁近景)

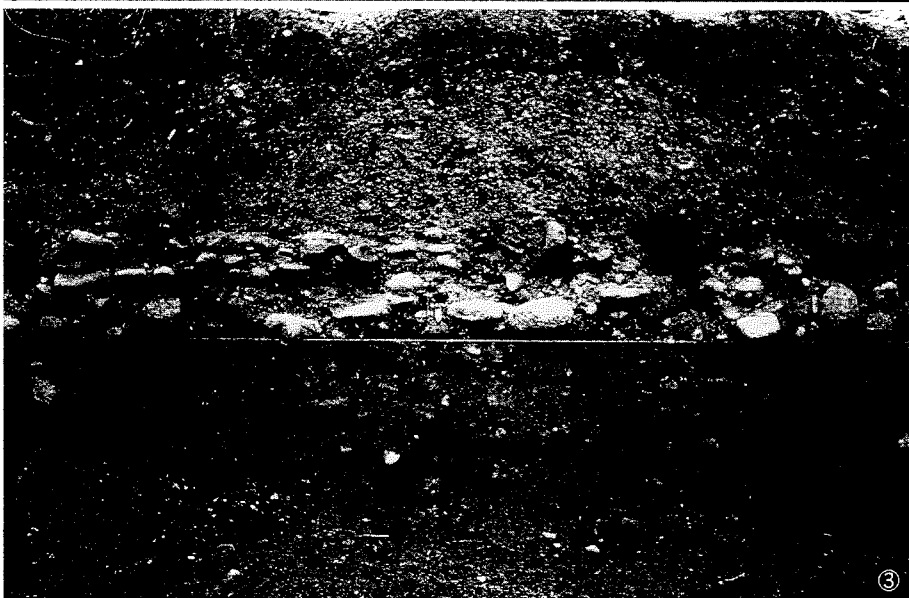
①遺跡土層断面
(G-4~5区南壁)



②遺跡土層断面
(G-3~4区南壁)



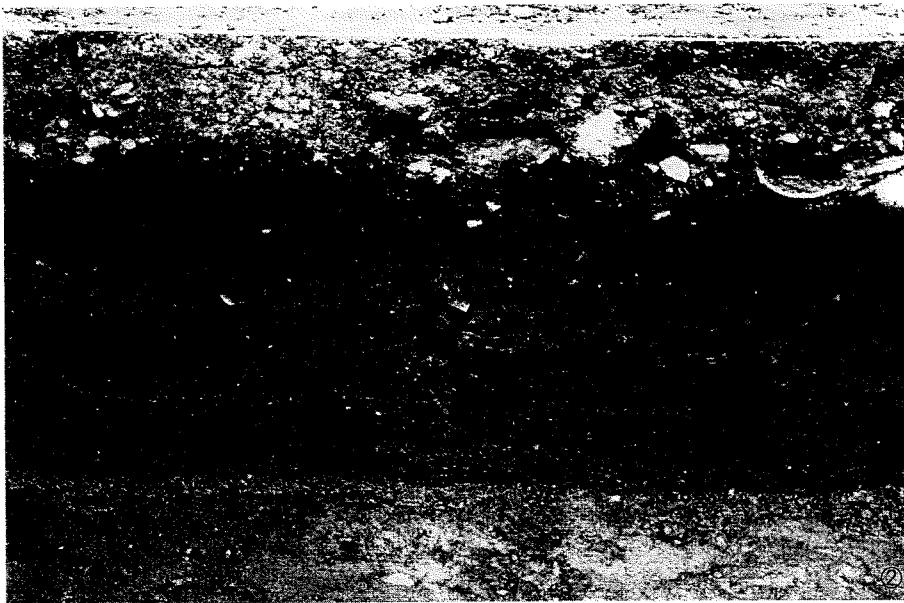
③遺跡土層断面
(G-1~2区南壁)



図版 6



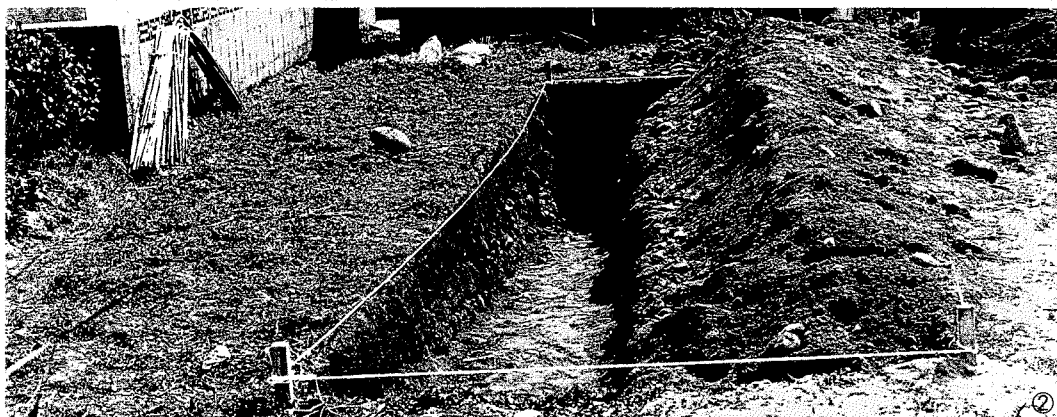
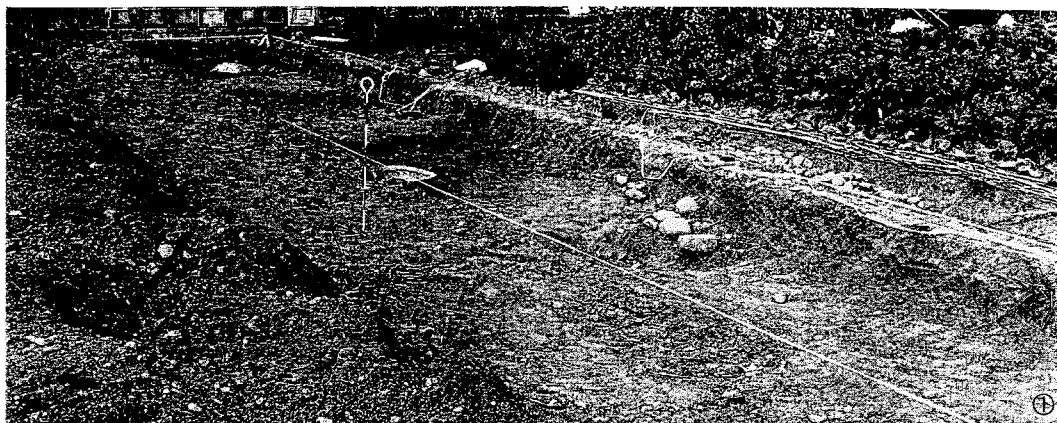
①遺跡土層断面
(D-3~H-3区北壁)



②遺跡土層断面
(D-3区北壁)



③遺跡土層断面
(A-1~2区東壁)



①西トレンチ全景
(南西より)

②南トレンチ全景
(北より)

③馬場トレンチ全景
(南より)



図版 8



①Aトレンチ表土下礫層
露出状況



②B、Cトレンチ表土下礫層
露出状況



③Bトレンチ表土下礫層
露出状況近景



①第2·3号集石墓集石

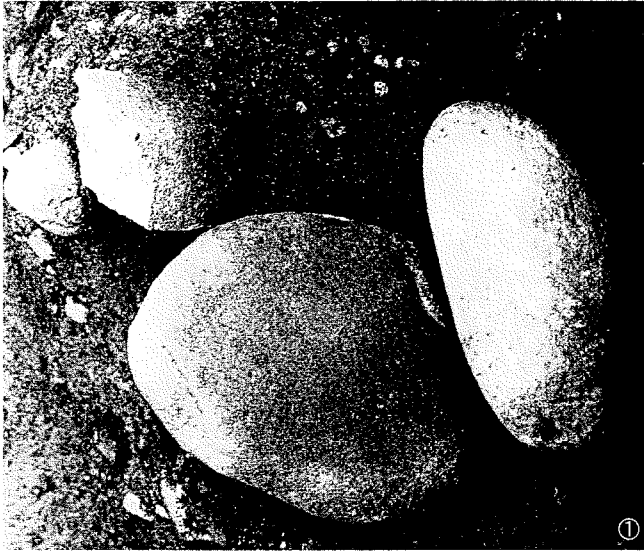


②第2号集石墓下土壤

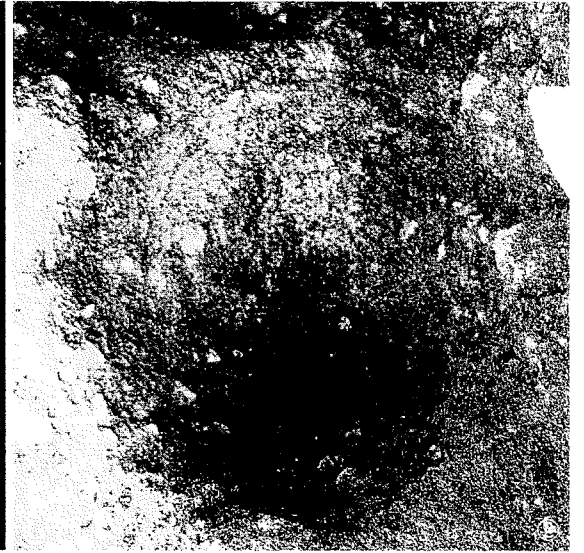


③第3号集石墓下土壤

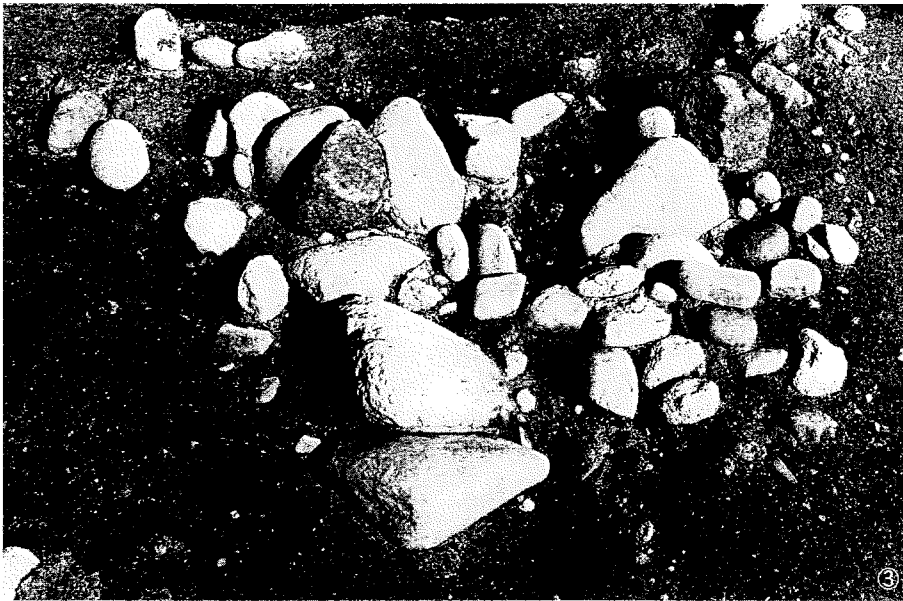
图版10



①第1号集石墓



②第1号集石墓下土壤



③第4号集石墓



④第4号集石墓下土壤



①第1号甕棺墓



②第1号甕棺墓基壇

图版12



- ①第5・6号集石墓
- ②第6号集石墓下土坑
- ③第5号集石墓下土坑と人骨出土状況

①西トレンチ古代貝層
露出状況（西から）



②西トレンチ古代貝層
露出状況（南から）



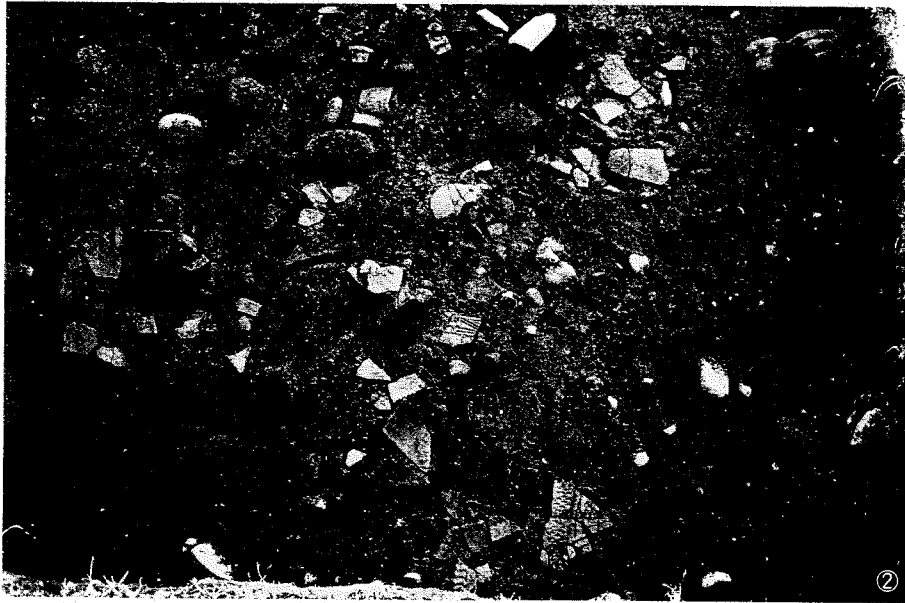
③西トレンチ拡張トレンチの
古代貝層露出状況（西から）



图版14



①B·C·D-3区
第3層遺物出土狀況



②B-3区第3層
遺物出土狀況



③C-3区第3層
遺物出土狀況

①D-3区第3層
遺物出土狀況



②C-3区第3層
遺物出土狀況



③B-3区第3層
遺物出土狀況



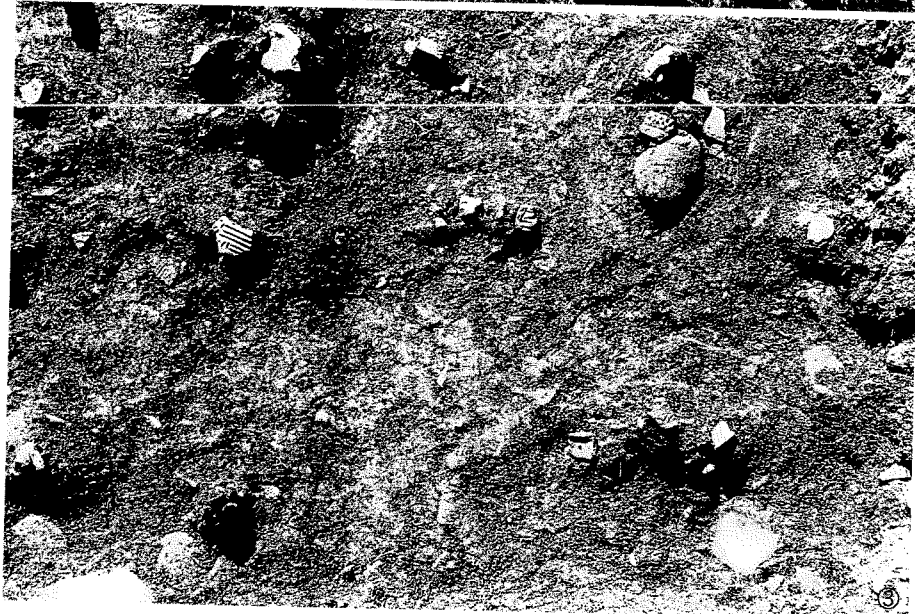
图版16



①B-3区第3層
遺物出土狀況

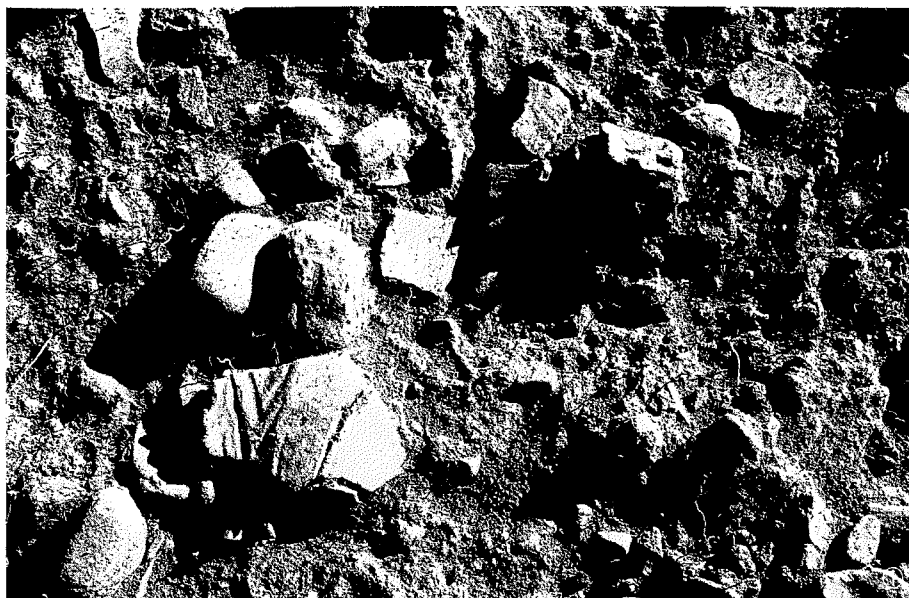


②B-3区第3層
遺物出土狀況

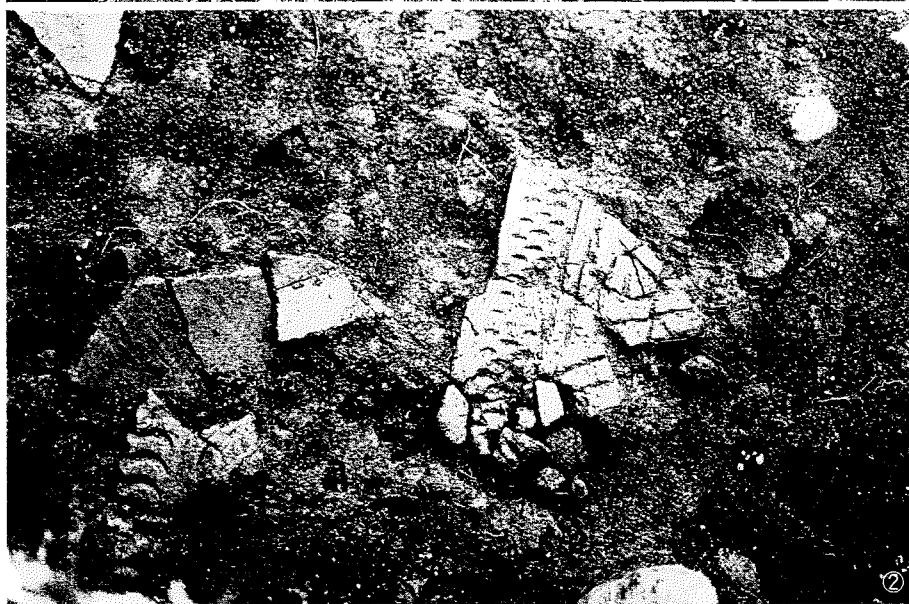


③C-3区第3層
遺物出土狀況

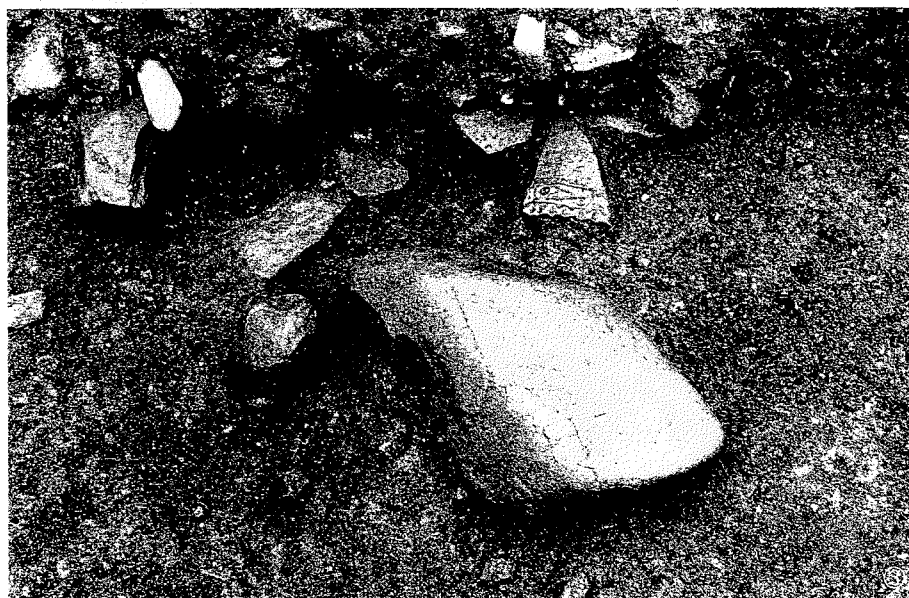
①A-1区第2層
遺物出土狀況



②B-3区第3層
遺物出土狀況



③B-3区第3層
遺物出土狀況



图版18



①C-3区第2層
遺物出土狀況



②C-3区第2層
遺物出土狀況



③C-3区第2層
遺物出土狀況

①C-3区第2層
遺物出土狀況



②C-3区第2層
遺物出土狀況

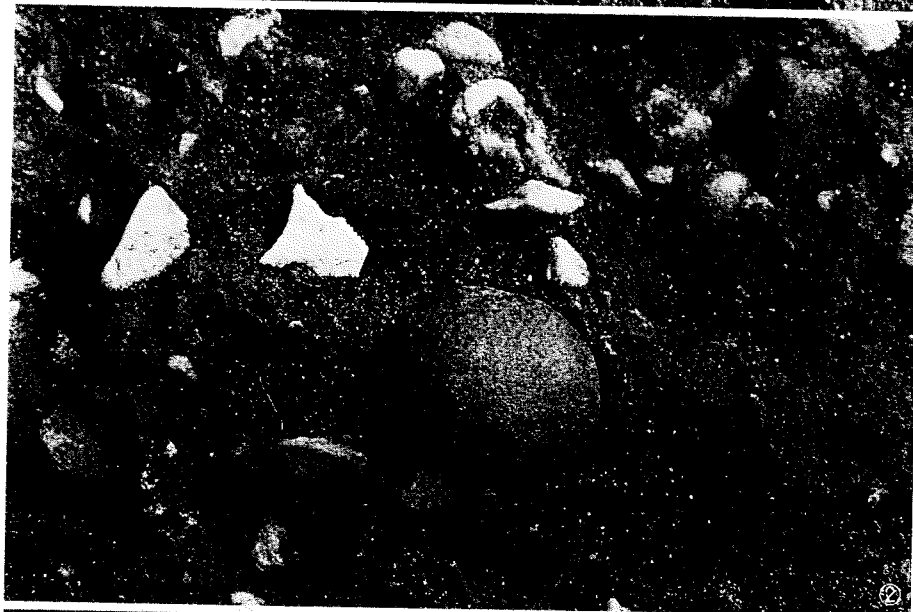


③C-3区第2層
遺物出土狀況

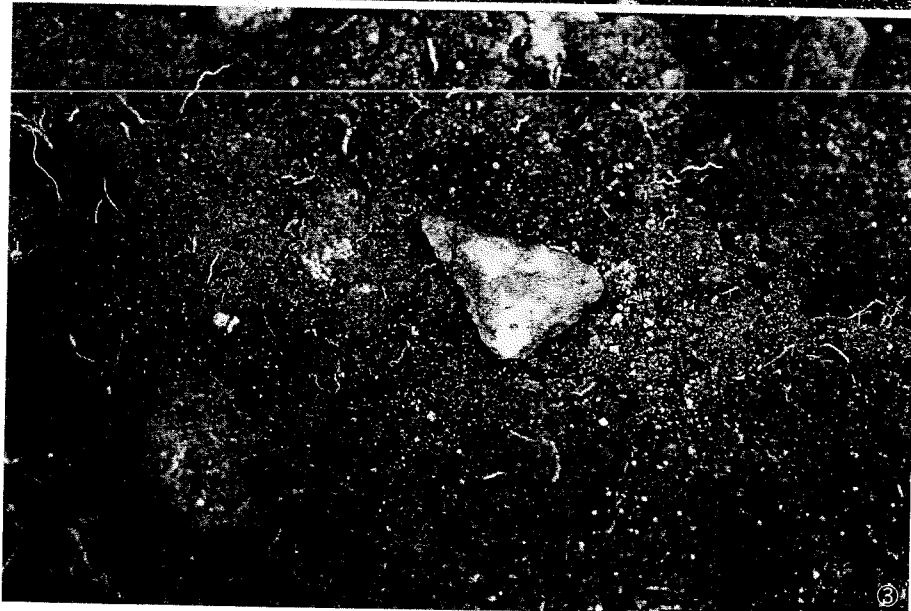




①D-3区第2層
遺物（結合式鈎針石製
軸部）出土狀況



②E-5区第4c層
遺物（銛頭）出土狀況



③C-2区第2層
遺物（銛頭）出土狀況

①D-2区第3層
遺物（土器）出土狀況



②D-2区第3層
遺物（土器）出土狀況



③D-2区第3層
遺物（土器）出土狀況



図版22



①E-1区第4層
遺物（石器）出土状況



②E-6区第4層
遺物（石器）出土状況



③D-3区第7層
遺物（獣骨）出土状況

①B-1区第2層
遺物(石器)出土狀況



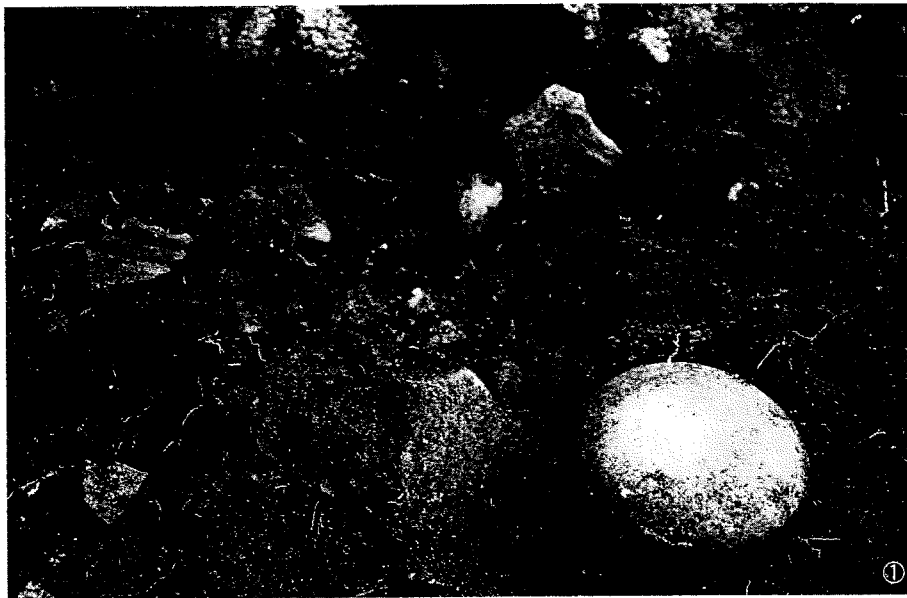
②B-1区第2層
遺物(石斧)出土狀況



③A-1区第2層
遺物(土器・石器)出土狀況



图版24



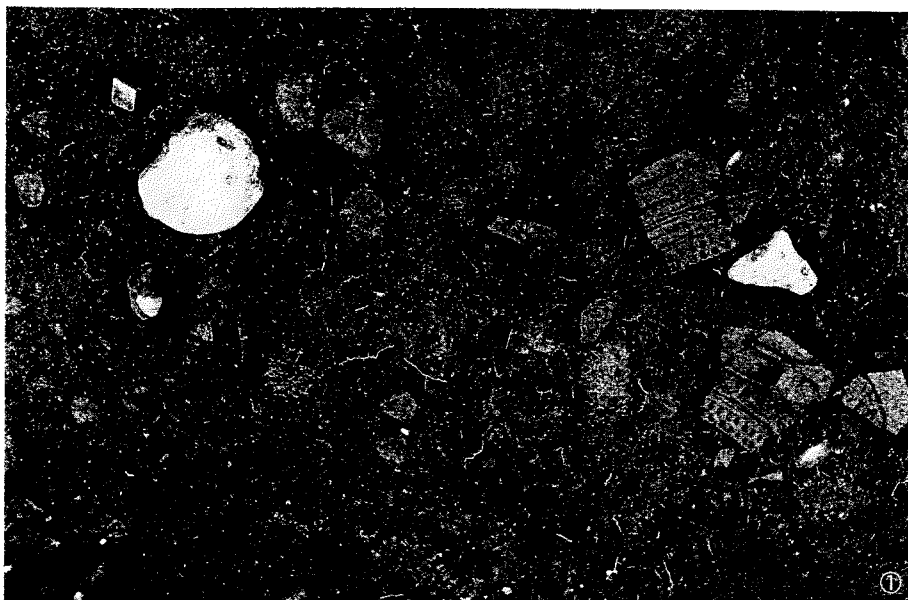
①D-2区第3層
遺物(土偶)出土狀況



②D-2区第3層
遺物(土偶)出土狀況



③B-1区第4層
遺物(獸形土偶)出土
狀況



①D-2区第3層
遺物（土器・獸形土偶）
出土状況

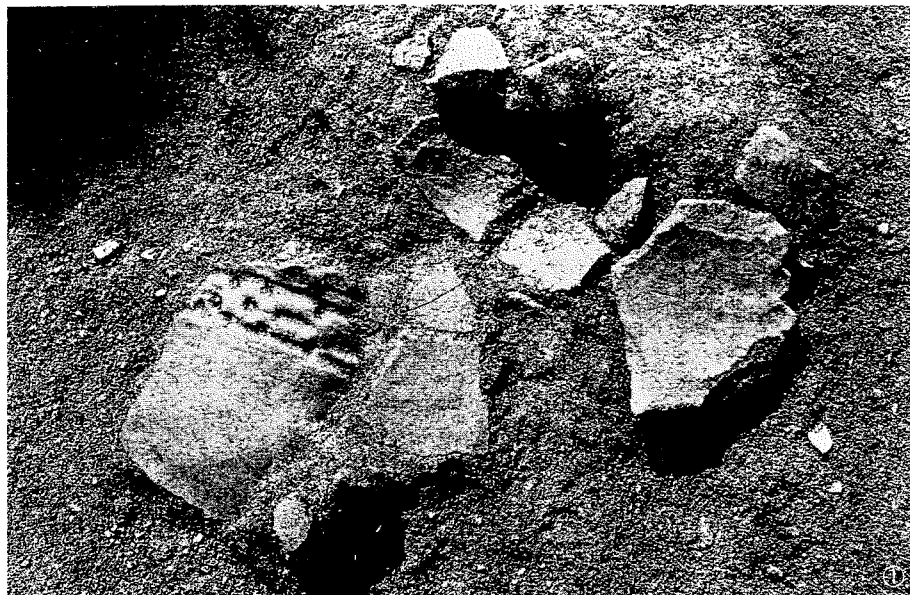


②D-2区第3層
遺物（獸形土偶）出土
状況



③D-2区第3層
遺物（獸形土偶）出土
状況

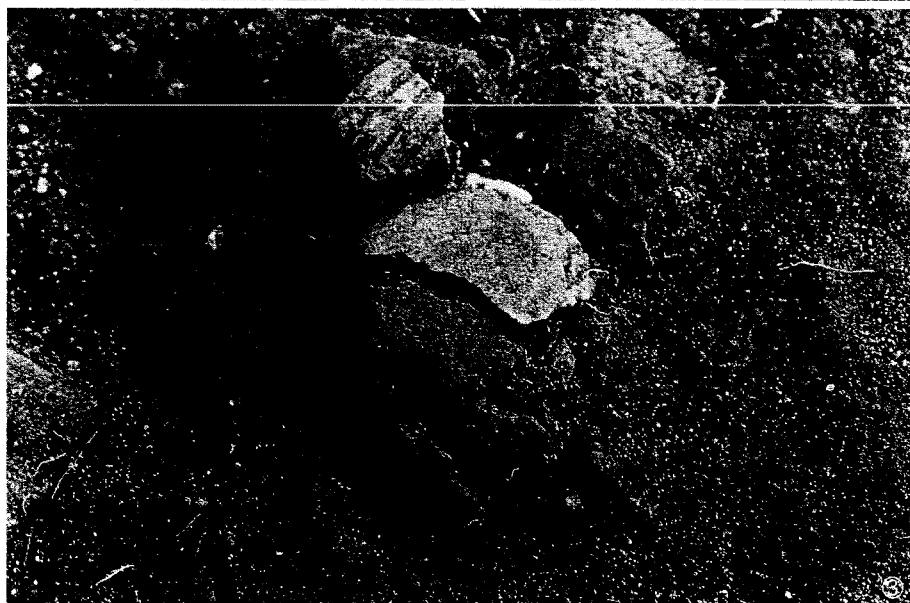
図版26



①A-2区第4層
遺物(土器)出土状況



②A-2区第4層
遺物(土器)出土状況



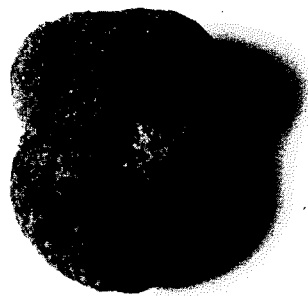
③A-1区第4層
遺物(土器)出土状況



①B-1区第2層
遺物(岩偶)出土狀況



②B-1区第2層
遺物(岩偶)出土狀況



③B-1区第2層
出土遺物(岩偶)

③

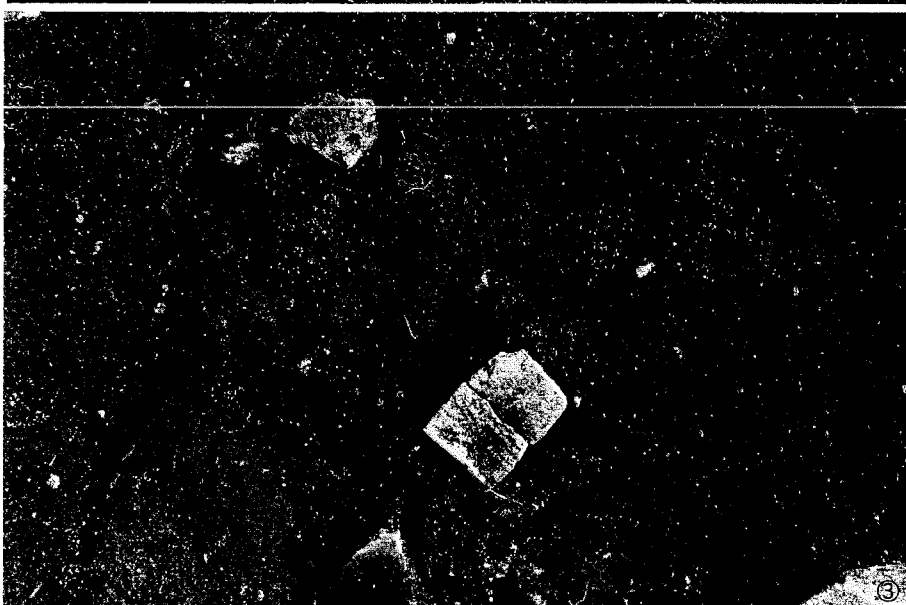
图版28



①B-1区第5層
遺物（土器）出土狀況



②B-1区第5層
遺物（土器）出土狀況



③B-1区第5層
遺物（土器）出土狀況



①F-4区第5層
遺物(土器)出土狀況



②F-4区第5層
遺物(土器)出土狀況

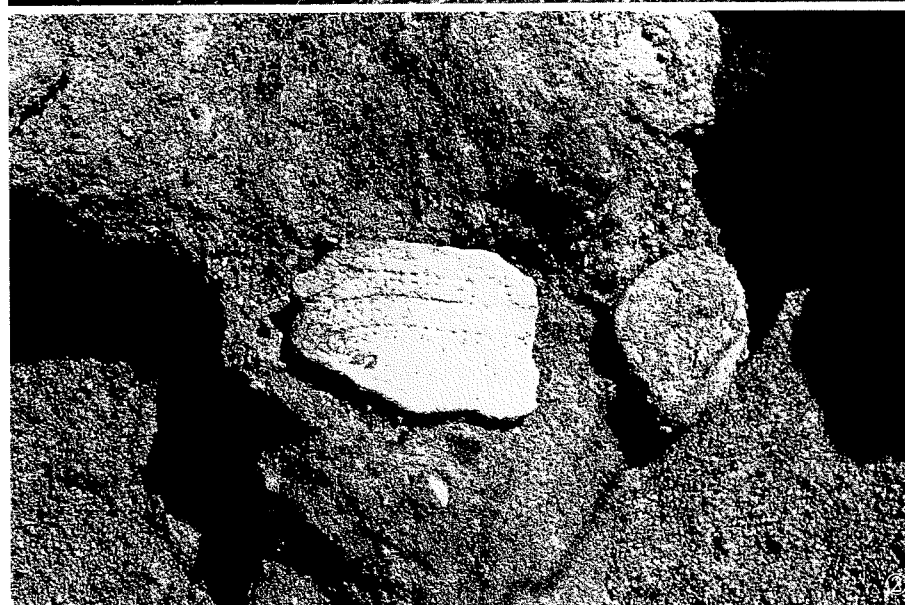


③B-1区第4層
遺物(土器)出土狀況

图版30



①E-2区第7層
遺物(土器)出土狀況



②E-2区第7層
遺物(土器)出土狀況



③E-2区第7層
遺物(土器)出土狀況



①



②



④



③

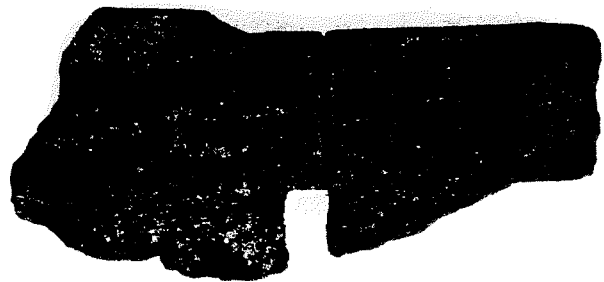
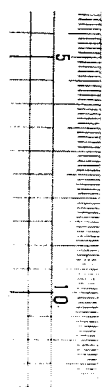
①第3層出土土器

②第4層出土土器

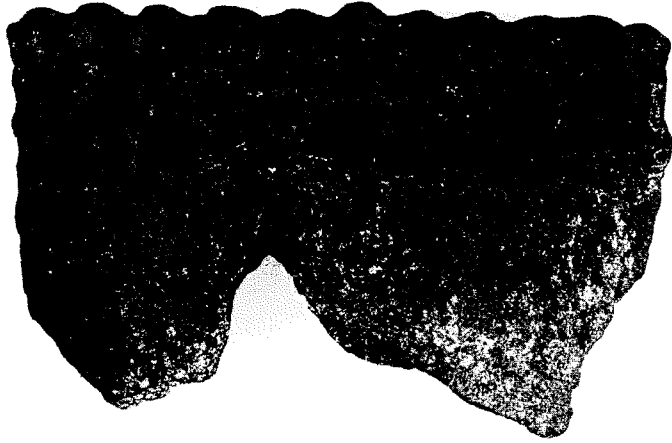
③第3層出土土器

④第3層出土土器

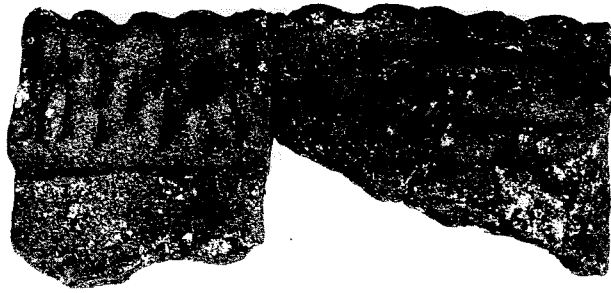
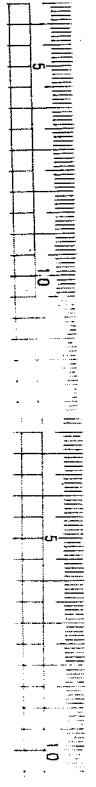
⑤第2層出土土器



⑤



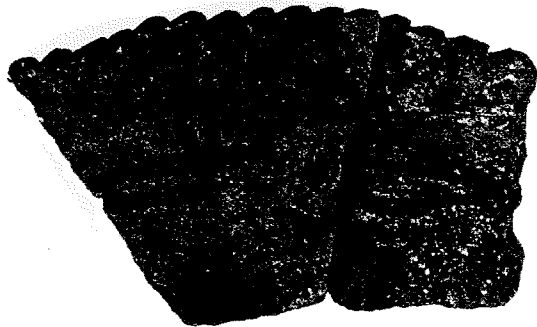
① 第2層出土土器



② 第2層出土土器



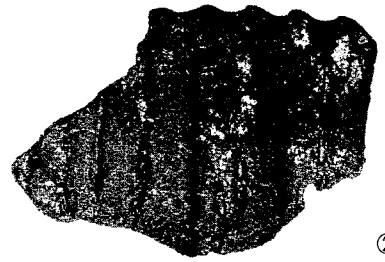
③ 第2層出土土器



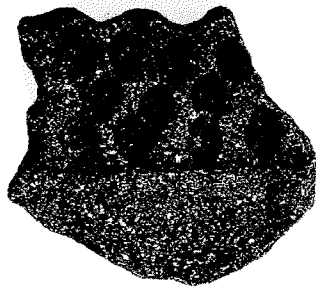
④ 第2層出土土器



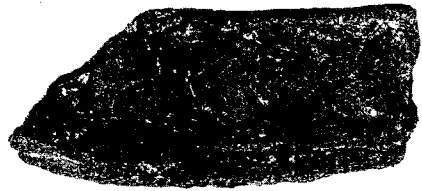
①



②

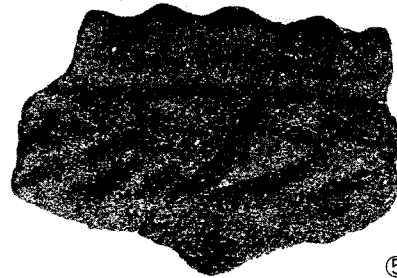


③

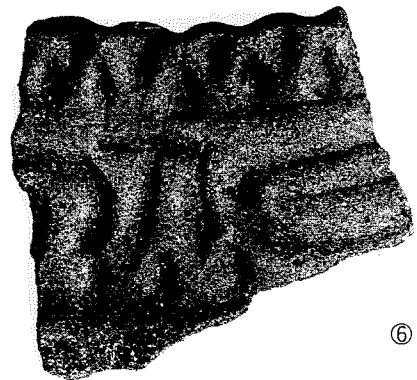


④

①第5層
出土土器



⑤



⑥

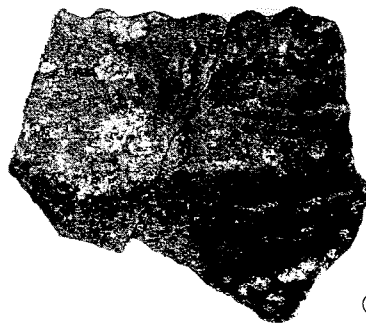
②第4層
出土土器

③第2層
出土土器

④第3層
出土土器

⑤第2層
出土土器

⑥第3層
出土土器



⑦



⑧

⑦第3層
出土土器

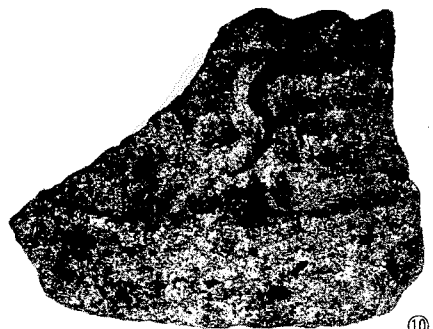
⑧第3層
出土土器

⑨第4層
出土土器

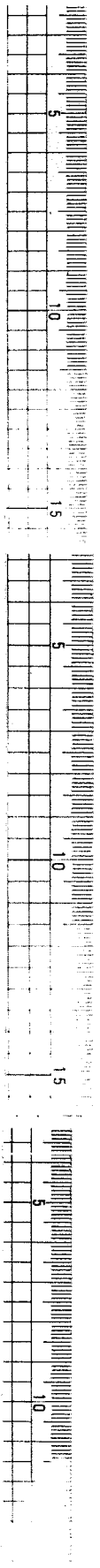
⑩第3層
出土土器



⑨



⑩



① 第5層出土土器

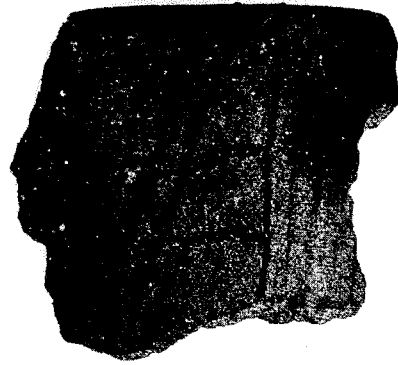


② 第5層出土土器



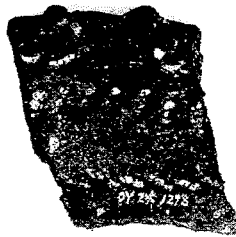
③ 第4層出土土器

①第7層出土土器



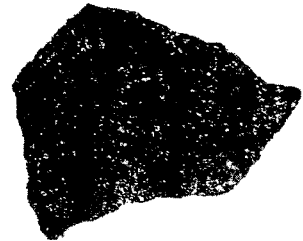
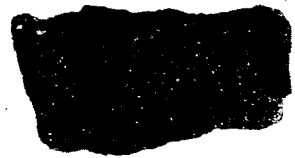
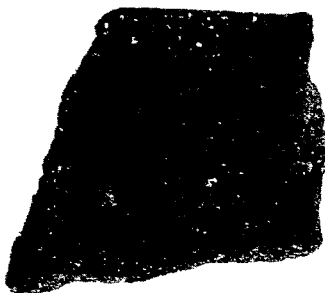
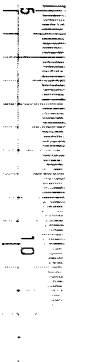
①

②第7層出土土器



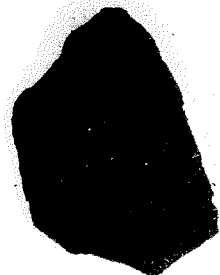
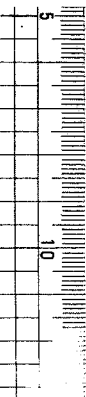
②

③第7層出土土器



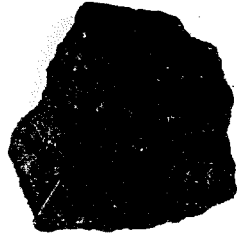
③

④第7層出土土器

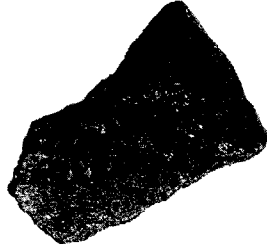
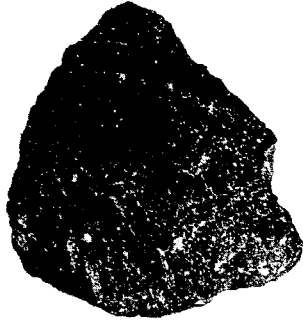


④

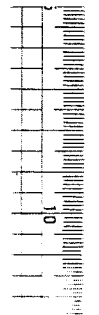
图版36



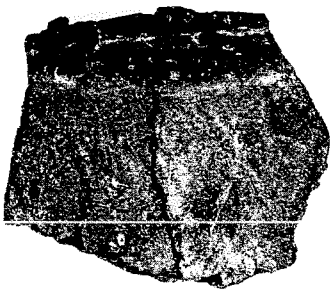
① 第5·7層出土土器



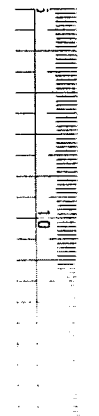
② 第7層出土土器



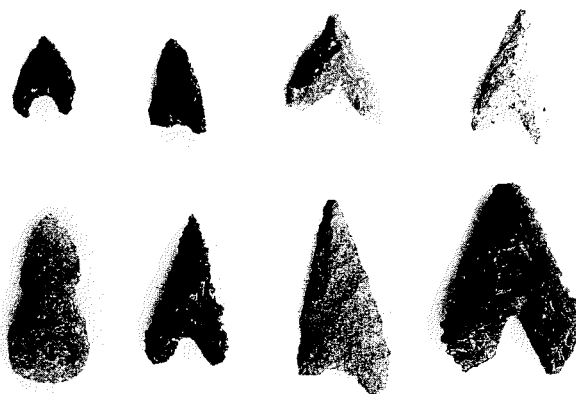
③ 第7層出土土器



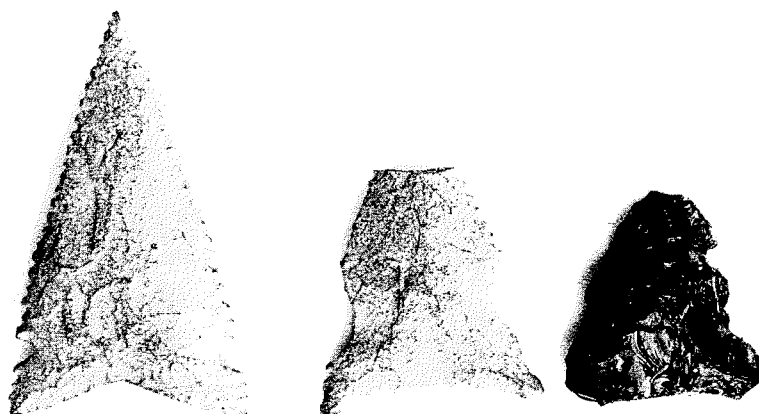
④ 第7層出土土器



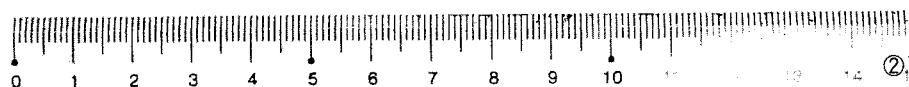
⑤ 第7層出土土器



①第4·8層出土石器
(石鏃)



②第2·4c層出土石器
(鏃頭)



③第4c·5層出土石器
(石鏃)



图版38



①第2·3層·集石墓出土
石器（蛇紋岩製磨製石斧）

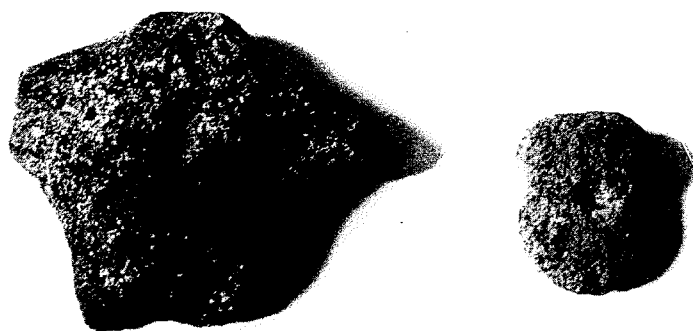


②第4c·5層出土石器
（磨製石斧）



③各層出土石器（石錐）

①土偶·岩偶（表面）



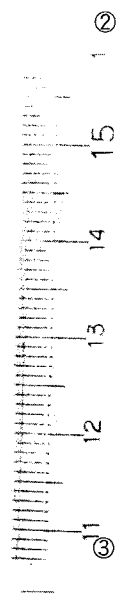
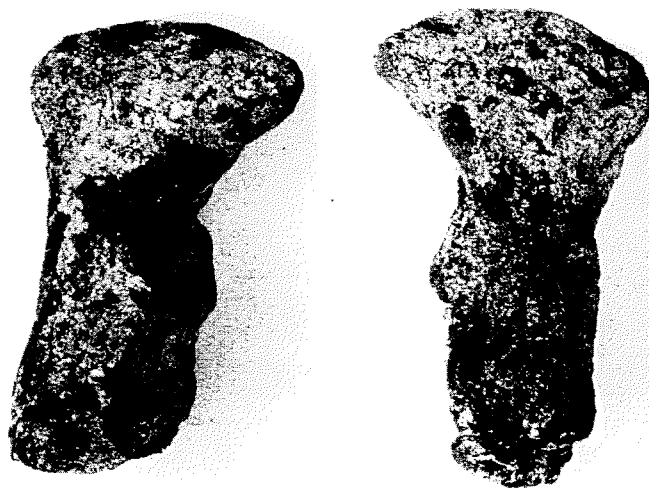
①

②土偶·岩偶（裏面）



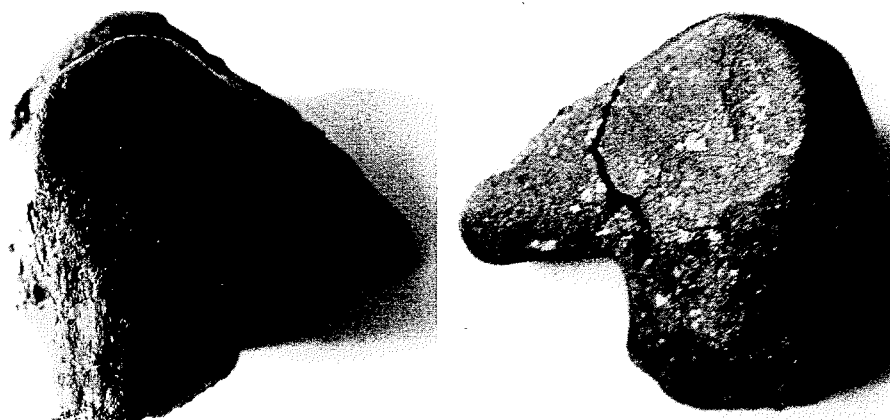
②

③獸形土偶 2



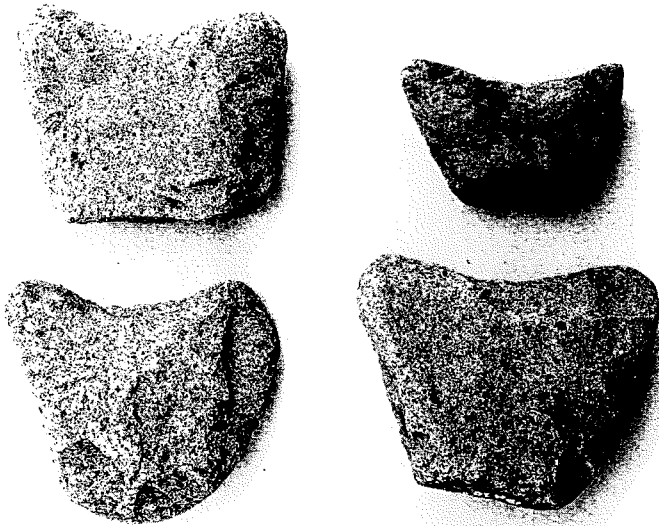
③

④獸形土偶 1

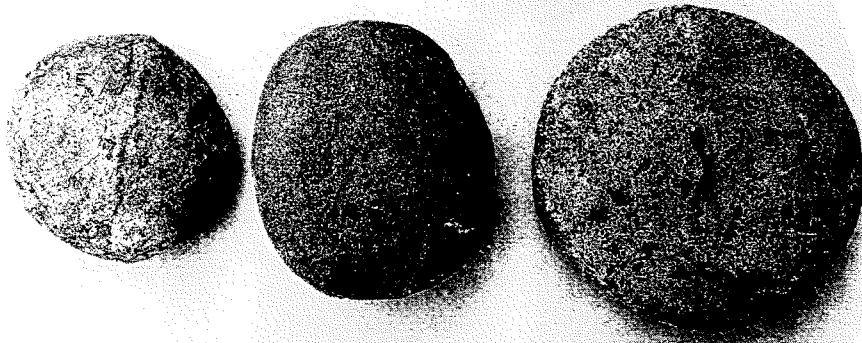


④

图版40



①各層出土石器
(双角状礫石器)



②各層出土石器 (磨石)



③第4 c層出土石器
(双角状礫石器)

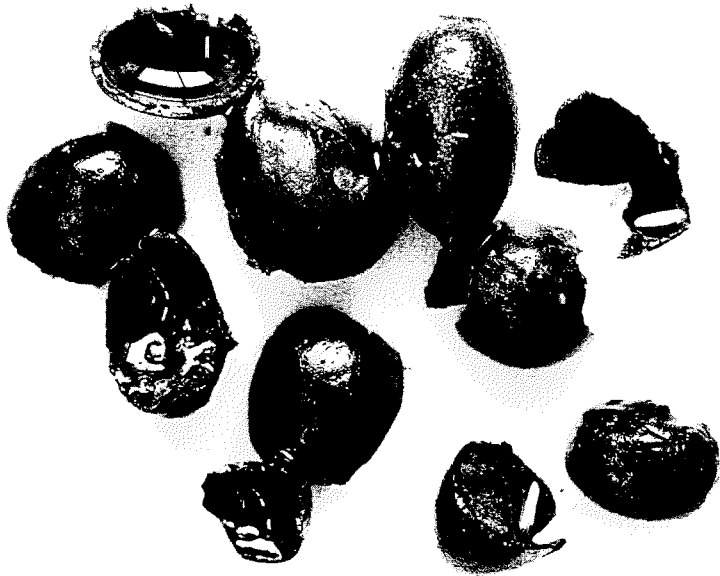
④第3層出土石器
(ハンマー)



①頁岩製結合式釣針軸部

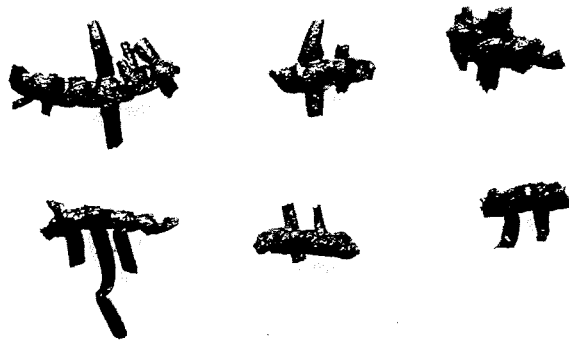
②獸形土偶1

②

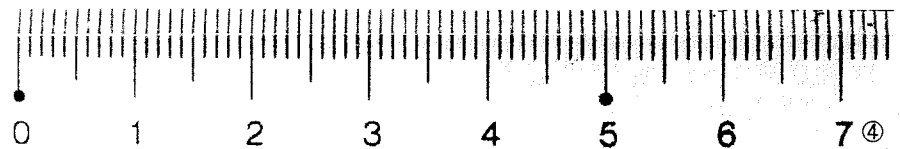


②後背湿地出土ドングリ類

③

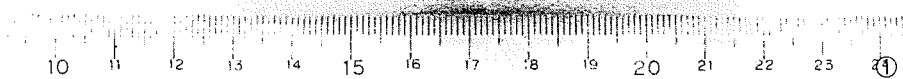


③後背湿地出土編カゴ類

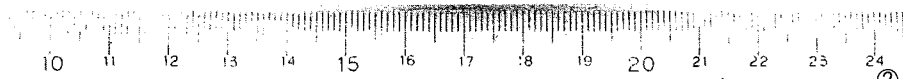
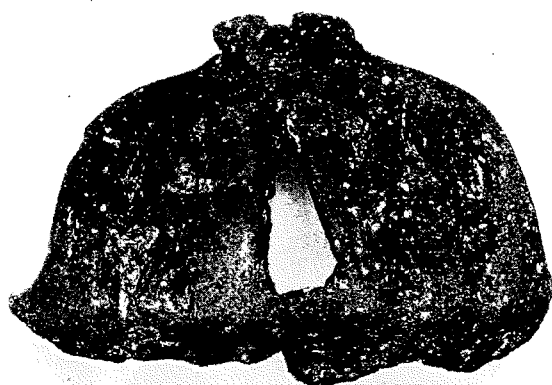


④

図版42



①B-3区第4層
出土土器



②C-3区第3層
出土土器



③発掘調査参加者
(第2次調査)

報告書抄録

ふりがな	おおやいせき							
書名	大矢遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	天草市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	山崎純男							
編集機関	天草市教育委員会							
所在地	〒863-0002 熊本県天草市本渡町本戸馬場3080番地1 TEL 0969-32-6784							
発行年月日	平成19年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやいせき 大矢遺跡	くまもとけん 熊本県 あまくさし 天草市	43215		32°	130°	1989	90	市史編纂
				27'	12'	10.24~11.14		
				43"	00"	1992 2.15~3.13	144	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おおやいせき 大矢遺跡	埋葬遺構	縄文時代中期 後期	土墳墓 甕棺墓	縄文土器・石器 土偶・獣形土製品・ 岩偶・スタンプ形土 製品・石錘・オサン		遺跡の範囲は約1万m ² で縄文時代前期から晩 期にかけての包含層及 び遺構を有する。 中期後半、後期初頭の 土器より粳(玄米)の圧 痕が確認される。 平成7年3月15日付 熊本県指定文化財		
	黒曜石原石 集積遺構	縄文時代中期		ニ形結合釣針軸部・ 銚頭・石鋸・石匙・ 磨石・叩石・石皿・ 石斧・編カゴ・ドン グリ類				
	貝塚	縄文時代・古代						

大矢遺跡

天草市文化財調査報告書 第1集
2007年3月30日

発行 熊本県天草市教育委員会
天草市本渡町本戸馬場3080番地1

印刷 (有)天草民報社
天草市本渡町本戸馬場3181番地2

